明治四十四年九月三日印刷
明治四十四年九月六日発行

定価金八拾五銭

いろは文庫

不許複製

編輯兼発行者　三浦理　東京市神田区錦町一丁目十九番地
印刷者　平井登　東京市本所区番場町四番地
印刷所　凸版印刷株式会社分工場　東京市本所区番場町四番地
発行所　有朋堂書店　東京市神田区錦町一丁目十九番地
大売捌所　三省堂書店　東京市神田区表神保町一番地
同　宝文館書店　大阪市東区本町四丁目

明治四十四年九月三日印刷
明治四十四年九月六日發行

いろは文庫
定價金八拾五錢

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店
大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店
同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

宗「實に今夜の都合といひ、おぬしの言取り鹽梅迄、思つたよりは熟く出來たぜ」

さめ「何だか氣恥しいやうでありましたヨ」ト寐物語に囁きしとぞ。然れば宗件寸白が、互の方便暗合して、爰に二個が緣を結ぶ、這も又月下氷人の、戯れに做す所爲なるか、寔に可笑き契なりけり。

そも宗件が瀧次郎を俄に壻に望めるには、又甚麼なる仔細かある、丌は次の卷を看て知らん。

正史實傳いろは文庫　終

嫌を直して、かならず不了簡をお出しなさるなョ」ト言ふをうち聞く寸白が、先は計略その圖に當りて、一年餘り面白くもなき茶の湯の供を爲て來たも、此縁談が整へば一廉の謝禮を受けて、仇骨折つた埋草が漸々出來ると、腹の裡には竊に笑を含めども、爾あらぬ體にて頭を下げ、

寸「イヤモウ、お内儀さんの捌けたお辭で、實に蘇生たやうな心持が致しやす。孰れ此譯を親公達へお咄し申したうへで、改めてお願ひまうすでございませう。さア若旦那、貴公も一寸お禮を被仰まし」ト言はれて瀧次郎は面目なげに、

瀧「寔に濟みませんが、何卒御勘辨被成て下さいまし。」

さめ「アレサ、最う今夜の事はお互に夢を見た積にして、言はない事と致しませう。丁度會席も出來て居ますから、お寒さはお寒し、お燗の熱いのを一口呑つて、お披きと被成まし。」

寸「モシ、お披きとは宜い辻うらでありやすネ。」

さめ「ほんにネエホヽヽヽ」ト是より會席の馳走になり、其夜も餘程更けしかば、暇乞して兩個は爲すまし顔にて立歸れば、最前よりの動靜をば、徨聞して居し宗伴が、竊に妻にうち對ひて、

く出來て居れば、何樣でも跡で咄の付く事と思ひ付いたお茶の稽古、實は濟まない譯でありやすけれども、若旦那のお命には換へられないと、此惡方をかいて見やしたが、物堅いお孃さん故、是迄言出す便もなく、文を付けたも今夜がはじめて、處をお前さんに見咎められたのだから、氣の小さい若旦那、面目ないと覺悟を被成たのでありやせう。お内儀さんのお心持では、大事な女兒を淫者に爲やうとした、憎い奴とも思召しませうが、若旦那のお心をも些とは御推量被成て下さへやし」ト辯に任せて言拵ゆれば、おさめは須臾うち案じて、

さめ「なる程段々のお咄を伺つて見ますと、不都束な娘を命に換へてもと思つて下さる御眞實は、親の身に取つても嬉しうございますが、夫ならば又其やうに被成方もありさうな物だのに、今夜のやうな不始末をして、是が世間へ知れた日にやァ、お互に外聞を晒さにやァなりませんョ。併し夫程迄に思詰めてお在なさるのを、是切にして仕舞つたら、所詮望が協はずばと、又瀧さんがどんな不了簡をお出しなさるまい物でもない。然うなるときは御兩親のお歎きはどの位、子を持つた親の心は、誰しもおなじ事でありますから、私が智惠を付けるでもないが、今被仰つたのが眞實なら、表向改めて緣談を言込むやうに被成まし。此上宿で何とまうすか知れませんが、其處は私が何樣とも言ひなして、御相談の整ふやうに爲ませうから、瀧さんも機

かも打明けてお仕舞被成が宜いぢやァありやせんか」ト言へども瀧次郎は无言込んで、更に辭もあらざるにぞ、

さめ「然う无言てお在ぢやァ困りますネエ、寸白さん、お前さんが譯を知つてなら、言つてお聞せなさいな」ト言はれて寸白天窓を撫で、

寸「實は些お咄しの致しにくい譯でありやすが、一體此若旦那が書物にばかり凝入つて、まだ吉原の大門が何方を向いて居るか御存じのないと言ふ處から、萬一氣鬱の症でもお發し被成てはならないと、親公さまがきつい御心配、其處で愚老に命じられて、何處ぞ遊山に勸め出して呉れろといふ事故、先淺草と出かけて、奥山の茶店で休んで居るとき、貴家のお孃さんをお見初被成たと申す譯サ。其處へ往つては妙な物で、是迄子曰より他を見返つた事のない若旦那丈、思ひ込みも又強く、何でも此お孃さんより他にやア、世界に女のないやうに思召て、是非貰ひたいと被命から、親公さまも御承知で、偖先達愚老が内々御相談に上りました處が、以の外の御挨拶でお斷りになりましたので、夫からと言ふものは、此若旦那がぶら〳〵病、迚も望みが協はないからは、此儘死ぬと被命から、親公達は言ふに及ばず、愚老迄が心を痛めて、種々工夫を爲て見やしたが、他に思案もありやせんから、此上はお孃さんと若旦那の中さへ熟

寸「イエ、全くもつて左樣な事を。」

さめ「ナニ僞ない事がありますものか。殊に此文は瀧さんの御自筆、白瀧とは隱し名でございませう。是でも戀の取持でないといふ言譯がありますか」ト言はれて流石の寸白も、囘答に困りし體を見るより、何思ひけん瀧次郎は、かの寸白が貸して呉たる短刀すらりと拔きはなし、既に自害と見ゆるにぞ、慌忙く寸白と、倶におさめも抱き禁め、

さめ「モシ瀧さん、何故そんな浮雲事をなさるのでございますヱ」ト問はれて瀧次郎ははらはらと泪を落し、

瀧「何樣も面目なくつて、息のあるうちは申されませんから、何卒放して死なして下さいまし」

さめ「是はしたり、何もそんな短氣な事を被仰には及びますまい。先その譯を一通り言つてお聞せなすつたら、品に依て又何樣か仕樣もあらうぢやァございませんか」ト言ふうち寸白は漸々にして短刀を取上げ、鞘に治めて、

寸「モシ若旦那、貴公のお心の裡は、愚老がお察しまうして居りやすから、言ひにくいと被仰のも御無理とはぞんじやせんが、お內儀さんが此樣に事を譯てお聞きなさるのだから、何も

向いて、疊の塵を捻つて居れば、お糸も倶に顔をそむけて、恥しさうな體なるを、おさめは合點が行かぬといふ顔を爲ながら進み寄り、お糸の側におし擴げてある以前の文を手に取りて、始終を讀下し、

さめ「お糸、是は何樣爲たのだへ」

いと「寸白さんが」ト言つたばかり、袂を顔におし當てれば、おさめは獨り點頭ながら、

さめ「寸白さん、一寸爰へお出でなさいまし」

寸「ヘイ」ト手をもじ〳〵しながら内へ這入り、「何ぞ御用でありやすかネ」

さめ「ハイ、此書いた物は何でございますエ」

寸「エヽ、夫は何でかございましたつけ、オヽ、ソレ〳〵、昔深艸の少將が、小野小町へ遣した文だとまうす事で、寫して置いたのをお孃さんにお目に懸けたのでありやすノサ」

さめ「オヤ、夫ぢやァ小町の名をお糸といひ、少將の名を白瀧とまうしましたかへ」

寸「エ、そんな名宛が書いてありやしたか」

さめ「モシ寸白さん、お前は人を盲目だと思つてお在なさいますか、此文を娘に渡し、玆を外して端下に躱れてお在なすつた樣子、偖はお前は二個の中の取持を被成のだネ」

更當意卽妙の、言遁るべき辭もなく、困り果てぞ居たりける。

第百八回

然ればまた寸白は、惡い處をおさめに見られて、須臾囘答にさし詰りしが、常々からして鐵面皮生れなれば、平氣な顏にて、

寸「オヤ、お內儀さんでありやすか。愚老は一寸小用に出ました處が、餘り雪の景色が妙でありやした。ツイ放心と詠めて居りやした」

さめ「オヤ、貴公小便場は外にはござい ませんヨ。よもや庭へなさりも爲ますまいネエ。そして雪を詠めるのに、何故障子へ穴を明けて圍の中をお覗き被成のでございますへ」

寸「イヤ、愚老が需めて明けたとまうす譯ではありやせん。ツイ短刀の鐺が障つて」

さめ「オヤ〳〵、然う被仰つてもお腰の物はないではございませんか」ト言はれて、はじめて瀧次郞に貸したる事を思ひ出し、

寸「イエ、短刀ではない、扇子の蟹目が障つたので、とんだ麁相を致しやした、へ、、、」ト間の惡さうな顏にて笑ふを、おさめは聞捨てながら圍の中へ這入つて見れば、瀧次郞は片脇を

思ひの丈を箇樣々々と、速く言へばよい事にと、獨り頻に氣を焦燥でも、間の惡さうに瀧次郎は、手をもじ〳〵と爲るばかり、言ひ出しかねて居る體ゆゑ、寸白は堪兼ねて、障子の穴より扇を出し、速く〳〵と小聲で言ひつゝ、瀧次郎の脊中をつゝけば、瀧次郎は思ひ切つて、

瀧「お糸さん、其文章は貴女のお氣に入りませんか」ト怖々ながら言ひ掛くれど、お糸は无言て俯向いて居るゆゑ、はや二言とは次ぎかねて、這方も同じく无言て居るを、寸白は見て齒痒く思ひ、頻に扇で脊中をつゝけば、瀧次郎は又小聲にて、「お前さん、眞實にお氣に入らないのかへ。然うでなくばお返事を被成な」ト言へどもお糸はいよ〳〵顏を眞赤にして、俯向いた儘ウンとも言はねば、瀧次郎も此先を、何と言うたら宜からうやと、頻に胸を轟かすのみ、又もや辭の絶ゆるにぞ、陰で見て居る寸白が、はや鍔元まで責詰めたれば、手に入れるのは譯もなきに、奈何内氣な息子だとて、那調子では今夜一晩かゝつたとても果しはつくまい。寶の山へ入りながら、此儘濟すは殘念至極、何樣か爲やうはあるまいかト、獨り氣を揉む其處へ、庭の切戸をおし明けて、思ひがけなき此家の內儀が、飛石傳ひに入り來り、今寸白が笠を冠りて、軒端にかゞみて居るを見て、

さめ「オヤ寸白さん、何故そんな所に躱れてお在なさいますエ」ト言はれて流石の寸白も、今

と上書もなく封もせぬ文をお糸の側へさし出せば、
いと「私やア歌なんぞは詠んだ事がございませんから、拜見を致しても分解ますまい。」
寸「イエサ、其處が然うでないと言ふは、歌詞計りでなく、餘程妙に綴り立てありやすから、草双紙を見るより面白うごぜへやすぜ。」
いと「オヤ然うでございますかへ。私が見てわかるか知れませんが、そんな面白い物なら拜見致しませうかネエ」ト言ひつゝ文をおし開き、何心なく讀む體故、爲すましたりと寸白は、小用の振にてその座を外し、庭の方へと立出しが、雪はいよ〳〵強くなり、天窓へばら〳〵降りかゝるにぞ、是ではならぬと四邊を見廻し、最前彼處の待合より、覆ひ來たりし竹の子笠を、これ幸と引冠り、軒の小蔭にかゞみつゝ、障子にちひさき穴をあけ、内の動靜を窺ふ程に、お糸は何の氣も付かず、彼玉章を讀下せば、思ひがけなき艶書にて、お糸の君白瀧よりと、我が名宛さへ認めあるに、はつとばかりに駭きしが、まだ初戀も知りやらぬ、未通女の事なれば、斯う言ふ時には何樣いうて、何樣爲て宜いとも分別がたく、只恥かしさがいつぱいに、赤らむ顔へ玉章をおし當てたる儘さし俯向き、何と詞もあらざるにぞ、外より窺ふ寸白が、那樣子では娘の方も、まんざら否な體にも見えぬ、今が寔に宜いしほなるを、此圖を拔かさず瀧次郎が、

下女「お内儀さん一寸」ト呼び立て、何かひそ〳〵囁けば、

さめ「オヤ然うかへ。夫ぢやァ今直に參ると然うまうして置きな」ト言ひながら元の座へ歸りて、「アノウ、急に少し用事のある人が參りましたが、宿で臥居て居りますから、一寸挨拶を致して參りますよ。お糸、お前は此處に居て皆さんのお相手になつてお在ョ」ト言ふをうち聞く寸白は、此上もない上首尾と思へば、覺えず莞爾々々爲ながら、

寸「イヤお内儀さん、お客樣でございますなら、少しもお構ひなく御ゆるりと被爲入まし、其間は愚老が何か面白いお咄を思ひ出して、御退屈のないやうに致して居りやすから」

さめ「オヤ、夫ぢやァ寸白さん、何分お願ひまうします」ト言捨て直に立つてゆくにぞ、爰ぞと思へば寸白は頻に隣へ眴を爲て、速く文をと知らすれども、氣の小さきそのうへに、廿歳は越せども瀧次郎は、若い女と親しくは物さへ言うた事のなき故、思ひは胸に餘れども、流石に文を出しかねて、只囁嚅て居る體を、寸白は見て迂しく、瀧次郎が懷中せし文を自己が受取つて、

寸「エ、モシお孃さん、貴公もお歌がお好だとまうす事でございますが、此若旦那が此間お綴り被成た歌の文章、餘程面白く出來て居りやすから、一寸お讀みなすつて御覽じまし」ト態

とは、誂へても斯うは出來やせん。何でも此圖を外すべからずだから、愚老が都合を見計らつて胸を爲たら、彼文を直に出して手渡しにならずば、懷へでもお入れなさい。其上にもまだ能い首尾なら、手短かく咄をお付け被成まし。其時先で承知を爲かねる樣子なら、愚老の此短刀をお貸し申して置きますから、是を拔いて死ぬ眞似を被成まし。大體は夫を見たら得心をするやうになりやせう。」

瀧「そんな事を爲たら、跡で六ケ敷なりは爲ないかへ。」

寸「ナニ、少し位六ケ敷なつても、愚老が跡に控へて居れば大丈夫でありますから、膽玉を大きくふくらがして、平氣でお遣んなせへ。大願成就疑ひなしサ」ト竊に囁き語らふ折しも、おさめは再び出來りて、

さめ「さぞお待どほでございましたらう。さア這方へ」ト言ひながら、三個連立ち待合にいたれば、お糸は亭主役なれば此處まで出迎へて、圍の裡へ伴ふ手續き、總て千家の作法を崩さず。瀧次郎は二年越し心を入れて學びし事ゆゑ、客振と言ひ挨拶體まで、初心ならねば拙からず。偖廻服も濟みて、頓て會席の出る前になり、一個の下女が圍の口より顔を半分さし出して、

れてか御斷りでございますノサ」
す「へゝエ、夫はおあいにくな事でありやしたネ。左樣なら御不連故、今晩は御休會とでもまうすやうな」
さめ「イエ〳〵、折角お糸が樂にして催したのでございますから、貴公方さへ御出席がおれば致す積でありますがネ、夫にしても宿でも病氣、お約束のお方はお斷で見ますと、人が足りませんから、お糸が宿の名代に亭主を致して、御上客が瀧さん、末座が寸白さん、其足らずまへに私がお客の中へ這入る積に致しましたヨ」
瀧「私には上客は出來かねますから、何樣か貴女が上にお居ん被成て下さると宜うございますネエ」
さめ「とんだ事を被仰る。私のはほんの見覺えて居るといふ分の事でありますから、貴公方の間へ人數に入れて頂くのでございますヨ、ホヽヽヽ。夫に爲てもまだ少し刻限が早うございますから、御案内を致すまで、這處で一服召しあがつて居て下さいまし」ト言捨て奥へ行くにぞ、跡を見送り小聲にて、
す「モシ若旦那、今夜の首尾は極妙でござへすぜ、老人が病氣のうへに、他の連中が來ない

いろは文庫　卷之五十四

第百七回

偖もその日の夕方に、瀧次郎と寸白は宗件が方へいたれば、おさめは一間に立出て、
さめ「オヤ瀧さん、寸白さんも御同行に、宜くまァ降るのにお出で被成たネエ。雪があんまり強くなつたから、萬一お出でがないと不良がとお噂を致して居りましたヨ。」
瀧「ハイ、先程はまた態々お使を下さいまして有難うございます。承りますれば、先生は些御持病氣で被爲入とまうす事でございますが、奈何お在被成ますエ。」
さめ「ハイ、ナニ持前の疝癪でございますから、きつい事はありませんヨ。」
寸「兎角疝とまうすものは、雪などの降るのを知つて在つて起りたがりやす。何樣かお冷えなさらないやうに、お手當が宜しうございます。夫は然うと、まだ他の御連中方は御出席はござりやせんかネ。」
さめ「寔に不宜のでございますヨ。他にお二個ばかりお約束をして置いた處が、此雪におそ

瀧「夫だつて私にはそんな面白い文言なんぞは書けないものを」

寸「何も愚老の前でそんなにお卑下しなさる事はありやせん。僕なんぞこそ無雅夢中の人足だから仕方がありやせんが、君は漢學は素より和學も被成て見れば、此位な事はお茶の子でありやせう。何でも先の心の動くやうにするのが肝要だから、僕が御酒を戴いて居るうちに、熟く一通お書きなさるが宜い」ト言はれて瀧次郎も、何樣がなお糸を手に入れたさに、工夫を凝らして細々と思ひの丈を綴りたる艶書一通認めて、

瀧「何樣もくだ〳〵敷ばかりなつて、思ふやうに書取れないヨ」

寸「ドレお見せなさい」ト讀んで見て、「是は實に奇々妙々、至れり盡せりとは此事でありやせう。是を先へ手渡しさへすれば、どんな久米の平内さまの娘でも、なびく事請合サ」トいふうち彼是申刻にもなれば、寸白は酒を仕舞ひ、「サア若旦那そろ〳〵お支度をなさいまし。先の都合は先の樣子にすると致しやせう」ト是より瀧次郎は衣服を改め、二個は駕に打乗りて池の端にいたりし頃は、はや黄昏にぞ及びける。

にはお連れさないますなと申し上げるが何樣だ」

下女「宜うございます、お前さんのお世話にならないでも、私が願ッてお供を致しますョ」

す「然う言はれちやァ仕方がねへ。モウ〳〵愚老が謝罪から、何卒お酒の替りはお賴みまうしやす」

下女「ホヽヽヽ然うお言ひなら堪忍して進げませうネエ」ト戲談を言ひながら出て行く。

す「ハヽヽヽ那女中は口がへらねへから啐つても負けねへので面白い」ト言ひながら、手酌にてはや八九盃も引きかけしかば、少しほろ醉になりしと覺しく、「アヽ宜い心持になつた。是ぢやァ雪が降らうと鎗が降らうと、大丈夫なものでごぜいやす。夫は然うと若旦那、お糸君へ進げやうといふお文は持つてお在被成ますか」

瀧「アヽ過頃書いたのを、遣る事が出來ないから、其儘にして持つて居るノサ」

す「ありやァ慥去年の六月時分でありやしたネエ。暑い盛りにお書きなすつた文を、寒くなつてからお進げなすつちやァ時候違ひになりやすから、今夜の雪を文言の中へ何樣か面白く書込んでお進げなせへ。先が茶人の上に歌俳諧も出來ると言ふ咄だから、文の書鹽梅で、那お孃がグット請けるに違ござりやせんぜ」

作身を一人前、酒は三銚子に過ぐべからずサ。宜いか分解たか」
下女「ハイ〳〵」
寸「よしか、三枚並だヨ」
下女「エ」
寸「ナニサ、大急ぎと言ふ事ヨ」
下女「ホヽヽ」ト笑ひながら立つて行きしが、程なく誂への酒肴を持出す。
瀧「玉や、寸白さんにお酌を爲て進げな」
寸「イエ、酌は婦女と申しやすが、此お玉の君のやうなお尻の大きいのが側へ居ると、お座敷が狹くなりやすから、愚老は矢張獨酌が勝手でございやす」
下女「アレまア口が惡いヨ、覺えてお在なさい。お酒がなくなつても、お銚子替りを爲て進げないから」
寸「オット閉口、其時には手を鳴らすから、何卒來て下さい」
下女「否な事、誰が呼んでも來ますものか」
寸「おぬしが來ないと性を張れば、今にも若御新造樣が出來て芝居へ被爲入とき、玉はお供

にて、

瀧「夫ぢやア使の人に有難うございますと言つて遣らうかネエ。」

寸「イヤ有難う位な事ぢやアいけません。お刻限迄には相違なく上りますと、一筆書いてお進げなさるが宜うござりやせう」ト言ふゆゑ、瀧次郎はその通りをさら〳〵と返書に認め、是を下女に持せて遣れば、

寸「偖是で先今夜の處は極つたと言ふものだが、いくら日が短いといつても、夕方迄はまだ餘程間がありますが、エ、モシ若旦那、何でも物は祝ひ柄といふ事もありやすから、前祝に一盃頂戴は何樣でありやせう。」

瀧「お酒は進げも爲やうが、お前に醉れると私が困るネエ。」

寸「ナニそんなに醉ふ程頂戴は致しやせん。言はゞ今夜は天下分目の大合戰に、此雪中を出陣をするのでありやすから、些とは勢を付けて往かないぢやア高名手柄は十分に出來やせんノサ。」

瀧「ハヽヽ宜く色々と名を付けて吞みたがるネエ」ト言ひながら以前の下女を呼出し、「寸白さん、私にやア何を取つて宜いか知れないから、お前の好物を何でも然う言つてお遣り。」

寸「是は有難山の鳶烏といふ御意が出ましたネ、そんならお玉どん、下女の名なるべし鳥鍋を一枚にお

舌を掉る
まて偏医か
鬱症を治

瀧「私は讀むのも面倒だから、お前其處から讀んでお聞せ」

す「どうも夫だから困ると申すのサ。併し御意に逆らつては恐入るから、然らば愚老が讀上げませう」ト言ひつゝ文箱の紐を解き、中なる手紙を打見やりて、「ハテナ、瀧次郎樣へ、鍔屋内と書いてあるから、お内儀さんの處から來た樣に見えるが」ト言ひながら封を切つて讀下し、「ヒヤア、是は希代きてれつ妙不思議、天道若旦那を守護給ひて、日頃の念願協ふト言ふ知らせであるか、辱い」

瀧「何だネエ、大きな聲をして、肝を潰すハネ」

す「モシ、何だ處ぢやありやァせん。實に妙でげすヨ、まァ此手紙を御覧なせへ。兼々御約束ゆゑ一會相催し度、折から宗件事は持病氣にて出席は致しかね候へども、此初雪をたゞ見過し候半も殘り惜しく候まゝ、不都束ながら亭主は娘に致させ、夜込の茶催し候まゝ、夕刻より呉々も御入りの程待ち入り〻サ。何樣でげす、邪魔になる老人は病氣で、お娘が名代とは羊羹へ砂糖を付けて喰ふより味い都合ぢやァありませんか。其上夜込と言へば猶の事、一寸した暗まぎれに、兼てのお文をお糸さんの袂か懷へ入れる位の手品は遣はれない事もありやすめへ。何でも此雪は結ぶの神に違ござりやせんぜ」ト言はれて瀧次郎も少し元氣の付きたる體

瀧「使が來た處がつまらないはな。」

寸「ナニつまらねへ事がありやすものか。御使の來次第に、是非とも駕を促さるゝ事とぞんじましたから、僕もお供の心得で、支度を致して參りやした。今日はさし詰濃茶がありやせうから、彼君が可愛らしい口元で、一口喫んだその跡を頂戴するばかりでも、實に千兩の直うちはごぜへやすぜ。頓て愚老が匕加減をお目に懸けやすから、鬱性でばかりお在なさらねへで、些浮々と被成が宜うごぜへさアな。」

瀧「どうせ私の望は協ふまいと思ふから、寧死んで仕舞た方が樂で宜からうかと思ふヨ。」

寸「又そんなつまらねへ事を被仰ます。貴公も男ぢやァありませんか、一旦斯うと憶ひ込んだ女なら、邪でも非でも夫婦になつて、百萬年も長壽をして、添遂げやうと思はねへぢやァなりやせんぜ。あんまり君のお心が弱過ぎるから、僕が肺肝を苦しめる事最甚しサ。其處等は少し御推もじあつて然るべしサネ」ト自分獨で呑込んだやうに喋り廻して居る折から、一個の下女が次の間の襖を明けて顔を出し、

下女「アノウ、池の端からお手紙が參りました」ト言ひつゝ文箱をさし出せば、

寸「そりやこそおむかひでございます、速く明けて御覧じましな。」

ねては、寸白を責むれども、拘る筋には熟達して、拔目あらざる寸白なれど、此取持には安的果てしが、此儘止れば親萬兵衞より出させた金を、産出して返さねばならざる事故、其内には愚老が働き、お糸をお手に入れますれば、今少しの御辛抱など、口から出次第言拵へて、仇に月日をおくる程に、思ひは遂げねど瀧次郎は、顔見るばかりを心やりに、猶怠りなく通ひしが、此日は朝より空かき曇りて、今にも降るべき體なる故、稽古も休みて我が部屋に、鬱々として居る處へ、例の藪醫者寸白が、案内もなく入來り、

寸「イヤモシ若旦那、お誂への雪が降出して參りやしたゼ。」

瀧「エ、實正に降るのかへ。」

寸「實正の段ぢやァごぜへせん。君は障子を建込めて、何時も物思ひの體でお在なさるから知らないでお在なさるだらう」ト言ひつゝ縁側の障子を明けて、「アレ御覽じろ、綿をちぎつて投るやうな、大粒なのが交つて降つて來ましたから、初雪に爲ちやァ隨分積りさうに見えやすゼ。」

瀧「なる程、是は本降になつたやうだネエ。」

寸「モシ是ぢやァ池の端から急度お約束のお使が來やせうゼ。」

言ふ事でございますョ。併しまだお相容の處が極り兼ねて居ますから、他の連中には、先御沙汰なしが宜しうございますはサ。」

瀧「オヤ、夫は寔に有難うございますネエ。夫では雪さへ降れば、何時でもお催しになるのでございますか。」

さめ「ハイ、まァ其積でございますが、孰れ其節には、刻限や何かを取極めて御沙汰を致す事と爲ませうから、お使を進げたら間違ひなく御出でなすつて下さいましョ。そしてお稽古にするのでございますから、禮服には及びませんから、常の召物でよいと申す事でありますョ。」

瀧「ハイ〳〵畏りました。先生に宜しくお禮をお願ひまうします」とて此日は別れて歸りける。

第百六回

爾ればまた瀧次郎は、お糸の色香に深く迷ひて、忘るゝ暇のなきまゝに、かの寸白が找めに任せ、宗作方へ入門してより、一年越しに及べども、お糸は常に行義正しく、男女の別を堅く守りて、假初にも差向などにて、一間のうちに居る事あらねば、言寄る便の更になく、折々思ひに堪へか

宗「イヤサ、今言つた手管のやうにいけば、重疊間違ッた處が、元直にしかねるといふ譯でもなし、夫で先の腹が知れるぢやァあるまいか。併し是は自己の手際では出來ない仕事だから、孰れおぬしが一骨折つて吳れないぢァならねへぜ。」

さめ「そりやァお前さんの言付だから、私に出來る程の事なら爲ても見ませうが、親が承知で娘にそんなをかしらしい事をさせるのは、譽めた咄でもないぢやァありませんか。」

宗「ナニ、夫も眞實のことを遣らせては、女兒に生涯淫者の名を負せるやうな譯だから、只その切掛を見るばかりのことにして、跡はおぬしの辯口で、熟い都合になるやうに、何樣とかごまかすが宜いぢやァないか。」

さめ「何だかこんな事は爲つけないから、芝居ででもありさうな事のやうで、極りが惡うございますネエ。」

宗「マア、何でも構はないから遣ッて見るが宜いはな」ト夫婦竊に相談を爲て、或日瀧次郎が稽古に來りし折を見合せ、おさめは他の咄の序に、

さめ「瀧さん、先生がネ、此間から空が催して居るから、大かた雪になるであらう、降り出したなら初雪の茶を催すから、お前さんに寸白さんを連れてお出でなさるやうに、申して置けと

で腹を立つたら、瀧さんを稽古によこしさうもない筈の處を、構はずに來るのは、先でも氣のあるやうに思はれるぢやァありませんか。」

宗「なる程、こりやァ宜い處へ氣が付いた。自己も敏から、富多屋は奈何に金滿家だと言つて、五節句其外の附届け、又今度の類焼見舞も、他の弟子とは格別に、大そうな氣張つた事だと不思議に思つて居たが、然ういふ先に下心があつての事とは憶ひ付かなんだ。夫が實正なら願つたり協つたりだから、這方から少し餌を出しさへすると、直に喰付くのは見えて居るが、ならう事なら先から頼ませて、據なく遣るやうにすると、大きに都合の宜い理窟があるのだが、何樣か熟い仕方が有りさうな物だが」ト暫く手を組んで考へしが、「ヤ、思ひ付いた事がある。萬一誰ぞ聞いて居ると惡いから、耳を出しな」ト言ひながら、おさめを側へ呼寄せて、「の、の、何樣だ斯ういふ計略は。」

さめ「ホヽヽヽ、奈何なこつてもそんな事が。」

宗「ナニサ、構ふ事はないから遣つて見るが宜いはな。」

さめ「夫だつて先がいよ〳〵然ういふ氣だか、まだしつかりと知れも爲ませず、又丁度這方で誂へたやうな都合にいくか何樣だか分りませんぢやァないか。」

更這方から貰つて下さいましとは、まさかに言ひ出しにくいではございませんか。夫よりも貴公が緣付ける氣におなんなすつたら、富多屋ばかし日は照りやァ爲ませんョ。然う言つちやァ可笑いが、お糸の容貌なら隨分那内に負けない身上柄の所から、何程も口が掛つて居ますから、寧の事、他に被成た方が宜いぢやァございませんか」

宗「イヤ、自己は富多屋の息子が氣に入つたから、其處で急に遣りたくなつたのだから、他にどんな口があらうとも、見替る了簡は更にないノサ。併し最初に立派に斷つた廉があつて見ると、口が腐つても、進げませうと言はれた義理でもないが、其處を何樣か宜い工夫で、緣談の整ふ仕樣はない物だらうか、變つた方便を考へて見て呉れまいか」

さめ「左樣サネエ、私にも他に斯うと新作意もございませんが、那富多屋の緣談を斷つて間もなく、瀧次郎さんが稽古をはじめて、今でも怠らずに釜日の外にも來て、道具の鑑定なんぞを習つたり何か爲なさる樣子が、稽古は附けたりで、お糸に心があつての譯ではあるまいかと思ひますから、女兒も年頃ではあり、萬一どんな事でもあつては、取返しの出來ない事だと、瀧さんがお糸と差向にでもなるやうな時は、氣を付けるやうに爲て居ますせいか、まだ戲言口をひとつ利いたのを見た事もございませんが、然うして見ると這方で手強く斷つたのを、富多屋

る者のうちを誰ぞ選んで、養子に爲た處が事は濟むはな。」
さめ「ソリヤア内の身上に競べて見ると、百倍も增した富多屋の事でございますから、那孃は僥倖に違ひはございませんから、私も爲うなれば嬉しうございますが、其お心があるなら、先達寸白さんが來て、那孃を富多屋へ媒妁を爲たいと言つた時に、あんなに手強く斷らないでお置きなされば宜かつたに、私やァ那時側に聞いて居てさへ、寔に氣の毒なやうでなりましなんだョ。」
宗「イヤ、夫をおぬしに言はれると額に汗が出るやうだが、那時分までは獨女兒の事ではあり、なか〳〵脇へ手放す了簡も无かつたから、ツイ手強な挨拶爲たけれども、今になつては、女兒ひとりに換へられない場合になつたから。」
さめ「エ、何が女兒に換へられませんエ」ト咎められて、宗件は胸にギックリ對へしが、
宗「ナニサ、今も言ふ通り、惡い蟲でも付くと、娘ひとりに換へられない恥をかく事もあらうと言ふ事サ。」
さめ「夫だから私も、御奉公にでも出したいと申したのでございますョ。夫ぢやァ富多屋へ遣る事に内々は極めたにも爲ろ、一旦先から言込んだのを堅く斷つた口上があつて見ますと、今

いろは文庫　卷之五十三

第百五回

然ればおさめは丈夫の辭を不審には思ひながらも、常々心の變り安いを呑込んで居る事ゆゑ、爾あらぬ體にて莞爾笑ひ、

さめ「オヤ、貴公はまア何と思つてそんな事を仰しやるのか知りませんが、私は最う徼から、那孃を內へ遊ばせて置いては爲にもなるまい。何卒一年でも御奉公をさせて、他人の中を見せたいと思つて居るのでございますがネ、夫には相應に支度も掛りますのに、類燒にあつたり何か爲たあげくの事だから、夫はまア思ひ切も爲ませうが、他に男の兒のあるではなし、一粒種のお糸を嫁にお遣りなすつて、跡は何樣なさる思召でございますエ。」

宗「ナニサ、こんな瘦身上の一ツや二ツ、何樣なつたからと言つて構ふものか。全體赤保で二百石といふ、御先祖さまから下さつた株家督さへ打捨て、自分の好でこんな眞似を爲て居るのだから、自己一代で仕舞つた處が、心の殘ることはない。夫とも跡が立つやうなら、廓に居

宜からうかと思ふに就て、誰を壻に爲たものかと、此間中から考へて見るのに、毎日内へ稽古に來る、那瀧次郎は人柄といひ立廻り迄、とんだ温和な息子で、其上にあの子の親の富多屋萬兵衛と言つちやァ他の知つた大金持、然うして見るとまァ、娘も此内に居るよりは出世といふもの、孰れにしても一度は、嫁に遣るか壻を取るか爲にやァならない體で見ると、旬綬れの竹の子のやうに、あんまり丈を伸過させないうちに、遣る物なら遣つて仕舞ふ方が安心ぢやァあるまいか」ト言はれておさめは腹の中にて、日頃娘を手放す事はならぬと言うて居た夫が、藪から棒にお糸の緣談、合點ゆかずと思ふにぞ、宗伴の顏うち守りて、須臾言葉もなかりける。

ち明け物語れども、例の心の定まらぬ宗作にてある故に、大星の密意をば迂闊には洩さゞるを、猶幾度も宗作が、或は怨み或は怒りて、禁止る氣色のあらざるにぞ、兩個も今は默止がたく、頓て大星の内意を歴て後、宗作にうち對ひ、御心底の趣は、大星殿をはじめとして、我等においても感じ入る。仍て密事を告るなり。その故は恁々と、申合せし兼ての方便の、其荒増を物語り、おん身は主家を退去せられて、今は市容の事なれば、一味徒黨は協はねども、猶舊恩を忘れずとなら、師直の邸に入込み、讐の動靜を探聞きて、義黨の者へ知らされんこそ、是拔群の忠功ならめと、言はるゝ所の理なるにぞ、宗作も感服して、此うへは兎も角もして、便宜をお知らせ申さんと、堅く約して別れしが、師直が方にても、判官切腹ありし後は、倘鹽谷家の浪人が、主君の讐を報はんとて、討入るまじきものにあらずと、植杉より附人として、かの小林平八郎等、何れも一流の免許を得し者、多人數警衛倣す程なれば、門の出入はいよく嚴しく、是迄立入の者の他は、僧長袖の類なりとも、新規の出入は協はぬよし故、宗作是には當惑して、種々工夫なしけるが、ふと思ひつく事あれば、或日妻のおさめに對ひ、

宗「おぬしは何と思ふか知らないが、お糸も今年は十七にもなるのを、何時迄も子供の樣に思つて居ると、惡い蟲の付くやうな事もある物だから、寧の事口を見付けて、緣付けたはうが

子を用立申さんなどと言うて呉れる者もあり。宗作は此地へ來て、はじめて火事に合うたる事故、がつかり力を落せしが、諸方より物を惠まれ、何樣やら斯うやら燒跡へ、以前の如く家を營み、燒前よりも商賣の、反つて繁昌したりしかば、是は又武士ではなかく〳〵もつて出來ぬ僥倖、さすれば我は町人が、身に相應せし業なりと、又もや憶ひ直せしとぞ。然れば恁まで氣の變る男にてはありしかど、古主の恩儀は忘れざりけん、義黨の仇を討にいたりて、一臂の力を添へたる事あり。その故を奈何といふに、類燒せし年の四月旬の某の日に、舊主鹽谷判官には、高の師直を刄傷に及び、其身は切腹家國は改易したりと聞きしより、うち駭くこと限りなく、おのれやれ師直と、拳を握りて忿りしかど、身は市客となりさがりては、奈何とも詮術なく、空しく月日を送るうち、夫とはなしに師直の、樣子を竊に探索せしに、渠は常に茶を好みて、諸侯方のそのうちには、同好の茶友もあるよしなれば、我かの屋敷に取入つて、折を窺ひ先君の、怨を報ふ手便もあらんと、心付はしたれども、恁までの大望を身ひとつにては施しがたし、殊更に御國には、大星殿をはじめとして、忠義をおもふ武士の、なきにしもあらざれば、憶ふ仔細を試に、まうし出せしその上にて、事を計るにしくはなしと、豫の信友なるのみか、俳道にて今も猶、內々風交なすところの、大高子葉矢間素曉に、竊に對面なしつゝも、心底う

に、俄に半鐘を打鳴らして、火事よ〳〵と喚はる聲に、何處ならんと尋ぬるに、はじめは本郷通りといひ、又は駒込邊など言へるに、折から風も烈しければ、些方角が悪いと思へど、お客と言ふも都て皆、お歴々の事なる故、自由に歸る事にもならず、心ならねど座に連りて、酒の取持などするうち、當家の火元見立歸りて、火事は池の端なりとの屆けに、宗伴駭きて、今は猶豫のなりがたきに、漸暇を乞請けて、屋敷を出るとその儘に、一もくさんに駈付け見れば、奈何にせん其火事の隣の家より燃出せしに、風下なれば堪らばこそ、家内の者の怪我もなく、立退しといふばかりにて、家はさらなり土藏まで、皆丸燒けになりしかば、流石の宗伴がつかりして、又つく〴〵と思ふやう、我が身以前の武士ならば、家屋敷家財迄殘らず類燒したりとも、殿より夫々手當も下り、又食祿もあるなれば、左程困りもすまじきに、町人の身の悲しさは、斯く丸燒けになつて仕廻へば、箸も持たぬ乞食同樣、昨日までも町人が氣樂で宜いと言うて居たが、是にて思へば過し日に、矢間が歸參をすゝめたとき、頼んですれば宜かりしに、斯う成行くも殿樣を後に爲たる罰ならんと、頻に先非を悔みッヽ、又武士になりたくなるとは、然るにても此男程心の變り易きはあるまじ。然れども宗伴は茶の湯の弟子も夥あり、出入屋敷も夫々あるゆゑ、火事見舞とて板木を贈り、或は米味噌醬油の類、又は普請にお手支なら、金

下に卑しく見落されて、望み協はぬのみならず、最口惜しき事あらんと、是より稽古に身を入れて、一心不亂に精を出せば、其度毎に寸白も同道をして那處にいたり、否々ながらお相伴にて、倶に稽古はするものゝ、茶の湯の供では三文のかすりの取れる譯にも往かず、酒一杯にもありつけぬに、斯ういふ事に何時迄も掛り合つて居るときは、腮の乾あがる事と思へば、如何にもなしてお糸をば瀧次郎に取持つて、何卒ずつしり世話料を熟くせしめて遣らんものと、慾に心を苦しめつゝ、お糸はさらなり宗伴夫婦の氣に入る樣に取入つて、折もあらばと窺へども、根が武士の果ほどありて、家内殘らず物堅きに、お糸は常に行義正しく、色氣と言うては毫程もなき眞の未通女なりしかば、言寄る方便の更になく、流石の寸白我を折りて、詮術なさに是もまた、阿容々々光陰を送りしとぞ。然ればまた宗伴は茶の湯と鑒定と兩方にて、諸方の屋敷に立入る程に、商賣は道具屋なれど、人に先生々々と立てらるゝ故、自ら内證の都合も至極宜く、日毎に人の馳走にて美味をば口に喰ひ、眼には好める器物を見て、最面白く世を渡れば、宗伴は腹の裡にて、能くぞ赤保を退身して市人にはなりしなり、究屈な袴大小、纔の祿に身をしばられ、常に天窓を押へられては、此樂みはなかなか出來ぬ、モウモウ武士は懲果てたと、獨りすました顏を爲て、何不足なく暮せしが、或日本庄の諸侯方より、夜込のお茶に召されし

たか些とも醉はねへ。殘りがあるなら最う一銚子つけて吳んな。」
さじ「寐しなにお飮んなされば宜いのに。」
寸「ハテサ、燗をつけなと言へばヨ」ト是より夫婦水入らずの又盃事ありと知るべし。

第百四回

斯て件の忠助は、立歸りて如此々々と、主人に內々報知たる上、何というて勸めたりけん、瀧次郎は彼娘を十分爲て取る心にて、直にも弟子になりたきよし故、弟子入の贈物も竝より餘程心を用ひ、扨寸白に同道させて宗作方へ遣す程に、瀧次郎は如何にも爲て娘を我が手に入れんと思へば、釜日といへば早晚とても、人より先へ詰めかけて、透もあらばと窺ひしが、基宗作の娘といふは、名をば阿糸と呼れつゝ、今茲十六歲なれど、茶の湯においては弟子中に肩を竝ぶる者もなき、最見事なる立前にて、稽古の席へ出るときは、男女の弟子どもうち交りて、圍の裡に圓居はすれど、親の躾の嚴しき故に、萬の事みな內端にて、假初にも男に對ひ、仇口ひとつ言ふ事なければ、顏見る每に瀧次郎は只胸をのみ灼せども、文を送らん便もなく、空しく月日を過すにぞ、又つく〴〵と思案をなすに、那娘に言ひ寄らんにも、茶道の業の拙くば、無

さじ「何だネ、まんまと首尾よくもないものだ。先刻はお前が青い息をも吐得ないで、ギウギウ言つてお在だから、あんまり見兼ねてお酒やお肴を取りに遣り、一口呑せて置いたうへで那いふ趣向を咄したればこそ、忠助さんも機嫌が直り、嬉しがつて歸つたらうぢやァないか。然うでもなかつたら、お前は何樣する積だへ。」

寸「今日ばつかりは實に嚊ァ大明神樣ヨ。」

さじ「今日ばつかりもないもんだ。夫ぢやァ平常は何だらうネエ。」

寸「エ、ナニ平常は山の神だから拜んで居るのヨ。」

さじ「大概にお爲ヨ。お前があんまりちやらつぽこが過ぎるから、斯ういふ事にもなるのだから、此先若旦那を池の端へ稽古に連れてお在も宜からうがネ、餘程氣を付けないと又しくじる事が出來るかも知れないヨ。」

寸「イヤモウ、今度の事は何と言はれても閉口々々。其替り此狂言が熟く當りやァ、ずつしりお禮が來るから、お主にも芝居の一度ぐらゐは見せて遣らァな。」

さじ「私やァ芝居より羽織が不良なつたから、お召縮緬が一反欲いヨ。」

寸「ヨシヨシ、夫も買つて遣らうが、今日は那いふ理窟で呑んだせいか、酒が何處へ這入つ

せう。トキニお咄の間に放心々々やらかしたので、大御馳走になりやした。旦那が何を爲て居るかと、嘸待兼ねてお在なさるだらうから、最うお暇に致しやせう。」

さじ「アレサ、まア宜うございますハネ。まだねつから飲りも爲ませんのにネエ。」

す「斯うお咄が極れば、些たア緩宥と被成ても宜いぢやアございませんか。私も漸々胸が落付いて、酒の味が知れて來たやうだから、最う二三盃お突合ひなすつて下さいな、併しお匕、お肴があんまりひどいノウ、最う夕魚屋でも來さうなものだ。」

さじ「忠助さんは鯒がお好だから、骨抜でも言つて遣りませう」ト立ちあがるを推禁め、

忠「イヤ、お肴は是で澤山サ。最う何があつても頂けない。併し折角のお勸めだから、是で最う一盃重ねてお披と致しやせう。」

す「そのお披といふ口上を速く聞くやうに爲たい物サネ。お急ぎと被仰から無理にともお留めまうされませんが、一盃ではあんまりだから、寧て三獻で媒妁がお預りと致しやせう」ト言はれて這方もなる口故、とう／＼三盃引かけて、暇乞ひさへそこ／＼に、衝足して歸り往く、跡見送りて寸白が、ホツト一息吐きながら、

す「まんまと首尾よく口車にかけて、預つた金も吐出さずに歸して遣つた。」

忠「そんなら夫は安心だが、扨狂言の筋は夫に爲ても、肝心の若旦那が、女郎を一晩買つた事のない極の素息子と來て居るから、袂へ文を入れる氣轉から、その娘を熟く口說付ける口辯功があれば宜いと思ふと、夫もまた心遣ひだネエ。」

寸「ナニ、其處は愚老がお附添ひまうして居りますれば、不間な事はおさせまうしは致しやせん。」

忠「又早呑込の安請合ひは御免だヨ。」

寸「ハテサ、然ういふ事は愚老が素より得物で、夫でばつかりお飯を食べて居るのだから、寸咫はございません。假令急にその事が出來ない迄が、釜日の度に若旦那が那內へお出でなすつて、一所に稽古を爲ながら、その娘の顏を見てお在なさるばかりでもお氣が紛れて、御病氣の爲にも宜からうと思はれますから、旦那のお耳へ內々お入れなすつたうへで、若旦那をお勸めなすつて御覽じまし、其段取に極れば、お弟子入には愚老がお供を致します」ト言ふをつくづく聞いて見れば、道理らしく思ふにぞ、忠助はうち點頭、

忠「なる程若旦那が內々考へ事ばかりしてお在なさるより、よしや出來ても出來ないでも、其處へ往つてお在なされば、些とは御保養にも成りやせうから、まアお勸めまうして見ると爲ま

にならずにはお在被成ませんョ。然うして内證が出來たうへでは、親御達が何と被仰らうとも此方の物でありますから、好な掛合が出來まさァネ。些と惡法かは知りませんが、私の考では是が一番近道かと思ひますが、何樣でございませう」

忠「なるほどこりやァ氣が付かなんだ。なか〳〵お内儀さんも隅には置かれねへ、孔明其處退けといふ智惠を出しなすつたチ」

さじ「アレサ、そんなに嬲つちやァ否でございますョ。是はほんの鼻元思案で、あんまり内の人が困る樣子を見かねて思付いたのでございますから、猶又お胸でとつくりと御思案なすつて下さいまし」

忠「然うサネエ、深く考へて見ると、先の親が嫁にも遣らぬ聟も取らぬと言つて居るのは、萬一其娘が小野の小町か、然うない處が何ぞ體に曰でもあるのだと、折角若旦那が骨を折つて附文をなすつた處がむだな譯だが、這處等は何樣爲た物だらうネ」

寸「其儀ならば御心配御無用サ。私も最初から先の言分が丸斷りだから、若やと思つて近所の錢湯まで探索を爲て見やしたが、搗拔の新紛で拵へたやうな申分のない綺麗な體で、しかも肝心要の所まで確と見屆けて置きやしたから、大丈夫請合ひサ」

ますものを」斯うして居るうちも氣が氣でないのだから、

忠「そりやァ御馳走だから何程でも飲みやせうが、熟い咄ならまァ夫を聞かせてお臭んなせへな」

さじ「ハイ、そんなら思ひ切つてまうしますがネ、斯う言つたら女の猿智恵とお笑ひでもございませうが、先の親御さんが、嫁にもやらぬ聟にも貰はないと被仰るのは、獨り女兒で可愛くつてならないから、歳は十六七になつても、まだ赤子の樣な心持でお在のかも知れません。夫でなければ、あんまり聟さんを選み過ぎて迷つて居なさるのか、何れ其處等だらうと思はれますから、今の所では媒妁を入れて、表面どんなに手を替へ品を替へて言込んだからと言つて、迚もアイト返事をなさる事ではありますまい。其處で私の思ふには、其宗伴といふ人は茶の湯のお師匠さんをもなすつて、お弟子も大そうあるのに、其女兒さんもお茶が好で、同樣に稽古をなさると云ふことでありますから、若旦那をもお茶の稽古にかこつけて、那内へ出這入りをさへ被成てお在なされば、折を見合せ袂の中へ、ちよいとお文をお入れなさる位な間はございませう。然うさへ被成ば、縱ひ親御は遍屈なお方でも、今時の娘に、十六七にもなつて色氣の出て居ない者はありません。處へ若旦那が那通りお綺麗と來て居ますから、急度熟いお和合

いろは文庫　巻之五十二

第百三回

さる程に忠助はお匕が氣轉の口車に、流石否だと振切つて歸れぬやうに仕掛けられ、心弱くも猪口を取つて、酒が少し口へ這入れば、自と面の和ぐを見て、寸白竊かに胸撫おろし、覺えず太き息をつきしが、酒の座敷の取持は素より得たる業なるゆゑ、妻侶倶に種々と詞を盡して勸めしかば、忠助も既にしてはや微醉になりしにや、獨り莞爾々々うち笑みながら、

忠「イヤお内儀さん、こりやアとんだ御馳走になりやした。私も實はこんなに緩宥と爲ては居られないのだが、今がたお前さんが何か別に宜い工夫があるやうに言ひなすつたから、夫を聞かないのもと思つて、つひ御酒を頂いたら、尻が居つて仕廻やしたが、其處でその工夫と言ふのは何樣いふ譯だネ」

さじ「ホヽヽヽヽ、然う眞面にお聞きなすつては、何だか改つて申しにくいやうでございますから、まア最う二三杯飲つて、少しお酒のまはつた處でないと、お咄が爲にくうござい

いろは文庫第十八編序

一日に一字學べば三百六十字とは菅秀才の金言を、其手習子屋に因ある、外題に名にあふいろは文字、まだ難波津をうろ覺えなる幼童さへ、忠臣義士の傳記の讀みよく、分解安きを專になんを綴るをもて、或は俚語あり、假字違ひあり、素より大人君子等の覽に入るべきやうもなき、兒戲の册子を今更に、ことごとし氣に懲く言はむは、嗚呼俺ながらくだ〳〵しかりき。

さるのとし

爲永春水識

畢竟此場の納りは如何、次の編の出るを待つべし。

しらしいことが旦那に言はれるものか。夫とも金が返されずば、お前も一所に店へ來て、旦那に直々に其譯を咄しなさるが宜い。三月五月引張られた曉に、そんな言草迄聞いたら、旦那も澤山だらう。私も急がしい用を抱へて、長い短い言ッては居られない。さア何方とも速く返事を爲なさるが宜い」ト言はれて寸白困り入り、手をもじ〳〵爲て居る折しも、女房お匕が勝手より何時の程にか用意なしけん、酒肴をば持出て、

さじ「アノウ忠助さん、殿方のお咄に口を出すでもございませんが、宿の不都合からこんなお氣の毒な事にもなりましたが、今其お金が在つた處が、若旦那の御病氣が直に愈るといふ譯でもありますまい。夫に就て私がふいと思ひ付いた工夫がございますけれども、素顏ではお咄も爲にくい事と思つて居る處へ、丁度宜い油身を持つて來ましたから、おさしみを作らせました、お茶の替りに」ト勸むれば、

忠「イエ、私は種々用多故。」

さじ「アレサ、然うでもございませうが、お燗迄して來ましたものを、一口飲ッて下さいまし、味いお咄がありますから」ト笑ひかけられ、忠助も素より嫌ひの酒でもあらねば、つひ口車に乘せ上げて、放心々々猪口を手に取らせしは、なか〳〵氣轉の妻とぞ見えける。

む口は澤山ありますけれど、些思ふ仔細もあれば、當分其御相談には乘られないと言ふのを、猶押返して種々勸めて見ましたけれども、まるで色氣のない返事だから、私も案に相違サ。併し若旦那も那程思込んでお在なさるのに、旦那には立派に請合ッた口上があつて見ますと、何分出來ましなんだとも言はれず、何樣か宜い手續を見付けて、先の腹をすつかり探つたうへで、最う一遍咄し掛けて見やうと思ふので、實は引張つて居るのだから、何卒旦那の前は宜い樣に取繕つて、最う少し御猶豫を被成て下さるやうにお願ひまうします」

忠「イヤハヤ呆れかへつたお咄だ。お前が那程手丈夫にお言ひなさるからにやア、先方をも突留めて置いての事かと思へば、そんな浮いた事に、旦那から金迄引出すとはあんまりな人だ。何の事はねへ、お前に品玉を遣はれたやうな物だのに、べん〳〵と馬鹿な顏をして、何時まで待つて居られるものか。旦那に此通りまうしあげるから、預けた金の耳を揃へて出しなせへ」

寸「其お腹立は重々御道理でございますが、質屋からは流れの催促が來て、御覽じる通り帳面を出して頭痛に病んで居るやうな始末、今とまうして其金が手元にあるとまうす譯でもございませんから、其處は何樣か番頭さんのお腹合ひで」

忠「馬鹿な事を言はつしやい、這方は若旦那の命にも拘らうといふ處だものを、そんな可笑

買つた事もなく、女と言つたら風上にも否だといふ若旦那だから、思ひ込みも深く、此比ぢやァ好な本もお讀みなされず、只鬱々と物案じ計り被成て、御膳もろく〳〵あがらないから、親御達の御心配はどの位だと思ひなさる。悪い病の出ないやうにと保養に出した先から事が起り、反つて病氣を引出す樣では何にもならない、夫に就ても寸白さんが那程丈夫に請合ひなすつたのだから、最う今には何とか先の挨拶がなくつてはならない、一寸往ッて聞いて來いと、毎日の樣に旦那から言付けられるから、店の用を闕いて來て見ると、昨日も留守、今日も亦據ない用で出ましたでは、旦那の前へ然う〳〵同じ事も言はれず、中へ立つて困るのは第一私だらうぢやァないか。今日は是非ともしつかりとした御挨拶を聞かないぢやァ歸りません」

寸「イヤモウ、何と被仰られても一言半句もございません。私も斯ういふ譯にならうとは思ひませず、先お店の御身代とまうし、若旦那の男振はよし、一口斯うと咄したら、午勞程の尾を振つて迯越だらうと思つたから、旦那の前を安請合を爲て、扨池の端へ往つて相談を爲掛けて見ると、那宗件といふ坊主、道具の鑒定は上手たが、壻の目利は下手だと見えて、現在女兒の出世は思はず、獨り娘だから遣られないと言ふから、私も言ひ掛りになつて、そんなら壻にお貰ひなさらないかと言ふと、段々の御深切は辱いが、方々から嫁に呉れろ壻に成りたいと言込

忠「イヤ構ッて下さるな。お前さんとも斯うやつてお心易くする中だから、お互に貌を赤め合ッた事も言ひたくないと思つては居ますけれども、何時來ても、ヤレ敷居が高いの、面目ないのとばかり、揚句の果にやァ留守を遣はれるやうでは、私は兎もあれ旦那の前へ濟むまいぢやアないか。基の起りは若旦那が些學問に凝すぎて、萬一惡い御病氣でも出ちやァならないと言ふ處から、お前さんを賴んで、少し氣保養でもさせて見やうとすると、奥山の茶見世で目に付いた女兒があつて、是非女房に爲たいと被仰る御樣子。段々先を聞合せて見ると、池の端で當時隨一と言はれる鑒定者、鍔屋宗伴といふ道具屋の女兒だと言ふ事を旦那がお聞き被成て、忰が夫程氣に入つた女なら、縱ひ貧乏人の娘でも、支度金を遣ッてなりとも貰ひたいところ、然ういふ身元の女兒なら、猶の事欲しいものだと被仰ると、お前さんが、ナニ私が口を利けば、先の兩親に否と言はせる事ぢやァございません、併し夫には人に人を掛けて言込まねば、先の腹へ這入るやうな相談にもなりかねますから、是々の物入がございますと、旦那の手から金も餘程引出しなすつたぢやァないか。尤私共の身代で、夫しきの金の事を彼是とも言はないが、お前さんが餘り安請合を爲なすつたから、旦那も若旦那も大丈夫貰へると思つてお在なさる所で、三月立つても五月たつても取留めた返事がないから、旦那の腹立は扨置いて、是迄女郎を一晩

第百二回

燒杉の九尺の板塀に三尺の入口の柱に、越野寸白と名札を掛けしは醫者らしけれど、百味箪笥も飾つてなければ、藥取の來た例もなき、其入口の格子戸を外より靜に押明けて、町人體の一個の男が飛石傳ひに内へ這入り、緣側の障子をば、御免なさいトがらりと明ければ、内には主の寸白が質屋の通を膝に廣げ、頰杖突いて居たりしが、件の男を見るよりも、周章ふためき裏口へ、迯出さんとするを呼び止め、

町人「ア、モシ寸白さん、私の影を見たからと言つて、何も迯隱れを爲なさる事もあるめへぢやァないか。此程から幾度來ても、留守だ〳〵とお内儀さんの挨拶、今日は其手を喰ふまいと、拔け足を爲て來た物を、又迯げられて堪るものか」ト言ひながら上へあがれば、寸白は間の惡さうに額を撫でつゝ苦笑ひして、

寸「是は忠助さんお出でなさい。此程から每度御足勞を掛けた事も妻から承つて居りますから、是非お店へ上らないでは濟みませんが、彼一件の埓の明かないので、何だか敷居が高いやうで、つひ御無沙汰になりました。お匕、お茶をば進げないか。お莨盆を」トもてはやせば、

望の協ふ樣に周旋をして進げますから、御安心被成まし。」
瀧「寸白さん、そりやァ實正でございますかへ。」
す「ナニお欺しまうして何に爲ませう。」
瀧「夫が出來るなら今日中に働いて被下いな。」
す「ハヽヽヽお前さんもあんまり性急ぢやありませんか、まだ何處の誰だか知れませんものを。併し其處は成丈速く聞合せるやうにも爲ませうが」ト言掛けて後を見返り「エ、孃さん、今通ッた女連は何處の者だらう。時々山へ來でもする事があるかノウ。」
茶屋むすめ「イヽエ、つひに見掛けませんが、何でも下町邊の隨分富家の娘さんでございますネエ。」
す「先愚老の考では、向島の花を見て這方へ廻ッて來たといふ樣子だが、男の連がないから、歸りの奢りが魚十や昇月でもあるめへ。何れ花屋か萬年屋か、夫でなければ達磨汁粉あたりを探索爲たら、まだあの連中が居るかも知れやせんから、兎も角も急いで往ッて見ることと爲やせう」ト茶代を置いて兩人はくだんの茶店を立出でける。

白は見て呆れ果てしが、扨はとおもひ點頭て、

寸「モシ若旦那、これはしたり若旦那」ト脊中をひとつたゝかれて、はつと氣の付く瀧次郎が、

瀧「何樣もあの櫻が餘程綺麗ぢやァないかへ」ト言ひ紛せばうち笑ひて、

寸「モシ、何もそんなに素面をおきんなさる事はありやせん。お前さんも今の一婦人ぢやァ腰が拔けやしたらう。常々女は見るも嫌だなんぞと、愚老を一杯おくはせ被成たのは、實にお恨みだ子」ト言はれて這方は顏を眞赤に爲て、

瀧「ナニ、眞正にあの花があんまり綺麗だから。」

寸「ハテサ、那花が夫程お氣に入ッたら、隨分愚老が働いてお取持をも致しませうが、先刻もお咄しまうす通り、廓内へ往つて御覽じまし、あのくらゐのは箒で掃く程もありやすから、まア試しに一寸お出被成て御覽なさるが宜うございます。」

瀧「イエ、何と被仰ても女郎買は否でございますが、私は何卒して。」

寸「エ」一床几の緣を撫て居るゆゑ、「へゝエ、夫ぢやァ矢張今のお孃が御執心でございますネ。よろしうございます、お前さんが夫程までに思召すのは、よく〳〵の事であらうから、急度お

寸「モシ若旦那、餘程美しい、そしてあどけない、斯う言ふのならお前さんにお氣に入りませうが、廓中へお出でなすつて御覽じろ。今の女兒より百倍ました上玉が何程も居りますぜ。いづれ若旦那には年增ではお氣に協ふまいから、十五六の引込雛妓といふ奴が宜しうございませう。其も引込雛妓とはいつぱ、幼稚ときから娼家の深窓に養はれ、琴三絃は言ふもさらなり、碁將棋活花香茶の湯、歌俳諧まで仕込んであれば、先お大名のお姫さまと言ッても恥しからずサ。其處で青樓の形勢をお咄し申しやせうが、座敷の模樣は種々ありといへども、君は御酒を飲らない、幇間の輕口や唄女の二丁鼓は御意にも入りやすめへから、略して言はずサ。引手茶屋の娘分が些あちらへと言ふをきつかけに、座敷が引けて而後床となり、床納ッて然して後娼妓來るで、例のお姫樣のやうなのが、裲を脱いで屛風の裡へ這入り、アイト言つて吸付けて出す莨の味サ、薰は麝香龍惱に伽羅沈香をこきまぜたやうで、得も言はれないのを一吸ひ吸つてボントはたくと、アレサ主やァ堅ッくるしいぢやァありませんか。私が取ッて進げるから待ちなましト、客の帶を解いてキウ〳〵ト引張出し、細く眞白な手を枕の間へグット入れられた心持は、堪へられた物ぢやァありません」ート手眞似を爲ッヽ寸白が夢中になつて喋り廻れど、瀧次郎は女兒の跡を、我を忘れて見送り居たれば、側で喋るも耳に這入らず、忙然として徨む體を、寸

別はあるまいかト、思ふ折しも此店先へ、年齢四十に近いと見える母親が先に立ち、下女に日傘をさし掛けさせて歩み來りしひとりの女兒、年は二八の上を出ぬ、蕾の花の南風にほころび初めんとする風情、美しき事得も言はれず、跡に四五間引下りて、道草して居る丁稚小僧を、件の下女が見返りて

下女「オイ〳〵吉どん、何故見せ物の看板なんぞを立つて見て居るのだえ。今日はお供だヨ、此人込の中ではぐれでもすると宜ないハネ。」

小僧「ナニ、はぐれでも道を知ッて居るから獨りで歸らア。いくら花見に來たのだと言つて、花ばかり見て居ちやア面白くもなんともねへ。花より團子とせへ言ふものを、稀にやア爰等で醴の一杯も呑んで往けば宜いに。」

下女「アレサ、そんな外聞の悪い事を言ふのではない。速くお歩きと言ふのだヨ」ト二個で言合ツて居るのを、女兒は聞いて莞爾と笑ひながら往過ぐるを、瀧次郎は此とき旣に蕢道具を腰に納め、立たんと爲ツヽ覺えずも件の女兒と顔見合せしが、日比はどんな女に逢うても、振向いて見た事もなき偏屈者の瀧次郎も、如何なる過世の縁にや、總身ぞつとするばかり、須臾見とれて居る體を、寸白速くも見て取ッて、宜い手續と思ふにぞ、

ん、今どきこんな堅い事を言つて居るお息子さんはありは爲まい」と見かへれば、

茶屋むすめ「ホヽヽ、然うでございますョ。時々はお遊びも御保養になつて、お體のお藥でございますネエ」ト程をよく相槌を打てば、瀧次郎は困り果て、手をもじ〳〵遣りながら、

瀧「皆さんの御深切は有難うございますけれども、女郎を買ひますと第一瘡をかきますから」

寸「アハヽヽヽ、お前さんもつまらねへ事を被仰ぢやァねへか。都て醫は人相を心得ねば出來ないもの、私などが一目見れば、此女には瘡氣のあるないは、貌の色艶でも直に分解やす。憚ながら愚老がお附添申して、是なら瘡を請ける氣遣なしといふ娼妓を見立ててお買はせまうしたら大丈夫でございませう。夫ともお否なら、女郎は揚げず、唄女ばかりでわつさり騷いで歸るは何樣でございませう。是が實正の江戸ッ子遊びと云ふ奴で、艶治がなくッて宜しうございませう」ト言へども瀧次郎は返事もせず、急に煙管を筒へ納めて

瀧「寸白さん最う歸りませう」ト言はれて寸白腹の裏では、今日親仁から頼まれて十五兩といふ金を預り、懐に持つて居れば、今夜連込みさへすると、娼家の掛りは遣ひ次第、美味い酒をば飲んだうへで、設もあつてお禮も貰へる、近比にない仕事と思ひ、大骨折つて漸々と此奥山まで誘ひ出し、茶を一杯呑んだばかりで歸ッてはつまらぬ譯、何樣がなして引留める宜い分

度よし、是から廓中の花見物とは何樣でございませう。」

瀧「夫は私には不良せん。」

寸「僕が面白い事をお勸めまうすと、何を言つても君は不良せんと被仰ので困りやす。一體此間から些お鹽梅のお惡い御樣子、夫と言ふが餘りお學問にお凝りなすつて、分解も爲ない六カケ敷字をお讀みなさるからの事、夫もお好の道なら宜しうございますが、親御さまが大そうお案じなすつて、愚老に其御病氣の愈る工夫は在るまいかのとお賴みサ。素より愚老は藥で病を愈す事は不得手だが、若旦那のやうな御病症には、別にひとつの法組がございますと、家傳の祕事をお咄しまうすと、大旦那がお歡びなすつて、何卒忰が女郎のひとりも買ッて見やうといふ了簡になれば夫で安心、物の入ることは些とも厭はないから、寧て居續の二晩と三晩もするやうに仕込んで下さいと被仰ぢやァございませんか。世間の親は息子が遊びに往くと言つて叱言をいふ處を、賴むから連れて往つて吳れろと被仰やうな結構な親御樣が、又とふたりありやァ爲ませんぜ。昔二十四孝の孟宗は、雪の中から竹の子さへ掘出したと言ふのに、親御へ孝行だと思召したら、お否でも一晩位の御辛坊は出來さうな物ぢやァありませんか。まァ欺されたと思つて往つて御覽なさい。一度味をしめると、堪へられた物ではございません。ノウ貴孃さ

いろは文庫　巻之五十一

第百一回

觀世音の奥山なる軒を竝べし水茶屋に、腰うち掛けたる二個連、ひとりは年齡廿二三、如何にも大家の若旦那と見ゆる人柄のよき好男子、名は瀧次郎、今ひとりの寸白とて、醫者を表に出しては居れど、匕を取つては葛根湯の盛方も些覺束なく、然れども江戸座の誹諧がすこしばかり出來るのと、落咄と聲色で座敷を持つが上手ゆゑ、夫で暮しを立て居る、世にいふお幇間醫者なるが、雁芋天窓を振立てながら、

寸「トキニ若旦那、何樣でげす此櫻の咲いた處は」

瀧「寔に滿開だチエ」

寸「爰でさへ此位だものを、兼て僕がお勸めまうす花街へ往つて御覽じまし、仲の町は一面に櫻が植込んであるのに、花の物言ふばかりなる美しいのが居竝んで、どれでも寄取見取に自由になると言ふのだから、實に人間界の樂は青樓一夕の遊に極りやすぜ。徐々往けば刻限も丁

是といふのが面倒な大小を差して居るからの事だ、町人になりやァ氣儘にどんな事でも出來るといふ了簡で、二百石を打捨て赤保を欠落サ。併し殿さまへ對しては恐入つた事と思ふ所から、天窓を剃丸めて、扨こそ鍔屋宗伴とは名告ります」ト過來方を物語れば、

喜「なる程夫で樣子が分解た。私も好事の癖があつて、刀劍器物の類を好みますが、御自分のやうに家迄捨てやうとは思ひません。併し當時鎌倉一番の鑒定者と言はれ、何不足なく好な道を樂しんで暮して居なさる事だから、貴所の身に取つては本望かは知らないが、武門においては餘り本意な譯でもありますまいから、何か一功立て、歸參の蔓に取付くやうに被成ては何樣であらうネ。」

宗「寔に御心切辱ない。私も折々お國の事を思ひ出して、アヽ濟まない事を爲た、第一は主君へ不忠元祖へ不孝と、今では大きに後悔をして居ますが、惡い病に取付かれて、何樣も振拔く事の出來ないには困ります。寧て忰でもあつたら、縱ひ五十石三十石でも、故主の御家來に願ひたい物だが、娘ばかりで夫も協ひません」ト嘆息しッヽ咄すうち、誂への鰻が出來たりとて女房が持出すにぞ、喜兵衞は軈て馳走に預り、食後には又餘談に及び、時を移して戻りしとぞ。

な事を爲ては濟まないと、さる人に堅く留められたから、飯より好な道具の賣買を止めたのだト言ふと、ナニお止めなさるに及びますものか、お屋敷の人にさへ咄さないければ誰も知る者はございません、是からお供をして、道具屋とさへ見るとお知らせ申しますから、思入お買ひなさいまして、其度毎に自己にも壹歩ヅツ下さいましト、宜い了簡の男で、夫から後は町へ出る度に、道具屋の前に往くと引張込むやうにして勸めるから、つひ買ひたくなつて、人の知らない金まうけを爲て居ると思ふうち、一年の勤番を半年餘りも勤めると、俄にお國から代りの人が來て、交代を仰付けられたから、不思議な事と憶ひながら、早々鎌倉を引拂ツて赤保へは歸ツたが、脛に疵持つ心地故、姑く病氣と披露して引籠つて居て見たが、作病構へて長くも居られず、出勤を爲た當日に、元老方へ屆けに往くと、別に叱言も言はれなんだが、貴樣は鎌倉が性に合はぬと見えて、兎角持病が差起る樣子だから、矢張赤保に居る方が無事であらうト言つて笑はれたときには、實に穴へも這入り度いやうで、扨は此譯がお國へ聞えて、交代をさせられたのかト閉口をして内へ歸り、其當分は道具の事も思ひ切つて見たが、生得好な道故に、是を久しく止めて居ると、實正の病氣が出さうだから、獨りつくぐ考へるに、今度の勤番をしくじつては、二度と再度鎌倉へ往く事はならず、此まゝ病氣でも出て死んではつまらないもの、

したが、是を御縁に又外品をもお願ひまうしたうございますから、少々の事は見切つても差上げますから、思召さまの處をお付け遊ばしましト言ふうちも、五助が氣を揉んで頻に袖を引張るから、迚も買ふ譯には往かず、然うかと言つて直を付けずにも別れにくいから、先で賣らないやうにと思つて、半分直壹歩三朱に付けッ放しに爲て二三間往き過ぎると、モシ〳〵ト跡から呼ぶから、萬一負られては大變だと、早足に往きかゝるのを追かけて來て、實に損のまゐる商ひでございますが、まだ口明も致しませんから差上げませうト、小柄を持ッて來て押付けるのを、然うなつては否とも言はれず、詮方なしに買取るのを五助が見て、ソレ御覧じまし、夫だからとう〳〵敵を脊負込んでお仕舞なすつたト、目に角を立て言ふから、ハテそんなに腹を立てるな、今日はお主に御馳走を爲るはト、近所の料理茶屋へ這入つて一盃呑みながら、扨五助、爾の氣ではつまらない物を買つたと思ふだらうが、此小柄は後藤祐乘の細工で、捨賣にして五兩、宜く往けば十兩にもなる代物を、壹歩三朱で賣るとは、實に盲目千人目明千人サ、併し此事は決して屋敷へ歸つて言ふまいぞト、金を壹歩遣ると、五助が歡んで、夫ぢやア貴君は商人の上前取を被成のでございますネ、そんな味い仕事を御ぞんじでお在なさるのを、何故敵の内だと目を塞いでお通りなさるのでございますと聞くから、イヤサ、帶刀を致す身分で、箇様

を眼を眠り通して歩かれるものかト言ふと、そんなら爰は片側町だから、右を見ずに左の泥溝の方を向いてお通んなさいト、自分が先へ立つて往くから、詮方なしに跡へついて、成丈店の方を向かないやうにして歩きながらも、腹の内では爰は小道具類を多分出して居る所だから、宜い物が隨分あるだらうと思ふと堪へられなくつて、五助の氣の付かないやうに、店の方をちよいちよいと見て歩くうち、小柄が一本ふいと目に付いたから、其店へ立ちかゝると、五助が驚いて、モシ旦那、爰は敵の内でございますのに、お立寄なすつてはなりませんト、手を取つて引摺にかゝるから、コレサ一軒位立寄つて見た迚も、買ひさへせねば宜いから、そんなに引張るなト、小さな聲にて五助をなだめ、彼目に付いた小柄を手に取つて見ると、地金が鐵で枯枝に梟が一羽とまつて居る圖サ。ちよいと見るとさつぱり見立のない代物だが、極時代があつて上作の家彫だから、捨賣にしても五兩、相手に寄ツては金一枚には物言はずなる品だが、何價と言ふだらうと聞と、三分二朱だと言ふから驚いたネ。扨々年中商賣に爲て居ながら、眼の利かない道具屋もある物だ、今にも仲間の道具屋で、目の明いた者が來ると、幵奴に買はれて錢まうけをされるのだが、可憐相に數へて遣らうか知らんと思つて居ると、道具屋の亭主が、如何さまでございませう、隨分出來も宜しうございます、お直段は極決着の處をまうしあげま

くなつてぶら〳〵と買ふ様になるかも知れないから、家來に言含めて置くが宜からうト、其比五助といふ極一國な親仁を飯焚に遣ツて居たのを呼近づけて、さて其方に些頼み度事があるが、自己にひとつの病があつて、道具さへ見ると買ひたくなつてならないのだが、夫を買つてはならない譯があるのだから、道具屋は此身の敵だと思つても、其店へ往き掛ると、例の病がきざして、頻に買ひたくなるには實に困るノサ、其處で大儀ながら、此後自己が町へ用向があつて往くときには、お主を供に連れて歩行から、道具屋の前に來たら、敵の內でございますと自己に氣を付けて、決して店先へ立寄らないやうに止めて呉れるが宜い。夫で自己の持病が直りさへすれば、藥代だと思つて、儞にも骨折賃を遣るから、隨分氣を付けて、放心物を買はないやうに爲て呉れろと、是から餘所へ往く度に、かの五助を召連れて出ると、這奴が骨折賃を貰はうと思ツてか、自己より四五間ヅツも先へ歩いて、道具屋とさへ言へば、天道干でも何でも構はず、敵の店がございます、お氣をお付け被成ましと、言はれる程猶見たいのを、目を塞いで通り拔けるので、其當分は我慢も出來ましたが、ある日芝邊へ參ツた歸り掛に、日蔭町へ通りかゝると、例の五助が、旦那こりやア大變な所へ參りました、門並敵の店ばかりだから、眼を眠つて、私の肩へつかまつてお歩きなさいましト言ふから、夫はとんだ所へ來たぢやアないか、此長い町

りの仰付けられとは言ひながら、古書畫の類を不相當の安直で買上げて差上げた樣子だが、必竟貴樣が其樣な事を致す故に、直段の高下などを御ぞんじ被成やうになつて、お大名にはお似合ひなされぬ鄙劣な事を被仰ことにもおし移ッて、萬一御同席さまなどお打寄の中で、右樣のお咄でも出ると、五萬八千石の御瑕瑾にもなる事だから、以來は屹度省愼つしやいと、大きに油を取られました」ト咄の中に女房が煎茶をこしらへて持つて出る。

第壹百回

宗「其後程すぎて、鎌倉勤番を仰付けられたに付いて、大星殿へ屆けに參つたら、一寸奥へ通る樣にとの事だから、何用かと思ふと、元老の被仰には、今度鎌倉へ勤番との事、結構な首尾合、隨分精勤をされるが宜い、併し貴樣を彼地へ遣したら、又例の癖がはじまらうと、夫が甚だ心配だが、先達も呉々申入れた通り、帶刀を致す身分で商人同樣な事を爲ては、世間へ聞えてもすまないから、必ず道具の賣買はさつしやるなト留釘をさゝれたから、鎌倉へ下つても好な道具を買ふ事が出來ず、然うすると又あいにくな物で、たま〳〵町へ出ると種々な物が目について、ぞく〳〵する程買ひたくなるから、こりやァ自分獨りで買ふまいと思つても、堪らな

判官

ゆらの助

君前小狼
雄古書画
を閲る

此三品の直段、どの位で求めたと思ふとあると、元老が私はとんと不案内でございますればとばかり答へられるから、お上では猶お鼻を高く遊ばして、偖は常々古畫なぞを好むやうに聞き及んだが、其處等の辨へのないといふは如何致した物だ、此品は出入の道具屋から求めたら、凡是々の直段とまうす處を、是々の直段で手に入れたから、餘程の掘出し物と思ふが何樣ぢやトあると、大星氏が容貌を改めて、是は御意ともぞんじません、都て直段の高下を論じますのは、商人等が致す事、お大名の御身にて、右樣の鄙しい事は仰られる物ではございません、御入用のある節には、矢張お出入の書畫屋から、相當の直段で御買上になりますれば、渠等も何程か利を得まして家業にもなりませうが、諸侯たる御身分で掘出し物を遊ばすやうでは、町家の者は立行きません、勿論尊君が御自身に道具屋へお出でも遊ばしますまい、是は何者に仰付けられてお求め被成ました、ト言はれて上でも御赤面遊ばしたが、お隱しなさる事にも往かず、服部右内に言付けて買はせたトあると、夫は以ての外の事でございます、重ねて箇樣な事は決して御無用に遊ばしましと、苦々しい貌で御異見をまうしあげ、御前を下るや否や元老が私を呼付けて、貴樣は常から道具屋の眞似をして、目の利かぬ町人をたぶらかし、掘出し物などと唱へて、内職同樣にするとの事だが、士官の身分でありながら怪しからぬ事だ、殊更此程殿よ

其處で赤保を出國爲た譯でありますが、其病根を知ッて居る人は、元老の大星氏ばかりかと思はれますノサ。」

喜「ハテネ、貴公に何も御持病のあるといふ咄も承らなんだが、何の御病氣で。」

宗「イエサ、例の道具好の病サ、夫も人のやうに道具を買集めて樂しむのなら仔細はないが、私のは誰に習ふともなく鑒定が上手になつて、道具屋にある品を見ても、中には急度十兩になる物だと思はれるのが、言直が五兩だの三兩だのといふ事があるから、つひ買つて置くと、果して夫に望人が出來て、思ふ通りの相場に賣れるから、何樣も面白くつて堪へられないノサ。所であるとき殿さまから、古書畫の類を尋ねて求めて來いと仰付けられたが、お上が又書畫の方は中々お目が肥えて被爲入から、爰でこそ何か掘出し物をして、流石は右内だとお譽めのお詞を頂かうと、諸方を探索に駈廻つた處が、折よく唐宋から明のはじめあたりの、極出來の宜い書畫を二三幅見付け出して、書畫屋仲間の買直段より、少し安いと思ふ位に買取つて差上たら、お上でも至極御意に入つて、格別骨を折つたらうと、御袴を頂戴爲たのは宜かつたが、殿樣がお歡びの餘りに大星氏をお召遊ばして、御自慢心でお見せなさると、元老は拜見して、是は結構なお品とばかり言つて下らうとするのを、お呼び留なすつて、何樣ぢや其方の目勘では、

喜「ナニ、老込んで意氣地はなしサ。」

宗「久しぶりのお出でだから、なんぞ御馳走を爲たいが、喜兵衛さんは御酒を呑らないから、穴鰻へ大串所を然う言つて遣ッて、お飯とでもするが宜い。其前に圍に丁度釜が掛けてあるから、一ぷく進げなせへ。」

喜「構つて下さるな。」

宗「ナニ、切手の貰ひ合せがあるから、夫丈の御馳走サ」ト言ふうち女房が薄茶を立つて持出で、口取の菓子など出す。

喜「是はお器とまうしお茶のお服合、寔に結構だ。今一ぷく頂戴致さう」ト茶を二杯飲んだるうへにて、「トキニ右内さん、ではない宗件大人、斯う言ふと異な事を聞くやうだが、御自分お國に居られた時には、二百石といふ祿を御頂戴で見れば、何も御不如意な譯とも思はれず、然うかと言つて上を怨む事もあるまいに、何で出國をなされたか、自己には一圓合點が往かない。お心易く致す中にお隱しなさる事もあるまい、御所存に寄つては、及ばずながら御歸參の道をも盡して見たい心底だが、何樣でございますネ」ト言はれて宗件は額を撫で、

宗「イヤモウお尋ねに預ッては赤面の仕合だが、實は持病が差重つて、急に武士が嫌になり、

したが、何分舊友の事故お假顏しく、俳名を手札に認め、一僕をも召連れず、極々忍んで參つたが、失禮ながら斯う見た處が結構なお住居で、御不自由もない御樣子、先々安堵致したが、御家内もお替りはござるまいな」ト言ふとき這方の一間より、女房おさめ、

さめ「オヤ、お珍しいお聲がなさいますネエ」ト襖を明けて立ち出づれば、

喜「是は／＼御内方、先御堅勝で。」

さめ「ハイ、貴君にも御機嫌よう。私もお國を出ましてから、お心易く爲た皆さんがお假顏くツて、毎度お噂ばかり致して居りましたが、御新造さんやお子さん方も御丈夫で被爲入ませうネエ。」

喜「ハイ、皆無事で、先達悴にも嫁を貰ひ、最う孫までが出來て、イヤハヤ賑か過ぎて困りますハヽヽヽ。」

さめ「オヤ、重さんが最うお爺さんにおなりのでございますかへ。速いものでございますネエ。私共が御國に居る時分迄は、竹馬だの凧だのと、隨分おいたの方でお在なすつたが、嘸立派な若旦那におなりでございましたらう。夫に就ても自分の年の寄つた事には氣が付きませんヨ。併が喜兵衛さんは些ともお變ん被成ませんネエ。」

下女「ハイ、私には讀めませんが、お名札をお出しなすつて、旦那がお宿なら御内々お目に懸りたいと被仰ますが、隨分立派なお武士さまでございます」ト言ひつゝ手札をさし出すを、宗件手に取り讀み下せば、矢間素曉と認めあるにぞ、

宗「ハテ妙な人が尋ねて來た。何に爲ろ這方へお通しまうすが宜い」ト言はれて下女は立つて往きしが、さア那方へとの案内につれて、入り來る一個の武士は年齡五十餘なるが、次の間に刀を閣き、

武「喜兵衛でござる、御免なさい」ト徐々として一間に通るを、宗件は見るよりも、

宗「イヤ、是は矢間氏、一別以來お替りもなく、御壯健の御樣子を見て、大慶にぞんじます。手狹の住居、さア〳〵ずつと御進み下さい。能く御尋ね下すつた」

喜「何樣でござる服部氏、先年貴所が赤保表を退身致されたのも、何の譯とも一向に分からず、兼々別して御懇意に致した拙者の事ゆゑ、實に心配にぞんじて、何處に何樣してござる事やらとお案じまうして居るうち、此度御當地へ勤番を仰付けられ、先々月到着致した處、ふと其許が當所に住つて居られる事を聞出した故、久々にて御面會をとはぞんじたが、出國せられた貴所であれば、お尋ねまうすも主君へ對して憚のない譯でもないと、少し見合せては居ま

いろは文庫　巻之五十

第九十九回

花の雲鐘は上野か淺草かと詠ぜし山を向うに見、不忍の池を前に受けて、三間間口の格子作り、廛には小道具書畫の掛物品々を餝り立て、最手綺麗に暮せしは、是なん鍔屋宗件とて、其比聞えし鑒定者なりけり。

這宗件といへる者は、基は鹽谷家普代の家來、前名服部右内と喚ばれ、高二百石賜りし身が退身なして、此樣なる市人となりたる仔細、次の本文に綴るを見て、一奇人なるを味ひ知るべし。

或とき件の宗件が、おのれの居間に獨り在りて、小道具の入りたる箱を膝の廻りに取りひろげ、光澤布にて念頃におし拭ひなど爲て居る處へ、一個の下女が遽しく次の間より顏を出し、

下女「旦那樣、お客さまが被爲入ました。」

宗「誰殿だかお名前をお聞きまうしたか。」

姿となり、義士等の後世を弔はんと、諸國の靈場を拜しつゝ、行脚する事年を經しが、後は何地へ至りけん、終る所を知らずといふ。是を片岡が僕元助なりといふ說もあれど最訝し。元助が傳は既に前輯にあらはしたる元助稻荷の奇談あり。是も一個の忠僕にて、是を甚三郎に競ぶるときは、何れか勝り、何れか劣らん。實や勇將の下に弱卒なしと、四十餘人の義士あれば、その下に又義僕有つて、末世の美談となれる事、和漢未曾有の物語になん。其比誰が吟ぜし句にや、

鑓梅や雪をつらぬく花の意地

這もまた義士等がうへを詠じたるよし、最面白き句作なる故因に記しおくといふ。

らば潔く一軍して討死せんと、寺の大門をうち叩き、仔細を演べて明けよと言へども、心狭き仕僧なるか、または渠等の打扮を見て恐懼きたるやらん、拒みて門を明けざるにぞ、氣速なる壯士等が、然あらば門を打破らんと、例の榔槌を振りあげて、門の扉を打たんとするを、大星急に推しとゞめ、無法の振舞すべからずとて、皆門前に居竝びつゝ、列を直して控ゆる折しも、かの下奴なる甚三郎が何處にてか買求めけん、二籠の蜜柑をば天秤にして荷ひ來り、諫六は言ふに及ばず、四十餘人の面々に、各是を分與ふるにぞ、何れも咽の乾きし事故、時に取ッての珍味なりと、大星をはじめとして、皆その卽智を感心なし、譽めざる者はなかりしとぞ。偖て義士等は稍暫く這門前に屯せしが、敵押寄する體もあらねば、何時までか爰にあらんと、是より人數を三隊に備へ、泉岳寺へと引上ぐるにぞ、甚三郎も跡に附いて高名和迄見送りつゝ、泉岳寺の門前にて主人をはじめ其外にも、日比目を懸られたる人には最念頃に暇を告げ、涙にくれて別れしは、又有難き義僕なりけり。然れども甚三郎は主人の先途を見屆けんと思へば、鎌倉の地を離れず、如何成行き給ふやらんと餘所ながら窺ひしに、義士等は四家へお預けとなり、翌年切腹仰付けられ、骸は都て泉岳寺へ同穴に埋葬せられし、此趣を聞くよりも、兼て覺期の甚三郎も、又今更に思はれて、愁傷限りなかりしが、終に髻を切捨てつゝ、身は墨染の

言はれて詮方なく、仰山らしく額を巻きたる白布を取退れば、昨夜甚三が打付けたる雪礫の其中に、小石にても交り居たるか、少し眉間を擂破りしに、即功紙をば張付けたるにぞ、検使は可笑しく思ひながらも、渠の口の憎ければ、かの即功紙を會釋もなくめり〳〵と剥さるゝ痛さに顔をしかめながらも、否とも言はれず堪へて居るを、検使はつく〴〵打見遣りて、「半弓で射られながら、その矢が眉間へ立たぬとは、貴殿は餘程の石天窓、是斗の少疵に眼が暗み、泥溝のなかへ落ちるとは、扨々足元の惡いお人、殊更主人の大事と思はゞ、着類は泥に塗れやうとも、其儘駈付けて往かれさうな物を、長屋へ歸つて着替へて出るとは、餘りと言へば優長千萬、事を巧に言はれやうより、寐て居て知らぬと言つた方が、まだしも有體で宜うござらう」ト言はれて左仲はなまなかに、恥辱を塗隠さんとして、反ッて検使に恥しめられ、よしなき事を言うたりと、後悔すれども詮術なく、是もおなじく赤面して迯ぐるがごとく退きしとぞ。却て義黨の面々は思ひの儘に本意を遂げ、高の屋敷の玄關前に齊しく人數を纏めつゝ、一個々々に名を呼びて、爰に都ての人別を改め、四十餘人が一同に表門より引拂ふ比は、夜はほの〴〵としらみ渡りて、昨日の空のみか、心も晴るゝ東雲の紫立ちし曙に、最勇しく引上ぐるにも、若や讐の縁者より討隊の人數の對はんかと、先無縁寺まで退きつゝ、爰の寺内に屯なし、敵きた

は、よく〳〵寐坊な人達と見える」ト冷笑はれて一句も出でず、赤面なしつゝ退けば、今の恥辱を言ひくろめんと、例の左仲が進み出で、

左「只今の面々は何れも臆病者なれば論ずるに及びませぬ。併し當屋敷の者は皆那様な白者ばかりかと御推察有つては殘念に心得ます。私抔は非番で長屋に居りましたが、狼藉者と聞きますより、一番に伐ッて出で、敵兩人に渡り合ひ、彼等を難なく追ひまくり、一息吐いて居る處を、半弓にて眉間を射られ、致命所なれば眼眩きて、傍の泥溝へ轉び落ち、這上りて働かんにも、惣身泥になりました故、奈何とも致し方なく、是非なく長屋へ歸りまして、衣裝を着替へて又駈出して見ましたら、彼等は速くも逃去りまして、邸に敵は一人も居りましなんだ。那時泥にまみれませずば、相手の四五人も戰ッて取り、私も討死を致しまして、死出三途までも主人の供に立ちませうものを、よく〳〵武運に盡果てましたものと思はれます。」

役「夫は然こそ御無念で御座らう。矢疵とあれば定めて深疵、見分を致さうから近く寄ッてお見せなされへ」ト言はれてギヨツトしたりしが、

左「イヤ、御覧下さる程の疵でもございません。」

役「ハテ、疵の淺深は兎も角も、見分致すが檢使の役目、是非に疵所をお見せなされ」ト再び

と一聲さけびもあへず、膽を潰しつ仰さまに邸の裡へ轉び落ちたる這人は、是別人ならず、例の松原左仲なり。此者常には世才ありて、宜く師直の心に協ひ、出頭竝びなきのみか、日頃間者を入置いて、義士等がうへを探索せんとて、心を碎きし程もなく、卒討入といふに及びて、忽地心の臆したりけん、主人の大事を餘所に見て、身を逃れんとは爲たるなるべし。斯てその次の日に官府よりの沙汰として、檢使の役人入來り、師直の骸をはじめ家中の手負死人をば、一一に見分なすに、彼小林平八郎が如く、其身に數箇所の疵を被り、相手にも手を負せしならん、持つたる刄は血に染みながら、仆れて死せしは天晴なれど、中には薄手ひとつもなく、身は重役にてありながら、無疵であるも多かりしを、檢使の役人うち見遣りて、

役「各位には御主人の斯る最期の際に臨み、小疵ひとつ請けられた體も見えぬが、奈何の譯でござるな。」

師直家來「へイ、私共は昨夜は非番でございました故、よく寐込んで居りましたので、始は一向にぞんじませず、後に聞付て駈付けましたが、最早狼藉者は逃去つた跡で、甚だ殘念にぞんじました。」

役「是は又怪しからぬ。然のみ廣い邸とも見請けぬに、是程の騷動を寐て居られて知らぬと

第九十八囘

却て討入の夜にいたり、約束のごとく甚三郎は主人の鎗を引かつぎて、高の門前にいたる程に、或は屋根に繩梯子を掛け登越ゆる者もあり、又は門の戸うち破りて、勇み進んで込入るありさま、最目ざましく潔きを、目前見る甚三郎が、飛立つばかり羨しけれど、門の裡へは一寸も足踏入るゝ事協はねば、拳を握り齒を喰ひしばりて、須臾徨み居る程に、屋敷の裡には忽地に、泣叫ぶ聲討合ふ物音、さながら鼎の如く、最すさましく聞ゆるにぞ、さてこそ事の始りたり、旦那方のお働きを、一目なりともみまほしと、邸のぐるりを打巡り、伸上りては覗き見れども、四方は高塀外長屋に、最嚴重に構へたれば、爭でか裡の見透さるべき。諺にいふ、沓を隔て痒きを搔くの心地はすれど、詮術なさに外面より裡を白眼で立つたる折しも、塀を乘越え邸より迯出でんとする武士あり。雪の明に甚三郎は、速くも夫と見出して、腹のうちに思ふやう這奴かならず高の家來、臆病未練の心より逃れ去らんとするならん、渠も讐の片割なるをみすみす夫と知りながら、取迯さんは殘念なり、術こそあれと點頭つゝ、ありあふ雪を引摑み、礫の如く握堅めて、窺ひ寄りつゝ打付くる、覗ひ違はず彼武士の眉間に發矢とうち當てられ、叫

でお連れなさい。」
諫「貴殿が左樣被仰なら召連れると致さうか。」
只「宜い段ではない、我々が急度請合つた。」
諫「此うへは御兩所のお辭に任せ、甚三郎、爾を門まで召連れるぞ。宜くお禮を申上げろ。」
甚「へイ〳〵、誠にはや有難い仕合でございます。そして凡何日頃の思召立でございます。」
諫「先明後日のつもりだ。」
甚「へゝエ、夫ではお間もない事でございますから、些とお宿の取片付でも致しませうか。」
諫「ナニサ、こんな諸道具は此儘捨置いても宜いはサ。併し立退いた跡の見苦しくないやうには爲て置くがよからう。トキニ御兩所、折角の御出だから、一獻さし出したい處だが、宿で呑んだ處では氣も浮かず、殊には御同然に、今日あつて明後日はあるかないか知れない命だから、何と遊び納に何處ぞへ往ッて、浮世めいた酒を呑むと爲ては何樣であらうネ。」
安「又例の婦多川か。」
只「恍惚られるのを聞くも難義だが、是も突合納だらうから、何處でも構はない、往くと爲やう」ト頓て三人うち連立ち、婦多川さして出行きしは、小露が許と察しられたり。

諫「イヤモウ、聞けば聞く程健氣な心底、過分には思へども、爰を宜く聞分けよ、主君の讐を報ずるに、嬶隷を召連れたとあつては、鹽谷の家にはよく〳〵人がないかと、世間の者に沙汰せられ、我々の恥辱ばかりか、亡君のお名まで出るやうな譯だから、元老大星殿でさへ家來は一個もお連れなさらぬのを、我等風情が供をつれて參られやう筈はない。爰の道理を考へて、故なく暇を取り、國へ歸るとも、又は當所に居るとも、何れにも身の有附を定めて呉れろ」ト言はれて須臾甚三郎は首を傾け思案せしが、

甚「なる程下郎の分際で大事の御場所へ參ッては、お殿さまのお名前に拘はる事でございましては、推してもお願ひ申されませんから、お暇を戴きますでもございませうが、是迄に思ひ込んだ事でございますから、責めて敵の御門前迄お供にお連れなされて下さいまし、左樣致すと旦那さま方のお荷物でも引負いでまゐりますと、縱ひ御先途は見屆けませんでも、本望にぞんじます。其替りお屋敷へは一足も踏込みませず、御門前から直にお暇を頂きますから、何卒お慈悲お情に、お召連れ被成て下さいまし」ト思ひ入つたる一言の、なか〳〵止まる氣色にあらねば、如何はせんと諫六も思案にあぐみて見ゆるにぞ、側から安平進み出で、

安「何さま渠が言ふ處、ひとつとして無理とは聞えぬ。苦しうござらぬ、望みの通り門前ま

諫「然らば宜いから近く參れ」ト邊へ呼寄せ言葉を密め、「扨々倆は仕合者だぞ。親子兄弟にも決して言はぬ一大事なれど、其方が赤心を愛て、申聞せよとある御兩所の仰ゆゑ。泄すまじき密事ながら、今其方へ明し聞せる。實は最前奥州へ參ると言うたは僞、全くは御主君の仇高殿の御館へ、我々甲乙推參して、お首を申受けんと、去年以來種々さまぐ\に心を勞したが、時至りてはや討入も遠からず、然すれば家來を何時までも召仕ッて居られぬ故、下奴には似合はぬ古今無類の忠義者と知りながら、心にもない雜言過言、無理の限りを言つたのも、何卒術よく暇を出し、後安く本望を遂げたいばかりの事だから、必ず惡く合點をせず、暇を取つて下ッて呉れ」ト言ふを聞くより甚三郎は、躍り上ッて大きに歡び、

甚「モシ旦那さま、然うなくては協ひますまい。私も幼少の時から、お側に居て、御氣質も知つて居りますが、殿さまの御無念を餘所にして、浪人爲たから宜いはト思召すやうな貴君とは存じません。斯うして被爲入には、何か深い御思案のある事と思ひましたが、今の御樣子を承つて、日頃疑ッた此胸が日本晴が致しました。其お咄を聞くうへは、猶の事お暇は戴かれません、何卒下郎奴もお供にお連れなすつて下さいまし、お役には立ちますまいが、責めては堀の埋艸にでもなつて、此年頃の御恩報じが致したうございます。」

へ泄すまい爲ばかり、然るを御家來甚三郎が忠心義膽、人の心は表面から見えぬものとは言ひながら、切腹をして死なうとするのが、嘘や僞に出來るものではない。其誠心を見たうへは、明したからと言つて、他人に泄す樣なことを爲やう筈がないと思ふが、武林は何と聞かつしやる。」

只「是は堀部の言はれる處至極の高論と思はれる。跡で元老にお咄があつた處が、大星殿迚も、夫は明したのが惡かつたと言はれは爲まい。若又濟まぬとあつたなら、我々兩人が勸めて言はせましたと、申披きは請合ッてするから、打明けてお仕廻なせへ。」

諫「何さま御兩所が左程までに被仰つて下さるうへは。」

安「ハテサ、最う明後日となつて居るものを、べん〳〵と長評議を爲ては居られない。早く爰へ呼出して、那男にも安心をさせてお遣んなさるが宜い」ト素より氣速き兩人が右左より勸むるにぞ、諫六も納得して、軈て甚三郎を呼出し、

諫「其方に極密々にて申聞せる事があるから、若も門邊に人でも參りはせぬか、能く見廻ッて來るが宜い」ト言はれて甚三は裏表の口を得と見て、戸締をして一間に來り、

甚「誰もお氣遣ひな者は參りません。」

安「ヨシ〳〵其處は兩個で宜樣に咄し合をするから、氣遣はぬが宜い」

諌「何にしろ色々御相談の致したい別儀もあれば、御兩所共にまァ奧へ」

安「何さま端近で咄もなるまい。しからば武林、御同道まうさうか」ト言ひつゝ三人座敷へ通れば、「參り早々彼是の事で取紛れ、御挨拶も申さなんだが、先刻は態々御紙面、仰の通り一件も最早明後日となれば、其前に御一會いたして、快く一盃を傾けたい存寄ゆゑ、武林を引張つて來た譯サ」

諌「此雪中と云ひ、殊に只七殿まで御同伴とは、御厚志千萬辱い。其明後日になつたに就て、家來に暇を遣し、心殘りのないやうにして、名殘の一獻を催さうと存じた處で右の譯だから、是には實に當惑サ。何卒各方の御はからひで、術よく出して遣る御賢慮はあるまいか」

只「迚もお咄の樣子では、一通りの事で暇を取らうとは申しますまい。ノウ堀部」

安「然ればサ、此身も色々考へて居るが、こりやァ寧一大事を明して聞せるより他はあるまいヨ」

諌「エ、夫では神文の面に」

安「ハテサ、親兄弟たりとも決して他言は爲まいといふ神文を取交したも、かの一大事を他

只七は不覺に催す泪を
サ」トありし次第を物語れば、兩個は聞いて感じ入つたる夫が中にも、
ば、二王の樣なる拳にて拂ひ退けッヽ、聲くもらせ、
只「實にそりやァ感心な男だ。夫なら然うとはじめから言ひなされば、手ひどい事は爲なん
だ物を、一圖に憎い奴と思ッたから、力任せに投出した故、何處ぞ打ちは爲なんだか、可愛さう
に痛かつたらう。」
安「全體此方共が、譯も聞糺さずに手荒な事を致したのが惡かつた」ト簀の子の下に投付け
られ、蹲踞たる甚三郎を兩人にて助起し、種々にいたはりつゝ麁忽を詫などする程に、
甚「是はく御勿體ない、何處も痛みは致しませんから、何卒私にはお構ひなく、先お座
敷へお通り被成て下さいまし。」
只「然らば座敷へ參らうが、夫に就ても儞の心底、近松氏から承つて、我々兩人とも、實
もつて泪を落して感心致した。何れにも近松と談合して、儞の心に落付くやうに取計つて遣す
から、かならず短氣な事を致すまいぞ。」
甚「へイく有難うございます。旦那樣方のお執成で、何卒一生涯旦那のお側に居られます
やうにお願ひ申上げます。」

第九十七囘

案下近松諫六は、頻にはやる兩人を稍〻にして推鎭め、
諫「トキニ御兩所、手前の召仕を譽めるも如何だが、此者は實に奇體の忠僕だから、かならず手荒な事をして下さるな」ト言へども只七は合點せず、
只「近松、貴公は異な事を云ッた物だ。家來が主人に刄物を持ッて手對をするのを、忠義だの忠信だのと譽めさつしやるのは、一圓解せない咄のやうだが、堀部、其許は何と思はつしやる。」
安「我等にもとんと分解ないが、何か深い譯があるとの事だから、夫を聞いたら腹に落ちる事もあるだらう、ノウ近松。」
諫「然ればサ、今の樣子を脇から見たら、此身に手對を爲て居るやうに思ひなさるのも無理はないが、實は箇樣〻〻云〻の譯で、腹を切らうとするのを、止めやうとして組合ッて居たの

いろは文庫第十七編序

戯墨の机に頬杖突きて、日くらし硯に對ひつゝ、こゝろに移り行くまゝの、よしなし事を綴るといへど、かのつれ〴〵の法師めけど、所願皆妄想なりと開悟なすべきやうもあらねば、下戸ならぬこそをのこはよけれと、言ふ語を只管あまんじて、呑む刻限になる頃は、夕魚賣の聲耳をさへぎり、杉葉立てたる門へなん、人走らする便宜もがなと、坐なる事胸に浮めば、玉の巵そこはかと、筆に憶ひを凝らすにいたらず。然るをはる〴〵浪花より、書肆の來りて嗣輯を請ふにぞ、今半醉のちらつく眼をもて、此端書を記すになん。

魚鬻く夕聲の

郭公より待るゝ頃

爲永春水演

襟首つかんで忽地に、簀の子の下へ投出すを、跡より入來る安平が、

安「何か仔細は知らねども、主人に刄向ふ不屆者、手は見せぬぞ」ト駈寄れば、

只「イヤ其許の手は借りぬ、此只七が新身の切味、振舞呉れん」ト立かゝりし、此形勢を見るよりも、肝を潰せし諫六が、

諫「アヽコレ御兩所早まられな。是には深き譯あるを」ト言ふをも聞かず兩人が刀の柄に手を掛けて、最も危く見えにけり。此をさまりは如何ならん、开は次の卷を見て知らん。

りしが、筆を止めて卷納め、嚮に貰ひし十兩に、我が手殘しをせし金を取出しツヽ一つにして、今認めたる一通と倶に傍にさし閣きつゝ、かの脇差を手に取りて再三度おしいたゞきしが、忽地すらりと拔きはなし、諸肌脫ぐよと見る間もなく、腹を斫らんとするありさまに、膽を潰せし諫六が、

諫「ヤレ待て甚三、速まるな」ト言ひつゝ障子を蹴開きて、躍入りツヽ、甚三郎が刄持つ手を取りとめて、「這は物にばし狂へるか、何故あつての生害ぞ」ト言へど這方は必死の勢、

甚「覺悟究めた上からは、許して死して下さりませ。」

諫「這は聞分なし甚三郎、死でも事は濟むべきに」ト禁れど更に聞入れず。素より渠は在所にて小角力のひとつも取りて、力量勝れし者なるが、死力を極めてもがく事ゆゑ、流石の諫六もてあまして、須臾揉合ひ居る折から、蓑と笠とに身を堅めて、かの武林只七と、跡に續て堀部安平、雪を踏分け入來り、兩人戶口に彳みて、

兩人「近松氏お宿か」ト言へども內には回答もなく、何事やらんどさくさと物音するに訝りて、案內もなく內に入り、見れば主人と下部とが、白刄を振りひらめかしツヽ、挑み爭ふありさまに、先に進みし只七が物に堪へぬ氣速者、會釋もなさず駈上りて、有無をも言はず甚三郎が

き者を手に懸るのも刀の穢れ、きり〳〵出て往きをらぬか、面を見るさへ忌はしい」ト言ひつゝ立つて甚三郎が襟がみ摑んで引起し、勝手の方へ突遣りつゝ、以前の金と脇差をも渠が邊へ投與へ、隔の襖を〆切れば、不便やな甚三郎は、突出されし儘平仆して、聲を忍びし男泣き、須臾涙にくれけるが、何思ひけん涙をはらひ、與へられたる脇差と金を諸手に携へツヽ、すご〳〵として身を起し、その身の部屋へ赴く體を、襖の透より諫六は見送り果て嘆息なし、輕き者には珍しき適れ得がたき忠義の魂、夫と知りつゝ無義道に是を非に曲げて追出すを、嘸や無慈悲な主人ぞと、怨みもなさん歎きもせん、是みな餘義なき事にして、我も主君の御爲に盡す忠義の故なるを、我がなき後に樣子を聞かば、今の恨も晴れやせん、毫散ほども越度なき家來をとらへて種々と、心にもなき雜言過言、許して呉れよ甚三郎と、今まで堪へし溜涙、瞼を餘りてはら〳〵と膝に落つるを拂ひもあへず、獨り歎きに沈みしが、ふつと氣がつき涙をとゞめ、然るにてもあの甚三郎、力を落してその身の部屋に至りし樣子に見受けしが、其後何の音沙汰なきは、思ひあきらめ出行きしか、夫に就ても何とやら胸騷ぎのせらるゝは、心ならずと身を起し、靜に襖をおし開きて、足を爪立てひそやかに男部屋の口にいたり、破れ障子の透間より内の樣子をさし覗けば、甚三郎は持合せし塵紙の皺おし伸して、硯引寄せ何やらん書認めて居た

諫「背かずば暇を遣るとまうしたら、何故畏つて出て往かぬ。」

甚「さア、其事に就きましてお願ひ申しますのでございますれば、何卒御慈悲お情にお暇のことばかりは。」

諫「無言れ這奴が、主人の言付を用ひず、我意をのみ申募る憎い下郎奴、武士が一旦暇を遣ると言出したからは、跡へは引かぬ。まだも辭に背くなら、手は見せぬぞ」ト睨へつゝ、刀引寄せ膝立直せば、此時迄も甚三郎は只ひれふして居たりしが、腹を定めて容貌を改め、

甚「是程お詫を申上げてもお聞入れがございませねば、據ございません。今更旦那樣の御意をそこなつたと申して、國許へ參りましても、何面目に親仁に顏が合されませう。迚も此世にある甲斐もない私、せめては旦那さまのお手討になりますれば、死ぬとも本望でございます。其お刀ですつぱりと、さア遊ばして下さいまし」ト首さし延せし覺悟の體に、諫六素より伐る氣にあらねど、何と言うても聞入れねば、おどしてなりと術をよく下げて遣らんと思ひし故、刀を取つてひけらかせしに、案に違ひし渠が氣色に、いよ〳〵困り果てたりしが、猶も心を鬼にして、

諫「迚も斫得は爲まいと思ひ、主人に對つて其難題、許しがたき奴なれど、犬畜生にも齊し

て主人をすごすの、若其上にも暮しがつかずば、江州の在所へ參れ、養つて遣らうのと、主人へ對して不禮千萬。浪人しても鹽谷の家來、下郎ごときに養はれて、命をつなぐ者と思ふか。常から儞は出過者、主人を主人と思はぬ仕方、日比心に慊はねど、年來遣つたよしみを思ひ、是迄は勘辨も爲たが、最う片時も用捨はならぬ。たつた今出て參れ」ト常に變りし主人の辭に、いよ〳〵駭く甚三郎が、疊に額を擂り付けて、

甚「モシ旦那さま、段々の御立腹、寔に恐入りまして申譯もございませんが、お買物の手殘しを致したのも、全く惡氣ではございませず、夫を元手に貴君樣をすごさうと申したのも、何樣がなしてお側をば離れまいとぞんじまする心の餘りで、不躾な事と思ひながら、心底を包まずに申上げたので、是とまうすが幼少の時分から、お側に居つたお心易立が過ぎました故とぞんじますれば、どの樣なお叱りに預りましても、一言の申拔きもございません。此上は心を入替へまして、何事に寄らず旦那さまの仰は少しでも背きますまいから、何卒御慈悲に是迄の通り、お遣ひ被成て下さいまし」

諫「夫ではいよ〳〵主人の辭は背かぬと申すか」

甚「へい〳〵決して背きは致しません」

ません様にいたしませう。國を出ます時から御恩を請けた旦那様、私の命のあらん限りはお側を離れず、御先途を見屆けろと、親仁に呉々申付けられましたのを、今更お暇になつたとまうして、どの面さげて在所へ歸られませう。お脇差やお金は有難いと申上げたうございますが、お慈悲が反てお恨しうぞんじます」ト心の眞うち明けつゝ、涙を流して演べたるは、又有がたき忠僕なりけり。

第九十六回

つく〴〵聞いて諫六は、武士も及ばぬ渠が心底。甲斐なき主人を斯くまでに、思うてくれる深切は、忘れは置かぬ辱ないと、思へば涙せきあげて胸うちせまれば姑くは答も做さで居たりしが、然れども近きに討入と、既に覺悟を極めしうへは、不便ながらも暇をば取らせずしては愜ひがたきに、心弱くてなるまじと、氣色を變へつゝ聲荒らげ、

諫「コレ甚三郎、何とまうす。主人が他國致すについて、入用のない家來ゆゑ、些少ながらも金子等を遣して、暇をくれるとまうしたら、有難いと一禮いたして、早速下宿もすべき筈を、金も脇差も有難くない、是迄買物の上まへをはねて、くすね溜めた金を元手にして、商ひを爲

ざいますけれども、そんな穢びれた事をまうすのは御嫌な御氣性で被爲入ますから、御止めまうしては御意に障るとぞんじまして、二升のお代は頂いて置いて、內證で五合か三合の儉約を致して置く事もございましたし、其外お肴の樣な物に致しましても、萬事おむだになる事は私の取計で、手殘しを致して置きましたのに、御用の間に草鞋を造つて賣りました錢を退けて置きましたのが、塵も積れば山とやら、何ぞのお役に立たうかと、是丈溜めて置きました。箇樣に申上げますと、何樣やら旦那樣のお目をかすめて、陰くらい事でも致したやうに思召しませうが、最初から纔の端多錢をも帳面に留めて置きましたから、御覽遊ばせば御疑念も晴れませうか。扨此金を元手に致しまして、青菜小菜を賣りましても、その日の暮しの出來る位の事は、儲のないことはございますまい。若夫ともにお暮しがつかないときは、奥州なんぞへ被爲入程なら、私の在所の江州へお供を致ます。在所には親仁も達者で居りまして、疲百姓ではございますが、五反や八反の田地はございますから、味い物さへ召しあがるまいと思召せば、貴君を一個位はどんなに致してもお養ひまうしますから、他國へお出でなさる事はお止に被成方が宜しうございませう。併し斯うまうしあげても、是非お出で被成ねばならぬ譯なら、私もお供にお連遊ばしまし。其替りにはどんな眞似でも致して、一錢でも旦那さまの御厄介になり

なせしと思しく、金十兩に取添へて脇差一腰取らするを、甚三郎は手にだもふれず、忙れ果てつゝ主人の貌を須臾見つめて居たりしが、

甚「モシ旦那さま、夫は貴君のお辭ではございますが、下郎奴には解せませぬ。私も永くおそばに居りますが、つひぞ是まで奥州筋に御親類やお知己のあるとまうすお噂も承りませんが、此鎌倉でさへ今日のお暮しが被成かねます程の處を、見ず知らずの奥州の果なんぞへお出でなすつたとまうして、何樣なりますものか。夫とも他に思召でもあつての事なら兎も角も、只お暮しの出來かねるばかりの譯なら、憚ながら私が此上身を粉にいたしても、貴方お一個は御不自由のないやうに致しませう。一寸お目に懸けたいものがございますから、御免下さいまし」ト言ひながら、其身の部屋より手箱を一ツ持來り、其中より一冊の帳面と、紙に包みし金を取出し、「爰に金が五兩あまりございます、トサ箇樣にばかりまうしたら、下郎の分際で、何で金子を持つて居ると、御不審にも思召しませうが、是は私のではございません。皆旦那樣のお金でございます。其譯は是迄御客さまなどがございます節、御酒や御肴をおとり被成ますのに、壹升五合あつたら宜からうとぞんじますのも、二升買へと被仰ます、扨其殘つた御酒を、翌日になつても召しあがる事がないと、味が變つて、酒しほにも遣へなくなります事がご

す」
諫「ナニサ、深く心配をする事はない。その證據は、此頃では一向那方へ往かぬのも、大かた儞も考へて居るであらう。其うへ此身も遠からぬうち旅へ立つ積だから、小露の事などは思ひ絶えて居るのだ」
甚「ヘヽエ、旅立を被成ますとは、夫は何方へ」
諫「然ればサ、此事は儞にもとつくりと言つて聞せやうと思つて居たが、序がないので言後れたが、譬にもいふ坐して喰へば山も虚しとやら、この身も永々の浪人暮し、少しの貯もあつたのも、大方は遣ひ減し、此儘放心々々爲て居ては、主従二個の腮も干上る道理だから、種種考へたうへで、急に奥州へ往く積だが、夫に就ては榮燿らしく、家來まで連れては往かれないから、儞には暇を遣す積だ。國許を立退いてからは、取別浪人暮しの不自由な所を、種々苦勞をして奉公を致して呉れたのだから、何の樣にも爲て遣したいのだが、知ッての通りの不如意ゆゑ、何事も心に任せぬ。爰に金が十兩あるから、不足ではあらうが、是を元手の足にして、なになりと渡世を致して呉れろ。今別れては又逢れるやら逢はれぬやら、再會の程もはかられねば、差古しではあるけれど、是を儞に遣すから、記念とも見て呉れるが宜い」ト兼て準備を

諫「オヽ甚三郎か、大儀々々。堀部氏は在宿であつたか。」

甚「へイ、お宿でございましたが、何れ這方から參つてお咄をするから、別段お返事は遣さらぬと被仰ました。」

諫「よし〳〵、夫で譯つた。何にしても此雪に嘸寒かつたらう。酒の殘があるから、一盃と言ひたいのだが、貴樣は下戸だから、殘つた肴で飯でも喰ふが宜い。」

甚「へイ、有難うございます。まだ欲しくございませんから、晩程頂きませう」ト言ひつゝ取散したる酒肴を片付けて、再び一間に入來り、何やら言度事あるを言ひかねて居る風情にて、手をもじ〳〵と爲て居たりしが、思ひ切つて小膝を進め、

甚「エ、モシ旦那さま、斯うまうしましたら異なことを聞くと思しめすでもございませうが、貴方は那小露とか申す女中を、眞實宜いとおぼしめしますか。」

諫「アハヽヽヽヽ何を眞顏になつて言ふかとおもへば、妙を事を聞くではないか。那はほんの當座の慰み、氣晴しの爲に酒の相手に呼ぶばかりサ。」

甚「左樣なら宜しうございますが、若もあんな者に深くおはまり被成ますと、果はお身の破滅にもならうかとお案じまうしますから、入らざる差出たやうなれど、伺ひますのでございま

もうしろめだし、おなじくは遠國へ赴く振にて、體をよく別を做すにしくはなしと、斯の如くは言ひ出せしなり。果して諫六が本望を遂げ、後に切腹なせしと聞き、小露は駭き悲しみしかど、猶唄女を止めもせず、又他の客に枕を重ね、後は如何なる夫か持ちけん、終る所を知らずとぞ。素より浮氣を常とする歌妓なんどの境界にては、罪となすべき事にもあるまじ。然ればまた下奴甚三郎は、堀部方へ使に行けとの主人の辭に默止がたく、雪の道を厭ひなく、本庄さして赴きしが、留守の樣子の心に懸れば、往きも戻りも足を早めて、頻に道を急ぎしゆゑ、喜八が迎ひに來らぬ以前に立歸りつゝ窺ふに、奥には小露と主人とが、何事やらんしめやかにうち語へる體なる故、獨りつく〴〵思ふやう、旦那も壯の歳なるに、奥樣とてもお在なされず、稀には少しのお遊樂も被成ずばお氣も晴れまい、堀部さまの御返事も、急ぐ事ではないとあれば、今何やらんお話最中、お邪魔をするでもあるまいと、粹を通して甚三郎は、竊に自己が部屋に入り、草鞋作つて居る程に、姑くあつて喜八が來り、小露を連れて歸りし體ゆゑ、甚三郎は胸撫でおろし、ヤレ〳〵嬉しや、那奴等が今日は旦那を誘ひ出さず、お内ばかりで濟みしかと、歡びながら部屋を立出で、

甚「へイ旦那さま、只今歸りました。」

いろは文庫　巻之四十八

第九十五回

什麼近松諫六は、鹽谷家繁昌の其頃は、一藩にても指を折らるゝ財主にてありしかば、浪々の後までも貯の金尠からず。然れば同志の面々の困窮なせし輩には、財を分ちて甲乙と助けし者も多かりしが、諫六は過ぎし頃ふと朋友の勸めにより、婦多川なる八幡へ參詣なせしが喰付となり、例の小露に馴染めしに、素より金には乏しからず、其うへ今にも時至らば、命を捨てる覺悟の身にて、永くも居らぬ浮世なるを、一日なりと快く遊んで死ぬが得と思へば、金銀にいとめを付けず、頻に小露を寵愛なすにぞ、男が宜うて金持で、其處に情のある人と、彼ざれ唄にも言ふごとく、渠は一個の美男子なるに、金銀の遣振にきたなげなる事をせざれば、小露も大事の客と思へば、浮氣ならずはもてなせど、命を懸けてといふほどに深く契りし和合にもあらず。諫六も斯とは知れど、正直正路の生付ゆゑ、假初ながら二年越し馴親しみし者なるを、只一言の別もつけず、我が死したりと聞くならば、浮世の義理をも知らぬものと、恨みられん

喜「左様々々。何れにも旦那がお出でなさると被仰からは、間違ひもありやすまい。丁度お燗も付いて居やすから、機嫌を直して一つ飲つて、中直りに旦那へお上げなせへ。私は此茶碗で一盃いたゞけば、雪の中も苦にはなりやせん」ト小露に酒をついでやり、其身も手酌でグットト引かけ、猶立兼ねて澁々する小露の手を取り引立てつゝ、駕にうち乗せ出行きける。

小「夫だつて清さんが遠い國へ往つて、最う逢はれないとお言ひだものを」

喜「エ、夫は實正でございますか。イヤ〳〵然うではありやすめへ。是はてつきり旦那がお前さんに氣を揉せて、痴話の種に爲やうと思しめして、からかひに被仰たに違ひはございませせん。ネエ旦那然うでございませう」

諫「ナニ、實に旅立をする積ではあるが、まだしつかり何時と極つた事でもないノサ」ト言ひながら又紙入より、駕籠賃より餘程餘分に金を出せしを紙に包みて、「小露、おぬしの恨みも無理とは思はないが、這處で彼是言つて居ると、駕屋も難儀だのに、第一深切に連れて來て呉れた喜八が迷惑をすると言ふものだ、何れにも此身が今夜か、夫が間違へば明日は急度和歌町へ往つて、おぬしの腹に落付くやうに咄しをするから、今日は世話をやかせずと歸る事とするが宜い。是はほんの駕籠賃丈だが、持つて往つて呉んな」ト包みし金を手に握らすれば、

小「私やァ否でありますョ。そんな氣休をお言ひなすつても、來てお呉れだか何だか當になりますものかネ」

諫「ナニサ、おぬしを出し拔いて往く位なら、旅へ立つといふ事を咄すものかな。ノウ喜八積つて見ても知れさうなものではないか」

處へか主取を爲なければ、一生斯うしても居られないだらうぢやァないか」
小「そりやァ然うでもありませうけれども、私が困るぢやありませんか」
諫「氣の狹い事を言つたものだ。此身ばかり男でもあるまい、他に宜い旦那を持つといふものか、夫でなくば是から生涯大丈夫といふ男を見立て、夫婦になつて身をかためるが宜いはな」
小「オヤまァ、氣樂な事を言つてお在なはるヨ。私やァお前はんに見捨てられると、生きちやァ居ませんヨ」ト言ひつゝワット泣出せば、よしなき事を言ひ出せしと、もてあましたか諫六が、さま〴〵に言ひなして、すかし慰め居る所へ、姑くあつて箱廻しの喜八は門より入來り、次の間にて二ツ三ツ咳拂して、中仕切の襖を明けつゝ顏さし出し、
喜「イヤァ、何だか泣いたり笑ッたり痴話狂ひの御最中、些お速いかはぞんじませんが、雪は段々降ッて來る、歸りの道も心遣ひ、其上あんまり遲くなつちやァ都合の惡い譯もありやすから、時分を見計つてお迎に參りやした」
小「何だネ喜八どん、宜い氣な事ばかりお言ひでないヨ。私やァ此内は歸らないのだヨ」
喜「是はしたり、又そんなやんちやんを言つて、私を困らせちやァいけませんぜ」

小「エ、旅へお出でなはるとへ。」
諫「そんなに仰山に肝を潰さないでも宜いはな。」
小「夫だつて肝が潰れやうぢやァありませんか、出し抜にそんな事をお言ひなはるのだものを。お前はんの氣ぢやァ、私が今日來なんだら、沙汰なしに旅へ立つて仕舞はうと思ッておいでのに違ひないヨ、人の氣も知らないやうに。夫ぢやァ私がこんなに苦勞をする甲斐がないぢやァありませんか。」
諫「ナニ、いよ〳〵出立と極れば、おぬしにも逢つて暇乞をする積で居たノサ。」
小「否だネエ。そして遠い處へでもお出でので、急にお歸りにならないんでありますかへ。」
諫「まァあんまり近い所でもないから、先の樣子に寄ッたら、是切り歸られなくなるか、何にしても早急に歸る事にはなるまいヨ。」
小「アレサ、心細い事をお言ひなはるヨ。若是切にお前はんに逢はれなくなつたら、私やァ何樣爲やうネエ」ト少し泣聲になつて、「後生だから、旅へ立つ事なんぞは止にしてお呉んなはいな。」
諫「此身だつて見ず知らずの國へ往きたくもないけれど、知つての通りの浪人暮し、何れ何

言ふ筈だネエ、ホヽヽヽヽ」

喜「直に今の意趣返しをされやした」ト咄のうちに酒肴も來れば、喜八は頓て燗をつけ、是より姑く酒盛に互の雜談種々ありて、はや微醉になりし頃、程よく喜八はその座を外し、用あるふりにて立つて行く。跡は二個が差向の、遠慮なければ小露はさし寄り、

小「エ、清さん（諫六が變名を森清助といへばなり）お前はんはあんまりでありますョ。何ウか比良清でお目に懸ッたつきり、呼んでお吳んなさらないから、其後も人を賴んで手紙を進げた事も幾度だか知らませんのに、一度の返事も贈越してお吳んなはらないから、どんなに氣を揉んだとお思ひなはい。今日はいゝ鹽梅に佐屋町まで來て、座敷があぶれになつたから、雪の降るのに廻り道は氣の毒でありましたけれども、あんまり久しくお目に懸らないから、何樣ぞしておいでなはるのぢやアないかと、喜八どんを賴んで來たのでありますョ。氣まづい事を言ふ樣でありますがネ、私の推量かは知らないが、何でも何處へか面白い所がお在んなはるのだョ」

諫「さア、其恨みも無理ではないが、何を言ふにも節季の日になつて、氣樂らしく遊び歩行も出來ず、その上些と譯があつて、品に依ると急に旅へ立たないぢやァならないので、種々用があつたから」

居たんだヨ。今日斯ういふ味い都合でお目に懸られたのは、實正に喜八どんのお蔭だヨ」
諫「なる程是は妙な都合だつた。併し此雪に佐屋町から爰まで廻り道は實に信切な事であつた」ト鼻紙袋から貳分金を一ッ紙に捻つて遣れば、
喜「ヘイ有難う、併し是では」
諫「ナニサ、尠いが莨でも買つて呉んな」
喜「左樣なら頂きます。小露さん、旦那へお禮を宜しくお賴みまうしやす。トキニ私は此新道に少し用事がございますから、一寸參ッて後程お迎ひに上りますから、小露さんは其內旦那に思入れ愚痴でも竝べ立つてお聞せなせへまし」
小「オヤ、私やア愚痴を言ひに來たんぢやアありませんョ」
喜「ホイ、是は出そこなひました」
諫「ハヽヽ、まア喜八、今酒が來るから一盃氣を付けて、用事があるなら足しに往くが宜いではないか」
喜「なる程、御酒と聞いては見遁しても參られますまいか」
小「あゝ意地がきたないのだョ、直に腰が拔けるのだものを。夫だからお內儀さんが叱言を

諫「然うヨノウ、夫では酒と他に肴を三品ばかり見繕はせて來るが宜い」

甚「へい〳〵」と言ひながら勝手より酒の道具を次の間まで運び出し、酒さへ來れば何時にても燗の出來る樣に倣し置き、竹の子笠に赤合羽、雪踏分けて出て往く。跡を喜八が見送りて、

喜「夫でも宜く氣が付いて、御酒の道具迄出して往ッたうちが可愛らしい」

諫「あゝいふ氣立の奴だから遣つて居るノヨ。偖是で邪魔は拂つたが、妙な譯で小露を供をして來たと言つたのは、何樣した譯だの」ト問はれて小露は莞爾笑ひ、

小「ナアニネ、妙な譯といふ程の事でもありませんが、私やア今日脇にお座敷があつて、佐屋町の河岸まで船で來ましたノサ。然うすると急に雪が降り出して來たので、其お座敷があぶれになりましたから、其處でネエ喜八どん」

喜「左樣サ。實は旦那の前だが、此間からさつぱり貴公がお在のないのを、此お孃が苦勞にして、何樣なすつたのだか、便が聞きたい物だと言ひ拔いて御出での處だから、今日のあぶれを幸に、此お宅をお尋ねまうして、お留守なら詮方がないが、若お宿なら一寸でもお目に懸つてお出でなさるが宜いと、私が進めてお連れまうしましたノサ」

小「私やア先刻あの人が憤怒た樣な顏をして居たから、寔に怖かつたけれ共、推を強く爲て

喜「ヘイ、ナニ例の堅藏先生が。」

諫「アハヽヽ、然うか、困つた奴だ。併し何奴は惡堅いばかりで、氣に毒のない正直者だから、何を言ツても氣に懸けないが宜いはな」ト言ひながら俄に手紙を一通さら〳〵と認め、甚三郎を呼んで、「大義ながら此手紙、本庄の折部氏まで持つて往つて、返事を取つて來やれ。然のみ急ぐ事でもないから、他に手前の用でもあるなら道寄りをして、隨分遲く歸つても大事ないから、緩りと爲て來るが宜い」ト言はれて甚三は少し考へ、

甚「ヘイ、御用とございますれば御使には參りませうが、私の居ない留守に、又此野狐どもにたぶらかされて、むだ金でもお遣ひなさらない樣に被成まし。世間は節季だとまうして騷いで居りますのに、如何に御浪宅でお天窓の推手がないとまうしまして、少しは御勘辨なさるが宜しうございませう。」

諫「宜いはサ、何も心配には及ばぬから往つて參れ」と言はれて是非なく甚三郎は、澁々ながら立上りしが、再び其座へ立戻りて、

甚「旦那さま、何れ御酒を召上るでございませうが、外へ出て飮るよりお宿の方が浮雲氣がございません、何なら私が往きがけに言付けて參りませうか。」

喜「そりやァ然うでもありやせうが、御用多のお中をお手間を取らせる譯ではございません、一寸御目に懸りさへすれば宜いのだから、何樣か旦那へ其譯を。」

甚「ならないョ、此野狐めらが。旦那が少しお宿におみ足が落付くかと思へば出掛けて來て、又化して誘ひ出さうとしても、此甚三がお附きまうして居るうちは、奴等が勝手に大事の旦那をされて堪るものか」ト腹立まぎれの大聲を奧に居たりし諌六が聞付けて、門口へ立出で、

諌「誰だと思つたら喜八か。」

喜「イヤ旦那、先御機嫌宜うございまして。今日は妙な譯で。小露さんの御供をして御近所までまゐりましたから、一寸雪中の御見舞に。」

諌「夫はよく來てくれて辱い、さァ〳〵這方へ上るが宜い。」

喜「へイ〳〵、左樣なら御免なせへ、さァ〳〵小露さん、旦那のおゆるしが出たから遠慮はねへ、大びらでお這入んなせへ」ト甚三を尻目に懸けながら小露と倶に奧へ通るを、甚三郎も主人の前ゆゑ、さすがにさゝへ止めかねて、獨り何やら口の中にてぶつ〳〵叱言を言ひながら、以前の薪を片付けて居る。奧には諌六機嫌よげに、

諌「宜く來て吳れたノウ。夫は宜いが、今門口で何を言合つて居たのだ。」

忠義無二なる大星等がある事ないこと内通せし報のあらで果べきか。傳八お蘭が身の終に引競べて察ひ見るに、行末榮えんやうはあるまじ。

第九十四回

茲にまた義士同盟の一豪傑に近松諫六といふ者あり。基は江州の產なりしが、後に鹽谷家の臣とはなりけり。その召仕に甚三郎とて、又是稀なる忠僕有りけり。然れば鹽谷家滅亡して、諫六は浪々せしより、頓て東に走下り、保久町の貸座敷に住居、森淸助と變名して敵の樣子を探り居しが、折しも極月十二日、ちらつく雪の門口にて、今割仕舞ひし薪をば、甚三郎があくせくと取片附けて居る處へ、年頃二十歲ばかりにて、水際立ちて美しき婦多川風の唄女を、跡に待たせて箱廻しの喜八といへるが莞爾々々爲ながら、

喜「イヤ甚三さん、寒い物が降出して來やした。よく例もおはたらきなさるネ。トキニ旦那は御宿で被爲入ますか」ト言ふを見返る甚三郎が、苦々しき顏付にて、

甚「アイ、旦那は御在宿だが、此師走の算日に、お前がたに構つてお在なさるお隙はないから、今日は歸つて春にでもなつて來なさい。」

師直は討取られ、高の家名斷絶したれば、傳八は大切なる出入屋敷を失うて、家業にはなれしごとくなるゆゑ、是より段々間が惡くなり、其上永の大病を煩ひ、世渡る事のならざるより、終に乞食となりさがり、道路に仆れ臥せしといふ。偖またお蘭は、戀しと思ひし和七は義士の一人にて、本名倉橋全助と傳聞きしに驚くのみか、お蘭の夫が世にある時より、高の屋敷の金元をして、多くの金を貸込み置きしに、此度の騷動より家斷絶に及びしかば、是まで貸したる金銀は一文にても戻る事なく、其金とても總てみな自己が金といふにはあらで、その中には筋惡き金などを引出して、口入なしたる事などあれば、貸方よりは強く促られ、是非なく家を分散して、しがなき暮しに落ぶれしが、終に其處にも住みかねて、果は如何なる死を遂げたりけん、往方知れずなりしとなん。基此お蘭は身行宜からで、夫が世にあるときよりして、密淫など爲たりしが、死したる後はうち晴れて、例の和七がごとくなる男妾に類せし者を幾人となく家に引入れ、其うへ高利の金を貸して諸人の難儀を顧みず、促るに用捨なかりしのみか、松原左仲に頼まれて、出入屋敷の事とはいへど、利慾のために種々に義士の本意をさまたげんとせし、夫等の陰惡身に報いて、かく零落はなしたるなるべし。ひとり藪井倫竹のみ終るところを定かに知らねど、渠はお蘭の親族なりとて、由縁もなき師直より褒美の欲しさに間者となり、

兩人が傳八が左右に附添ひ、さア〳〵參れと急がすにぞ、思ひがけなき人に送られ、往く所へも往きがたく、是非なく神田の多町にいたり、得意の問屋を呼び起し、門明けさせて內に這入れば、かの兩人の武士も倶に見世先へ進み入り、

武「此者は此家に靑物の買出しに參るとまうすが、些と疑しい子細がある故、態々我々が送つて來たれば、夜の內は其方店へ屹と預け置くぞ、尤夜の明けしうへは、何方へ遣すとも勝手にいたすが宜いが、夜の間は張番して、門三寸も出す事は相ならぬぞ」ト亭主に嚴しく言置きて、二個はその儘立去りける。什麽傳八をさゝへ留めたる黑裝束せし者どもは、是いかなる輩なりけん、既に初編に記せしごとく、義士討入のありし時、黑裝束をせし面々が高の屋敷の四方を固め、緣者へ通路の隔をなして、義士の忠戰を助けし事、若大星等が仕損じなば、二の目を討たんと扣へしといふ奧野將監等が類なるか、又は堀部安平が門弟なりとの說もあり、本家の加勢なりともいふ。何れが是なるか考ふべし。然れば多町の問屋にては、とんだ人をば預けられ、亭主は大きに心を痛め、先傳八に子細を問へど、一大事故傳八も明白には譯を語らず、程よくその場を言ひこしらゆれば、亭主も不審に思へども、嚴しく二個の武士より言付けられし事なれば、夜の間は寐もやらで傳八を張番なし、夜明けて出しやりしとぞ。然れば義士等亂入して、

ます」
武「名は何と申す」
傳「ヘイ、傳八とまうします」
武「其又八百屋があわたゞしく何れへ參るのだ」
傳「エ」
武「何處へ往くのだといふのだ」
傳「エヽ、アノウ何でございます。オヽそれ〳〵神田の市へ買出しに參ります」
武「馬鹿を言へ、朝市へ往くには刻限もあつたものだに、何時だと思ふ。まだ眞夜中だぞ。殊に買出しに參るなら、野菜籠でも荷いで往きさうな物だのに、空手で往くとは怪しいぞよ」
傳「エ、ナニ籠も問屋に預けてございます。夫に少し急ぎの品を注文されましたから」
武「何樣やら疑はしい詞の端々、併し賣用で參るといふを差留めるも如何故、神田の青物問屋まで此方ともが送つて遣さう」
傳「イエ、ナニ夫には及びません」
武「イヤ、其方は送られずと宜からうが、此方に不安心な事があるからだ」ト四五人のうち

いろは文庫　巻之四十七

第九十三回

偖も極月十四日、かの討入の夜にいたり、例の八百や傳八は四邊で火事といふ聲に駭き覺つつ起出で見るに、近所に火の手も見えねども、高の屋敷のうちと覺しく、泣叫ぶ聲討合ふ物音、最すさまじく聞ゆるにぞ、扨は鹽屋浪人の夜討に亂入せしならん、兼て左仲が言付には、屋敷に事のありと聞かば、御親類の御屋形へ注進せよとの頼みもあれば、此事速く注進せば、一廉の褒美もあらんと、直樣草鞋引掛けて、一もくさんに駈出し、三町ばかりも行きしと思へば、黒裝束せし武士が、忽地四五人現はれ出て、前後左右に立塞り、

武「ヤイ待て」ト言はれて悑り傳八は、其儘大地に平太張て、

傳「御免なさいまし」

武「何だ、御免なさいと言ふからは胡亂な奴だな」

傳「イエ〳〵、全く左樣な者ではございません。高樣の御門前に住居を致す八百屋でござい

を叱られて、褒美の邪魔になりもやせんと、よしなき事まで考へしかば、是まで持つて參る途中、つひ水溜へ取り落し濡らせしよしに言ひ拵ゆれば、左仲は疑ふ心なければ、濡せし事を咎めもせず、おし開きつゝ讀み下すに、大星は伊勢參宮より東國へといたり、其外鹽谷浪人は京地に一個も居らずとあるは、合點のゆかぬ事ながら、此上は心遣なくと傭竹から言ひ送りしからは、さのみ氣遣ふ事もあるまじと、主人師直にもかくと知らせ、いよ〳〵用心を等閑しとぞ。
然ればまた大星は松屋五兵衛 相原江助の變名 が持參せしかの和七 倉橋全助の變名 の奪ひし手紙の寫しをつくづくと讀み下し、手を打つて驚歎なし、誠に藪井傭竹といふ者はよく〳〵我輩の進退を探索して、斯く内通はなせるものかな。併しながら倉橋が卽智にてかの一通を奪ひしのみか、加筆なして文意を變じ、敵に油斷をさせしこと天晴の働きなり。此上は日を延べがたしとて、義黨の面々評議のうへ、終に其月十四日の討入とはなりしなり。

たれば、待ちかね居たりしお蘭は立出で、
らん「何様だへ、知れたかへ。」
傳「御安心なすつて下さいまし、いゝ鹽梅に見付かりましたから持ッて參りました。」
らん「夫は宜かつたネエ。是といふのも和七のお蔭だから、宜くお禮をお言ひョ。和七は別して御苦勞だつたネエ。お前が寒からうと思ッたから、湯豆腐を拵へてお燗をつけるばかりにしてあるョ。」
和「夫は有難うございました。サァ傳八さん、お前も寒かつたらうから火鉢の傍へ寄んなせへ。」
傳「エヽ、私は此手紙が手に入つたからは、些とも速く松原樣へ持つて參りませう。併しこんなに濡れて居ては始末が惡いから、少しお火をお借りまうして乾かして參りませう」ト件の手紙を取出し、火鉢へかざしてあぶるを見て、
らん「オヤ、夫でも濡れたばかりで封じめが破れなかつたから宜かつたネエ。大體に上が乾いたら、どんな急用だか知れないから、些とも速くとゞけて進げるが宜いョ」ト言はれて傳八一議に及ばず、生乾きせし書狀を携へ松原方へ赴きしが、あからさまに言ふときは其身の麁忽

ら、是で言譯は立つと言ふものだ。併しぐつすり溝の水で濡れたから、始末においねへ」
和「假令濡れやうが、あつたのが見付物ぢやァないか。其儘そつと破れないやうに持つて歸ツて乾かすが宜いはな。夫にしてもそんなに大事な手紙を誰に事託つたのだへ」
傳「エ、ナニこりやァ何サ」
和「コウ、そんなに深く隱す事もないぢやないか。吾儕が見付けて知らせざァ何樣爲なさる」
傳「夫も然うサノウ。實は他人に咄しの出來ない譯だが、此手紙は花洛から來たので、高樣のお屋敷の松原左仲さまへ急に屆けないぢやァならないノサ」
和「ハヽア、夫ぢやァ何か內證の御用と見えるネ」
傳「マアそんな譯だらう」
和「ヘン、熟くするネ。內證の事ぢやァ定めてずつしりお禮があるだらう。些たァ吾儕の見付賃に其譯口がありさうな物だ」
傳「ナニ、多分の禮の貰はれるといふのでもないが、何れにしてもお前のお蔭で此手紙が手に這入つたのだから、其內酒でも買ひやせう」ト咄しながらに步行ほどに、頓てお蘭の家にい

傳「和七さん、まだ先かネ。」
和「左樣サネ」ト少し考へる振をして、「エヽト、向の横町へ迯込んだから、何でも爰等の溝に違へねエ」ト言はれて傳八は溝の端へ挑灯をさし入れて、那方這方と尋ねながら、
傳「オット見付けた。」
和「あつたかネ。」
傳「イヤア大間違だ。骨を折つて棒の先へ引かけたら、財布ではなくつて古草鞋だやつサ。」
和「何を云ふのだハヽヽヽ」と此うち和七は懷より例の財布を取出し、傳八の氣の付かぬやうに件の溝へ投込み置き、其身もともに搜す體をなしながら、「傳さん爰に何かあるから、其棒を持つて來なせへ。」
傳「ドレ〳〵」ト言ひながら挑灯の火にすかし見て、「違へねへ。こりやア本物のやうに見える。」
和「夫ぢやア吾儕が灯を見せるから、お前其棒で取んなせへ」ト言ひつゝ挑灯をさし出せば、傳八は兎角して棒の先に引掛けつゝ引揚げたるをうち詠め、
傳「有難へ、吾儕の財布だ。錢と小玉はなくなつたけれども、大事な手紙が這入つて居たか

らん。」

傳「ハテネ、夫は耳よりなお咄しだが、そして其財布の縞柄はどんなだか覺えておいでなさるかネ。」

和「ナニ、夜の事ではあるし、氣を留めて見たのでないから、縞柄までは見留めなんだが、投込んだ溝は覺えて居るから、むだと思つて何なら往つて尋ねてお見なさへ。」

傳「左樣サネエ、何樣いたした物だか知らん。」

らん「アレサ傳八どん、考へて居る處ぢやァあるまい。大事の手紙ぢやァないかへ、些でも手掛りがあるなら、むだでも往つて見るが宜いハネ。和七、お前が投込んだところを知つて居るなら、御苦勞ながら同道に往つてお遣りな。」

和「エヽ〳〵、遠くもない處でございますから參りませうとも。」

傳「夫ぢやァお氣の毒だけれども往つてお吳んなさるか。」

和「ナニ氣の毒も何も入るものぢやない。其處で傳八さん、溝の中を探すのだから挑灯を二人が壹張ヅツ持つて、杖の長いやうな物を一本持つて往くが宜いぜ」ト俄に二個は支度調へ、和七が案内に傳八は、相生町の方へといたり、

らん「アレサ、何もお前が居て邪魔だといふ事ではないヨ。全體傳八どんが惡いヨ。隱さずといい事をかくすやうにお言ひだから、此人がをかしく思ふのだハネ。夫ぢやァ私が咄すからお聞きヨ。實はこの傳八さんが今がた途中で財布を取られたハネ。」

和「イヤア夫は大變な事を爲なすつたネ。金でもたんと入つて居たのかへ。」

傳「ナアニ、小玉が五ッばかりと錢が七八百も這入つて居ましたらう。」

和「夫ぢやァ何時までもそんなに愚痴らしく思つて居る事もない。厄落しを爲たとおもへば宜いぢやァないか」

傳「ナニ、錢金計りなら構やァ爲ませんが、其財布の中へ大事な手紙を入れて置いたのを取られたから、預つた人に何分濟まない譯だから、夫でこんなに心配を爲ますのサ」ト言ふに和七はうち案じ、

和「ヤ、其お咄で思ひ出した事があります。今私が相生町から歸りがけに、手拭で顏を隱した怪しい男が、何だか財布のやうな物を懷から出して、中の錢ばかり出して、跡の財布を通水の溝へ投り込むのを、月の明でちらりと見ましたが、私の見た樣子を其男も氣が付いたか、あわてた樣子をして横町へ迯込んで仕舞つたが、萬一お前の取られた財布ぢやァなかつたか知

第九十二回

恁る處へ息せきと、和七は急ぎ立歸りしが、傳八が居る體を見て、素知らぬ顏にて内へ入り、

和「ヘイ只今歸りました。五兵衛も宜しく申上げます。」

らん「オヤ和七お歸りか、思ひのほか速かつたネエ。」

和「ヘイ、イエ大きに急ぎましたが、つひ遲くなりました」ト云ひながら傍を見返り、「イヤ傳八さん、お久しいネ、何樣だへ相替らず設かるかネ。」

傳「イエ、設かる所ではない、とんだ目に逢ひました。」

和「ナニ、とんだ目に逢つたとは何樣爲たのだへ」ト問返されて心付き、

傳「ナニつまらない事でお咄にもならない譯サ。」

和「然うかネ。夫に爲ちやア何だか顏の色も常と變つて居て、餘程心配な事でもあるやうに思はれるヨ。心安くする私に隱しなさるのは怨だぜ。併し斯うは言ふものゝ、何か内々お咄しの處へ心なく歸つて參つて、お邪魔になつては濟みませんから、私は一寸藥湯へでも這入つて參りませう」トお蘭の方を尻目にかけ、氣をもたせつゝ立たんとすれば、

詮方がないが、大事の手紙を入れて置いたのをなくしては頼まれた人に濟まないと言ふのを聞いて、長屋の者も氣の毒に思ひ、俄に手分をして尋ねてくれましたけれども、彼是と時刻も過ぎた事ではあり、其處等に落ちて居やう譯もなく、盗賊の行方は猶知れず、よし又其處等に居た處が、どんな奴が爲た事だか、形風俗をも見留めて置かないのだから、捕まへて吟味をする當もなく、實に私は氣拔の爲た樣にがつかり爲ましたが、此事をお前さんにお知らせ申さないでは濟まないと思つて、駈出しては來ましたが、あんまり馬鹿なめに逢ひましたのだから、言ひ出しかねて居りました」ト言ふにお蘭は悄りして、

らん「そりやァまァ大變な事をお爲だネエ。どんな事が書いてあつたか知らないが、大急ぎで贈越したやうに私の處へ言ッて來て見ると、何れ一大事を知らせてよこしたに違ひないのに、夫が屆かないでは、松原樣の御心配なさるは素より、萬一また那手紙が何樣かいふ傳手で、鹽谷浪人の手にでも這入ると猶の事不都合だから、最う一遍尋ねて見る事は出來まいか。夫がならずば京都へ急飛脚でも立つて、手紙の樣子を聞きに遣るより他に詮方はないが、何にしてもお前にも似合はない事をお爲だネエ」ト言はれていよ〱傳八は當惑面にあらはれつゝ、天窻を掻くより外はなく、須臾回答もならざりけり。

らん「オヤ傳八どん、お前まァ往なり這入つて物も言はないで、只ならない顔をしておいでだが、鹽梅でも悪いのか、又は何様ぞお爲のかへ。定めて松原様がお歓びで、私の所へもお禮でもお遣しのかへ。アレサ无言て居ては分解ない、私も色々他に氣の揉める事のある所だから、速く咄してお聞かせな」ト言はれて漸々顔をあげ、

傳「イヤ最うお前さんにお目に懸るのも面目ないやうでございますが、寔にとんだ目に逢ひました」

らん「エ、とんだめとは何様いふ目に逢つたのだへ」

傳「然ればサ、聞いておくんなせへ。先刻此お内を出て松原様へと急いで往く途中、高様のお長屋下で、誰とも知れず後から私に當身をくはせた者がありましたから、ウント言つて仆れたまでは覺えて居ましたが、夫からは丸で夢中のやうな心持で居ると、頓ての事に遠くで私の名を呼ぶ聲が耳へ這入つて、氣が付いて見ると私の内で、長屋の衆が大勢來て、水だの灸だの氣付だのと騒いで居るから、様子を聞くと私が往來端に仆れて居たのを、近所の人が見付けて、内へ荷ぎ込んで色々介抱をして呉れたのだと言ひますから、ヤレ嬉しや、命が助つたのかト思ふに就て、探つて見るに財布がありませんから、肝を潰して段々の様子を咄し、中の錢金は

て、件の二字を書直すに、神佛忠義を感納ありてか、筆法と言ひ墨色まで直せし文字とは更に見えず、素より書いたるごとくなる故、五兵衞は見つゝ横手を打ち、

五「イヤ妙計と言ひお手際といひ、實に是には恐れ入ッた。序に元老へ御目に懸ける爲に、寫しを一通書いておくんなせへ」と言はれて和七は一議に及ばず、件の手紙をさらく〳〵と寫し取りしを五兵衞に渡し、又這方なる一通を元の通りに堅く封じ、財布と俱に懐中なし、

和「夫ぢやァ私は跡の譯があるから直にお暇と爲ませうから、元老にその寫しをお目に懸けて、又も傭竹から密書の來ないうちに、速く討入の御評議をお取極めなさるやうに申上げて下さいまし」ト言捨て稍立あがり、足を速めて歸りゆく。かゝるべしとは毫知らぬお蘭は鬮に傳八をもて傭竹よりの書狀を送れば、翌日はかならず左仲が許より厚き謝禮の來るべし、今宵はなどしつゝ待てども和七は戻り來ず。那程言うて遣ッたれば、泊つて來やう筈はないが、夫と折から寒さも强し、先前祝に酒買うて、和七が戻らば例の通り彼を相手に樂しまんと、肴拵へも何處ぞに面白い穴でも出來て歸らぬのかと、獨り氣を揉み居るところへ、勝手口より傳八があわたゞし氣に入り來りしが、挨拶もせずさし俯向いて、溜息ついて居る體を、お蘭は見つゝ訝しげに、

和「夫は素よりの事だが、又つく〴〵と考へて見ると、那傳八が大事の手紙を取られた事を左仲が聞いたら、手紙のないので事柄は分解ないでも、傭竹から火急に知らせてよこしたのは、何か仔細のある事に違ひないと、折角少し油斷を爲かけたところを、元より嚴重に用心をされでもすると、本意を遂ぐる邪魔になるではあるまいか。」

五「なる程そりやァ貴公の言ふ通りだが、今となつて用心をさせないやうにする工夫もあるまいぢやァないか。夫とも他に妙計でもあれば重疊だが。」

和「妙計と言ふではないが、此手紙を宜くお見なさい、京地には壹人も相見え不申、此上之御心遣と存候間と書いてある。此之の字をば者の字に直し、御の字を無の字に書き直すと、京地には壹人も相見え不申、此上者無心遣と存候間と讀めますだらう。斯う直した手紙を元の通りに封じて、傳八に返して遣ると、左仲が見て是では安心だと、いよ〳〵油斷をするは必定、其處へ附込んで本望を遂げたら、首尾よく成就爲やうかと思はれます。」

五「寔に是は妙策だが、併し此手紙を傳八とやらに返すのが、餘程六ケ敷さうな譯だネエ。」

和「ナニ、そりやァ爲やうがありますから、お案じなさる事はありません。夫にしても速く爲ないと其方便が出來ないから、一寸私が細工をして見ませう」ト言ひながら硯箱を引き寄せ

退申候哉、京地には壹人も相見不申、此上の御心遣と存候間、不敢取御知らせ申上候。猶又委敷樣子聞出し候はゞ、早速後便可申上候。何も差急ぎ要用のみ度得御意如此御座候。恐々謹言。

十二月二日　藪井傭竹

松原左仲樣

ト讀むより二個はうち駭きたる、中にも五兵衞は吐息をつき、

五「イヤ最う斯ういふ事があるから油斷も透もならないのだ。併し貴公のはたらきで、此書狀が松原とやらの手に渡らない先に這方へ取揚げたのは、天道我々の忠義を憐み給ふと言ふものだらう」

和「ホンニ然うだらうネエ。兼て此傭竹といふ奴は師直の間者になつて、ある事ない事注進をするといふ事は、元老のお咄でも聞いたし、又お蘭や傳八がその仲繼をするといふ事も、薄々勘付いて居たから、若やと思つて立聞を爲たのが、實に神の助サ」

五「マア何に爲ても、此手紙を大星氏の御覽に入れて、此うへの御賢慮を伺ふが宜からうぢやないか」

第九十一回

偖も和七は傳八お蘭の囁く體を洩聞きて、うち駭きつ其儘に、周章ふためき傳八が跡追かけて走往くを、夫と知らねど傳八も心急ぎのせらるゝ儘に、足を速めて往きかゝる處も高の長屋下、日もはや入りて薄暗がり、折しも四邊に人も來ざれば、天の與へと悦ぶ和七、窺ひ寄りつゝ後より、拳を堅めて突出す、急所の當身に傳八は、何かはもつてたまるべき、ウンと仰けに仆るるを、爲すましたりとさし寄つて、傳八が懐なる例の財布を奪取り、跡をも見ずして逃去りしが、薄暗がりの事なれば、幸にして人も咎めず、終にその場を逃延びて相生町に走りゆき、頓て五兵衛に對面なし、ありし様子を物語りしうへ、件の書狀を取出し、封をはがして披き見るに、

以飛札申述候。兼て内々御頼に付、鹽谷浪人の様子無油斷探索致居り候處、大星事は此程伊勢參宮より東國へと罷越し、其外鹽谷家の浪士共、所々に住居致し候面々、何國へ立

いろは文庫第十六編序

年來文庫の裡へ、いろは文字にて抄錄しつ、祕置きたりし義黨の傳の、耳新らしく思ひし事は、はや大方は綴り盡して、編むべき條の拂底なるを、コレ兄さんあるぞへ、と側から囁く阿輕も居らねば、憶ひ付いたる延鏡に、讀取らすべき文章さへ、りくの夫ならねど、果敢どり兼ねたる長案じも、凝つては思案にあたはず、と是をちよつくら一寸斷うやつて、と諫六小露の小傳に、浮世めかせし艶語を演べしも、こいつはえらいえら趣向、とお笑ひを取る迄にはいたらず。遲いと酒を飲すぞへ、と傍で書房に促され、風雅でもなく洒落でもなく、詮方なしに侘びつゝ記しつ。

東都作者　爲永春水誌

原様へ被仰て、一元手にも在付くやうにお願ひ申します。何れ夫が先立たないでは骨も折られませんから」

らん「そりやァ云はずと承知だョ。その手紙を持つて往つたら、大かた左仲さまが只はお歸しなさりは爲まい。急度夫相應な事はなさらうハネ」ト云はれて歡ぶ傳八が、大事の手紙とかの一封を以前の財布の中へ入れ、その儘首へ引掛けて、暇乞さへそこ〳〵に、又裏口より出往くを、和七は始終立聞して、扨こそ違はぬ一大事、譯は知らねど那一通を敵に渡さば味方の手違ひ、然うだ〳〵と點頭つゝ、跡追かけて走往きける。

いけれど、夫ぢやァお前の聞いた石町の一件に違ひないョ。此間から叔父さん備竹はおらんの叔父なるゆゑかくいふなるべしの所から、大星親子は思ツたとは大違ひの、箸にも棒にもかゝらない阿房者だと言ツてよこしたのに、お屋敷から花洛へ出してある間者とやらも歸つて來て、中々敵討なんぞを爲さうな樣子も見えないと云ふので、近比ぢやァ御親類から來て居たお附人も段々減つて、高の殿樣をはじめ松原樣も、最う敵討はないと大安心をなすつて、御用心も餘程薄くなつた樣子だのに、其處を附込んで萬一その浪人がどんなことをすると大騷動だネエ。何にしても此手紙を速く松原樣へ進げたいものだが、今日はあいにく內中の者がみんな留守だのに、たつた今和七まで宿へ遣つて呉れろと云つて出て往つたから、內を明けて私が往く事にもいかないから、迚もの事の御苦勞序に、松原さままで持つて往つて屆けて進げてお呉れでないか。お前は常からお出入ではあるし、內證の事を頼んだ譯も左仲樣が御存じだから、私も同樣に思召してお在なさるに違ないョ」

傳「ヘイ、左樣なら私が持つて往つて、お前さんがお留守がないのでお出でなさることの出來ない事まで申ませうが、夫にしてもお內儀さんェ、私が是程大汗になつて駈けて歩行て、石町の譯も聞出し、此手紙も取つて來たのでございますから、何卒骨折丈の事はお前さんから松

湯を一口呑んで、「ドキ〳〵お内儀さん、私が周章て來たのも他ではございません。兼てお前さんのお頼みだから、若も鹽谷の浪客が何所ぞに忍んで居て、高樣を敵とでも覘ひは爲まいかと、色々手を廻して聞きました處が、近比石町の貸座敷へ、花洛から下ッたといふ武士が逗留を爲て居ますが、何でも言立は、宮方の御貸附の御用で下ッて來たと申すさうでございますけれども、實は鹽谷の浪人で、其内に大星といふ人も交ッて居るらしいが、名を變へて居る樣子だから分りかねると咄して聞せた人がございますから、夫が實正なら大變だが、夫程の事を傭竹さまから知らせておよこしなさらない筈がない、若飛脚屋にお手紙が滯ッて居る事もあらうかと思ひまして、例の飛脚屋へ往ッて聞きますと、丁度昨日着いた御狀があると言ッて渡しましたから、扨こそと思ッて宙を飛ぶやうにして參りました。速く封を切ッて御覽じまし」ト錢財布の中へ入れて來たる件の手紙をさし出せば、お蘭の許へ傭竹よりの名當を爲たる狀なるゆゑ、お蘭は手速くおし開けば、只一大事のあるゆゑに急ぎ認めさし送る、委細の事は松原樣への書面に認め置いたれば、早々御届け下さるべしとて、別に松原左仲へ送る一封の書狀を卷込めあるにぞ、

らん「オヤ〳〵、餘程急いで書いたと見えて、私の所へは何とも言ッてよこさないから分らな

らん「そりやァ宜いけれども、最う今に日が暮れるから明日にお爲なネエ。」

和「イエ、晝はお宿の御用もございますし、其上急に頼まれました事を忘れて居たのでございますから、是非參らないでは義理が惡うございます。近い所だから日が暮れても搆ひません。」

らん「急な用なら御出でだけれども、そんな事をかこつけに情人廻りでもするのではないかへ、泊ッて來ると聞かないョ。」

和「何樣致しまして、泊るどころではございません、遲くも四時には急度歸りますから、少しの間お隙を下さいまし」ト漸くにして側を離れ、羽織引掛け裏口より、そこ〳〵にして出行く折しも、向より來る八百屋傳八、何か氣のせく樣子にて、和七と袖を摺違ッて通れど心づかざる體にて、お蘭の住居へ這入りしありさま、合點ゆかずと思ふゆゑ、和七も其儘小戻りして、勝手知ッたる庭口より足を爪立ちて忍び入り、緣先近く身をかゞめて、樣子いかにと立聞くとも內には更に知らざりけん、傳八は勝手より奧の一間に赴くを、お蘭は見るよりうち笑みて、

らん「オヤ、誰だと思つたら傳八どん、何をそんなに急いでお出でのだか、息をはずませてサ。ますサお湯でも一ツお飮りョ」ト鐵瓶の湯を酌いて出せば、

傳「ヘイ有難うございます。大變に急いだら此寒空に汗をかきました」ト云ひながら茶碗の

擲つとも敲くともしてお呉れなネエ」

和「モシ、めつさうな事を被仰ます。貴女は御主人さまでございますものを、そんな勿體ない事を致すと罰が當ります」

らん「アレサ、私はお前の女房の氣で居るのだものを、もつと辭を存在に言ツて、名をもお蘭何樣爲なト呼捨に言ッてお呉れの方が嬉しいのだョ」

和「とんだ事を被仰ます、人の聞く手前もあつたものでございますに、何樣してこんな口上が申されますものか」

らん「サア、夫だから人前では丁寧に云ッても、今日のやうにさし向の時は、私の言ふやうにお言ひといふ事サ」

和「へイ、夫はマア先へ寄ッたら段々に申しても見ませうが、只今の處では何だか不躾らしくッて申しにくうございます。夫はさうとお内儀さん、他に御用がなくば一寸相生町まで往つて參りたうございます」

らん「五兵衞どんの所へかへ」

和「へイ」

和「イエ、然うばかりではございますまい。私をお使に遣さらうと思召せば、貴女が松原様か其他のお役人さまの所へお出でなさるとき、お供にお連れ被成て、是から御用の節は此者をお使に差上げますから、お見知り置れて下さいましと被仰れば、御門へも其事がお差圖になつて、何も障りはあるまいと思ひますのに、夫をなさらないのは、萬一お奥のお口へでも往ツて、小雛に内證の咄でも爲やうかといふお疑でございませうが、積つても御覽なさいまし、那はお側向のつとめを致す者でございますものを、いくら逢ひたいと思ツたからと申して、ひよこすかお口なんぞへ出られますものか。何も私が斯う申すからと言ツて、高様へ是非御使に參り度といふのではございませんけれども、那の事で貴女に何時までも疑はれて居ては、爰のお内に居ても面白くございません、お暇を頂いて宿へ下りませう。」

らん「アレ、又そんな事を言ツて私に氣を揉せるヨ。私の心持では、最う些し爲たらお前を爰の内の後見に表向披露して、お屋敷の御用もお前に任せて仕廻はうと思つて居るのだけれども、實はお前のお言ひの通り、若も小雛孃に通路でもされてはと疑ツたのは惡かつたヨ。最う最う決してそんな氣も出さず、お前をもお屋敷へ出入の出來るやうにするから、必ず惡く思ツてお呉れでない。ヨ、ヨ、和七さん、何故无言てお在のだへ。夫ともにまだ腹が愈えずば、私を

て居る者とは違ひますョ」ト反り身になつてツントするゆゑ、

和「モシ、そんなに腹をお立ちなさる事はございません。私が分らないと申したのは、まア考へても御覽じまし、小雛は主人の娘でございますものを、何樣致されましせう、若また那孃と情曲のあるのなら、假令誰が何と言ひませうが、連れて迯げるまでもお屋敷へ上げさせは致しません。夫を私が口を利いてあげるやうに爲たのだから、情曲のない事は分りさうな物だと思ふのを、何かにつけて貴女がおつなことを被仰るから、解らないと申したのでございます」

らん「實正に然うなら嬉しいけれども、何樣も疑はしいやうだから、ツイ愚痴を言ッたのだから、堪忍してお呉れョ」

和「貴女のお心さへ解ければ宜しうございますが、私に他のお使はおさせなさいますけれども、高樣のお屋敷に限ッて遣されないのは、やつぱり那が居るからでございませうネ」

らん「ナニ然ういふ譯でもないが、近比ぢやァあのお屋敷の御門が嚴しくなつて、假令お出入の鑑札を持ッて往つても、顏の見馴れない者は決して入れるなと、重役のお方から堅く言付けてあるさうだから、御門番がやかましい事ばつかり言ふョ。夫だからお前を使に遣らないノサ」

ながらへば命ともなれ夢の世に越ゆるや名殘佐夜の中山
義士の妻女許多あれど、大星及び原芳田等より、書また歌などおくりしもの、十内が妻の他に聞かず。これのみにても、心ばへの貞烈なるをおして知るべし。猶おたんの身のをはりは姑且後の編に讓りて、次の囘より物語兩頭に分れば、宜しく前後を合せ見給へ。

第九十回

らん「エ和七さん、お前心持でもわるいのかへ、何だか欝氣でばつかりお在だネエ。併が夫も其筈サ、今まで熟くはなし込んで、可愛いの、いとしいのと云ひ合つて居た小雛孃を、無理むたいに高樣のお屋敷へ上げたのだものを、嘸今比は師直さまのお手がついて、何樣だらう斯うだらうと考へたら堪らないノサネエ。私も最う少し歳が若くば、那孃のやうに思はれやうに、口惜しい物は歳だネエ」ト一寸言ふにも嫉妬らしく、生いやらしきお蘭の言話の胸悪けれど、爾あらぬ體にて、

和「ハヽヽヽ又解らないことを被仰ますネ。」

らん「アイサ、私は解らないノサ。どうせ那孃の樣に種々の座敷を勤めて、酸いも甘いも知ツ

しく殘り多く、打寄り一笑の事に候。此度いとま遣し候兩人の者ども、昔鬼王團三郎同事におもはれ笑ひ申候。兩人事、此せつまでつゝがなく晝夜身ををしまず相勤候心ざしの程、淺からず過分の事どもにて、輕き者どもにて候へども、孫左衞門とは雲泥の違、用にも立ち可申ものども、一入不便にぞんじ候。左六立寄り申すべくと承り候ゆゑ、十内殿御無事の由申進じたく、又は御暇乞のため、旁かくのごとくに御座候。もはや御返事被下候事御無用に存候。かしく。

十二月十日

をの寺十内殿　　大ぼしゆらの助

御内儀へ

尙々せつ角御無事に御凌ぎ被成り〻。十内殿事は御氣遣被成まじく候。晝夜うち寄り酒など給候てその日を樂しみ、却ておもしろくぞんじ候。猶左六くはしく申り〻。以上。

芳田忠左衞門兼亮關東より秀和が妻へおくりし歌、

おもひ捨てし夕なれどもふる里の便とや聞くはつ鴈の聲

原鄕右衞門元辰吾嬬下の道中にて詠みつる歌とて、秀和が花洛の妻へおくる。

く候。前々申すごとく、十内殿御一家大勢御揃ひ、此度忠死の事誠にもつて御信切の御志、後代迄の御外聞と御浦山しく候。我等一家も大腰拔どもにて、我等父子同名とては、瀬左衛門一人ばかりにて面目もなき事どもに候。家來孫左衛門事、去んぬる三日に立退候。元來輕き者の事に候へども、われら外聞ともぞんじ悦び申候所、しごく不屈に存候。

孫左衛門は普代の家來にて、律義一遍の堅爺に聞えしに、如何してか變心なしけん。尤奥野將監はじめ、佐々小左衛門、進藤源四郎、小山源五右衛門等がごとき正義第一と思はれつるも、異論を言立て連外せし事、大星だも力及はずと言ひけるよし、堀内氏の筆記に見えたり。況て陪々臣の孫左衛門ゆゑ、渠等に比すれば論ずる事なし。

併し高きも賤しきも、珍しからぬ此一事にて候。先申進ずべく候は幸右衛門どの、源吾どの、其外も御無事にて隨分とすくやかなる事どもにて候まゝ、御氣遣ある間敷候。次第におし詰め申候得ども、何時年の暮とも春とも更にわきまへず、うか〳〵と月日を送り、此ほど節季候など參り候てこそ、としの暮とは驚きりゝ。扨も〳〵をかしき身のさまと、十内どのと申し笑ひ申候。在京の内は度々參り、御目にかゝり御馳走に成申候も、何も何も昔夢の心地とそんじ候。餘程居なじみ候ゆゑか、ともすれば都の事のみ申出し、なつか

おたんどの　返事

辭世の歌

わすれめや百にあまれる年を經てつかへし代々の君がなさけを

此文の文體にては、十三日の文書き終りし所へ、美濃屋より妻の文屆きしゆゑ、書添へ贈てりしやうに思はる。猶考ふべし。

大星由良之助良雄浪人の内花洛山科に住し、十内と熟懇にせしかば、關東より暇乞のため、秀和の妻方へ大星より贈る十二月十日の狀。

家來左六幸七いとま遣し戻し候まゝ、一筆申入れ〳〵。けしからぬ寒さに成り申候。いよいよ御息才のよし、折々十内殿に便承り珍重ぞんじ候。爰元十内どの彌御無事に、拙者相宿にて晝夜御心安く申談じ、大慶にぞんじ候。少しもわづらはしき事御座なく候まゝ、御氣遣ひ被成まじく候。嘸々日々の御案じと、御心底の程おしはかり〳〵。御噂のみ申事に御座候。爰元へ下り候て、ぞんじの外永逗留にて困り申候。併ながら此方首尾一段よろしく、兼てその元にてとなへ〳〵とは格別ちがひ、大慶申事に候。頓てのうち首尾よく打明け可申候。先只今までのしゆびも殘る所なく候まゝ、御安堵可被下候。最早間もこれあるまじ

べく候。大へんなくば又便も聞かせ申しりゝ。かしこ。

十二月十三日　　　　　　　　　　　　　内

おたんどの

逢ふときも語りつくすとおもへども別れとなれば残ることの葉　大星力彌良金

十二月十四日妻方へ贈る文　討入の日なり

かやうに書き申す所へ、文美濃屋店より受取申候。折ふし嬉しく候。

一金貳兩美濃屋へ御渡し、爰元にて取れと御申候へども、最早入不申候。また太兵衛屋のみなろべし　より返され候まゝ、そこもとにて太兵衛より取り可被申候。心入過分にて候。

一歌ども扨々感じいり涙をうろほし候。心の内いたく〳〵敷存候。殊の外取込み候砌にて、何事も委しく申入れず候。思ひあきらめ給へかし。太兵衛店にては明日爰元を立ちて京へ登ると申候。頓てあらはれ可申と存候。もはや此度にて心のかよひも是限りにて、爰元の事心安かるべく候。以上。

十二月十四日　　　　　　　　　　　　　十内

いろは文庫　巻之四十五

第八十九回

鉞寺秀和は鹽谷家の藩ながら、久しく京都の留守居を勤めて、年來那地に在住せしかば、堂上方にも出入して、その名は雲の上まで知られし名譽の歌詠なりしかば、妻におくれる文の文體、咄のやうに認めおれど自からに俗ならで、しかも眞情のあらはれたる、至り盡さずと言ふ事なし。至極の文才なりと見えたり。

十二月十三日妻へ贈る文　討入の一日前なり

十二日の文玄溪が屆き可申候。夫に申入候通りの事にて候。最早云ふべき節もなく、只そこもとの事思ひ遣るばかりにて候。挾箱一つ、寐まきふとん、上下羽織其外小道具たくし込みしたゝめ、美濃屋左兵衛迄のぼせ申候。御受取あるべく候。短册も遣し候。大星力彌殿、十五にてせい五尺七寸、よろづ是にて相應の働き、扨々珍しき事故、短册かゝせおくり申候。手も達者に御座候。幸右衛門、九十郎、新兵衛も同じ事に心掛候まゝ心易かる

僕這文を抄錄なし、此歌を寫すにさへ、貞烈義膽に感じ入り、そゞろに涙の催されて、しばしば筆を閣く事あり。卷を開くの婦幼等、十内夫婦の心の底をよく〳〵汲みも分けんには、かの樂しんでいんぜず、哀しんでやぶらずといふ聖の教に違ふ事なき夫婦別ある趣を知らんか、爾はれ唯その文のみ寫さば讀み倦かるべき事もあるべし。下の卷には十内が討入の日まで妻におくりし短き文を抄出し、例の俗語の咄に移して、淫婦お蘭が物語の編殘したる所より、和七の倉橋全助が智勇の傳を綴らんかし。

京都へ帰ると或書に見えたり。

知らせ可申候。世の沙汰も聞きつくろひて、此程も申入れ候ごとくの心得をよく〳〵めさるべく候。中略 時節も近づき、あたりも銘々に仕度の申合せなぞとて人多く、此文も夜明に二階へのぼりて漸々書き候ゆゑ、何方へも文遣し不申候。慶庵どのはじめ、西方寺了賢坊へなほ〳〵頼み申候。ゐかう院様なほ〳〵頼み申候。荷物も一兩日中に下し可申候。夫には文も成り次第にて候。詠歌たんざく遣し可申候。見て慰み給へかしにて候。はや〳〵人々わやつき、筆を留めまゐらせ候。跡の事頼み入りりまゐらせ候。かしこ。

極月十二日　　　　をのでら　十内

おたんどの

猶々書上略末代まで天下に名を書きとゞめん事、誠の本望これに過ぐべからずと、そもじ見ても嬉しく思ひ給ふべきと、せめて夫をそもじへ名のかたみとも覺え給へかしにて候。此もとの左右なきうちは沙汰なしにて候。

おたんの歌一首左に記す。

筆の跡見るに涙の時雨來てゆひかへすべき言の葉もなし

づくし、身をくだき申候甲斐ありて、此時節にいたり候事、先々是迄をも本望と悦び勇しく、先にも嘸心あるべければ、勝負は互の天運次第にて候。兼ても申すごとくに、公よりいか樣の御咎めにて、たとへ屍をさらされ候ても、少しも恨とも物うしとも思ふ間敷候。忠義に死したる體を天下のものゝふに見せて、人の心も勵まさん事、却て本望にて候。斯のごとくの心ざしにて候まゝ、ゆめ〳〵氣遣ひめさるまじく候、心安う思ひ給ふべく候。そもじ兼々の合點の程もぞんじ候ゆゑ、たとひ萬一いか樣の難儀かゝり來り候とても、見苦しきやうには有るまじく候。又何事もなき世の中にては、猶もつていかやうとも渡世めさるべき心のはたらきおはしませと覺え候ゆゑ、中々心易くぞんじ候。今更思ひ殘る事もなくて心よく打立ち候まゝ、そこもとにてもせめての本望と思ひ給へかしにて候。此度の事我身ひとりにはあらずとも、箇樣に珍しきわざにて成果つる者に添ひてうきを見給ふ事、いつの世の惡緣かとおもふにかひもなく、是非に及ばぬ因果の程、たがひに思ひあきらめの外なく候。爰元の埒明きたるとの便候はゞ一番に玄溪か

註に曰く、玄溪は寺井氏にて、京都に住せし鹽谷家の醫師なり。討入の以前より關東に下り、本町一丁目七文字屋彌三右衛門といへる者かたを旅宿とし、十二月二十六日

可被申候。返事とても此方より言ひ遣りたることを、皆片端より返事に及ばず候。其元の入用のみを御申越候べくと。

十一月三日　　　　　　　　　せんぼく　又四郎

おたんどの

右に記せし文のうちに、猶數箇條あれど省きたる條もあり。中略下略なせしもあり。是より下に寫し出すも大約斯のごとくなり。紙員薄小冊中に記しがたき故と知るべし。猶其なるを知らまく欲せば、吉田小野寺遺書歌と表題なせる古寫本あり。看官幸に求め得ば其委しきを知り給ふべし。予も其書より抄錄す。

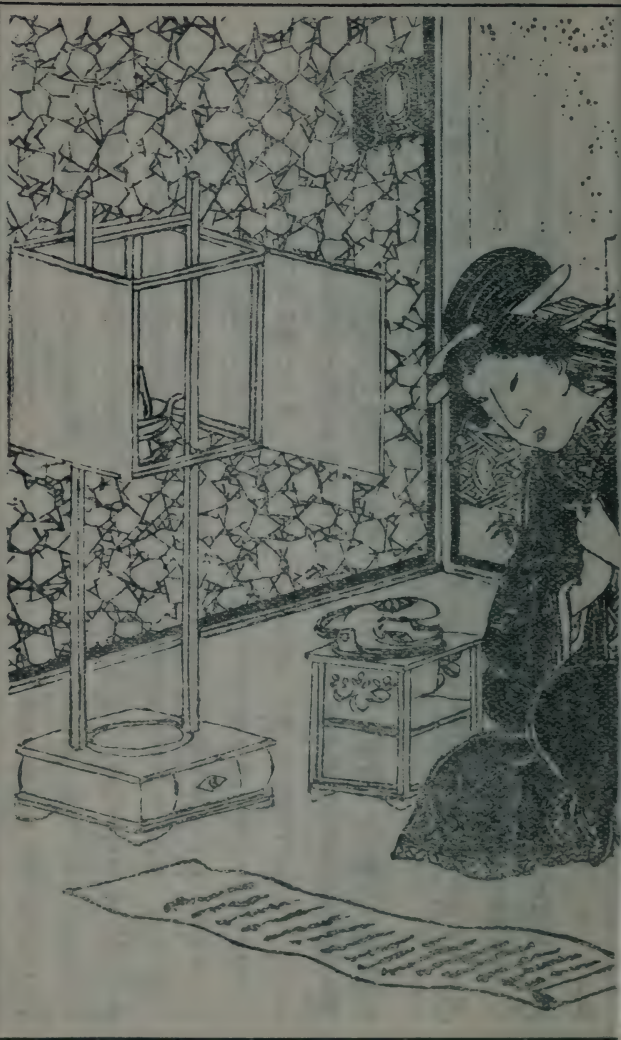
第八十八回

極月十二日、花洛の妻方へ贈る十内の文なり。十二日は討入より三日前と知べし。

一筆申入れ〻。此程登せ候文屆き申候まゝ、此元の左右今や〳〵と待給ふらんと、其心のうちおし計り〻。此許の事やう〳〵時至り〻。此上いかなる大變あらんは格別、かはりたることなければ最早けふより三日は過申すまじく候。二年のうち我人幾ばくの心

裾も少々破れ候へども、誰に頼むべき方もなく、今少しの間と思ひ着申候。裏のほころびは、今日幸右衞門に縫はせ申候。夜は寒さに着物どもを取重ね着申候。晝はたゝみて置き、入用の時ばかりの晴にとたしなみ申候。そもじ着る物今一つ持ちて往けと御申候に、持て參りよかりつるものをと今思ひ申候。さりながら親子の裝束きれいにて、せめて心よく候。

一鴈を此比寄合ひて料理致し候とて、自ら鳥屋へ買ひに參り候。餘り見事に安く候ゆゑ、一羽買ひ申候。そもじへ贈り可申ためにて候。味所鹽しておくり申候。珍しく賞翫めさるべく候。跡は幸右衞門方へ贈り申候。扨此料理早々めさるべく候。あま鹽にて候まゝ、久しく鹽を出し不申、ざつと水に入れ、大根いてふをつまにして、薄味噌にて汁にめさるべく候藤助に頼みてこしらへ振廻ひ可申候。慶庵脈に御出で候はゞ、吸物にして酒一ツ進じめさるべく候。物をおませ候限りともなるべきかにて候。

一我等力彌どのの宿へ移り申候。今迄の所にてはなくて、幸右衞門とは少々隔る方へ參り候。先々今日迄達者にて候まゝ心易かるべく候。其元何かも悟り心つよく暮し申さるべく候。いつの日如何なる事を聞かんとのこと尤にて候。今も如何なる事を聞きたると思ふ心に成りて居可被申候。又々文遣し可申候。人多く候まゝ、此文も幾度にか認申候。そろ〳〵見

秀和ゲ妻
香濃の消
息度見る
身に悲情
胸に満り
八代集
おせん

に書きておくり申しり〵。道中にては草臥ても、外に紛るゝ事なくて、歌をも案じ候へども、是に着きては五十人にあまる同志の人々、入替り〳〵毎日出會ひて、心のひま一寸もなく、獨り靜にして居ることなくて、歌もとりしめて案じならず候。只見ること聞くことにまで、そこもとの有樣を思ふばかりに候。次第にかんそに成行き候はんと思ひ遣りて、いにしへ世にありし時、中島文藏が留守を見るやうにこそと思ひくらべ申候。思ひても言うても盡きまじく候。筆にも及ばぬ事に候。

一爰元の有樣一日々々と暮し申候。若き者ども殊更いきりて、扨々いさぎよく見え申候。忠左衛門、鄕右衛門、久太夫、我等年寄にて、萬事申合候。朔日にて芝居面見世 今いふ顔見世なり、むかしは面見世と云ひしとぞ、時に十月朔日なるべし とて若き者、幸右衛門も見物に參ると見え申候。內の者もなくて自ら何もかもするにて候。若き者ども骨折申し、我等老人とて殊の外かはゆがりて、朝夕の通ひまでしてくれ申候。名をも若き者寄りて、醫者にて候とて仙北十庵と付けて、十庵樣十庵樣と申候。殊の外馳走申候。

按ずるに、十內は惣髮なりしと聞ゆれば斯いふならんか。

一骨折る事もなくて、酒呑み肴喰ひて一日をくらし申候。はや着物の袖口も切れかゝり申候。

じ致し候。

一十四日に寺まゐり、直に非時も振廻のよし過分に存候。お石塔もおいよの程にて恰好よく候よし悦び申候。

一兼ての覺悟も違ひ、手もちからもなく、晝は紛れ給へど、夜の目もいね給はで思ひめぐらし申され候よし、さこそと思ひやり、此かたとても同じ事にて候。水ばなれと申誤り候御申のごとく、月が立つにしたがひ、憂は增候はん事見るやうにて候。常々申すごとくに、人間の榮え衰へ常なき事、道理をよく〳〵悟り候はゞ、うきも却てまことの道に入るたねに成り〳〵。かやうのことは荒增合點のまへにて候。尙又心ある人に出合ひ、咄も聞き、勸も聞きて悟り給ふより外の心得も慰もあるまじく候。過ぎしあとを思ひ出し、往くも殘るも、其有樣を思ひくらして盡きることあるまじく候。互に身のさまをも心のうちをも斯くこそとせめて思ふを忘れぬたね、命ある内の心ゆかしとも思ふより外はすべきかたなく候。只いたましく思ふばかりに候。

一此方の歌、とりわき逢坂の歌あはれのよし、能く聞き給ふと存じ候。其元の歌、さて〳〵感じ入り〳〵。**中略** 是に付きても必ず歌を捨てなくて、絕えず詠み可被申候。歌ども透間

候故、われら參りて、その宿にて酒給べて申出し候までに候。其元にて兼て申合せ候ごとく、お寺へ香典あげて寺參りめされ候はんと、心ひとつにておもひ出し申候。

一是まできのふの晝、人の透にかく書きて置候處に、夕邊美濃屋より十五日六日の文二通屆き申候。廿七日に參り候へども、我等居所知らせ不申候ゆゑ、取りに下され候を待ちて居り候と申して、きのふ取りに遣し申候人取つて參り候。十六日迄の便、くはしく珍しく、逢見たる心地にてまき返しそろ〳〵見申候。そもじ以前のごとく左の胸下痛みて、左を敷きては寐る事ならず、脈も勞れたるとて、慶安殿藥たべ申され候よし、もつともにて候。氣の勞れ嘸その筈にて候。何事も思ひても身よわりてならぬ事にて候。便すくなき身に成り候へば、健にて世を渡る事肝要の覺悟にて候まゝ、病をおす事なく、よく〳〵藥呑みて可被下候。心からいかうおとろへ申さるべくとすもじ致し、一入痛しく思ふ斗りにて候。

一二條へ書付上候とて、我等行先町代よりたづね申候とて家主申候よし、藤助挨拶尤にて候。萬一重ねて尋ね申候者候はゞ、立歸りに關東へ直に連有つて下り申したると聞え申候と申さるべく候。最早爰元へ入り込み候へば其ぶんの事にて候。由良之助どの事も餘所ながら問ひに來る人あつて、挨拶もつともにて候。とり〴〵の沙汰あるよし、嘸とすも

一我等立ちて十日ばかりして、文も頼みて御越候へと申置き候。けふこの比は文來るかと、その傳手約束の方へたづね申候へども、きのふ迄は參らず候。さだめて頓てとこそ屆き候半と待ちかね申候へ。便聞き申度待ち申事に候。

一相宿もしていよ〳〵元の宿に居申され候や、さもなく心細う外へも御越しあるかと思ふまでにては、我等不斷手廻りに在りし小道具も今はなく、家も廣きやうにて、次第々々に物すくなになりて、かんそなる有さま、訪ふ人もれん〳〵に絶々に成りて、心ぼそく暮しめされ候半と、其有さま思ひやり見るやうにて候。夫は互に覺悟のまへの事、今さら心ぐるしとも思ふまじき道理にて候。只息災にて身のくづをれぬやうに心得申さるべく候。此上のわれら心入にて候。

一藤三より金子返り申候か、せりつけて取り申さるべく候。取らぬが大そんにて候。

一藤助より銀子元利定めて濟み可申と存候。とかく人に物取られぬやうに用心めさるべく候。

一廿八日九日にははゝ様四十九日かと覺候得ども、忍びての事なれば寺へも參らず心にておもひ出し奉りて、せめての御事に久太夫、勘助、孫九郎、幸右衛門、おなじ宿に居申

別れ行くおもひの雲のたちそふやけふもしぐるゝ東路の空

所々にて詠む歌の中に、

よりよりに都にかへる旅人の數にもれなん身のゆくへかな

わすれ得ぬ都の空もおもかほに道行く人にたぐへても見る

吾妻に至りて尋ぬるに、ふるき友の殘れるは少し。

まくらかるゆかりの艸も枯れはてゝ霜に起伏す武藏野の原

恁て兩人は吾妻に着きしかば、力彌は垣見左内、十内は仙北又四郎と變名して旅宿をもとめ、專ら同志の面々と會合なし、仇家の樣子を窺ふうち、京都なる妻の許へ贈りし文の内を抄出す。

一筆申入候。そもじ息災にて暮し申され候や、便もなく心もとなう思ふばかりにて候。我等一段無事にて候まゝ、先々心易かるべく候。幸右衛門、新兵衛、久太夫親子、勘助もそく才にて候。

註に曰く、大高源吾變名和久屋新兵衛というて本庄に借宅し、俳諧の點者となり、仇家を窺ふ。幸右衛門は十内の養子にて源吾の弟なり。爾れば新兵衛とは大高氏の事にて、久太夫は間瀨、又勘助とは中村の事と知るべし。

お丹ゆゑ、泪一滴眼に持たず、夫の首途を祝しつゝ、倶に勇んで出し遣りしは、又有りがたき賢女といふべし。是より下に記せしは、十内が吾妻下の道中にての詠歌と、關東に逗留の間に妻に贈りし數通の文の、中にも要と思はるゝを、選みて抄錄なせしなり。此文體を味ひ見ても、夫婦の中に實情あるを、看官宜しく察すべし。

十内秀和が吾妻下の紀行和歌一卷、京都なる妻方へ關東より贈る。

□祿十五のとし都を立ちてあづま路に下るとて、

おきわかれ今朝うち渡る加茂川の水の煙はむねにたちそふ

あふ坂を越えて、

わかれても又逢ふ坂と賴まねばたぐへやせまじ四手の山越

志賀の浦にて、

故鄕にかくてや人の住みぬらんひとり寒けき志賀のうら松

都の空しだいに遠ざかれば、

ふるさとは心あてなる大ひえの山もかくるゝあとのしら雲

日々時雨ふりければ、

いろは文庫　卷之四十四

第八十七回

さればまた由良之助は京洛にありて、關東の樣子を竊に窺ふところ、最早敵の用心も少しは怠惰たるよしなるに、躬方の用意整ひたれば、時いたりぬと歡びて、その身は跡より關東へ下るべきの所存なれば、兼て手筈を定めしごとく悴力彌を先へ下して、鎌倉に居込みし者に安堵させんと思ふにぞ、鉞寺十内と侶倶に伊勢參宮と言ひ拵へて、花洛山科を發足なさしむ。爾ればまた十内方には、娘お伊與と喚ばれしが俄に病に侵されて、終に此程世を去りたるに、打續きて老母さへ近き比身まかりて、袖も乾かぬうちなれど、鐵石心の十内ゆゑ、須臾も猶豫做すべきやうなく、妻のお丹に跡の事など細やかに言ひ遺して、力彌と倶に出立なすにぞ、並々の女ならば娘におくれ姑を先立て、今また夫を旅立たす哀別離苦の悲しさは、如何ばかりありつらん、さらぬだに死別れより生別れ程悲しきはなしと常言にさへ言ふなるに、是は一端別れては、盲龜の浮木に會ふ日はありとも、又再會のなるべきならねば、絕も入るべき事なるを、貞烈無類の

りしが、主人の胤を姙せしは娘ながらも手柄者、些とも恥ぢる事はないと、世間の手前も憚らず、兎角するうち月滿ちて男子出生したりしかば、小平が歡び大方ならず、最大切に養ひしが、其後力彌が讐を討ちて切腹なせしと聞くよりも、お捨は深く歎き悲しみ、終に尼法師と姿を變へて、大星親子の亡跡を明暮弔ひけるとなん。偖またお捨が產みし子は、折から小平に男子あらねば成長の後跡を嗣ぎ、大星方より惠みし金にて許多の田地を買調へ、その子孫連綿として、今なほ那地にありといふ。

仔細委しく書面に認め關東へ言ひ送りしが、奸智にたけし傭竹、猶大星が住居の樣子に心を付けて居たりとなん。嗚呼難いかな大星の苦計、正義を躱して阿房を盡し、他に謗られ笑はれて、敵の間者の耳目を防ぎ、又反間の方便を設けて、躬方の義士の志操を探る。只その父のみならずして、子息力彌も親にひとしく外面に懦弱の色を顯はし、或は遊里の酒に耽り、近所の處女をそゝのかして、あられぬ浮名は立てられても、本心放埒ならざれば、此程お針が袂より取落したる反古の端に怪しき文體あらはれたるを、急ぎ父に見せたりしに、由良之助も兼てよりお針を不審に思ひし故、かの方便にて追出せしなり。然れば力彌が種々なる女に戯れたる中にて、かのお捨といへる者のみ、顏貌こそ然ばかりならね、賤しき水仕奉公をする者には珍しき心やさしき性質なるに、何時しか懷胎したりし樣子を、由良之助は泄聞けど、更に驚く氣色なく、是も一時の策略と思へば、お捨が腹のふくだみて人目に立つも厭ふ事なく、世間の惡評高くなる比、親里へ內々掛合、金子の外に衣類萬端殘る方なく手當して、生涯不通の約束にて、お捨に暇を取らせしに、素より渠が親といふは、前の編にも記せしごとく、同國八幡在なる薪村の百姓にて、佛小平と仇名を取りし正直一圖の爺なる故、誣頼がましき事はさらなり、莫大なる金銀衣類を贈られたるに肝を潰して、再三辭めど聞入なければ、かの品々を受頂き、娘を引取り立歸

孫「イエ、貴君がそんな氣のいゝ事を被仰から、這婦がつけあがつて種々な熱をふきます。」

由「サア、然うではあらうけれど、何分此身の外聞にも拘はる譯だから、腹も立たうが勘辨をして呉れるが宜い。其替り貴樣の顏のたつやうに、何れにも暇を遣すから、針が身分はしばらく此身に任してくれろ」と百般々々に言ひこしらへ、漸孫左衞門に納得させ、其座をば立せ遣り、跡にてお針に金五兩内々に握らせて、「おぬしに咎のあるでもないが、孫左衞門があゝ言出しては、迚も此儘にしては置かれないから、下宿して呉れずばなるまい。其うち折を見合せて、又呼返す事もあらうから」ト是をも色々和むれば、お針は迚も此内に居ない積で過言を言うたるのみか、大星を欺して褒美をせしめんとせし、身に誤もある事ゆゑ、所詮何程言うたればとて、此上金の出るでもあるまい、五兩の金でも取得と、胸算用を倣しつゝも、承知のよしを答へしかば、頓て暇を出せしとぞ。是みな大星が方寸より計りなしたる方便にて、兼てお針の心底を怪しく思ひ居たりしかど、故なく暇を遣しては、猶疑はるゝ事もあらんと、孫左衞門にも心得させ、何處までも由良之助が阿房をつくす體にもてなし、金まで取らせて追出せしかば、流石のお針も方便と知らず、案に違はず宿へ下りて、ありし樣子を恁々とかの傭竹に物語れば、夫程白痴な大星とも知らず心を盡せし愚かさよ。其樣子ではなかなかに敵討は思ひも寄らずと、

るぢやァないか。私だつてお金が欲しいばつかりで、仕かけた仕事だものを、爲そくなつたからと言つて只濟されちやァ、辷つて轉んで痛い思まで爲たのが埋るまいぢやァないか。夫ともに暇を出すなら出すで宜いノサ。ナニ爰の内ばかり日は照りやァ爲ない、何處へ往つても當り前の給金は貰へらァ。さァ出すなら出すやうに道をつけて出してお吳んなはい。旦那が若黨に居膳を爲ろと言付ける内が、何處の何國にありますへ。這方もお持遊にされた替りにやァ、言ふ丈の事は言はねへぢやァ置かねへ。旦那何樣被成て下さいます」ト執柄返しに誣頼かくれば、孫左衞門は腹に居ゑかね、

孫「コレ、无言て聞いて居ると思つて、口から出る儘の事をぬかしをるな。腮が過ぎると打ちのめすぞ。」

はり「こりやァ可笑しいネエ、擲つ譯があるなら擲れやせう。女を擲つたら嚊手柄になるだらう」ト冷み笑へば堪りかね、

孫「其頰けたを」ト言ひながら、拳をかためて打たんとするを、大星周章ておし禁め、

由「これはしたり孫左衞門、たかが女の事ではないか、立騷いで聲高になつては、家内は素より近所の聞えも宜しくないはサ。」

を被仰まし」

由「コレサ、そんなに兩方から理屈を言はれては、困る者は此身一個だァな」

孫「モシ、お辭の中でございますが、左樣なら針が私の部屋へ參つて淫な事を致したのは、貴君のお差圖でございましたか」

由「斯うなつては面目次第もない譯だが、實は箇樣々々しか〴〵如此々々」トお針を頼みしはじめより、渠が詐り三十兩の褒美を貰ひ受んとせしこと、我又立聞せし事まで、ありつる儘に物語れば、

孫「イヤハヤ呆れて物が申されません。貴君はそんな御了簡のお方ではございましなんだが、お心が狐狸とでも入替つたのでございませうか、情ない思召、夫につけても憎いのは此お針め、假令旦那の仰にもしろ、左樣な事は出來ませんと言ふべき筈を、女の身で大膽にも、金鐵のやうな孫左衛門の心を惑はさうと爲たのみか、此身にさん〴〵恥しめられたを面目ないとは思ひもせず、旦那さまを謀つて、御褒美まで貪らうとは、何處まで野太い根性だか、丈の知れない僻者だ」ト苦りきつて白眼つくれば、

はり「孫さん、そんなに怖い顏をお爲でないな。お前も私の持つて往つたお酒を呑倒して居

から、早速に追出してお仕廻ひなさるが宜しうございます」ト言はれて少し由良之助は困りし體にて額を撫で、

由「なる程道理な申分だが、夫には譯が、イヤサ何も譯のあるでもなく、ほんの戯談に言つた事であらうから、此後左樣な不作法な事を、假にも申さぬやうに叱り置いたら宜からうではないか」

孫「イエ〱、夫はなりませぬ。私は此お家の取締を致すやうにと仰付けられてございますに、箇樣な不埒な心得を致す者が居りましては、以來の示しにもなりませんから、たつた今お下げなさいまし。夫ともたつてお針を下げる事がならぬと被仰いますなら、私にお暇を下さいまし。迚も渠のやうな者が居りましては、お宿の取締は出來ませんから」

由「然う六ケ敷言はれては詮方がないから、針に暇を遣ると爲やうヨ」と聞くよりお針はやつきとなりて、

はり「モシ旦那さま、貴君もあんまりな事を被仰ではございませんか。何も私がすき好んでこんな爺さんに唾でも仕かけたい事はございませんけれども、貴君のお賴みゆゑ、怖い夢でも見た積で參つたのでございますのに、何が私に咎があつてお暇をくださるのか、さア其譯

をしたゝか痛めたのだ」ト問はれてお針は肝を潰し、
はり「エ、貴君何様してそんな事をば御存じのでございますエ。」
由「ハヽヽヽおぬしも考へて見たが宜い、三十兩といふ金を出す事だものを、放心して居られる物か。殊に相手があの通りの偏屈者だから、どんな事を言ふかと、實は此身か立聞をして居たが、おぬしが色々言ッても那奴が一向に受けつけないで、腹を立てる樣子の可笑しさ、吹出したいのを堪へて聞いて居たが、餘程苦しかつたぜ」ト言はれてお針はむねギックリ、流石に面目なかりけん、顔赤らめてさし俯向き、須臾返答もなき折しも、次の間よりして孫左衛門が、つかく\と進みいで、
孫「イヤモシ旦那さま、此針と申します者は甚だ不心得な者でございますから、唯今直にお暇を遣されまし。」
由「コレサ孫左、藪から棒に何故そんな事を申すのだ。」
孫「イエ、此女は一體身上の能くない者とぞんじて居りました處、昨夜私部屋へ參りまして、箇樣々々のふしだら」と、ありし次第を物語り、「私の樣な能い歳を致した者にさへ、淫りがはしい事を申し掛けますからでは、御勝手の若者には、いかやうな事を致さうも知れません

はり「エモシ旦那さま、お約束の通り御褒美を頂きたうございます。」
由「フウ、夫ぢやァ首尾よく孫左めに居膳を振廻ッたか。」
はり「ハイ、どんなにか大骨を折りました。」
由「や、夫は大手柄だつた。併那奴なか／＼片意地者だから、つひ鳥渡した事では往なかつたらうが、何様いふ鹽梅に言ひかけたか、昨夜の樣子を委しく咄して聞せて吳んな」ト云はれてお針は爲すまし顔に、
はり「まァお聞き遊ばしまし、何れ素顔では出來まいとぞんじましたから、御酒を持つて參ッて勸めながら、そろ／＼口裏を引いて見ますに、堅い事ばつかり言つて居て、持ちかけやうもございませんから、何でも醉はせないでは不良いと思ひまして、思入れ強付けましたら、口では堅い事を言ッても、醉ふとしだらのない物だと見えまして、後には先から手を出すやうになりまして、又翌の晩も都合が宜くば來てくれろと申しましたョ。此樣子に往けば、なか／＼貴君に御異見をする氣遣はございませんから、何卒御約束の御褒美のうへに、骨折賃をも添へて頂きたい物でございます。」
由「フウ、夫程首尾よく爲おほせたのに、何故また襟首を摑んで突出され、廊下で轉んで腰

遣りつゝ、障子ぴッしやり〆切れば、お針は突出さるゝとき、廊下で辷つて尻餅つき、腰をしたたか打ちしかど、家内の者も寐しづまりしにや、此物音を聞きつけて出て來る者もあらざれば、人に知れては外聞わるしと、痛む腰をば堪へながら、突出されし酒肴を自ら手速く取片付、己れが部屋へと迯歸りしが、獨りつく〴〵思ふやう、さりとは分らぬ堅親仁、那奴がうまく手事に乘れば、三十兩のそのうへにまだ四五兩もねだり出さうに、大骨折つて酒を呑まれ、あげくの果が此樣な痛い思ひをさせられては、些ともうまる所がない、と云つて此儘濟めるのもあんまり智慧のない咄、旦那の前は何處までも熟く仕とげた積に言うて、褒美の金をせしめるとも、昨夜の始末を誰あつて知つて居る者あらざれば、噓とは旦那が思ひもせまい。若此事が後にばれても、旦那の口から表立ち言ふに言はれぬ筋合なれば、貰うた金は猶の事返せとも言はれまい。爾すれば兎に角三十兩取つて置くのが上分別と、欲に目のなき惡婆の本性、速くも思案を定めつゝ、軈て枕につきしとぞ。

第八十六回

次の日お針は由良之助の側に人なき折を窺ひ、邊近くさし寄ッて、

て最う一ッあがつてお吳んなさいョ」ト言はれて這方も吞む口なるに、正直一圖の男ゆゑ、些氣の毒にや思ひけん、據なく苦笑ひをして、

孫「ナニサ、お前が今のやうな事さへ言はなければ、何も腹を立てる事はないノサ」ト是より再び吞みはじめしかば、餘程醉ひたる樣子ゆゑ、最うそろ〳〵と宜からんと、三十兩のほしいばかりに、嚮にも懲りず側へ寄りて、

はり「エ孫さん、腹をお立ちでは悪いがネ、先刻私が言つた事を何とお聞きのだへ。」

孫「何とも聞かぬが、餘り淫に思ふから。」

はり「アレまだあんな堅い事を言ッておいでなさるョ。私だつてよく〳〵お前さんの事を思へばこそ、女の口から恥しい事を言ひ出したのでありますものを、些たァ不便だと思つておくんなさいな。譬にも女の居膳を喰はないのは男の名折だといふぢやァないか。まァ欺されたと思つて、私の言ふ通りになつてお見なさい、まんざら悪くもありすまい」トあつかましくもしなだれ掛れば、孫左衛門は顏色變り、物をも言はずお針が襟首ひつ摑むよと見えけるが、其儘廊下へ突出し、

孫「穢らはしい酒肴、持つて參れ」ト言ひながら、喰ひちらしたる皿砂鉢をも倶に廊下へ突

はり「嘘々、そりやァお内儀さんはお持ちなさらないか知らないけれど、是迄方々の女を迷はせておいでなさるに違はないョ。夫とも女の側へも寄つた事はおありでないの。」

孫「まァそんなものサ。」

はり「ホヽヽヽまァそんなものが可笑しいネエ。お前さんだつて木の股から生れたのでもおあんなさるまいから、口では嫌だと被仰るけれども、まんざら否でもありますまい。私の口からは言ひにくいが、お前さんの様な堅いお方と一生連添ッたら、他に浮氣をなさらうではなし、どんなに氣が安くつて宜からうかと思ひますョ」ト言ひつゝ膝へもたれかゝるを、孫左衛門は取つて突退け、

孫「男女七歳にして席をおなじうせずといふ教もある、座興かと思つて聞いて居れば淫千萬、きり〳〵奥へ往けばよし、うぢ〳〵すると摑み出すぞ」ト目に角立て白眼つくれば、這奴咄せぬ爺とは思ひながらも、三十兩になるとならぬの境ゆゑ、お針は笑に紛らして、

はり「アレサ、そんな六ケ敷い事を言ッたり、怖い顔をしてお呉んなすつては困りますハネ、私だつて惡い氣で言つたのではなし、折角こんな物まで持つて來て、お前さんに腹を立せて歸つては、是から先も永いお突合をするのに心持が惡いではありませんか。さァ〳〵機嫌を直し

孫「コレサ、夫は此身が呑みかけだがな」

はり「お前の呑みかけの方がおいしいノサ」ト尻目に十分情を含んで、孫左の顔をじろりと見れど、這方は一向氣のつかぬ體にて、

孫「ホンニ是は惡かつた。そんならお前は其猪口で呑みなせへ、此身ァ面倒だから此茶碗にする」ト湯呑を出して手酌でつぐを、少し醉はすも宜からうト思へばお針は態と止めず、稍五六杯かたむけて、ほろ醉機嫌になりたる比、

はり「アレサ、そんな大きな物であがつては毒になりまさァネ。此お猪口を進げるからこれになさいヨ」ト言ひつゝ、そろ〳〵膝の側へすり寄れば、孫左は跡じさりを爲ながら、

孫「コレサ、そんなに側へ來て吳んなさんな。此身ァ女の髮の匂や白粉の匂を嗅ぐと、胸が惡くなるから」

はり「オヤまァきつい物だネエ。夫ぢやァお前さんは女はお嫌かへ」

孫「嫌の段か、極の嫌サ。其證據は、國許に居た時分にも、女房を持たないかト進める人もあつたけれども、女といふ者は何だか穢いものだから、とう〳〵貰はないで、此年まで獨身で濟せたのサ」

はり「ナアニ、此お肴は旦那さまのお寐酒に進げる積でこしらへましたが、御頭痛氣で召しあがらないから、次で喰べろと被仰つたのを、お前さんがお淋しからうと思ッて持つて來ましたノサ。お燗もついて居ますから、さアまア一つおあがんなさいョ」ト酌を取ッて勸め掛ければ、

孫「夫は思ひがけない仕合だの。實は寐るには早し、斯ういふときに一德利もあつたら宜からうと思ッて居た所だから別して有難い。夫ぢやァお辭義なしに頂かう」ト猪口を取つて二三盃續けて獨り吞むほどに、

はり「オヤ、私も些とお合を仕ませうぢやァないか。」

孫「ナニ〳〵、此身ァそんな面倒くさい事をするより獨りが勝手サ。何なら其所へ閣いて往きなせへ、手酌で吞むから。」

はり「アイサ、お前さんもあんまり一國だネエ。私も退屈で仕方がないから、折角一所に吞まうと思つて持つて來たのに、閣いて往けとはあんまりだネエ。お前が吞せないとお言ひの程、猶吞んで進げるョ」ト言ひながら、孫左が半分吞んで下へ置きし猪口を、いきなり取つてグイト吞む。

第八十五回

偖もお針は由良之助が眞顔になつて頼みしのみか、首尾よく往けば三十兩の褒美の金になる事ゆゑ、獨り心に歡びつゝ、ある夜少しの酒肴を用意なせしを携へて、孫左衞門が部屋にいたり、裡の樣子を窺ふに、折よく獨り淋しげに、火鉢にもたれて居る體ゆゑ、障子を明けて内へ這入り、

はり「オヤ、まだお臥房でなかつたネ。」

孫「誰だと思へばお針どん、旦那でもお召しなさるのか。」

はり「イヽエ、旦那さまは少しお頭痛が遊ばすと被仰つて、早晩になく宵からお臥房遊ばすし、若旦那は晝からまだお歸りがないから、お奥に居ても御用はなし、あんまり退屈だから遊びに來ましたノサ。其替りに宜いお土產を持つて來ましたヨ」トかの酒肴をさし出せば、孫左衞門は額を撫で、

孫「是はとんだ御馳走だの。併お前のお振廻では氣の毒だ。」

いろは文庫第十五編序

栴檀の林に入る時は、衣自から芳しと、實や四十七士の徒が、誠忠義膽は今更に、云ふもなか〳〵愚なれど、其家族にも烈婦あり、又從ふに義僕あり、所謂原武林の母の如き刄に伏して子を勵し、或は片岡近松が僕に、元助甚三郎ありて、倶に忠死を遂げんとす。其他なほ許多あれど、夫が中にも鉞寺が妻は、女の道を正しくして、事に臨みて駭かず、眞の女丈夫と云ふべきか。殊更敷島の道を嗜みて、一世の秀吟尠からず。然るからに這編中には、十内より妻に贈るの數通の文を抄出してもて、眞情の細やかなるを婦幼の爲に示さんと欲す。看官宜しく味ひたまへ。

東都　爲永春水誌

より三日程すぎて、風呂にも這入り髪も取りあげ、常より身形を取繕ひて、少しばかりの酒肴を竊に自ら携へツヽ、孫左衛門が部屋に往きたる後の物語如何ならん、开はまた次の編に綴るを見て知るへし。

生付いての欲張にて、お捨が力彌と情曲あることを聞出してさへ、種々と人も賴まぬ入智惠をして、先手切金となつた時には、世話を爲たといふ處で、その上前をはねやうと云ふ事をまで技倆ほどの女ゆゑ、四十を越した孫左衞門、心には染まねども、怖い夢でも見た積で、少しの聞我慢をすれば、三十兩になる仕事、是まで男をあやなす事は、隨分仕なれし所爲なれば、造作もないと心では思ひながらも困りし顏にて、

はり「貴公何を被仰るかとぞんじましたら、如何な事でも私にそんな事が出來ますものかネエ、ホヽヽヽヽ。」

由「サア、是は至極迷惑な譯とは思ふけれども、枉げても是をやつてくれないぢやア、自己の望も叶はないと云ふものだから、何分どうか賴みたいものだ。若また熟く往つたうへでは、約束の三十兩の外にも、又別段の爲やうもあらうから、骨を折つてくれるが宜い」ト十分過た咄ゆゑ、お針はいよ〳〵乘地にして、

はり「そんなにまで被仰いますなら、何をするのも御奉公でございますから、私で出來るか何樣かまア遣ツて見ませう」ト口には言へど腹の中では、はや三十兩せしめた氣ゆゑ、是よりうへは五兩くれるか、三兩增があるだらうかと、貰ふ事のみ目算をして主人の前は退きしが、夫

たらうが、今時そんな馬鹿律義な者があるものか、自己も國に居た時分は、田舎堅氣な事も言つて見たが、段々花洛の水が腹に染込んでからの了簡では、百萬年も長生をして、好な事をして樂しむのが當世かとおもふけれども、兎角孫左めが惡世話をやくので困るのヨ。然うかと言つて暇を出さうにも、渠は親共の時分から使つた譜代の者だから、今更咎もないに追ひ出す譯にも往かず、おぬしに頼みといふのは爰の所だが、先ッ自己の工夫では、那奴が歳は自己に二ッ上だけれども、まだまんざら女に用のない事もあるまい、其處をおぬしのはたらきで、何樣か居膳をして見てはくれまいか。譬にも女の居膳を喰はない男はないとさへいふに、あの男は宜い事には酒が好だから、一盃呑ませて醉つたところへ持掛くれば、否と冠を振る事ではあるまい。必竟は那男が是迄面白い事の味を知らないから、堅い事ばかり言ッて居るけれども、おぬしと内證に出來ても爲て見ろ、自分がうまい事をするに付けても、なる程旦那が女に現をぬかすも無理はないと思ひ遣りが出來て、自と異見も言はないやうになるは必定、然うなれば誰に遠慮もなく、好いた太夫を内へ入れ、世間晴れて樂しまれるといふものだ。此事をおぬしが首尾よくやッて呉れば、骨折には金三十兩遣すが　何樣ぢや頼れてたもるまいか」ト思ひがけない大星の言葉に、お針はあきれ果てしが、何でも金になる事と聞いては、見遁す事の出來ぬ

由「是は早速の承知でかたじけない。實は忰がむだ金を遣せるとは言ふものゝ、自己も島原や祇園町では、隨分馬鹿な事を爲て居れば、叱言も言はれず、尤先頃嵯峨の蕈狩に怖い思をしてから、急に金の惜しい事を思ひついて、遊所通を止めては見たが、堅くばかりしても居られず、かの女郎買の糂粏汁とやらで、内はひどく倹約をして、外へ出ては金を遣ふが、是も實は馬鹿馬鹿しい事だから、同じ事なら、自己が極々氣に入つて居る島原の柏木といふ太夫を身請して内へ呼取り、手活の花を樂しむ方が、金はかためて出るやうだが、外へ出て遣ふより餘程倹約にもならうし、其のうへ第一宜事にやァ、嫉妬を燒かうといふ女房は、里の親仁が分らない事をいふから返して仕廻たし、年頃になる忰は旅へ立せるし、二個の子供も、困るなら世話を爲て遣らうといふ親類もあつて見れば、何も遠慮はないやうなものゝ、困るのは那若黨の孫左衞門だ、おぬしも知ツて居る通り、律義一遍の男だから、自己が遊所狂をするのをやかましく異見を言ツて、其うへ世間の評判にも、赤尾の腰拔浪人が主人の怨を晴さうともせず、自分の身構ばかりする、揃ひも揃ッた臆病者と噂をされるも殘念だから、叶はぬまでも仇討の覺悟を爲ろと度々の進めサ。自己だッてその位な事は百も承知爲て居るけれど、名を取らうより得の世の中、誰も頼みもしない事に骨を折ッて、揚句の果にやァ大事の命を捨てるやうな野暮な事は、昔は隨分あつ

宮から關東の方を遊歴に出かけるといふから、悴をもつけて遣つて、些と關東で稽古事の修行でもさせやうと思ふのョ。」

はり「夫は宜しうございますが、貴公はまア奥樣はお里へお返しなさる、若旦那樣は旅へお遣り遊ばす、跡にはお幼少お慈童さんの是は次男の吉千代と三男の大三郎をさしていふお二個ばかりで何樣遊ばしますへ。」

由「サア是には深い譯のある事ョ。夫について兼ておぬしは小才覺もあつて、物の用にも立つ者と見拔いて置いたから、此一大事をうち明けて、相談相手になつて貰ひたい事があるのだが、かならず人に他言いたしますまいと言ふ誓言が聞きたいものだ」ト言はれてお針は腹の裡に、常に變つて主人の辭、一大事とあるからは、若仇討の事ではないか、何でも宜いから聞出して、倘竹かたへ内通なさんと思へば、故意と笑ひながら、

はり「何だか大層むづかしい事を被仰ますネエ。」

由「イヤモウ至極むづかしい事だが、おぬしならば出來やうと思ふから賴むのだが何樣だらう。」

はり「そりやアもう旦那さまの被仰る事でございますものを、人に言ふなとなら神々樣を誓に立てましても申しますまいが、私のやうな者に何の御相談がございますエ。」

第八十四回

大星は千鳥足にてひよろ〳〵爲ながら一間へ通れば、お針は跡よりついて來り、茶を汲んで出しながら、

はり「旦那さま、大そう今日はお歸りがお早うございましたネ。」

由「歸りは早くツても酒は大そう呑んだ。何樣ぢや醉つて居ると見えるか。」

はり「ホヽヽヽ宜いではございませんか、醉ふためにあがる御酒でございますものを。」

由「なる程、醉ふための酒だから醉ツても苦しうないと申すのか。おぬしはなか〳〵物の分ツた者だ。夫はさうと、自己の留守に誰も來はしなんだか。」

はり「ハイ鉞寺さまが御出でなさいまして、若旦那樣の事についてお噺があると被仰ましたが、お留守と申しましたら、夫では又參らうとお歸りなさいました。」

由「ハヽア、夫では關東下向の日取を相談に來たと見えるわい。」

はり「エ。」

由「ナニサ、力彌めが内に居ると、むだ金ばかり費させてならないから、今度鉞寺が伊勢參

夫と云ふが、那若旦那の男ぶりに、お前が惚て居るのだらうが、若旦那の氣ぢやァほんの當座のなぐさみに手を出して見たら、お前がおつな體になつたから、今ぢやァよせば宜かつたと思ッてお在なさらァネ。其證據は、ヤレ空腹い時の不味ものなしだの、子の出來ない女をはじめから見立て掛合へば宜かつたのと、好な惡口を利いてお在なさるヨ。そんな男に這方からばかり義理を立てたつて何になるものか。お前は年が往かないから、今の所ぢやァ跡先の考へもお在りであるまいが、是なりに宿へ下ッて御覽、爺さんや母さんだッて、宜く爺なし子を孕んで歸つたと歡びも爲なさるまいし、第一近所隣へ聞えても外聞が惡からうぢやァないか。その時になつて後悔を爲たッて仕樣がないから、私の言ふやうに、何でも金を並べて見せないうちは、石が舍利になつても爰の敷居は跨いで出ないと、腹を居ゑて御覽、是丈の家臺骨だものを、急度相應の手當は爲てくれるに違ひないから、夫でお前の體の落付は何樣にも出來らァネ」ト側からやたらに焚付けても、正直一圖のお捨ゆゑ、何と囘答もなしかねて、只もじ〳〵爲て居る折しも、エヘン〳〵ト咳拂ひして、表の方より由良之助が立歸りたる樣子ゆゑ、若聞かれしかとあやぶみながらも、お針は故意とさあらぬ體にて、他の咄に紛らしッヽ、空笑ひして居たりしは、なかなか不敵の女と見えたり。

ンといふ程金をいたぶり取つて、身の振方を付けるが肝心だョ」

すて「然う何もかも知つてお在ぢやァ隱した處が詮方がないから言ひますがネ、實正はふとした事から若旦那の御手が付いて、こんなお腹になつたのだがネ、何卒後生だから誰にも咄してお呉れでないョ」

はり「そりやァ私だつて隨分是まで苦勞も爲た者だから、お前のために惡いとおもふ人にむやみと咄しをするものかネ。そりやァ宜いが今言つた手切のところは何樣爲やうと思ふのだへ」

すて「そりやァ最うお前の深切に言つてお呉れの處は寔に嬉しいけれども、私のやうな田舍者を、若旦那が何とか思召して、斯ういふ事になつたのは、冥加ない事だとおもつて居ますものを、此うへお金を下さいなんぞと、そんな勿體ない事が言はれますものか」

はり「夫ぢやァその儘で下げられても言分はないとお言ひのか」

すて「ハイ」

はり「イヤハヤ、お心よしにも程があつた物だ、呆れかへつて物が言はれないョ。何所の國にか、さんざつぱらなぐさまれて、腹にいはくまで出來て居ながら、物言なしに追出されて往くといふやうな痴氣な業さらしが、世間に二個とありは爲ない。側で聞くさへ齒がいゝやうだノウ。

顔赤らめしが、素知らぬ體にて、
すて「オヤ否なネエ、私やァお腹に赤子なんぞは在りもしないのを。」
はり「アレサお隱しでないョ。私やァ遠から知つて居るがネ、まァ相手が惡くないから、そんな體になつても宜いやうな物だけれども、お前があんまり氣が宜いから、困るやうな事でも出來は爲まいかと、夫が案事られるから聞くのだァネ」ト言はれて返詞に困りし體にて、さし俯向いて居たりしが、
すて「お針どん、お前そんな事を誰にお聞きのだへ。」
はり「誰に聞かなくつても、大體樣子でも知れた物だァネ。那若旦那はあんなおとなしさうな顔はしてお在なさるけれども、とんだ浮氣もので、方々の娘をつまみ喰をするのがお好だから、お前の事も何と思つてお在なさるかと、今がた口うらを引いて見たら、若困れば暇を遣る分の事だと一向に平氣なものサ。お前だつてこんな體にされた曉に、些とやそつとの手當を貰つて下げられちやァ實にうまらない咄だが、然うかと言つて此内のお嫁公さんに引上げられる譯にもなるまいから、何でも田舍の爺さんと相談をして、手切の五十と七十は取らないでは動かないと言ふが宜いぜ、若お前がたの手際で往かざァ、私も內證で智惠を貸して進げるから、ウ

はり「否な若旦那様だネエ。ホヽヽヽ」ト笑ひながら振切つて迯出して往くとて、袂より何やら反古の端の押丸めたるを落して行きしゆゑ、力彌は手速く拾ひとり、皺になりしを廣げて見れば、お針どのへ藪井よりと上書せし文の切端、怪しみながら中を讀めば、

兼て申しふくめ候通り、先日より追々御内通御申越のおもむき、一々承知いたし候。親子とも只不しだらの事のみにて、別に怪しき體も御見うけなきよし、左候へば關東へ

トばかり跡は破れてあらざるを、力彌はつく〴〵讀返し、獨り點頭き居たりける。お針は大事の文の端をとり落せしとも心づかず、その儘勝手へ立出れば、お捨といへる小女が張物をして居るを見て、

はり「オヤお捨どん、大そう精を出して張るの。そんな高い下駄を履いて轉ぶと胞衣がからむといふぜ。」

すて「何だとへ胞衣とは。」

はり「アレまァ此孃は知らないのかノウ。赤子がお腹に居るうちは、臍から長い紐のやうな物が出て、其先に付いて居る胞衣といふ物を天窓へ冠ッて居るトサ。夫だから萬一轉びでもすると、其胞衣の紐が赤子にからみ付いて、産むとき骨が折れると云ふ事だヨ」ト言はれてはつと

して參つたら、お困んなさいませうがネエ。」
力「然うなつたら又手切とか足切とかいふ事だらうが、是迄そんな譯で親仁に度々金を出させたから、奈何なことでも些と氣の毒で言ひにくいノウ。」
はり「夫だつて何れ丸い物を握らせないでは治りは付きませんハネ。」
力「若いよ〳〵困ッたら、內證で自己の刀でも賣拂ッて間に合せて置く分の事サ。」
はり「夫だからあんまり喰ひちらかしを遊ばすなと申すのでございますョ。」
力「ナニ、こんな事を怖がつて面白い思が出來るものか。其處で針なんぞは子が出來るか出來ないか。」
はり「ホヽヽヽ何を被仰かと思へば、私なんぞはそんな相手がございませんから大丈夫サ。」
力「ナニ、若も誰か相手があつた時は何樣だと聞くのだはな。」
はり「私共は子なんぞをこしらへは致しませんが、夫を聞いて何に遊ばすの。」
力「子が出來ずば相手になつて見やうかと思つてサ」ト言ひながら手をつかまへて引寄せる眞似をすれば、

はり「アレまァ人の惡い、喰がくしを爲て被爲入ョ。夫も一寸した事なら宜うございますけれども、私が何樣も怪しいと思ひましたから、此間那孃と同樣にお湯に這入ますとき氣を付けて見ましたら、お腹も餘程大きくなつて、乳が黑くなりました處では、最う大かた五月ぢかくなつて居るらしく見えますが、貴公あんな事をなすつて、何樣爲やうと思召しますエ」

力「エ、夫ぢやァ眞正に出來たのかノウ。」

はり「眞正の噓のと、御覽じまし、餘程目立つ程大きくなりましたァネ。」

力「そいつは大變だ。自己の氣ではほんの空腹ときの不味ものなしで、放心手をつけたが、夫はとんだ事になつた。全體子の出來ない女を見立て掛り合へば宜かつたッケ。」

はり「ホヽヽヽ、どれが子が出來るか出來ないか、顏付で知れますものかネ。貴公は寔に氣樂な事ばかり言ッてお在なさるョ。何れにしてもあんなにお腹の大きくなつた者を、這方のお宅へは置かれますまいが、何樣被成思召でございますネエ。」

力「何樣と言ッて詮方がないから、暇を遣る分の事サ。」

はり「貴公然う手輕く被仰ますけれども、お捨の宿は八幡在の薪村とかいふ所の百姓で、筋者だと申す噂でございますから、娘を疵ものにされては引取られないなんぞと、宿から六ケ敷申

はり「オヤ、貴公此頃ぢやァお學問なんぞは些とも遊ばさないで、そんな事ばかり御精が出ますネ」ト、此ことば遣ひのやうすにては、下女にまで心やす立をせらるゝものと見えたり。力彌は笑ひながら、

力「夫はその筈だァな、叱言を言はうといふ親父はあの通りの遊所狂ひ、お母堂は里へ歸されて内には居ず、誰も天窓の押へ人がないから、斯ういふとき面白い事を爲ないぢやァ、する時はありやァしないはな」

はり「ホンニ、旦那さまも速く御嫁公さまをお貰ひ遊ばせば宜うございますのにネエ」

力「まァそんな物サノウ。年比になつた者に女房も持たせず、自分ばかり好な眞似をして居るのだものを、這方も手當り次第女をこしらへたからと言ッて當りまへサ」

はり「夫でも貴公あんまり喰ひちらかしはおよし被成ましョ。世間で惡い評判をいたしますから」

力「ナニサ、口では斯ういふけれども、そんなに出來る物ではないノサ」

はり「イヽエ、然う被仰ますけれども、那山出しのお捨を貴公何樣かなさいましたネ」

力「なんのあんな者が何樣なるものかな」

第八十三回

大星は敵方より廻し者のあらん事を、兼て推せし事なれば、下女下男にも心をゆるさず、只遊興を專らとして、いよく〳〵放埓の馬鹿物と思はするやうにふるまへば、悴力彌も父にひとしく、近所の娘に戯れて、文など贈る事もあり、又は筋わろき女にかゝり、手切金をゆすり取られて、世間へ恥をさらす事も度々に及びしが、ある日力彌は只一個その身の部屋にて書物をして居る處へ、例のお針といへる下女が、緣側の障子を明けて顔を半分出しながら、

はり「オヤ若旦那さま、何かしんみりお書物でございますネ」ト言はれて力彌は机の上にもたれながら見かへりて、

力「誰だと思へば針か、行形其處を明けたから膽を潰した。」

はり「ホヽヽヽヽ夫ぢやァ何か内證のお書物でございましたネ。」

力「ナニ流行唄を書いた物を借りたから寫して居た處サ。」

仇を報ふ所存などはあるべきやうにも思はれねど、猶も實否を探り見んと、其身の縁類の者の娘ことし廿五歳になりて、その名をお針と喚ばれツヽ、心刺したる女子ありしを、大星かたへ口入して、下女奉公に住み込ませ、内外の事に聞耳立てて、變りし體のあるならば、内通せよとぞ言付ける。此お針の事につきて又一段の物語あり。次の巻を見て知らん。

貴殿をはじめ御家内の愁傷さこそと察し入る。是みな師直殿一人の心から事起り、亡君の御最期數千人の者の難儀何程といふ限なし。是までの鬱憤を一時に晴すも今姑く、かならず年内は過さねば、貴殿吾妻へいたられなば、彼地の同志の面々へ拙者が所存をお咄しなされ、目出度く本意を遂ぐる日を彼所において待ち給へ」ト勇めはげます大星が詞に憂も忘るゝばかり、鄕右衞門は心いさみて、一日山科に逗留なし、急ぎ吾妻へ下りしとぞ。

○爰にまた同じ山科の邊に住む藪井傭竹といふ者あり。醫者とは云へど匕は利かず、人見せかけに玄關へ藥箱は飾りて置けど、或は嫁のはしわたし、地面の賣買、金の世話、又は座敷の取持などを賴まるゝを業とせし、世にいふ幇間醫者なるが、生國は關東にて前の編にあらはしたるかのお蘭の叔父なるゆゑ、兼てお蘭の許よりして、由良之助の樣子をば近所の事ゆゑ心を付け、若仇討の體もあらば、速く這方へ注進あるべし、功によつては師直より褒美は澤山あらんといふ文通度々ありしかば、素より慾に目のなき者ゆゑ、大星かたへ取入つて、折々遊所の供などいたし、心をつけて窺ふところ、酒に生根を失うて、取締りたることとてはなく、或ときは刀を間違へ、又は懷中物などを忘るゝ事は度々なるゆゑ、何か怪しき書物などの有るかと內々改め見れど、武器を拂ひし請取手形や、揚屋の書出しばかりにて、是はと思ふ事もなく、實に本心放埒にて

に取亂し、涙にあやもなかりしが、かくて果つべき事にあらねば、泣々母の亡骸を菩提の寺へ葬りつゝ跡念頃に弔ひなどする、是等の事に日數經て、はや二七日に及びしかば、鄕右衛門は母の事忘るゝひまはあらねども、大星に誓ひたる詞もあるを、いつまでか此儘にしてあるべきならねば、いまだ忌は果てねども、跡々の事なんど妻と弟に云ひふくめ、一期の別れをなしッヽも京都山科に立越えて、大星かたにいたるにぞ、由良之助は對面して、

由「イヤ是は鄕右どの、此程古鄕に參られてから、約束よりも日數も延び、其うへ只ならぬ顔色と見請けますが、御不快とでも申すやうな事でござるかネ」

鄕「イエ、私の身に變ります事はございませんが、思ひ寄らず母を失ひまして、夫ゆゑ箇樣に延引致しました」

由「エ、夫は御急病とでも申す譯で」

鄕「ヘイ、至極の急症でございました」トありし次第を物語り、かの書置を見するにぞ、駭きながら大星は首尾を讀み下し、餘りの事に感に堪へけん、忽地倒れ臥したりければ、鄕右衛門は驚きて、力彌と倶に介抱做せば、漸々にして心づき、

由「扨も〳〵御老母の御義心、かの竹林只七の母と一對にして勝劣なく、男子も及ばざる所、

一筆申殘しりく。常々孝心ふかき事は詞にも述盡しがたく、殊更母の事を思うて、七里行きて立ち歸る程の心遣ひ、我身にとりてはいかばかりか歡び入り候へども、先討入と言はんとき、風と母の身の上を思出し給ふならば、進む勇氣も忽地くじけて、敵に內兜を見られ給はんか、是全くは母の存命あるゆゑとぞんじ候まゝ、惜しからぬ老の命、今宵先立ち申し候。此うへは跡に心殘りなく、師直どのは亡君の仇、母の敵とおもひつめ、討入給ふものならば、尖き手柄を致され候はんと安堵いたしりく。何事も最期をいそぎ早々申殘し候。惣三郎お衣へもよしなに申傳へ賴入りりく。かしく。

母

原　鄕右衛門どのへ

鄕右衛門は讀終りて、聲を惜しまず泣叫び、

鄕「世には不孝の者もあれど、此身のごときものはあるまじ。かくと夢にも悟るならば、七里の道は歸るまじきに、よしなき事を申上げんと、愚なる事をせし故に、此御最期は遂げさせたり。ふがひなき私を、御命を捨てられてはげまし給へる御慈愛の程、いつの世にかは報ぜん」ト流石に猛き鄕右衛門も死骸にひしと取付いて、前後不覺にうち歎けば、おなじ思に惣三郎もお衣も倶

母「お前がどんなに隱しても、私は然うと思つて居たが、咄を聞いて猶の事こんな歡ばしい事はないヨ。お前は殿さまへ忠義を立てて、惣三郎は跡へ殘つて介抱をして呉れゝば、私は夫で十分すぎる。假令夫までにゆかずとも、私の身は何となつても、適れな手柄をして、名を後の世に殘すならば、其上の孝行はないから、外の事は何にも思はないで、一圖に本望を遂げやうといふ覺悟で發足をするがよいヨ。此うへは改めて最期の盃を爲ませう」ト再び酒の用意をさせ、親子の名殘と取りかはす、面に憂の色も見えず、機嫌よげなる母の體に、鄕右衛門は安堵して、思ひがけずも其夜も又我家の臥房に休みしが、むだに一日を過せし事ゆゑ、次の朝はきのふより猶逸早く起出でて、いそがはしく支度調へ、はや出立をなさんとするに、前の朝は我身より先へ起きたる母親が、今朝は何とか爲たりけん、まだ目を覺せし體もあらぬを、暇もつげず出立のなるべき事にあらざれど、宜く寐しづまりて在するを起すも本意にあらずとて、姑く覺むるを待つほどに、夜は明けたれど音もなし。餘りの事の訝かしさに、母の臥房を覗き見るに、無慚や母はあけに染みて自害なしたるありさまに、鄕右衛門は狂氣のごとく、這は〳〵如何と駭きさわげば、妻も弟も駈けよりて周章限りあらざるのみ、何と辭もあらざりけり。其中に鄕右衛門はきつと心を取鎭め、傍を見れば枕元に一通の書置あり。おし開きてよみ下せば、

おもふものを、子は夫ほどに思はぬかと恨み歎かせ給ふべし、是と速くも心づかばうち明け申上ぐべきにと、流石强氣の鄕右衛門も、爰にいたりて勇氣もくじけ、一足とても進まねば、寧の事に取つて返し、仔細具にうち明かし、改めて今生の暇を乞うて出立せんと、元來し方へと足を早め、其日も旣に暮るゝ比、再び我家に立歸れば、母をはじめ妻も弟もうち駭きつゝ樣子を問へば、失念物を致せしゆゑ歸りし體に言ひなして、家内の者を安堵なさしめ、扨鄕右衛門は一間にいたり、母の前に頭をさげ、

鄕「私が立歸りましたも外の事ではございません、全くは箇樣々々」ト七里行きて休みし所、子をいつくしむ鳩を見しことありのまゝに物語り、「實に今更申上げますも恐入りますが、御推量にすこしも違はず、大星殿をはじめ四十餘人申合せ、高の屋敷へ亂入いたし、師直殿のお首を申受けんといふ此度の企、さすれば再びお母さまにお目に懸る事は出來ません。お年寄られた一個の母うへ、いかにもお側に居りまして孝養が盡したうございますが、お主の御恩も又重く、忠孝二ツを全く致し得ませぬ段は是非もない事と思召し、不孝の私へ何卒お暇を下さいますやう偏にお願ひ申します」ト聲うるませて物語れば、母は反つて涙もこぼさず、莞爾とうち笑ひ、

第八十二回

偖次の朝は暗きより、母もとも〴〵起出て、手づから燒飯をこしらへつゝ、是を晝飯に爲給へなど、心を添へて世話なすにぞ、見る事聞く事郷右衞門は胸の塞がる事のみなるを、忠義のためと思ひ直して面の色にも顯さず、老母をはじめ妻弟にも、是今生の別れと思へば、猶念頃に暇乞して、赤尾の在所を立ちはなれ、七里ばかりも步み行しに、はや晝飯の頃にいたれば、其あたりの木蔭なる涼し氣なる所に立ちより、ありあふ石に腰うちかけて、かの燒飯をとり出し、はや母人の志を受くるもこれを限なりと、おし戴きつゝ燒飯の四ツありしを三ツ食して、既に腹に滿たれば、殘る一ツを此儘おかば、時分がらの事なるゆゑ味の變るべし、いかゞなさんと見かへれば、わが休みたる木の梢に、鳩の巢かけてありしかば、殘りたる燒飯を鳩に遣らんと、木の枝の程よき所にさし置けば、件の鳩は嬉し氣に飛下りツ、くはへ行くを、如何するやと見あぐれば、おのれは喰はで巢の中なる子鳩に喰はする體たらくに、郷右衞門は思ふやう、鳩は僅の小鳥なれども、子を思ふ道は斯のごとし、況して人間でありながら、此度吾妻に赴かば、討死するか腹切るか、いづれ命はなきものを、僞りかざりて別れを告げ、後に實を聞き給はゞ、親は箇程に

我切腹を爲たるよしを聞かせ給ふは是非もなけれど、成るべき丈は一日も遲くお耳に入れるにしかじと、思ひ直して平伏なし、

卿「是はまた思ひもよらぬお疑ひ、勿論城中に居りました時分には、色々評議もございましたが、同意の者に心變りが多くございまして、とう〳〵其相談も整ひませず、只今では大星氏はじめ、思ひ〳〵に身の落付を定めるやうになりました。なか〳〵お母樣をお欺しまうす譯ではございませんから、御疑念をお晴し遊ばし、春になつて私が目出度くお迎ひに參りますのを、お待ちなすつて下さいまし」ト口には言へど心では、親を欺く勿體なさ、許させ給へと念じツヽ涙かくしてさし俯向けば、つく〴〵聞いて母は點頭き、

母「夫程に言ふには何か深い樣子もあらうから、推しても聞くまい。そんなら春を樂に待ツて居ますから、隨分道中も氣をつけて、殊更殘暑の强い最中、朝を早く立つて日中は休むやうにするが宜い。定めて勞れも爲たであらうから、今夜は宵からゆるりと寐て、翌の朝私が起すまで、草臥を休めなさい」ト殘るかたなき母の慈愛に、有難き旨返答して、おの〳〵臥房に入りしとぞ。

ないやうにして進げて呉れろョ」ト懐中より金三十兩取出し、惣三郎に渡すにぞ、弟も妻も久々にて無事な顔見て嬉しいと思ふ間もなく發足とは、餘り本意なき事とはおもへど、禁むべきにあらざれば、お母様のおんうへはかならず氣遣ひたまふなど、言葉を揃へて答をなせば、母はつく〴〵鄕右衛門の顔うちながめて形容を改め、

母「悴や、お前が吾妻へ發足、此うへもない目出度い事と、私はどんなにも嬉しく思ふがネ、おなじ歡ばせるなら、實正の事を言ッて安堵させて呉れるが宜いではないかへ。」

鄕「エ、實正の事とは、夫は何樣申す事でございますか。」

母「なる程是は迂活には口外の出來ない事であらうが、爰に居るのは內輪の者ばかり、他人の聞くといふではなし、先私の推量では、諸侯がたへ召抱へられると言ふは全くの僞、實は大星殿と心を合せ、御主人の仇を報はう爲に、關東へ旅立をするのだけれど、打明けて言ッたら母が歎いて、萬一禁めでも爲やうかと、隱すも無理はないけれど、女でこそあれ私も武士の母だものを、未練な心は出さないから、心殘りのないやうに、何事もうち明けて咄した方がよいではないか」ト星をさしたる母の辭に、鄕右衛門は駭きて、かく御推量あるうへは寧うち明けありの儘お物語を致さうかと、口まで出しがイヤ〳〵、あのやうに母上が心強くは仰あれど、是が此世

お守でございますヨ」

郷「然うか、夫は仕合な小坊主めだ。トキニ弟が見えないが何樣で爲たか」

きぬ「イヽエ、一寸近所まで」ト言ふうち弟の惣三郎も歸り來りて、兄への挨拶種々あれど、事繁ければこれを略す。看官宜しく推すべし。そのうちお衣が手料理にて、夫の歸りを祝さんと思ふ心の花松魚、つくね鱠も繕はぬ膳に盃とりそへッヽ、酒あたゝめてさし出せば、水入らずなる親子夫婦が久しぶりなる面會に、頓て酒宴に及ぶほどに、母は殊更笑しげなる機嫌を考へ郷右衛門が、

郷「さてお母樣、私もしばらく京都に參りまして、身の落付を定めませうと、諸方へ口をかけて頼みおきました所、此度關東のさる諸侯がたから召抱へやうと申す方が出來ましたので、急に吾妻へ下りませねばなりませんから、實は今日參りましたのも、其譯をお咄しも致し、又お暇乞をも申上げて、明朝は發足いたす心得でございます。尤來春になりますと、お迎ひに參ります積でございますから、夫迄は惣三郎を私と思しめして、御機嫌よくお暮し遊ばすやうにお願ひ申上げます。惣三郎もお衣も今聞く通りの譯だから、猶またお母樣を大切にお慰めまうすやうに致すがよい。是は僅の金子ながら、當分の手當に渡しおけば、成丈はお母樣にお不自由の

して、足を洗つて上へおあがりョ。」

鄉「ハイ、左樣なら一寸御免を蒙りませう」ト草鞋をぬいで座に通れば、お衣も洗濯を片よせて、つゞいて跡よりあがり來る。

鄉「扨お母樣には暑さのお中りもなく、御機嫌のよいお顏を拜しまして、こんな歡ばしい事はございません。私も緻から御案否を伺ひながら立歸りませうトぞんじましたが、色々用事が重りまして。」

母「オヽ然うであらうとも。假令お前がお歸りでなくツても、京師から度々文をよこしてお吳れだから、其方の無事も此方の無事も知れて安堵して居ました。半年ぶりばかりで顏を見たが、變ツた樣子もなくつてこんな目出度嬉しい事はないョ。夫にお前の留守中もお衣がやさしくして吳れますから、私は寔に樂隱居さ。那見な、房兒があんなに成長なつて蟲氣もなく、此比では片言を言ッたり、つかまり立ちも出來て來て、どんなに愛らしくなつたか知れないョ。オヤまだ目を覺さないのかへ。お爺さんの歸ッたのも知らずに、氣樂な物だノウホヽヽ。」

きぬ「ハイ、今がたまで脊中で喋つて居りましたが、何時の間にか寐て仕舞ひました。房をお祖母さんが寔にお可愛がり遊ばすから、お膝の廻りにばかり居て、晝の內は大體お祖母さんの

弟をさし添へ、妻子もろとも古郷なる赤尾の在に忍ばせ置きしが、此度關東へ赴けば、生きてふたたび古郷に立歸るべきやうもなし、せめて此世の見をさめに、老いたる母に對面なし、夫と言はねど餘所ながら暇乞をば致したければ、須臾が程の御猶豫を下さるべくやと言ひ出づれば、由良之助點頭て、人みな親を思ふ中にも、別けて老母に孝心ふかき其許の事なれば、寔に道理至極なり、古郷に赴かば心殘りのなきやうに、寛々と暇を乞はれ、其うへ發足あるべしと言へば鄉右衞門歡びて、頓て赤尾の在にいたり、兼て母をば忍ばせ置きたる家の邊に近づき見れば、昔世にあるそのときは、三百石の歷々ゆゑ、家居も廣く構へしに、今はいぶせき白屋に、母を住せて閣く事かと思へば胸もふさがるに、はや今生の暇乞を言ひに來し身の苦しさは、泣かじとすれどせきあぐる涙に袖を濕せしが、我と心を取直し、然あらぬ體にて進み行けば、女房のお衣といへるが、今年僅に二歳なる房吉といふ忰を脊負ひ、戸口に洗濯して居たりしが、夫と見るより歡びて、

きぬ「オヤ貴公お歸りでございましたかへ、お母さんもどんなにかお案事なすつてでございませう。モシお母さんへ、宿で歸りましたヨ」ト言ふ聲聞くより母は立出で、

母「オヤ〳〵鄉右衞門お歸りか、嘸まア殘暑の時分といひ、暑い事であつたらう、挨拶は跡に

いろは文庫　卷之四十一

第八十一回

爾ればまた由良之助は同志の者の心底を猶訝しく思ひし故、神文に事よせて竊に探り見しところ、案に違はずそのうちには變心の者ありて、連外なしたるやからもあり。殘るは金鐵同樣の二心なき者のみなれば、大星もはや心易しと、最たのもしく思ひしが、夫につきても千崎が此程はる〴〵吾妻より來り、關東にある同志の若者、段々事の延びるを待ちかね、血氣にはやる心より、如何なる無謀のふるまひを做すべくもはかられねば、元老の速におん下り叶はずば、原芳田鉞寺の內、いそぎ關東へ下られて、壯士どもの心をば鎭めさせ給はずば、大事を引出す事もやあらんといふに、大星、是もまた大切なる事ながら、その身は京師を今しばらく離れがたき譯あれば、名代として鄕右衛門を差下すべきに事きはまり、原を招ぎてしか〴〵と件のよしを言ひ聞かすれば、鄕右衛門は一議に及ばず、身不肖の某に御名代を命ぜらるゝは當りがたき事ながら、お見出しにあづかりし事歡びこれに增すものなし。就てひとつの願ある、某老母に

方に寄集り、扨是迄は忠義一途と頼み切つたる大星が、斯くのごときの心底にては、我々が武運も盡果てたり、此うへは一同に山科に押しかけ由良之助に面談なし、いよ〳〵違變に極らば、渠等親子の首討落し、我々關東に馳下り、高の館に亂入して、狂ひ死するの外はなしとて、おのおの大星が宅にいたり、義心を顯はして詰問へば、由良之助は嬉し氣に、先は變りなきおの〳〵の御心底承りて滿足せり。拙者において聊も違變はござらねども、去るものは日々に疎しと、月日の立つにしたがつて、若や一味の其中に心變りもあるべきか、爾すれば密事の敵方へ泄れる事もあらんかと、實は各々方の心底を探り見しに、二心なきありさまを見うけて安堵いたしたり。恁ては本意を達せん事最早間もなかるべし、必我等が胸中をも疑ひ給ふ事勿れとて、密事をつゝまず打明けて、心隈なく囁き示せば、義士の面々勇立ち、天にも昇る心地して歡びあへるぞ理なりける。

ては來たが、然うすると其所に何様か節をつけた咄でも爲ないでは、衆人が得心も爲まいと思ふが、御迷惑でも是はお前から返す咄をして被下ては何様だらうネ」ト言はれて少し考へしが、

彌「なる程御道理でございます。夫には宜事がございます。那速水總左衞門といふ男は大星殿の腹心で、元老の胸中をも荒增察して居りますから、私が速水に相談をして返させるやうに致しませう。併然う致したら定めて同志の面々が動立ちませうから、其時には又其樣に御相談を致しませう」ト言へば十内歡びて、件の誓紙を渡すにぞ、彌五郎は受納め、此日は別れて歸りしとぞ。

按ずるに、最初赤穗にて殉死と決定せしときは、一紙に連判なしけるが、いよ〳〵必死といへる日に約を逆きし者多ければ、其後改めて正義の者より銘々一枚ヅッの起請文を大星に渡せしものと見えたり。𫝆を又此度返さんとする遠慮深計爾もありなん。

斯て神崎は速見と示合せ、總左衞門をもつて同志の者へ彼起請文を返させしに、中には是を幸として、故なく誓紙を受取るもあり、其の中に義氣金鐵のごとき輩は憤に堪へかねて、使に立ちし速水をさへ不義士と思ひ、種々に惡口做せる者もありしが、思慮深き總左衞門ゆゑ、各左樣に思はれなば、鈢寺方へ會合して、今一度評議あるべしとて色々に言ひこしらひ、終に十内

もあり、又何處迄も亡君のお爲に一命を捨てやうといふ了簡の者は、丁度原氏のやうに立腹をして、いよ〳〵本心が顯れると申すもの。又神文まで返したといふ事が敵方の間者の耳へ這入れば、直さま關東へ注進があつて、用心の薄くなつた敵の油斷へ附込んで、一時に事を爲てとらうといふ反間の御計策かと思はれますが、如何な物でございませう」ト言ふに十内横手を打つて、

十「イヤ天晴の御明察、斯う言ふと何樣やらお手前を疑ッて、口うらを引いて見たやうに聞えて甚だ赤面致すが、實は私も然うではあるまいかと推量したから、神文をも殘らず預つて歸りがけに原を此住居へ連れて來て、扨元老の言はれた處は内實は斯う〳〵如此ではあるまいかと、今お前が言はしつた通りの事を段々咄した處が、鄕右衞も一圖に腹の立つたので、然ういふ深い譯までは氣が付かなんだと大に後悔をして、直に大星殿へ言過しをした詫言に往くと言つて出かけたが、誠にあの人は少しも腹に邪氣のない正直な人サネエ」

彌「大方お前さんも然ういふ御所存とはぞんじましたが、先私の愚案をも申出したのでございます。」

十「扨夫は宜いが、爰に少し困るのは彼神文サネ。私の手から同志の面々へ返す積で請取つ

た神文を返し、仇討を思ひ禁つて御家再興を料ると云ふ譯サ。鄉右衞は那通りの正直者だから、何が腹を立つて、既に元老を一討に爲かねさうもない形勢だから、私がやはらを入れて先神文をも殘らず預つて歸ッたが、神崎お前の了簡では、まア何樣爲たら宜からうと思ひなさる。」
彌「なる程、元老の思召、深い意味合のある事と思はれて感心致します。夫を又御承知で神文を殘らず預ッてお歸りなすつたとは、流石は鈇寺氏のお取計ひ恐入りました。最早其樣子では仇討も遠からぬ事と見えますネ。」
十「コレサ、貴公も妙な事を言はつしやる。お家再興仕樣と言ッて神文を返すのが、何故また仇討が近寄つたやうに見えるのだネ。」
彌「アハヽヽ、是は鈇寺氏のお辭とも思はれません。愚昧な私さへいか樣と思ひます事を、貴公樣程のお方が御承知のない筈はございますまいが、併私の推量の致し違ひかぞんじませんから、先愚存の處を申出して見ませうが、今元老の思召では、迚も再興なぞといふ事は出來ない譯は、素より御承知でございますから、此上は仇討と御決定はなすつても、同志のうちに表面は正義のやうに見えても、內心の處は量りにくい徒も萬一あるまいには限りませんから、先仇討を禁めるといふので神文を返せば、二心ある者は能い幸にして連中を拔いて仕舞ふ者

おいよ

扇屋「今日は御新造樣は。」
十「アイサ、老母に附けて寺參りに遣つたから、跡には私と娘ばかり、他に氣遣な者も來て居ぬから遠慮はない。時に神崎、餘程お手前は商人馴れたと見えて、何樣見ても鹽谷の御家中神崎彌五郎とは思はれない。」
彌「へ、、、、私も先達て東都へ下り、種々な形をして樣子を窺ひましたが、何分敵の用心が嚴しく、段々月日が立つにつれて、東都に居る義士の内には、氣の短い者は疳癪を起して無法な事でも爲さうな樣子もあり、何でも是は大星殿が急にお下りが出來ずば、芳田氏か原氏かお前さんか、何れ老分のお方が東都へお在でお取締がなくツては、とんだ行違が出來やうかと思ひましたから、目立たないやうにこんな風俗で登ツて參りましたが、イヤモウ宜眞似は爲にくい物だが、惡い眞似は速く馴安いもので、今では此通り丸腰で步行ても何ともない心持になりました。」
十「いかさま、東都の樣子も此間お出のとき、薄々お咄を聞いたが、京地迚も同樣の譯で、兎角時日が延びるに連れて、同志の面々も退屈が見えるから、原氏と相談をして、四五日前に大星殿の宅へ往ツて、東行の內談をして見た處が、思ひの外な元老の御所存で、同志の者から預つ

る處へ、女兒お以與が急はしく勝手元より立出でて、
いよ「アノウお爺さん、扇屋が參りましたョ。」
十「ナニ扇屋が來たとかへ、先何もさし當つて地紙も入らず、まァ用はないと言つて歸して遣んな。」
いよ「アレサお爺さん、常例來る人ではございません。此間二三度來て、ネ、ソレ決して實正の名を言ふなと被仰た那御方でございますョ。」
十「フゥ然うか、夫ぢやァ丁度在宿だから、此方へお揚んなさいと言つてお通し申すが宜い。」
いよ「ハイ〳〵」ト言ひながら立つて往く。程なく地紙の箱を手に提げて、身粧も宜からぬ扇賣が次の間から顏を出し、
扇屋「是は旦那さま、お宿でございましたか。」
十「イヤ扇屋さん、宜處へ來て呉れた。實は少し咄のしたい事もあつて、お前のお出でを心待に待つて居た所サ。さァ〳〵ずつと此方へ這入んなせへ」ト言はれて扇賣は一間へ入りながら四邊を見廻して、

悪いやうには取計らはぬから」ト郷右衛門を押なだめ、由良之助にも暇を告げて手を引立てつつ立出れば、心ならねど郷右衛門もしぶ〳〵ながら歸りける。

第八十回

什麼鉞寺十内は、鹽谷家盛なる比は京都の留守居を勤めしかば、浪々の身となりても都の裡にて爾る町家に借宅なし、好む道ゆゑ歌あるひは俳諧などを人に敎へて世渡りの助にしたりとぞ。十内が妻を阿丹と呼び、女兒をお以與といひつゝも、猶年老いたる母一個あり。忰孝右衛門は大鷲立吾等と先達て東都に下れば、今花洛には老母を入れて家内四人の暮なるが、其妻お丹といへる者心ざま貞烈にして、倘男子にてあらんには、四十七士の面々にもをさ〳〵劣らぬ魂あれど、常には柔和を面にあらはし、宜く老姑につかへて孝を盡し、夫の心にいさゝか悖らず、女の道を深く守りて、家を治むるのみならず、漢に倭の史をも學びて、和歌の道にもくらからず。然れば十内が仇を討たんと東都に下りたる後も、折々歌など詠送りて、文の往復數通あり。开は次の巻に委しく綴りて、夫婦の間に信ある趣をなん分解くべし。爾れば或日の事なるが、お丹は老母を伴ひて寺參りに往きたる留守に、十内は奥の間にて歌の本など取ひろげ一個詠めて居

存ずるゆゑ、只一向に臆病とは近比迷惑至極のいたり、夫とも拙者が申す事を各々方が不承知なら止事を得ないから、お手前達は仇討でも何でも御勝手に被成て、我等一人はお除き下さい、拙者は又拙者の存念通りに致すから、何は兎もあれ此神文は御返し申す事と致さう。」

郷「イヤ、其神文請取りますまい。出來もせぬお家再興、夫を言立に臆病を塗隱し、身を遁れやうと致さるゝは、日比の貴殿の御氣質にも似合はぬ情なき御一言、何はしかれ盟約の通り、是非とも仇討をお進め申す。若此うへにも御承知がなく、未練の振廻あるにおいては、敵討の血祭に貴所のお首を討落し、正義の者の魂を堅めさせるより他はござらぬ。元老へ對し過言なれど、艶を申さぬが我等の性質、有無の間の御返答を今一應承らう」ト佗と睨みし眼中尖く、否と言はば一討に切つて捨てべき郷右衛門が、氣色に十内駭きて、

十「コレ〳〵原氏、御自分の申される處は重々尤至極だが、元老の思召をつく〴〵と考へるに、何か深い御所存のある事かとも察はれるから、出過ぎたやうだが大星殿の仰に任せ、此神文は先々我等がお預り申して、今日はお暇致さうではあるまいか。」

郷「夫ではお手前も臆病者の。」

十「イヤサ、拙者が心底を知らぬ其許でもござるまいから、先何事も我等にお任せなさい、

て、然ういふ企のある譯では、なか〳〵家再興抔は仰付けられぬといふお惡しみを受けたのではござるまいか、何にしろお上の御疑念を晴すには、一旦仇討の所存は思ひ絶るより他はござるまい。夫には兼ておの〳〵がたから預ッた神文もその儘置くは如何ゆゑ、先お返し申す積だが、私から一々呼付けて返すも餘り仰々しいやうにも思はれるから、御面倒ながら序に任せ、御兩所へ御渡しまうし置くによつて、是等の次第をお咄しなすつて、最寄々々に御配分を願ひたい物だ」ト言ひながら手文庫の裡より數十枚ある誓紙をばひとつに集めて、兩個の前にさし出せば、流石の兩個も興覺顏に呆れて言葉もなかりしが、鄕右衞門は勃起として、

鄕「最前からして承る處、全く我々の心をばお探りなさるばかりとも思はれず、何樣やら元老の御心底が些訝しく思はれます。拙者においては戲に神文は認めませぬ。一命を拋つて亡君の仇を報ふの外に所存はござらぬを、今更貴殿が左樣の事を仰られては、最初の盟約に相違致す。夫とも貴殿が今となつて臆病未練な御所存ならば、元老とて用捨は致さぬ。彌仇討の一義は思ひ止まられた事か、又は我々の心底を試し見んといふ一時の方便か、さア御返答が承りたい」ト指副の一刀を小脇に引つけ、顏色變へて詰寄れば、

由「ハヽヽ、イヤコレ鄕右衞、そのやうに腹を立たれな。お家再興と申すのも全くは忠義を

を仰聞けられて下さいますまいか。」

由「是は又改ッたお言葉、何として御兩所を疑ひませうか。今鉞寺の申された張合拔がするとは至極の高論、箇樣まうす手前杯が大に張合が拔けたやうで、了簡が種々に變つて來ました、其譯は最初は一旦の怒によつて是非に仇討と思案も定めましたが、今となつて考へて見れば、なか〳〵容易に討てる敵ではなし、若仕損じた其時には、世の物笑に相成て、いよ〳〵亡君の御名を下すと申すもの、其討ちにくい敵を討たうより、おなじ忠義を致すなら、鹽谷のお家を細くとも再興いたすのが、却て忠節かと思はれます。」

郷「イヤ、夫は元老のお詞ともぞんじません。お家再興の事は最初から御相談もあつた事で、若も然ういふ御沙汰でもあらうかと、仇討の時日をも延しましても、今において何の御樣子もないのは、最早其望も絕果てましたのと思はれますれば、此上は師直殿のお首をまうし受け、亡君の御鬱憤を晴すの他はございますまい。」

由「然ればサ、初から再興の事は御相談をも致した事だが、今において御沙汰のないのを熟考へて見る所が、仇討の盟約を致した人々から神文を受取つて居ります、是は尤極内々で致した事とは言ひながら、夫に就ては色々と內評定などをするのが、何時となく關東へ聞え

つたらうと思ふ所から考へて、遣ひ殘してある貯で金貸を致さうと、御覧の通り裏の明地へ土藏を建てはじめました。是は下質なぞとまうして、品物などを預る節の用心でござる。私も其通り急に吝嗇者になりましたから、御馳走は致さぬが、珍しいお出でだから、有合で一盃さし出さう」ト言ひツヽ手を鳴して若黨を呼ばんとするを、二個は急におし禁め、

鄕「イヤ、御酒の義なら先今日はお斷りまうします。扨も〳〵大星殿には、まだ我々の心底をお疑ひなさると見えて、けしからぬ今のお咄、鄕右衛門においては眞の義とは思はれぬが、鉞寺、貴公は何と思はつしやる。」

十「左樣々々、先拙者が存ずるには、敵とまうすも最早老年のお人故、何時老病が差起りて死なれまい物でもない。左樣な事があつた時には、千辛萬苦も水の泡。假令また然うない處が、盟義を守つて居る者も、段々年月が立つにつれて、張合抜のするもあれば、脇へ心の移る者もあるまいとは言はれません。此位の事は私がまうさずともお心のつかぬ大星殿でもございますまいが、近比では一向に仇討などの御内評議もなく、如何の譯かと伺へば、まだ時節が來らぬとばかり、箇樣に延々になされますには、何か御所存でもあつての事か、只今原氏もまうされます通り、餘人は知らず我々に何もおつゝみなさる事はございますまいから、何卒思召の極意の所

をすゞぐ積で今日は鋸寺を雇ッてお出でと見えるネ。」

鄉「へゝゝ、イヤ左樣でもございません。此間から兩三度上りましたがお留守ゆゑ、今日もいかゞとぞんじましたら、宜く御在宿で被居入ました。」

由「ナニサ、私も此間うちは、祇園町の色酒が身にしみて、宿にもろく〳〵居ましなんだが、二三日後にとんだ怖いめに逢ッたから、先當分は遊び歩行も見合せて居るノサ。」

鄉「へゝエ、夫はまた何樣いふ事でネ。」

由「何樣と言ッて咄にもならない事だが、實は揚屋の酒にも呑倦きたから、一番氣を替へて嵯峨へ茸狩と出かけた處が、途中で四五個の武士に出合ッて、斯う〳〵如斯々々の仕合サ」ト　ありし次第を物語り「其時取られた紙入に、金でも澤山ある事か、幇間等に花金を遣ッた殘りが纔ばかりと、揚屋の書出しや妓女の處から來た文なんぞが這入ッて居るのだから、是が鹽谷の御家老樣の鼻紙袋かと思はれては、何分面目次第もない譯サ。併あれが盜賊なら夫でも宜かつたが、何樣も物取をするやうな人體とは察はれなんだ。何に爲ろ其時は醉つて居たから、然のみとも思はなかつたが、酒が醒めたら急に怖くなつて、其處で遊び歩行を止めて見たら、妙な物で、段々馬鹿遣をした金が惜しくなつて、那丈の金を貸附けたら、今比は餘程多分の利足にな

第七十九囘

寔に人の心程量りがたき物はあらじ、外向は正義と見えたるも、口と心は表裡にて、まさかの時にいたりては、命を惜しむも尠からず。尤四十七士の他は、何れも九太夫親子が如き臆病未練の者にはあるまじ。先や籠城といふ時には、さすがに主君の御鬱憤を思はざるにあらざれば、多くの人に競ひ立てられ、城を枕に討死と、百人にして五六十人は覺悟究めし者もあらんが、丌は一旦の勇にして、赤城を退散せしより次第〳〵に勇氣も折けて、或は妻子の愛にひかされ、又は去りがたき譯などありて、盟義を叛くやからも多かり。然れば大星が深智なるも、許多の人の心底を只一向には見分るまじ。始赤城にありし日より、今浪々の身となる迄も、變心あらず見ゆる者を、先義黨とは思ひながら、猶も試して見ん物と心にひとつの密策を設け、然もなき體にて居る所へ、ある日原郷右衛門鈹寺十内の兩人來りしかば、宜き折からと一間へ通して、

由「イヤ、是は御兩所お揃ひで、扨は原氏には先日の碁に敗北いたされたから、會稽の恥辱

いろは文庫第十四編序

きのふと過ぎけふと暮して飛鳥川、流れてはやき時行變化、それが中にも別てなほ、目前の替るを旨とするは、斯る屬ひの草紙なれど、這は三歳の童子も知る、誠忠義士の實傳に、いさゝか枝葉を加へつゝ、時代を世話に寫せしのみ。新規に設けし脚色もあらぬを、僥倖にして看官の、愛顧蒙ぶる事やありけん、只管書肆の續輯を、編めよと言へば書くよといふ、間に合せなる相辭も、紺屋の明後日言ひ盡して、だら〳〵急の筆の早染、夜なべをかけてつゞくりあげ、春の晴着に備ふるのみ。

惠方にむかふ文机に

若水させし硯を開きて　東都作者　爲永春水記

などに事をよそへて集會せしよし、爾らば夫等の手紙なれども、他見されても障りなければ、是をも入れて置きたるならんか。兎にも角にも大星の深智遠謀の量り難きを、拙き筆にてなか〳〵に述るは烏許の所爲ながら、猶後輯には大星が敵は素より一味の者にも眞の放埓と見するより、義士の裡にも思慮深からぬは、大星を討つて捨てんと憤を發する趣、由良も又一味の者の心底を探るの譯より、續いて前卷にあらはしたる和七小雛等の後の物語は、十四十五の編に綴り、引きつゞきて出板なすべし。

⧗「もう其外には何もないかネ。」

▲「跡は楊枝入と薬の這入ッた包、イヤ待つたり爰に金入がある」ト中を探り見て舌を出し、「イヤハヤ呆れた物だ、大星とも言はれる者の金入に、小粒がたつた二ツ這入ッて居た。是で大盡もすさまじい。宜いは詮方がない、此金で一盃呑直して、夫を骨折賃とするサ。」

●「チョツ、いめましい。併是で大星の腹も知れたと言ふ物だから、先關東でも御安堵のわけだ。」

×「つまらねへ事で醉が醒めたら、急に寒く成つて來た。飲むと咄が極ッたら、何處でも構はねへから、酒屋へ飛込む事と爲やうぢやァねへか。」

⧗「いかさま其事々々」ト果は互に苦笑して何處ともなく立去りけり。

什麼此武士は何者ぞ。兼て關東より遣し置く師直の間者にて、由良之助の心底を探らんとする方便とは、文體にても推し給はん。大星速くも其機を察してかの菌狩に同道なし、態と紙入を奪はせて、いよ〳〵眞の放埓者と渠等に推量させんと言ふ、裏をかいたる計畧なるべし。然ればこそ其裡に得知れぬ文ども夥入れおき、又俳諧の催しの手紙なんども加へしならめ。尤義士の面々の密談ありて寄合ふ時は、他の疑を防がんために、或は俳諧茶の湯

●「何にしろ跡を讀んで見るが宜いぢやァないか。然うすると譯が解ることだから」ト言ふに再び讀む文言は、

尤いづれも御存じの初心にて、御慰みにも相成まうす間敷候へども、

×「オヤ〳〵おつな文句だぜ。」

●「まァ構はず讀みなせへ。」

折から幸大鷹子葉上京のよしにて參合せ候へば、那者に文臺を相頼み、今日は日短の事にも候故、歌仙一順にて、跡は麁酒一獻呈し度、別に取設けは御座なく候へ共、折節庭前の菊半開致し候間、是のみの御肴に御座候。依て先日菊の兼題さし出し置候。是又今席にて開卷の心得に候へば、何卒早々御入來被下度、餘は拜顏を期し候。以上。

●「何の事だ、こりやァ誹諧の催しをするから來いと言ふ手紙だ。」

⊠「人を馬鹿にした、面白くもねへ。」

×「此身ァ何だか變な文句だから、こんな事ぢやァあるめへかと思ッたョ。」

▲「夫でもはじめの書出しが、同志の面々なんぞとかたくやらかしてあつたから、何か密事の手紙と思はうぢやァないか。」

餘りとやおなつかしさに文して申上り〳〵、御歸りのちも御宿のおしゆびいかゞおはしまし候や。

▲「馬鹿々々しい、是は太夫の文だ」ト是より段々開見るに、何れも遊所の書付、或は文の類にて、取る方もなき物のみなりしが、其中に大星様鈹寺十内と上書をせし手紙一通見付出し、「そりやこそ爰にこんな物があつた。是には何か密書でも書いてありさうだ」

「なる程、此十内といふ奴は鹽谷の浪人の内でも、京都の留守居役を爲て居た者で、大星とは至極懇心だと言ふ噂も聞いて居れば、內密の相談の手紙に違はあるまい。まア何にしろ讀んでお聞せなせへ」ト言ふに一個がおし開き讀出すその文章には、

昨今秋冷相催し候へども、いよ〳〵御壯健御坐被成、欣喜斜ならず存じたてまつり候。然れば今日兼而申合せ候同志の面々、拙宅へ會合致し候約束にて、最早大半相集り、尊大人の御光來を先刻より相待申候。

▲「何樣だネ此文面は」

Σ「なる程、兼て申合せ候同志の面々拙宅へ會合するとは、何か浪人どもが讎討の企でも致すに就て、其相談を爲やうといふ會合と思はれますな」

けたら、止められたから其儘に見遁したが、今で思へば殘念だ。」

▲「コレサ、何樣も貴公は兎角荒ッぽいからならねへ。那處で大星を首尾よく爲とげれば、そりやア根を伐つて葉を枯すやうな者だけれども、那奴大望を企つる心があれば、醉つた振りはするともおめ〳〵斫られるやうなことは爲まい。若又貴殿に殺される程の者なら、斫らずとも大事を引出す氣遣はない。そんな腰拔を斫つたところが、役に立たない斗でなく、後日事があらはれゝばお互の爲にもならぬ譯だから、其處でお禁めまうしたのサ。夫より何か證據になる物もあらうかと鼻紙入をさらつて來たが、併懷中物を取られるのも知らないとは、何れ本性とは思はれない。」

×「マア何にしろ中を改めて見るが宜い、萬一是はと言ふ書物か、一大事の密書でも入れてあるまいものでもない」トおの〳〵寄ッて鼻紙入を開けば、果して數通の書物あるゆゑ片端からひらき見るに、

一銀貳百四拾匁　　藝子十人揚代

一同　七拾貳匁　　舞子三人揚代

×「何だこりやア揚屋の書付だ」ト次をひらけば、

第七十八回

入相の鐘に人散りて、最物淋しき北山陰、折しも來かゝる以前の武士、跡さき見廻し立止まり、

●「トキニ、今日は餘程うまい都合ぢやァなかつたかへ。」

▲「イヤ最うまことに大出來々々々。此身達も折角關東から遙々の所を來たからにやァ、大星の腹の中をスツぱり見拔いて歸らないぢやァ役目も立たないと言ふものだから、是まで種々と探つては見たが、今日の喧嘩仕懸は實に上出來サ。」

×「夫にしても那程無法なことを言つたら、些たァ腹でも立つだらうと思へば、平氣で寐て仕舞つた所は、腹の大きいのだらうか、醉潰れて譯がわからなくなつたのだらうか。」

⌛「先刻駕から這出して詫言を爲た狀は、丸で腰拔同然サネ。」

×「あれでも主人の怨を報はうと言ふ了簡があるだらうか。」

⌛「まァ那分ぢやァ大丈夫、そんな氣は何所へかなくなつて仕舞たらしい。」

●「ナニサ、人の心と言ふ物は上からは見えねへから、そんな評義評定を爲やうより、おし片付けて仕舞ふのが近道だと思ツたから、先刻那奴が寐たのを幸、手短に遣らうと刀へ手を懸

傍若無人の體たらくを、すれども更に由良之助は些ともこれに取合はず、由「イヤモウ、我等は此程から夜晝なしに呑んだゆゑか、頻に眠氣を催した。尻なりと足なりと、御自分達は御勝手な眞似をなされてお遊びなさい。拙者は這所で一寐入、これが則不禮講。御免々々〳〵」ト言ひながら、かの武士の居る眞中へ、會釋もなさで仰向に倒れて忽地高鼾、正體もなく見ゆるにぞ、諸人呆れて辭もなく顔見合せて居たりしが、

●「寧のことに手短く〳〵」ト刀の柄に手を懸くるを、這方の一個がおし禁め、

▲「イヤコレ短氣をなされたら、後日に這方の身分が危い。幸な物がある、我等に任せて置かれよ」ト大星がしだらなく打廣げたる懐より、鼻紙袋の落ちかゝりしを、四邊見廻し奪ひ取り、何れもござれト先に立てば、なる程然うだト皆點頭て、そこ〳〵にして立去るを、歌妓幇間は最前の無法に恐れて近くは寄らず、遠く離れて居たるゆゑ、懐中物を奪ひ去りしを、誰とて見止る者はあらねど、退きたるに安堵して、おの〳〵其所へ寄集りしが、大星は醉倒れて、ゆり起せどもたわいのなければ、兎角するうち那奴等が又もや來やうも斗られず、長居はおそれと由良之助を乘物に助け乘せ、跡片付て早々にうち連れ花街へ歸りしとぞ。

交りにさゝへ止れば、かの武士どもは不禮と怒りて柱ゆる者を突退け投退け、猶も手込に做さんとするにぞ、大事の歌妓に怪我させては濟まぬと思へば男共、もはや斟酌を爲て居られず、不法をはたらく武士を力に任せて引放せば、此間に女們は漸う搨拔け逃出すにぞ、幇間末者も侶俱に各遠く逃退きて、近寄る者もあらざれば、武士們は不興氣に大星の側へ進み寄り、

▲「イヤナニ大星氏、折角お勸めゆゑ、いさゝか氣鬱を散ぜんと致せしに、召連れられた奴ばらが、我々へ對して無禮千萬、夫を貴殿が見てありながら、おし无言でござるとは、如何のお心得やら、餘り客を馬鹿にさつしやるも程がある」と一個が言へば五人三人、おの〳〵眼を張り肩をいからし、再び左右へ詰めかくれば、

由「アハヽヽ是は又野暮を言ふお人達だ。其樣にぎしばつてござつては、女には可愛がられぬ。今日の席は不禮講、何事も四角な咄は打遣ッて、唯酒の事〳〵」ト言へば、一個の武士が、

●「ム、不禮講面白い。そんなら此身の盃を大星喰へ」ト言ひながら、傍に在合ふ盃を足の指のまたに狹み、眼先へ其儘さし出せば、夫と見るより今一個が、

×「其盃の肴には肛門でも甜ろ」ト言ひッヽも、尻引きまくりて是も又鼻の先へ突出したる

「イヤ、貴殿は矢張乘物にお構ひなくお召しなせへ」

由「ナニ反ッて醉覺には歩行方が氣が晴れて宜い物サ、ハヽヽヽヽヽ。さアく皆の者も參れく」ト先に立てば、歌妓幇間も心では、とんだ奴等と一所になり、何ぞ事でも起らねば宜いがと互にあやぶみながらも、流石に人をそらさぬが斯るやからの商賣なれば、彼人々をもそやし立て、機嫌とりぐ打連立ちて、頻にふらつく大星を右左より介抱なしつゝ、程なく嵯峨に赴けば、廣々とせし芝のうへに、兼て準備の毛氈を幾枚となく敷並べ、持參の小竹筒提重を所狹きまで取廣げ、そのうち得物の菌をば早速に調理して、器に盛りッヽさし出しなどする、花街の遊びと事替りて又一入の興あるに、歌妓どもは三絃彈けば、是に合せて幇間末者が踊り狂うてもてなし、歌妓仲居の差別なく側へ引寄せ抱き付きて淫りがましき事に及べば、はじめは座興と笑ひ居たるも、餘りの事にうち腹立ちて、突放しては迯廻るを、爰へ追かけ那處へ追詰め、組んづ轉んづする騷ぎに、或は衣服を引破られ、櫛簪をうち折らるれば、況して珍味を盛並べたる器を蹴かへし踏くだく、狼藉言はん方もあらねば、幇間末者は最初より思はぬことか此樣なよしなき者を同道して、かゝる騷ぎに及びしと腹の裡には憤れど、猶も機嫌を損ねじと戯言

か」ト又もや各ひしめけば、這方は周章ておし禁め、

由「イヤ、全く別に所存あつてお隱し申すではないが、名前をまうしては些面目ない譯がらゆゑ、今のやうには言ふたものゝ、夫で御勘辨がならぬとならば是非に及ばぬ、卒お相手にとまうしたいが、左樣な事は拙者大きらひゆゑ、內々名告てお聞かせまうすが、必ず御他言下さるな。實は鹽谷の浪人にて大星由良之助とまうす者、箇樣な體で古主の名まで明すのは赤面のいたりだが、斯う打明けてまうすからは、何ごとも御用捨あつて、是から我等は嵯峨へ蕈狩に參るが、各方も何と御機嫌を直されて、御同道なされまいか」ト思掛なき勸めに預り、那武士どもは案に相違し、互に袖を引合うて、何か姑く囁き合ひしが、覺えず莞爾とうち笑みながら、俄に面を和げて、

武「扨は貴殿が聞及ぶ大星氏でござつたか、夫とも知らず先刻よりの不禮、眞平々々。我々は西國筋の諸侯に奉公いたす者ども、此度吾妻に下る序に都見物に立寄り、箇樣に所々を遊覽いたせど、まだ嵯峨までは見物致さず、蕈狩とは珍しい御催し、國許への土產のため、お勸めに隨ツて御同道いたさうか」

由「ヤ、是は早速の御同意にて千萬かたじけない。然らばそろ〳〵步行ませう」

▲「生醉本性違はずと言へば、我々が言ふ事の耳に這入らぬこともあるまい。言分あつて仕掛けた出入、さア其處へ出て、言ふ筋があるならば言ッて見ろ、若夫ともにあやまり入るなら、駕から下りて三拜しろ。挨拶の爲やうに仍つたら又了簡のして遣りやうもあらうが、是では濟まぬぞ濟まぬぞ」ト皆口々にわめき立つれば、由良之助は眼の覺めたるか、細目に明いて那人々の顏を徐に打見廻し、

由「何やら我等は醉潰れて一向に仔細は知らぬが、誤言て損は往かぬもの。眞平御用捨々々」ト其儘駕から這出でて、土に額を摺付ければ、夫と見るより侍共は、肩いからせし張合拔けて、大口明いてうち笑ひ、

▲「かう見た處が、刀を差せばまんざら町人とも思はれぬが、犬つくばひになつて詫る體、見かけに寄らない大腰拔だ。一體其方は何處の者で名は何とまうすのだ」

由「ヤ、我等は山科邊に住居をいたす浪人者、名前の義はまうさずとも御勘辨を下さるまいか」

▲「イヤ〳〵斯う言ひ懸ッたからにやア、承らねば承知はならぬ。夫共たつて隱さつしやるには、何か其方にも心あつての事だらうから、卒我々が相手になつて、思ふ存分の勝負を致さう

ざいませず、言はゞ途中の行違ひ、お互の往來でござりますれば、何卒御不勝なさつて下さいまし」

▲「何だ、互の往來だ。コレ、武士たる者に挨拶をするなら、言ひやうもあつたものだに、其言分からして氣に喰はねへ。此駕に乘つて居るのは一體何處の何と云ふ奴だ」

みなく「ヘイ、是は宇喜さまとまうすお大盡樣でございます」

▲「ムヽ、其宇喜とか云ふ奴は武士だか町人だか知らねへが、此騒ぎを知らねへ顔をして駕に乘つて居るとは不禮な奴だ。駕から引ずり出して面を見たうへで、其奴が挨拶によつたら、なアおのく」ト見かへれば、

●「左樣々々、何に致せ此儘で濟せては、刀の手前も立ちますまい。卒我々が」ト言ひながらおのく一度に競ひかゝるを、猶も止むる幇間等が、

みなく「モシく、何と被仰ても宇喜樣は此間から夜晝とない呑みつゞけ、たわいはお在被成ますまい。私共が此樣におわびをまうして居りますから、何卒御勘辨をお願ひまうします」

ト言ふをも聞かず立ちかゝり、駕の垂をば刎上れば、裡には眠れる大星が前後も知らぬ體なれど、何とやらん備はる威光に、流石側へも寄兼ねて、尻込み爲ながら聲ふり立て、

いろは文庫　卷之三十九

第七十七回

姑且話説他事に移る。宇喜さまお供で氣も浮々、心も浮けば酒も浮く、浮いたは〳〵宇喜大盡トそやし立てつゝ唄女幇間が大勢取卷く駕の裡には、例の大星由良之助が、三日以來祇園町にて飲みつゞけたる酒にも倦き、今日は嵯峨に菌狩せんとて皆うち連れつゝ、往來をざはめき立ちて往きかゝる、折も折とて向より五六個の武士連、何れも一盃機嫌と見ゆるが、態と先から大星の乘りたる駕へ理不盡に突當ッて眼を怒らし、

▲「ヤイ、此廣い大道で武士たる者に突當るとは、揃ひも揃つて盲目でもあるめへ、さア此儘では濟されねへぞ」ト獨りが言へば殘の者ども、然うだ〳〵ト口をそろへ、おの〳〵刀をひけらかし、腕まくりして立ちかゝれば、是はト驚く其中にも、事に馴れたる幇間或は揚屋の男などが、喧嘩買ぞと見てとりしかば、皆手を下げて前に立出で、

みな〳〵「是ははやお腹立の處は恐入りますが、這方から求めて突當つたとまうす譯でもご

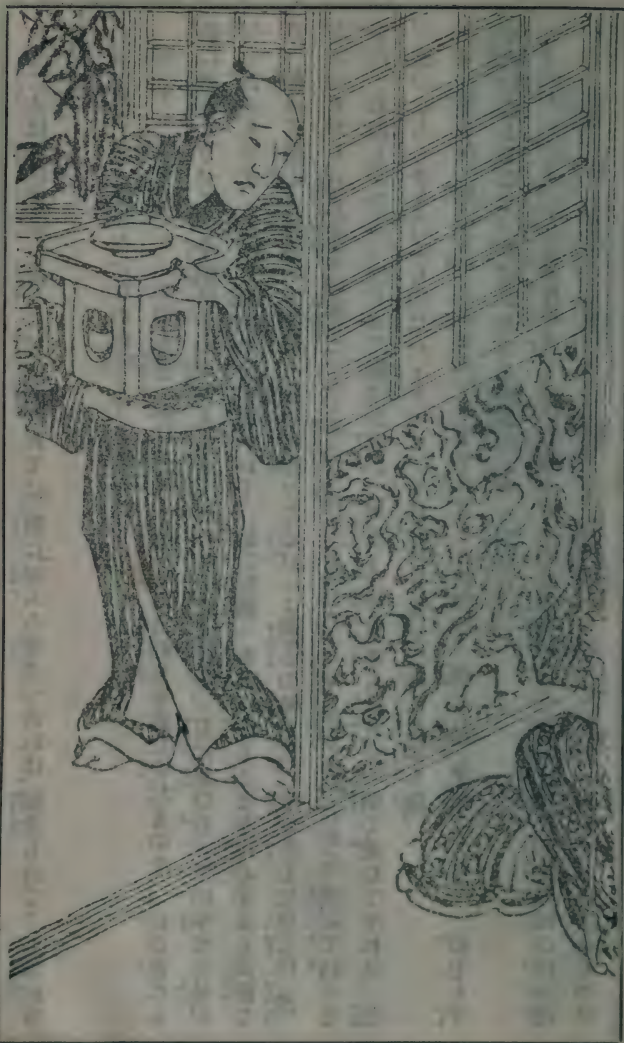
て來るから、小雛は這所へ泊ッて寐物語にゆる〳〵と、一晩名殘を惜しむが宜い」ト既にその日も暮るゝ頃二個を殘して仕度を調へ、そこ〳〵にして出往く五兵衞、義に堅き心にも、流石に情の道も知りたる、寔に粹なる兄なりけり。

れて二人は今の問答、流石に兄に聞かれては、倶に恥入る事さへあれば、顔赤らめてさし俯向きしが、

小「兄さん、面目ないがお前叱ッてお呉れぢやァないかへ。」

五「ナニ叱るものか。おぬし達二個はお國に居た時に言約束を爲た中だものを、世が世なら疾に祝言もさせて、今頃は子の一個も出來て居る時分だものを、互に思ひ合ッての事なら兄が何と言ふものか。夫ほど深い中を引別かれて、敵の屋敷へ奉公に往くことを得心するも貞節なら、勸めて得心させるのも忠義、揃ひも揃ッた心ばへと感心の餘りに、兄が許して祝言の盞をさせるから、是を寧もの思出にして奉公に往ッて呉れろ。幸酒があつたから、其心で持ッて來た。おぬしがひとつはじめて獻すが宜い。舅媒人待女郎も此身が一個で兼ねてすれば、是が寔の水入らずと言ふものだハヽヽヽ」ト打解けたる兄の辭に歡ぶ小雛、

小「兄さん、何にも申しません」ト手を合せツヽ伏拜み、頓て盃を取上ぐれば、和七も今更否むによしなく、形ばかりなる婚姻の盃を取交せば、

五「オヽ〱、夫で芽出度々々。併夫婦といふのも今夜一晩、此身は今から後家樣の所へ往ッて、承知の樣子を返答を爲たうへ、歸り足に青柳橋へも廻ッて、座敷を引かせる相談をもつけ

忠あり義あり
壮士の鐵心
貞あり節あり
歌妓の苦心

でありますけれども、つひお前はんに引かされて、未練な氣が出てならないんで有ますヨ。其上那いふ物堅い兄さんだから、お前はんとの譯が知れでもしたら、假令前かた約束をした事はあるにもしろ、そんな了簡では頼母しくないと、腹でもお立ちなはらうかと、夫も苦勞でありましたが、そんなら疾から二個の中を知ッて知らない顔でお在のかネエ」

和「まア先刻の口振ではさう見えるのサ。此身も何だか間が悪くッて、少し返辭に困ッたが、今日の仕方を見ると、兄貴もなか〳〵通者だアな」

小「夫にしても何所へお出でのだか、もう歸ッてお在なはりさうな物だネエ」

和「然うサ、ちつとも速くお前が得心をした事を咄して安堵させてへものだが」ト言ふとき思ひがけもなき納戸の裡から、あるじ五兵衛、銚子盃手に持ちて、徐々として立出づるに、二個は恟り見かへれば、

五「コレサ何も駭くことはない。和七さんに言ひふくめて留守にはして見たが、二個の心に未練はあるまいけれども、其處が若い同志のことで、思案の外と言ふ事もあるがら、大事をとる方が上分別だと、罪なやうだけれども、裏口から這入つて納戸の裡から樣子を聞いて居たが、寔に節なる二個のこゝろざし、大事を取つて疑ッたのが今ぢやァ反ッて恥しいやうだ」ト言は

ませうが、萬一叶はないで身を任すやうな事があつたら、堪忍してお呉んなはいョ」トボロリとこぼす涙の誠、這方も不便と思ふにぞ、倶に涙を催せしを、態と笑に紛らして、

和「ハヽヽヽつまらねへ事を言ッたものだ。此身が得心でさせるのだものを、堪忍も糸瓜も入るものか。其替りに那後家の事も今言ッた譯で、實に仕方なしの當座の方便だから、さう思ッて呉んなョ。」

小「アイ、然う事が分解ば、私だつて何と思ひますものかネ、結句先刻のやうに嫉妬らしいことを言ッたのが面目ないョ。」

和「何のそんな事は何樣でも宜いはな。そんならお前いよ〳〵承知して呉れたのだネ。」

小「アヽ、否でも否とは言はれないものを。」

和「それで兄貴もどんなに安堵しなさるか知れやァしねへ。此身も言甲斐があつて嬉しいが、夫にしても可憐さうに、泣かせずともいゝものに涙をこぼさせて悪かつたけノウ。さア〳〵機嫌を直す事だ、今更愚痴に考へた處が仕方がねへはな」ト脊中を徐に撫でられて、

小「アレもうそんな仁愛い事を言ッてお呉んなさると、猶々別れて往くことが否になりますはネ。私やァお國を出る時に、兄さんに言聞かされた事がありますから、覺悟は極めて居るん

取るのも、落ちる所は同じ事で、兄貴にしろ此身にしろ、首尾よく本意が遂げたいばつかりだらうぢやァねへか。女とは言ひながら、お前は男魂があつて、まさかの時には物の用にも立つ者と、兄貴が見抜たればこそ、遙々吾妻へ連れて來て、卑しい商賣をも殿樣への御恩報じと思ッてさせるのだものを、お前が何ぞ一ッの功を立てねへぢやァ、那妹は何のために連れて來たらうと、同盟の人達にまで言はれぐさになッちやァ、兄貴も立たずお前も濟まず、緣につながる此身迄が口惜い譯ぢやァあるめへか。爰をとつくり考へたら、どんな奉公も忠義のため、出來さうな物かと思はれるが何樣だらう」

小「なる程さう聞いて見ると無理とは思はれませんけれども、お前はんとかうなつたのも色や浮氣な譯ではなし、總角結といへば夫婦も同じ事と、あつかましいやうだが私の氣ぢやァ女房の積りで居ますものを、假令忠義のためだと言ッて、他のことなら命を落すも厭ひませんが、女の道を外す事ばつかりは何樣も私の心が」

和「ハテサ、其處が御主人さまへの御奉公だはな。操を捨てて操を立てると云ふ事もあつて、誰も知ッて居る事だが、常磐御前でも知れた物ぢやァないか」ト言はれて須臾うち案じしが、

小「ホンニさうでありますネエ。夫ぢやァ私が屋敷へ往ッてなるべきだけはあやなしても居

を聞いたうへで、夫とも胸に落ちざア、又其樣に相談もあらうぢやァねへか。一體那お蘭のことは、私ア基から嫌で〳〵ならねへのだけれども、お前の兄貴の言ふ處も成程尤だと思ッたから、敵に近寄りたいばつかりに、仕方なしに那いふ譯になッた處で、又お前のことを言ひ出して、是非屋敷へ上るやうに兄貴へ相談を爲ろと言ふから、直に歸ッて其咄をすると、兄貴が言ふにやァ、夫は願ッても出來ねへ上首尾だ、一體妹を那いふ商賣をさせて置くのも、何卒して敵の樣子を聞出す便にもならうかと思ふばかりの事だのに、屋敷へ住込みが出來るからにやァ此上の事はない、併が此事は此身の口から言ッちやァ、兄妹の義理にからまれて承知は爲やうが、又他にどんな義理合があつて、肌まで任す奉公はされないと、無分別な心を出して、突詰めた事でもするやうでは何にもならないから、こりやァ貴樣が此身になりかはつて那孃の得心の往くやうに咄を爲てくれまいか、さうすれば此身の留守へ妹を呼ぶやうな都合にするからと言ふ兄貴の腹を察して見ると、お前と此身が情由のある事を疾から知て居るから、他の義理合なんぞと言ッて、二個でとつくり相談を爲ろと言ふことだらうと考へたから、宜しうございます、私が小雛さんの腹をも聞いたうへで、得心の往くやうに咄しませうと言ッて、今日お前を呼びに遣ッたのだァな。此身が那後家に突合ッて居るのも、お前が屋敷へ往ッて師直の機嫌氣づまを

第七十六回

相生町なる五兵衞が宅に、小雛は何か物思はし氣にさし俯向いて、言葉もなく打しほれッヽ、居る側から、和七は膝をすり寄せて、

和「コレサ小雛さん、お前の心は此身も宜ウく察して居るけれども、是程事をわけて言ふのだから、お前もとつくり勘辨をして、なる程と思ッたら、承知だと言ふ返事を聞せて安堵させてくれるが宜いぢやァねへか。」

小「夫だつてあんまり無理ぢやァありませんか。お前はんは那後家樣と好なことをして、私にやァ妾奉公を爲ろとお言ひだつて、そんな眞似が出來ますものかネ。」

和「さア、さう聞くから惡いはな。此身だつてすき好んであんな狸婆ァと、色の戀のと言ふ譯が出來るものかな。」

小「ハイサ、冷して置いて澤山おあがんなはい。年增は味みが格別だと言ひますから、隨分お樂みなはるが宜いノサ。どうせ私やァ捨てられたから。」

和「コウ、どうも然う言ッちやァ咄も何も出來やァ爲ねへ。まァ氣を落付けて此身の言ふ事

違ないやうにばかり察はれてならないものを。」
和「イヤハヤ呆れた嫉妬やきだ。お前さんのやうな人は、御亭主があつたら、門から外へ手放してお出しなさりやァ爲ますめへ。」
らん「アヽ、夫だからお前をも餘所に離して置くのが氣が揉めるから、内へ呼びたいと言ふのサ。」
和「夫こそ十日も續かねへ」ト口の裡にて言ふを聞咎め、
らん「オヤ何だとへ。」
和「ナァニ何樣もつゞかねへ天氣だとまうしたのサ。とう〳〵本降になつて來やした、お暇に致しませう。」
らん「夫ぢやァ何樣でもお歸りか。今頼んだ事は急度だョ。そして其樣子をお前又來て知らせてお呉れョ」ト言ふうち和七はそこ〳〵に支度をして立上るを、お蘭は送ッて出ながら、後からちよいと抱付くやうな身振をして、顏をさし覗き、「何故こんなに迷はせてお呉れだ。憎い人だノウ」ト莞爾笑ッて脊中を叩けば、屎でも喰へと腹の裡では思ひながらも、さりげなく倶に笑うて別れ往く。

は腹の裡につく〴〵思案をめぐらすに、我女房とも思ふ小雛を敵の屋敷へ遣して、なぐさみ物にされん事は、残念至極のことなれど、首尾よく渠を入込ますれば、敵地の案内は忽地知れなん。今此事を相談なすとも、五兵衛は直に得心せんが、小雛が承知をすればよいがと、おやぶみながらも點頭て、

和「成程御尤のお咄でございます。主人の了簡は何様でございますか知れませんが、何にしろ那孃のためにも、唄女をさせて置くより僥倖でございますから、出來るか出來ないかお請合はなりませんが、まァ咄を致して見ると爲ませう。」

らん「そりやァ嬉しいネエ。併がお請合が出來ないではいけないョ。何でも是非承知をして貰ひたいのだから、其處は何樣かお前のはたらきで、言ひこしらへてお呉れな。然うなると私もお屋敷の向がよし、お前にもお骨折だけの事はするから、ヨ、ヨ、和七さん、夫で那孃が上れば寔に宜いし、若不承知を言ふやうだと、お前がやつぱり情曲があるから身に染みて世話をお爲でないのだと疑ふョ。ホヽヽヽヽ。」

和「イヤ、これは迷惑なお咄でございますネ。」

らん「夫でも私の氣ぢやァ、惡推か知らないけれども、此間ちらりと見た樣子が、急度さうに

是においてはどんな神さまを證人にしても大丈夫お疑ひはございません」
らん「夫が眞實なら改めてひとつお頼みがあるが、聞いてお呉れか」
和「へイ何でございますか、私に出來ます事なら隨分」
らん「あのネ、こりやァ私も據ない人から頼まれたことだが、實は高樣のお屋敷で、顏の美い藝のある女を抱へたいと尋ねてお在なさる處で、松村さまといふお役人樣が那小雛を御覽じて、あれなら急度お上の御意に叶ふには違ないと、薄々樣子をお聞きなさると、お前が今お言ひの通り、男嫌といふ評判を取るやうな堅い氣質だといふので、猶々お望が掛ッて何でも抱へたいから、私に身元を聞糺して、大體な身分の者なら相談をして呉れろ。尤極内々の譯だから、世間へ知らせないために、屋敷から掛合ふ處を私に世話をさせるのだ、其心得で頼むといふ譯サ。併がお前と萬一情曲のあるやうな事だと面倒だと思つたから聞いたら、さういふ身分體の者なら寔に僥倖な事だから、何卒お前から五兵衛どんへ此咄を爲て、早速高樣へ上るやうに爲てお呉れな、かう言つちやァ不躾らしいけれども、お支度金も相應には下さる樣子、其上那孃が御意にさへ入れば、隨分お宿のお爲にもなる事だから、其處等はお前の胸に治めて居て、側から進めて得心させるやうに咄をつけてお呉れな。お頼みと言ふは此譯サ」ト言はれて和七

は知れなんだけれども、何でも怪しいと思ッたから、エヘント咳拂を爲たら、周章て迯げてお仕舞ひだッたネ。」

和「ヘ、エ、夫ぢやァ那とき咳拂ひをなすッたのは貴女でございましたか。夫は大笑な咄でございました。實は那小雛とまうす者は、宿の主人の妹でございますから、主人から手紙を遣つて呉れろと言付けられて使に參りました處が、座敷だとまうす事だから、鳥渡呼出して貰つて、手紙を渡した上で主人の言傳をまうして居ると、いきなり咳拂が聞えましたから、肝を潰して迯出しました。」

らん「オヤ〳〵、そんなら那小雛はお前の所の旦那の妹だとかへ。夫ぢやァ猶々怪しいヨ。口では堅いことを言ッてお在でも、猫に鰹節だものを、油斷がなるものかネ。其證據は、只手紙を渡すばかりなら、あんなに周章て迯げる譯もあるまいぢやァないか。」

和「イエサ、夫が貴女と知つて居れば迯げも爲ませんが、萬一お客の旦那がたで、叱られでもするとつまらないと思ッて迯出しましたノサ。積ッても御覽じまし、主人の妹でございますものを、假令私の方で何とか思ッたとまうして、先で承知を致しますものか。其うへあんな商賣は爲て居ますが、とんだ野暮人で、男嫌ひといふ名を取ッて居ると言ふことでございます。

へ居りて、一ぷく呑んだ跡の煙草を和七に吸付けて遣りながら、「アノウ聞きたい事といふのも他ぢやァないがネ、お前實正に隱さないで言ッてお聞せな」ト言はれて和七は我が身の上を鹽谷浪人と察せしゆゑ、夫を言へといふ事かと、浮世を忍ぶ心から、はつと思へば胸うち騒ぎて、

和「エ、隱さずに言へとは何の事でございますへ」と覺えず膝を立直せば、

らん「ホヽヽ、そんなに眞面におなりでは聞きにくいがネ、お前は那小雛といふ唄女を知ッてお在だらうネエ」ト思懸けない事を聞かれて、扨は小雛と情曲ある事まで知ッて聞くかと又駭きしが、身分の大事であらざるゆゑ、少しは心の落付いて、

和「へイ、青柳橋の小雛なら知ッて居ります。」

らん「オヤ、夫ぢやァ深い情合だとお言ひのかへ」ト忽地に顏色が變れば、

和「ナニサ、そんな事は些ともございません。」

らん「イエ〳〵お隱しでない、私が先刻見たことがあると言ッたのは、其小雛の事だがネ、お前此間阿波長の庭で何かこそ〳〵咄を爲てお在だッたらう。」

和「エ。」

らん「それ御覽、覺のある事だから返事が出來まい。私も薄ッ暗い晩だから、しつかりお前と

に、そんなに怖がつて騒ぐこともないはネ。若大降になつたらお泊りな」
和「何様いたして、そんな事が出來ますものか。一晩でも内を明けやうものなら、直に暇に
でもなるかも知れません」
らん「オヤ、夫でも稀には女郎買にもお出でだらうし、然うないところが他にお樂な所へ
お出での時は、隨分泊ッてお歸りの事があるだらう。」
和「イエ〳〵、あゝ見えましても宿の主人は餘程氣の六ヶ敷人でございますから、なか〳〵
そんな事は致されません。」
らん「宜いはネ、そんな解らない主人なら、暇を貰ッて私の所へお出でな。幸手代が一個
ほしいと思つて居る所だから、然うでもなると何樣に嬉しいか知れないョ。」
和「私も夫だと願ッたり叶ッたりでございますけれども、是まで世話になつた主人で見ます
と、然う義理を惡く出られも致しませんから、マアもう些と日和を見てからの事に致しやせう。
何にしろ日の暮れねへうちに參りませう。」
らん「そんなに歸りたがつてお言ひのを無理にとも留めまいがネ、些とお前に聞いて見たい
事があるんだから、すこし待ッて居てお呉れョ」ト言ひッヽ立ッて小用に往き、以前の火鉢の側

いろは文庫　卷之三十八

第七十五回

面白い狂言炬燵櫓下とは川柳點にて穿ちし可笑み。お蘭はさながら煠られたやうにうつとりと上氣して、亂れし鬢のべたくと汗にて顏へひッつくを、五月蠅さうに撫上げながら炬燵から這出て、

らん「アヽ暑い、私をこんなにいじめながら、お前は平氣な顏を爲てお在だから憎らしい。」

和「ナニ平氣な物でございますものか、大汗になりやした。」

らん「夫ぢやァ些と緣側の障子を明けやうかネエ」ト寐ながら障子を片手で明けて、「オヤ早晩の間にか雨が降出したヨ。」

和「エ、そりやァ大變だ」ト緣側へ出て空を詠めながら、「ドレ小降のうち速く歸る事と致しませう。」

らん「アレサ何だらうネエ、張子の體ぢやァあるまいし、雨が取つて喰はうとも言はないの

らん「ないならもつと此方へ寄ツても宜ぢやァないかエ」ト手を取ツて引き寄せにかゝれば、
和「何だか大そう醉つてわからなくなりやした」
らん「私も醉つたヨ。夫ぢやァちつと炬燵へ這入つて横におなりな」
和「イエ〳〵、いくら醉つても、其樣な事をして萬一誰ぞに」
らん「なァに今日はお前が來てお呉れの約束だから、内の者はみんな用を言ひ付けて出して仕舞つたから、何にも遠慮はないヨ。私もあたるからさァお這入りヨ」ト無理に炬燵の側へおし遣れば、
和「そんなら少しお當てなすつて下さいまし。アヽ寔に宜い火でございます」
らん「オヤまァ堅ツくるしい、足を出してお當りでなくッてはあつたかくないはネ」
和「それでもお前さんのおみあしへ障りでもすると惡うございますから」
らん「何故惡いのだへ、お前が障らないやうにお爲だと、私の方から障ッて進げるヨ」
和「それぢやァ斯う爲ますが宜うございますか」
らん「アヽレ冷たい足だネエ、ホヽヽヽ」ト此とき入江町の七時にや、時雨を誘ふ鐘の聲最肌寒くぞ聞えける。

に就ては上方までも間者が遣ツてあつて、其浪人の樣子を氣を付けてあるけれども、尙私等にまで心を付けて、若も怪しい事でも聞き出したら速く知らせろ、知らせ次第御褒美を下さるといふのだから、女のいらざる事とは思ひながら、内々目角を付けて居るのだがネ。これは寔に内證の事だから、忘れても餘所へ泄れるやうなことを爲てお吳れだと、私の株じまひだから、然う思ツてお吳れヨ。」

和「へヽエ、夫でこのお手紙の樣子が解りやした。御褒美になるやうなことなら、私も些と其浪人の在家を尋ねて歩行たいものでございます。重荷を脊負て商賣をするより、其方が利方かも知れやせんから。」

らん「そりやァお前が本統に私と心を合せてお爲なら、隨分ネエ。」

和「イエ、夫はもう金にさへなる事なら、どんな事でも致しやせうが、そして其浪人の隱れて居る所をお前さん御存じのでございますかネ。」

らん「アヽ、そりやァ些たァ心當もあるがネ、まだお前の氣が本統に知れないのに、放心放心海口られるものかネエ。まァそんな事は跡にして、お前私に疑はあるまいネ。」

和「イヤもう些ともございません。」

りしかば、はつとばかりに駭きしが、腹の裡に思ふやう、偖は是なるお蘭事は、高の屋敷へ出入をのみなせる者と思ひしに、我々が身のうへをも竊に探り出さんとする隱し目附でありけるか、爾もあらばあれ某を鹽谷の家來と知らざるは、いまだ武運に盡きざる處歟、渠と枕をかはさん事本意には思はねども、斯ういふ譯さへあるからは、那女に心をゆるさせて、敵の樣子も探るべく、又ふたつには味方の大事を敵へ泄らさぬ防ぎにもなるべき事もあらんかと、速くも思案を定めしかば、

和「なる程こりやァ色文かと思ッたら、何だか私が讀んでは譯のわからないやうな事が書いてありますネ。」

らん「ソレ御見な、夫だからあんまり人ばかり疑ふものではないヨ。」

和「是は大きにあやまりやした。夫にしても此お手紙に書いてある鹽谷の浪人が、何ぞ惡いことでも爲て、こんなに嚴しくお尋ねなさるのでございますかネエ。」

らん「ナニ惡い事を爲たと言ふのではないけれども、其浪人が萬一師直さまを主人の敵だと言ッて、途中なんぞで切ッてかゝりでもする事がありは爲まいかといふ御用心で、師直さまは御門の外へお出でなさる事もなく、お屋敷の内も晝夜の立廻りで、それは〳〵大そうな事サ。夫

い様に、お暇に致さうと申すのでございます」ト言はれてお蘭は堪り得ず、

らん「アレサお待ちョ。お前がそんなにまでお思ひなら、此手紙を見せるから、夫で私の心の中を察しておくれな。」

和「エ、そりやァ本統でございますか。併お前さんのお隱しなさる物を無理に見ては。」

らん「サア、見てもならず、見せても濟まない大事の手紙だけれども、お前の疑が晴らしたいばつかりでお目に懸けるからネ、是を見せたうへではもう否應は言はせないから、宜くこつくりと腹をきめて見てお呉れでないと、私が先のお屋敷へ濟まない事になるのだョ。」

和「そりやァもう、お前さんが見せにくい物をお見せなさる程になすつて下さるのだものを、私の心に是ならと得心がゆきさへすりやァ、此方から願ッても何卒然うなりたいのでございますが、何樣でございませう。」

らん「おまへが然うさへ思ッてお呉れだと、寔に嬉しいョ。そんなら大事の手紙だけれども、極内々で見せて進げるのだから、決して此中に書いてある事を他に咄してはならないよ」ト言ひながら、懷に隱したる以前の文を出して見すれば、和七は取ッて開き見るに、松原左仲が許よりして、鹽谷浪人の樣子をば、八百屋傳八と示合せ、探り出して呉れよとある頼みの手紙であ

らん「アレ、もう何故そんな事をお言ひのだらうネエ、此手紙はそんな物ではないのだヨ」

和「イエ、然うでないものなら、お隱しなさる筈があるまいぢやアございませんか」

らん「ナニサ、然ういふ譯で隱すのではございませんハネ。是は些と譯があつて、爾るお屋敷から極内々で頼まれた事があつて、其用が書いてあるのだから、めつたに人に見せられないと言ふばかり、何もそんないやらしい事ではないのだから、本統にさう思ツてお呉れヨ」

和「へイ〳〵、左樣なら宜しうございますから、たんと其お屋敷とやらの御用をなさるが宜しうございます。私も彼是と言はれて見ると、おつな心持もするやうなものよ、聞かねへ前だと思へば宜うございますから、其氣でドレ〳〵參りませう」ト又歸りかゝれば、

らん「オヤ、夫ぢやァまだ疑ぐツてお在のかへ」

和「疑ぐツた所が詮方はございませんが、私やァ馬鹿な性で、是迄薄情らしい情曲は爲たことがございませんが、倘萬一この女ならばと思ひ込むときは、飽くまで先の腹の中をさぐツて、些とでも先に薄情な樣子でもございますと、跡で口惜い事があるからと、せぐり詰めますから、何時でも出來ずに仕舞ふのでございます。お前さんがお屋敷の御用だと被仰のに間違はありますまいから、夫を私が何もあらひだてをするにも及びません。其處で私は御用のお邪魔にならな

第七十四回

お蘭は和七を義黨の一個倉橋全助ならんとは、神ならぬ身の知らねども、松原左仲が許よりして一大事をば言送りし密書であるをなか〳〵に、他人に見すべきやうもあらねば、返言に困りて口ごもるにぞ、和七は態と氣を持たせんと、莨入を腰にさし、歸り仕度をなす程に、お蘭はあわてて引き止め、

らん「和七どん、お前腹をお立ちのかへ。」

和「イエ、ナニ腹も脊も立ちませんが、居れば居るほど宜い慰みものになるのでございますから、足元の明るいうちお暇に致しませう。」

らん「アレサ、お前が此儘歸ッてお呉れだと、何樣も私の心が濟まないものを。」

和「なる程お前さんのお心ぢやァ、まだ嫐り足りないと思ッてもお在なさいませうが、夫ぢやァ私の立身はございません。是が否だから、はじめから放心眞請になると恥をかくやうなことがあるだらうと思つて居ましたが、按のじやう、お文の取りかはしをなさるやうな、深い色男がお在なさるのに、自惚らしい事を言ッたのが、我ながら馬鹿氣きつて居りやす。」

迷はせたお前は寔に罪だヨ。」
和「オツトさう味く被仰ツても、私やア見て置いたことかございますぜ。」
らん「オヤ、見たとは何をお見だ。私なんぞは口廣い事だが、そんな事は塵ほどもないのだヨ。さア何時の何刻何處でお見のだへ」ト言ひながら、和七の膝へしがみ付いて、顔をぢつと見つめる。
和「ハヽヽ、何もそんなに腹を立つて被仰事はございません。是が情曲になつたうへと云ふではなし、萬一さうでもなつたらばと思ふ處から、先ツくゞりな事をまうすのでございます。」
らん「さア、夫だから見たことがあるなら何處で見たかさうお言ひといふのだハネ。」
和「そんならまうしませうが、お前さん先刻私が參ツたとき、うろたへて懐へお隠しなすつた物は何でございます。」
らん「エ」ト恟りする様子ゆゑ、
和「ソレ御覧じまし、何でも何所のかお樂の所から來たお文でございませう。夫でないものを、あんなに周章てお隠しなさる筈がございません」トおつな所の辭質から、讐の祕事を聞き出す事は、次の回を見て知るべし。

ざいましたから、飛立つやうにも嬉しうございましたが、又考へて見ると、こんな靑野郎にお前さんのようなお方が惚れたのはれたのといふ筈がない、こりやァ何でも眉毛に唾を付けねへで、放心本氣にならうものなら、宜い遊ばれ者になるのだと思ッて居やしたが、夫ぢやァまんざら嘘でもないのでございますかネ。トサ、眞請にうけさせて置いて、跡で笑はうと言ふのぢやアありませんかエ。」

らん「アレモウ、お前も疑ひ深いネエ、女の口から戯談にこんな事が言はれるものかネ、言ひ出したうへでお前が承知してくれでないと、私やァ直に死ぬ氣だから、そのつもりで返事を爲ておくれ。」

和「お前さんが夫だけに腹を極めて居ておくんなさりやァ、私も命も入らねへ氣になりやすが、又つく〴〵考へて見ると、中年婦ざかりのお前さんが、今まで後家を立てて居やうと被成たからと言つて、端から人が立てさせて置くものぢやァございませんから、是まで何處にか味いお樂があるに違ひないと思ふと、なまなかな事をして氣を揉む種をこしらへるやうな者でございますノサネエ。」

らん「オヤまァとんだ事をお言ひだネへ。私やァ是でも堅いものサ。その堅い私をこんなに

和「何の事かと思へば、あんな事をして人を困らせて遊ばうとおぼし召して、悪い戯言でございますぜ。」

らん「アレサ、何でお前を困らせたり遊んだりするものかネ。」

和「オツト然う味くは欺されやすまい。何ぼ私が薄鈍と言ッたつて、てへげへ積ッて見ても知れたものだらうぢやァございませんか。こんな見る陰もねへものに、何様してお前さんなんぞが唾も仕ッ掛けて下さる譯がありやすものか。」

らん「イヽエサ、お前がさういふ氣でお聞きだからいけないョ。そりやァもう私がこんな老媼を爲て居ながら、あつかましい女だとお前に積られる處は恥しいけれども、よく〳〵思ひ込まないであんな書いたものが進げられるものかネ。噓だらうか實情だらうか、私の身になッて考へて見てお異れな。」

和「夫ぢやァお前さん、眞實でございますかへ。」

らん「アヽ」ト言ひながら些し顔を赤らめる。

和「夫が實情のことなら、私も正直なお咄を致しやせうが、實は此間上ッたとき、私の袂へ書いた物をお入れなすつたから、何だらうかと内へ歸ッて明けて見ますと、細々としたお文でご

らん「宜いはネエ。商賣用で何處へかお出でのを止めてはわるいけれども、お前のは情人の所を方々拵いでお歩行のだものを、些とは邪魔をして進げないと體の毒になるヨ。」

和「こりやァ大笑だ、私がそんな事でも爲てあるくやうな働がございますれば、何様までも他のうちの奉公人をして、こんな重荷を脊負て歩行は致しませんけれども、何を爲ても不器用な生質だから詮方がございません。」

らん「噓々、人が知るまいと思ッてそんな事を言ッてとぼけておいでだけれども、私やァ些し見て置いた事があるヨ。」

和「エ、夫は何でございますか、人違にもしろそんな洒落た事でもあるやうに言はれるのは嬉しい譯でございますけれども、丸でその方はお問のでございますから咄せやせんノサ。」

らん「そんなにお隱しなら、まァ其事は言ふまいがネ。此間私が別に賴んで進げた事は何様だエ。」

和「ヘイ、御註文のお品は今日持ッて上ッた丈とぞんじましたが、まだ何か他に。」

らん「アレさ、反物の事ぢやァないヨ。ソレ、ネ、此間おいでのとき內證で書いた物を進げたらうネ、あの事は何様してお呉れだと言ふのサ。」

かネ、まア今日は遊んでお在ヨ」ト云ふ時、最前小女に言ひつけて遣りし酒肴を持ッて來て、
小女「御酒は樽のまんまで持ッて參りました」
らん「アイよし〳〵、夫でおぬしには用はないから、其處を〆て勝手へ往ッて居や」
小女「ハイ」ト言ひながら立ッて往く。此内和七は殘りたる反物を行李の中へ片付れば、お蘭は手自酒の燗をつけて、
らん「さア何にもないけれども、寒いからお燗の熱い所をひとつお飲な。アレサ、そんなに尻をもじ〳〵爲ながら、中腰をして居ないでも宜ぢやアないかへ。まア這方へお寄りと言へばサ」
和「こりやアとんだ譯でございましたネ。何時の間にかこんな御用意が有つて居りますのだものを、どうも恐入つた譯でございます」
らん「ナニサ用意といふ程の御馳走はないのだけれども、私もひとつ飲まうと思ふ處だから附合つてお呉れな」ト一盃はじめて猪口をさせば、和七も素より呑口ゆゑ、振切られぬが上戸の癖、覺えずうか〳〵飲む程に、客も主もほろ醉機げん、和七は額に手を當てて、
和「是はとう〳〵尻が落付いて仕舞ひました」

らん「アレサ、そんな意地の悪いことを言ッて、私に氣を揉せておくれでなくッても宜いではないか。お前が眞正にさう思ッて來ておくれのだと寔に嬉しいから、腹を立てゝお呉れでないヨ。そして私が頼んだ品は殘らず揃へて持つて來ておくれのかへ。」

和「ヘイ、持ッては參りましたが、縞柄や色合の所が御意に入りますれば宜うございますが」

ト言ひながら荷の中より種々なる反物を出す。お蘭は一々手に取ッて見て、

らん「オヤ〳〵是はみんな私の氣に入ッたのばかりだヨ。そして直段も寔に恰好だネエ。」

和「ヘイ、毎度御贔屓に仰付けられますから、貴女へさし上ますのは、他々より餘程はたらいてございます。」

らん「アレまア、あんな味い事を言ッて人を嬉しがらせてサ。其口前だものを方々の娘や唄女が惚れるのも無理はないネエホヽヽ。夫ぢやァ此内を是丈取つて置くヨ」ト言ひながら、自分の氣に入りし反物を四五反見分けて脇へ取退け、「アノウ和七どん、是で買物は濟んだがネ、お前今日はもう些と遊んでお在でも宜いだらうネエ。」

和「ヘイ有難うございますが、まだ些と他へ。」

らん「アレサ、まだ些と他へとお言ひでも、もう今に日が暮れるものを、何所へ往かれるもの

いろは文庫　卷之三十七

第七十三回

お蘭は和七が來しと聞くより、心そゞろにときめけば、挨拶さへもうはの空にて傳八を追歸し、俄に鬢のほつれを撫であげ、衣紋を繕ひなどする處へ、和七は既に入り來たるにぞ、お蘭は膝の片脇に取り廣げつゝ置きたりしかの松原よりおくりし處の手紙ありしに心付きて、あわてふためき推丸め、手速く懷に隱しツヽ、爾あらぬ體にて莞爾笑ひ、

らん「オヤ和七さん、今日も又お欺しかと思つたら、よく〳〵風の吹廻しでも能かつたと見えてお出でだネ。」

和「モシ、來い〳〵早々直にそんないやみを被仰から何樣もなりません。私やア昨日のお言葉に、翌日の晝すぎが都合が宜いから來いとございましたから、時をも違へず御誂文のお品を持つて參ツたのでございますが、併何かお客さまのある所へ上ツて、お邪魔になりましたのではお氣の毒さまでございますから、何なら又出直して上りませうか。」

いろは文庫第十三編序

四十有餘の誠忠義士、或は妻を去り子を棄て、おの〳〵苦中の苦を喫し、唯一筋に讐を覘ふに、ひと日も安き心はあるまじ。その趣を冊子に述べ、筆に綴りて童蒙幼稚の、耳にふれなばおのづから、義を見て勇む倭魂、老姥が夜話の舌切雀、兎の讐討聞んより、少しは益よしあらんかと、思ひ起して假名文字の、いろは文庫は著はしつれど、狸汁ほど味もなく、拙き作者が筆頭の、重い葛籠で果敢さへゆかぬを、例の書房に促されて、かち〳〵山の名にしおふ、口拍子をば木のかしらに、十三編の幕を開きぬ。

東都戯作者　爲永春水記

らん「アイ〳〵、夫も心得て居ますから、お前又お屋敷へお出でなら、いづれ近々私が松原さまへ上ッて何かのお返事はまうしあげませうと言ッて置いてお呉れ」ト咄の折から勝手より召仕の小女が出來り、

小女「お内儀さん、アノウ切屋の和七さんが、御誂文の品を持ッて參りましたと言ッて來ましたヨ。」

らん「オヤ然うか。待かねて居た所だから速く這方へお上りト言ひな。そしての」ト言ひながら小女を側へ呼寄せ、耳の側へ口を寄せて何かこそ〳〵言付れば、

小女「ハイ〳〵畏りました」ト立ッて往く。

傳「お容さまなら私はもうお暇に致しませう。」

らん「ナニお客ではないがネ、お前もいそがしい體をむだに引留められたら迷惑をお爲だらうから、勝手にお歸りヨ。かの咄はいづれ追々御相談を爲ませう。」

傳「ヘイ左樣なら、何分宜しくお願ひまうします」トそこ〳〵にして立歸れば、入り違ッて來るかの和七が、お蘭に對面なすにおよびて、又いかなる物語ある、开は十三編のはじめに綴らん。

傳「何卒首尾よく見つけ出して、しつかり御褒美にありつきたい物でございますが、貴女は何ぞ宜いお心當でもございますか。」

らん「私もまだ是ぞと見留めた事もないがネ、女の猿智惠のやうだけれども、今お言ひの大星といふ人が内心にどんな深い了簡があらうか、夫も知れないから、お屋敷からも大勢手分をして隱し日附も出してあるうへだけれども、私はまた他から手をまはして大星の樣子を探ツてくれるやうにと、上方の心易い人の所へ内々頼んでやつて置いた事もあるし、又鎌倉に來て居る浪人者にも、若やと思ふ心當のないでもないから、何にしても私が見留めたことがあつたら直にお前に知らせるから、お前も心付いた事でもお在りなら私に相談をしておくれ。さうすればお互に御褒美が頂かれると言ふものだから。」

傳「なる程是は宜いお咄でございます。何をするのも、兎角丸印の手に入る事を先へ考へて掛るのが當世でございませう。イヤ夫にまだもうひとつ左仲さまから御傳言のあつたのを忘れて居りました。昨晩阿波長とやらの二階でお咄のあつた小雛とかいふ唄女の事は、何樣か些も速く事のわかるやうに爲たいのだから、其積でやつてお吳んなさるやうに、然うまうして吳れろと被仰ました。」

酒びたしになつて居るのを、女房が異見を爲たといふので腹を立つて、子の三人もある女房を追出して、自分の氣に入つた娼女を受出して妾にしたとか何とか言ふ、イヤハヤ論にも評定にも絶果てた不行跡、あの樣子ではなか〳〵讐討の所存なぞはありは爲まいと、上方へ遣てある間者の所から内々知らせてよこしましたから、まア安心といふやうなものよ、まだ〳〵油斷の出來ることでないから、貴樣は幸ひ御門前にも居るし、其うへ世間も廣い樣子だから、何でも此鎌倉へ下ツて居る鹽谷浪人に心を付けて、倘も不審な事でもあつたら、早速にしらせるやうにするが宜い、尤此事は兼て高利屋の内儀にも内々含んで置いた譯もあるから、那人と宜く相談をして事をはかるが宜い、浪人共も此方の屋敷から隱し目附を出してあることは大體考へて承知して居やうから、那方も油斷をしては居まいけれども、貴樣達までがこんな事を言付けられて居やうとは思ふまいから、其處で密々まうし含めて置くのだ、隨分心をつけて、倘一大事を聞出し注進を爲た時には、一廉の御褒美も下さるのだから、等閑に思ふなと被仰付けられましたが、定めて貴女のお手紙にも」

らん「ハイ、私の所へも、お前に其お咄があつたといふ事は荒增書いておよこしなすつて在るヨ。」

傳「ヘイ用がないと御不沙汰を致して居りましたが、今日は高樣のお屋敷へまゐりましたら、松原左仲さまから貴女へとまうして、お手紙をおことづかり申しました」ト言ひながら鼻紙袋の間より一通の書簡を出して渡せば、お蘭は取ッて一通り讀下し、

らん「オヤ此樣子では何かお前に別にお傳言でもあるやうに書いてあるが然うかへ」

傳「ヘイ左樣でございます。一體先達の事がございましてから爾來へとまうすものは、倘鹽谷浪人が師直樣を讐と言つて附ねらはうかといふ御用心で、御門の通路が嚴しくなりましたから、是までお出入の者さへ身元のたしかでないものは、出入をお差止になつた程でございますけれども、私は基松原樣に仲間奉公を久しく致して居ッて、氣心も御存じのうへに、直御門前へ店を出して居りますので、左仲さまの御取計ひで、御出入の出來るやうになりましたのだが、さういふ譯柄でございますから、左仲さまも内外の事までお咄がございまして、實はいまもまうした鹽谷浪人の事について、是まで追々上方筋へも間者を遣されてございます所が、其浪人の中で一番氣掛りだといふ大星由良之助といふ者が、京都山科に大そう立派な普請をして、藏なんぞまで建込み、田地を買込んだり、金貸なんぞをはじめた鹽梅、何でも永く住込む了簡のやうに思はれる所で、近頃では又祇園町や伏見の撞木町あたりの娼妓遊びに現をぬかして、晝夜

し。

羨しおもひ切るとき猫の戀

古人の一句奇なるかなト一笑して筆を擱く。

第七十二回

美鳥町なる高利屋のお蘭は、獨り火鉢の側へ居りて貸方の帳面を調べて居る所へ、次の間の障子を明けて、八百屋傳八、

傳「ハイ御免なさいまし、傳八でございます。」

らん「オヤ傳八どんかへ。宜くおいでだネエ、さア火鉢の側へお出で、なんだか時雨たせへか寒くなつたぢやァないか。」

傳「左樣でございます。大きにお加減が違つて參りました。日短で嘸お忙しうございませう。」

らん「アイ何にもする間がないヨ。お前なんぞは別して世話しい店だから嘸ネエ。」

傳「イヤモウ毎日追掛ツくらを爲るやうでございます。」

らん「道理で此間ぢやァ薩張お出でないと思ツたが、今日は又何と思つて出掛て來たのだへ。」

件の捻りし金をちよいと頂いて懐へ入れる。小雛はつく〴〵見て居たりしが、覺えず涙をはらはらと溢し、

ひな「いかに世が世とは言ひながら、私が進げた僅ばかりのお金を頂いてお取りのお前はんの心の裡が思ひやられて悲しい」ト再び側へ寄添うて抱き付かんとする折しも、誰かは知らねど彼方より、エヘント一聲咳拂ひに、二個は恂り飛退いて、暇乞さへ言ひあへず、奥と表へ別れける。

僕此場を綴れるとき、傍に人ありて曰く、此趣にて見る時は、本名倉橋全助と呼るゝ和七が體たらく、小雛の色香に引かされて現をぬかす白痴者なり。かくては讐を報はんこと甚だもつて覺束なしト。僕答へて、然にあらず、義士なればとて木の胯より産れ出たる者にあらず、宜く人情に渡らずば、千辛萬苦を堪忍びて、なか〳〵本意は遂げがたからん。扨人情を知る者ならば、又色情のなかるべき。素より小雛は本國にて内約束をせしとあれば、夫婦にひとしき中にして、又是不義といふにもあらず。互に思ひおもはれては、假令忠義のためなりとて、なか〳〵離れがたからんを、先討入といふに及びて、愛着の念更になく、必死の覺悟を究めし事、眞の豪傑といふべきか。猶下の段を讀給はゞ、和七小雛が節義を知るべ

のが否になりますョ」ト言ひつゝひつたり寄添うて、男の顔をぢつと見つめる。

和「なる程女の了簡では、愚痴の出るのも無理はねへが、其處が時世時節だとあきらめて、商賣を大事にするといふ中にも、今夜の屋敷の客人は、別して氣をつけて勤めるやうに爲ないぢやァならねへぜ。彼是いふうち餘程ひまがとれた、又座敷の都合が悪いといけねへから、速く那方へ往くが宜い。此身もそろ〱歸る事と爲やう。」

ひな「ホンニ夫も然うでありますネエ。それぢやァ兄さんへは私の方からお返事をあげると言ッて置いておくんなはいョ。したがネお前はん、何だか寒さうでありますネエ。お待なはいョ」ト言ひながら帶の間より紙に捻りし物を取出し、「こりやァ餘り些とでありますけれども、道で何ぞ溫かい物でも食て往ッてお呉んなさいな。」

和「金だの。そりやァ有難へが、併是を貰ッたら跡でおぬしが。」

ひな「なァに困るやうなら進やァ爲ないけれども、夫は御祝儀に貰つた餘計な物だからネ、其位な物はお前はんの懐にもありませうけれども、夫で食べてお呉んなはると、私の念が屆いて嬉しいからサ。」

和「なる程さういふ譯でくれるのなら、折角のこゝろざしだから貰つて往くぜ」ト言ひつゝ

置かねへはな」

ひな「ホヽヽ然う思つてお呉れだと苦勞を爲ても甲斐があるけれども、戯談にも今のやうな事を言はれると口惜くなりますョ。夫は然うと、何だか急に逢ひたい事があるから呼出して呉れろと、今お清どんに言ッてよこしたが、何ぞ別に用でもありますのかへ。」

和「違へねへ。おぬしの顏を見たら肝心の用をさつぱり忘れて仕舞つた奴サ」ト言ひながら懷より手紙を一通取出して、「實は兄貴が此手紙をおぬしにしつかり手渡しをして呉れろ、夫とも若お客でもあつて内に居ねへやうなら、急ぎの用でもねへから其儘持つて歸つて呉れろと言付けられたから、おぬしの所に往ッて聞くと、這處の座敷だと言ふだらう、夫ぢやア直に歸らうかと種々考へたが、斯ういふ序に一寸でも顏が見て往きてへと思つたから、無理な都合をして呼出して貰ッた譯サ。ちつと薄恍惚やうだけれども、此身の心意氣はまアこんな物だから、察して呉れるが宜いぢやアねへか」ト件の手紙を手に渡せば、

ひな「啌にも然う言つてお呉れだと嬉しいョ。是が晴れて逢はれるのなら、どんなに宜からうか知れまいけれども、こんなに隱れ忍んでちよいと顏を見るのをば、此うへもない樂のやうに思つて居るとは、ホンニ果敢ない事ぢやアないかネエ。夫をおもふとしみ〴〵座敷を勤める

ねへ」ト言はれて小雛は眼尻の所へきりゝとした筋を出し、さも口惜さうな思入にて、

ひな「オヤ、お前はんもてへげへでありますヨ。私をやつぱり唄女だと思つておいでか。今改めて言ふでもないが、互にお國に居た時分、兄さんが私をお前はんの所へ遣らうといふ薄々相談があると聞いて、歳のいかない心にも嬉しい事だと思つて居るうち、お屋敷の那騷動、ちりぢりばらばらになる中にも、お前はんと兄さんが同居に暮してお在なはるのみか、私と斯うい ふ譯になつたのも、やつぱり盡きない縁かと思へば、あつかましい事のやうだが、私きァお前はんの女房の氣で居るものを、浮氣な酒にまぎらして、お客の前は程を合せて居るやうなものの、他に心が移らうか移るまいか、積りでも知れさうな物ぢやぢやァありませんか。私の氣ぢやァお前はんや兄さんに、何卒首尾好く本望を」

和「コレサ、放心々々とそんな事を言つて、萬一他に聞れるとならねへぜ。壁に耳があるめへとも言はれねへから、氣を付ける事だ」

ひな「ホンニ然うでありましたネエ。夫だけれどもお前はんにあんな事を言はれると、眞から腹が立つので、ツイ愚痴も言ふんでありまさァネ」

和「馬鹿ァ言ツたものだ。おぬしを浮氣者と思へば、此身より兄貴がそんな商賣をさせちやァ

和「高利屋とは美鳥町のぢやァねへか」
ひな「アヽ」
和「そいつはとんだやつが居るなァ」
ひな「オヤ、夫ぢやァ那お内儀さんを知ッておいでなはるのかへ。油斷がならないネエ」
和「何故々々」
ひな「それだつて、あのお内儀さんは寔に男好だといふ評判だのに、しかも後家さまだといふ事だから、お前はん何樣かしてお在のぢやァないかへ」
和「馬鹿ァ言ッた物だ、あんなやつが何樣なるものか」
ひな「イヽエ、何とも言はれないヨ。男といふ者は寔に浮氣なものだから、口あたりの宜い女があると、直に手を出して見たがるものを。然うでないものが、とんだやつが來て居るとお言ひの譯がなからうぢやァないか」
和「ナニ那女の事では、實はおぬしの兄貴から些と言はれた事があつて、困り拔いて居る處だから、其處でとんだやつが居ると言ッたのヨ。他の事ばかり穿鑿をするけれども、おぬしもこんな浮氣な商賣をして、毎日種々な客に出るのだものを、どんな事をして居るか知れた物ぢやァ

ヨ。」
ひな「寔にお前の御深切は死んでも忘れないヨ。」
女「アレサ餘計な事を言はないで、速く顏を見てお出でヨ」ト脊中をちよいと敲く眞似をすれば、小雛は嬉しさうに莞爾笑ひながら、いそ〳〵階子を下りて往く。其時這方の庭先なる生垣の小陰に忍びし和七は、四邊を見まはしながら、
和「何だか急に寒くなつて來たやうだ。那丈賴んで遣つたのだから、何樣か都合をして呼出して吳れさうな物だが、何にしろ人を待つといふやつは氣の揉る物だ」ト獨言を言ッて居る所へ、奧の座敷の緣側より、飛石傳ひに忍び足、小雛は四邊を伺ひ〳〵側へさし寄り、小聲にて、
ひな「和七さん、宜く來てお吳れだネへ。嘸待遠でお在だッたらうけれども、何分座敷が。」
和「そりやア此身も察して居るノサ。今お淸に　これは茶屋の女の名なるべし　內證で呼んで吳れろと賴んぢやア遣つたけれども、萬一座敷が外しにくかアあるまいかと氣を揉で居たが、宜く夫でも出て來られたのウ。何だか大そう二階が賑かなやうだが、何處のお客だ。」
ひな「お聞きなはい、高さまの御家中でネ、たしか一個はお留守居だといふ事でありますヨ。夫に高利屋のお內儀さんが來て居るんでありますは。」

な目に合ふか知れやァしねへ、兎角そんなむつかしいことには手を出さないのが大丈夫だハ、ハ、」

いぜんの客「全體吞めねへくらゐなら、お合を致しませうと言はないが宜いのに、さァ〳〵受けたからには飲んだり〳〵。」

いと「いけないねへ、衆人で私ひとりをおいじめなはるンだものを」ト溜息をホット吐き、猪口の酒を見つめて居る故、みな〳〵、アハヽヽホヽヽト一座が殘らず大笑となる。此うちに又外の藝者なども來りて、いよ〳〵座中が賑かになり、客も大機嫌となりし頃、茶屋の女が小雛の袖をちよいと引くゆゑ、小雛は夫と心得て、著替に行く振をして、折よき所でその座を立てば、かの茶屋女もついて來て、

女「モシ小雛さん」ト言ひながら耳の側へ口を寄せ何かひそ〳〵囁けば、小雛は覺えず莞爾して、

ひな「オヤ然うでありますかへ。だが座敷の都合が何樣でありませうネエ。」

女「なァに、そりやァ私が吞込んで居るから宜うございますがネ、餘り咄に實が入過ぎて、お客のことを忘れないやうにお爲なはいヨ。そしてネ、ほかの物の目に懸ると面倒でありますす

いと「オヤ、そんなまごついたお盃は否でありますネエ。何れ旦那がお改めなはらないぢやア、何處へ往ッても治りませんハヂ」

客「イヤサ、合を頼むのだから宜いではないか。」

いと「オヤ、夫ぢやァ旦那のお合でありますヂ。」

ひな「是は小糸さん、ひとつ飲まなくッてはなるまいネエ。さァ〳〵私がお酌をして進げやう」ト言ひながら猪口に一ぱい酌ぐ。

いと「アレさ貴孃はん、（これは小雛をさしていふことばなり、すべて豆げいしやは本しよくのげいしやを姉といふこと、かゝる場所の風俗と知るべし）ひどいぢやアありませんか。わちきやァお前はんの贔屓をして進げて居るのに、こんなにいつぱい酌いでサ。」

ひな「ホヽヽ夫でもお合はお手本だから半分では濟まないハネ。」

いと「夫だッて私にやァこんなに飲まれないいんでありますものを」ト少し困つた顔をせしが、隣に居ッてゐたる今一個の客に對ひ、

いと「モシお前はん、何卒たすけてお呉んなはいましな。」

客「オットけんのん〳〵。其盃をすけて見たが宜い、直にこつちへお鉢がまはつて、どん

いろは文庫　巻之三十六

第七十一回

川を見はらす料理茶屋の二階にざゞめく客の聲、

客「ヤンヤ〱、小雛の松盡し、何時も替らぬえらいもの、えらいもの。一寸一盞飲み給へ」

小ひな「オヤ又私でありますかへ。こりやァひとつお手元を拝見がしたいぢやァありませんか」

客「イヤ〱、此身は今なみ〱と、しかも爰に居る小糸の酌で、ノウ小糸、おぬしが慥な證人であらうがの」

豆げいしや小いと「オヤ、私やァ何様だか忘れて仕舞ひましたヨ」

客「這女めが、小雛の肩を持ちをるな」

いと「アレサ、夫でも私やァ物覺が悪いんでありますものを」

客「オット然うは抜けさせない。夫では此猪口は、小糸おぬしに遣るぞ」

りませんから」ト言ひつゝ和七は誂の品々を自分の手帳に引合せて、反物或は小切の類を行李の裡へ入れ合せ、その身も支度などするうちに、五兵衛は一通の手紙を認め、

五「夫ぢやァお世話ながら那女に手渡しに届けてお呉んなせへ。萬一まだ座敷でもあつて内に居ねへやうなら、急ぐ用でもないから、手紙をその儘持つて歸つても宜いノサ。」

和「ナニ、假令客でも近い所の座敷なら、呼出して手渡しをする位な都合は出來やせうから、お案じなさいますな」ト言ひつゝ手紙を請け取つて、和七はそこ〳〵出で行きけり。

什麽此小雛は何者ぞ。基これ五兵衛の妹なるが、仔細ありて幼少より浪速にて成長、糸竹の業に妙を得たるに、その容色のうるはしければ、五兵衛が關東に下るとき渠をも伴ひ來りつゝ、敵の樣子を探るべき方便の種にもならんかと、青柳橋の唄女とせしに、思の外に評判よく、終には五兵衛の計りし如く、此小雛より高の屋敷へ手づるを得るの事にいたる。猶委しくは次の巻に解きあらはすを閲て知らん。

五「ナニ、そりやァ此身が一寸一日見ても、向の腹は知れ切ツて居るから大丈夫だが、言はずと如才もあるめへけれど、屋敷の様子を探らうとして、此方の身元を知られねへやうにするが宜いぜ。」

和「其處は私も呑込んで居るから氣遣ツてお呉んなさるな。夫は宜いが今日は色々なことで商に出るのが大きに遲くなりやした。昨日註文のあつた所へ一寸往ツて參りやせう。」

五「そりやァ御苦勞な譯だノウ。何なら今日は休んで翌日の事とすれば宜い。」

和「イエ、今の身分では是が世渡りで見れば、當分の事ながらも得意先は、大事にして置かにやァなりやすめへ。」

五「夫も言へばそんな物かノウ。夫ぢやァ序に少し賴みてへ事があるが、青柳橋の方へは往かねへかへ。」

和「丁度彼方を通りやすが、青柳橋なら小雛さんの所かネ。」

五「然うサ、那女に些と言つて遣りてへ用があるから、ちよいと一筆書くうち、支度をして居てお呉んなせへ。」

和「エヽ、ゆるりとお書きなせへ。私も色々代物のしわけをして、荷ごしらへを爲にやァな

和「なる程然う言はれて見ればそんな物だが、何分あの樣子ぢやァおそれる譯だネ。併し夫も忠義の爲なら病犬に喰ひ付れたと思つて、眼をふさいで見ねへやうにもして居やせうが、あんな多淫ッたらしい女にひよつと掛り合つたら、夫こそ直に腮で蠅を追ふやうな目に合ふかも知れやせん。是ばつかりやァ何ともどうも。」

五「ハテサ、おぬしも馬鹿を云ッたものだ。假令先はどんな淫婦だらうが、其處は此方の了簡にある事だから、體に障る程の事をしないでも、云はゞ口先であやなして居ても濟むだらうぢやァあるまいか。尤も是は眞直な事ではないが、敵は名にあふ歷々で見れば、いづれ反間の計策でなくッちやァ本望は遂げられまい。那女だッて主のある身ではなし、後家で見れば何も爾程の不義といふでもあるまいから、こりやァ何でも此身の了簡に附くとしなせへ。此身がおぬしだと敏に然ういふ段取にして、今頃は那屋敷の出入でも出來るやうにするのだけれども、其處が歲の若い所だらうが、只一途に本意を遂げれば宜いと思ッたら、どんな事でも出來やうぢやァないか。」

和「然うサネへ、こりやァ私が過ッた。そんなら其氣になつて何樣にもすると爲やせうが、併し此方は其了簡でも、大きに先の心が然うでなかつたら可笑なものでありませう。」

五「イヤ然うでないヨ。成らう事なら、お前那内儀さんと情由になつちやァ何様だらう」

和「コレサ親方、戯言を言ッちやァいけませんゼ。あんな艶姿ッたらしい、一寸見ても小胸の悪くなるやうな女が。」

五「然ればサ、那女のじやらけた風俗を見ちやァ此身でも否だと思ふから、年の若いおぬしの了簡ぢやァ、見向いて見る氣もあるまいが、爰にひとつの咄しがある」ト四邊見まはし小聲になり「おぬしにしろ此身にしろ、親方の手代のと云つて居るやうなものゝ、實は言へば互に朋輩、大星殿の内意を受けて、敵の様子をさぐらうと、千々に心はくだいても、高の屋敷は用心厳しく、出入をする事も叶はないので、仇に月日を送るのは、お互に本意でない事だから、何卒宜い手づるが欲しい物だと思ふ折柄、幸なのは今の内儀さん、おぬしも聞いて知つて居るだらう、那亭主といふのは高の屋敷のお金の御用達で、其亭主が死去つた跡では、那内儀さんが後家で居ながら御用を聞いて、師直公のお側まで酒のお相手なんぞに出るといふ噂だから、あの女を手に入れて見なせへ、夫こそ奥向の様子まで手に取るやうにも知れやうし、間が宜くば那屋敷の出入の叶ふやうにもなるまいものでもねへゼ。然うさへなれば屋敷の勝手は残らず見ぬかれるといふ物だが、何と一思案して見ちやァどうだらう」

のお晝後によこしてお呉んなさいな。和七さん又お前間違へると聞かないョ。そして其時外に賴んで置いたッけ、于、ソレ此間お出でのとき、那をも急度忘れないでョ」

和「へイ〳〵畏りました」

らん「アレサお前は返事ばかりして、直にお忘れだからいけないョ。何でも何處にか情人があつて、其事ばかり思つて居て、私等の言ふ事は鼻であしらつて居るのだものを、憎らしい。ドレ參りませう。親方大きにお囂しう」トおつな身振をしながら出てゆく。和七は跡を見送りながら、

和「チヨツ、いめへましい好色婆アだア」

五「コレサ、そんな聲をして萬一聞えると宜くないはな。何でも那内儀さんは、おぬしに餘程氣があるらしいぜ」

和「氣があるか竹があるか知りませんが、あすこの內へ往くたんびに異變なしよぢつぶりをして、氣障で〳〵なりやせんから、此頃ぢやァ成丈はづして往かないやうにして居りやす。其うへ口ぢやァ大さうな事を言ひやすけれども、おいねへ吝嗇で、目ぼしい物は買やァ爲ませんから、あんな得意は一軒ぐらゐしくじつたつて困りやァしやせん」

らん「アレまア、あんな味い事ばつかり言つてサ、憎らしいノウ。夫はさうと此間お前に頼んだ物を、何故持つて來てお呉れでないのだ」ト言ふうち和七は水を蒔き仕舞うて、店へ這入りながら、

和「へイ、那品は宿に宜い所を切らしましたから、大きに遲なはりましたが、漸々問屋から取寄せました。何なら一寸御覽に入れませうか」

らん「ナニ今日は些と急ぐから見ては居られないヨ。ずるい事を言はないで、持ッて來てお呉れなねへ」ト甘えたれた口の利やうにて、おつな目をして和七の顏をじろりと見ながら、五兵衞の方を向き、「私の處では前方は大丸からばかり取つたけれども、お前の所のは直段が恰好で物が宜いうへに、和七どんが甘い事を言ッて賣付けるのが上手だから、つひ此お店の物ばかり取るやうになつたがネ、近頃では此人が寔に不性になつていけないから、宜く言ひ付けてお呉んなさいヨ、ホヽヽヽ」

五「へヽヽ、畏りました。イエモウ毎度御贔屓に預りまして、有難い事でございます。御註文のお品は何でございますか、早速後程にでも和七に持たせて進げますでございませう」

らん「オヤ夫は嬉しいネエ。だが今日は私も色々用があつて、歸りが遲くなるから、何卒翌日

の屋敷の近邊を、得意をもとめて賣歩き、敵の樣子をうかゞへども、猶宜き手づるも得ざりしに、ある日歳比三十八九の艶姿たらしく見ゆる女が、小僧一個を供に連れて、此店先へ入り來れば、五兵衛は帳場から駈出して、

五「是はお内儀さん、宜う被爲入ました。何ぞ御覽に入れませうか。」

女の名お蘭、莞爾しながら店の裡を見廻して、

らん「オヤ、今日は和七どんはお留守かへ。」

五「ヘイ、今何處か其處等へ」ト言ふとき、和七は横町の井戸より水を一手桶汲み來り、店先へ蒔きにかゝるをお蘭は見て、

らん「オヤ和七どん、大そうお働きだネ。私が來たのを見かけて、そんなに閙し振つて水を蒔かないでも宜いぢやァないかへ。然うだが、まだしも度々來てうるさいと言つて鹽花を蒔かれるより宜いがネエ、ホヽヽヽ」ト言はれて和七は振り返り、

和「イヤ、是は美鳥町のお内儀さん、むねきに被仰ぢやァございませんか。私やァ あなたがお出でなさるだらうと思ッたから、砂の立たないやうに、今水を蒔きはじめた所でございます。」

けれど、さるにても其夜その時その場の體をあり〳〵見しとは、這は夢にてはあらずして、若や件の何某は轆轤首にはあらざるかと其頃噂せしよしを、さる家の書に記しありしを、僕竊に見し事あり。什麼轆轤首といへるもの、又是ひとつの不思議にて、其身心神勞果し、前後も知らず眠る時に、夢ともなく現ともなく、その首自然と脱出でて、空中にうかれ飛ぶとぞ。是にて思へば那何某が、我首遙に脱出でて現に夜討を見たりしを、その身は夢とのみ思ひて、同宿をさへ呼覺し、夫等のよしを語りしものか。這は文中に言はでもあるべき餘談には似たれども、お冬が夢の因によりて、筆の序に記せしのみ。是にて寒助の傳終り、次の回にいたりては又物語新に起れり。

第七十回

玆に義黨の一個なる相原江介と喚るゝは、赤保を退散したる後、大星の内意を受け、直に關東に走下り、敵の屋敷に程遠からぬ恩所相生町の片邊りに吳服小切類の店を出し、その身は松屋五兵衛と變名なし、同じ義士の一個たる倉橋全助といふ者を、假に和七と名告らせて、その店の手代となし、男世帶で暮すほどに、五兵衛は何時も店を守り、和七は又荷を脊負ひて、高

賜り、兄佐太郎の次男をもつて此家の養子となし、是を中村寒介と名告らせしより、その家代代中村氏にて今猶繁昌したりとぞ。

作者曰く、這一段のうち、お冬が寒助の夜討の狀を夢見し體に綴りしは、最附會の說に似たりと看官難じ給はんが、思裡にあるときに其趣を夢に見る、是をば思夢といふとなん。爾ればお冬が心の裡に、若我が良夫が讐討を做し討死するかと、日頃より竊に思ひ居たりしを、其夜の夢に見しものか、又渠が忠貞節義を天も感ずるところありて、其夜にいたり其狀を正しく夢見し物ならんか。爾すれば思夢にあらずして、是を正夢と云ふべきか。鬼神不思議の場にいたりては、必ず理外の理もあるを、看官宜しく推すべし。就きてひとつの物語あり。さる大諸侯の御内人にて何某とやらん名告れる者、かの討入の夜にいたり、正しく夜討の形狀をあり〳〵と夢に見しかば、その身も餘りの不思議さに同宿の者を呼び起し、箇樣箇樣と咄せしに、果してその夜義士の面々討入りたりと云ふことの、次の日にいたり聞えしかば、同宿の者は素より、傳へ聞く者までも奇異の思をしたりとぞ。此何某は義士の中に聊か由緣ある者ならねど、素より義氣ある武士ゆゑ、兼て鹽谷の浪人が主人の讐を報ずるならんと思ひつゞけて居たるより、斯る夢をば見しものか。爾すれば又是思夢なるべ

召させられ、那鹽谷家の義士の一個中村寒助といふものは其方の聟なるよし、かの者公邊の御沙汰により、若存命の叶ひなば、其方の縁によりて何卒當家に抱へたしと思ひ込んで居たりしに、此程四十七士の面々切腹仰せ付けられしよし、爾にも定めて愁傷ならん、我も力を落したり。就ては寒助が妻冬とやらん、爾が方に在るよしなるが、最早再縁の心もあるまじ、せめては渠が妻をなりとも當家において扶持をあたへ、奥が手元へ召し仕はゞ、予においても本意なるべし。其方が娘の事ゆゑ、心の儘になる事なら、曲げても奉公致させよとある思ひがけなき主君の仰に、有難涙にむせびッヽ畏りし段おん受けして立ち歸りッヽ、恁々と女兒と妻に言ひ聞かするにぞ、夫より先にお冬は又兼て覺悟のうへながら、倘も良夫の存命て、逢はるゝ事もあらんかと、思ひし甲斐のあらばこそ、このほど同志の面々と倶に切腹せしといふ使を聞きしその時は、その身もともに刄に伏し、おなじ道にもと思ひしを二親に止められ、爾あらば尼とも姿をかへ、良夫の後世を弔はんと、浮世の事は思ひ捨てしに、今また主君の仰により、お奉仕を做さんこと、いさゝか本意にあらねども、冥加に餘りて有難き君の恵に背かんやうなく、このうへは一生涯奉公なさんと思案をさだめ、夫より當家の奥方の腰元に召し出されしが、歳八十に及ぶまで更に怠る心なく、終に勤め死をなせしかば、その功により命のうちに新知百石の株を

しの事を未練な奴だと嘸さげすんで思ふであらう。どの道おぬしが往ッては寒助のためにもならず、其うへいよ〳〵名残が惜しまれて、別れられるものではあるまい。實は此身も駈出して往ッて一ト目逢ッたうへでは、おぬしの心をも那男に知らせて遣りたいと、足がむづ〳〵して堪らないけれども、重い役目もきいて居る此身だのに、倘殿樣のお名にもかゝはる事があつては濟まないと、此身でさへこらへて居る。只此うへは良夫の名前を汚すまいと心掛けて、悲しい所を辛抱せねば武士の妻とは言はれぬ」ト辭を盡して諭せしは、なか〳〵に此親父も義強き生質とぞ見えける。兎角するうち此讐討の事世間に聞えて大評判になる程に、又かの下僕市助は、その身は臆病者なれど強い事が好なるにや、下奴が所の壻さまで中村寒助といふ人が、四十七人の其中でも一番たんと働いて、敵討をしたなぞと自慢心で尾に尾をつけ、屋敷中を言ひ觸らすにぞ、義に勇む人ごころ、夫と聞くより家中の面々追々左内が方へ來りて、寒助が身のうへの樣子を尋ね問ふもあり、又は宜い壻を持たれしとて譽める者など多かりしかば、左内は覺えず鼻ひこつかせて、來る人毎におなじやうなる挨拶ばかりして居るほどに、其當分は早蜩飛まで客の絶間のあらざれば、お冬も流石に我が良夫を譽めそやさるゝ嬉しさに、自と歎を思ひ直して、少しは憂さを忘れしとぞ。爾れば此事何時となく主君の耳にも入りたりけん、あるとき左内を

市「ナニ、向では氣の付いた樣子はございません。下奴も聲でもかけて見やうかと思ひましたが、拔身の鎗なんぞを提げて大勢で來るのでございますから、萬一物でも言ッたらどんな目に合はうかも知れず、夫よりも些とも速くお知らせ申す方が宜からうと、急ぎあわてゝ歸つて參りやした。」

ふゆ「そしてどんな樣子だつたへ、餘程大そう疵でも請けて居たやうかへ。」

市「ハイサ、下奴にも宜くは見えやしなんだが、血だらけになつて居さッしたから、疵もありやせうが、何だか連の衆と莞爾々々笑ひながら、咄をしい〳〵歩行ッしやる樣子が、下奴の贔屓目か知らないが、他の衆より勢が宜く見えやしたから、ナニきつい疵もありやすまい。」

ふゆ「お爺さん何樣致しませう子エ。私やア道までも往つて、餘所ながらでも最う一度逢ひたうございますヨ。」

左「なる程然う思ふのは道理至極だが、今から女の足で跡を追ッて往ッた所が、此大雪だものを迚も追付かれるものでもなし、假令また追付いてなまなか夫婦の顔を見合せたら、其處は恩愛に引かされて、金鐵のやうに凝固つて居る寒助も、不覺の涙でもこぼすやうな事があつては、朋輩の見る前で良夫に恥をあたへる同前。若し又涙もこぼさないやうな寒助の了簡なら、おぬ

いろは文庫　卷之三十五

第六十九回

左内は若やとおもひし處へ、今市助の咄を聞きて、さてはいよ〳〵寒助が首尾よく本意を遂げたるかと、駭くばかり嬉しさは飛立つやうに思ふにぞ、

左「コレ市助、那男は中村寒助と言つて此身の壻だが、鹽谷家の大忠臣だから敵を討たうといふ計略に、八百屋とまで零落た振をしたけれども、なか〳〵實正に青菜小菜を賣るやうな者ではないから、此後は八百屋だの大東冬菜だのと言ふではないぞ。第一人聞が宜くないから。」

市「へヽエ、そんなら那旦那の本名が中村寒助で、八百屋といふのが世を忍ぶ假の名かネ、何だか芝居にでもありさうで、強勢でございます子。下奴は一體そんな事が好だから、速く知つたらあの旦那のお供をして、一番敵討に出るのだものを、惜い事をしやした。」

左「コレサそんなむだは言ふには及ばない。其處で寒助を一寸見掛けたばかりか、又は手前の顏を知つて居て、向から物でも言ひかけたのか。」

左「エ、夫ぢやァ寒助がいよ〳〵その仲間に交ッて居たのだな」

市「ハイサ下奴もあんまり悧り爲たから、速くお知らせまうさうと思つて、雪を摑んでは喰ひながら、息を限りに駈けて歸ッて來ました」トいふを打聞く人々が、偖はとばかり駭きて須臾辭もなかりける。

氣を落付けてゆつくりと咄して聞せるが宜い」ト云はれて漸々心をしづめ、
市「なる程斯うばかり言ッては分解ますまい。實は昨日の夕方若旦那のお辨當を持ッてお中屋敷へ往きましたら、部屋に居る國者が、雪が降出して寒いにちよいと一盃やつて往かないかと言はれたのか喰付で、とう〳〵其處へ腰が拔け醉潰れてしまひまして、ふいと目が覺めて見ると夜が明けて居ますから、南無三しくじつたと思ッて急ぎあわてゝ歸りかゝると、途中に大勢人立がして居て、敵討だ〳〵と口々に騷ぎ廻りますから、何の敵討だらうと段々人のいふのを聞くと、鹽谷家の浪人が高の屋敷へ討入つて、敵の首を取ッて今此道へ引上げて來るといふ騷だから、假令遲くなつて旦那に叱られるまでも、是を見ないでは歸られないと、人立の中へ這入つて待ッて居ると、頓ての事に向から來ましたがネ、どうも威勢の宜い事といふものは、一番に大鼓を肩に引かけた奴が來ると、夫から段々行列を立てゝ來るのが、體中血だらけになつて居るのもあれば、拔身の鎗をかついだのもあつて、强勢でございましたが、其中に八百屋さんが交ッて居たから肝を潰しました。」
左「何だ八百屋とは。」
市「アノ、昨日來た大東冬菜の旦那の事でございます。」

りばんにてありしと見えたり。

左「困つたものだ、大かた部屋へでも這入ッて歸る事を忘れたのだらう。那男も外に悪いことはないが、酒を呑むとしだらのないので度々間をかゝせてならない」ト噂なかばへ門の戸をドンドンと叩きながら、

市「モシ、爰をお明けなすつて下さいまし、大變な騷動が出來ました」ト大きな聲にてわめくゆゑ、お種は出て戸を明けながら、

たね「何だ此男は仰山らしい」トいふをも構はず其儘内へ駈あがりて、

市「モシ旦那さま、あわてちやァなりません、氣を落付けてお在なさいまし」ト眼の色を替へていふにぞ、

左「コレサ、此身は些とも周章ては居ないが、手前何をあわてて來たのだか、泥足も洗はないでどうしたものだ。」

市「ナニ泥足ぐらゐを厭ッて居られますものか。向は拔身の鎗の先へ首をさして、其人數が五十人ばかり」ト半分聞くより左内ははつと思ふにぞ、

左「コレ市助、手前のやうに言ッては何の事だか譯が解らない、何も周章ることは無いから、

へでは、せめて別の盃でもとり交しませうものに、翌の晩は來るなんぞと、まざ〳〵欺して往かれたのが、夫が本意なうございます」トいひかけて又伏しづめば、

左「ハテサ、夫は愚痴といふものだ。是程の一大事だものを、親子夫婦の中でも口ばしッて、萬一その咄が世間へ泄れては大變だから、本望を遂げるまでは決して口外を爲まいと言ふ盟を立てて爲た事に違はない。夫だものを假染にもそんなそぶりを見せてなるものか。まだしも跡跡まで心殘のないやうにと、此書置におぬしの身の在附をも書いて、金まで添へて殘して往ッたのは、餘程爲にくい事であらうのに、行屆いた寒助の仕方、誠に甘心な男だ。夫だものを假にも恨らしい事を思ッては濟まないぞ」ト言ひながら四邊を見まはし、「オヽ兎角いふうち夜が明けた、大かた夜のうちに本望を遂げたであらうか、駈出して往ッても見たいやうだが、流石にそんな事もならず、いづれ最う些としたら世間の評判でも樣子が知れるだらう。まァ何にしろ市助（これは不男の名なるべし）を起して飯でも焚せるが宜いはな」

たれ「ホンニ忘れて居ましたが、市助は昨日の夕方、お中屋敷へ左太郎の夜のお辨當を持たせて遣りましたが、夫ッきり歸りませんヨ」

此左太郎とは左内の忰にてお冬の兄なるが、中屋敷なる隱居のかたへつとめて、此夜は泊

を考へて見ろ。現在主人の敵を安穏にして置きながら討ちもせず、生涯腰抜武士と人に後指をさゝれても、男の命を大事に思ッて連添つて居るのが宜いか、又先刻も言ッた通り、此敵はなかなか並々の事で討てるのではないのを、千辛萬苦して首尾よく本意を遂げて見たが宜い、夫こそ末代まで美名を殘す大忠臣。然ういふ男を良夫に持つたおぬしは、公家高家の奥方になつたよりも仕合者、夫を選んで壻にした此身までが武士の冥加に叶ッたといふものだが、おぬしはやつぱり腰抜でも夫婦になつて居たいのか、よもや良夫を腰抜にするのを本望にも思ふまい。假令生きながらへて夫婦になつて居た處が、此先長くつて三十年か四十年、いづれ一度は死別れをせねばならぬ、只速いと遲いの違ばかりで、おなじ別れないではならない事なら、死んだ跡まで名の殘るやうに爲たいものだ。疊のうへで死ぬばかりが侍士の本意ではない。此身なんぞも義のためか御主人のおためなら、今でも命を捨てるのは物の數とも思ッては居ない。寒助のけなげな志に恥ぢても、未練な涙をこぼすまいぞ」ト勵まされたる父の辭に、

ふゆ「ハイ、段々との厚いお辭、有難うございます。最う〳〵泣きは致しませんが、然ういふ良夫の了簡なら、何故うち明けて一言でも言ッて聞せて呉れましなんだらう。私のやうな者だからといつて、忠義のために死に往くとまうすのを無理に止めも致しますまい。得心をしたそのう

仕候。尤も他聞を相憚り候事ゆゑ委細には申上げず候とも、心底荒増は御推察も下さるべき歟。只ひと筋に思立候うへは、只管最期の場所をのみ相急ぎ候折柄、多筆相認めまうし得ず、日比の御懇情をも報じがたく、今を御名殘と相成申候。此金子些少ながら、是までは用意にとて相貯へ置候へども、最早身にとつて入用も御座なく候間、拙者亡跡にて冬が身の在附の助とも被成下されたく賴上存じ候。此書狀死後に御一覽被下候はゞ、いさゝか形見とも思召被下べく候。以上。

ト筆短には書きたれども、赤心其處にあらはれて、いとも哀に聞ゆるにぞ、お冬はもとよりお種さへおぼえずワアット泣出せば、左内も堪へぬ老の淚せき來るを呑み込んで、

左「エヽめろ〳〵と泣きをるな。こんな目出たい事はないぞ。」

たれ「夫だッて是が泣かないで居られますものか。寒助は覺悟の上でもございませうが、私やァお冬の心根が可憐相でなりません。口では立派に被仰けれども、貴公も泣いてお在なさるぢやァございませんか。」

左「エヽ馬鹿ァ言へ、此身のは嬉し淚がこぼれるのだ。お冬も泣な、ヨ、ヨ、おぬしは年の行かない了簡では、嘸悲しいとも思ふだらう。夫を無理とは思はないが、能く此身のいふところ

でない時には、預つた此孃が寒助の前へ濟むまいぢやァございませんか」

左「ハテ宜いハサ、若も間違つて見て悪い物でも這入つて居たら、此身が寒助に言譯をするから、お冬の迷惑にもおぬしの構ひにもなる事ではない。此身に任せて置いたが宜い」ト言ひツヽ封をおし切つて、包みし服紗を開き見れば、一封の書狀あり、その上書荻野左内樣へ中村寒助と認めあるに扨こそと、左内をはじめ女房もお冬も倶におどろくのみ、猶その樣子の知れざれば、安き心はなかりけり。

第六十八回

たれ「オヤ、夫ぢやァ貴公の處へ書遺して置いた手紙でございましたかチエ。何にしろ速く讀んで聞せて下さいまし。お冬の心はどんなだらうと思ふと、寔に氣が痛んでなりませんから」ト言ひながら手燭に灯をともせば、左内は莨盆の引出より眼鏡を出してかける間も急がはしげに手紙を開き讀下す、其文章には、

一筆申上殘し候。しかれば今日拜顏の砌には心中の祕事うち明申上がたく、假に西國方の諸侯へ奉公住いたし候やう申いつはり候へども、實は今晩同盟の者ども申合せ必死の覺悟

て居やうより、まァ〳〵主取をして百石にでも在付いたのは結構な事だと歡んで居たが、萬一此身の考へ通り、敵の屋敷へ討入をしたので見ろ、其處で討死をしやうとも、又は本望を遂げたうへで切腹をしやうとも、永世武士の鑑と言はれるのだから、此うへの事はありやァしない。ホンニ忘れて居たが、お冬お主に先刻寒助が何だか預けて往ッたぢやァないか」

ふゆ「ハイちひさな服紗包を。」

左「たしか此身も然うかと思つた。夫を一寸持ッて來て見せな」ト言はれてお冬は身を起し、用簞笥の引出に入れて置きし小包を取出し來り、

ふゆ「オヤ何か大事なものが這入つて居るかして、結へめに紙縒で封がしてございますヨ。」

左「ドレ見せなせへ」ト手に取りつゝ「なる程、そして金でも這入つて居るか大そう重い包だ」ト言ひながら少し考へしが、「ムヽ、解つた事がある。假令大切な物が這入つて居るにもしろ、現在の女房に預けて行くのに封をするにも及ぶまいに、封を結んだのは、みだりに明けて見ないやうにしたのだらう。然うして見ると此内に何か仔細のある事と思はれるから、開いて見たら樣子が知れるだらう」ト件の服紗包を解きにかゝるゆゑ、

たれ「アレまァ貴公、假令壻の物だからと言つて、封じのしてある物をほどいて、若も然う

は案じないやうな顔を爲て居るけれども、心のうちでは寒助の事を些との間も忘れはしまい。その眞實が自然と通じて、不思議にその夢を見たのではあるまいか。尤夢といふ物は當にもならないものだけれど、夢の告といふ事もあり、正夢といふ事も昔からある物だから、段々考へれば考へる程、何樣も然うではあるまいかと思はれるやうだ」ト言はれて二個は悄りせしが、中にもお冬は涙ぐみ、
ふゆ「お爺さん、夫が萬一實正なら、私やァ何樣致しませうヂエ。」
左「ハテさ、若も夫が實正の事ならば、此身は百石に抱へられたのより嬉しはサ。」
たれ「貴公もまァとんだ事を被仰ぢやァございませんか。若實正で御覽じまし、寒助がその場で切殺されたるか、又殺されない處が、そんな事を爲出したら、只で濟む事ではございますまいに、壻の命にかゝはる事が嬉しいとは、貴公どうぞ被成たのではございませんか。」
左「馬鹿を言はッしやい、忠臣は二君に事へず、貞女兩夫にまみえずといふとは、和女も本が好だから、讀んで知つて居さつしやるだらう、那男が百石で外の大名へ抱へられるといふのは、此身も本望には思はないが、なかなか並の敵でないから、これを討たうといふ事は出來る事ではあるまい、然うして見れば何時までも浪人をして居られる物でもないから、見苦しい形をし

らないでも、何様かその人の世話でゞも、最う些と體の宜い世渡は出來さうなものだに、零落やうもひどすぎるが、立派になりやうもあんまり速過ぎると、寐られないにつけて思案を爲て見るに、日外赤保の城を召上げられた時分には、鹽谷浪人が主人の讐討をするに違ひないと言ふ評判で、高の屋敷でもひどく用心が嚴しいといふ咄だッたが、其後は一向讐討の樣子もなく、流石に命は惜しいものか、揃ひも揃ッた腰抜と惡口をいふ者もあつたが、近比ぢやァそんな噂をするものさへなくなつて仕廻つたが、一體あの寒助は義の堅い男だから、何處までも主人の怨を報はうといふ了簡で、敵の樣子をさぐらうために零落た體に身をやつし、偖いよ〳〵讐討と覺悟をしたゆゑ、今日暇乞に來たのではあるまいか。然うかと思ふ證據は、先刻咄しのうちに、主取をしたならば何處の何某樣へ奉公住を致したと言ひさうな處を、さる西國の諸侯方とばかり言ッたから、夫は何方と問返さうと思ふうち、色々聞く事や言ふ事が多いのに、那男が歸りを急ぐので、翌の晩來た時に聞いても解ると、つひ夫なりにわかれたが、西國方と言ッたのは、西方淨土といふ事かと、よしない事まで胸に浮んで、自己ァ宵からまんじりともせずに居たが、今又お冬の夢のはなしで思ひ合せて見れば、今日は極月十四日、月こそかはれ鹽谷殿の御命日、たしかに今夜高の屋敷へ主人の怨を報はうと、討入をしたのかと思はれる、お冬は此身達の前で

を組んでつく〴〵と聞いて居しが、
左「ハテナ、何様も氣になる事だわい」
たれ「オヤ貴公、何が氣になりますエ」
左「然ればサ、此身も先刻から言出さうかとは思ッたけれども、おぬし達に餘計な苦勞をさせるでもないと、獨りで胸を痛めて居たが、先刻寒助が歸る時の顏を見たか」
たれ「ハイ、何だか氣が付きましなんだが、變つた事でもございましたか」
左「然うサ、那男が今度主取を爲て、翌は主人に目見をすると言ふのなら、心嬉しくつて浮浮とじて出て往く筈だのに、暇乞をして別れる時、ホロリと涙をこぼしながら、急いであつちを向いた顏が、何樣も合點が往かないと思つたが、イヤ〱是も年寄の僻目かと思ひ捨てて、夫なりに今夜寐床へ這入つた處が、頻に胸さわぎがするのに、窻の戸へさら〱雪がふりかゝる音が耳に障つて些とも寐られないから、又思ひ出してつく〴〵と寒助の樣子を考へて見るのに、此間途中で逢ッた時には零落果て居た者が、なんぼ深切に世話をして吳れる者があると言ッて、然う四五日の内に主取が出來て、身のまはりまで立派になられるものでもあるまいが、若夫程に世話をする人があるものなら、縱ひ長々の病氣で貯の金を遣ひ果したにも爲ろ、青菜小菜を賣

な夢を見たのだエ。」
ふゆ「アノウ所は何處だか分りませんがネ、何でも立派なお屋敷で御ざいましたが、あれが軍とでもいふのか知りませんけれど、其お屋敷へ大勢でおしかけて往ッて、切合がはじまりますとネ、その中に内の寒助が交ッて居まして、自分も何處か斫られたさうで、血だらけになつて居ながら、人先へ出てはたらいて居ますから、アヽあぶない、今に殺されるだらうに、最う些と後の方へ下ッてお出てなさいと、聲を掛けやうと思つても、咽がつまつて物が言へませず、氣が揉めてなりませんうちに、何だか強さうなのが向から出て來ると、直に又切合はじめる樣子でございますから、危くつて見て居られませず、寧の事に側へ往ッて加勢を爲やうと思つても、體がすくんだやうで動く事も出來ませんから、氣を揉みぬいて居る處を、お母公さんに呼ばれて、漸々氣が付いて目が覺めたのでございますヨ。」
たれ「オヤまア、とんだ夢を見たものだノウ。夫でも切られた夢を見ると體へ金がはいるのだから、大そう宜いといふヨ。寒助が切られて血だらけになつた處を見たのは、那人が主取をして、是から段々身に金がはいるといふ知らせだらうから宜いぢやアないか。」
ふゆ「然うだと宜うございますけれども、何だか氣にかゝつてなりませんヨ」ト此内左内は手

第六十七回

左「オイ〳〵婆アどん、お冬が大層うなされて居るやうすだから、起して遣らッしやいな」
たれ「オヤほんにネエ、此孃は夢でも見て居るのかノウ。コレサお冬や、何をそんなにうなされるのだヨ。目を覺して寐返りをしな。大方胸へ手でも乗せて居るのぢやアないか。コレサコレサ」トゆり起され、お冬は目を覺して起直り、
ふゆ「オヤ、爰はやつぱり住居でございますネエ、アヽ怖かつた」ト溜息をホツト吐く。
たれ「アレサ氣味のわるい、否な事を言ふ孃だノウ。何ぞ怖い夢でも見たのかへ」
ふゆ「ハイ、眞に否アな夢を見たのでございますがネ。まだしも夢で宜うございましたが、若も實正にあんな事があつたのなら何樣だらうと思ふと、いまだに胸かドツキリ爲ますヨ」ト鳩尾のあたりを手でおさへながら、顔をしかめていふ。
左「ハヽヽヽ、たかが夢だは、そんなに覺めた跡まで思ふ事があるものか。そしてまアどん

いろは文庫第十二編序

所謂四十七士の輩、大星をはじめとして、かの寺岡にいたるまで、必死を究めて讐を報ぜし、そのこゝろざしに甲乙なく、いづれも眞の英雄なれども、そが中に幸不幸ありて、諸書及俚俗の話談にも、普く美名を知られしもあり、又その事跡の傳らざるは、名をだによくも知らぬもあり。尤名利を貪らんとする、輩にてはあるまじけれど、おなじ忠死を遂げながら、むなしく美名の埋れん事遺憾に堪へざる事なれば、一個々々の傳を考へ、猶その妻子一族等が、うへさへ泄さず綴らんと思ふも老婆心ながら、短き才に長物語、只いたづらに編數の、嵩むばかりを奈何せん。いかにせんとて今更に、止むべきならねば、ことしも又第十二編の稿を兌す。

去稔の雪漸く解けて
南庭の梅はじめて開く日

爲永春水記

寒「イヽエ日短の時分でもございますし、彼是心もせきますれば、最うお暇に致しませう。存寄らず種々御馳走になりまして有難うございました」ト言ひつゝ懐より紫の服紗に包みし物を取り出し、「お冬、是を翌の晩來るまでおぬしに預けて置くから、仕舞つて置いて呉んな」

ふゆ「ハイ、夫ぢやア明晩は急度お出でなさいますかへ」ト小聲でいへば頷くばかり、左内夫婦に別れを告げて、立關さして立出る、此時を是いつぞと言ふに、元祿十五年午の十二月十四日、今宵ぞ亡君のおん爲に大星由良之介をはじめ四十餘人、高の館に亂入して怨を報はんと盟約せし、心は爾ながら金鐵に異なるべくもあらねども、流石岩木にあらざれば、今宵かぎりの名殘ぞと思へば胸も張裂くばかり、夫と辭に出さねど、心の裡に暇乞、涙かくして出で往くを、神ならぬ身の左内夫婦もお冬も、それとは悟らねど、むしが知らすか何とやら、しきりに別れの惜しまれて、端近くまで立ち出でツヽ、今歸りゆく寒助が影見ゆるまで見送りける。

是よりお冬が預りし服紗包を解くにいたりて、はじめて寒助が本心を知るの一段より、猶寒助がうへの物語を第十二編の巻首に綴り、續いて自餘の義士等が傳の、最哀にして情合深く、義あり節ある實傳を、猶花やかに筆を加へ引きつゞき出板すべし。

預ツて居る家財は素より、娘にも小女の一個も付けて遣るやうに爲ませうから、夫等も都合の宜いやうに相談をなさるが宜い。」

寒「段々厚い思召し有難うぞんじますが、其御屋敷の殿樣が、近々お國へお立ちに成りますさうでございますから、品に寄りますと私も直にお供にお連れなさるやうな噂も聞きましたから、若然うなると來年お歸りまで、又一年お冬を御厄介ながらお願ひまうす事になりますかも知れません。」

左「そりやァ最う一年が三年でも這方は構はないが、住込が出來たうへでは、一刻も速くお冬をもいつしよにして安心が爲たい譯だ。夫に就てもお冬も久しぶりの事だから、兎も角も今夜は這方へ泊つて、ゆるりと何かの相談を爲るが宜からう。」

寒「へイ有難うございますが、明朝其殿樣へはじめて御目見を仰付けられますので、今晩は是非世話を致して呉れます人の所まで參りませねばなりませんから、いづれ明日首尾よく目見が相濟みましたうへ、明晩又出まして御厄介になりますでございませう。」

左「なにさま然ういふ譯なら無理にも止められないが、併し日一ぱいは爰で咄して往つても宜からう。」

げて寒助にすゝむる程に、客も主も呑む口ゆゑ、さしつさゝれつ酒盛に座もおのづからくつろげば、左内はいとゞ笑し氣に、

左「邂逅のお客に何も御馳走はないが、何卒今日は寛と爲て貰ひたい　夫はさうと寒助どの、異な事を聞く樣だが、先日貴樣に逢つた時は、此身も愕りする樣な零落やうだッたから、薄々は家族にも咄して、陰ながら心配を爲て居たが、夫には引替へ今日は又見違へる程な立派な打扮、縦四五日の間に何樣してそんな結構な身の上になんなすつたのか、一向此身には合點が往かない。」

寒「なる程御不審に思召すも御尤でございますが、先お悦び下さいまし、此程もちらりと申し上げましたかとも存じますが、深切に世話を致し呉れます者がございまして、此度思ひがけなく西國方のさるお大名へ、新知百石にお抱へになりまして、其うへ支度金まで下さいましたから、此通り衣服大小まで假なりに調へましてございます。」

左「ヤ、夫ははや結構な事だ。婆アどの聞かしッたか、此身が見處があると言ッたのは爰だが、何樣だなか〳〵此身の眼力はきつからう。寒助どのの器量では百石では安いものだ。其處で種々支度もあるだらうから、縫物その外遠慮なく娘に言ひ付けさつしやるが宜い。其處でそのお屋敷へ住込むやうになつたら、定めてお長屋でも下さるやうになるだらうから、其節には

寒「夫ははや恐入りました義でございます。先以て皆々様お揃なさいまして御壮健の御様子、何より大慶にぞんじます。扨先日は途中でふとお目に懸りまして、其節は種々御深切に仰下さいますのみならず、金子までお恵みに預りまして、有難い仕合にぞんじ上げました。早速にもお禮かたぐ\上ります筈でございましたが、種々身分の事に就きまして、手引のなりかねます事がございましたから、ぞんじながら大に御無沙汰を致しました」

左「アイく\、定めて何かそんな譯でもあらうかと思つて居ました」ト言ひながら後を見かへり、「お種や、女兒を連れて速く來ないか。ナニ、お茶をこしらへて居る。宜いはサ、他のお客ではなし、煮花はゆるりとでも、まア古花でもお茶を持ッて來て、速く顏を見たり見せたりするが何よりの御馳走だハヽヽ」ト言ふうちお種お冬も出て、みな夫々の挨拶あり。別けてお冬は久しぶりにて夫に對面する事ゆゑ、積る咄も聞きたからんが、兩親の居る前といひ、親も夫も物堅き氣質とかねて知る故に、側へさし寄りうち解けたる物語さへ遠慮して、辭ずくなに安否を問ふなど、深き意味ある趣は、筆にもなかく\述べがたく、よし又書き取りたればとて、只くだくだしくなるのみなれば、夫等は爰にはぶきて言はず。看官宜しく察し給へ。此内にお種は勝手にて用意せし酒肴をお冬に運ばせ、その身も持つて追々に座敷に出せば、左内は盃を取あ

第六十六回

跡に左内はいそ〳〵と、

左「コレ婆アどの、寒助が八百屋の形で來れば何樣でも宜いが、立派になつて來たと聞いては此形でも逢はれまい、其處の不斷袴を出して下せへ。お冬も久し振で夫に逢ふのだから、髪でも速く撫付けて、垢のつかない着物でも着替へるが宜い、そして肴屋を見せに遣んなせへ、何も別に氣張つた事をするにも及ばないが、珍しく來たのだから、些とは馳走もするが宜からう。慥寒助は蕎麥が好だと言ツたつけ。そして酒は宜いのと言ツて遣らないと此間の樣な悪いのをよこすから、宜く斷ツて遣んなせへ」ト獨で彼是氣を揉むは、餘程世話やき親仁と見えたり。斯て左内は袴を身につけ、短刀一本携へて客間の裡に到りて見るに、いかにも壻の寒助が、大束冬菜を賣ツて居たぼろ〳〵爲たる姿に引替へ、「黑の羽織に茶宇の袴、腰の物の拵まで一寸見ても直打の知れぬ出來合ものにあらざれば、何樣してこんな工面をしたかと訝りながらも、立派な打扮に自と辭も改りて、「是は〳〵寒助殿、宜くこそお尋ね下すつた。實は這方でも此身をはじめ妻も女兒も、今日は來られるか翌は見えられるかと、毎日お噂計して待つて居ました」

仲「イエ御玄關から大風に出掛けて參りました。」

左「イヤハヤ呆れたものだ、定めし荒布のやうなぼろ〳〵の形を爲て來たであらうな。」

仲「イエ〳〵大違でございます。只今お玄關から、物申と言ふ聲が致しましたから、出て見ますと、立派なお侍が供を一個連れて、拙者は若村寒助とまうす者だが、左内殿御在宿ならお目に掛りたいと申しますから、ひよいと仰向いて顏を見ますと、此間の大束冬菜でございましたので、寔に恟り致しました。」

左「ハテ何樣も合點が徃かねへ。此身が此間別れるとき金を三歩遣つては置いたが、なか〳〵其位な事で供まで連れて來るやうな身形の出來る筈がないが、萬一夫は人違ではなかつたか。」

仲「ヘイ、人違か何か其處は何ともまうされませんが、若村寒助といふ者だとまうして、ソレソレしかも手札を出しました」ト懐をかきさぐりて名札一枚さし出すを、左内は取ッて打ち詠め、

左「何さま是では間違もあるまい。尤此程の咄に、主取をする心當もあると言ッたから、そんな僥倖でもあつたのか、何にしろ逢つて聞けば分る事だから、先々客間へ案内をするが宜い」

ト言はれて件の仲間は又玄關へと急ぎゆく。

那近所へ往つて聞き合はせたら、大體手掛を聞き出さない事はあるまいと思ふから、まアむだと爲て出掛けて見やうョ。」

ふゆ「夫だと寔に御苦勞さまでございますけれども、心ゆかしにもなりますから、お願ひまうしませうか、ネエ、お母公さん」

たれ「然うサ、そんならまアお出でなすつて御覽じましな」ト言ふに左内は點頭て、支度なさんとする所へ、草履取の仲間があわたゞし氣に座敷に來り、

仲「モシ旦那さま、八百屋さんが參りました。」

左「馬鹿な奴ではないか、八百屋が來たからと言つて此身に言ふ事はない。婆どん用があるなら言ひ付けて遣らつしやい。」

たれ「アヽまア何も宜いと言つて遣んな。」

仲「イエサ、不斷來るのではございません、此間途中で茶店へお呼び込みなすつた八百屋さんでございます。」

左「ナニ、あの八百屋が來た。寔に困つた男ぢやアないか、來るなら夜でもこつそり來いと、那程言含めて置いたのに、夫ぢやア勝手口からでもこつそり來たのか。」

にしろ來さへすれば咄が何樣とも速くついて宜いけれども、又つく〴〵と考へて見るのに、常からあんな物堅い風の男だから、主取でも爲て身形でも拵へないうちは、手前達に逢ふのも外聞が惡いとでも思ッて、其處で自分の居る處も深く隱して言はないのではなつたかと、今更思へば那とき推しても居る所を聞いて置けば宜かつたに、殘念な事を爲たと、種々思案をすればする程、何だか物が手につかないやうで考へてばかり居たが、假令あの男が來ないまでが、手紙をよこすと言ふものか何か、二三日のうちにはいづれの道樣子は知れるであらうから、深く案じる事もあるまいはな」ト言はれて女兒も女房も、心ならねど詮方なく、是より日每に寒助がその音信を待つ程に、四五日立てども便もなく、餘りの事に思ひかねて、左內は妻と娘に對ひ、「近日上ると言つてから、まだ格別日間もないけれども、萬一自分の身に恥ぢて來ないやうな事だと、いつまで待つても詮のない譯だから、內で物を思はうより、今日は折から非番でもあるし、ぶら〳〵出掛けて尋ねたら何樣だらうノウ。」

たれ「夫でも貴公、居處がしつかり知れないでは、雲をつかむやうな尋物ではございませんかへ。」

左「イヤ、何でも此間逢つた所からそんなに遠い處に居るのとも思はれない樣子だつたから、

言つて來ても、此身は承知を爲ないつもりだのを、這方からそんな事を云ひ向けるなどとは思ひも寄らない事だ。壻といへば子も同樣だから、あの儘に見捨てては置かれぬ故、急に主取の口もなくば、浪人相應な家でも持たせて、細い煙も立てる位な事は爲て遣らうと思ッたから、其事も寒助に咄して置いたのだョ。」

たね「そりやァ最う私だッて、俺もあかれもしない夫婦中を引裂きたい事はございませんけれども、世間體をぞんじて、今のやうには申しましたが、貴公が夫程までに思召して下されば、私も此孃もどんなにか嬉しうございますョ。そして今居る所もお聞きなさいましたか。」

左「夫も聞いたが、當時他の處に掛人になつて居るゆゑ、尋ねて來ては遠慮な事もあるから、何れ這方よりお屋敷へ上りますと言ッて、何分自分の居る所を隱して言はないには困ッたが、推しても聞かれないから其儘別れたノサ。」

たね「オヤ夫ぢやァ爰へ尋ねて來ると言ひましたかへ。」

ふゆ「萬一その時あんまり見苦しい形でも爲て來ましたら、お爺さんの御外聞にでもなりは爲まいかと思ふと、夫も又苦勞でございますネエ。」

左「ナニ其事は寒助にも呑込せて置いたから、夜に入つて目立たないやうに來る筈だが、何

でも、他に爲やうもありさうな物ぢやァございませんかネエ」

左「此身も然う思つたから、何ぞ筆の先ででも喰ふ丈の事は出來さうなものだにと言ッたけれども、今では決句氣樂で宜いなんぞと言ふ所を見ると、元の侍になる氣はないのではあるまいかとも思はれるやうだ。」

たれ「夫御覽じまし、私ははじめから、那人は何だかはたらきの無ささうな仁だとまうして居りましたら、貴公が、イヤ〳〵あの壻は見どころのある男だから、鎌倉へ下れば隨分相應な知行で急度抱へられると被仰ましたが、何樣して今時は、目から鼻へ拔けるやうな者でも、めつたに抱へられる事には往かないさうでございますものを、あんなむつ〳〵した人を、誰が知行を出しますものかネ。夫にしても可憐相なのはお冬でございます。たつた獨りの女兒を、八百屋なんぞをする者に連添はせては置かれますまい、淚金でも先へ渡して、這方から離緣をして、些とも此孃の年を取らないうちに、何處ぞ相應なところへ緣付ける方が宜うございますヨ。あんな者に添はせて置いて御覽じまし、一生此孃が苦勢をするばかりでございますハネ。」

左「イヤ〳〵、夫は貴樣の了簡違だ。貞女兩夫にまみえずといふ事は知つて居るだらう、假令どのやうに零落やうとも、夫はその者の運不運で是非もない事だ。今先から離緣を爲やうと

大かた形風俗でも樣子は知れるものでございますが、貴公お逢ひなすつたとき爰でもお掛けなすつたのか、お隱しなさる程氣になりますヨ」ト言はれて左内は吐息をつき、

左「何も貴樣達に隱す譯もないのだが、あんまり馬鹿々々しくつて、咄すにも咄されないからヨ。」

ふゆ「オヤ、夫ぢやァ他に女房でも持つて、私には暇を遣るとでも申しましたのかへ。」

左「女房でも持つやうならまだしもだが、イヤハヤひどい零落やうで。」

ふゆ「そんならまだ主取も爲ないで、浪人をして居るのでございますかネエ」ト言ひながら目に涙を浮める。

左「イヤサ假令浪人でも、腰の物でもさして居れば聞えるが、此寒空に荒布を見たやうな腰ツきりの物をひとつ着て、大束冬菜と言ッて賣歩行て居るのを見かけたときには、此身もぎよつと爲たが、どんな身分にならうとも壻に違ないから、茶店の裡へ呼び込んで、段々樣子を聞いたところが、大煩をして持つて居た金も遣ひ果し、詮方なしに八百屋とまでなり下ッたと言ふノサ」ト聞くうちお冬はしく〳〵泣出し、

ふゆ「夫では嘸難義を爲ましたらうネエ。いかに暮に困るからと言つて、そんな者にならない

いろは文庫　卷之三十三

第六十五回

播州 朏の城主たる何某侯の御内人、當時鎌倉の上屋敷に住居なす、荻野左内といふ者あり。折しも非番のつれ〳〵にや、獨り一間の裡にありて、物の本など打詠めても、心にかゝる事ありけん、廣げし本にも心とまらず、溜息のみついて居るところへ、女房のお種といへるが娘お冬といふを連れて、夫の側へ進み寄り、

たね「モシ貴公、昨日壻の寒助どのに逢つたと被仰たばかりで、委しい事は追つて咄さうとお言ひなさるから、今日も種々お聞きまうして見ても、この事を言ひ出すと咄を他のことに紛らしてお仕舞ひなさいますが、何ぞ私どもに被仰て悪いことでもあるのかは存じませんけれども、お冬には現在夫で見ますと、此孃が氣を揉んで、樣子を聞きたがるのも無理とは思はれませんのに、貴公はまた何だか物思はしそうなお顔付で、溜息ばかりついてお在なさるから、なほ心掛りでなりませんョ。壻どのにお逢ひなすつた時には、どんな身なりをして居りましたへ、

もまうしあげませう」ト件の金を受けいたゞき、暇を告げて退くにぞ、左内も頓て茶店を立出で、わが家をさしてぞ立帰りける。

寒「何さま是はおわかりなされぬ筈でございます。居候とは食客の事でございます」

左「いかさま左樣かな。夫ではその家に尋ねて參ッて對面を致しては、不遠慮だとまうされるのか」

寒「左樣でございます。貴公方がお出でなさいましては、御外聞にもかゝはる事もございませうが、何れにも私が近日お尋ねまうしあげますやうに致しませう。其うへ懇意の者がいろ〳〵親切に世話をいたし呉れますので、品に寄りますと遠からず主取を致すやうにもなりませうかとぞんじますから、必ず深くお案じ下さいませぬやうにお願ひまうします」

左「なにさま貴公が來ると言ふ事なら、此身から尋ねて往くにも及ばないが、是は言はずと如才もあるまいけれども、此身も當時は役柄も勤めて居れば、壻だと言ッて表向その姿でござつては、世間の聞えもいかゞ故、屋敷の門も四ッまでは明いて居るから、人の目に立たぬやう、夜分こつそり來るやうにして貰ひたいものだ」ト言ひながら懐中より金子三歩取りいだし、「さし當る所どうかして進ぜたいが、今日は色々買物などを致して持合せがすくないから、先これを取つて置かッしやい」

寒「是は〳〵有難うぞんじます。四五日のうちにはお禮かた〴〵上りまして、積る御挨拶を

左「なる程餘儀ない譯でもあらうが、逢ぬうちは知らぬ事、斯う對面を爲たからでは、獨りの聟をそのやうなさもしい風俗をさせても置かれない。幸此身が方に預つた貴樣の家財も持越してある事ゆゑ、何方になりとも相應に内を持せ、娘も送り遣して、主取の出來るまでは、浪人暮にても細い煙を立ててゆかれる樣に爲て進ぜたいものだが、何にしろ爰で何時までも相談をしても居られず、早速斯うといふ事にもなりかねやうから、何れの道此身が貴殿の所へ近日參つて御相談も致さうが、今のお住居は何處の何といふ所だか、一寸書付けて置きたいものだが。」

寒「へイ、その儀は何樣も只今は些申上げかねますやうでございます。」

左「何故又それが言ひにくいのだネ。」

寒「イエ實は私の住居とまうしてはございませんから、其處で何樣も。」

左「エ、夫ぢやァ宿なしとでも言ふやうな。」

寒「イエナニ、まさかに宿なしとまうす程でもございませんが、當分は先づ心易い者の方に居候を致して居りますから。」

左「ナニ居候とは何樣いふ事だか、拙者などは御當地不案内ゆゑ、とんと左樣な事は。」

が娘なれば、預る事は仔細なし、貴殿吾妻へ下られて、住居でも持たるゝやうになつたら、早速に知らせ給へ。我等かたより送らせてなりとも娘を遣しまうさうと、堅くお約束を致したところ、其後何の音信もなく、我等夫婦が案じるより、別けて娘は氣を揉んで居るうち、妙な僥倖もあるもので、我等は急に役替を致して、鎌倉勝手をまうしつけられたから、是では寒助殿に逢つて、直直安否も聞かるゝ事と、家内の者を殘らず引連れ當所へ引越し參るに就ては、先達て娘に添へて預け置れた貴殿の家財諸道具も、我等が荷物といつしよにして、扨鎌倉へ着くとその儘、人をも頼み自身にも歩行て、貴殿の行方を尋ねても、一向在家が知れなんだから、大に心配を致して居たが、まア〳〵無事の對面を爲たので安心は爲たものゝ、貴樣は常々筆道に達して居る事も聞いて居れば、仕官に仕込む口は遠いにもしろ、大都會の事だから、譬へば手習師匠をするとも、然うないところが筆先で何か今日を送る丈の事は出來さうなものだのに、青菜小菜を賣つて歩くとはあんまり零落やうがひどいので、先刻途中で見掛けたときも、實に見違へるやうだ。」

寒「然う思召すも御尤でございます。私もせめて若黨奉公でも致したいとぞんじましたが、さし當つて口もなく、そのうちに喰方に困るやうな譯でございましたから、據なくこんな身のうへになりまして、寔にはや面目次第もない事でございます。」

に用事を言付けて先へ歸したから、何も遠慮な事はないが、何にしても貴様の姿、いかに浪人の所業にせまり、尾羽うち枯したからといつて、夫が鹽谷の家來若村寒助とは、何樣見ても思はれない。」

寒「イヤ最う左内さま、貴公にお目に懸りますのも、實に面目次第もない事でございますが、私も當所へ下りましてから、何卒宜い住口もございますなら、主取を致したいものとぞんじ居りますうち、大煩を致しまして、既に命も危いところを、漸々遁れまして、此通り體は大丈夫になりましたが、僅ばかりは貯へて居りました金子も、其物入に遣ひ果しまして、とう〳〵こんなつまらない者になつて仕舞ましたが、只今の所では、決句是も氣樂で宜いかとぞんじます。夫に就ても不思議なは左内樣、貴公は播州三日月の御城内で、郡役所をお勤なさるとの事でございましたから、なか〳〵此鎌倉などへお下りなさる事はあるまいと思つて居りましたに、計らぬ事にて御目に懸りました。」

左「然ば寒助殿聞て下され。先達て貴樣が赤穗を立退かるゝとき、三日月の城中の此身が所へ立寄つて言はしやるには、俄の事にて浪人いたし、さし當り身の落着もあらねば、是より鎌倉へ參り主取の口を尋ねて住込むまで、妻をばしばらくお頼みまうすとあるゆゑ、素より此身

仲間、

仲「オイ八百屋さん、ちよつと待ねへ。」

やほや「アイ、冬菜ばかりになりやした。仕廻だからまけて置きやせう。」

仲「ナニそんな物は入らねへが、此身が旦那がお前に何だか逢ひてへと言つて、那方の茶店に待つてござるから、一寸來て呉んなせへ。」

やほや「夫ぢやァ菜を買つて下さるのぢやァござりやしねへか。」

仲「何樣だか知らねへが、速く來なせへ」ト引立てられて、不性々々に跡につきつゝ行く程に、かの仲間は茶店にいたり、門に八百屋を待たせ置いて、主人に恁くと告しとおぼしく、再其處へ立出で來り、「旦那は奥の座敷にござつて、爰へ呼べと言はつしやるから、草鞋を脫であがんなせへ」ト言はれて八百屋は合點ゆかねど、否とも言はれず、足を洗うて其儘奥の一ト間にいたれば、五十餘の武士が、這處へ〳〵ト呼び入れながら、四邊見廻し小聲にて、

侍「貴樣は壻の寒助ぢやァないか」ト、問はれて八百屋は胸を潰し、姑く返事にさしつかゆるにぞ、「イヤサ、貴樣の恂りより、此身が貴樣の扮打を見て、どんなに恂りしたか知れなんだが、途中で物を言ひかけては、供の男の聞前もあると思つたから、此茶店へ呼び入れて、家來には外

りやと尋ねられし、いかにも一個の忰ありて名を又之丞と呼るゝが、當時劍道修行のため都に遣しありとまうせば、此うへはその又之丞を抱ゆべしとて、早速都より召呼ばれ、新知百石たまはりしに、此又之丞も父におとらぬ智勇すぐれし者なれば、追々に登用せられて高百五十石に及びし頃、鹽谷家滅亡は爲たるなり。爾ればにや討入の夜も二刀をもつて敵をなやませ、比類なきはたらきせしも、父二刀齋より授けたる家傳の妙旨を得しゆゑなりとぞ。猶此外に又之丞のうへには種々の餘談あれども、牛尾田のみの傳にては、看官讀倦き給はんかと次回は物語他事に及ぶ。

辭世　もののふの道とばかりをひとすぢに思ひたちぬる死出の旅路に

牛尾田高教

折から見出しつる儘因に記す、這一首にてもこゝろばへのあらはれて、其人を今見るの心地す。

第六十四回

八百屋の聲「大束冬菜ェ、冬菜の仕廻は宜しう」トさもやつれたる商人が賣行く跡より一個の

爾ればとて渠等が所行、義の爲とは言ひながら、金彌が色香に迷ひたる淫慾よりして事おこり、人の批判のうしろめたさに、助太刀なさんと出國せし、斯るたはけき白痴者に、老さらばひし命なりとて、求めて失ふべきにあらず。はや是程に戰うたれば、定めて渠等が心にも及びがたき事を知りて、倶に覺悟も究めつらんを、爾らば此世のいとまを取らせ、迷の夢を覺させ呉れんと、右より進む品藏が斫込む刄を引ぱづし、丁と打つたる木刀の手練の手の裡あやまたず、水もたまらず品藏が首は遙に飛散つたり。是にぞ駭く入平が怯むを得たりと附入りて、左劍に拂ひし拳のさへに、腰のつがひを打はなされ、二ツになりてぞ倒れける。此ありさまに群集の見物、したりやしたりと譽むる聲、しばしは鳴りも止ざる程に、娘は覺えず駈出でて、天を拜し地を拜し、悦びいさむぞ道理なる。

恁て檢使の侍は赤穗の城に立歸り、此旨委に言上なすにぞ、鹽谷殿聞しめされ、名作の切物にても、手の裡すぐれし者ならねば、爾程には斫れざるを、況して木刀にて兩人まで斯くのごとくにせしと言ふ、その老人は常人ならじ、目通りまうし付けよとあるにぞ、頓て二刀齋は御前に召され、身のうへの事何もかもあからさまに申しあぐれば、爾らば當家に召抱へんとあるを、二刀齋堅く辭みて、只老樂をのみ願へば、然らば和儞に娘の他に男子あ

かられよ」ト言ふより速く二刀齋は、腰なる二本の木刀を兩手にとつて待ちかくれば、這方の二個は大に怒り、憎き爺が高言かな。爾りながら兩人が一度に討ッてかゝりては、いよ〳〵もつて卑怯に似たり。我より莵らん否我からと、互に先をいどみしが、終に品藏爭ひ勝つて、爾らば目に物見せて呉れんと、覺の一刀拔きかざし、斫つてかゝれば二刀齋は、右手に取りたる木刀にて、受けつながしつ戰ふほどに、丈の知れたる疲爺唯ひと討と品藏が侮りしに事かはり、神變不思議の太刀筋に打立てられてなか〳〵に、斫込む透のあらばこそ、受太刀にのみ打ちなされ、いとも危く見ゆるにぞ、堪りかねたる入平が、はや外聞も厭はゞこそ、有無をも言はず左より討つてかゝるを物ともせず、左手に持ちし木刀にて、是もおなじくさゝふれば、此助太刀に品藏は僅に力を得たりけん、色を直して雙方より透もあらせず討込む太刀風、いづれにおろかはあらねども、二刀齋は此年頃鍛に鍊し藝術なれば、刄の中に在りながらも、いさゝか動ずる氣色もなく、右にあたり左に拂ふ飛鳥の如きはたらきは、血氣壯の若者にも劣るべくも見えざるにぞ、品藏も入平も心ばかりはいらだてども、惣身汗を汲流すまで、しだい〳〵に戰ひ勞れて、打太刀しどろになりしかば、二刀齋は思ふやう、はじめよりして渠等が手の裡、只一打になさん事難くもあらぬ所爲ながら、三十五年の年月を尋ねめぐりし艱難辛苦を、仇にさせんも本意なからん。

使に會釋して、場合をはかり雙方に立分れツヽきつと見て、

品藏「いかに松下二刀齋、其前名は牛尾田主水、和殿先年水口の松原にて沼澤傳五左衛門を討れし故、讐を報はん爲子息金彌が出國せしかば、我々兩人義の爲に金彌に助太刀致さんとて、三十四五年が其間所々方々を尋ねめぐれど、更に行方も知れざりしに」ト言へば入平語をついで、

入平「然るに昨夜はからずも、和殿の口より慥々と沼澤親子二個まで餘儀なき譯にて討れし趣、素より我々兩人は互に恨はあらねども、義によつて致す所は又捨てがたき事なれば、事の爰には及びしに、見受しところ帶刀に眞劍を用ひられず、木刀ばかりをたばさまれしは、相手に足らぬと我々を侮られたる故なるか。相手に木刀を持たせおき、此方眞劍にて立對ひては、よしや和殿を討ちたりとも我々が本意にはあらず。戯事にはあらざるを、いざ眞劍を所持せられよ」トいふに二刀齋うち笑みて、

二刀「そのおことばも無理ならねど、それがし年頃邊に置いて久しく手馴し木刀なれば、せめては一期のおもひ出に、この木刀にて晴々しき勝負を做さんとぞんぜしゆゑ、わざと是をば携へしが、木刀なりとてそれがしが拳のうちに覺えあれば、その切味はなか〳〵に眞劍にもやは劣るべき。さらば某二刀を以てお相手に成るべければ、和殿等兩人左右より、一度に討てか

▲「違ねへ。したがあの爺さんも餘程聞かねへ氣だと見えるぜ。何卒親仁さんしつかりお頼んまうしやす。後には新嬢が付いて居りやすヨ。」

×「斯う〳〵、女兒が來たらてん〴〵に爺さんの肩を持つうちがをかしい。」

▲「ナニ然うでもねへがの、はじめから這方に居る二個の野郎は氣にくはねへと思つて居たからヨ。」

●「萬一爺さんの方が負けると、娘はおいらが引取ツて世話を爲て遣らァ。」

×「ヘン引取るにも住居もねへ癖に、まさか娘を連れて親方の所の二階に居候もあんまり氣が利くめへ。」

●「宜いといふ事ヨ、そのときにァ何處ぞ小意氣な家を見付けて、那嬢に茶見世でも出させて見ねへ、其利潤でも隨分懷手を爲て喰ツて居られやす。」

▲「コレサお前方もつまらねへ取越苦勞をするぢやァねへか。ソラ〳〵最う勝負がはじまるさうだ、空言をいつて居ねへで、宜く見物をするがいゝやァ。」

●「成程然うだな。オヤ〳〵爺さんが眞中へ出掛けた、なか〳〵那して見ると威勢が宜いなァ」トおの〳〵矢來に身を寄せて、脇目も振らず見る程に、矢來の裡には那三個がひとしく檢

つゝ二刀齋に是等のよしを言聞するにぞ、

二刀「アハヽヽヽ是は〳〵、女兒がよしない事をまうし出で、別段御厄介に預りまして、何ともはや氣の毒千萬、かならずお構ひ下さるな」ト挨拶なしつゝ娘に對ひ、「其方が何か願うた趣、親を思ふ志は爾もあるべき事ながら、壯年ときから此歳まで劍道で世を渡ッた某、いかに老いさらばひたとて、まだ〳〵腕に覺はある。殊更今日の仇討は、互に恨はなけれども、あのお二個が義のためとて三十五年の心盡しを無にするも氣の毒ゆゑ、事の爰には及びしなれば、素より勝負は時の運、討ち討たるゝも命數なれば、縱ひ爰にて討るゝとも、いさゝか苦しからねども、勝負に臨み女兒をば助太刀にせしとあつては、末代までの名の穢、その義においてはかなひがたし。よしなき事に氣を揉まずと、控へて見物爲て居やれ」ト叱り付けられ今更に又返すべき言葉もなく、心ならねどすご〳〵と警固の人の後に控へ勝負いかにと見るうちも、心のうちにて神佛を念ずるの外他事もなし。そのとき許多の見物が、入らぬ世話なるあだ口々、

●「コウ、今日の敵討は爺さんばつかりで、些とも色氣がねへと思ふ處へ、おつな新孃が駈付けて來たから、こいつは面白いと思つたら、爺さんが叱つて引込せて仕舞つたが、那新孃とならら此身も一ト勝負やらかして見てへものだ」

第六十三回

隱る所へ見物の中を左右におしわけて、二八ばかりの一個の處女が矢來の裡に走り入り、警固の武士にうち對ひて、

むすめ「私は二刀齋の女兒でございますが、片島の親類の所へ參つて居りまして、今朝あちらから歸り道に、此噂を聞きましたから、宙を飛んで馳付けました。相手は二個のそのうへに、まだマア血氣壯の人達、私の親は御覽の通りとぼ〲致して居りますれば、勝負の程が心元なうございます。及ばぬまでも私が助太刀を致したうございますから、何卒おゆるし下さいますやう、何分お願ひまうします」ト思ひ入つて賴むにぞ、警固の役人うち聞きて、

役人「歲の行かぬ處女にはけなげなる其願、去りながら讐討に助太刀といふ事はゆるしがたき筋なれば、雙方得心のうへならでは何とも斗らひ難きゆゑ、先二刀齋に申聞け、渠が所存を承れ。そのうへにて時宜によらば相手の者へは我々より申聞する事もあらん」ト說さとし

をさし出さるれば、その沙汰忽地四方に聞え、是を見んとて遠近より走集る見物は、さながら山をなすまでに、最晴がましき事なりけり。爾れば又村長は、是等のよしを立帰りかの三個に報ぐるにぞ、双方偕に歡びて、又村長に伴はれ、城下はづれの松原に既にして到るほどに、入平も品藏も共に五十才の坂を越えて、はや壯年にはあらねども、二刀齋が老朽ちて腰も斜にかゞみしに競れば、猶壯なるに、三十餘年の本望を遂ぐるは今此ときにありと思ふ心の勇るれば、縱ひ那者武術すぐれて大丈夫の膽ありとも、丈の知れたる痩爺、此兩人が立對はんに何程の事あるべきと、斯る時のためにとて、兼て用意の衣服大小、笈の裡にをさめおきしを取出して身にまとひ、見苦しからず打扮つゝ、四邊をはらうて立出づれば、夫には引替へ二刀齋は爾のみ身形も取繕はず、僅に大小二振の木刀ばかりを腰に横たへ、三個齊しく檢使に對ひ、名をなのり意趣を演べて、既に勝負に及ばんとするにぞ、檢使をはじめ許多の見物、皆手に汗を握りつゝ、首を伸してながめ居る、此段いまだ長けれども、紙員爰に限あれば、その立合の趣は中の卷のはじめに說くべし。

二刀「いかさま夫もそんな物ぢやが、義の爲にお前がたが讐を尋ねてまゐらるゝと聞いては、何樣も名告らずには居られず、生きて甲斐ない命ひとつまゐらせやうとは言つたものゝ、素より互に恨もなければ、翌立合に及ぶまでは、麁略に思ふやうもなし。扨種々の長咄で、思の他に夜も更けた。老人なれば我等から、お先へ御免を蒙ります。誰殿もお休み〳〵」ト言ひツヽ、其處へ轉び寐の枕につくと忽地に心地よげなる高鼾、前後も知らぬ爲體に、入平と品藏は互に目と目を見合せつ、心の裡に思ふやう、よしや互の怨はなくとも、敵と名告りし我々を現在側へ置きながら鼾をかいて寐るといふは、大丈夫なる膽と兩人竊に驚きしが、主翁に寐られて何時までも起きてあるべきやうもなく、偕に枕につきしかど、何とやらん心に掛りて、眠らんとすれど寐つかれず、二個は長き秋の夜をまんじりともせず居る程に、稍明烏の告渡る頃、二刀齋は眼を覺し、朝の炊きをなしつゝも、また兩人に箸をとらせ、その身も腹をこしらへて、扨三個うち連立ち、村長方へ赴きつゝ、敵討の仔細をば箇樣〳〵と物語り、雙方より願書をかきしたゝめ差出すにぞ、村長は駭きしが、うち捨ておくべき事ならねば、三個を我家に止めて百姓どもにうち守らせ、直さま赤穗の城に馳けつけ、事恁々と訴出しに、鹽谷殿聞しめされ、這は珍しき讐討なり、城下はづれの松原にて、早速まうしつけよとありて、則檢使の役人に警固の人數

とつても大慶至極。我等は箇樣に老朽ちて、翌をも知れぬ露の命、御兩所に進上致さう。位牌と倶に白髮首を故鄕へ持參致されたら、三十五年の艱難辛苦も、全く水の泡にはならぬ。去りながら私に爰で勝負を決しては所の者の迷惑ゆゑ、當所の地頭鹽冶家殿へ是等のよしを訴出で、免許を受けたその上にて、小生も老期の思ひ出、晴の勝負を致して見やう。翌は互に敵なれど、今宵までは客主、うちくつろいで休まれよ」ト落着き切つた二刀齋が樣子に、二個も勝負を急がず。其内に二刀齋は手づから茶粥をこしらへて客にも薦め、その身もすゝりておの〳〵箸を納むるにぞ、「扨はや、何も御馳走を致す事の出來ぬのでお氣の毒にぞんじます。今宵は夜と倶語り明すお約束で泊めましたが、お二個ともに旅のお勞れもあらうのに、明日はまた晴の戰、すこしの間もお互に休息いたす方が宜からう。時は秋の中浣なれど、此あたりは蚊もすくなし、枕はそこらに何なりとある物で間に合せ、是なと裾に掛けられよ」ト小袖二ツを取出し渡すを、二個は受取つて、

入「何から何までお心づけ辱うぞんじます。併しながら讐を討たうと參つた者が、敵のおん身に宿を貸され、斯う懇にお咄を致し、ひとつ所に寐起まで致すといふは、例すくない事でございませう」

刀齋」

入「扨は和殿が牛尾田か。」

品「主水であるか」ト兩人がかねて用意の仕込杖を膝の邊に引きつけて、卒と云はば忽地に斫つてかゝらん勢に、

二刀「アハヽヽ、イヤ御兩人お急促なされな。其許達の御存じないを、此方からしてあからさまに讐と名告る程の者が、今更迯げも躱れも致さぬ。その金彌とまうす者の身の成行もぞんじて居れば、夫も委しくお咄しまうさう。兎角いふうち日が昏れた、まづ方燈をつけますから、莨でも呑みながらゆるりとお聞きなさるがいゝ」ト言ひつゝ立つて灯火をともし、扨過ぎし頃伏見の里にて、新之丞が難義を救ひしその事のはじめより、渠は實名金彌なる事、又かの者が最後のありさま箇樣々々如此々々と、事落もなく物語り、「因緣といふ物は妙なもので、今日がすなはち新之丞が三十三年の祥月命日、最前こゝろざす佛があると申したのも他ではござらぬ。猶是でも疑はしくば、お目に懸ける物がある」ト手近にありあふ佛壇より、一つの位牌を取り出し、「俗名袖岡新之丞、又の名沼澤金彌、箇樣にしるして置きましたも、若や由緣の人にも逢はば、これを渡して進ぜようと、年頃思つて居た處、幸今日の命日に其許達にお目に懸るは、身に

立をなす砌、那兩人も力を添へて助太刀做したく思へども、兄弟の義は私事にて、侶に仕官の身のうへなれば、思ふに任せずうち過ぎしに、始金彌を手に入れんとて果合を做さんとせし事、一家中の人々も誰とて知らぬ者もあらねば、命にかけて兄弟の契を結ばんとまでせしものが、今金彌が必死に臨み、餘所に詠めて居るといふは、入平も品藏もはじめに似合はぬ腰拔武士、義を知り實ある者なら、斯る時こそ命を捨てても渠が力になるべきに、流石は命が惜しいと見える。夫に就ても此年頃兄と頼みて身を任せた金彌は寔に可憐相なと、家中の者の惡口が、早晩二個の耳に入り、最口惜しく思ふにぞ、兩人竊に相談して、主君より身の暇を乞請け、金彌が跡を慕ひつゝ所々方々を經巡る事既に三十五年に及べど、金彌の行方はいふにおよばず、更に敵は手掛りさへ今に知れざる事の趣、入平品藏兩人がかはる〴〵に物語るをつく〴〵と聞いて二刀齋は一回は驚きしが、大器量の老人ゆゑ、獨莞爾とうち笑ひ、

二刀「はじめて聞いたお前がたのお身のうへ、義のために家を捨て、此年月の御心勞、爾こそと察しられますが、お歡び被成まし、その讐は知れましたぞ。」

品「ナニ、あの敵が知れたとは。」

二刀「さア、その牛尾田主水とは則拙者が前名にて、沼澤氏を手にかけたも斯くまうす二

第六十二回

偖も宇和島の藩中に、その頃沼澤金彌とて年十五歳になりけるが、花も羞づべき前髪振に彼入平と品藏は互に思を惱しつゝ、心の丈を筆にも言はせ、あからさまにもかき口說きしに、其頃はおしなべて男色流行の折柄なれば、金彌も二個が赤心あるを憎からずは思へども、入平に身を任すれば品藏に義理立たず、又品藏にしたがへば入平に濟まざるゆゑ、此譯をもて雙方へ斷りに及びしに、二個はさしも壯氣の短慮、一旦心をかけたるものを、此儘にうち捨ておきては、武士の一分立ちがたし、爾れば雙方勝負を決し、刀のうへにて思を遂げんと、或日入平品藏が果合をば做さんとせしを、金彌は聞くより駭きて、その場所へ驅けつけつゝ二個を種々になだめこしらへ、屑ならぬ此身をば夫程までに思しめすお二個のおこゝろざし、何れに否ともまうされませねば、聊道にはそむけども、此うへはお二個に此身をお任せまうしまするゆゑ、お互に遺恨なく、是より三個兄弟の契を偕に結びたしと、言葉を盡して言ひしかば、品藏も入平も爰に忽地心解けて、互に嫉妬の念を去り、共に水魚の中となりて、金彌を寵愛なす程に、金彌が父傳五左衞門、水口の松原にて牛尾田主水といへる者に討れたるゆゑにより、金彌は父の讐討にとて出

承りながら、此方の名前をまうさぬも失禮、實我々は宇和島の藩中、是なるは太藺品藏、拙者は通和野入平と呼れて、いさゝか知行も貰ひました者でございますが、望あつて浪人いたし、凡三十四五年も箇樣に諸國を經巡りますれど、今に望も愜ひませず、そのうち段々年老いまして、只今では若氣の過を後悔致すばかりでございますが、夫には引替へ御主人などは、功成り名遂げて身退くとやら、お羨しい事でございます。」

二刀「道理こそお二個の御樣子、何でも武家に育つたお方と見受けました。お望とあるは何樣いふ譯かぞんじませんが、兎角時節をお待ちなさるより外はございますまい。」

●品「爾ればその事でございます。只今も是なる入平がまうした通り、時節を待つたも三十年、よく〳〵武運に盡果てたものと思はれます。一樹の蔭に舍るさへ他生の緣と承るに、一夜の宿を惠まれて斯う打解けたお物語を致すといふも、深い御緣でございませう。お笑の種になる事ながら、ノウ通和野氏、我々が身のうへ咄を御主人に致しては何樣であらう。」

▲入「なるほど迚も望は愜はぬと思ひ切ツたうへからは、咄すもかへつて身の懺悔。さらば我等からお話說まうしませう」ト語り出せる身のうへ咄は次の囘に具に說くべし。

まゐらさうが、見らるゝ如きいぶせき白屋、夜の物とて心に任せぬ。圍爐裏の端で夜と共に語り明すお心なら、卒々這家へ入給へ」トいふに二個は歡びて、

▲●「我々とても修行の身なれば、不自由は厭ひ申さぬ。爾らばお世話に預りませう」ト筧の水にて足をそゝぎ、偕に一室へうち通れば、主翁は柴を爐に折くべて、暖みし澁茶を兩人に手づから汲んですゝめなどせしその間に、こなたの六部は四邊をしばしば見廻して、

●「扨御風流なお住居、寔にお羨しうぞんじます。夫に就て近頃失禮な事を伺ひますが、那に二振の木刀を御所持なされますは、扨は御主人には劍道御丹煉とぞんじられて、昔ゆかしく思はれます。苦しからずば御姓名をも承りたうございます」ト問れて主翁は額を撫で、

あるじ「お尋に預つては赤面いたす事でござる、我等は松下二刀齋とまうして、壯年の時分には武術が至ッて執心ゆゑ、劍術の道場をも出した事がございましたが、段々年が寄るにしたがひ、弟子の世話もわづらはしく、世の交も面倒ゆゑ、御覽の通りの侘住居、好の道ゆゑ木刀は以前の儘に所持は致せど、久しく手にもふれませぬが、那木刀にお目の付いたを見れば、お前さんがたも唯の御修行者とは思はれませぬ。以前はよしあるお身分でもございませうネ」

▲「イヤモウ、左樣に仰せられては我等も赤面いたす義でございますが、御主人の御姓名を

けて眼をしばたゝけば、新之丞は首をもたげ、

新「這は先生にも似合しからぬ女々しき事を宣ふものかな。我が此命は過ぎし夜に失ふべきを、今日までも存命たるはおん身の賜もの、今更思ひおく事なし、言ふべき事も言ひ果てしを、何時まで苦痛を見せ給ふぞ。敏々首を刎ねてよ」ト身を摺寄せつゝ覺悟の合掌、不便ながらも二刀齋は此一言にはげまされ、

二刀「實に言はるればさぞあらん、爾らば苦痛をたすくるため、此世のいとまを取らせん」ト言ひつゝ後ろに立かゝり、再び刄を取り直して、振かぶるよと見る間もなく、あはれ果敢なや新之丞が首は前にぞ落たりける。

是より次の物語は三十年餘も過ぎし事と知るべし。

播磨の國赤穂の城より四五里はなれし片在所に、杉の生垣結ひめぐらせし最さゝやかなる白屋の戸口に徨む二箇の修行者、裡の容子をさし覗き、

▲「行き暮れた六十六部、一夜のお宿を願ひます」ト言ふ聲奥に聞えてや、此家のあるじとおぼしくて六十許の一個の叟、緣の障子を引明けて、

あるじ「ナニ修行者と言はつしやるか、幸今日は此方にも志す佛もあれば、隨分お宿も

讎でも命の恩人、今更に名告かけ討つに討れぬ恩と義理、さればとて現在の父を討れし敵と知りて、おめ〳〵としてあらんには、父へ對して不孝なり、孝を立つれば恩に叛き、恩をおもへば子の道を缺かねばならぬ身のせつぱ、奈何にやせんと右つ左つ胸に思案をめぐらせしが、命の恩と生の恩、俱にまつたうなさんには、此身を捐つるにしくはなし、爾ば此よし書殘し、切腹せん歟ィヤ〳〵〳〵、おなじ命を落すなら、一太刀なりと刄を交へ、おん身の手にて討れんものと、思ひながらも、明ら樣に敵と呼びかけ斫りかゝるとも、お情深き其許さま、猶我が命を助けんとて、なか〳〵手にはかけ給はじ、術こそあれと思案を定め、忍び姿にいでたちつゝ、不意に鎗を突入れしゆゑ、曲者なりと思はれて、事の爰には及びしなり」ト苦しき息の下よりして一伍一什を物語れば、二刀齋は歎息して、

二刀「寔に見あげた其心底、敵同志弟子となり師匠となるも過去の因緣。夫に就ても僴の父公沼澤氏を討とりしも、箇樣々々憖々にて、實に餘儀なき事なりしに、その親のみかその子さへ、可惜蒼の若者を殺すは何の因果ぞや。最前僴の言葉のうちに縱ひ名人上手にても、不意を討るるそのときは奈何あるやと尋ねしは、我に用心させんといふ心ならんを、今までも思ひもつかで居たりしは、我ながら最愚なり。夫と悟らば痍は負せじに、はやまつた事したりし」ト言ひか

二刀「我が手にかゝるが本望とは。」

新「サア斯うばかりまうしては御合點がまゐりますまい。基私は伊豫の國宇和島の藩中沼澤傳五左衛門が悴にて幼名金彌と呼れしもの、父は先年水口にて、其許さまのおん手にかゝり、あへなき最期を遂げたるよし承りし口惜さ、そのとき吾身は十五歳、母には幼き頃に別れ、他に親族はあらねども、身ひとつにても父の讐、一太刀なりと怨みんと、主君に願ひて暇を乞ひうけ、敵は古田の家中にて牛尾田主水と聞きしを當に、近江の國まで來て聞けば、思ひがけなく古田殿には家斷絶を致されて、敵の行方も知れずとあるに、忽地望を失ひしが、去りとて止むべき事ならねば、所々方々と尋ぬるうちも、敵に我名を知られじと、母方の姓なれば、袖岡新之丞と變名せしに、不圖した事から撞木町なるかの濱菱に馴染めしより、渠が伎倆に乘せられて、命も落すべきところ、其許さまのお情にてお救ひ下さるのみならず、永らくお家に止宿られて、武術の御指南被りし御恩は海山替へがたく、若もおん身に凶事などあらば、我一命に換へてなりとも受けたる御恩を報はんと思ひ込みつゝ居たりしに、最前はからず土用干の片付ものをしたるとき、反古の中より牛尾田主水と敵の名前を見出して、お杉に問へば斯う〳〵とはじめて知つた貴君の御素生、扨は此家の先生が尋ぬる敵でありしかと、胸も潰るゝ當座の仰天、縱令

いろは文庫　巻之三十一

第六十一回

力燈は消えて眞の暗、二刀齋は曲者がめつたやたらに突出す鎗の穂先を右左と身をかはしつゝ抜合せ、須臾戦ふ程しもあらず、横にはらひし短刀に、繰出す鎗の只中をはすに伐られて曲者が駭きながらもためらはず、腰なる一刀抜くよりはやく跳りかゝつて斫りつくるを、闇にもきらめく白刃の光に、丁とうけたる手練の速業、かへす刄の曲者の肩先ふかく斫りつけたる、此物音に駭きて、下女のお杉が勝手より雪洞片手に駈出る灯影によりて二刀齋は、今斫仆せし曲者が襟髪とつて引起し、冠りし頭巾を取退れば、此曲者は別人ならず、又かの新之丞なるぞ、是はとばかり呆れはて、辭もなくてうち守れば、新之丞は手に携し刄を遥に投捨てつゝ、苦しき息をホッとつき、

新「有難やかたじけなや、今ぞ念願成就して、貴君のおん手にかゝりし事、歡何かこれに過ぎん」ト言ふに這方は訝しく、

いろは文庫第十一編序

世を捨てて身はなきものとおもへども、花の咲く日はうかれこそすれとは、西上人が像に贊せし例の翁の滑稽なるが、現に花の咲く彌生の頃は、上野飛鳥に魂通ひて、そゞろ心になる程に、適机に對ふ日も、眼は三芳野の山とかすみ、耳は音羽の瀧と鳴りて、氣は有頂天にうかれ出で、筆の立度もおぼえぬを、遙々浪花の書肆より、嗣輯の催促しきりなるにぞ、難波津ならばよしにもあれ、又あしにもあれ綴らずばと、乾く硯に水さし添へて、復かの誠士の列傳を、編も久しきいろは文字、文庫の底のいと淺きことども竝べて覽に備ふ。

清明後十日

四方の花悉くひらくといふ日

爲永春水誌

仕損じたりと曲者は、闇に當途もめつた突き、這方は更に動く體なく、穂先の光に右左と再三回身をひらき、傍に置きし短刀を取るより速く拔合せ、受つ流しつ戰へど、夜は野羽玉の闇なれば、霎時勝負も判ざりけり。

すぎ「旦那さま御膳が宜しうございます」

二刀「オヽ仕度が宜いなら直に喰べやう。」新之丞も部屋へ往つて休息をするがいゝ」ト言はれてヘイト新之丞は、暇を報知つゝ其儘に、勝手の方へと立つて往く。恁て又二刀齋は夜食も既に果てたるに、今宵は急ぎの書物の、猶書殘りて居たりしを、寫し果てんと思ふにぞ、甲夜の程より机にかゝり、折しも殘暑の去やらぬに、月さへ隈なくさし入るれば、晝の儘にて雨戸もくらず、緣の邊に仕かけたる蚊遣火もはや絶々に、烟も細く小夜更けて、千草にすだく虫の聲、葉末の露に消殘る秋の螢も影疲て、黄檗寺の鐘の音も哀を盡す亥の刻過、二刀齋は僅にて書終らんとする程に、筆の運びもいと速く、更に餘念もあらざるところへ、庭の切戸をおし開けて、飛石傳ひにひそ〳〵と忍び寄つたる一個の曲者、覆面頭巾に黑裝束、腰に大小たばさみつゝ、手に一條の鎗を引提げ、そのさま身輕く打扮たるが、緣の傍に彳みて、裡の樣子を窺ひ居しが、折から月は雲に入り四邊小暗くなりしかば、時分はよしとや思ひけん、獨り竊に點頭きつゝ、一ト間の裡へ拔足さし足、覘ひすまして二刀齋が机にかゝりて他事もなき脇腹目がけて突出す鎗先、思ひ寄らざることなれども、遉は名におふ武道の達人、この物音をや聞き知りけん、忽地ひらりと身をかはせば、覘狂うて向なる行燈はつしと突きつらぬきたる、はずみにふつとゆり消す灯火

新「イエ〳〵左様な事は少しもぞんじませんが、何様いふ深い御縁でか、つひ假初のことかゝらして、箇様に師弟の盟約を結び、夫程までに思しめして下さいますかと存じますと、實に泪がこぼれます。夫に就けても私のふがひない生付、嘸先生のお心では歯痒いやうに思召しませう」

二刀「イヤナニ、假令虚弱な生付でも、修行の功がつんだうへで、不動心がしやんと居れば、どんな大敵に捕かこまれても恂ともする物ぢやァないノサ。夫だから何でも出精が肝要だ」

新「夫では修行がつみますと、然ういふ物でございますかネエ、そのお咄に就いて序ながら伺ひますが、名人上手になりましても、不意を討れましては愜ひますまいかと思ひますが、先生なぞのやうに武藝がお手に入り切つては、左様な事もない物でございませうか」

二刀「ナニ此身なんぞのはなか〳〵手に入ッた藝といふではないが、其不意といふのが、言ば油斷から起る事サ。然うかと言つて今にも人が切蒐らうかと、ひや〳〵思つて用心をして居たからといつて、なか〳〵つゞく物ではない、心を臍下に落付けて、天地と我とおなじ心になつて居れば、寸分の油斷もないから、なか〳〵不意を討たうとしても討たれる物ではないノサ。是が今言つた不動心の場所だが、其處までに至つて見ないでは判り兼るから、何でも修行が肝心だ」ト咄のうちに次の間より、下女のお杉が顔を出し、

を御所持で被爲入ますネ。」
二刀「ナニサ、是といふ物もないが、好で買集めたところで、今では却て邪魔になるノサ。お前も書物が好なら、どれでも貸すから見るが宜い」
新「ヘイ、私のはほんの盲のかき覗きとやらでございますが、何卒そのうち拜借が致したいものでございます」
二刀「アヽ〳〵早晩でも出して見なせへ。本の好なのは何より宜い事だ。兎角今の世は武士とさへ言へば武藝にばかり心を入れるが、文學がなくては義理に暗い物サ。何でもさむらひは子供のうちに讀物を學ばせて、それから武の道を修行させるでなくつては役に立たない。斯う言つては失禮だが、お前は全體虚弱な生付で居なさるから、武術より文學の方が得手でお在だらう。併しこの程からの出精で餘程修行がまゐつた樣子だから、最う些との苦しみで、此身も安心して那望をも立派に遂げられるやうにして遣りますから、その氣で修行をするが宜い」ト言はれてハット新之丞は、何おもひけん平伏して、須臾泪にくるゝのみ、下げたる頭をあげ得ねば、「是はしたり氣の弱い、何も泣く事は決してない。時節さへ來れば本望は遂げられるから、くよ〳〵思ふまいぞヨ」

新「ヘイ、夫は何より有難うございます」ト言ふうち二刀齋は茶を立て終り、

二刀「さア〳〵新之丞。」

新「イエ、まア先生今一服。」

二刀「イヤ此身は最う自服で多分喫んだから。」

新「左様なら頂戴仕りますが、併しお手前では恐れ入ります。アヽ結構な御服合でございます。」

二刀「何様だ次手に最う一服。」

新「イエ澤山いたゞきました。」

二刀「然うかネ。其處で蟲干は何樣だ、まだなか〳〵片付くまい。」

新「ヘイ、御書物とお掛物の類は荒增收めましたが、お武器の方は先生に窺ひませんでは、些と知れかねますやうでも御座いますから。」

二刀「オヽ、それは大そう手廻しが宜かつた。翌日は此身も出て片付けるから、今日は最う夫で休むが宜からう。」

新「ヘイ有難うございます。私なぞの目にはなか〳〵及びませんが、先生は種々珍しい御本

すぎ「ホンニ私も咄にうかれて疊物の手がお留守になつた奴サ、最うかれこれ七ッだらうから、お夜饌の支度でもせずばなるまい」

新「そりやァ宜いがお杉さん、私がこんなことを聞いたことは先生には沙汰なしだヨ」

すぎ「アヽ〳〵そりやァ承知だヨ。旦那さまにしれて御覧、喋つた私が先へ叱られるはネ」ト言ふとき奥にて二刀齋が聲、

二刀「新之丞は何處に居る、新之丞々々々〳〵」ト呼び立てらるゝに驚きて、ヘイトばかりに身を起し、その儘奥へ走り往く。

第六十回

新「先生お召しなさいましたが、何ぞ御用でございますか」ト言はれて這とき二刀齋は閤の裡にて茶を立てて居たりしが、

二刀「オヽ新之丞か、蟲干の取收めで、噪氣が盡きたらう。此身も手傳はうと思つては居るが、急な書物があつて今まで机にかゝつて居たら、殆々退屈爲たところ、倅釜の濁音が爲たから、自服で喫んで居る所だ。儞も茶道は好な樣子だ、何と一服やらないか」

すぎ「イヽエありますヨ。」

新「エ。」

すぎ「アレサ又悄りは御免だヨ。」

新「ナニ、モウ悄りする氣遣はないから、咄してお聞かせヨ。そりやァまァ誰と何處でそんな事があつたのだネ。」

すぎ「高くは言はれないがネ、まだ御浪人なさらない前かた、有馬の湯治にお出でなすつたお歸りがけ、據ない義理合で、宇和島家の御家來とやらを、水口の松原で大そう大勢お殺しなすつた事がありますトサ。」

新「エヽ〳〵。」

すぎ「オヤまァ何樣なすつたのだへ。悄りが止んだと思つたら、今度は顏の色まで換へたうへに、目に泪を一ぱい持つて、そしてまァその握つ拳は何の眞似だらうネエ。お前さんに咄をすると何だか氣味が惡くなるヨ」ト言はれて這方は心づき、

新「アハヽヽ、ナニ〳〵私は妙な氣性で、そんな咄を聞くと、自分が斫合ふか殺されでもするやうな心持になつてならないノサ。とんだ事を根問をして、片付物が遲くなつた。」

お在なすつた時分には、三百石御頂戴被成て立派なお武家さまサ」
新「エ」
すぎ「アレまた悄りかへ、困るネエ。お前さんが悄りなさるたびに、私の胸までギクリ〳〵としてならないヨ」
新「ナニ悄りも爲さうなもんだ、あんまり思ひがけないものを」
すぎ「何が思ひがけないのだへ」
新「エ、ナニ、アノウ夫でも三百石もお取り被成た御身分が、こんなに御浪々なすつたからサ」
すぎ「夫でも旦那さまはお劍術がお上手でお弟子が澤山あるから、今でも御不自由はないノサ。其うへお慈悲深い結構なお方だから、私なんぞも松坂から這處までお供をして來て、いまだにお勤めまうして居るノサ」
新「なる程夫ぢやァ先生の御身分を宜く知つて居なさる筈だ。其處でまァ那先生は劍術においては寔に名人でお在なさるが、あゝいふ仁心の深い方だから、是まで人と爭つたり、眞劍で伐合つたりなすつた事はあるまいネ」

すぎ「なる程然うだネエ、そんなら教へて進げるから何ぞお驕りか。」
新「アレ直にあゝ出るから否サ。」
すぎ「お前さんが否なら、這方もまァ否に爲ませう。」
新「コレサ、そんな意地の惡い事を言はないで、言つてお聞かせヨ。夫ぢやァ御親類ででもあるのかネ。」
すぎ「なアに。」
新「アレサ、氣を揉せずに然ういふが宜はな。本統を教へてお呉れだと隨分驕るはな。」
すぎ「ホヽヽ、可憐さうだネエ。實の處は是が旦那さまの以前のお名サ。」
新「エヽ、そんなら那先生が。」
すぎ「オヤまアひどい悄り爲やうだネエ。」
新「ナニ悄りも爲ないが、あんまり今のお名と飛違つて居るからサ。お前はたしか爰のお内に久しく居るといふ事だが、全體先生は基から這處にお在なさるのか、または他から引越してお出でなすつたといふやうな譯かネ。」
すぎ「ナニ旦那も唯今では御浪人遊ばしたけれども、前かたは古田の御家來で、伊勢の松坂に

二刀齋も渠が心の殊勝なるを不便に思ひ、心を盡して教ゆる程に、這方も修行に怠りなければ、いまだ一稔ならざるに、目に立つばかり上達して、今は敵に出會ふとも、おくれは取らじと師匠も思ひ、その身も自ら頼母しく思へる程になりけるが、折しも秋の初旬、二刀齋の武具は素より衣類書物のたぐひまで、蟲干するとて取ひろげしを、取收めんと做したるとき、書物の間に挾みし手紙の膝の邊に落しを見れば、牛尾田主水様といふ上書のしてあるにぞ、新之丞は心の裡に思ひ合する事やありけん、はつとばかりに駭きしが、猶も四邊を見まはせば、這方の器の合紙にも、那方の衣服の襟紙にも、件の名前を記せし反古の幾枚ともなく有りしかば、いよ〳〵もつて訝しく、折から側にておなじやうに干したる着物を疊んでゐるお杉といへる下女に對ひ、

新「コウお杉どん、藪から棒に物を聞くやうだが、爰に書いてある牛尾田主水といふ人は何處の人だか知つて居るかへ」ト問はれて下女は吹出し、

すぎ「オホヽヽ、お前さんその方を御存じないのかへ、呆れた物だネエ。オホヽヽ、ホヽヽホ。」

新「コレサ、そんなに笑つちやァ譯が分解ない。私やァ近頃此お内へ來たものを、知らない筈だらうぢやァないか。」

に、渠は聞えし金持にて、既にその身を受出して妻に做さんと言ふにより、新之丞が邪魔になりしが、是まで記請も取かはして深く契りし中なれば、今更那方へ受出さるゝとて突出し者にするならば、奈何なることをなさんも知れずと、女の淺い巧より、斯くの如くは做したるなり。然れども新之丞は二刀齋に救はれて料りしやうに殺し得ず、其身は横島の家にいたり躱れたりしも見出され、悴皆畫餅にはなりしかど、紺藏が金を出して身の代金を贖ひしゆゑ、思ふ通りに夫婦となり、新之丞への義理立ても入らざるやうになりしかば、須臾は榮耀の上盛して誰憚らず暮せしが、此紺藏と云へる者は放逸不頼の白痴者にて、親の讓りし身代をも早晩の程にか遣ひ潰し、首もまはらぬ借金に詮方なくやなりにけん、濱菱ひとりを置去にして、或夜出奔したりしかば、濱菱は只途方にくれ、做すべきやうもあらざれば、是よりさまよひ出せしに、身うちに宜からぬ腫物の發して、其嗅きこと絶えがたければ、誰とて側へも寄せつけねば、終に袖乞となりさがりしが、果は何とかなりにけん、終る所を知らずとなん。這は是後の物語なり。

愨てまた新之丞は伏見の里にいたりしより、日夜稽古に油斷なく、その間には家内の事も若黨代りに立ちはたらき、或は師匠の供にも出で、又立鬪の取次をもして、最まめやかに事へしかば、

い。今にも敵に出合はれたとき、若も向に助太刀を致すものがありでもするか、然うない所がその敵が武術に達した者であると、返り討は知れた事、何れにしても危い仇討。入らぬお世話のやうだけれども、此身を力に頼みたいと言はしやつた辭もあれば、今から此身の所へ來て、一年修行を爲て見なせへ。お前も敵を討ちたいといふ一念で精を出し、此身も其氣で教へたら、天晴手利になるであらう。夫までに爲あげたうへでは、敵の家名も密に聞いて、討たせて進ぜる時節もあらう。何と然うではあるまいか」ト言ふにいよ〳〵感伏して、新之丞はその場にて直さま師弟の約をなし、二刀齋に伴はれて伏見の里へぞ赴きける。

偖て後二刀齋は撞木街の廓なるかの八文字屋の主を招き、拾ひし文を證據にして種々と掛合ひつゝ、少しの金さへ取らせしかば、素より今度の騷動は濱菱が巧なること明白に分りしうへ、渠は横島紺藏方へ那夜よりして連れられ往き、深く躱れて居たりしを、八文字屋より見出して、其身の代を思ひの儘に掛合ひつめて取りたることゆゑ、新之丞には仔細もなく、綷穩便に濟みしとぞ。然ればまた濱菱も、始の程は新之丞が若衆姿に心迷ひて、眞實呼びたく思ふが故に、眞を盡さゞりしにあらねど、基是多情の淫婦なるにぞ、新之丞に秋風のはやそろ〳〵と立ちし頃、かの紺藏が苦みばしりて艶冶氣のなき男振の、叉憎からず思へる

二刀「ア、コレ待つた新之丞どの、夫もやつぱり心得違ひ。ハテ何故と言はつしやい、假令女は盗み出すとも、拾つた文を證據にして、廓の方を懸合はば、お前の身拔の出來るやうに、及ばずながらその時には此身も口を添へて進じやう。又是までの非を悔み、切腹せんとは遉は武士、そのお心なら讐も討てやう。今死ぬ命をながらへて、些の恥を忍ばれなば、軈て敵を討ちおほせ本意を遂げたその時に、今の汚名は忽地消えやう。悪い事は言はぬから、此身が異見に就きなせへ」ト說諭されて新之丞は、いよ〳〵迷晴れたりけん、土に頭を摺りつけて、

新「段々厚い御信切、此うへは何事も貴公の仰にしたがひませう、とは言ふものゝ甲斐ない私、力とも便とも此先おもふは貴公ばかり。今はつゝんで詮のなき親の實名敵の家名、寔は箇樣」と言はんとするを、二刀齋はおし禁め、

二刀「イヤ〳〵夫も心得違。大約大事をかゝへた者が、敵の家名を放心々々と口外するは麁忽千萬。此身は聞いても他言はせぬが、譬にも言ふ壁に耳、若此事が餘所へ洩れて、敵にでも知られた時には、身の禍となるは必定。只夫のみの事ではなく、お前は敵を討つ氣でも、今はなかなか及ぶまい。斯う白地に言つたなら、心に障るか知らないが、此身は艶が嫌い故ありのまゝに言ひますが、最前おまへが悪者どもを相手になされた御樣子では、失禮ながらまだ〳〵手弱

第五十九回

新之丞は二刀齋の諫にその身をはじめて悔いて、須臾首を垂れたるのみ、辭もあらで居たりしが、記えず涙をはら〳〵とこぼしながらに形容をあらため、

新「奈何なる過去の御縁か知らねど、はじめて逢うた私へ、親にも勝つた御教訓、迷の雲も晴れました。實私の父親は、人手にかゝつて非業の最期。その讐が討ちたさに箇樣に浪々致すうち、寔に若氣の誤にて、ふと色里に通ひそめ、斯う言ふ不實な女と知らず、親の無念も餘所にして、路銀ばかりか命まで、渠が手管に乗せられて、欺されたのも親の罰。斯くまで鈍つた性根では、なか〳〵敵は何として、討おほすべきやうもなし。夫のみならず廓から、欺されたにせよ濱菱を、盗み出した咎あれば、迚も遁れぬ此身の汚名、生きて恥辱を重ねんより、せめて最期は武士らしく、切腹なしたき我等が望、是ばつかりは見遁して」ト言ふより速く肌おしくつろげ、既に自害と見ゆるにぞ、

凶事でもあつた時には、親公の歎はどのやうであらう。殊に最前承はれば、何か望のあるとのお咄、然うして見れば取わけて大事にされねばならぬ體。ハテ大丈夫と呼れる者が、一人の女に心を亂し、命を捨つるやうなとでは、男とは言はれまい。女を殺して男を立てると、身を全うして望を愜へ、眞の男を立てるのと、どちらが男が立つであらう。是は男の立てどころが些違ふではあるまいか」ト言はれて實にもと新之丞は、はじめて夢の覺めたるごとく、忙然として居たりける。

新「モシ、この文を貴公は何様して御所持のでございます。」

二刀「イヤナニ他に仔細もないが、此身が這處へ來る途中で、思はず拾つたこの一通、封じが切れて居た故に、心ともなく披いて見れば、深いたくみの其文言、見ず知らずの人ではあるが、扨氣の毒な事ではあると思ひながらに來懸りて見れば、お前の難義の御樣子、たしかに夫と思ふ故、惡者どもを追ひ退けて、仔細を問へば此文の名前に符合する故に、夫で御覽に入れたのサ」

ト聞くより忽地新之丞は日色を變へて立あがり、又駈出さんとする袖を再びしつかと引とゞめ、

「こりや貴所は何處へ往かしやる。」

新「ハテ知れた事、此身をば飽まで白痴にせしのみか、殺さんとまで巧みし濱菱、生けて置いては男が立たぬ、禁立なさるは情に似て、かへつて怨に思ひます。コレ見遁して」ト言ひつゝも、振離さんと身をもがけど、抱きすくめて動かさず、

二刀「イヤ〳〵夫は不了簡、腹は立たうがとつくりと心をしづめて聞つしやい。素より遊女は賣物買物、客を欺すが渠等の商賣。夫と知りつゝ放心々々と欺されるのは這方の不覺。尤此濱菱とやらは、手管で欺すと事替り、十分憎い仕方だが、今此女を手にかけたら、其腹立は晴れやうが、お前もお若い事だから、定めて親公もあるであらう、人を殺せば身も殺さるゝと、お前に

んのほど飛立つやうに御うれしく存上げり〻。さりながらそのふしも申上候新印の事、據なき義理合にてよびつゞけ候客故、今さら御前さまの方へ參り候とて突出し候はゞ、氣ちがひのやうにのぼせ居り候人なれば、若やどのやうな事を致し候はんもはかりがたく、夫故今宵情死致し候と申しこしらへ、廓のうちを連出され候約束に候まゝ、深草の野中あたりに御待受け、私をば御救ひ下され、かの人ばかりをいか樣とも御かたづけ下され候はゞ、行末ながく連添ひり〻にも心の障りもなく、又かの人に未練のないといふ私の心中を御まへ樣にも御目に懸けたくと箇樣にいたしり〻。委細の事は此使にさし上候僞助に申しふくめ置候へば、猶御相談願上候。餘は御目もじにてゆる〳〵御語らひ申上げり〻。

めでたく〳〵

はま菱か

横[illegible]し[illegible]ま

旦那樣

人々御元へ

ト讀むより愕り新之丞は記えず膝を立直し、

れ、言甲斐なくも小腕の悲しさ、打殺されんと爲たところを、貴公のお影で私の命ひとつは助かりましたが、連歸られた濱菱が、嘸や難義を致して居らうと、斯う言ふうちも心がせきます。お禮は辭に盡されませんが、私は此儘に廓へ參つて、今一度濱菱に對面致し、殺されるとも渠と一處。白痴者とも馬鹿ものとも定て思召しませうが、かならずお禁め下さるな」トいふより速く身を起し、駈出さんとする程に、

二刀「ア丶コレ姑く、新之丞どのとやら、お前はきつう取逆上てござる樣子だが、此身がお目に懸ける物があるから、まァ落着いて是を見さつしやい」ト懷にせし文一通取出しつゝ手に渡し、提燈の火をさし寄れば、新之丞も心はせけど否とも言はれず、その文のまづ上書を讀下せば、紺藏さままゐる、濱菱よりト認めたるに小首をかたぶけ、

新「是は濱菱の自筆に相違ございませんが、何樣して貴公の」

二刀「ハテまァ、何であらうとも中を讀んで御覽じるが宜い」ト言はれて這方は不審ながら、おし披き讀むその文面、

さし急ぎ候まゝ用事ばかり申上りまいらせ候。扨とや先もじ御げんのふし、たらはぬ私を深くも思しめし、身儘にして行末までの御世話をもなされ下され候はんと御細々との御語らひ、御し

ん。迚も生きては居られませぬ私の身のうへ故、御恩報じは出來ますまいが、せめて貴公のお名前でも承つて置きたうございます。」

武「ナニサ、是しきのことで禮を受くる譯はないが、お前の心の落着くやうに、そんなら名告つて聞かせませう。自己は伏見の京橋邊で劍術の師匠を渡世に致す松下二刀齋と呼れます大事ない浪人者だから、かならず心遣をなさらぬが宜いぞヨ。見ればまだお若いのに、大勢を相手に今のしだら、是はまア一體何樣いふことだネ。」

新「ハイ、お聞きに預りましては、寔に面目もないことでございますが、御信切に任せ、一通りお咄しまうしませう。基私は四國方の浪人者で袖岡新之丞とまうす者、箇樣に浪々致しますも、深い望があつてのことでございますが、日外此地に參りまして、ふとしたことから撞木町の濱菱といふ遊女の許へ通ひそめたが運の盡、渠が實義の捨てがたく、身の一大事もうち忘れ、貯の金銀も殘らず遣ひ捨てまして、表立ちては濱菱に逢れぬやうになりさがりしに、近頃田舍の大盡にて横島紺藏といふ者が、かの濱菱を身受の相談、若も那方へ受出されては生きては居ないと女が覺悟、夫と聞いては跡へも引かれず、その心底なら此身も男だ、一處に死なうと約束かため、今宵是まで忍び出て、情死を遂げんと致したところ、廓の追手に見付けら

ぞ、はや此うへは詮術なし、死物狂と覺悟して、持つたる刄をひらめかし、須臾戰ふその間に、うろたへ惑ふ濱菱を、二人の男が引かつぎ、雲を霞と馳出すにぞ、夫やつてはと新之丞が、あせるを殘る三人が、おし隔てつゝ前後より、打込棒を受損じ、向臑はらはれ俯伏に撞と倒るゝ新之丞を、遠慮會釋もあら漢子等が、脊中肩先きらひなく、棒も折れよと打つ程に、憐むべし新之丞は、髮はざんばら衣類さへ咸ずた〳〵に破られて、今姑くにて既にはや打殺されんとせしところへ、通りかかりし一個の武士、羽織大小しとやかに、頭巾に面を包めども、賤しからざる風俗なるが、携へ來りし提燈にて此ありさまを見るよりも、思ふ仔細のあればにや、

武「惡者俟て」ト聲かけて、提燈片手に割つて入り、先に進みし荒漢子の持ちたる棒を奪ひ取り、忽地幵處へ打居ゆれば、殘る二人は駭きしが、素よりがむしやの無法者、相手を獨りと侮りけん、右左より打つてかゝるを、那武士は物ともせず、須臾あしらふその内に、二人も棒をうち落され、敲立てられ堪り得ず、命から〴〵迯げゆくにぞ、はじめ打れし一人の漢子も漸漸にして這ひ起きしが、叶ふまじとや思ひけん、倶にその場を馳去りける。件の武士は三人をよき程に追捨てつゝ、這方に轉びし新之丞をたすけ起しついたはれば、新之丞は土に手を下げ、

新「何國のお方かぞんじませぬが、危いところをお救ひ下さいましたお禮は辭に盡されませ

第五十八回

慿る折しも見え躱れに、跡つけ來りし荒漢子が、四五人一度に顯れ出で、

▲「欠落者を見付けたぞ。女は大事の賣物だから、怪我をさせてはならねへ〱。」

●「オヽ然うだ共〱。何でも女は引さらつて、野郎は爰で打ちめろ。」

×「ナニ野郎ぢやァねへ、前髪があらァ。」

⊠「エヽ、そんなことは何樣でも宜いやァ。迯さねへやうに用心しろ」と大勢一度に取圍めば、駭きながらも新之丞は、女を後におし圍ひ、

新「アヽモシ皆さん、そのお腹立は重々御尤ではございますが、據ない譯で命を捨てるのでございますから、何卒お見遁しなすつて下さいまし。」

▲「エヽ此素丁稚奴が、歳もいかねへ癖をして、顔に似合はねへふてへ若衆だ。大枚の金を出して抱へて置く賣物を、僴等に勝手な玩物にされちやァ這方の腮が干あがらァ。四の五のと面倒だ、女を取返したうへで、這奴は思入しめあげろ」トいふより速く立かゝより、おの〱棒を掉あげて、打すくめんとする勢に、新之丞も今更に辭を以てなだむるとも、聞入れがたしと思ふに

する情死は意氣なやうだが、斯うやつて見ると、あんまり氣の利いたものでもないねへ。」
新「どうせ死ぬのだものを、意氣も野暮もいつたものかな。此樣なことを言つて居るうちに、廓の追手にでも見つかつて、死そこなつては猶恥だ。まだ幸に月も出ず、人里はなれた此野中、爰等が丁度場所も宜い。お前覺悟はいゝのだの」ト言はれて女は泪ぐみ、
はま「そんなら新さん、私を先へ殺してお呉れのかへ。」
新「お前を殺したその脇差で、直に此身も死ぬ覺悟サ。」
はま「果敢ない事をいふやうだが、來世とやらへ往つたなら、夫婦になつてお呉れだらうネ。」
新「そりやア言はずと知れた事だ。ひとつ蓮の新世帶、二人和合よく暮さうから、夫をせめての樂に、お念佛でも多分唱へな。」
はま「そんなら新さん、此世では是が互の顏の見をさめ、宜く顏見せて」ト寄添へば、男も未練に引寄せて、須臾泪にくれけるが、かくては果てじと新之丞は、我と心を取直し、刄をすらりと拔放し、既に斯うよと見えたるは、最も危きことなりけり。

何様いふ縁だか知らないが、見るかげもねへ此身のやうな者を、親切らしく爲て呉れるから、その心にほだされて、放心々々通つて居るうちに、田舍の客とやらが、お前を受出して連れて往くとの事、口惜しくつても殘念でも、金づくでは叶はれず、思案にも工夫にも盡果てた時、お前がいふにやァ、迚も逢はれなくなるやうなら、生きて居ても樂がないから、死んで仕舞ふと突詰めた覺悟の樣子に、そんならばお前ひとりは殺しはしない、二人一處に情死と、親の事をも餘所にして、言交したのが思案のごくづめ。人目の多い廓のうちを連出して來たくらゐだものを命が惜しくつて出來るものかな。」

はま「然うお言ひだと然うかとも思ふけれども、ほんのお附合の情死ぢやァ、あんまり嬉しくもないと思ふからサ。」

新「馬鹿なことをいふ、附合に命が捨てられて堪るものか。」

はま「夫も然うだネエ。そして何處まで連れてお出でのだか、私やァ寒くつて風邪でも引くと困るネエ。是と知つたら、思入着込んで來れば宜かつたつけ。」

新「お前もつまらねへことを言つたものだ。今死ぬのに風邪ぐらゐが何だらう。」

はま「オヤホンニ氣が付かなんだヨ。夫ぢやァお前はんは最う死ぬ氣かへ。淨瑠璃や狂言で

るれど、化粧栄する顔立の、ぞつとする程美しく、基此女は撞木町の八文字屋と喚れたる娼妓屋の抱にて、名を濱菱ともてはやされ、許多の客のその中にて、新之丞とその名を呼ぶ是なる若衆に馴染めて、互深くなる儘に、又去りがたき仔細ありて、今宵廓を欠落なし、這處へは徨ひ來りしなり。

はま「新さん」

新「エ。」

はま「オヤマア、氣のない返辭を爲てサ。何だらうネエ。」

新「氣のある返辭も出めへぢやァないか。爰で死なうといふのだものを。」

はま「夫ぢやァ死ぬのがそんなに氣がないのかへ。いゝョ、否だとお言ひのものを無理に死んでお呉れとは賴まないから、お前はいつまでも長命をして、又何處その女郎衆を迷はして、多分浮情をお爲なはいョ。私はそんな浮情者とも知らないで、實を盡くしたのが不調法だから、詮方がないとあきらめて、獨で死ぬからサ。」

新「コレサ、何もそんなに腹を立てる筋もあるめへぢやァねへか。此身だつて實は大事を抱へた體だから、死にたいことは些ともねへけれども、ふとしたことからお前の所へ通ひはじめ、

つくれど、手足を既に斫落され、弱り果てたる沼澤が、物いふことも恊はぬにや、頻に眼を見はるのみ、返す辭もあらざるを、七助飽まで詈り懲して、胸のあたりを三刀まで、拳も通れと刺つらぬくにぞ、さしもの傳五左衛門も、須臾はもだえ苦しみしが、はや息絶えし形狀に、忽地心やゆるみけん、倶に絶入る七助が、伏重りてぞ死したりける。主水は不便と思ひながらも、又詮術もあらざれば、石部水口兩驛の宿役人等を招き寄せ、綷の仔細を物語り、我は古田の家來にて、牛尾田主水といふものなり。夥の人をあやめしも、據なき次第なれば、定めて宿の掟もあらんが、我も主用あるものゆゑ、這處に久しく止りがたし。此事につき其方どもが迷惑いたす條もあらば、本國伊勢の松坂へ何時なりともまうし出でよ。宿の落度にならざるやうにまうし取りて得さすべしとて、七助が死骸をばあたりの寺へ葬りつゝ、軈て其地を發足して松坂に立歸りしに、幾程もなく古田の家に思ひがけなき凶事ありて、其家斷絶したりしかば、主水も浪々の身となりて、須臾あちこちさまよふうち、山城の國伏見の里にて、又一條の物語あり。その趣を尋ぬるに、伏見の里より道の程、遠くもあらぬ深草野邊、はや小夜更けて亥の刻過、廿日あまりの事なれば、まだ月代も出でやらで、星の光をしるべにて、露の道芝踏わけつゝ、辿り來りし二人連、男は歳まだ十七八の、前髮さへも剃り落さぬ、雪を欺く美少年、女は是に二ツ三ツ、年增ならんと思は

りて、
主「コレ七助、さぞ殘念に思ふであらうが、儞の親の敵と聞く沼澤の輩は、大半自己が討とつて、和主が恨も晴したを、其處で見物爲たであらうな」
七「ハイ／＼旦那さま、有難うございます。私はもうお蔭で思が晴れましたから、思ひ置くことはございません。是が此世のお暇乞でございます」
主「アヽコレ／＼、そんな氣の弱いことを云つてはならぬ。儞の息のあるうちに、まだ此うへの本望を遂げさせて遣ることがある。かならず心を落さずに、氣を慥にして待つて居やれ」ト用意の氣付藥を口に含ませ、猶さま／＼にいたはりつゝ、這方に倒れし沼澤が、手足は斬落されながら、死も得やらず居たりしを、襟がみつかんで引ずり來り、「コレ七助、是こそ儞が父の敵沼澤傳五左衛門だぞ。思の儘にさいなんで、日比の遺恨を晴すがよい」トさしつけられて七助ははや片息になりながらも、餘りの事の嬉しさにや、我を忘れて起上り、腰なる一刀引拔きて、沼澤にのしかゝり、
七「いかに沼澤傳五左衛門、最前もいふ通り、汝が爲に讒せられて、罪なく命を落された父の怨母の無念、今御主人のお情にて、一時に復す七助が、遺恨の切先受けて見よ」ト刄を目前に突

主「その高言は跡でのこと。卒まづ勝負」ト言ひつゝも刄をすらりと抜はなせば、這方も倶に抜合せ、一上一下と斫むすぶ、互に手練の切先は、電光稲妻水の月、須臾雌雄も判かざりしが、古田の家にて一人と、音に聞えし主水が手の內、雷光石火と討込む刄を、受損じたる傳五左衛門、右の腕をうち落され、ひるむを得たりと付入つて、拂ふ刀に又左の膝の番を斫落せば、ウントばかりに仰さまに、仆れたる儘動き得ず。夫と見るより同伴の侍どもは打駭き、心に五分の怖はいだけど、今目前に朋輩を、討たせて見遁すべきにあらねば、沼澤が伴當もろとも、各刄を抜連れて、主水が前後左右より、おつとりかこみて斫蒐るを、主水は更に臆する色なく、茅花のごとき白刄の中へ、面もふらず討つて入り、左手に指添抜持ちつゝ、宮本無三四が傳ふるところの、所謂神免二刀流の、秘術を盡してはたらくにぞ、或は胴斫からたけ割、又は首を失ふあれば、手足を落され蠢くあり、近寄る者は一人だも、淺痍深痍を負はぬはなく、ばつたくと伐倒され、多勢を頼みし侍ども、及沼澤が伴當も、咸散々に討ちなされ、多くは其處に命を落し、逃げんとせしも重疵に苦しみ、那處這處に伏轉び、命からぐ落延しは、一二個に過ぎざりけり。主水は多勢と戰ひながら、少痍一箇處負はざれば、思ふが儘に斫靡け、四邊に近づく者もあらねば、刄を拭うて鞘に收め、此ときまでも松蔭に、打惱されて苦しみながら、はや片息なる七助を、抱き起しついたは

第五十七回

爾れば主水は那者どもに、飽まで過言を言ひ募らせ、遉に心中忿を含めば、今は斯うよと胸をさだめて、沼澤等にうち對ひ、

主「イヤナニ各位、しからば何程まうしても、お聞濟はござらぬとか。此うへは是非に及ばぬ。那方這方の用捨はない、一個々々は面倒だ、咸惣がかりに蒐らつせへ」ト袴の股立爪挾み、下緒を取つて襷に綾どり、刀の鯉口くつろげつゝ、立はだかりたる勇士の身構、はじめ卑下せし容子とは、うつて換りし形勢に、すは又喧嘩と見物が、かたづを呑んで控ゆるにぞ、相手を一個とあなどりたる、武士どもは我先に、討つてとらんとひしめくを、沼澤制して冷笑ひ、

沼「丈の知れたるへろ〳〵侍、各位の御加勢を被ぶる程の事でもござらぬ。拙者が手練を御覽に入れん」ト徐々と進み出で、「詮方なさに命を投出し、立合はうとは殊勝々々、氣の毒ながら其處許の、五體は忽地微塵にならう。觀念あれ」ト立對へば、

もいと憎きに、當の相手の沼澤は、下奴ながらも兄弟の義を結びたる七助が、父の敵と知るのみか、其七助さへ手込に合ひ、命も既に危きを、素より見逃す心はあらねど、故意と辭を和げて、斯く慇懃になしつるも、渠等に飽まで非法を言はせ、其上にてと始より、深き思慮ある事なれば、今ははや是までと思ひさだめし牛尾田主水が、其返答は爭何ならん、次の卷を讀得て知らん。

と爲たところ、家來に代つて其許が詫せられんとあればとて、一通りでは聞濟ならぬ。下郎は勿論此鎗をも、取り返したく思はれなば、刀に掛けて取らつせへ。小分ながら傳五左衛門、お相手に罷りならう。下郎と違つて貴殿も武士、實があつて面白い。さア拔つせへ牛尾田氏、何とでござる」ト無法の返答。這方は猶も手を下げて、

主「是は又變つた仰。只今もまうす通り、たかが下奴の麁忽故、主人と主人が刄を交へ爭ふもおとなげなし。拙者に於ては幾重にも、只々お詫つかまつる。緈穩便のおはからひ、偏に賴み入りたし」ト云はせもあへず頭をうち掉り、

沼「イヤ〳〵其儀は決して慊はぬ。夫とも刀が拔かれずば、下郎は身どもが心任せ。又此鎗も此儘に返す事は相ならぬ」ト言ひつゝ傍を見かへりて、「おの〳〵那を聞かしつたか、見かけ斗は立派さうに、腰に兩刀は指れてだが、斯ういふ場所へ臨んでは、遉に命は惜しいと見える」

みな〳〵「左樣々々。一體鎗持を馬に乘せるといふのからして、第一主人の不心得といふものだ。イヤナニ牛尾田氏とやら、貴殿も家來を手込にあひ、持鎗までも奪はれては、武士道が立ちますまい。我々とても沼澤とは朋輩のよしみゆゑ、品に依つては助太刀致す。遁れぬところと觀念して、疾々勝負を致されよ。爭何々々」ト口々におどしかけつゝ威を見する、渠等の過言

でに、那方を急度見あぐれば、又からくと打笑ひ、

沼「此期に及びてよしなき雜言、いはせて置けば種々と、耳囂しいよまひごと。最う宜い程に苦しんだら、此世の暇をとらせて吳れん。念佛なりと題目なりと、勝手な物を唱へよ」ト言ひつゝ刄を拔はなし、旣に斬うよと見えし折しも、息せき走來る牛尾田主水、斯くと見るより聲ふり立て、

主「ヤアお武士姑く待たれよ。須臾々々」トおし禁むる、聲に見返る沼澤が、

沼「慮外をいたした下郞奴を手討に做さんと致すをば、禁め召さるゝ其許は誰人なるぞ」ト咎むれば、主水は故意と莞爾やかに、小腰をかゞめ手を下げて、

主「某事は古田の家來牛尾田主水と喚るゝ者にて、是なる下郞は拙者が下奴、奈何なる不禮を致しました。仔細は一向存じませねど、たかが下奴の事でござれば、拙者が代つてお詫いたす。はや御了簡下さるまいかな。」

沼「然らば貴殿が此者の御主人と仰せあるか。身どもは宇和島の藩中にて沼澤傳五左衞門と呼るゝ者、此下郞奴が我が駕へ持ちたる鎗を突入れて、箇樣な疵を負はせしのみか、我をば父の仇なりと、不禮過言の許しがたさに、見らるゝ通り斯くの仕合、旣に唯今息の根をとめて吳れん

ぬるは身の本懐。怨の刄受けて見よ」ト身はさん〴〵に打居ゑられ、腰さへ自由に立ちかねるを、よろめきながら立あがり、準備の一刀拔きはなし、沼澤めがけて斫つて蒐れば、すは狼藉と侍ども、作當なんどが立かゝり、駕の杖をばふりひらめかし、矢庭に刄をうち落し、またさんざんに打居ゆれば、憐れむべし七助は、惣身すべて血にまみれ、息もたゆげに臥轉ぶを、怒に任せて傳五左衞門、立蹴に礑と蹴返しつゝ、から〳〵と打笑ひ、

沼「扨は宮内の悴よな。儞が父はそのむかし、犯せる罪のある故に、命を捨てたは自業自得、人を恨みん條はなきを、我がせしやうに思ひ違へ、讎呼はり事をかしい。親の因果が子に報い、今その形貌になりながらも、猶も悟らぬ愚者。爾はさりながら夫程まで、我を敵と思ふなら、さア立あがつて勝負せよ。是丈いうても立得ぬは、我が威勢におくれが來て、不便や腰が拔けたのか、口程もない臆病者。夫でも元は武士の子か」ト飽まであざける惡口雜言。這は口惜しと七助は、齒がみをなせど許多の人に、打居ゑられて、身うちは動かず、年頃日頃心を盡せし、父の仇たる沼澤を、今目の前におきながら、立合ふ事も愜はぬとは、よく〳〵武運に盡はてし、此身のうへを何とせん。父には孝をつくし得ず、主人の爲には持鎗を、他家へ取られし不忠の罪、夫も誰故傳五左衞門、假令此儘死ぬるとも、生替り死替り、恨を晴さで置くべきかと、遺恨の眼尻血ばしるま

の恥辱となれば、沼澤氏は許すとあるとも、我々が承知いたさぬ。」

沼「イヤ拙者とても用捨はならぬ。四の五のと面倒だ、一寸だめし五分だめしに、這奴は爰でなぶり殺し。又鎗の主が此鎗を自身に貰ひに來たならば、渡すやうにして渡して遣らう。奴め、斯くても主人を言はずば最う是までだ、覺悟せよ」ト刀の柄に手を掛ければ、

七「アヽもうしお侍さま。只今ちらりと承れば、宇和島の御家中で沼澤氏と被仰は、若や傳五左衞門さまとは貴公ではござりませぬか」ト問はれて這方は訝し氣に、

沼「主人の名をも言はずして人の名を聞く白痴者。然りながら知られたうへはつゝんで詮なし。奈何にも我は宇和島の家中沼澤傳五左衞門だが、我が名を夫と知つたには何か仔細がなくては愜はぬ。今討ちはなす奴なれども、譯を聞かぬも殘多い。きり／＼ぬかせ」ト白眼ゆれば、

七助屹度形狀をあらため、

七「偖は汝が傳五左衞門、斯くいふ我を誰とか思ふ、汝がために讒せられ、敢なく非業の最期をとげし、浪崎宮内が一子たる、七助なるを知らざるか。今は恁くまで零落れど、片時忘れぬ父の讐、一太刀なりとも恨みんと、思ふ心の屆きてか、測らず汝が面體へ、疵付けたるは天の賜物。汝も武士の數ならば、卒此場にて勝負せよ。豫て此身は斫死と、覺悟は既になしたるを、爰で死

まぬ事でございますれば、奴めを何樣にも貴公のお腹の愈ますやうに、御存分に遊ばしまして、何卒その鎗はお返しなされて下さいまし」ト云ふうち追々同作の武士どもが駕より下りて、おのおの這處へ寄集り、此爲體を見るよりも、

みな〳〵「イヤ沼澤氏手ぬるい〳〵。駕へ鎗を突入れるとは法外な素丁稚奴。殊更疵を受けられながら、長問答には及ばぬ事、主人の名前を言はずとて言はさいでおくべきか、いで我々が」ト三四人、七助一人を取りかこみ、「さア眞直に言つて仕舞へ。言はずば斯うだ」ト立ちかゝり、踏むやら蹴るやら敲くやら、遠慮會釋もあらくれ武士が、手込の責に七助は、髮は亂され衣類は破れ、顏も體も血まぶれに、許多の疵は付けられながら、爰ぞ一世の大事と思へば、眼を閉ぢてたじろかず。此形容に責めあぐみし武士どもは呆れはて、須臾猶豫の體なるにぞ、

七「ア、モシ旦那さまがた、私の麁相は此上もない不調法ではございますれど、是程までに私を御存分に遊ばしましたら、大方お腹も愈ましたらうから、何卒其鎗はお返しなされて下さいまし。御慈悲でございます、お情でございます。コレ拜みます」ト手を合せ、詫びつ口說きつ種々に、泪ながらにかこちても、爭何聞かぬ侍ども、

侍「エヽ强性な素奴め、朋輩の面體へ生疵を付けさせながら、つひ此儘で濟せては、宇和島家

〵武「者ども其奴を取逃すな」ト烈しき辭に家來の面々、馬より落ちて七助が、うごめくところを取つておさへ、持ちたる鎗さへ奪ひとりて、那武士が目通りへ有無を言はせず引居たる、此形勢に七助は、呆れ惑ひつ更にまた、言解辭もあらざれば、只茫然たるばかりなる。其とき件の武士は、いよ〳〵怒れる聲ふり立て、「ヤイ下司奴の分際で、我乘物へ鎗を突込み、武士たる者の面體へ疵を付けても濟まうと思ふか。鎗をかついで居るからは、儞も主人があるだらう。主人といふのは何者だ。夫から先へ白狀をれ」ト言はれて七助頭をあげ、

七「そのお腹立は重々恐入りましたが、全く馬が驚きました故、箇樣な麁相もいたしましたのでございますれば、寔の怪我の過と御了簡遊ばしまして、此場のところは御勘辨を、ヘイヘイお願ひまうします。」

武「ヤ、這奴が、こやつが、武士の額に生疵を付けながら、御勘辨とは何の事だ。儞等がやうな下司下郎を相手には致さない。他の事は聞くには及ばぬ。主人の名前を速く言へ。主人に逢うて掛合つたうへでは、了簡の爲やうもあらうが、まア夫までは儞は素より、鎗も返すことはならないぞ。」

七「サヽ左樣ではございませうが、下郎めが不調法ゆゑ主人の名まで出しましては、何分濟

ならずと、忽地思案を定めつゝ、六内は跡に殘して輜荷物の類を守らせ、鎌平ひとりを召連れて、飛ぶが如くに那方なる竝松原へぞ走往きける。

第五十六回

夫より先に七助は、石部の宿へ來りし頃、持病の癪のさし起り、ほと〳〵悩みに堪へがたければ、鎌平に草履を頼み、其身は鎗を預りて、宿はづれより馬を雇ひ、荷鞍の上に跨りながら、片手には鎗を擔ぎ、片手に痛む胸先をおさへて苦痛を忍びつゝ、既に石部と水口のその間なる松原へ、さし掛りたる折こそあれ、向より來る武士の行列、

先拂「ヤイ馬士、馬を脇へ引け、エヽ氣の利かねへ馬士だ」ト持つたる杖を振上げて馬の尻をばしたゝか打てば、件の馬は駭きけん、頻に踊り狂ふにぞ、此時までもさし俯向き胸を押へし七助が、此形勢に愕りして、鞍の上にも堪へがたくや、眞逆さまに落つる時、持つたる鎗の石突にて、通りかゝりし侍の乘りたる駕の窻を破りて、内へぐさとぞ突入れたる。其とき駕の裡よりして戸前を礚と蹴ひらきて、顯れ出でたる暴戻武士、額に疵を受けしと思しく、流るゝ血しほを拭ひもあへず、怒れる聲をふり立て、

▲「併しあの奴も鎗をかつぎながら、馬の上で居眠をするとは、あんまり宜氣な男ではあるめへか」ト噂咄も何とやら、心ならねば六内が、その旅客にうち對ひ、

六「モシ〳〵、今のお咄は何處であつたお咄でございますネ」

×「ナニ此跡の松原で、たつた今見て來た喧嘩サ。」

六「ヘヽエ、そして其奴と被仰のは、何歳位の年恰好で、どんな顔付の男でございますか、些と此方にも心當りがございますから、委しくお聞せなすつて下さいまし」

×「ナニ、私等も中途から見たのだから、何だか譯は知らないが、馬に乘つて來た奴が、宇和島の家中の駕へ、かついで居た鎗を突込んだとか云ふやうな事で、その侍がおそろしく腹を立つて、大勢かゝつて踏んだり蹴たりする樣子サ。その奴の年頃は十七八で色の白い小作な男でござりやした」ト言ひ捨て通り過れば、又跡よりも追々に通りかゝりし旅客が、とり〴〵の噂咄も、正しく七助に紛れなければ、六内も鎌平も、打駭くのみ術なさに、主水にかくと報知にぞ、一ト間の裡に休息なしたる主水は聞くより仰天して、其侍が宇和島の家中とあれば若萬一、日比敵と付狙ふ傳五左衞門ならざるか。何は兎もあれわが持鎗を携へたりし家來をば、見殺しにせんやうもなく、殊には渠とは有馬にて誓約し辭もあるなるを、須臾もうち捨ておくべき

御本陣

水口の駅主水主僕七助が冤難を听く
浪花講
千日講
六内

通る奴ぢやァねへか。何でも五六百石も取るといふのが頭で、駕が三挺往つたノウ」
鎌「然うサ、具足櫃に宇和島家中とみんな書いてあつたから、四國侍だらう。道中もあのくらゐな人數で爲たら面白からう。鎗ばつかりが六七本も往つたぜ」
六「イヤ、その鎗で氣がついたが、那七助は何樣したらう」
鎌「此身も先刻から氣にして居るノサ。石部の宿で、腹が痛くツて歩行かれねへから、歸り馬でも雇ツて乘つて往くから、些との間旦那のお草履を持つてくれろ、其替りにはお鎗は此身が馬の上でかついで往くと云つたから、那奴に鎗を預けたが、何でも晝休までには追ひ着くと云つたにしちやァあんまり遲いなァ」
六「那奴も小ばしつこいやうな口は利くけれども、此樣ときになるとぐづ〳〵するので困らせきらァ。何程日が永いと云つても、晝休に半時の餘も懸つちやァ、泊りまでにやァ夜に入るかも知れやァ爲ねへ」ト云ふ時、石部の方よりして追々來かゝる旅人が、通りすがひの咄聲、
▲「コレ、今の喧嘩は大變な騷になつたぢやァねへか。可憐さうに那鎗を持つた奴は打殺されるだらう」
×「然うサ、憎ていな侍が大勢かゝつて責めるのだから、堪るものぢやァねへ」

七「重々厚きそのお惠、然はさりながら旦那さま、下郎の我等と兄弟とは、お情過ぎて何とやら。」

主「ハテ苦しうない。去りながら餘所の聞えも憚りあれば、時いたる夫までは、互の心は兄弟にて、表向はやはり下郎の七助、かならず人に洩すな」トことばのうちに小夜更けて、寐よとの鐘の聞ゆるにぞ、主水は臥房へ七助も、暇を告げて自己が住む、下座敷へぞ退きける。かくて其次の朝俄に旅の用意をなし、有馬の溫泉宿を發足なすにぞ、主水も逭にお艶がことを、その儘にしてもうち捨ておかれず、以前の湯女を竊に招き、金五兩をば渡しつゝ、戯れ事に云ひ紛らし、緈隱密に濟せしとぞ。

長持うた「坂はなア引てる〱鈴鹿は曇るなアエヽ引
　　合の土山雨が降るヨなアエヽ引」

人足「アヽどつこい何樣だイ、馬が物いうた鈴鹿の坂だイ」ト下り上りする旅客の、往來途絶えぬ都路や、爰も名におふ近江なる、その水口の驛路の脇本陣に駕を建てさせ、今晝休の牛尾田主水、かの若黨の六内が、

六「オイ鎌平、今がた爰の棒鼻で摺違つて通つた行列は、陪臣者と見えたが、大そう幅をして

き咎を蒙り、敢なく切腹なしたるにより、母も歎の餘りにや、病の床に臥して後、幾程もなく世を去りて、跡に殘るは我身のみ。本國伊豫を追放せられ、親族とてもあらざるに、殊更僅に十一歳、稚心に父のみか母さへ斯るなりゆきも、咸沼澤が倣す所爲と、齒がみはなせど小腕の悲しさ、怨を復さん力もなく、すご〳〵として故郷をはなれ、那方這方とさまよふうち、かてゝ加へて此身の病氣、命も既に危きを、貴君のお家へ救取られ、這年月の御厚恩、今まで口へは出さねども、片時忘れぬ父の仇、討取ることは愜はずとも、一太刀なりと恨みんと、思ふ心は絶えねども、受けた御恩を報じもせず、親の讐が討ちたしとて、お主を餘所になすべきならねば、深くも素生をつつみしは、斯る仔細のある故ぞ」ト涙ながらに物語れば、主水はきつと形容を改め、

主「わが推量に毫違はず、偖は儞は宇和島家にて由緒ある武士の子なりしか。世が世のときであらうなら、わが草履など摑むべき身のうへにてはあるまじきを、下郎とまでになりさがれど、父の恨が報いたいとは、適見あげた武士のたましひ。其一言を聞くうへは、今より兄弟の義を結ばん。我をば兄とおもふべし、我また儞を弟と思ひ、力をそへて父の讐沼澤とやらを討ちとつて、かならず本意を遂げさせん。心安かれ七助」ト言はれてはつと驚くまでに、這方は頭を疊にすりつけ、

親人が、屋敷の裡へたすけいれ、種々介抱ありしゆゑ、病の早晩本復なし、如何なる者ぞと尋ねしに、生國は伊豫なれども、兩親共に世を去りて、頼みなき身といふにより、その儘家に止めおきて、草履つかみになしたりし、その小童は儞にて、其とき十一歳とやら、素生を委しく語らねども、立振廻のまめやかさ、長の旅路に尾羽うちからし、身形は賤しく見えながらも、下賤の者の孤とは、その時よりして思はざりしに、恩義を忘れぬ今宵の仕方、いよいよもつて最床し。儞の親は何者にて、奈何なる故にかくまでに、賤しき身にはなりつるぞ。仔細具に物語らば、我また心の及ばん程は、力となりて得さすべし。つゝまず語れ」ト問ひかけられ、須臾回答にさしつまりしが、胸をさだめて小膝を進め、

七「十一歳の春からして、親旦那さまの御恩を被り、是まで手足を伸したる、御恩報じもせぬうちに、わが身のうへを斯うくと、まうしあげなば此うへに、お心遣を掛けんかと、思ふがゆゑに今日までも、深くつゝみし下郎が素生、斯くまで仰せ下さるからは、今は隱すにかくされぬ、實我等が父とまうすは、伊豫の國宇和島家の藩、浪崎宮内と喚れし者、その頃おなじ家中の侍沼澤傳五左衞門といふ者、父に遺恨の條ありて、主君にさまぐ讒言せしゆゑ、終に罪な

第五十五回

牛尾田主水は七助が主思ひなる一言に、はじめて夢の覺めたる如く、恥ぢたる顔を揚げかねて、さし俯向きつゝ居たりしが、姑くあつて吐息つき、

主「アヽ我ながら過つたり。儞が居らずば既にして、渠が色香に心を奪はれ、身の一大事に及ぶべきを、主水が武士の棄らざりしも、全く儞の赤心ゆゑ。夫をさうとも思はずして、暇を遣るの法外のと、いうたが今更面目なく、言解く辭はさら〳〵ない。許してくりやれ、七助」トいふに這方は飛しさり、はつと許りに平臥して、嬉し泪に稍しばし、貌もあげ得ず泣入りしが、

七「エヽ有難うござります。お心廣い旦那さま、數にも足らぬ下郎めが申しあげた一言をお取りあげ下さつて、慮外の辭をおとがめもなく、反つてお譽のお辭は、千萬兩のお金をば頂戴たより有難い」ト言ふ顔つく〴〵うち守り、

主「聞けばきく程儞の心底、思ふになか〳〵腹からの下賤の子とは思はれぬ。算へて見れば

いろは文庫第十編序

舌講師が机を敲きて、次話は明晩の後講にと、美談ところで幕を切るも、跡を引かする方便にて、稗官者流が卷の終に、开は後回の分解を聽けと逃げるも腹はおなしこと。然はさりながら這史は、誰もしつたる忠臣藏、聊自作は加ふれど、後を引かせて斯うしてと、倆伎るほどの條もなく、虚實を込めし二ッ玉、鐵砲疵には似たれども、正しく刀でゑぐつた疵と、倘看官の御目利ありとも、淀鳥羽伏見と出たらめに、綴りなしたるめつぱふ彌八、夫は六段是は十編、見て來たやうな嘘さへも、上手に吐れぬ作者が鈍筆、辻講釋の一口ものにも、劣りて味なからんのみ。

爲永春水誌

思しめす。つひ假初の旅の空、素性も知れぬ女をとらへ、おん戯かは知らねども、身元もしかとお糺しなく、お國へ連れゆき奥樣に、なさらうなぞとはそりや何事。倘夫等から間違生じ、内外の耳に入るときは、人の入込む繁華の場所、古田の家來牛尾田主水が、女に溺れて恁々の騷動ありしと取沙汰あらば、貴君ばかりか殿さまのおん名の汚といふことは、よもお忘却はなさるまい。其處を思うて下郎奴が、御立腹をば覺悟して、女が來るを途中に待ち受け、有無をいはせず追ひ歸したは、貴君のお身を大切と思ひ込んだる故のこと。夫を然うとも思しめさぬとは、餘りといへばお情ない」ト心の眞實うち明けて主人を諫むる七助が、此ものがたりいまだ盡きねど、丁數爰に限あれば、其は編を替へ卷を改め、第十編に委しく說くべし。

しこくは言ふものよ、那が樣子に恐怖をいだき、倘此上に言募り、家内の者の耳に入らば、宜からぬ譯もある事ゆゑ、詮方なくも七助に、言ひ込められてすご〳〵と、頓てその場を立去りける。
是より先に主水は又、お艷が音信いかゞやと、臥房にありて待つ程に、俄に何やら聲高に人の爭ふ樣子なるにぞ、何事やらんと訝りて、楷子の口まで來て聞けば、那七助とお艷とが問答最中なりしかば、流石に家來の手前を恥ぢて、その場へ顏も出しかねしが、然るにても七助が奈何なれば那やうに人も賴まぬさし出所爲、我妨をば做すやらんと、心中竊に怒を含み、何とかせんと思案の内に、お艷はすご〳〵歸りし樣子に、いよ〳〵主水は憤の胸に餘れば堪へかねて、七助を一間に呼びつけ、
主「ヤイ七助、其方は這處を何處だと思ふ。夜中といひ殊にはまた、何か女を相手にして、聲高な今の振舞、旅人の入込むこの湯治場で、倘間違でも出來た時には、上のお名まで出るといふ、其處に心も付かずして、法外な致しかた、左樣な者は家來に置かれぬ。此場よりして暇を遣る。きりきり其處を立ちをれ」ト戀の邪魔せし腹立まぎれ、日頃に似合はぬ一言と、思へば這方はいとゞ猶落ちる涙をおし拭ひ、
七「貴君は天魔が魅入れたか、お情ないそのお言話。這處を何處だと被仰た、貴君が何處だと

七「何だ意地の悪い事を言ふ。コレ宜く聞けョ。开己が今夜來た譯も、疾くから夫と知つては居るが、女の事だと思ふから、成丈手荒い事を爲めへと、和に言やァつけあがつて、其處を通せも宜く出來たァ。十七八に化けて來ても、尻に毛のねへ古惡婆めへ、好くも物堅いお旦那をたぶらかさうと爲やァがつたな。此七助がお附きまうして、开己等の手事に乘る物かい」

つや「オヤ否にお言ひだネエ。私やァお無垢の素人だョ。夫を旦那がやれこれと被仰て、夫婦約束まで爲て見れば、今にもお國へ往つた日にやァ、何とか其處に名が付いて、不躾な言分だが、私の草履はき物まで、直さにやァならないお前だらう。あんまり口ぎたなくお言ひでない、トサ言つちやァ何様やら角が立ッて、お互に宜くないハネ。夫よりかお前はんには、私が美麗い湯女さんをお世話をして進げるから、私をも旦那のお側へ行かれるやうにしてお吳れなネエ。エ、モシ、こんなに仔細を言つて頼んでも解らないのかへ。何卒拜むからョウ奴さん」

七「エ丶囂しいノイ。何だ旦那と夫婦約束をしてお國へ往くと。ヘンお臍が茶を沸さァ。そりやァ旦那も御酒のうへぢやァそんな御戯言も被仰たか知らねへが、夫を眞に受けるといふのが全體間拔だァ。縱令旦那は何と被仰らうとも、この奴さんがならねへと言つたらならねへは。ぐづ〳〵言やァ踏殺すぞ」ト左右の拳を握り堅めて、飛かゝるべき勢に、お艶は逭に女故、口か

七「ヤイ、此二階は此身が旦那の借切の御座敷だのに、案内もなく揚りにかゝる、一體和女ア何處の者だ」トねめつけられて口籠りしが、
つや「ハイ、私やァ些と主水様にお目に懸つて、お願ひ申したい事があつて參ッた者でございます」
七「ナニ、旦那にお目に懸ッてお願だ。願があるなら晝間來い。まだ生若い女の癖に、灯も持たずに夜宵中、旦那のお獨りでおいでなさる處へ往くたァ、第一不躾だァ。用があるなら夜が明けてから來るが宜い」
つや「イエ、今夜で無ければならない事でありますから、此事は旦那も御承知で入らッしやる譯でもあり、何卒そんな事を被仰ないで」
七「イヤ〱、そりやァ噓だらう。此身が旦那は物堅い御氣質で、夜中に女にお逢ひなさる事なんざァお嫌だァ。そのうへ疾うにお睡眠なすつたから、今夜の事にやァ迚も往かねへ。夫とも火急の願なら、此奴が取次いで、お目の覺めた時分に申しあげて遣るべい」
つや「アレサお前はんに取次いで貰つて濟む樣な事なら、内外の人に氣兼をして、忍んで來やァ爲ませんハネ。そんな意地の悪い事を言はないで、其處を通してお呉んなさいヨ」

しつさゝれつ呑むほどに、果はその座に醉倒れて、前後も知らず寐入りける。

第五十四回

かくてその夜も小夜更けて、程なく聞ゆる四時の鐘、主水は二階に唯獨り、今にもお艶が忍び來るかと、臥房の裡にありながら、寐もやらずして待つほどに、下には下奴の七助が、主人を思ふ忠義者、最前若黨六内が咄の樣子に打駭き、直樣二階に赴きて、主人に諫言なさんかと、思ひしかどもイヤ〳〵〳〵、日頃からして物堅い、旦那が、夫ほど思ひ込んだはよく〳〵な事であらんを、生若輩な身をもつて、異見立てして倘ひよつと、用ひられずば詮ない事、夫より今宵その娘が、忍んで來るを途中に待ち受け、何でも旦那に逢はせぬやうに、有無を言はさずその場から、追ひ歸すのが近道と、獨り思案を定めつゝ、那六内と鎌平が醉倒れしを幸に、竊に部屋を忍び出で、まさかの時の爲にとて、準備の一刀脇ばさみ、二階楷子の眞中に、どつかり腰をうち掛けつゝ、今や遲しと待つところへ、お艶はかくとも毫知らず、忍び寄つたる二階の口、掛行燈の薄灯に見れば楷子の唯中に、かの七助が踏みはだかり、這方を白眼で控へし樣子に、お艶は思はずぎよつとして、進みかねたる有さまを、七助は見て眼に角立て、

六「コレサ何様した物だ。そんなに顔色まで變へて騒ぐ事もねへ。サア〳〵七助咄は置いて最う一盃呑まつし。」
七「此身ァ酒は否だョ。」
六「夫だつて折角旦那の下すつた酒だらうぢやァねへか。」
七「旦那の下すつたのだから猶否だ。」
六「ハテな、何が氣に障ッてそんな事を言ふのだらう。手前は腹立上戸の筈はねへが。ハヽア聞えた、今夜旦那がその娘を抱いて寐るといふ咄を聞いたので他嫉妬か。よせ〳〵むだな事だ。夫よりおぬしも氣に入つた湯女でも呼んで樂しむが宜いやア。エ、コレサ、何様したのだ」ト言へども七助は返事もせず、腕を組んで考へ居るにぞ、「アハヽヽ、こいつは大笑だ。好々腹を立つ奴は立たせておいて、さア〳〵鎌平、おぬしと二個でやらかさう。」
鎌「ハヽヽ、なる程七公の腹を立つたのばつかりは、一圓合點が往かねへ。そんな事を言はねへで、機嫌を直して呑まねへか。エ、是はしたり餘程腹が立ッたと見えて、无口込んで仕舞つたア。」
六「ナニサ、こんな馬鹿野郎に構ふ事はねへから、遣らう〳〵」ト是より二個さし向にて、さ

七助にしろ、心を知つた中だから、極内で咄して聞かせるが、實は先刻何の氣なしに二階へ揚つたら、十七八の婀娜ッぽい娘が來て居て、旦那とさし向のこそ〳〵咄サ。何でもこいつは怪しいと思つたから、立聞をして居ると聞きなせへ、旦那は日比から武張つた事ばつかり被仰る堅藏かと思ひの外、とんだ濡事師で、とう〳〵其娘を口説き落して、今夜四時の鐘の鳴る時分に忍んで來ると云ふのだから、こてへられめへぢやァねへか。」

鎌「ハテな、そりやァおつりき妙不思議な噺だが、そして其娘はやつぱり湯女ででもあるのかノウ。」

六「ナニ素人の處女で、寔に親孝行だと云ふ處が旦那の氣に入つて、國へ連れて歸つて奥樣になさるといふ騒ぎョ」ト最前二階で洩聞きしその荒增をさゝやき示し、「斯う云ふ譯だから、其處で此身等に酒を下すつたのも、醉はせて速く寐かさうといふ算段に違ねへノヨ。」

七「コウお若黨さん、そりやァ實正の事かへ。」

六「實正の僞のと、現在此身が立聞をして知つて居るのだが、貴樣もまたひどい悄りの爲やうぢやァねへか。」

七「悄り爲ねへで何樣するものか。こりやァ大變になつて來た。」

から、随分過して休むやうに云うて遣りやれ」ト云はれて六内は歡びを演べ、件の肴のそのうへに、二種三種肴を添へ酒をも增して、二階の下なる供部屋へ携へ往き、七助鎌平を呼集め、

六「サア〳〵、今夜は此身が驕りだから呑だ〳〵。」

鎌「ハテナ、常には吝嗇のお若黨さんが、なんと思つてこんな事を爲なさるのだか、こいつは何樣も合點が往かねへ。」

六「啞方めへ、伊勢の松坂から此有馬まで履いて來た一足の草鞋を、又歸りにも履かうと思つて取つて置くやうな此身が、手前達に酒を振舞つてつまるものか。是は旦那が斯う〳〵被仰て、此地の名殘に呑めと被下た酒ヨ。」

七「おいらも大方そんな事だらうと思つた。」

六「イヤ、夫にもまだ譯のある事だが、是は放心は言はれねへ。」

鎌「譯とは何だか言つて聞かせなせへな。」

六「何樣してめつたな事を言ふと、此身のしくじり道具だから、まア何にしろ呑むとするが宜い」ト是より三個車座にて盃の遣取りするうち、鎌平が件の譯を只管に聞きたがれば、六内は今ははやほろ醉機嫌になりし事故、「ハテうるさく聞きたがるぢやァねへか。併し貴樣にしろ

も云ふやうだと困つたノウ」

つや「何樣致しまして、貴公の事を咄しますと、ころ〳〵してどんなに歡ぶか知れませんョ」

主「然う聞いては安心だが、其處で今云つた今夜の事を欺しちやァいけないぜ」

つや「貴公こそ忘れてお睡つてお仕舞ひなさると聞きませんョ」

主「何樣して寐られるものかな。眼を丸くして待つて居るぜ」

つや「ホヽヽ左樣ならば後ほど」ト辭殘して出でて往く。此とき主水が若黨の六內と云へる者、何心なく二階に來るに、常に替りて女の聲の、一間の內に聞ゆるにぞ、合點ゆかずと訝しみ、小陰に隱れて最前よりの二個が咄を洩聞きつゝ、お艶が出て行く跡より倶に二階を下りんとせしとき、主水が何やら手を打つて六內々々と呼ぶ聲に、何くはぬ顏付にてその儘一間に赴けば、

主「イヤナニ六內、其方を呼んだのも他ではない。知りやる通り五十日のお暇の日數も最う纔に成つたのに、此身の病氣も全快に及んだやうだから、近々此地を發足して、松坂へ歸らうと思ふから、此地の餞別心でコレ見やれ、常には用ひぬ酒ながら、女子どもに云付けて二三盃呑んで見たが、呑めぬ酒は何時でも呑めぬもので、此通り酩酊致した。是を其方等に遣すから、此うへに何ぞ口に合つた肴を取添へて、草履取の七助、鎗持の鎌平にも心祝の積で、今宵はゆるす

を爲ても宜からうの」
つや「ホヽヽ、夫でも貴公そんな事が」
主「ハテサ、互に斯う約束をして見れば、浮氣や色戀ぢやァなし、誰が何とまうすものか。エ、コレサ、そんなに其方を向いて恥しさうな顏ばかり爲て居ては、咄がならないはな」ト云ひつゝつゝと引寄せられ、
つや「アヽレ、誰か」
主「エ」ト愕りして飛退きながら、「誰ぞ來たのか」
つや「ナニネ、萬一人が來でもすると惡うございますからサ」
主「ナンノ誰がこの二階へ來る奴があるものか。併しあんまり長咄を爲て居て、供の者にをかしくでも思はれるとならないから、そんなら斯うして吳んな、いよ〳〵和女が得心なら、一遍這處を歸つて、今夜四時の鐘の鳴る時分に、下の者の氣の附かないやうに忍んで來てくれないか。其時言ひ殘した咄もあるから、ゆつくりと爲やうはな」
つや「そんなら今仰被た事を母にまうしても宜しうございますかへ」
主「アヽ宜い段ではないから、とつくりと相談を極めて來るがいゝ。夫とも老母が不承知で

主「いかさま、和女の物堅いといふ事も親孝行といふ噂も、湯女の噺で聞いては居たが、夫程までとは思はなんだに、寔に見あげた心意氣だ。そんなら此身のやうな者でも生涯見捨てまいと言へば、女房になるぞんじよりか」

つや「夫は最う萬に一ツも然ういふ事になりますと、どんなにか嬉しうございますけれども、夫は迚も及びもない事だとあきらめて居りますョ」

主「イヤ和女さへ得心ならば、まだ定つた妻とてもない事故、國許へ母子倶呼び取ッて、母をも安樂に暮させやうが、何樣だやつぱり不承知か」

つや「アノ、そりやァ眞正でございますかへ」

主「ハテ疑深い者だ。此身も斯う見えても勢州松坂の家來牛尾田主水とまうして、三百石を頂戴致す者、嘘僞なぞを言つてなるものか。承知とあれば國許の同家中を頼み、假親をこしらへて、直に女房の弘めをするはな」

つや「眞正に然うだと、身も命も入らない樣になりますがネ、あんまり結構過ぎて何だか夢の樣な心持が爲ますョ」

主「なか〱夢なんぞにしてなるものか。夫でいよ〱得心なら、今夜から女房になる稽古

が宜いはな。其上で成程道理だと思つたら、無理な事も言ふまいからの。コレサ何も恥しい事はない、さア〳〵分解やうに言つて聞かせな。」

つや「そんなら申しますがネ、お腹をお立ち被成ちやア否でございますヨ。」

主「ナニサ、夫しきの事で腹なんぞを立てるやうな此身でもないノサ。」

つや「アノウ、眞正は私も恥しい事でございますが、先刻お前さんにちらりとお目に懸つた時から、及ばない事とは思ひながら、あんなお方に一生連添つたら、女に生れた甲斐が有つて、嘸嬉しからうと思つて居ります所へ、そんな優しい事まで被仰て下さるのでございますから、心は飛立つやうでございますのを、ぢつと辛抱して居ますのも、何をお隠しまうしませう、私にはたつた一個の母がございまして、何卒末始終母を大切にしてくれるやうな男があるなら、親子の身を任せたい。夫も妾側女では末が覺束ないから、假令先は貧窮でも、心立のよい人で、眞正の女房にしてくれる人で無ければ、母が安心するやうな事には往きませんから、何卒然ういふ人をと尋ねて居ります。その替りには私の身もつゝしんで、浮氣な事は爲ますまいと、心に錠をおろして居りますから、不便な者と思召して、御堪忍なすつて下さいましョ」トいふに主水は感じ入り、

なるまいかの」ト言へどもお艶はさし俯向くのみ、囘答なければさし寄つて、「是はしたり何樣致したものだ。其樣に无口て居ッては譯がわからぬ。武士たる者が耻を捨ててこのやうにまうすのは、よく〳〵な事だと推量して、何卒得心をしてくれまいか」ト言はれてやう〳〵顏をあげ、

つや「私の樣なたらはない者を、御酒の上の御戲言にも爲ろ、今のやうに被仰て下さいますのは、寔に嬉しうございますけれども、何樣も此事ばかりは御挨拶がなりかねますから、御免なすつて下さいまし。」

主「フウ、夫ぢやァ何處ぞに深く言交した男でもあつて、他の男には肌が許されないとでも言ふやうな事かの。」

つや「イヽエ、最うそんな事は夢さらありは致しませんョ。」

主「夫がなくば何も仔細はありさうもない物だが、夫ともこんな田舍侍は否だとでも思ふのか。」

つや「アレモウ、そんな勿體ない事をぞんじますものか。」

主「何樣もさつぱり譯がわからない。何故また挨拶が出來ないのだか、夫を咄して聞かせる

いろは文庫　卷之二十七

第五十三回

後は二個が差向の、須臾辭も途切れつゝ、主水が才智の勝れしも、かゝる事には疎ければ、何と言ひ出し宜からうかと、手持無沙汰に見えけるが、思ひ切ッて側へより、

主「アノウ、和女の名はたしかお艶と言ふさうだの」ト初心らしく問ひかくれば、

つや「ハイ」ト莞爾笑うたばかり、付端がなければ又姑くして、

主「そして年は何歳だエ。」

つや「ハイ、十八でございます。」

主「なる程此身も其位であらうと思つた。夫は然うと最う一ッ呑むから酌いでくりやれ。」

つや「ハイ」ト言ひながら酌ぎにかゝるその手をしつかり握りしむれば、「アレモウ御戯事を被成ては宜けませんョ。」

主「イヤ〳〵決して戯れに致すのではない。大眞實だが、何と今宵は這處へ泊つてくれる事は

坐に身に添はず、まだ盃も取らざる先より、醉へるが如き心地して、お艶の顏をうち守り、頻に獨りうち笑むのみ、果敢々々敷は物さへ言はぬを、湯女がひたすら執持て、輕口なンど言ひちらし、酒をすゝめて座をもつ程に、主水も最早ほろ醉機嫌、よきしほなりと思ふにぞ、湯女は程よく座を立つて、きてん利かして外し往く。此場の首尾は奈何ならん、次の卷を見て知らん。

湯「ナニ他に呼ばれたお座敷さへなければ、直でもよろしうございますから、那孃に鳥渡聞いて參りませう。」

主「夫ぢやァ萬事賴むから、倘も處女の方にさし合がなくば、酒肴の準備をも宜いやうに言付けて呉んなヨ。併し此ことが供の者の耳へ入つてはならないから、那奴等の知らないやうにこつそりとして貰ひたいものだ。」

湯「そりやァお氣遣には及びません。幸貴公のお座敷はお二階、お供の方は下でございますから、其處は何樣にも知れないやうに致されます。夫ぢやァまァ那孃の樣子を聞いて參りませう」ト言ひつゝ湯女は急ぎ往くにぞ、主水は坐に心嬉しく、其身の座敷に赴きて、返事奈何と待つ程に、姑くあつて件の湯女は、酒肴を携へつゝ主水の座敷に入り來り、首尾よく娘をいひこしらへ、伴ひ來りしよしを報知れば、娘も續いて一間に來り、辭ずくなに挨拶も最うい〳〵しく見えけるが、此處女の名をお艶とて、正の年は廿歲のうへを二ッか三ッか越えたるなれども、愛敬深き生れなるに、その粧裝の未通風なれば、誰が目に見ても十七八と思はざる者はなく、最前ちらりと見し時さへ、心の動くばかりなるを、今また側へ引きつけて、親しくこれを見し事ゆゑ、其美麗さも十倍にて、年に似合はず物堅いと評判うけし主水なれども、戀は思案の他なるにや、魂

主「なる程然う聞いては至極六ヶ敷さうだが、物堅い娘と聞いては猶もつて好もしいやうだ。何卒骨折代は隨分多分に遣はさうが、其處を枉げて得心をさせる事はなるまいかの」ト言はれて須臾うち案じ、

湯「夫ぢやァ貴君、斯うなさいましな。迚も私等がまうしては得心する事ではございませんから、まァ何となく御酒のお相手にお呼びなすつて、其上で直付で被仰つて御覽じましな。其處は女でございますから、男の口から言ひ出されちやァ、すげなく否とも言はれませんものサ。殊には那孃が今這處を通りながら、貴君のお顏をぢつと見て、莞爾笑つて往つたやうすは、何樣か貴公に心でもありは爲ないかと見えるやうに思はれますから、思ひの外の譯になるかも知れませんヨ。」

主「ナニサ、そんな事もあるまいけれども、折角心をかけた處女の事だから、そんなら和女の辭について、假令こゝろに從はぬまでも、せめて酒の相手でもさせて見やうヨ」

湯「まァ然うなすつたうへでの事になさいまし。その時は私が宜いやうに御座敷を持ちますから、まァ何にしろ那孃を呼んで御覽じるとなさいましョ」

主「そんならば先夫と究めやうが、今日直にといふ事には往くまいノ」

す。」

主「ハテな、何にしても美麗しい者だノウ。」

湯「左様でございます。寔に愛敬のある、そして氣の優しい孃でございますョ。」

主「ヤ、夫に就て些内々にて和女に賴みたい事があるが、何樣だらうの。」

湯「アノ私にお賴とは、夫はまた何のお賴が。」

主「サア、然う改まつて言はれては申しにくい譯だが、實は今の處女の事だがの。」

湯「へ丶エ、夫ぢやァ旦那も那娘に。」

主「イヤサ、自己も生れてから此樣な事を口外するのは初めてだが、旅の耻はかき捨てとやら、今聞けば折々は酒の相手にも呼ばれて出るといふ譯なら、隨分咄しの組ないでもあるまい。何卒和女のはたらきで、執持ては呉れまいか。」

湯「夫は最う何よりお安い事でございますと申したい所だが、何樣いふ譯か那娘はあゝ見えてもとんだ堅藏で、是までお客がお目をお附けなすつて、やれこれと被仰いましても、御座敷ばかりは勤めましても、とんと其方は得心を爲兼ねるので、中へ這入つて困る事が幾度もございますョ。」

湯女と唱へ、年まだ若きを小湯女といひて、湯に入る客の世話をもしつ、酒の相手に呼れもして、旅寐の伽をなせる事、那道中の旅籠屋なる飯盛妓とかいふ者に似たり。閑話は休題て、牛尾田主水は去る頃より、五廻り餘の日數をば、這處にて湯治せし程に、實に名湯の驗はありけん、病全く瘥りしかば、近きに故郷へ歸らんと心構をなしつゝも、此日もまた例の如く湯場にいたりて浴しつ、濡れたる體を拭ひをはりて、浴衣を着んとする折しも、勝手の方より庭傳ひに那方の座敷へ行かんとて、通りかゝりし一個の弱女、年紀は十七八にや、素顏ながらに色白く、眼元で男を殺すまでに、ぱつちりとして最涼しく、鼻筋通りて口元やさしく、翻るゝばかりの愛敬なるが、主水と顏を見合せて、莞爾笑うて行過ぎたる、婀娜めく姿を見るよりも、遉の主水も心動きて、跡見送りつゝ居たりしが、餘りの事に思ひかねてや、傍に居たる湯女に對ひ、

主「コウ、おつなことを聞くやうだが、今通つた那娘は是までつひぞ見かけないが、身形の樣子では客とも見えず、ありやァ一體何處の處女だの」

湯「ハイ、あの孃は近所の娘でございますが、內がひどく貧乏だのに、たつた獨りの老母に大そう孝行でございますから、宿で閙しい時には、手傳に呼んで使つて遣りますがネ、那孃は淨瑠璃がとんだ美聲で、時々はお客の御座敷へ呼ばれて、御祝儀なんぞを戴くさうでございま

第五十二回

偖説く、牛尾田政之丞は鹽谷家譜代の家來にあらず。奈何なる故にて此家に仕へたるぞと諮るに、政之丞が父主水といへるは、伊勢の國松坂の城主古田何某殿の家臣にて、高三百石を賜りつゝ馬廻りを勤めしが、今年廿二三歳、その容貌の美麗しきこと女子にしても見まほしきまで、最優姿なる生れなるに、心はさながら柔弱ならず、文武兩道に丹練なる中にも、別けて劍道は神免二刀流の奥義を極め、當時古田の家中にて主水に竝ぶ者なしと、其頃噂せられしとぞ。然るに主水は病に侵され、しばらく出仕もせざりしが、或人の勸むるには、貴殿の如き病症には、醫者の藥を呑まんより、這處より左のみ遠くもあらねば、有馬に至りて湯治をなさば、全快疑あるまじと、云はれし辭を道理と思へば、軈て主君へ願書を出して五十日の暇を乞受け、素より忍の旅なれども、三百石の身分なれば、若黨鎗持草履取の三人を召連れて、彌生の下旬に伊勢の國松坂を發足なし、日ならず津の國有馬に到りて、家名を藤屋と呼れたる湯宿に姑く逗留なし、專ら療養したりける。什麼々々有馬の溫泉は、日本第一の名湯にて、その賑ひも大かたならず、湯宿に夥の女を置きて、是をば湯女と名付けたるが、夫が中にも差別ありて、年長たるを大

綾は清左衞門に嫁してより、女の道を守るのみ、武道の事は口へも出さねば、鹽谷家へ抱へられては、いよ〳〵深く隱せし故、誰あつてお綾の手練を知る者更になかりしが、清左衞門が義士侶倶に吾妻へ下るその以前、夫婦別れに及ぶとき、

　しら梅や雪のなかにも花の意地　　綾女

ト書きて送りしにて、夫の所存を夫ぞとは、たしかに見抜しものと見えたり。後に由良之助も此句を聞きて、適の賢女かなと同盟の義士の中にて語り出して譽られしとぞ。其後お綾は親里なる淺田が家に立歸り、夫が本意を遂げしうへ、切腹なせしと聞くよりも、綠の髮を切捨て、菩提の道に入りけるが、其時お綾に一子あり、その名を瀨平と呼びつゝも、僅に五歲なりけるを、佐佐木家へ召出され、大星の家名を立てられしより、今猶近江に清左衞門が子孫は榮えてありとなん。

編者云く、尙此外にも清左衞門が別傳ありといへども、世俗の宜く知る所ゆゑ、夫等は總て爰に洩しつ。是より後の物語は牛尾田政之丞が父牛尾田主水が實傳より、政之丞が鹽谷家に仕ゆるの美談を綴りし、最花やかなる一段と知るべし。

により、夫とはなしに淸左衞門を供の中に加へられ、軈て鎌倉へ召連れられ、御地において加增をも申しつけべく思はれしに、不思議の事より淸左衞門を鹽谷家に懇望せられ、佐々木殿にも最惜き家來とは思はれしかども、鹽谷とは一方ならぬ交深き佐々木家なるに、殊更判官直直に殿中においての賴みゆゑ、佐々木殿にも辭みがたく、終に鹽谷家へ送られしとなり。此大星が鹽谷に懇望せらるゝ仔細といふは、或とき佐々木殿の仰を受け、鹽谷家へ使者に行きしが、折から判官對面ありて、其口上を聞かんとあるに、奈何にやなしけん淸左衞門は、さし俯向きて言葉を出さず。倘病氣にても起りしかと、近習を以て問はせらるゝに、淸左衞門は頭をあげ、申上ぐべき御口上を全く失念仕れば、恐ながら御次にて思案のうへにて申しあげたし。須臾の御猶豫願上ぐると、いふを判官聞召して、ゆる〳〵思案致すべしとて座を立たせ給ふにぞ、淸左衞門は姑く考へ、やう〳〵思ひ出せしかば、再び判官の目通りを願ひ、口上の首尾つまびらかに辯舌よどまず申上ぐれば、判官深く感じ給ひ、並々の者ならば、忘れし事をもおし隱し、當座の首尾を合すべきに、尠僞り飾る事なく實體なる致しかた、麁忽には見ゆれども、用に立つべき者とあつて、扨懇望はせられしとぞ。是によつて淸左衞門は判官の恩義を忘れず、討入の夜に至りては、衆人に先立ちて比類なきはたらきせしは、遉は判官の目利なりけり。恁てまた女房お

梅が香の
奥ふかくある

田の女兒にて、夫の心底を深く感じ、其身の衣類櫛簪まで賣代なして、道具屋へ茶碗の價を償ひしは、又珍しき賢女なりけり。恁て此事誰いふとなく一家中の評判となり、太守佐々木殿の聞に達せしに、此君暗君ならんには、我好道を誹謗せしなど立腹もあるべきを、素より仁義の君子なるゆゑ、横手を打つて感じ給ひ、我が茶を好むはつれづれを慰めんとの所爲なるを、家中一統是を見習ひ、武道の衰とならんとは、心もつかで居たりしが、後悔これに過ぐる事なし。既に古人の教戒にも、上仁を好むときは下かならず仁を好み、上暴を好むときは下また暴を好むとあるを、忘れたるにはあらねども、坐に茶道に心を寄せしは、君たる者の所爲にあらず。家中の者の過は、我一人の過にて、他家の批判に預るべきを、幸にして淸左衞門が價貴き茶碗を打割り、家中の者に武道を勵し、我に諷諫なしたる事、適れの忠臣なりとて、是より茶道を止め給ひ、武道に心を入れ給へば、家中の者も自から、茶の湯をしては何とやら上の聞えも宜からず思ひ、はじめ大星を嘲弄なしたる靑侍等にいたるまで、竹刀をかつぎて稽古場へ立入るやうになりしかば、夫と聞くより淸左衞門は歡ぶ事限りなく、言ひ甲斐ありと思ひしが、此とき大守も大星に加增をも申しつけたく思はれぬにはあらねども、斯くては家中のその内にて、猜む輩もあらんかと、夫等の事をも介意し給ひ、須臾は其沙汰なかりしが、次の年佐々木殿には鎌倉參勤ある

時に、茶の湯が役に立ちますか。此茶碗とてもたかが土くれ、よしや鐵扇で打たずとも、過つて物に打當て碎くるときは此通り。斯る無益の器を買はんと、先祖重代の鎧まで手放さるゝことは沙汰の限り、本氣な事とは思はれませぬ。尤茶道は東山殿義政深く好ませ給うてより、世間に專ら行はるれば、致さるゝなといふではなけれど、まだ壯年の御自分方、腰に兩刀をたばさみながら、家業の武術は餘所にして、無益の所爲に日を費し、無益の器に財を費す。拙者が眼から見るときは、寔にもつて歎はしい。この土くれを求める價で、武器のひとつも買はるゝか、茶の湯に心を入れる丈、武道に出精致されたら、まさかの時の御用にたち、御家のお爲であらうものを、よしない事が流行致し、箇樣な品を道具屋などが持つてまゐる。夫故に當家の武器が他家へ渡り、是等の取沙汰ある時は、下の恥辱は上の御恥辱、其處に心が付かぬと見えて、達て目利を爲ろとある故、茶碗を割つて善惡の、目利を致してお聞せまうす。茶碗の價は某が道具屋方へ辨へますれば、此先ともに拙者が前で、茶道のお話御無用」トしつぺがへしに言ひ込められ、靑侍等は一句も出ず、赤面しつゝこそ〳〵と、一個たち二個立ち、咸その座をぞ迯げさりける。斯りし程に淸左衞門は、其日の當番果つるとその儘我家に立歸りしが、七十兩といふ金を貯へ持つべき身ならねば、餘儀なく妻に仔細を語るに、泣々の女なら呆れもすべき筈なるを、逭は淺

た。夫ではいよ〳〵茶の道は、何れも方の仰の通り、御存じないと見えますな。假令茶道は御不案内でも、是程までにお尋ね申すを、御返答のないは奈何な事。サア御目利をなさるとも、夫が出來ずば出來ないと、我等が前に手を下げて、御閉口をなさるが宜い。その替りには以來とも、自己は諸藝に達して居ると、大きな面をさつしやるなアハヽヽ」ト高笑ひ。淸左衞門はこのときまでも手をこまぬきて居たりしが、急度思案の腹を居ゑ、

淸「再三辭退を致しても、たつてとあれば是非がござらぬ。然らば目利をして見せう」ト言ひつゝ茶碗を引寄せて、携へ來りし鐵扇にて、忽地はつしとうちくだけば、微塵になつて飛散るにぞ、青侍は仰天なし、呆れて辭も出でざりしが、餘りの事に堪へかねて、以前の一個が膝すり寄せ、

×「コレ大星氏、淸左衞門どの、大枚七十兩といふ此茶碗を、粉小微塵に打割られたは、本氣の沙汰とは思はれぬ。狂氣でもめされたか、血迷はしつたが大星どの」ト顏うち守れば冷笑ひ、

淸「イヤ、拙者よりおの〳〵方が氣が違つてござると見える。ハテ何故と言はッしやい、足利殿の武德によつて、斯く太平には治まれども、まだ血腥い今の世の中、なか〳〵武術は廢てられませぬ。治に居て亂を忘れずと、古人の語もあるものを、倘萬一の事あつて、すは出陣といふ

いろは文庫　卷之二十六

第五十一回

復説件の青侍等は、言はるゝまゝに淸左衛門がおし無口て控へ居るを、臆面したりと思ふにぞ、猶もいよ〳〵圖に乘りて、種々嘲弄爲たりしが、中にひとりが進みいで、

×「是はしたりおの〳〵方、その樣に被仰るけれども、諸道に達した大星氏、是しきのお目利ぐらゐが出來ない事は決してない筈。イヤナニ淸左衛門さん、貴公があんまりお卑下しなさり過ぎるから、何れも方がつひまアあんなことをも仰せらるゝやうなものゝ、是といふが常々お心安い御朋輩の中と申すものサ。夫だからそこ許も、御遠慮なさるには及ばない。實はさる道具屋が持ッて參ッた此茶碗、至極心に愜ひましたから、重代の鎧を質入致しても、求めて置きたいと存じますが、何をいふにも高金の品ゆゑ、直段丈の品であらうかと、其處をあやぶんで皆さんに御相談を致して居りやすが、何卒卑下なさらないで、お目一杯の處を被仰つて下さるまいか。エ、コレサ、是は何樣だ、人にばかり物を言はせ、貴公は啞でもござるまい。ハヽア聞え

うからお聞きなせへ。是は高麗燒で暦手といひやすが、是で代金七十兩サ。何と肝が潰れた物だらうネ。そこ許の目から御覽じたら、五郎八茶碗も同樣に思はれるであらう。ハテサテ笑止千萬な。何れも方御覽なせへ、斯ういふ咄になつては、流石の大星先生も御返答が出來ぬと見えて、指をくはへてお在なさる。アハヽヽヽ〳〵。」

●「いかさま武道の事では宜く口をお利きなさるが、箇樣な器になると一向お目が見えぬとは、德利同樣な譯だネ。」

▲「なる程口ばがりで目がないから、其處で德利か、是は宜く出來やした。德利ならまア貧乏德利の方だらう。イヨ〳〵德利先生アハヽヽ〳〵」ト寄つてたかつて嘲弄なす、這段いまだながけれども、丁員爰に盡きたれば、この一條のをさまりは、次の卷に委しく說くべし。

ざいませう。其處で此茶碗のお目利を願ひたいと申す譯サ」ト以前の茶碗をつきつけられ、清左衞門は呆れはてしが、然あらぬ體にてうち笑ひ、

清「是はまた何かとぞんじたら、茶碗の目利でございますか。私ことは生れついて箇樣な事は大不案内、此儀は何分御用捨を。」

▲「へヽエ、夫では大星さんは茶の方は一向御心得がないと被仰るのかネ。そりやァ噓だらう。あんな美しい御内方をお迎へなさるやうな風流第一のそこ許が、御存じなからう筈がない。何卒御面倒でも鳥渡御鑑定を願ひやす。」

清「イエ、實もつて存じません。募つて仰下さると、甚だ迷惑いたします。」

▲「ハヽア、夫ぢやァ實正に御心得のないのかネ。イヤハヤ是は呆れたものだ。當時殿さまにも御好み遊ばす茶の湯で見れば、倘も御前へ召されたとき、お茶を下さらうとあるまい物でもない。然ういふ時節に茶の呑みやうも御そんじなかつたら、夫こそ大きな恥かき道具。トサ斯う言ッたらお氣に當るか知らないが、朋友のよしみだからお咄し申す。是から些と我々方へお出でなせへ、薄茶の呑みやうでも敎へて進ぜう。併し茶の湯をするにはなか〳〵物の入る譯だが、失禮ながらそこ許のやうに御内困では六ケ敷からう。先差當り此茶碗から御傳授を致さ

清「これは御挨拶忝うぞんじます。」

×「へヽエ、夫では好山氏はまだ清左衛門さんの御内室に御知己におなんなさらねへのかネ、是はまた何様したものだ。先當御家中で一と言つて二と下らない御容貌サ。殊に鎗先の高名ではないが、木刀の先のお手柄で、お貰ひなすつたのだから、又格別な譯さ。ネエ清左衛門さん」トなぶりかゝれど大星は、只莞爾と笑ふばかり、更に言話に取合はねば、「ヤこれは拙者のまうし過り、御氣に障つたら御勘辨下さい。夫は然うと宇治右衛門さん、先刻の品を大星先生にお目利を願つたら何様だらうネ」ト眼で知らすればうち點頭、

▲「なる程此目利は清左衛門さんなら間違はありやすめへ、何卒大星さん、一寸折紙をつけて下さることはなりやすめへかネ。」

清「目利とまうしては及びもないことでございますが、武器は素より好むところ、さうして私に見ろと被仰るのは何か刀劍の。」

×「ハテそこ許も野暮な事を仰せらるゝものだ。當時殿をはじめとして、家中一統茶の湯が流行するに就ては、今の世に入用のない武器なぞは賣代なしても、高金の茶器を求めたい時節、お手前さまは諸道に達してお在なさるやうに承つたから、定めて茶道のこともお心得があるでご

何でも女一通の藝道なら、出來ねへ事はないと言ふ噂だが、何にしても大星には過ぎた女房サ。是程流行る茶の湯全體清左衛門といふ男が、若い者のやうではない、無句附合を知らねへ者サ。をば、見向いて見やうともせず、役にも立たねへ劍術なんぞに、五色の汗をたらして苦しむとは、あんまり智惠のねへ事サネ。實は日外婚禮の晩に、些といたづらでも爲てやらうかと、近所で相談をした事もありやしたけれども、那いふ無法者だから、どんなことを爲やうも知れないと思つて、まア見合せて置きやしたが、何ぞ事があつたら、早晩ぞは恥をかゝせて遣らうとかんがへて居りやす〳〵サ。」

●「イヤ夫には丁度宜い事がありやす。今日は大星が當番日だから、軈て出勤をするでございませう。其とき今の茶碗を出して目利をさせて見やせう。那通りの武骨者だから、是には當惑するでございませう。其尾についてなぶつて遣るは何樣でございますネ。」

×「これは一入思召つき、宜いなぐさみでございませう。アレ〳〵噂をすれば影とやら、清印が出勤爲たと見えて、咳拂の聲が聞えやすゼ」ト咄なかばへ清左衛門が、何心なく廣間にいたり、皆夫々に挨拶をはれば、

●「イヤトキニ大星さん、此間は御新婦をお迎への御樣子、まだお歡びにも出ましなんだ。」

●「なる程それは被仰る通りサ。私なぞも金子さへ手まはらば、假令七十金でも欲しくない事はないサネ。」

×「ナニ好山さんなんぞは、御親父の代からなさるお茶だから、今新にお求めなさらないでも、結構なお茶器が澤山にありやすノサ。此節でもやつぱり三八にお釜日をなさるのかネ。」

●「イエ、親共が亡なつてのち、引續いて妻が產をいたし、彼是の取込で、宅の釜日は先見合せて居りやす。」

×「いかさま、そんなお咄も承つたやうでございました。イヤその妻で思ひ出しやしたが、那淸左衞門はとんだ女房を貰ひやしたネ。」

▲「左樣〳〵。六年辛抱をして貰ッたとは根氣の宜い男サ。」

●「併し淺田の女兒といつちやア、隨分這頭までも評判の聞えたものだが、あんな男を亭主にするとは、這女も餘程茶人の方かネ。」

×「ナニ茶人なら咄せるが、美しい顏をして、氣の利かねへ武藝なんぞをやらかすとは、野暮飛切といふ婦人と見えやす。」

▲「何樣して、そりやァ大違のお咄サ。那見えても琴三絃は言ふに及ばず、踊下方香茶の湯、

▲「然うして此品は御所持のでございますか、又は賣物とでも言ふやうな」

×「左樣でございます、然る道具屋が先日持つて來て見せやしたから、先置せて見ましたが、頃合の茶碗で欲しくないでもございませんノサ。」

●「何樣致して餘程出來が面白い。そのうへ時代もあるやうだし、道具屋が持つて參つたら、五十金では離さうとは申しますまいネ。」

×「ヤ是は駭いた御鑑定。私もその位な直段なら、當時不用の品だから、具足を質入致しても、取つて置きたいとぞんじて居りますが、些夫よりも上りますから、先考へて居るところサ。」

●「ハヽア、そしてどの位と申しやすネ。」

×「一向に引かない處で七十兩といふのでございます。」

●「なる程その位な直うちはないでもございませんが、五十金を越しては些と御勘辨物かネ。」

▲「併し此位の茶碗を持つて居れば、客をしても隨分恥しくないネ。」

×「然ればサ、當時此通り流行で、誰しも宜い道具を欲しがつて尋ねて居るところでございますから、私が手に入れかけた茶碗を買ひおくれて、他にでも買はれると殘念にもぞんじますから、其處で各方へも御相談を致して見たものサ。」

い樂サネ」

×「宇治右衞門先生のお手前は、吃茶亭で花月のあつたとき拜見を爲たまんまだと思ひやすが、何樣でございます、一席宅で催しやせうかネ」

●「それは何卒お招きに預りたいものでございます。茶を致すと、兎角道具屋めいた事が申したくなる物でございますが、何ぞ珍しい御道具がお手にでも入りやしたかネ」

×「イヤ、夫に就ておの〱方へ、些御鑑定を願ひたい品があつて、實は是まで持參いたしましたが、御覽下さいませうかネ」

●「鑑定とあつては恐入りやすが、夫は何だか拜見を願ひたいものでございます」トいふうち、唐更紗の風呂敷に包みし箱入の茶碗を取出し、

×「モシ、此品でございますが、箱書付の樣子と申し、隨分出來た茶碗のやうに思はれやすが、何樣でございませう」ト此うち這方の兩人は茶碗を取つて打ながめ、

▲「ハヽア高麗の暦手でございますネ」

●「内外の藥の味合、何樣も言へやせん。殊に石州殿の箱書、是はなか〱御道具でございます」

さんは、嫉ましき事限りなく、その婚姻の夜に臨み、樽入なさんと云ふもあり、又は石打爲て吳れんと、さゝやき合ふもありしかども、お綾は名におふ武術の達人、夫を打伏せ妻となしたる淸左衞門が手練の程もなかなかもつて料りがたきを、なまなかなる事爲出して、倘も手ひどき目に合はゞ、藪を叩いて蛇を出すの譬に洩れぬ事もやあらんと、思ひ直しつ其儘に阿容々々として止みにける。是によつて淸左衞門は首尾よくお綾と婚姻整ひ、夫婦の和合も最睦じく、幾千代までもと契るなるべし。

第五十回

慤て月日を經るほどに、當屋形佐々木殿は專ら茶道を好み給ひて、あらゆる茶器を集め給へば、上を學ぶは下の傚ひ、一家中の若侍まで、皆此道に心を入れて、今日は口切翌日は爐開き、這處の會席彼處の返茶と、只管流行したりしが、或時廣間に詰合せし侍どもが三四人、

▲「トキニ各方は、相替らず御出精と承りやしたが、嘸御上達でございませう。　好山氏はたしか此程眞の臺子までお濟み被成たと申す事だネ」

●「ナニ私なぞのはほんの茶をかきまはして吞むとまうすまでサ。　併し閑暇の節には隨分宜

藤「夫に就ても某が最前よりの爲體を、合點行かずと思しめさんが、他より縁談整ひしなど、事を設けて種々に不禮の言葉を出せしも、猶も貴殿を試さん爲。然るに聊忿の色なく、只武事のみに傾かるゝその御心底を見るのみか、今の試合のお手の内、縱令女兒は打ひしがれて片輪になつても苦しうござらぬ。娘に勝つた聟をとれば、年來の拙者が願望。此上は笹浪氏、以前の麁言は御用捨あつて、おん媒を頼み入る」ト二個が言葉にうち駭く、淸左衞門より志賀藏は、我を忘れて小踊なし、

志「望むところのお媒致さいでなんとせう。拙者も實に此立合に、大星どのが不覺をとらば、生きて再び歸らぬ覺悟、今打勝れたその時には、命をひとつ拾うたやうで、眞實嬉しく思うたに、猶其上におの〳〵方の御心底を承り、此御縁談が整へば、屋形へ歸つて朋輩どもに、某迄が肩身も廣く、是にうへこす歡びなし」ト咄のうちに藤内は、お綾に囁き示すにぞ、豫て準備の酒肴を所挾まで取出し、客も主もうちくつろぎて盃をめぐらしつゝ、猶四方山の物語に、その日も昏に及びしかば、大星笹浪兩人は暇を告げて立歸り、偖吉日を選みつゝ、志賀藏が媒にて、お綾を立派に粧はせ、大星かたへ迎へしかば、始謗りし輩も案に相違の思ひをなせしが、然るにてもお綾事は、近江一國に竝びなき美人と仁の評判せしを、武骨者と呼ばれたる淸左衞門が妻とな

居ゑんとする折しも、

●「ヤレ待給へ大星氏、勝負は見えた」ト言ひつゝも、一間の襖おし明けて立出る其人は、京都において師と頼みし澤路谷之進なるにぞ、うち驚きつゝ木太刀を投げすて、

清「思ひがけなき先生には、何故あつて此家には」ト怪しみ問へば莞爾と笑ひ、

谷「その御不審は御道理、仔細をお咄しまうすべければ、まづ〳〵是へ」ト言ふ程に、清左衛門は座に登れば、お綾も倶に端折をおろし、父の邊に居直るにぞ、「偖大星氏、是までは態と御沙汰を致さなんだが、是に居る藤内は拙者が爲には實の兄、夫故にこそ兩度まで、貴殿とお綾が試合の事も、兄の方より申越し、就ては貴殿の人品骨柄、眞の武士と思はるれば、ならう事なら那ような壻が欲しいと兄の念願、幸 不思議な御縁にて、我等方にて御修行あれば、此よし兄へ申遣し、さて六年の其間貴殿の樣子を見るところ、武術のうへは言ふに及ばず、平日の立振舞まで遖と見受けし故、流義の奥義をお傳へまうせし事の序に、恁々とお綾が事を餘所ながら言出せしは、兼てより兄藤内と示し合せ、おん身を壻に成さんがため。是に仍て某も竊に京都を發足いたし、昨夜此家に到着して貴殿の入來を相待ちしに、今日お綾とお立合のお手の内をば拜見いたし、拙者に於ても祝着いたす。寔に珍重々々」と言へば藤内語を續いで、

藤「扨も〳〵そこ許等は聞分のない人ではある。夫程までに言はるゝからは、ツイ此儘では歸へられまい。彼是の問答に閒どられては迷惑故、益なき事とは存じながら、今一度の立合はお望み通り致させ申さう。早々準備いたされよ」ト言ふに歡ぶ淸左衞門、襷をとつて肩に綾どり、袴の裾をつまばさめば、此間に藤内は女兒に斯と報知たりけん、お綾は身輕に打扮ちて、稍稽古場に立出れば、淸左衞門も續いて下立ち、雙方互に對合うて、侶に一禮をはると其儘、お綾は例の薙刀をとり、大星は又小太刀をとつて、呼吸を合せて立ちあがれば、淸左衞門は前後六年必死となつて修行せしも、只此試合に勝たんがためと、思へば少しも精神亂れず、お綾もまた大星が以前に替りし身の備に、侮りがたしと油斷せず、しばし透間を窺ひつゝ齊しく聲を掛合うて、一上一下と斫結べば、勝負奈何と見物なす、藤内よりは志賀藏は、此一試合に大星が倘や不覺をとりもせば、阿容々々屋形へ立歸り、人に面を向けがたしと、額に青き筋を出し、惣身汗に成るをも覺えず、瞬もせず控れば、這方の二個は祕術を盡し、半時許りも戰へども、いまだ勝負も判かざる程に、淸左衞門は些も撓まず、お綾が焦つて籠む薙刀を、右手にはつしと受流し、透もあらせず打込む太刀は、東軍流にて祕するところの微塵の一手に爭でか堪ゆべき。遉のお綾も請損じ、右の腕をしたゝか打れて、持ちたる薙刀取落し、ひるむを得たりと飛込んで、猶打

もござつて」

藤「イヤナニ然うした譯でもござらぬ。拙者も是まで女兒の爲に、武術に秀でた壻をと思ひ、種々尋ねましたれども、兎に角女兒に勝つ者なく、可惜盛の年頃を過さするのも不便ゆゑ、俄に思案を改めて、娘の心に愜ひなば、武藝は假令未熟でも、壻になさんと思ひさだめ、幸媒するものあつて、今日相談をとゝのへますれば、家内もはなはだ混雜いたす。御免なされ」ト言ひつゝも又立かゝるを志賀藏が、側から見かねて急度詰めかけ、

志「コレ淺田氏、藤内殿、心得がたきその仰せ。最初貴殿の御言葉には、女兒と試合に勝つ者ならずば壻にはせぬと言はれしならずや。然すれば試合に勝つ者ありて壻にされしと言ふ譯なら、道理に取ッて聞えたが、然もなき者と緣談のある程ならば這方は先口、大星氏の聞かるる手前、媒爲かけた拙者が濟まぬ。武士の言話は金鐵同然。申しかゝつた御息女なれば、刀に掛けても此方へ」トいふを止めて淸左衞門、

淸「笹浪氏のお言葉も御道理には存ずれども、拙者が所存は左樣でござらぬ。御緣邊は兎もかくも、何れへなりとも御勝手次第。望むところは一手の試合、倘此度も打負けなば、御息女のお弟子となり、猶も修行をなしたき了簡、只管最一度立合を」ト身をへりくだりて頼むにぞ、

第四十九回

再說、清左衞門は案に違ひし藤内が取つても付かれぬ返答に、竝々の者ならんには、忽地忿を起すべきを、大器量の大星なれば、更に面の色をも變へず、莞爾と打笑ひ、

清「何さま御老體のお腹立御尤にはぞんじますれど、拙者事も前後六年身命をなげうつて劍術修行致したも、何卒して御息女の今一度御相手に御立合をば願はんため、只今御繁用とならば、御用の濟むまで御稽古所の隅になりとも差控へ、相待ちまするでござりませう。何分平に今一度」トいふに藤内頭をうち掉り、

藤「ハテサテ貴殿も聞分のない。迚も試合はむだでござる。其うへに女兒事は然方に緣談整ひ、夫ゆゑの大取込、氣の毒ながら斷り申す」ト言ひかけて座を立たんとするを、須臾とばかり引止め、

清「ナニ、御息女には緣談のはや整ひしと被仰るか、左樣ならば御息女に試合に勝つた者で

いろは文庫第九編序

後世忠臣龜鑑となりし、四十七士のうへはしも、何れにおろかはなきものから、尚今の世の絆あるとき、自餘の四十六士は得る共、一個良雄は得がたからん、と某侯の宣はせしは、現に君たるの見識にて、良雄の前に良雄なく、良雄の後に良雄なからん。然れば大星が傳に於ては、諸書にも載せ及口碑につたへて、俗多くは是を知れり。自餘の義黨に至りては、耳新しき傳はあれど、世にもて專とせざるもあり。僕這書を綴るのはじめ、史傳によりて見たる事、故老の話説に聞きたる事、洩らさず書記し置きつるなかには、最哀れなる譚もあり、拳を握り齒を切嚙り、遺憾に堪へざる條もあり、或は奇說怪談あるを、开をしも這に演べんとするに、才鈍ければ如意ならで、艶なき筆頭のくだ〳〵しきは、尚高免を被らんのみ。

東都戲作者　爲永春水誌

是より後、大星が淺田藤內を說和げて三度の試合に及ぶことより、人の及ばぬ淸左衞門が心の活達なる事の、世にまだ專ら聞えざる傳記を甲乙抄錄して、第九編の卷首に出せば、看官愛顧を賜へといふ。

ず、

藤「今日入來の姓名を大星氏とは聞いたれども、是まで二度まで試合に來て、恥面提げて戻られたおん身が、よもや來られんとは夢にも心づかなんだ。笹浪氏さへ同道にて入來の仔細は何故ぞ」ト常に異りし挨拶ぶりに、志賀藏ははや忿氣と爲しを、大星目顔で押し靜め、打笑みながらすゝみ寄り、

淸「いかにも只今仰の通り、御息女との立合に、二度迄不覺を取りし事、全く此身の未熟故と、又三ヶ年修行致せし拳の程を試みたく、再三ながら推參致した。お相手には足らずとも、今一度御息女と、何卒試合を願ひたし」ト言はせもあへず冷笑ひ、

藤「愧といふもの知らざれば、此世に恥はなしとやら。娘が欲しさに二度三度、恥をかいても愧とせず、面おし拭ッて來るやうな白癡な男では、迚も拙者が壻にはなられぬ。又候娘と立合うて、恥の上塗爲やうより、とつとと立つて歸られよ。今日は拙者も繁用にて、お構ひ申す暇がない。扨氣の毒な人かな」トにべなき辭に淸左衞門は、腹の中に思ふやう、三年跡に來しときには、不覺を取りし某に、酒まで出して歡待しに、夫とは打て替りたる今日のそぶりぞ心得ねト、須臾思案にさし俯向き、辭途切れて居たりける。

りましたが、師匠の教訓かた〴〵を、勘辨いたして見ますれば、縦ひ此度勝たずとも、是まで修行を致したのが、此身に取っては得といふもの。併し殿へもお聞きに達し、修行を願つた事であれば、負けたい心はございませんが、世間の人の口なぞと、夫しきの小細な事はお構ひなさるに及ばぬ事サ」

志「イヤ〳〵、其許のやうな物にかまはぬお人は夫でも宜いか知りませんが、人の口には戸が建てられぬと、種々な事を言觸らされると、第一身分にも拘ることが出來やうも知れません。とは云ふものゝ其許の御氣質、止になさいと云ッた處が、止まる御所存はあるまいから、此上は宜うござる、今度貴殿が負と見たなら、お綾が咽へ喰付いてでも、死ぬ氣で拙者もお供致さう」

清「是は又仰山な、夫には決して及ばぬことサ」

志「イエ〳〵、是非とも然う致さねば、拙者も武士が立ちません」ト止めても聞かねば詮方なく、次の日兩人同道にて、又かの淺田が家にいたり、對面したき旨ありとて、二個が名前をまうし入るれば、取次の者立出て、いざ這方へといひッヽも、例の一間へ誘ひしが、待てどくらせど主は出でず。餘りのことに志賀藏は、取次に出し若黨を呼び出しッヽ催促なせば、今姑くとて奥に入り、何やら囁く樣子なりしが、また半時程待せ置きて、漸く主藤內は出來りしのみ、會釋もせ

は居ない覺悟サ」

清「そりや又何故にネ」

志「イヤ何故の釜のぢやァございません。最う斯う成つては艶を云つては居られないから、お氣に障るか知らないが、眞正直なお咄を爲にやァ分解ません。最初私の了簡ぢやァ、貴公樣の御手練なら、淺田の娘を打居ゐて、御内方になさる程のおたしなみはあらうと存じたからお世話もいたしたものゝ、最初の試合はあの通り、夫から三年御修行をなすつて、二度目のときも面白くなく、又三年のお暇で、昨夜お歸んなすつたと云ふものだから、何處へ往ッても其許のお噂ばつかり。夫については御世話をした私の名まで引出されて、宜く云ふ者は一人もありません。爰で一番味くやつておくんなされば、私の顏まで立つといふものだが、貴殿が三年修行をなされば、お綾も三年修行を爲て見ますと、何だか今度も覺束ないやうで、實もつて氣が揉めますから、篤と御思案をなすつた上で、迚も勝てまいと思召すなら、人の口端にかゝらない樣に、止になすつた方が宜からうかと思ひますネ」

清「眞に御親切の御異見、千萬忝うは御座いますが、拙者の所存は些相違いたして居るやうでございます。尤はじめの了簡では、今度娘に打勝たずば、切腹をも致さうと思ひ究めて居

×「其事も元は志賀藏がすゝめたのださうだが、那男も入らんお世話に口を出して、今度の試合に負けでもすれば、大星は素より、志賀藏も人中へ顔向が出來ねへ譯サネエ。」

●「ナニ那云ふ面の皮の厚い手合だから、そんな頓着はあるめへヨ。」

×「頓着は爲めへが溫石の燒けたやうに、眞赤になッて引込むだらうと思ふと、側で見る目が氣の毒だ」ト手前の構にならざる事を、隣の疝氣を頭痛に病む、噂咄もとり〴〵なるを、かの志賀藏は傳へ聞き、胸安からず思ふにぞ、大星方へ走行きて、

志「イヤ大星氏、まづは御健勝で御歸國と承り祝着にぞんじます。是まで永々の御修行嘸かしとお察しまうして居りますが、定めて御上達でございませうな」

清「イヤモウ御存じ通りの不器用者、然のみにもございませんて」

志「これはしたり清左衞門さん、其お辭は他人向、實は私もとんだお世話を爲かけて、今では大きに後悔を爲て居りますが、何でも今度の試合には、是非〳〵勝つておくんなさらないでは成らないが、其お覺悟が失禮ながらございませうかネ」

清「是はまた改つた其仰せ、勝負は時の運とまうせば」

志「ハテ時の運では濟みません。なんでも急度勝つておくんなさらないぢやァ、私も生きて

×「夫ちやァ私より先を越された譯だが、其處で相談が出來たといふ理窟かネ。」
▲「マァ半分は咄が究りやした。」
●「コウ、そりやァ正實のことかへ。」
▲「正實でなくッて嘘を云ふものかネ。」
×「こいつは些と氣の揉る咄だが、そんなら娘は得心したが、親父が承知爲ねへとかいふ譯かネ。」
▲「ナニ然うでもないのサ。」
×「そして咄が半分究ッたとは、何樣半分究ッたのだへ。」
▲「私の方が究ッて先が究らねへから、其處で半分究ッたといふのサ。何と味い咄だらうネ。」
×「何の事だ。夫ちやァやつぱり出來ねへのだァ、面白くもねへハヽヽ。」
●「ハヽヽ此身も大方大詰は其位な落だらうと思つた。」
▲「コウ、そんなに笑ッた物でもねへノサ。マァ此身等ならこんな事を言ッても人が承知も爲てくれるが、あの大星が野暮飛切といふ男の癖に、あんな美貌娘を女房に爲やうと思ひ付いたのが、全體推が強いのだ。」

ばの事だに、三年といふもの修行をして、汗みづくになッて歸ッて來て、また負けたと言ふ事ぢやアねへかネ」

×「然うサ。夫もあゝいふ野呂間だから詮方がねへが、二度も立合ッて負けたら、速く思ひ切つて仕舞へばいゝ事に、又三年追願を出して稽古に往くたア何のことだらう」

●「夫でも自分ぢやア名人になッて來た積だから、何でも歸ッたら淺田の宅へさア往かうといふ氣だらうヨ」

▲「大江山ときて居るの」

みな〳〵「ナゼ〳〵」

▲「ハテ、さいかう往生又負の面サ」

●「頼光保昌渡邊の綱の口合かネ。こりやア些と附會過ぎるぜ」

×「然うはいふものゝ、お綾といふ娘は悖りする程美麗ものだぜ。此身ア劍術の方ぢやアお間だが、男振と口前の宜い處で、ころりと言はせて遣りてへものだが、然う味くは往くめへか知らん」

▲「オット皆まで賜ふな。其處は此身が素敏いから、先刻口を懸けて置きやした」

第四十八回

偖大星は本國へ立歸ると其儘に、歸府のよしを主君をはじめ家老諸士頭へも屆けしかば、家中の者も聞き知りて、何國の浦でも陰言に、我八難は棚へ揚げ、人の七難言ひ觸らすが、總て浮世のならひにや。爰に集る四五人の、中にも一個が聲高に、

▲「トキニ貴公のお隣の桃栗先生は昨夜歸ッたぢやァないか」

×「桃栗先生とは誰の事だネ」

▲「ハテ隣に居て何樣いふものだ。那淸左衛門のことだはな」

×「なる程大星は歸ッた樣子だが、那男が何時桃栗と改名をいたしやしたネ」

▲「ナニ改名は爲ねへけれども、ソレ桃栗三年柿八年といふ事が有るだらう。那男も三年目三年目に歸ッて來ちやァ淺田の娘で恥をかくから、其處で桃栗三年恥かきねんと言ふ處から、桃栗先生と名を付けたが、何樣だ感心だらう」

●「アハヽヽヽとんだ地口が出來やしたネ。併し那桃栗も餘程辛抱の宜い男サネ、いくら女房が貰ひてへと言ッて、女のねへ國ぢやァあるめへし、一度試合に往ッて負けたら、いゝに爲れ

回も不覺を取るならば、其場において切腹なし、御流義に疵を付けたる申譯を仕らん　此義偏に御聞濟」トいふに澤路はうち頷き、

澤「我等も兼て貴殿の出精並々ならずと思ひしゆゑ、倘や淺田が娘なンどと立合にてもせらるゝかと、今の如くに申せしところ、思ふに違はぬ貴殿の心底、最早夫まで御修行あれば、渠と立合ひ給ふとも、見苦敷義はあるまじければ、隨分ともに大切にお試合有つて然るべし、若其上にも彼娘に打負け給ふ事あらば、御切腹は宜しからず。速く我等に報知られよ　拙者近江へ立越えて、渠と勝負を決せしうへ、我さへ渠に及ばずば、師として指南を受くるとも、武道に取ッて恥しからず。かならず短氣を出し給ふな」ト呉々も教戒ッゝ、猶も他流と立合ふ時の心得にもなるべき事など、最細やかに説示し、はや大星の出立も程近しと聞くにより、夫より盃の準備をさせ、心ばかりに餞別の名殘をこゝにをしみける。かくて二三日程すぎて、淸左衞門は師匠をはじめ甲乙の門弟にも、是まで永々世話になりたる挨拶を演べ、暇を告げて、再び京都を立ち去りつゝ、本國近江へ赴くにぞ、此度こそは淺田の娘を只一太刀に爲負かして、六年越の思ひをば、晴さんものをと大星は、心いさめば自ら足もすゝみて程もなく、我屋敷へぞ立歸りぬ。

浪志賀藏と申す者、竊に拙者へすゝむるには、堅田の鄕士藤内といふ人、武道に秀でし男にて娘に薙刀ををしへ込み、試合のうへにて誰にても娘に打勝つ者あらば、其人の妻にせんといへども渠に勝つ者なし。御身もいまだ無妻なれば彼娘に打勝つて、妻になさるゝ心あらば、某媒立なさんといふにぞ、拙者は素より武を好めば、薙刀の一手なりとも知つたる妻を娶らん事は望しき處なり。假令少しの手並ありとも、高の知れたる女の瘦腕、つひ一太刀と心に輕んじ、渠と試合に及びしところ、物の見事に打負けたれば、其よし主人へ願出で、三ヶ年の暇を乞うて先生に隨身なし、心を盡して修行せしゆゑ、自己獨りの了簡にては天晴上達したりと心得、中比故鄕へ歸りし時、淺田が家に赴きて再び仕合に及びし所、初に替らず打負けしかば、又三年の暇を願ひ、今度は命に替へてなりとも、此一流の奧義を究め、是非今一度かの娘と勝負をなさんと思ひつめ、前後六年の修行にて、かの一大事の祕密まで授けられたる欣は何に譬んやうもなし。斯く言へばとて、彼娘の色香に愛て、我妻になしたきとのみ思ふに在らず、主人の耳へも入れたる事故、奈何にも一太刀打たざるうちは、武士の一分立ちがたし。願とまうすは爰のこと、今奧義まで傳授のうへは、然る輕々敷振舞をなすべき譯にはあらねども、思ひ込んだる拙者が念願、何卒件の淺田が娘と今一度試合の義をおん許を蒙りたし。若夫ともに渠に及ばず這

程に上達爲たれど、いまだ免許の沙汰もあらず。又一年の修行を積みて、はや追願の三年も終る比になりたるとき、或日澤路は一間の中へ大星を招き入れ、東軍流にて祕すところの徹塵の位をはじめとして、其他奥義を悉く皆傳なしつゝ扨いふやう、

澤「其許の御手練にては、疾にも是等の傳授をも致すべき筈なれども、貴殿の本國堅田の里には、淺田藤内が娘にて、其名をお綾といへる者薙刀をよくつかひ、凡そ近國に名高く聞えし鎗劒術の達人も渠に勝つ者稀なる由、貴殿も故鄕の事なれば、若かのお綾と試合をして、萬一不覺を取られしとき、谷之進が門弟にて奥義を究めし者なりと、人の口端に懸る時は、貴殿と我等が恥のみならず、流義の名折と思ひし故、是迄態と一流の祕密を授けぬ拙者が心底、嘸訝しく思はれつらんが、偏に流義を重んずる我赤心を察し給へ。今は貴殿の修行も滿ちて、假令鬼神なりとても恐るべきにあらざれば、今日則ち皆傳なす。猶此上にも心を煉つて、那一大事の祕密をば、輕〳〵敷な思はれそ」ト最懇に示されて、淸左衞門は惣身に、おぼえず冷たき汗をかき、恐れ敬ひ居たりしが、姑くあつて頭をもたげ、

淸「段〳〵との御教訓謹で承る。夫に就て一ッの御願。その仔細は他ならず。今先生の仰せありし淺田藤内が娘事、此邊まで名の聞えし、さる名人とは毫知らず、先年拙者が同役にて笹

清「某先年御息女と試合の上にて打負けし事、此身の未熟とぞんぜし故、三ヶ年のその間主人より暇を貰ひ、是まで修行致したれば、今一試合願はんため態々推參いたせし」トいふにぞ、藤内は異義もなく、お綾に斯くと言ひ聞かせて、再び勝負に及びし所、三年跡に立合ひしより、お綾の手の內いよ〳〵するどく、這回も十合にいたらずして、初の如く打負けしかば、淸左衞門は呆れはて、我三年の其間、寐る目も寐ずに修行して、我身ながらも劍術は上達せしと思ひしに、今この娘と立合うて、最初に變らず不覺を取りしは、是まで心を盡したる修行も全く化骨を折つたるなるかと身を悔み、忙然として物いはず、たゞ俯向きて居たるにぞ、藤内は打笑みて、

藤「大星氏のお手の內、御修行なされしほどありて適れの御上達。娘が以前の手並ならば、及ぶ事にはあらねども、娘事も三ヶ年宿にて出精致させたれば、貴殿に劣らず上達して、勝を取りたるものならん」トいひつゝ此日は淸左衞門に酒など出して歡待にぞ、大星も實にもと思ひ姑く餘事の物語して、其日もすご〳〵立歸りしが、獨りつく〴〵思案をなすに、我三年の修行のうち、彼娘も又三年の修行をせしと聞くからは、打負けたるも道理ながら、是ひとへに我出精の足らざる處なるべしと、再び主君へ願を出し、又三年の暇を乞うて、澤路が家に赴きつゝ、今度は初に彌増して、命かぎりに稽古せしかば、二年ばかりの其内に、師匠の谷之進さへも手を置く

第四十七回

偖も大星淸左衞門は三ヶ年の暇を乞受け、本國近江を出立して、程なく京都に赴きしかば、三條小橋の邊なる香女屋と云へる旅籠屋に五七日逗留なし、那地の樣子を聞き合するに、其頃京都に名の高き劍道の名人に澤路谷之進と呼ばるゝ者、東軍流の師範をなすよし、今京都にて這人に肩を竝ぶる者もなく、門弟許多ありといふこと、本國に在りし時より聞き及びたることなれば、傳手をもとめて弟子となり、澤路が家に寄宿して、一日片時も怠りなく、稽古に心を盡す程に、多くの弟子の其中にて免許を得たる者といふとも、淸左衞門と立合うて勝を取るもの稀なる程に上達はなしたれども、谷之進は奈何なる故にや淸左衞門に奧義を許さず。然るに主君に願ひたる三ヶ年もはや終れば、一ト先國へ立歸らんと、谷之進をはじめとして、門弟共にも暇を報知、軈て近江へ戻りしかば、最早是程修行を爲たれば、那處女と立合ふとも、最初のやうにはあるまじと、再び堅田に至りて藤内に對面して、

に、日ならず近江を出立して、京都の方へぞ赴きける。

屋形へ帰る道々も、是等の事を詫しけれども、淸左衞門は打負けしを、然のみ恥とも思ふ色なく、不思議の處女もあるものかなと、お綾が手並を譽めけるが、夫に就ても淸左衞門は其身の未熟を深く歎き、軈て一通の願書を認めさし出す、其文面には、

私儀此程堅田の鄕士淺田藤内の娘綾と申候者と武術の試合仕候處、存外に打負不覺を取候段、全く不鍛錬故と口惜き次第に御座候。夫に付恐入候願上事に御座候へども、只今より三ヶ年の間御暇被下置候はゞ、心ざす方にて修行致し、有がたき義と存じ奉り候。此段御上向よしなに御執成、偏に賴上奉候。以上。

月　日　　　　大星淸左衞門

諸士頭衆中

斯の通りに願ひしかば、諸士頭より家老の手を經て、主君の前にさし出せば、主君佐々木何某殿にも件の願書を見そなはし、こは珍しき願なり、我兼てより淸左衞門を麁忽者ごと思ひしが、並々の者ならば、女ごときに打負けしをおし隱して居るべきに、明白に願ひ出しは、身の非を錺らぬ潔白にて、人の及ばぬ處あり。奈何にも渠が望に任せ、身の暇を取らせよとの仰によりて、諸士頭より淸左衞門に達するにぞ、大星深く欣びて、家財は親しき人に預け、旅の支度もそこ〳〵

志「なるほど其義も市兵衛から承つて居りますれば、いざ大星氏、御息女と一試合致されよ」トすゝめられて否とも言はれず、素より物にとんぢやくせぬ生得ゆゑ、清左衛門は主の辭に隨ひしかば、藤内も欣びて、軈て稽古場へ伴ひッヽ、娘にも支度させ、試合の場所へ連來り、かの兩個に引合せて、

藤「是が則手前の娘、名を綾と呼びまして、田舍育の我儘者、お目懸けられて」ト云ふ程に、清左衛門も志賀藏もお綾も倶に初對面の挨拶も終りしかば、藤内は若黨に白木造りの薙刀と、おなじ木太刀を取り出させ、程よき處に組合させて、卒勝負をとの辭の下より、清左衛門とお綾とは一禮なしつゝ立對ひ、這方は上段彼方は下段、じりゝ〳〵と詰寄せッヽ、互に透を窺ふ程に、お綾は顏さへ姿さへ最優しきに引替へて、自然と備る身の構に、清左衛門は竊に駭き、侮りがたしと思ひしかど、たかの知れたる處女の瘦腕、何程のことあるべきかと、ヤット懸けたる聲侶倶に、眞向目がけて打込む太刀を、お綾ははつしと受けとゞめ、裾を拂ふをかひくゞる飛蝶のごとき働きに、武術手練の清左衛門も、爭でか及ぶ事を得ん、未だ十合に至らずして、お綾が爲に打ちまくられ、終には負におよびしかば、志賀藏は市兵衛がよしなき言葉を取持して、かゝる不覺をとらせしを最氣の毒には思へども、今更に詮方なく、暇乞さへそこ〳〵に、清左衛門を引連れて

ぞ、清左衛門も承知のよしにて、次の日兩個うち連立ちて、淺田藤内かたへ赴けば、豫て言ひ入れたる事故、一間の中を掻拂ひて、爰に二個を通しッヽ、軈て主の藤内も出て對面する程に、是彼の挨拶など辭ずくなに終りて後、志賀藏すこし座をすゝみて、

志「この程米屋市兵衛より申入れたる事につき、是なる大星清左衛門に委細まうし聞せし處、御緣の義は兎も角も、尊公の御武道に御鍛錬なるを聞き、何卒おん目に懸りたしとて、則ち同道仕りし」ト言ふに藤内うち笑ひて、

藤「是は又思ひ寄らぬ其お言話、拙者も武道は好ますれど、世にいふ下手の横好とやら、併しながら娘には、何卒武道の心懸のある男が持せて遣りたいと、娘の不都束は餘所にして、壻を選むも烏滸がましいと、定めて人は笑ひませう。夫はさし置き大星氏には武術御執心と承りましたが、お一手拜見はなりますまいかな。」

清「イヤナニ、拙者も人並らしく武道の事は論じますが、業はなかく出來ませぬ、とはいへ何も修行でございますれば、仰にしたがひ御教諭をも、蒙りたい義でございます。」

藤「是はく痛み入つた其仰、私事もお相手にと申したい處なれど、年老いて行歩も叶はず、未熟ではござりますれど、娘と一太刀お手合を」トいふに側から志賀藏が、

處で親公の言はれるには、假令先は困窮でも、娘と立合ッて打勝つ程の男をば、壻に爲やうと言はれるさうでございますから、娘御の容貌を見込に、我も〳〵と名乘つて往つて、壻にならうとする所が、幾人往ッても打負けて、まだ緣付かずに居るとまうす事でございます。高くはまうされませんが、這方の御家中樣からも、お二個ばかり立合に御出のお方もあつたさうでございますが、其方も負けてお歸ん被成たと、薄々承りました。夫丈手利の娘御でも、那旦那の御手の內なら、何の造作もあるまいと察はれますから、夫で御緣が結ばれば、寔に一對の御夫婦と思はれますが、是は奈何でございませうト申しますから、私も幸の御緣とぞんじた故、實は其事で參ッた譯さ。」

清「ハテネ、夫は珍しいお咄でございます。緣談の事は兎も角も、娘に夫だけ薙刀を仕込んだ藤內とやらの武術の程、嘸かしと思はれますれば、私事も御存じの通り武道は執心の譯故、何卒知己にでもなつて置きたいものでございます。」

志「然う言ふ思召なら市兵衛を呼んで、猶また先の樣子を委しく承つたうへで、近日御沙汰をいたしませう」ト其日は別れて歸りしが、恁て五六日程すぎて、志賀藏は再び來り、先へも段段咄せし所、明日御出あるやうにと市兵衛より申越せば、某も早朝より御同道致さんといふに

清「是はまた何事かと存じたら、御親切のおすゝめ千萬辱うございます。何れにいたせ獨身では居られますまいから、相應なものもある事ならと思ッては居りますが、それを市兵衞がどうぞ致した譯かネ」

志「然ればさ、那者は我等方へも別懇に出入をいたしますが、この間參ッてまうすには、那大星樣は寔に結構な旦那でございますが、惜しい事には御勝手向が御不都合の御樣子。夫と申すが御獨身ゆゑ、何事もお費が大いと察はれますから、何卒御内室さまをと存じましても、那物堅い旦那だから、私からは言ひ出しにくい。何樣か貴君の御口からおすゝめ被成て御覽じてはと、思ひ入つてまうしますゆゑ、私も其許さまとは御同役とまうし、殊には格別御心易く致すなか、何卒御相應な御緣女もあるなら、お世話をもいたしたいと思ッて居るところなれば、成程其方のまうす處理に聞えるが、然して誰ぞ心當りの女中でもあるのかとまうしたら、然ればでございます、大星樣の御内室には、並々の女ではなか〳〵お氣には入りますまい。其處で種々尋ねましたが、幸當國堅田の鄕士に淺田藤内といふ人の娘、歳は十七で容貌も美く、支度も相應にあるとの事でございますが、其藤内といふ人が武術の達人で、娘御にも幼稚ときから薙刀を教込んだ處が、今ぢやァ親公にも負けない遣ひ人になつたといふことでございます。其

ども、日が廻る程いそがしいから、切張までは手が届かない。せめて穴でもふさいであると、御年始のお客様のお見懸が宜いぢやァないか。それ〳〵紙は爰へ置く」ト帳面の尻紙を外して丁稚に渡しつゝ、猶跡々の事なンど、入らぬ世話までやきちらし、皆うち連れて出行きしは、只一向に見る時には、白癡し事のやうなれども、義理には慾をうち忘るゝ、是等が御國魂なるべし。

第四十六回

慨て其年の大晦日は、掛取どもの世話になり、安々と春を迎へて、正月もはや中旬になりしが、或日大星が同役なる笹浪志賀藏といへる者久しぶりにて來りしかば、清左衛門は一ト間へ誘ひ、四方山の物語など姑く時を移す程に、

志「イヤトキニ大星氏、如何な事を承るやうだが、御自分様も米屋市兵衛方から飯米をお入れさせ被成かな。」

清「左様サ、彼は年來出入をさせますが、何ぞ仔細でも。」

志「イヤ、その市兵衛事について些お咄がありますが、貴公様は何と御妻女をお貰ひなさる思召はござるまいか。」

さかや「旦那は御酒は呑らないが、屠蘇酒は態とはなくばなるまい。後程までに宿から持せて進げませう。」

やほや「お雜煮の菜や鱠の大根は、小僧どん此身が店へとりにござらつしやい。」

こめや「左樣ならば旦那さま、此二百疋はさし上げます。後二百疋が御餅と諸入用、是は小僧どのに預けて置きませう。

清「イヤ、おの〳〵の信志は別して辱いが、拂方にも不足の金子を、箇樣に致して呉れてはいよ〳〵氣の毒ぢや。心配なしに取ッて呉りやれ。」

こめや「イエ〳〵、夫では私どもが家業に對して濟みませんから、それはお納め被下まし」ト殘りし金を分取つて、おの〳〵受取の書付をしたゝめてさし出せば、中にも薪屋は四邊を見廻し、

まきや「コウ小僧どん、お玄關からお座敷まで、大分お障子が破れたやうだ。新しい紙と云ッても今一寸仕方がないが、此身の持ッて居る帳面の尻に、白いところが餘程あるから、是で切張でもするが宜い。ナニ粘をこしらへるのが面倒だ。貴樣も旦那の御家來丈、不性な事を云ッたものだ。續飯を練つても知れたものだ。今日が大晦日でないものなら、此身が張ッても進ぜるけれ

なるといふのに、旦那の御小遣が三文なくツても濟むめへぢやァあるまいか。夫にまだ餅もお搗きなすつた御様子もなし、門松も立ッて居ねへでは、元日にもなられめへ。皆の衆の心は知らねへが、此身が思ふところでは、七兩三分の金のうちを、二分が旦那のお小遣、壹分で餅を搗せやす。扨門松と注連錺、數の子が一袋に鹽引の鮭の一本もあつたら、正月は出來るであらう。是をざつと壹分引くはサ。夫から肴やさんと八百屋さんと洗濯婆さんの掛は、高が低いから此身等と一處にはなりやすめへ。是は殘らず拂ひ切ッて、殘金の六兩二分許りを、古手屋さんをはじめ此身等が五人でいたゞいては何様であらうネエ。」

まきや「なる程米屋さんの言はれる通り、旦那はあゝいふ結構なお方だから、ノウ質屋さん。」

しちや「然うとも〳〵、御自分のことは些もお構ひ被成ないで、此身どもに持つて行けと被仰るのだから、些たァ這方からお小遣位は氣を付けて進げるが宜いノサ。へイ〳〵旦那さま、只今御聞き遊ばす通り、お金を配當いたしまして有難うございます。此上何なりとも御入用のお品もございますなら、御預りの内からお間に合せますでございませう。」

ふるてや「手前方へも御用もございます事なら、お拂の義は何れにも差繰りまして、随分とお恰好なお品を御覽に入れますやうにいたしませう。」

處で此間差上げましたお上下とお熨斗目をお返しになりますれば、お利分で濟みますが、お出し切になるときは、元利で壹兩ト十二匁、都合壹兩ト百四十七匁六分と相なります」

ふるてや「手前かたの〆高が、去年からの引殘りを入れて五兩壹分ト三匁」

さかなや「お肴の掛が壹貫六百八十文」

やほや「青物で五百と二十」

ばゝ「扨角ツこに居りますのが洗濯屋の婆めでございます。日外旦那の御不斷召とおみ袷の洗張、又男衆の布子の仕立、裾廻しも足し綿も私の方で買ツて置けと被仰付でございますから、殘らずの御勘定が大枚二朱と十六文」

こめや「さア〳〵是で濟んだかネ」ト十六盤の玉をあちこち遣りて、「エヽト、お前方の〆高が金九兩三分二朱ト銀で百五十匁六分、錢が八貫と三十六文、是に私のお拂を四兩壹分と入れて見ると、ざつと十八兩ばかりになりやす。其處へ七兩三分と壹貫三百六十三文のお物成を配分したところが、半金にも足りない譯だが、爰にひとつの咄がありやす。假令六兩でも七兩でも、旦那がお頂戴のお金を一文も殘さないで持つて往けと被仰る思召が有難いから、半金には不足だが、此お金を配分して、當季のところは濟せやうといふところだが、然う爲て仕舞ふと正月に

改め、「是は七兩三分と、錢で壹貫三百六十三文にございます。」

清「何樣でも宜いは、持つて往きやれ。」

掛取「イエ、左樣でもございませうが、御不禮ながらお物成は最う是切でございますか。」

清「いかにも、只今出させた他には、身に貯とまうしては、はや一錢も所持いたさぬハ、、、」

トうち笑ひ、貧苦を少しも氣に懸けず、有丈の金子をば差出したる潔白に、掛取どもは顏見あはせ、何と應へもならざりしが、中にも米屋が進み出で、

こめや「皆の衆那を聞かしやッたか。町人の心と違ひ、武御家樣の思召は又格別なものではないか。先和主衆のお拂高をざつと積つて見たうへで、また相談もあるだらう。さア誰からでも言はつしやい」ト十六盤取ッてはじき懸れば、

まきや「エヽ私のは炭薪で壹兩二分と五貫八百十六文。」

こめや「おつとよし〳〵。」

さかや「私の方は酒醬油味噌鹽油一式で十三貫二百七十三文、金に直すと斯うだから、きつちり二兩と爲て置きやせう。」

しちや「扨私のは勘定が些込み入つて居りますが、お流になる口の利足が百三十五匁六分、其

清「何樣長々迷惑をかけて、近頃氣の毒千萬だが、我も武器の入用で、是まで追々勘定方の役人から内借をいたした故か、當節季の物成は格別もないやうだ」トいひッヽ、這方を見かへりて、「コレ惣七、これは此家の召仕なるべし 此間うけ取つた御藏前の渡り金が、挾箱の中にあるであらう。夫を殘らず持ッて來て、掛取どもに渡すがよい」トいふに丁稚は心得て、有丈の金と錢を挾箱の蓋に乘せ、主人の前にさし出せば、

清「サア〳〵掛取ども、遠慮はないからみんなが爰へすゝみ出て、此金をよいやうに配分をして取つて喫りやれ。大かた是では不足であらうが、足らない處は此後に物成を頂戴するまで用捨を頼む」ト云つたばかり、幾兩あるやらかの金を其儘先へおし遣れば、掛取どもは手をもぢもぢ、

掛取「ヘイ、旦那さまへ申上げます。此間御勘定の御書付をさし上げてございますから、何卒貴君さまから銘々にお渡し被成て下さいませねば、何樣も手込に頂きます事は。」

清「ハテ苦しうないは。銘々に遣る程あれば何も子細はない事だが、何れ不足と思ふから、皆の者でよいやうに分合せて歸るがよいはサ。」

掛取「左樣にまで被仰る事なら、まづ此お金の高を拜見致すでございませう」ト件の金の數

いろは文庫　巻之二十三

第四十五回

爰に大星清左衛門と喚ばるゝは、近江の國司佐々木姓の家來なりしが、後に鹽谷家に懇望せられて、終に高貞の臣となり、又是義士の一個なり。始め近江にありし頃は、百二十石賜りて使番を勤めしが、兩親ともに世を去りて、いまだ妻さへむかへざるに、清左衛門は生得正直無慾の人なれば、世帯向の事などには聊心をとめざる故、其家究めて貧しけれども、夫等の事は苦にも思はず、小丁稚一個を召仕ひ、是に勝手の事を任せて、其身は明暮武道にのみ心を盡して居たりしが、折しも年の終とて、世間は煤取餅搗なんどと春のまうけの賑しけれども、清左衛門は夫さへ構はず、破れ障子に破れ疊、切張ひとつ爲るでもなく、安然として居る程に、はや大晦日になりぬれば、大勢の掛取が臺所せましと居並びて、

掛取「ヘイ旦那さま、當年は盆から少しも頂きませず、當季は何分お拂を、ヘイ〳〵お願ひ申上げます。」

夫の死骸に抱き付き、返らぬ事など繰りかへす、愁歎もさぞなるべけれども、くだ〳〵しければ爰に漏しつ、看官よろしく推すべし。其時お民が心では、おなじ道にも消果てたきを、那遺書に思ひ返して、其場にて髪を切り、良夫の骸と侶俱に圓覺寺の中に葬りて、跡念比にぞ弔ひける。斯て後左膳が主人何某侯より兼松を召され、初は扶持など賜りしが、成長のうへ家臣にせられ、再び森の家名を立てしは、左膳が取持なりとはいへども、是併しながら胡平太とお民が忠節故ならんと、其比噂したりとなん。

番眼を覺し、格子窓より顔さし出し、

門番「今夜は少し仔細あつて、何樣いふお人がござつても、必ず門を明けるなと、番僧方から嚴しい言付、用があらば翌ござれ。葬禮ならば貰ひもあれど、錢三文にもならない事に、度々今夜は起されて、此寒い夜を寐かしも爲ねへ。ヤレうるさや」ト口小言、すげなく窓を引きたてるを、左膳は猶もおし返し、

左「番僧の言付で明けぬとならば是非もなし。然らば問ひたき事のあり。今宵鹽谷の浪人にて森胡平太といふ者が此寺へは見えざりしか」

門番「されば、その胡平太が今より二時程以前、火急の用事で庫裏まで通ると、熟く欺して門を明けさせ、鹽谷殿の墓の前で、腹を切ツて死んだゆゑ、寺の内は大騷ぎ。それだによつて又他から腹でも切りに來る人があつてはならぬと、番僧が嚴しく私へ言付けて、六時が鳴らねば明けさせぬ」ト聞くに駭く左膳より、お民は身も世もあられぬ思ひ、ワツト一聲ひれ伏して、生體もなきありさまは、哀れにも又道理なる。

恁て小織左膳は門番を種々と諭し、かの番僧を呼出して、猶も仔細を尋ねしうへ、お民が事をも報しかば、由緣の者とあるからはとて、漸々門を開かせしにぞ、お民は墓所に赴きて、良

きて、

武士「偖は女中は鹽谷の御家來森氏の内室とな。此度義士の面々の世に比なき忠心は、適武士の鏡にて、最羨しく存ぜしが、夫にもさら〳〵劣なき胡平太殿の眞忠義心、其内室の和女に、料らず逢ひしは武士の面目。拙者事は何某が藩中小織左膳ど喚ばるゝ者、以後はお見知り被下べし。夫に就ても胡平太どのの最期に逢はんとせらるゝならば、心の急迫は理ながら、女中の足にて酒繩まで、走り着かんは覺束なし、某ぞんずる旨あれば、姑く我等に任されよ」ト言ひッヽ這方の二個に對ひ、「汝等命も取る奴なれども、今我言葉に從はゞ聊用捨致して取らせん。いよいよ命を惜むなら、仇九郎は女中を脊負ひ、又強八は稚兒を大切にかき抱き、我と一處に酒繩なる圓覺寺まで供いたせ。若少しにても疎略あらば、二個が命なるべきぞ」ト言はれて否ともいひがたく、軈てお民と兼松を、仇九郎と強八が脊中におぶひ肌に抱き、はじめの勢引替へて、阿容阿容として先に立てば、左膳は是を追立て〳〵、すでにして圓覺寺の大門まで來りしかば、お民は速くも脊中を下りて、かの兼松を抱き取れば、強八と仇九郎は思はず一息ホットつき、跡をも見ずに逃行くにぞ、左膳は寺門をうち敲き、

左「火急の事にて參りたれば、役僧方にお目にかゝらん。先此門を明けられよ」ト いふに門

強「そんなにきつく締られちやァ、息がつまつて物が言はれぬ。金も命があつてのうへ、惜しい物だが三十兩、返して遣るは」ト投出す財布、武士は見てお民にむかひ、
武士「女中定めて驚きつらん。怪我がなくして先は重疊。取り返したる其財布、中改めて請取られよ」トいふにお民は嬉しさと辱さに手をあはせ、
たみ「何國のお方かぞんじませんが、危いところを此樣に御救ひなさつて下さるとは、何とお禮をまうさうやら。私事は淺房邊に幽に暮して居りまする、賤しい者ではございますれど、良夫と賴む其人は、鹽谷樣の御浪人で森胡平太と呼ばるゝ人、大星さまの御内意にて、討入の夜は加はらねど、四十七士の方々に、忠義の心は爭でか劣らん。今日彼義士の人々に、切腹仰付けらるれば、假令主君の讐は討たでも、おくれを取らぬこゝろざしを、死して主君に報知まゐらせんと、今宵圓覺寺に赴きツヽ、切腹なして相果つると言ふ此遺書に打駭き、命の中に今一度、這世の名殘ををしまんと、息せき駈來る途中にて、此人達の手込に合ひ、思ひも遂げぬのみならず、身も穢されんとせしところを、貴君のお蔭で恙なき母子の者が怡びは、何に譬へんやうもなし。斯ういふうちも良夫の命如何あらんか氣遣はし。何卒貴君のお名前をお聞かせ被成て私をば、此儘お許しくださらば、良夫に一ト目逢うたうへ、今宵のお禮はお屋敷へ」トいふにこなたはおどろ

白刃をもぎはなし、

仇「得心させてと種々に、和語く言ふ程つけあがり、女の癖に刃物ざんまい、斯うなるからは這方もゑこぢ、否應言はせぬ無理往生、叔父公の前では差合だが、闇を屏風に新枕、斯うして遣るは」ト抱きころばし、遠慮會釋もあらくれ男、手込になさんとする折しも、木立の陰に立忍びて、最前よりの有様を殘らず洩聞く一個の武士、あまりの事に見かねてや、をどり出でつゝ仇九郎が襟がみ摑んで引起し、どうと投出す拳のはたらき、夫と見るより強八は、小脇にかゝへし兼松を、其儘其處へ打捨てて、腰に準備の長刀を、拔手するどく斫りかゝるを、彼武士は事ともせず、那處這處しばし遣違はして、持ちたる刃を蹴落しッヽ、胸ぐら取ッて引居ゆれば、這方に倒れし仇九郎が、落ちたる刃を拾ひとり、物をもいはず後より、打つてかゝるを引外し、また突きかくるを身をさけて、利腕しつかと取りとめッヽ、右と左に惡漢を引付けながらに冷笑ひ、

武士「汝等かゝる往來にて、女子をとらへて無法の段々、二個ともに搦捕り急度詮議もする奴なれど、我とて事を好むにあらねば、品に寄つては用捨も致さう。汝等命を惜しく思はゞ、奪取つたる財布の金を先此女中へ返せしうへ、非義非道のわびいたせ。然なくば決して許さじ」ト言はれて強八苦しげに、

て那程まで、割ッ口說きつ勸めても、得心爲ねへのみならず、自己が勝手に駈出されちやァ、第一旦那へ我が濟まねへ。今から心を切替へて、旦那のお世話になるならよし、まだこの上にも性を張りやァ、旦那への言譯に、此兼松めを捫り殺すぞ。ハテ殺したとて我が甥、何處から點の打人もあるめへ。返事が遲いと斯うするぞ」ト泣叫ぶ兼松を小脇にしッかと掻抱き、榮螺の如き拳を堅め、打たんとするに堪りかね、

たみ「叔父さんそりやァあんまりな。私が今夜駈出したは、欠落どころの事ではない。胡平太さんのお命の終らぬうちにと氣のせく途中、その子を奪ひ財布まで、手込にかけて取るのみか、つひぞ見馴れぬ此人に、世話になれとは何事ぞ。其子は遣らぬ殺させぬ」ト走り寄らんと身をもがくを、猶もしつかり抱きすくめ、

仇「コレサ、おぬしも野暮な者だぜ。是程までに思つて居る我の心にしたがへば、可愛いお主の子だものを、敲たせて無言て見て居るものか。那子を不便と思ふなら、後ともいはず今爰で何樣してくれる」ト引寄せて、お民の顏へ我貌を摺付けながらかき口說けば、お民は餘の口惜さに、跡先思はぬ必死の覺悟、かねて準備の短刀を、抱かれながらも引きぬきて、最う此上はト言ひッゝも、突いてかゝるを仇九郎は、刄の光に身をかはし、その手を取つて捻ぢあげッゝ、難なく

強「ヤイ、この婦ア、見かけに寄らねへ大膽事を爲やァがるな。常々自己が待ちこがれてのろくなつて居る野郎が、先刻忍んで來たことを、ちらりと我が見付けたから、今夜ァてつきり欠落と、白眼で跡から付けて來た。是まで毋子を食せて置いた其勘定を立ても爲ねへで、此生馬の目を拔いて、ずるとくじを遣られちやァ、強八樣の腮が干らァ。幸今夜手前をば世話を爲て遣らうと被仰る旦那も一處にござつたから、是非其方へ遣らにやァならねへ。夫に就ても邪魔な小坊主、小兒奴は我が預かる」ト駭くお民を推居ゑて、脊中に入れたる兼松を、抱取るはずみに手にさはる、財布を共に引出せば、アレマア待ツてとすがりつく、お民の後へ仇九郎が、拔足爲ツ・ツ忍びより、抱きつかれて又恟り。コリヤ何事といひながら、ふりはなさんにも男の力、詮術もなく見えにける。

第四十四回

當下強八さし寄ツて、

強「コウお民、今も言ツて聞かせた通り、これまで食はせて置いたのも、其處にござる旦那から調賦で貰つたお蔭だァ。それだによつて先頃ツから、旦那のお世話になれ〳〵と、口を酸くし

脊中へ推付いて居るのだョ。」

兼「坊強いから泣きはちないョ。其替りお父ちやん處へ往つたら、差してお在の脇差を貰ッてお吳へョ。」

たみ「オヽ貰ッて遣ることは遣るけれど、あの脇差でお父さんは」ト跡言ひさしてせきあぐる涙と共にさし込む癪、ウント一聲伏しまろべば、

兼「アレなにを泣くのだへ。坊おとなちくしゆから、早くお父ちやん處へ連れて往つてお吳へョウ」ト脊負はれながら首さし伸べ、母の泣顏覗く子は、死に往きたる父親を、知らで案じる心根を、思へばいとゞ悲しさと、又苦しさに稍須臾、起きもあがらで居たりしが、恁ては良夫の息のうちに追ひ付く事もなりがたしと、癪をおさへ脊の子を、賺しながらに立ちあがり、我と心を勵ましつゝ、一町行きては息をつき、二町行きては胸を撫で、歩み〳〵て道の程はや二里ばかりも來りしが、まだ其頃は鎌倉も、繁華ながらも家並の今のごとくに揃はねば、此邊は人家も絕果て、茂き木立と高草の生ひ茂りたるのみなるに、眞夜中なれば行通ふ人足さへもあらざれば、心細さも嘸ならんを、良夫の一生懸命と思へば怖さも打忘れ、猶も往かんとする折しも、小陰を出づる以前の強八、お民の前へ踏みはだかり、

が腹を切つて死なうとする場合だものを、自己も同様に死ぬ覺悟で、住居を出たには違ねへ。それを彼是言ッたところが、迚も咄はおつ付やせん。お前さんも男だらう、一旦斯うと思ッた女を、思ひもとげずに仕舞ッちやア、口惜のも其筈サ。私もまたお前さんから那程までに頼まれて、出させた金も有る譯だから、此まんまでは濟されねへ。毒を喰はゞ皿までだア、寧のくされお民めが今にも爰へ來たならば、この暗まぎれを幸に、無理往生にひつつらまへ、思ひをおはらしなせへやし。然うしたうへで遠國へ連れて行ッて遊女に賣つても、年いつぱいの身の代なら、まんざら野暮でもありやすめへ。然う斯ういふうち向から、あれ〳〵人の來る足音、大かたお民に違はあるめへ。此邊へ忍んで斯うして」ト囁き示せば仇九郎も、白者なればうち點頭、倶に小陰に立竦れて、埋伏するとも毫知らぬ、お民は嚮に胡平太がかの遺書にうち駭き、良夫の赤心知るうへは、息ある中に今一目逢うて言ひたい事もあり、最期の程をも見まほしと、家のうちをば駈出せしが、四日の月ははや入りて、空さへいとゞ曇り勝、足元とても見え分かぬ、馴れぬ夜道も女の一念、心一ッを勵ましつゝ、南をさしてゆく程に、更行く風の肌寒く、脊中へ入れし兼松が眠りもやらで泣出すを、ゆりあげながら母親が、

たみ「オヽ寒からうノウ。今に最う些と往くとお父さんのおいでの所だから、おとなしくお

が言はれねへやァ。」

强「モシ、お前さんも胸障な事を被仰るものだネ。そんなに悪推をおまはしなさるなら、念晴しに今夜の理窟をお咄しまうしやせう。實は斯ういふ譯合さ」ト四邊見まはし耳に口「ネ、ネ何と解りやしたらう。」

仇「ノウ、夫ぢやァ那胡平太がお民の住居へ忍んで來て、言ッた事をば何もかも。」

强「すつぱり門で立聞いたから、先へ廻ッてお民めが、胡平太の跡を追ひ、圓覺寺へ往く途中に待伏せ、兼松が養育金にと遺して往ッた三十兩を奪取やうといふ魂膽、斯ういふうちにもお民めが、そろ〳〵其處等へ來るかも知れねへ。氣のせく譯は此通り、何卒今夜のところをば。」

仇「なるほど然ういふ理窟なら、まんざら野暮もいふめへが、夫に就て自己もまた、おぬしに些と咄がありやす。今聞きやァ胡平太は、今夜圓覺寺の墓場へ往つて、腹を切つて死ぬぢやァねへか。然うして見ると那お民は此先使のねへ身のうへ、其處等の處から持込んで、口說落すといふやうな、何と理窟はあるめへかの。」

强「そりやァ被仰る事だけれども、並々の女なら隨分其手で往きやせうが、是迄三年越しといふもの脅したり賺したり、手のこつぽうを揩つてせへ、思ふやうにはならねへ婦女、今其亭主

恂りする程美しい容貌にぐつとはまりこみ、段々様子を聞いて見れば、那胡平太が其以前闘ッた娘が其女で、今ぢやァさつぱり便もなく、強八といふ叔父の世話で暮して居るとの事なれば、夫からおぬしに手を入れて頼めば直に安請合、あのゝものゝと言ひかけて、五兩三兩渡したのも、度々なれば積つたら、些との金でもあるめへぜ。夫だけ譯をつけて置き、さァお民はといふときは、早晩でも返事はお定り、一寸遁れに三年越し引きずられちやァ了簡ならねへ。全體初手から薄のろく出たのが這方の見そこなひ、成らう事なら愛敬を失ふめへとは思ッたけれども、小馬鹿まはしに込められちやァ、男ばかりか懐の勘定づくが立ちかねらァ。お民の事が出來ねへなら、是まで渡した金の高、一厘一毛躑躅なく耳を揃へて今返せ。さァ何樣する」ト腹立聲、強八は額を撫で、

強「なるほどお腹も立ちやせうが、那お民めが強性には、私もあぐみ果てやした。併し今夜ァ那女の事で、些と耳寄な事を聞き出しやしたから、夫で氣がせいてなりやせん。何れ明日はどつちの道、お前さんのお顔の立つやうに爲やすから、今夜のところは何分にも」

仇「御勘辨をといふのだらうが、其言譯も聞倦きた。然して耳寄な事といふなァ、大方他に旦那でも出來懸ッて、那女を世話にてもさせやうといふ山事があるのだらう。あんまり呆れて物

かごや「へゝ、是は毎度有難うございます。左様ならばお靜に」ト言ひつゝ駕屋は戻りゆく。跡見送りて強八が、
強「モシ若旦那、仇九郎さま、今夜ァ些と氣のせく事がありやすから、私へのお咄なら、何卒明日のことにはなりやすめへかネ。」
仇「コレサ、また株を言ひ出すぜ。何時でも手前に逢ふ度に、ヤレ明日だの明後日だのと、解らねへ返事ばかり、人を馬鹿にするも程があらァな。長い咄をするでもねへが、自己も元は鹽谷の家老矢強低右衛門が獨り息子、なに不足のねへ身の上も、一昨年主家の大變から、親父も自己も浪人したが、忠臣は二君に事へず、貞女兩夫にまみえずとか、子曰にはあるだらうが、欲得づくなら二君はおろか、三人五人の主取も、爲めへものぢやァねへけれども、差當ッて宜い口もなく、其處で親子が相談して、今では八谷の新宿で、手前も知ッてのあの商賣。ところが親父がやかましやだから、女房も持たねへ仕儀ョ。夫に就て頼んだのは、手前の姪のお民が事。那女は自己が屋敷に居るとき、森胡平太といふ奴が淺房近所に圍ッて置いて、子まで出來たといふことを、人の噂に聞いたから、勤番者の其癖に熟くするなと思ッたばかり、氣にも留めずに居たところが、自己が浪人した當座、苫形堂の此方でふいと見かけた中年増、身なりはやつれ果しても、

第四十三回

其宵もいつか小夜更けて、星もまばらにかき曇り、空さへ暗き雨催ひ、折しも來かゝる一個の男、四邊うろ〳〵見まはしながら、歩みよりつゝ向より、息せき驅來る辻駕に行當りつゝへらず口、

男「エヽ氣の利かねへ駕屋ぢやァねへか。目を明けて通りやァがれへ」ト云ひ捨て行かんとするを、駕の中なる客人が、提燈の火にすかし見て、

客「コウ、そこへ往くなァ强八ぢやァねへか」

强「エ、然う被仰るのは浮寐屋の若旦那かネ」

客「コレサ、若旦那かでもあるめへぢやァねへか。何にしろ咄があるから」ト言ひながら駕をおろさせて中より立ちいで、「コウ駕屋、濱の宿までと頼んだけれども、些と此男に用があるから、爰切りで歸ッて呉んねへ。是で酒代もあるだらう」ト包みし金を渡すにぞ、

いろは文庫第八編序

聞くまでのひと夜は長し郭公

這は予が舊友、稻の家美津喜ぬしの詠にして、今編の出版を待侘しとの一章なり。斯くは愛顧を蒙るものから、素より不學の筆鈍く、外題の名におふいろは文字に、寫しおきたる舊記をば、文庫の底より選出し、抄錄倣したるまでにして、初音めかせど時鳥、八千八事も追々に、著述しゝ其中で、一事なりとも看官の、御目に止らば僥倖と、阿民胡平太が全傳を、この輯中にて編果てつ。更に大星延淸が、外傳をなん說發し、續いて自餘の義黨のうへを、綴り次ぐべき腹稿あれば、猶山烏のながくしくとも、團圓ときまで相替らずいよく笑覽を願ふにこそ。

梅も櫻も靑葉してかの一こゑの待たるゝ夜

爲永春水誌

より自害など致され候はゞ、此うへの怨にぞんじ候。申残し候事只是のみに候。と。

森　胡　平　太

おたみどのへ

お民は始終を讀下し、咯と一聲叫びしが、何おもひけん兼松を肌にしツかと抱き込み、身輕に帶を引きしめて、親の讓の短刀と胡平太が遺書を携へながら駈出せば、叫びし聲と此物音に、近所の人々起出て、お民が樣子の只ならぬに驚きながら問ひ寄るを、答へもやらず、止むる人を押退け振切り、一散に南の方へと心ざし、息を限りに走行きける。

作者曰、胡平太お民が全傳は這編中にて綴り果てんと豫ては腹稿しに、言話餘ツて丁數盡きたり。因て姑く筆を止め、第八編の卷端にて其終身を全からしめ、且なほ自餘の義士の別傳いまだ江湖に專らせざるを考正して編出し、勸懲の一助と做せば、看官高評を給へと云ふ。

育金並に書置と認めあるにぞ、お民は再びうち駭き、手速く封を押切れば、三十兩の金の他に一通の遺書あり。ひらき見れば其文に、

一筆殘しまゐらせ候。我等事兼て大星氏と一味合體致し、亡君の讐高野殿をつけねらひ、既に去冬十四日義士の面々侶倶に讐の門前迄は赴き候へども、由良之介殿の遠謀にて、萬一讐の親族方より後詰の人數を出されては討手の難儀なれば、一ツには是に備へ、又二ツには四十七人戰危く見え候はゞ、二の手を立て討入るべし。若先隊にて本意を遂げなば、各命を全う致し、亡君の御菩提を永く弔ひ申されよ。進むも退くも忠義に隔は候はず、後詰の備堅固ならねば、先隊の働き自由ならず、是第一の忠勤ぞと、一老の教訓默止がたく相守り候うち、果して先隊は本意を遂げ、俺們は在るに甲斐なく、爾れども心は四十餘人に變るべくも候はねば、餘人は知らず我等においては、存命候所存曾てこれなく、本望は倶に致さず候へども、死は倶にせんと思ひ込み候へば、今日四十餘人の面々切腹と承り、我等事も御菩提所圓覺寺において切腹を遂げまゐらせ候。そもじどの御事は何卒良家に再縁致し、呉々も兼松が事頼み入りまゐらせ候。此金子三十兩は、大星氏より討入の用意に配分致され候へども、最早要なき金子ゆゑ兼松にあたへ申候。其元預り養育の足にも致されべく候。若突詰候心

居ては、互に自滅する許りで、仕出した事にも往きは爲まい。夫だによつて此身は此身で身を片づけ、和女は和女で相應な良人を持てば、互の僥倖と言ふものだ。今夜は寛々這所へ泊ッて、積る咄も爲て往きたいが、何分先が急ぐから、夜の中に鎌倉を立つて、田舍へ返事に往かねばならない。其田舍も十里二十里、そんな手易い所なら宜いが、里數もたしか十萬億度。然ういふ遠い處で見るも、最う此世では逢はれまいから、隨分息災で兼松を」トしをれしが氣を取り直し、「邪魔なら他にくれて遣れ」ト心強くも身を起し、往かんとすれば兼松が、

兼「アレお爺ちやん、兒も一處に往きたい」ト取りつく我子に胡平太は胸を裂るゝ心地せしが、爰ぞ忠義と振りはなせば、忽地ワツト泣出す兼松。お民も今はたまりかね、

たみ「そりやあんまりな」トすがりつくを、

胡「ナニ爲やるぞ」ト突きはなし、「是が手切」ト何やらン紙に封し一包をお民が目先へ投出し、後をも見ずして出往くを、

たみ「アレマア待ッて」ト駈出せど、四日の月は早落ちて、黑白も別かぬ闇なれば、影さへ見えぬ良夫の行方、何國迄もと思へども、内には我子の泣入る聲に、心は二ツ身は一ツ、詮方なさに立戻り、泣子を膝に抱き上れば、側に落ちたる以前の一封、手に取り見れば上書に、兼松が養

いふ事も、世の中にない譯でもないから、何れにしても是迄の縁だと思ッてくれるがいゝ、と斯う云ッたら、兼松を連れて往けと云ふだらうが、和女だッて可愛い子を繼母の手にかけて、いぢめさせる氣もあるまいから、稚兒は此儘和女に遣るから、少し手足が伸びたなら、年季小僧にでも出すがいゝ。夫でなくとも和女の容貌なら、一個ぐらゐの連子を爲ても、隨分貰人があるだらうから、御勝手次第に御緣付なさるがいゝ」ト言はれてお民は興さめ顔に、呆れて言語も出でざりしが、急度容を改めて、

たみ「モシ胡平太様、貴公はお氣でも違ひましたか。お家の大事を餘所に見て、逃躱れをなさるやうな、ふがひないお心とは、今日まで知らずに居りましたに、金持の壻になり、一生人に後指をさゝるゝのが御本意か。素よりたらはぬ私故、お氣に入らぬと被仰るのはさらく無理とはぞんじませんが、可憐さうに兼松に年季奉公させろとは、宜くむぎだうに言はれた事、貴公は天魔が魅入しか、お情ないお心」ト怨みつ泣きつかき口說くを、實に理と思へども、態とそしらぬ顔付にて、

胡「偖々分解ない女ではあるぞ。敵討の一件は濟んで仕舞つた後だから、今更何と思ッても、相手のない喧嘩もなるまい。是からは身の落付が肝要だ。和女も此身のやうな痩浪人にそつて

て恨まうとも、那等二個が始終の爲、まだうら若きお民故、年月の立つうちには、去者は日々に疎しと、終には他に身を寄せて、母子の者が行末は世に出る事も有りぬべしト、胸を定めて莞爾と笑ひ、

胡「コウお民、和女は少し逢はないうちに、きつい野夫助になつたノウ。尤主人に忠を盡すは侍の道とは云ふものゝ、當世は夫ではゆかぬ。先さし當つた處で云へば大星はじめ四拾七人、高野の屋敷へ討入つたのは何樣やら立派なやうなれど、既に今日四家において切腹仰付けられて見れば、言はずと知れた天下の咎人。お屋敷の騷動から去年の極月の十四日まで、寐る目も寐ずに苦勞した、とゞのつまりへ往ツた所で、痛い腹を切らされては詰らない咄さノ。其所を此身が考へたから、最初は大星に一味して、讐を討うと思ツたが、中途から思案を替へて身の落付を尋ねた所が、天道人を殺さずで、さる田舍の大盡が、浪人の此身を壻養子に貰ひたいと云ふ相談だから、先の樣子を聞いた處が、金は澤山あるうへに、娘の容貌が宜いと云ふから、早速返事をするのだけれども、一應は和女にも咄さないでは寐覺が悪いから、今夜態々來た譯だが、斯う云ッたら心持を悪くするか知らないけれど、和女だと云ッて表向の女房ではなし、此身が他に女房を持ッても言分はあるめへ。よしまた眞の女房にしろ、氣に入らなければ離縁をすると

圓覺寺まで參ッて聞けば、然ういふ人はないとの答、若夫ともにと辻賣の番附まで買ひましても、貴公のお名がございませんから、夫では大かた本國で御病死でもなされたか、嘸御無念であつたらうと、思ひつゞけて居りましたに、今宵貴公が何氣なくお歸りなさつた其時には、日頃戀しい〳〵と思込んだ迷から、御機嫌のよいお顏を見て、只嬉しいと思ひましたは私のたらはぬ故、貴公に限つて御主人の御无念を餘所に見る思召はあるまいと、今日迄おもつて居りましたが、是には何ぞ又他に深い仔細でもあつてか」ト問ひかけられて胡平太は、胸にギックリ燒鐵を押當られし心地して、須臾言話もなかりけり。

第四十二回

案下胡平太思ふやう、驚き入つたるお民が赤心、人は性より育といへど、其諺に引きかへて、貧しき中に生立ちながら、昔を忘れぬ那女が本性、遉は里見の娘なれ、其美烈さを見るからは我本心をも打明けて、一世の別を報知んかト口まで出しがイヤ〳〵思ひつめたる那女が顏色、今宵限りの命ぞと明白に言ふならば、侶に死なんと云ふは必定。さすれば不便や兼松は誰を力に成長ん。白痴者になりおほせ、那女に愛相をつかさせて、術よく離別をするならば、我亡跡に

たみ「ハイ、是は去年の暮、鹽谷様の御浪人衆が高野の第を引揚の時、兒が途に遊んで居たのを、可愛い子だと抱きあげて、二三町も連れて往きましたから、私やア然う云ふ譯とは知らず、素足で跡を追かけて、漸々のおもひで取返し、住居へ歸ッて見ましたら、此短冊と其他に一包のお金を貰ッて居りました」ト言ひかけしが、ふッと氣がつき俄に容を改めて、「私は貴公が御機嫌よくお歸んなすたのが嬉しさに、心も付かずに居りましたが、何樣も私には合點がまゐりません。貴公はマア今日まで何所においでなさいましたへ。」

胡「エ、ナニ此身か。オヽそれ〳〵、アノ何に居たのサ。」

たみ「何にでは分解ません。併したらはぬ女の身で此樣なことを申しましたら、出過ぎた口を利く奴だと、定めてお腹も立ちませうが、亡死たお爺さんが常々私へ申しますには、和女も侍の女房になる氣なら忠孝が第一ぢや。侍は二君に仕へず、女は兩夫に見えずとは、賢いお方の被仰つた事で、假令良夫が主人の爲に命を落す事があらうと、忠義ゆゑとあきらめて、他の男に身を任せず、生涯潔く終るのが、良人へ貞節主人へ忠義。爾すれば親へも孝行ぢやと、幼稚ときに聞きましたのを、今に忘れは致しません。此間兼松が短冊を貰ッて參つたとき、鹽谷家の浪人が讐を討つた引揚と、人の噂に聞きましたから、貴公も定めて其中と、我と心で自慢して、

胡「オヽ買ッて遣るとも買ッて遣るとも。ドレ〳〵お膝の上へ立つて見せろ。ヤ〳〵重くなッたぞ。是ではお乳を呑まうと言ッては、此少をかしいのアハヽヽヽ」

たみ「ホヽヽヽ貴公お見違なさる筈でございます。此子が漸々つかまり立をする時分、お別れなすつたのでございますものを」ト言ふうち、兼松は自分の持遊箱の中より金の短册を取り出し、

兼「兒此間餘所のお仁ちやんに此樣な物貰ッたョ」ト自慢さうに見するにぞ、胡平太は手に取ッて短册の面を見れば、山をぬく力も折れて松の雪、大高子葉ト記しあるにぞ、是は正しく大高文吾が、討入の夜に鎗へ付けしを、我にも見せし短册と、思へば今更口惜しく、忠義に二ッはなけれども、大星どのの差圖を守り、取殘されて期に合はぬは、此身の不運と言ひながら、思へば无念とわきかへる、親の心を夫ぞとも、知らぬが佛兼松が、「兒は此短册をお鎗へつけて、讐討の眞似を爲て遊ぶョ。」

胡「ナニ讐討を爲て遊ぶとか。オヽ〳〵出來す〳〵。手前は此予より餘程生れ勝ッた者だノウ。トキニお民、此短册を兒が貰ッたとは何樣いふ譯だか、此身にはとんと分解ないが、和女は定めて知ッて居やうな」

し一周忌の御命日に、思はず此身が歸ツて來たも、やつぱり何かの因縁であらう。夫に就ても和女の心勞、此身の方からは音信をせず、母公さんは此お成行。殊には例の強八が、和女の弱みへつけこんで、嘸困らせた事であらう。」

たみ「ハイ、母公ァの亡死た跡は那叔父さんが無理非道、そのうへ貴公のお身のうへ、お屋敷の大變からは、何樣なさつてお在でなさるか、一度の音信も聞えないは、若もの事でもありはせぬかと、安い心は爲ましなんだに、御機嫌のよいお顏を見て、こんな嬉しい事はございません」

ト咄半へ兼松が眼を覺して起直り、

粂「母公ちやん、お乳給べたい。」

たみ「オヽ兼兒起き爲たか。是がお前のお爺ちやんだから、這所へ來てお辭儀をお爲。行儀の惡い事を云ふとお叱りだョ」ト母の言葉に兼松は、血筋の縁か嬉し氣に、わるびれもせず駈來るを、胡平太は膝に抱きあげ、迫來る泪を笑に紛らし、

胡「オヽ大そう成長なッたの。中々途中なぞで逢ッては見違さうだ。是からお爺さんが萬一居なくなつても、母公さんの言ふ事を聞くのだョ。」

粂「アイ、言ふ事をきくかャ、太刀や、お鎗買ッてお吳へョ。」

見合せ、

たみ「オヤマア貴公」ト言ッたばかり、後は泪に差迫るを、胡平太は何氣なく奥へ通ッて四邊を見まはし、

胡「オヽ稚兒奴は最う寐たな。偖永々の此年月、一度の音信も爲なんだに、不實な此方を怨みもせず、お老女の御介抱と、此稚兒めを育てる世話、なか／＼大抵ではなかッたらう。そしてお母公さんは御丈夫か。」

たみ「ハイ、母公アは」ト云ッたばかり、思はずワット泣出せば、

胡「コレサお民、泣いて居ては事が分解ぬ。併し是まで氣を張詰めて居たのを、此身が歸ッたので氣がゆるんだから、只歎しくなるのでもあらうから、夫は道理だが一通り、樣子を聞かねば此身も何樣やら安心しないが、其處で母公さんはどうぞなされたか」ト言はれて漸々顏をあげ、

たみ「アノ母公は那所の佛樣の中に居りますヨ」ト言ひかけて又むせかへれば、胡平太も驚きながら佛壇の側へ立寄り、戒名と年月を讀下して眼をしばたゝき、

胡「夫では母公さんは去年此月しかも今日が其當り日、寔においとしい事であつたノウ。併

を書記せしを、聲々に賣歩くにぞ、お民は猶も殘惜しさに、若やと思ひ駕の中より、かの番附を買ひとりて、繰返しつゝ讀下せど、森胡平太と言ふ名の見えねば、是にていよ／＼力を落し、是非なく我家に立歸り、獨りつく／＼思ふやう、胡平太殿の心だて、斯る時節にいたりなば、他より先に讐を討ち忠義を顯し給はんに、圓覺寺での答といひ、又番附の面と言ひ、更に森とも胡平太とも、見えぬは奈何なる故ならん。是にて思ひめぐらせば、別れて丁度三年越し、風の音信も聞えぬは、若本國へ歸りて後、病死にてもなされしか、然らずば假令忠義の爲に妻子を捨るがならひとて、此鎌倉に在しなば、最期の節は餘所ながらも、顏見せに來て下さんせうに、其事なきはいつしかに、世に亡人となられしかト、思ひかねては樣々に胸を痛むるばかりにて、誰にたよりて此事を聞く術もなき心の苦しさ。兎角する間に其年も、空しく暮れて立かへる、春とし言へど物おもふ、我身は秋の心地して、慰めかねて日を送れば、睦月も夢とはや過ぎて、時に如月初四日 義士の面々四家へ御預けのうへ切腹仰付けられし日也 此日は去年世を去りしお民が母の一周忌の命日に當るにぞ、檀那寺の僧を招き、心ばかりの回向を賴み、日も暮れければ佛壇へ燈明を備へツヽ、宵まどひする兼松を、傍に寐かして只獨り、過ぎつる事など思ひ出し、鬱として居る折しも、

「お民／＼」ト門口にて、呼ぶはたしかに良夫の聲と、驚きながら手燭を灯し、門の戸明けて顏

第四十一回

這回は第六編の上之巻と引合せて見給ふべし

偖もお民は兼松が、夜討の引揚に出合うて、義士の犇に搔抱かれ、大高子葉の短冊と、一包の金を貰ひしが、お民は我子を誰とは知らず、抜身の鎗を提げたる人が、さらひ行きしと聞くよりも、狂氣のごとく駈付けッヽ、詫びて我子を貰ひし事ゆゑ、何者とも知らざりしが、後にて段々噂を聞けば、鹽谷家の浪人が、高野の館へ討入つて、本意を遂げたる引揚と、慥に樣子の知れしかば、偖は良夫胡平太どのも、其うちに在せしならん。敵を討つて切腹するは侍のならひと聞けば、さらさら夫を歎きはせねど、息あるうちに今一目、逢ッて餘波も惜しみたく、又二ッには兼松にも那が和子の爺さんぞと、いうてお顔を見せ置かば、成長なつた後までも心殘りがあるまいと、夫より俄に駕を雇ひ酒繩へと急ぎッヽ、圓覺寺の門に至り、鹽谷家の義士のうちに森胡平太といふ人あらば、竊かに對面爲たきよし折入つて賴みしに、四十七人の其うちには、左樣の人はなしと言ふにぞ、お民は忽地望を失ひ、すご〱歸る途々にて、速くも夜討の番附とて、義士の名前

本意を遂ぐるも今須臾。某も遠からず鎌倉へとこゝろざせば、貴殿は先へ那地へ下り、原郷右衛門をはじめとして、一味の者と心を合せ、敵の様子を窺はれよ」ト言はれて歡ぶ胡平太が、斯くまでに深き所存と知らずして、愚にも疑ひしを、今更悔しくおもひける。

是より胡平太が鎌倉に下り、義心をあらはす事より、節婦お民が身の終まで、次の巻に説出せば、よく〳〵前後を見合せ給へ。

は非道に斫られもせず、如何やせんと躊躇しが、兎ても角ても生置いては、大星どのの身のさまたげ、猶豫は不忠と思ふにぞ、我と心を鬼にして、

胡「和女の歎も理ながら、生けて置かれぬ其仔細、今打明けては何樣も言はれぬ。和女を殺したその跡では、我も追付切腹なし、來世へ往ッて言譯する。過世の因果とあきらめて、命をたもれ」ト尖き太刀風、既に危きその折しも、忍頭巾に面を躱し、始終の樣子をあなたなる、小陰に佇聞く侍が、夫と見るより進み寄り、持ッたる扇に胡平太が刄をぱつしと打落し、うろたへまはる竹之丞に、速く迯げよと手で知らすれば、地獄で佛と那侍を伏拜みッヽ竹之丞は、後をも見ずして走りゆく。胡平太は討留めんと思ふ姣童を取り迯し、怒に堪へかね取り落せし、刄を手速く拾ひあげ、

胡「おのれ曲者遁さじ」ト斫つてかゝるを侍は再び扇に受止め、

侍「慌りめさるな森氏」ト言はれておどろく胡平太が、

胡「然う言ふお聲は大星殿。」

侍「コレ」ト止めて四邊を見まはし、「感じ入ッたる貴殿の心底。其赤心は知りながら、諫を用ひず樣々に、身を放埓に致せしは、敵方の間者まだ洛中に竊み居るゆゑ。最早時節に赴けば、

をかはす身のこなし、素より那は色子にて、武藝を知るべき者ならねど、習ひおぼえし俳優の業に馴れたる取りまはしに、飛鳥の如く駈廻り、透を窺ひ胡平太が刄持つ手にすがりつき、

竹「アレマア待つて下さりませ。私に何の咎あつて」ト急度見あぐる姣童の顔、折しも出る月影に、胡平太つく〴〵うち詠め、

胡「でも麗しい目元口元、その艶色が其身の仇、咎も怨も無けれども、生けて置いては主家へ不忠、不便ながらも手にかくる。身の薄命と觀念して、成佛爲やれ」ト言ひながら、振り離しツヽ斫らんとする、其手に猶も取りついて、

竹「私が生きて居るときは、主家へ不忠と被仰るは、何樣いふ譯か知らねども、定めて夫には種々と深い仔細もござんせうが、私ぢやとても此樣な卑しい勤を爲ますのも、たツた獨りの母公さんを、樂に暮させたいばかり。今宵貴公の手にかゝり、私が死んだと聞かれたら、常から氣弱い母公さんゆゑ、若つきつめてどの樣な、悲しい事にもならうも知れず。よし夫までにならずとも、私が亡くば誰を杖、誰を力に明暮の憂を慰め給はうぞ。死ぬる此身は厭はねど、後へ殘ッた母公さんに、歎をかくるがおいたはしい。爰の處を聞きわけて、何卒たすけて見遁して」ト歎きつ詫びつかき口說くを、つく〴〵聞いて胡平太は素より慈善心ゆゑ、母の歎と子の赤心を、聞いて

女「オヽ怖やの。お前さんの其口にかゝッては、何處の女子もみんなころりと爲ますといな。莫大お樂な事やなアホヽヽヽ」

男「トキニ此樣な事言うてる手間で、芝居など一幕見て往きんか。」

女「ホンニ芝居と言へば、竹之丞が宜い評判ぢやおまへんか。」

男「あの竹之丞はたしか山科においでる鹽谷樣の御家老さんとやらが、きつう贔屓ぢやげな。えい旦那持ッて仕合な者ぢやなア」ト咄すを這方に聞居る胡平太、宵より此邊を立廻り、竹之丞の歸りをば、今や遲しと待つ程に、つひした噂咄にも大星が墮弱な取沙汰、聞くに无念さ口惜しさ、是皆童妓がなす所爲と一筋に思ひつめ、爭で今宵は過さじと、河原に姑く徨めば、兎角する間に小夜更けて、涼みし人も散々に自己が家路へ立歸れば、夜店の灯も皆引けて、蒲鉾小屋の灯火のみ、僅に殘る眞夜中過、息せき駈來る四手駕を、夫と見るより胡平太は、間近く寄ッて聲をかけ、駕の內はト問ひかくれば、供に附添ふ送りの者が竹之丞と答ふるにぞ、矢庭に刀を引拔いて、威に四五度振廻せば、駕舁共は打駭き、駕を其儘打捨て、ヤレ人殺し〳〵と供の男も侶倶に、雲を霞と迯げてゆく。爲濟したりと胡平太は、駕の垂を刎上げて、戰へ競く竹之丞を駕より外へ引出し、覺悟しやれト振揚ぐる刄の下に竹之丞は、身を沈ませて飛びしさり、又斫りかくるを右左と、刄

男「トキニおすまさん、何ぢややら莫大美粧てぢやが、今宵は何がな樂でもあると見えるの、ちくしやうめ。」

女「エヽモウお許しぢやアな。私ヤそないな氣ぜんではありやせんがな。お前んと斯ういふ情合になつたを家内でてツきり氣が付いたやら、母公さんが當事らしい事ばかり言うてぢやさかい、私や最う氣が痛んでならんわいな。夫にお前んは浮氣らしい、此間も備後安名なるべし是は揚屋のの裏口から、何樣やらの唄女さんと手々引合うて出なされたを、私や能う知ツてぢやわいな。」

男「なんのそないな事して宜いものか。そりやてツきり誰ぞが二個の和合をつゝかうてゝ言うた事であろぞイ。」

女「アレ、まだじやら〳〵言うてぢやなア。此春もその唄女さん連れて、太秦へ櫻見物にお出でたぢやおまへんか。」

男「アリヤ據ない附合で。」

女「エヽ最う置いてお呉れいな。何の唄女さんに附合が入つたものいなア。」

男「ハテモウ疑深い女子ぢやなア。爰に此樣な美麗い者を置きながら、唄女ぐるひ爲たからとて、娼女買に往たからというて、何で面白い事があるもので。」

も力及ばず、さりとて止むべき事ならねば、獨りつくぐ〳〵思案を做すに、今大星が現を拔すは瀨川竹之丞とかいふ俳優、且那さへなくば大星が不行跡も少しは直らん。其時諫めて本望を遂する所存を出させん。不便ながらも僞せ討のさまたげになるあの姣童、今宵もたしか木屋町の例の二階へ大星が竹之丞を呼ぶは必定、往來の道は四條河原、歸りを待伏せオ丶夫ト、狹双合せて胡平太は日の暮るゝをぞ待居たる。

名に聞えたる四條の晩景、納涼の頃は取りわけて、河原に夥の茶店を掛け、或は夜芝居辻講釋、おでん燗酒あんばいよし、鱧も骨切り宇治丸の蒲燒鬻ぐ廊なンど、軒を列ねて賑しく、唄女娼妓を引連れて、ざゝめく一群あるときは、白手拭のぞめき連、押しつ推されつ河原の繁昌、晝の暑さを捨てに來る、實に洛中の金錢は、這所に寄る歟と疑ふまでに、目を駭かすありさまなり。折しも茶店へ寄り來る二個、

男「モシイナア、善哉一膳ヅッおくれんか。宜う甘うしてヤ」

此善哉といふは、江戸にていふしるこ餅に類せしものなりとは、云はでものことながら、京攝のやうすを知らぬ子供衆の爲にしるす。

茶や「ハイ、いんま宜うして進げますわいな」

癖なれば、言はでも推し給ふべし、胡平太お民が身のをさまりは、是より下に綴り出せば、よくよく初をてらし合せて、前後の首尾を見給へかし。

第四十回

偖も森胡太平は亡君の讐を報ぜんため、大星と侶倶に本國赤穗を立退いて、京師六條の片邊に幽かなる家を借り求め、姑く這所に假住居して、鎌倉の樣子を窺ふ程に、由良之助は鎌倉より洛中へ入れ置かるゝ、上須美家の間者の爲に密謀を悟られじと、態と身持を惰弱になし、祇園島原は云ふに及ばず、或は墨染撞木町など、世に聞えたる花街を、酒興に事寄せ放心歩きて、啞方者の名を取りしが、尙是にても飽足らでや、其比歌舞妓の女形にて瀨川竹之丞と呼ばるゝ者を、大星深く寵愛して、那が男色に心を亂し、日夜に放埓彌增にぞ、一味連判の輩も、初の程は敵方に油斷をさする計略と其儘にて差置きしが、中々當時の爲體、復讐の事なぞは思ひ忘れし有樣なれば、最歎かはしき事におもひ、心を痛むるその中に、胡平太は大星には別けて恩義を受けたる者故、何卒本心に立歸らせ、一日も速く亡君の御憤を晴さんものと、人なき折を見合せては、言話を盡して諫むれども、大星は何時とても空吹風と耳にも留めず、只現なきありさまに、胡平太

情通なかとなり、後は母にもうちあけて、夫婦の和合をなすほどに、お民が腹に一子をまうけ、名を兼松と名號つゝ、一年あまりもおくるうち、兎角して胡平太は、はや在番の年も満ち、本國へ下るの時節になれば、豫てはお民親子の者を國元へ連下り、表立ちて夫婦にならんと堅く約束せし事なれども、初めての在番に女を連れて戻ッては、上向の聞えも宜しからず、一度國へ立歸り、上へ願を達てのち、親子三個術をよく本國迎へ取らんと、此旨お民に言ひ聞せ、其間親子の者が不自由をせぬやうにと、餘程の金子を殘しおき、偖胡平太は日を定めて本國へ下りしが、お民を妻に娶らんといふ願をいまだ立てざる間に、鹽谷家に騷動起り、判官切腹と聞くよりも、忠義无二の胡平太なれば、軈て大星に一味なし、讐討と心を定めし上は、親妻子をも見返らじとある、誓詞の面に深く愧ぢて、鎌倉に殘したるお民親子が怨みんとは思ひながらも音信をせず。お民はお家の滅亡を人の噂に聞くよりも、良夫の身のうへ氣遣しく、今日は便の聞ゆるか、翌日は音信の知るゝかと、心ならずも待つ中に、母は敢なく此世を去り、悲しき月日を送るにぞ、胡平太より惠まれし金も大方遣ひきりしに、强八が非義非道、少しの物をも搔取られ、いよ〳〵貧苦は募りけり。這所の物語は第六編に著したれば、事の前後するにより、看客疑ひ給はんが、是等は例の筆

れば、梅本といふ茶店へ出るお民さんといふ娘が、店へお連れ申したといふ事でございますから、奥山中を尋ねましても、那大降で茶店といつては一軒もございませず、夫から段々と尋ねまして、漸々此裏といふ事を聞出しました。」

胡「夫は別して大儀であつた。此身もとんだ痴漢に出會つて迷惑したうへに降り込められて、大きに此家の世話になつた。併し箇樣な事は人の耳に入ると種々な批判をするものだから、屋敷へ歸ツても喧嘩の事は素より、此家に立寄つた事なぞは、必ず沙汰を致すまいぞ。」

市「ヘイ、夫は宜くこゝろ得て居ります る。」

胡「夫では少しも暮れぬうちに、急いで歸る事と致さう。」

たみ「オヤ、夫ぢやアどうでもお歸りでございますかへ。何卒屹度お近いうち」ト半分言はせず胡平太は、市内が聞く前ゆゑ言ッては悪いと眼で知らせ、挨拶さへもそこ〳〵に、忍んで路次をぞ出行きける。

却てのち胡平太は折々此家へ歩みを運び、お民の母にも對面なし、親の言葉を無にせじと、種々に心をつけ金銀なぞ合力しつ、母子が貧苦を救ふ程に、月老の結びし緣にや、お民は胡平太を深く慕ひ、胡平太もまたお民が心の貞節にして眞實あるを憎からず思ふにぞ、終に

胡「ナニさきつい事もあるまいから、餘所を借りたりなにか心配を仕なさるには及ばない。隨分飛々往かれない事はないノサ。」

たみ「イエ〳〵、夫でも御足が汚れてはわるうございますから」ト云ふとき門口の障子を明けて、中間體の男、

男「モシ、梅本のお民さんとは此方でございますか」ト言ひながら奥に胡平太の居るを見つけ、「イヤ旦那さま、這所にお在なさいましたか。貴公のお在先が知れませんで、方々とお尋ねまうしました」

胡「オヽ市内か、大儀々々〳〵。宜く夫でも這所に居るのが知れたノウ。」

市「ヘイ、先刻大鷲樣へお手紙を持ッてまゐれと被仰いましたから、お屋敷へ立戻りました處が、大鷲樣はお出違ひゆゑ、お在先まで參りましたので、大きに手間どりまして、夫から貴公がお待かねであらうとぞんじますゆゑ、急いで參りますと、途中で雨が降り出しましたから、お出入の刀屋へ寄りまして雨具を借り受け、たしか觀音の本堂にお待ちなすつて入ッしやるやうに被仰いましたから、お堂の内を一遍と尋ねましても知れませず、其内噂を聞きますれば、最前途中で喧嘩の樣子、どうか貴公にお似まうしたやうな咄でございますから、猶委しく承ります

となつて、然うまで御親切に被仰つて下さるとは、これも大かた信心する觀音樣の御利益か、お爺さんの引合せか、私やァ最うこんな嬉しいことはございません。併しこんなに大そうにお金なんぞを頂きましては、寔にお氣の毒でございますから、是はマァ御返しまうしますヨ。私の願はお金も何にも頂かないでも、末永くお見捨なさらないでさへ下さいますと、夫が何よりか有難うございます。」

胡「イヤナニ、親々が昔の所縁をぞんじれば、中々麁畧に致す存寄は決してないから、お前の方でも纔のものを彼是と言つて呉んなさると、何分私が氣の毒な譯だによつて、なりに是は納めて」ト遠慮するを無理に渡し、「トキニ種々のお話で、歸りの刻限が遲なはッた。まづ今日はお暇に爲ませうから、お母人さんがお歸んなすつたら、私がまうした仔細を委しく咄してお呉んなさい」ト云ひながら立たんとするにぞ、

たみ「まア鳥渡お待ちなさいましョ。雨は止みましたけれども、道が惡うございますから、あのお履物ではいらッしやられますまい。私の處は女ばかりで、お貸しまうすやうな物がございませんけれども、お向の内には何でもございますから、鳥渡借りてまゐりませう」ト立出るを急におしとめ、

第三十九回

當下胡平太は懷中より小判三兩取り出し、鼻紙にざつと包んで、
胡「偖々不思議な御縁でお目に懸り、年頃の本意を遂げて、是程歡ばしい事はございません、親どもの言付には、里見氏の行方を尋ね、今に浪々してござるなら、昔のよしみを忘れぬため、およぶ程は合力して、折を見合せ歸參のなるやう、骨を折つて世話致せと、まうした言葉がございますから、十右衛門さまは居られずとも、其娘のお前の事ゆゑ、及ばずながら此末とも御力にもなりませう。就て是は餘り少しでお恥しい譯だけれども、今日お目に懸らうとは思ひがけない事だから、持合せと云ッても纔是丈、又近いうち寛々參ッて母公さんにもお目に懸り、往々お母子の身の落付をも御相談まうさう」ト眞實見ゆる胡平太の言話に、お民は嬉しさの身にこたへて、容を改め、
たみ「今日はマァ何樣いふ吉日でございませうネエ。ふとお前さんにお目に懸ッたのが御緣

お前の親公が拔討に斫込む脇差受損じ、辨助は肩先を四五寸ばかり斫破られ、口に似合はぬ未練の辨助、痛痍を抱へて逃出すを、おのれ辨助逃さじと、白刄を振りあげ追蒐る、折しも私の親左内其席に居合せしが、夫と見るより後から親公をしつかと抱留め、なだめて其場を納めしゆゑ、辨助も命恙なく無事に濟まんと思ひの外、此事表沙汰となり、辨助は役儀を放され、お前の親公は御勘當、本國を出られしより、其後行方は知れざるよし、親が私へ度々咄し、幸此度鎌倉へ在番に當りしゆゑ、御當地は繁華にて諸國の人の集り所、心に掛けて尋ねたら、廻り逢ふ瀬もあるべきぞと、親の差圖に從つて、夫とはなしに人にも問ひ種々心を盡せしに、思ひがけなく今日這所でお前に逢つての物語、永々浪々せらるゝうち、二君に仕へず其うへに、拜領の二品までお前に讓ッて、細々と遺言されし心ばへ、此事左内が聞いたなら、嘸滿足に思はうに、親の左内も去年の冬、私の留守に本國で亡死たとの知らせの文通。親と親とは世を去つて、其子と子とが廻合ふ、是も不思議の因緣」ト過來方を語り合ひ、四ッの袖をぞ濡しける。

何様いふ御縁か存じませんが、不思議に貴公にお目に懸り、最前からの御様子を、見れば見る程お頼母しく、ツイ長々しい過去咄、不便と思つて下さいますなら、お爺さんの存念を」ト言ひさして又泪ぐむ、心を察して胡平太も、侶に哀れと鼻うちかみ、

胡「偖々驚き入つた親公の心體、その遺言を受けついで、無にせまいとするお前の孝心、男の身でもおよばぬ事。夫に就て私もまた些と心當りな事があるが、若やお前の親公の名は里見十右衛門とは被仰らぬかへ」

たみ「夫を何様してお前さんが」

胡「ハテ、其里見氏ならば、お前から頼みがなくとも、お世話をせねばならぬ義理サ」ト云はれてお民は何故とも仔細は知らねど頼母しく、いそ〳〵立ツて佛壇より親の位牌を取りおろし、

たみ「是がたしかな證據でございます」ト云ふを胡平太受取ツて、位牌の表を讀下せば、法名仁譽卽是居士、俗名里見十右衛門。

胡「フウ、此位牌を見るからは、いよ〳〵義理ある里見氏、とばかり云ツては分解まいが、私の親は左内と言うて、お前の親公十右衛門さんとは、子供の時から竹馬の朋友、或時同じ家中の侍士矢居辨助といふ者と、お前の親公が武藝の爭、果は互に言ひ募り、我手の内を見すべきぞと、

ひつき、五年越のぶら〳〵病、藥も灸も驗なく、私が丁度十四の年、迚も治らぬと思つてか、母人と私とを枕元へ呼寄せて、他の事は少しも云はず、此小袖と短刀は殿樣から拜領の品、此身の命があつたなら、侍の聟をとり、此二品をも讓らうと、豫ては思ッて居たなれど、斯う病が重つては、翌の程をもはかられず、息あるうちには望も叶はぬ。此身が死んだ後とても、假令貧苦に逼らうと、此二品は系圖とも父とも思つて肌身を放さず、ならう事なら鹽谷家の、身分は輕い仁にもせよ、心ざしのよい人に其身を任せて、末永く此身の位牌を鹽谷樣のお家へ殘してくれるなら、此身が歸參をしたも同然。今言ふ事を宜く守り、浮氣な色に迷はされ、仇し男に誘はれて、親の名までも汚すなト細々との御遺言。夫が此世の名殘にて、其夜もさらず果敢ない別れ。夫から心を勵して、最期に遺せしお言話を無にせまいぞと思ふ故、山の茶店へ出る度に、男に袖褄引かれるは、永いうちには幾度か、其度々に表面では節を合せて居ながらも、心の錠は外しもせず、多いお客の其內で、鹽谷樣の御家中と見請けるお方がございましても、大方は御酒のうへか、夫でなくともじやら〳〵と只最う浮氣なお咄ばッかり、何卒して賴母しいお方にお目に懸ッたなら、お爺さんが二君とやら、他のお主へ奉公せず、一生淸く終つた事をお噺しまうした其うへでは、御紋付を證據にして、御遺言をも立てたいと思つて暮す永の年月、

公のお言語つきと云ひ、召してお在でなさるお羽織の御紋と云ひ、どうも他の御方とは思はれませんヨ。萬一貴公が私のまうすお屋敷なら、お聞きまうしたい事がございますから、何卒實明を被仰つて下さいまし。」

胡「イヤ、然う委しく知られたうへは隱しても詮ない事、實はお前の察しの通り、鹽谷の家中で森胡平太と云ふものだが、夫について聞きたい事とは、マア一體何樣いふ事だネ」ト云はれてお民は押入の葛籠の中より取り出せし、羽二重の紋附と袋入の短刀を、胡平太の前に差出し、

たみ「アノウ、此品を貴公萬一お見知りはなさいませんかへ。」

胡「ハテな、此小袖といひ短刀まで、皆鷹の羽の御紋付、是が何樣してお前の内に」ト不審さうに問ひ返され、お民は思はずはら〳〵とこぼす涙をおし拭ひ、

たみ「是につけては長いお的話、お聞きなすつて下さいまし。元來私のお爺さんは鹽谷樣の御家來で、些は人にも知られたもの、武術のうへの爭から、朋輩に瑕疵を負はせ、その儘御暇になりまして、本國を追ひ拂はれ、所々方々と流浪するうち、今の母人と夫婦になり、此鎌倉へ落付いて、子供を寄せての手習師匠、おもひのほかに繁昌して暮すうちに私が產れ、此樣子で往ツたなら、一株にも取りついて、宜い壻取ツてどうしてと、思ツてお在での其中に、お爺さんが煩

胡「イヤ先刻も云ふ通り、他に人もない家に、お前と私が斯うして居ては、どうやら影護やうなれど、何か尋ねたい事があると言ふを、聞かぬのも道でなく、又此樣に態々取設けなすつた物を、手を掛けないも餘り偏屈なやうだから、田舍堅氣を捨て、一盞御馳走にならうかネエ。併し私はとんと此方は不得手だから、何卒酌いでは呉んなさんな」

たみ「オヤ然うでございますかへ。寔に左樣被仰つて下さいますと、先刻のお禮が致したさに、這所までお連れ申した甲斐があつて、どんなにか嬉しうございますョ。常はお飮んなさらずとも、お寒うございますから、お燗のよいところを、お一盞お過しなすつて下さいまし」ト是より須臾盃の取遣りするうちに、素より飮めぬ口なるゆゑ、胡平太は目のふちをほんのりとさせて、

胡「トキニ、思はず飮過して大きに醉ひました」

たみ「オヤねつからお飮んなさりも爲ませんでホヽヽヽ。それは然うと、斯う申しては何樣か不躾らしうございますが、貴公のお屋敷は、たしか鹽谷樣でございますネエ」

胡「エ、ナニ然うでもないのサ」

たみ「なる程こんな所でございますから、お隱しなさるのも御尤でございますけれども、貴

すけれども、折角お燗まで致しましたから、何卒お一盞」
胡「イヤ心ざしは辱いが、若い女中とさし向で、斯うして咄を爲て居るさへ、何とやら人の思はく、殊に酒宴なぞ致したと申す事が、屋敷へでも聞えては、濟まない譯だから、ひらに是はお預けまうさう」
たみ「然う被仰るのを無理にとは申しませんが、今に母人も歸ッて來ますし、夫に私やア少しお前さんにお聞き申したい事がございますから、永くとは申しませんから、最少しお在でなすつて下さいまし」ト思ひあり氣に引留められ、流石否とも言ひがたく、困じ果てぞ居たりける。

第三十八回

折から又もや降出す村雨、車軸を流すばかりなれば、胡平太は今更に歸らんとするに歸りもやられず、殊にお民が何事やら聞きたき事のありと言ふを、聞果てぬも心ならず、其うへ些の酒肴も心を盡せし饗應なるを、物堅くは言ふものゝ、畫餅にさせんは有繫にて、思案を定めて座に落ちつき、

しうございます。世話を爲たく〳〵と云ひますけれども、私の方から那人に出したお金も、些とではございませんョ」ト放心々々と言ひしが心づき、「ホヽヽヽはじめてお目に懸ッた貴公に、こんな事までお咄しまうして、嘸はしたないものだと思召すでございませうネエ」ト顏赤らめてさし俯向くを、胡平太は程よくうけて、

胡「イヤモウ、然ういふ事は世間にまゝある事であらう。扨種々な事で大きにお世話になッた。雨も小降になつた樣子だから、私は最うお暇に爲ませう」ト云ふをお民が引きとゞめ、

たみ「アレマア、少しお待ちなすつて下さいまし。あんまりお寒うございますから烏渡一口」ト云ふ折しも、豫て云ひ付け置きたるにや、門口より仕だし屋が、

しだし「ヘイお誂でございます。店が取込んで大きに遲くなりました」ト肴の入りし岡持と一升德利を置いて往くにぞ、お民は手ばやく酒の燗を付け、肴を丁足の膳へ乘せて持出し、

たみ「寔に何にもございませんけれども、ほんのお寒さ凌ぎに、お一盞召飲つて下さいまし」ト言はれて胡平太は當惑せし顏付にて、

胡「何樣もこんな心配に預つては、寔は迷惑いたす譯だ。」

たみ「アレサ然う被仰つて下さいますと、何ともかとも申しやうのない程お氣の毒でございま

本と書きし障子の其内に、何やら眞な噺聲、

胡平太「扨とんだ事からして、種々なお世話になつて寔に氣の毒千萬な」

たみ「イヽエ、私こそ此樣な穢い所へお連れ申して、寔にお氣の毒でございますけれども、店では禮をまうさうにも、急に雨が降ッて來て、詮方がないのでございますから、何卒御堪忍なすつて下さいまし。先刻は叔父さんがひよんな事を爲出して、萬一貴公が御了簡なさらずば、何樣せうと思ひましたヨ」

胡「イヤナニ、全く惡氣でもあるまいが、酒が過ぎての事であらう。併しあゝいふ叔父を持つては、何かにつけて心配で有らうな」

たみ「ハイ有難うございます。斯うまうすと何樣か恥をお隱しまうすやうでございますが、那人は私には血脈の叔父さんぢやァございませんけれども、お爺さんが亡死てから段々不仕合が續いて、詮方なしに私がこんな商賣をするについて、あの人が種々世話をして呉れましたから、ツイ叔父さん〳〵とまうしたのを、今では先から叔父顏をして、無理な無心や何かを言ひますので、寔に困りますヨ。是と知つたら初つから、あんな人の世話にはなるまいものを、其時分には母人も私も世間の樣子は知りませず、實明に親切な人だと欺されて賴んだのが、今ぢやァ口惜

屋の娘が中へ這入ッて、其武士をば自分の店へ連れて往く様子だつけ。」

中間「へゝエ、夫では雙方とも怪我もございましなんだか。ヤレ〳〵夫で少し胸が落付きました。そして其娘の店は何所でございますか。」

×「然うサ、此身も土地の者でねへから、委しい事は知らねへが、たしか奥山の梅本と言ふ茶屋へ出る、お民といふ娘だといふ事だ。併し葭簀張の店だらうから、此雨ぢやァ店も仕舞つたらう。」

中間「左様でございますか、何に致せ様子が知れて有難うございます。兎も角も先を尋ねて見ませう」ト心ならずも中間は、足を速めて走せゆきける。

這所も同じく長谷の境内、その中廓の中程なる何某寺の門内へ、這入れば當世な裏長屋、九尺二間の棟割に、或は縫物女囲れ女、前句の判者陰陽師、茶店へ出る娘など、軒を並べて明暮も、野夫を離れし附合は、舌先で丸めて浮氣でこねる、浮いた暮しか仕出し屋の、印の付いた岡持と、損料布團が路次口へ這入らぬ日もなき榮枯得失、假の浮世に假の宿、借りて世渡るありさまは、盧生が夢の五十年、その邯鄲の夫ならで、混膽長屋と渾名せし、浩る中にも表面のみ節を合せて蓮葉の濁りにそまぬも多かるべし。偖この路次の入口からはいれば右へ四五軒め、門の印に梅

もつき、奥ゆかしくも見ゆるものなり。浩る折しも向より中間らしき一個の男、雨具を携へ烏鷺々々と、左邊右邊を見まはしながら、多くの人の雨舍りせし軒下へ來て小腰をかゞめ、

中間「モシ、少し物が承りたうございます。萬一這處等へ、鷹の羽の紋を付けた黑の羽織を着たお武士が見えは致しましなんだか」

▲「アハヽヽ此賑やかな往來だものを、黑の羽織を着た武士は十人も二十人も通つたから何れだか分解ねへ。こいつは餘程六ヶ敷尋ねものだ」

●「違ねへ。こりやァ這處で聞くより先の辻番で聞く方が宜からうハヽヽ」ト言ふ中より一個の男が、

×「待ちなョ、鷹の羽の紋と言へば、萬一先刻生醉に喧嘩を爲かけられて困つた武士ぢやアあるめへか。たしか羽織の紋が似て居たやうだッけ」ト言はれて中間は恂りせし樣子にて、其武士の年恰好、大小衣服の模樣まで聞合せて、いよ〳〵驚き、

中間「モシ、夫に違はございません。そして其喧嘩のをさまりは何樣なりましたか、御存じならお聞かせなすつて下さいまし」

×「ナニ喧嘩と言つて別でもねへ、近所の惡漢が突かゝつて物に爲やうと爲たところへ、茶

㊀「アレサお喜さん、最う些と其方へ寄ッてお呉れでないと、お前の提げておいでの駒下駄の泥が、私の帶へさはるハネ。」

×「オヤ然うお言ひだけれども、是より這方へ寄ると、天滴が袖へかゝるものを、お前もつと然うお寄りな。」

㊀「夫でも叓の隅に犬が寐て居るから、最う是よりか寄られないヨ。」

×「オヤマア犬ぐらゐが何だネエ、追出してお仕舞な。」

㊀「私やァ否、萬一喰付れて御覽な、大變だハネ。夫だものを何樣して寄られるものかネ。」

△「オヤ〳〵お前達は何を喧嘩をお爲のだへ。サア〳〵私が這方へ寄ッて進るから、二個が何方も濡れないやうに、和合よく爲てお出で」ト云はれて二女は氣の毒になりしか、

㊀「アレサ、夫ぢやァお前さんがお濡れだと悪いから宜うございますヨ。サアお喜さん、私が犬の居る方へ入替るから這方へお出で。」

×「ナァニ宜いよ。私が用心をして、駒下駄の泥のつかない樣にして居るから」ト少しの物の言ひ品にて、角め立つのも和合なるも、實に賣言話に買詞とは、よくも譬へし浮世の人情、是等はつひした事ながら、兎にも角にもお女中方は、溫和にしとやかなるが、自と人の目に

いろは文庫　巻之十九

第三十七回

彌生の空の定めなく、今まで春和に晴渡りしも、忽地降り出す村雨に、開帳參り花見連、或は辻賣小屋掛商、おの〳〵濡れじと押合ひへし合ひ、上を下なる長谷の境内、這所の軒下那處の木陰と、笠舍りする貴賤老弱、空を眺めて口々に、

▲「コウ、不宜な時分に降出したぢやァねへか。折角の御開帳を无體に爲て仕舞はァ。」

●「ホンニサ、途中で降られた程意氣地のねへものはありやァ爲ねへ。アレ見ねへ、隨分小當世な娘だが、びつしより濡れた日傘をさして、べた〳〵蹴泥の揚ッた足へ、緋縮緬の湯卷が濡れて引ついた所は、さつぱり色氣のねへ容形だ。」

▲「併しあの娘の事ばかりは言はれねへぜ、隨分此身達の風俗も相應に可笑しいから。是と知ッたら、先刻堀の若竹で傘を一本借りて來れば宜かつたに、氣のつかねへ事をした」ト云ふとき、這方の軒下にては二三個の女連、

いろは文庫第七編序

虚から出たる實にもあらず、實から出たうそでもなく、正直正路の正史實傳、誠忠義士の外傳の、世になほ普からざるを、拾ひあつめし假名策子、いろは文庫と題號し甲婓に、かの難波津の歌をさへ、習ひおぼえぬ小女子にも、讀めて譯りていにしへの、事實を知らする手引の近道、よしや孝悌忠信の、夫には企及ばず共、亂離の人とならじとのみ、おぼし玉へと勸むるも、爰に七編しちくどき、例の作者が老婆心切、替らぬ事をくだ〳〵と、述べて綴りて序言に換ゆ。

乳房ほど垂れてめでたし實のり稻

豐に取入る米の秋

爲永春水記

し先でございますから、鳥渡お寄んなすつて下さいまし」ト言ひつゝわりなく伴ふにぞ、胡平太も否みかねて、後につきつゝ行く程に、爰に群集の人々が、

▲「コウ、あの武士も餘ほど氣の宜い男ぢやアねへか。此身だと先の野郎を无口て歸しやア爲ねへけれども。」

×「ナニあれが眞正の武士サ。今あすこで拔いて見なせへ、假令斫得になるまでも、あんまり譽めた咄ではねへはネ。其所をおとなしく濟した所は、餘程落付いたものサ。」

「併し那處へ那の娘が出ねへとむづかしい處だぜ。」

▲「違ねへ、此身ア武士より處女の方が肝心だ。年はやう〳〵十六ばかりだが、容貌と言ひ取りまはしといひ、隨分那なら情人にもつて遣られるの。」

●「ヘンお前は遣る氣でも、其顏色ぢやア向で眞平だトヨ。」

▲「おきやアがれハヽヽ。トキニ那娘が武士を店へ連れて往つて何樣するだらう。何だか氣になるぜ。」

×「ナニ其譯は七編に委しく出すといふ事だから、出たらば速く借りて見なせへ。直に譯がわかりやす」ト噂たら〴〵西東おのがまに〳〵別れける。

ぢやァ了簡されねへ。」

たみ「アレモウお前も強情だネエ」ト言ひながら、髪にさしたる後差の簪を拔いて、「お前も然う言ひ出しちやァ只はお歸りでもあるまいが、元はと言へば私の店へ無心においでのが出來ないからの腹立で、斯ういふ事になつたのだから、其元手とやらを進げたいけれども、今爰には持合がないから、是をどうとも宜い樣にして、速く何處ぞへ往つておくれ」ト言はれて強八つくづくと思つて見れば此出入、言ひ募つて見た處があんまり物にも成りさうもなく、品によつては拔きかねぬ那武士が顏色に、口は立派に叩けども、心に五分の恐怖をいだけば、お民が言葉を幸に、宜い退しほとおもふにぞ、一本の簪でも取らぬは損と手に受つゝ、ちよいと目方を引いて見ながら、

強「さつぱりふめねへ代物だが、手前があんまり氣を揉むから、此場は是で濟して遣るぞ。命冥加な盜賊め」ト へらず口を利きながら、人立の中を潛り拔け、はやくも影を隱しける。お民は跡を見おくりながら、胡平太の前に小腰をかゞめ、

たみ「嘸貴公は憎い奴とお腹立でございましたらうに、御了簡なすつて下さいまして、寔に最うありがたうございます。お禮をまうし上げたいにも、爰は途中で人立もあり、私の店は此少

娵「アレマァ待つて」ト言ひながら夥の人を押分けへしわけ、現はれ出でたる一個の處女、胡平太の手に取りすがり、「お腹の立つは御道理でございますが、わちきが御詫をいたしますから、何卒御了簡なすつて」ト言ふを強八聞きあへず、

強「誰だと思やァお民だな。汝が構つた事ぢやァねへ。入らざる世話だ、其所放せ。」

たみ「エヽマァお前もめつさうな、お武士さまにそんな事を言つて濟むものかネ。」

強「濟むも濟まねへも入るもんか。コレよく聞けヨ。昨夜も間をわるく打たくられ、素廣袖一枚で寒さァ寒し、隨神門前で五ンつく飲たほろ醉機嫌、手前の店へ寄つて、何ぞ元手になる物でもいたぶり出さうと思つたら、母公ばかりで手前は居ずヨ。歸るのを待つて居たら、又母公がお定まりのお談義もうるせへト、胸くそを惡く歸る道、此二本坊が突ッかゝつたから、出入をはじめて居る所を、汝に邪魔ァされてなるものか。何でも盗賊に違へねへ。泥坊だ〳〵」ト喚き立つるをおししづめ、

たみ「アレサ叔父さん、お前はマァそんな惡い心に何時おなりだ。此方が御了簡深ければこそ濟むやうなものゝ、あのお刀がお前の目にはかゝらないのかへ。」

強「痴婦めへ、竹篦で人の骸が砍れるものかイ。何でも懐へ手を入れられた譯をつけねへ

が、イヤ〳〵箇樣な無法者、手にかけたりとて詮ない事、そのうへ殿のお名前まで出る事なればト思案を直し、

胡「ハヽヽヽヽヽこりやこなたには酒が過ぎたな。餘ほど機嫌と見える。ハイ何事も此身があやまり、往來中ゆゑ人も立つ、もう宜い程に了簡爲やれ」ト内端に言ふほどつけあがり、

大男「ナニ酒が過ぎた。大きにお世話だ。此身が錢で呑む酒に、汝が差圖を受けるものか。ヤイ何だ其面ア。なんぞと言ふと刀の柄アひねくりまはして、人見掛にさす腰の物なら、大かた中は竹篦だらう。この近邊で名のうれた樗甫頭の強八さまが、腰の物がおそろしさに、仕掛けた出入を止めたと言ッちやア、仲間の奴等に面が立たねへ。四の五の言ふにやア及ばねへから、見掛に差す大小も、羽織も袴も其所へ脱ぎ、盗賊の正體をあらはして、平蹲踞たら許して遣らう。斯う言はれるのが口惜しかア砍るとも突くとも勝手に爲ろ。強八さまの御尊體に、汝等が刀が立つものか」ト云ひつゝ毛尻を引まくり、胡平太が目の前へさしつけられて、堪忍も最う是までと、刀の鍔元くつろげて、既に拔かんとせし折しも、物見高なる群集の人々、相手は武士今一個は名に聞えたる惡者ゆゑ、このをさまりは如何ならんと、皆手に汗を握りつゝ、後ひざりするばかりにて、止めんとする者もなき其人立の後より、

るゆゑ、徐に歩行て居るうちには、そなたが追付いて來るであらう。もし夫ともに途で逢はずば觀音堂で待合さう」ト言ふを聞捨て供人は元來し方へと走り行く。是より胡平太は只一人繁華の土地に馴れざる故、群集の人を左處へ除け、右處へ除けつゝ行くうちも、豫て箇樣な場所にては懷中に氣を付けよと、朋輩どもがをしへしまゝ、只兩腰と懷中に心を付けつゝ往くほどに、急がぬ道もいつとなく長谷の地内にいたりし折しも、年頃四十ばかりにて、木綿廣袖に五分月代、一癖あるべき大男、酒の機嫌か道幅も狹しと歩む千鳥足、夫と見るより片脇へ除けんと爲たる胡平太を、田舍武士とや侮りけん、態と先より行當り、

大男「ヤイ二本坊めへ、此廣い大道を、明盲ぢやァあるめへし、何で此身に突當りやァがつた」

ト喧嘩買はうに出かけられ、胡平太も忿然とせしが、素より溫和の生得ゆゑ、

胡「イヤナニ態と爲たではなし、寔に互の出合がしら、行當つたは此身の麁相、氣に障つたら許してくりやれ」

大男「ナニ麁相だと、面白へ、盜賊を爲ても麁相とさへ言やァ事が濟むかイ。今突當つたとき、此身の懷へ手を入れやうと爲たのを見て置いたぞ。其二腰は人おどし、武士と見せかけて、汝ァ晝鳶を働くな」ト言はれて胡平太面色變り、おのれ慮外と刀の柄に手を掛けんと爲たりし

第三十六回

今爰に說く物語は、判官在世の事なりしが、本國より鎌倉へ在番の諸士の多かる中に、森胡平太といふものあり。折しも彌生の上旬とて、四方の櫻も時知り顏にほころび初めて、春風の身にほかほかと來る頃は、人の心も自から浮立つ中にわきてなほ、此程よりして長谷の觀音開帳とて群集の參詣、胡平太は國元より近き頃來し者にて、鎌倉の繁華珍しければ、勤仕の隙を見合せて、草履取一個を召連れ、先觀音に參詣せんと途中まで出かゝりしが、ふと同役へ申置くべき大切の用を思ひ出しければ、矢立を取り出し鼻紙に委細を認め、供の男を呼び近づけて、

胡「コレ、そなたは大儀ながら此手紙を持つて、一ト走りお屋敷へ歸り、大鷲氏へ慥に屆けて吳りやれ、ツイ出がけに差急いで肝要の事を失念いたした」

供「へイ、左樣ならば此お手紙を大鷲さまへさし上げますれば、何ぞ御返事でも」

胡「イヤ〳〵返事を聞くにはおよばぬ。さし置いて直に來やれ」

供「へイ〳〵、夫では貴公さまは此茶店にでも被爲入ますか」

胡「ナニそろ〳〵と往つて見やう。先達鴫野氏と同道でまゐつたから、大かた道も覺えて居

歯を喰ひしばり、我役儀に就ての麁略と咎めあらば是非なけれど、盗賊と定められて此刑罰に行はるゝ事心外なり。金を盗みし者は外にあるべし。頓て我明白なるを知らせんぞ。武士に悪名を究めしは、無念骨髄に入つて忘るゝ事あるまじ。見よや我はかならず當家の怨靈となり、鹽谷の家名を絶さずに置くべきか。思ひ知らするぞ思ひ知れと、罵り狂ひて息絶えけるを、見る人は身の毛立ちてふるひをのゝき怖れぬものはなかりしが、夫より後に雨の夜の陰々となる折からは、青々たる色の火の燃上り、馬場の東西を飛めぐり、苦しげに腹立しと思はるゝ聲にて、まだ潰れぬか、まだ亡びぬか。頓て絶果てるぞ。見よや〳〵といふかと思へば、しわがれたる聲にてから〳〵と笑ふ怖しさ、心付かずして通りかゝりたる者、逃げながら怖々振り返り見れば、手足の指先より血を流し、鬼火の光物すごく、怖しげなる顔のあり〳〵と近付けば、正體を失ひし者も多かりしとぞ。夫より慈悲ある人の不便に思はれ、幽靈の法事を修行せしが、其故にや怨靈の沙汰も漸に止みけるが、其士の無實の罪に行はれしより三十三年目に當りて、同じ月日に鹽谷家は滅亡に及びしといふ。

這は花岳寺の方丈の因果ものがたりにせられしと蟻蜂錄の説なり。まことに武士の深き怨念は然もありけるにや、すさまじくも怖しき事なりけり。

是より
蟻蜂錄○爰に鰻谷稻日正の時代に、最律義なる家臣ありて金奉行を勤めありけるが、或時金藏に盜賊入りて千兩箱一ツ失たりしかば、種々に詮議せらるれども一向に知れず。是に依て金奉行の不念より發りし事なりと、嚴しく重役をもつて御咎めありければ、彼者の返答に、拙者が預りし役儀なれば則我等が盜人なりと申しければ、其通りを稻日正に申上ぐれば、大いに怒り給ひ、以ての外の返答不屆至極なり、定めし彼が盜みし覺えがあるゆゑに、左樣の大膽を申すならめ、屹度刑法に行へとて、遂に其役人を盜人に定められたり。然れども其人は、些も知らざる事にて、只盜まれたるを越度とこそ觀念をしたれ、誠の誤を恥ぢて、盜人に等しき不念なりと答へしを、不法の樣に聞きとらせられ、猶憎みて盜賊の當人と極めらるゝ事士道の恥辱、豈口惜と思ふ怨念の祟をなさであるべきや。偖も城下の馬場へ彼人を引出し、柳の大木に縛付けて面を曝し、家中の人々町人百姓に見せて、盜人よ盜賊よと大勢に詈り謗らせ恥を與へ、其後一日に指を一本づつ切捨てさせ、手足の指を廿日の間に切落させたり。如斯なれば、國中ことごとく此人を盜賊の大罪人と思はぬ者もなし。嗚呼此士の薄命といふも餘りあり。いかなる前世の宿業にて、此災難に惡名を流し、日毎の苦痛をせし事ぞ。是に連添ひし妻子親族の悲しみ、恥しさと悔しさは譬へる物もなかるべし。此時にいたつて彼士は、血ばしる眼をいからして、

大星の辭世

水にうつる花を藻くずに浮きかへて匂ばかりを庭の梅が枝

今ははやことの葉草もなかりけり何の爲とて露むすぶらん

同書に一說あり。義黨の爲には此書にうつし出すも心よからぬ事なれど、亦主君たる人の臣下に情なく非道なるは、國家を亡し子孫の絶ゆる事、和漢に其例も少からず。鹽谷家の滅亡も深き怨念の所爲なりといふ。夫は大丈夫魂の人はあざけり笑ふべき事に似たれど、無實の罪なんどに情なき死を遂げなば、怨念の殘りて祟をせまじきにはあらじ。主君の威光と、上に立ちたる人の勢に募りて、臣下を恥しめ、下々を情なくするは、頓て其身も家國も亡びたまふものと、用心あり度事ぞかし。亦上に立たまふ人は、常に下々を惠みあはれみ給ふが、何よりか難有ものなり。然れども下々はいと愚に理にくらきものにて、不便なるものどもなりと思ひたまはねば、腹立るゝ事のみ多かるべし。夫を奈何といへば、愚なるものの癖として、恩を仇にて報じ、慈悲を不足に恨み、利欲に果なき輩多ければ、仁心ある君も愛相を盡し給うて、忽地惠を止めて刑罰を烈しくせらるゝものなり。偖も鹽谷判官には、臣下を憐み民を惠ませられしかど、高貞より三代以前の君の御時に、不慮の誤にて、淸直の家臣を非道に刑罰に行ひたまひし事ありけり。

○御使仰被下辱存候。委細は口上に申入候。尚御恭養奉仰候。以上。

兎に角に思ひははるゝ身の上にしばし迷の雲とてもなし

二月二日　良雄

瑞光院主様

こゝに寫し出せしは、復仇の後に京都紫野大徳寺の瑞光院の使僧へ遣したる返書にて、大星氏の自筆なり。

兎に角に思ひははるゝ身の上にしばし迷の雲とてもなし

這は婦女達の看てよろこぶ類にあらねど、凡義士の筆の跡は、些に書殘せし反古までもなつかしく、其ときの事をも思ひやらるゝ所爲ならずや。

花の雲空も名殘になりにけり　大星良雄

世の中は春の炬燵の心かな　同　良金

これも辭世にてありけるか、

二百里や我園薫ふ菊の酒　木村貞行

○また蟻蜂錄といふ書に、

いろは文庫　巻之十八

第三十五回

今此章にしるせしは、諸書の中より實事なるべく思ふ事と、自筆の類をうつし出でたれば、娘御方には心にかなはぬ様にもあるべきなれど、凡むかしの物語は、其世の體を深く考へ推量りてこそ、面白しと思ふ條下はありぬべし。但し作り物語ならねば、心なく讀給ふ人々にはいかならん。夫兵書に云、人に靈あり、生涯善を守り死に臨んで屈せず、正道順路なるを神靈といふ。生ある中に人を救ひ人を立て仁義を守り、死に臨みても道をはげむ、魂魄残つて人をすくふ、號て神靈といふ。大星由良之助は祭りたらば一社の神靈ともなりぬべし。六十餘州誰か此人を尊まざらん。只おろそかに見過し給はで、忠貞仁心の深きを思ひやりて、其身の鑑となしたまへ。

鳥の跡をうつす筆さへ恥しくむかしはかゝる人もありやと　狂訓亭

傳吾右衛門夫婦をはじめ下部元助も之を見て、或は驚き或は憐み默然として膽を潰し、さては是まで元助と思ひしは、主君の別館なる稻荷明神の、われ〳〵が眞意を憐み給ふ神慮のあり難き事、心魂に徹して勿體なしと、數行の落涙とゞめあへず。是より後全快して事の始末を主君の後室瑤泉院に告しかば、その神德を尊み給ひける。其後義士の面々本望を遂しかば、猶神慮の驗等閑ならずとて、正一位元助稻荷大明神と、今に彼地に崇め祠りて、里人の口碑に殘りしとぞ。元助稻荷の置手紙は、某とかいふ里正の家に今に傳へてありとなん聞えし。

亦曰、此片岡は元鎌倉の定府なりしが、凶變の後國許に住居、再度鎌倉へ出でしなり。但し僅の間なれどもいろ〳〵薄命つゞきて、如斯事もありしとなり。

此事自然と世の風聞となりけるとぞ。却說片岡傳吾右衛門は鐵砲洲の佗住居にて眼病を煩ひ、既に療治もかなはざるを、原元辰變名なり惣右衛門が方へ下部元助多く得難き眞珠を持行きて療治をたのみければ、漸に病全快せんとす。元助は傳吾右衛門病中國許より尋ね來り、看病怠らず實義を盡せしに、中途にして妻子並に下部元助、傳吾右衛門方へ尋ね來りしかば、家僕元助二個になり、傳吾右衛門の看病せし元助は、一通の書置を殘してかき消す如く失にけり。其文の寫し省略左の如し。

是迄假に元助と姿を現し、貴殿之看病致し候へども、此度國許より家內の者元助を召連れ到着被致候に付、最早貴殿の介抱も是迄と存候。眼病も追々全快と相見え候へども、此上加養專一之事に存候。元辰方に眞珠澤山預け置候間、心配なく服藥可被成候。先達而中風聞有之候□庵と申候者は、□野九太夫弟九十郎にて、古主之恩義をも不顧敵地へ內通之者に候間、通力を以天□を蒙らす者に候へども、藥種屋久兵衛を騙詐眞珠多く贓奪、貴殿服藥に相用候。併盜泉之水之汚にも相成間敷間、猶本望之時に臨み候はゞ午陰助力致遣し可申候。

青山□田

若「夫はあなた方の御勝手のお咄は跡になさりまして、眞珠なり金子なりとも早く否やをお取極め下さりまし」

蝶「それは貴さまの病氣だ。夫を直して遣らうといふのだ」

若「是はおまへさまは私をお誑かしなされますか。今朝見世まで御文通がござりました」

ト懐より蝶庵の手紙をとり出し、「これを御覽下さりまし。あなたの御名前で私方店の名當に相違はござりませぬ。眞珠も極上品廿五六雙より三十雙位、勿論別に伊勢眞珠と紀州と御覽に入れました。其眞珠を爰にお出しなされて、御覽なされればわかります」ト差出す手紙は、元來無筆の蝶庵も、半は信じ、なかばは疑ひ、もしや彼町人が騙驅なんぞか、ハテ合點の行かぬと思へば、ひしこや久兵衛が若い者は逆上の病人ならぬ言葉のはし〴〵、手をこまぬきて吐息つき、呆れはてたるばかりなり。是より蝶庵は藥種屋の若い者と互に事の始末をかたりしに、彼青山の町人といひしは、蝶庵の名をかり、僞手紙を持て本町のひしこや久兵衛といふ藥種屋を賺奪、代金三十兩餘の眞珠を變詐取て、その後難を蝶庵に托しなり。斯くてあるべき事ならねば、藥種屋の方にては蝶庵の手紙を以て、公廳に訴出でんときびしき掛合止ざりければ、從來蝶庵は身に舊惡あれば、大に迷惑して内分の扱ひとなり、見もせぬ眞珠の價を濟しけれども、

蝶「ハテ扨埒もない。逆上の症といふものは聞分がないに困る。氣違ほど取あつかひにくいものはない」トいへば藥種屋の若者腹を立て、

若「氣違とは私の事でござりますか。眞珠の代さへ下されば氣違取扱には及びませぬ。代金を下さりまし。」

蝶「貴さまは氣の違はぬつもりでも、眞珠の代を取らうといふが病で、それが逆上だ。」

若「イヽエ、あなたが逆上なされたのでござります。高金の品お取りなされて、其代金を下されと申せば、夫が病症だ〳〵と金子もお渡しなされず、どうなさる思召でござります。お氣に入りませずば眞珠をお返し被下まし。時刻が遲くなりましては、親方の手前も宜しくござりませぬ」トいへば蝶庵むつとして、

蝶「言はせて置けばはての知れぬたはこと。此蝶庵は其方から眞珠をなに買ふものか。譬へ氣違なればとて、外病人も來て居ること、外聞かた〴〵迷惑だ。こんな氣違は追返してしまへ。畢竟金五兩前金を出して療治を賴むといふゆゑ、直して遣さうと言うたのみだ。其上ならず、賴んだ當人は知らぬ人だなぞと馬鹿々々しい。またあの町人も町人だ。何所へ行きをつたらう。」

侍「さやうでござります。支度にでも參りましたかしれません。」

蝶「承知々々。それは承知だ。それが病症だ。兎も角も爰へ」
若「御承知ならよろしうござります。これにひかへまして居りませう」
蝶「ハテサテ困つたものだ。何れにも藥を進ぜるには容體を見ねばならぬ」ト玄關の方に向ひ、小彌太々々と取次の侍を呼び、「此本町の若衆の同道した青山の仁は何樣した。早く爰へ來さつしやいといはぬか」
小「ヘイ〳〵、只今手水場から出られまして表へ行かれました」
蝶「ハテ困つたものだ」
若「私も遠方でござります。眞珠の代を願ひます」
蝶「これはしたり、其病症は承知だ」ト少しじれ込み、「貴樣を同道した男は、貴樣の親類で奉公の請人ではないか。昨日此方へ見えてだん〳〵病氣のおもむきを咄し、今日連れて參る間療治して呉れと賴まれた。其眞珠の代〳〵といふが全體病症だといふ事だ。情を強くせずとも爰へ寄つて、容體をとくと見て、藥を加減して進ぜるから」
若「私は青山に親類はござりませぬ。只今是まで御同道なされたは、此御方の御使ではござりませぬか」

亭「へイ〳〵只今直に御同道いたさせませう」ト言ひながら店の者を呼びて其由を言ひ聞せ、土藏より眞珠を取り出さすれば、店の若者は身支度して、

若「是は大きにお待せまうしました。浮具野さまと被仰のは、たしか金澤町でございますネ。」

町人「角の長屋門の內サ」ト言ひつゝ二人は連立ちて蝶庵の家に至れば、那町人は玄關にて眞珠を請取り、其儘奧へいたりしが姑くして出來り、

町人「今あいにく御用多で少し手間取れます。爰にひかへてござれ。今に沙汰があらう。マア一ツぷく」ト自分も火鉢の傍に坐しけるが、やがて彼町人は手水場へ入りたり。此日は折惡しく藥取病人ともに多く、入替り立かはり蝶庵の前に出で藥を貰ひ、やゝあつて彼青山の町人が同道せし若者の番に當りければ、侍が案內して調合場へ通しける。

蝶「おまへは本町の藥種屋、ひしこや久兵衞どのの若衆か。」

若「左樣でござります。」

蝶「そんならずウ引と爰へ來給へ、脈體を見て進ぜませう」トいへば、

若「へイ、私は病人ではござりませぬ。只今さし上げました眞珠がお氣に入りましたら、代金がいたゞき度うぞんじます」トいへば蝶庵うちうなづき、

替、地面の賣買、聟養子嫁入の媒人して世を渡れども、表は醫者の事なれば、古主判官の敵師直にとり入り、さま〴〵にこびへつらひ、師直が權威にて出入屋敷多く、此金澤町に家作して威勢を振ふ身となりければ、居間には讀めぬ唐本を積み置き、得知れぬ奇物をならべ置けども、方醫といふは家相の事と思ひ、仲景とは扇の異名、時珍といふは五七の雨に四ッ日照といふ歌を詠し人とおもふ。本草綱目とは加古川本藏は盲目の人かと思へり。匕を持し難有さに下手人に出る苦勞もなし。罪は子卸同然なれど、只世の中を壁にして、口先ばかりで病人を騙し込むこそ危ふけれ。却て青山の町人は、蝶庵が貪欲なるを豫て承知の上なるにや、翌病人を連れて來ると熟々渠を呑込ませ、其次の日に本町にて一番大きい藥種屋へ赴き、蝶庵の僞手紙をさし出しながら、

町人「其手紙の品が急に入用だから、私と同道に見世のお人に持して贈越してお見なせへ」ト言はれて藥種屋の亭主はその手紙を讀下し、

亭「へ、エ眞珠が御入用と見えますな。極高品をとございますから、宿に有合せます所を種種取交ぜまして御覽に入れませう。」

町人「兎も角も急に欲しいといふ事で、私と同道に持て來て貰へと言はれました。」

兎角眞珠の代を下さりませと申すが口癖でござります」
蝶「ハテ珍しい病症だ。病症にも種々あつて、宵の病症夜中の病症、びやう症かなひませぬ目盲の療治につかふ、エヽ是非眞珠の蟲のせいであらう」
●「夫は獅子身中の蟲と申すお洒落でござりますかハヽハヽヽ」
蝶「これは麁相とは此事でござる。一回藥代金五兩でござるが、どうでござらう」
●「モウ些と高直でも宜しうござります」
蝶「しからば六兩」
●「モウ些めしまし。あまりお安うござります。私の方から七兩さし出しませう。左樣なら明日當人を同道いたしまして、手附の藥代金五兩さし上げませう」ト直段をきめて蝶庵に挨拶し、彼町人は歸り行く。
蝶「扨々欲氣はみぢんもない病家だ。斯ういふ事がなければ、常に呑倒された埋草がない。ハテ翌日は手附の金五兩。ハテ五兩間違がなければよいが」トをりから床の間の九ツの時計、チヤン〳〵〳〵。此浮具野蝶庵といへるは、元來播州赤穗の產にて、鹽谷家の重役小野九太夫が弟なり。壯年ころ身持放埒にて君の勘氣を蒙り、國を追れ鎌倉に來り醫者となり、屋敷

●「はじめまして御目通り仕りました。私は青山邊のものでござりまするが、私親類どもの忰を請人に立てまして、本町の藥種店へ奉公につかはし置きました所が、何か逆上とみえまして、ぞんじも寄らぬ事を口走ります。御療治で本服いたしますことなら、御藥を頂戴いたしたう存じます。

蝶「なるほど遠方からござつた事ゆゑ、見て藥を進ぜませうが、全體殊の外に病用が多く、新規の病人は斷ります。しかし此方へお出さへなされば、療治はして進ぜますが、爰にはじめてのお方には、お耳へ入れて置事がござるテ。しかし醫者と鰹節計はつかつて見ねば甘味がしれねど、逆上一道亂心癇症は實は得手もので、此方より望んで療治して、御迷惑でも直して進ぜたいが、潮來節の文句に、醫者の藥禮と深山の櫻、取りにやゆかれずさき次第なぞといふは人武天皇の時代、當時一貼何ほど、一ト囘何程と極めて置き、前錢にはおよびませねど、代はお戻りと申しては引張りものめけど、病人によつて藥種も高價物も使はねばならぬ故、藥代からして極めて置かねばいたしにくいテ。夫でも病家が多いゆゑ、調合を仕まひ晝から出ても、毎日夜更けて歸る故、嫉む族は拙者の事を病家蒿だなぞといふには困るテ。それさへに御承知なら」

●「その義は少しもいとひませせぬ。全快さへいたせば前金にさし上げます。私方の病人は

の汚れを除くと不禮をしらぬえせ庸醫に、かならず騙され欺かれな。諺にいふ、藪醫者が猫を盗んだ様だといふ、薬箱さへ持されず、みな懐へ押込んで、足をはかりに駈歩く、貧醫にかならず良醫もあらん。命が惜くば斯いふ人をもとめて藥を貰ふにしかず。されども是を一随に抅子定規をいふは不可なり。爰に鎌倉本庄の金澤町に大醫あり。表は僕の部屋と物置の中を隔て、長家門玄關は破風造り、大紗綾形の腰張も、あたりを輝く立派のかゝり、〔主劑調合四ツ時限り。遠方の病人預り不申候〕斯くいふ張札腰掛へ是見よがしに張出したるは、高野師直が抱へ醫者浮具野蝶庵とて、其頃名高き藪醫者なり。取次の若黨が敷居を隔て手をつかへ、

侍「只今青山邊の者さうにござりますが、當人は同道はいたしませねど、容體を申上げお藥を下さりますなら、當人を召連れ參りますが、お目通りいたして委しく申上げたいとの事でござります。」

蝶「幸ひ藥取も間になつた。爰へ通しやれ。」

侍「ハイかしこまりました。アヽコレ青山のお方、こちらへお通り被成まし」ト顧れば、町人體には見ゆれども、羽織小袖も相應の身のまはり、敷居越に手を突きて頭をさげる。

蝶「貴様が青山の御仁かな。」

を、其儘此所に記せしなり。

第三十四回

昔の人の言へる事あり。命は天にあるにあらず、只其人に在るといふ。是汝に出て汝に還るものなり。世に憐むべきは庸醫の爲に、痴人は懸替のなき命をあやまつ。うまく騙しに乘るゆゑなり。豈おそれざらんや。無學文盲にして故人の法術の論もしらず、只權威の勢に乘じて藥品の能毒は辨へず、身上の配劑を事として病人をあやまつ。されども與へる藥驗ありて全快なすも少からず。これ竹束の鉄砲玉、横ぞつ方のまぐれ當り、思はず手柄をなすあり。これを過の高名といふ。古人理を責めて其法を立て、五味十味の調合はおの〳〵藥種の功あるを互に持合して、其病に的中さするの加減なり。しかるを我儘に、痞にあたらば此一味は除くべし、癪が痛くば加ふべしと、其調合を入替へてと、己が質屋の上下を藥に迄も用ひるは、其功能の薄きに似たり。譬へば大根も煮て喰ふ時はその味甘く、おろして生で喰へばその味辛し。藥種も是に異ならず。毒藥變じて藥となるは稀にもあること難かるべし。藥を以て病をあやまつ藥違はいと多からん。權威を旨として長棒に乘廻り、輿舁の給金も辨當代で差引く勘定、匂袋で病人

かるも、いまだ武運に盡果てぬ處とありがたくぞんじますれば、是より直に八幡へ御禮參りを致す積りでございます。どうぞ此旨元老はじめ皆々さまへよろしく」ト言ふを半分聞きあへず、矢兵衛はそこ〳〵走りゆくにぞ、軍兵衛はなほ是にも懲りず、一樽の酒を提げて圓覺寺に赴きつゝ門番を呼び出し、我等は高田軍兵衛といふものなるが、今日のお手柄を祝すため、且はお勞れ休めと思ひ酒一樽持參りしかば、何卒大星どのをはじめ各々にもお目に掛りたく」トいふにぞ、門番が此由義士等に傳ふれば、若者どもは聞きあへず、

●「扨々面の皮の厚い男だ。先刻は途中を憚つて腹をさすつて怺へて居たが、此所へ來たこそまことに幸、不義の奴等の見せしめに、踏殺さうではあるまいか」

▲「なる程是は能い慰み、切つては刀の穢れゆゑ、踏殺さうとは思ひつき、いで我々が」ト立上るを由良之助が押とゞめ、

由「是はしたり各方、那やうな人非人は對面するも目の穢れ、酒も入用ないというて、速々追ひ歸さるべし」ト言ひつゝ更に取合はねば、彼軍兵衛も詮方なく、すご〳〵として立去りける。

此一段は義士等音川家に御預けの砌、折部矢兵衛が物語りしを、折内何某が聞きしとある

一殉死討死と究らば、用金を掠めとり、ひそかに城を迯出さんと心がまへをしたりける。されぱこそ義士の面々御金配分と事きはまり、城退散の頃までは、忠臣顔して居たりしが、討入の其以前、進藤小山等と侶倶に不理窟を言ひ出し、終に盟約をそむきしが、義士等首尾よく敵を討ちて、亡君の菩提所圓覺寺へ引取る樣子を軍兵衞速くも聞出して、其道筋を考へ合せ箕田八幡の近所に待かけ、義士の行列の來るを見るより、

軍「扨誰殿にもお手柄々々。嘸お草臥でございませう。ヤレ〳〵天晴な御働き」ト一個々々に挨拶すれども、皆軍兵衞が不義を惡めば、誰一人答ふる者なく、聞かぬ振して往過ぎしが、其中にて折部矢兵衞が、

矢「我々四十七人は盟約を堅くして亡君の仇を報い、只今引取るところなれば、餘人の挨拶は承らぬ」ト言ふを軍兵衞おしかへし、

軍「いかさま御尤の思召、私なども先達進藤小山等に惑はされ、御連中を洩れましたれど、其後段々考へて見ますにつれて、御連中を洩れましたのを口惜くぞんじますけれども、今更改めてお加へ下されとも申されず、ふと思ひ附きまして箕田八幡へ日參をいたし、何卒各方の首尾よく本望をとげらるゝやうと、祈誓をかけました驗にか、今日只今此所にてお目にか

いろは文庫　卷之十七

第三十三囘

爰にをかしき物語あり。鹽谷の家中にて其名を高田軍兵衞といふもの、小役人を勤めしが、專ら口才ある者にて、いたつて世事に怜悧ければ、判官在世の其折は、何事を勤めさせても、人の先を潛拔けて、何ほどむづかしき事にても、小氣味よく取捌き、もつとも用立者なれども、其爲すところ實情ならず、主人の爲と見せかけて、自己が田へ引く事のみなれども、速く迯道をこしらへ置き、上手に事を取おこなへば、いさゝか他の咎を受けず。そのうへ權家に取入るにも、斧九太夫がごとき者には、彼が得づく事を計て其欲情より心に愜ひ、大星がごとき忠臣には其道をもつて取り入れば、多くは是に欺されて、心をゆるす者もありしが、由良之助は思慮深ければ、軍兵衞が言葉多く輕薄なるを知るゆゑに、さのみは用ひざりしとぞ。さる白者にてありしかば、此度の大變にて既に籠城ときまりしときも、一番に駈付け、着到帳にも軍兵衞が第一番に錄されて、表面は專ら忠義と見せかけ、いでといはゞ討死と、口には言へど心には、表裏を窺ひ若萬

兼「イヽエ面白かつたヨ。これは此身のだヨ」ト金の短尺は手に持てど、包みし金は目もかけねば、お民は安心せざれども、金の包を懐中し、我子を抱て立歸る途中で聞ば往來の噂、綿谷家の浪人が高野師直を討取て、圓覺寺へ引いて行く敵討の人々なりと、その實正を云觸れる巷の沙汰に心附き、彼短册を能々見れば、

山をさく力も折れて松の雪　　　子葉

トしるしてあれば、さてこそと大事に是を持添へて、我家をさしてぞ歸りける。此お民の事次編に委し。

揃ふ折しもあれ、群集の中を駈抜けて、走り近付く彼お民、
たみ「モシ〳〵、何卒其子をお返し被成て被下まし」ト涙ながら駈寄りつゝ、「兼や、サア母が來たヨ。早く此方へお出でヨ」トいふを聞いても兼吉は平氣にて、
兼「イヽヨ母人さん、坊は伯父さんと一同に行くンだヨ。」
文「アハヽ、ヽ、これは迷惑な、サア〳〵母御と抱こして同作に行かう」ト母の方へさし出し、「イヤ母御、定めて案じられたらうが、惡氣で連れて來たのではござらぬ。同作に行かうと抱れた故、可愛思つて母御の案じに氣も付ず、放心々々是まで連れて參つた。我々は菩提所へ參つて切腹をいたすのだから、小兒を連れては行かれないアハヽ、ヽ」ト云ひながら、懐中より包みし金を封の儘に小兒に持たせ、鎗印をも片手に渡し、「サア此お金で御母さんに手遊を買て貰ふのだヨ」ト言捨て早駈出すを、お民は驚き包金を手に持ちながら、大鷲の後背を見やりて聲をかけ、
たみ「アレモシ、是は大層なお金を何様して此子には」トいふも聞かずに大鷲は、はや雲霞と隔りて、行方も知れずなりしかば、お民も今さら詮方なく、金と短尺をうちながめ、「兼坊ヤ、お前は怖くなかつたかへ。」

▲「ナニ〳〵高野の屋敷へ夜討に行つたのだといふ噂だから、最早人質は入りも仕めへ」
●「何にしても怖がらないで抱れて行くと云ふは、奇妙な兒もあれば有るものだ」
×「エヽ、コウ、鹽谷家の浪人だといふが實正にさうかノウ」トいふ中に何か義士方には異なる噂を聞取りたるか、先に立たる太鼓の音、ドン〳〵〳〵と打出せば、二の手三陣合圖して衆人一同に立止り、四十餘人が鴈行に並んで各得物を追取り、前後左右に心を配り些も油斷をなさゞるは、兼ての調練適れならんと後々までも云傳へ、咄の種にしたりしとぞ。斯る處へ大鷲文吾は彼小兒を抱きし儘に走付き、
文「コレ〳〵片岡氏、何所やら其もとの御子息に似たる小兒、發明らしいではござらぬか。殊に我々が異樣なる形容に怖れもせず、同作に行かうと側近くまるつた故に、取あへず抱いて是まで參つたが、この子の親達がさぞ驚天し、背後から追かけ參るも知れず、今更大きな厄介もの。御推量被下イアハヽヽヽ」トうち笑へば片岡も同じく笑ひ、
片「なるほど是は珍しい。奈何に辨なき子供でも、我々を怖れもせず、貴公に抱れて參るとは適れ勇氣の生立と見え申す。亡君の御在世ならば御側へ差上げて御一興ともなるのみならず、成人の後御用にも立つべきもので御座らう」トいふ中に、また押太鼓を打ならせば、一同に行列

討死せんと、四十餘人を三段に分けて押行く行列の、後におくれて大鷲文吾、文武の達人風流の友に途中で逢しゆゑ、少し後より走行く、折から駈出す男の兒、歳は四歳か五歳なるが、文吾側へ駈寄りつゝ、
小兒「伯父さん、此身も同伴に行かう、此身も強いから敵討をするヨウ」トいふを聞くより大鷲文吾、莞爾笑ひて小兒を抱き、
文「オヽ強いナア。伯父さんに抱こして行くか、怖い事はないか。」
小兒「ナァニ怖かァねへヤァ。此身も光る兩刀を持つて居らァ。」
文「オヽさうか。夫ぢやァこのお鎗を遣らうか。」
小兒「お鎗はあんまり大きいから此身に被持ねへヤ。」
文「アハヽヽヽ夫ぢやァこれを遣らうナァ」ト鎗に付たる金の短冊取つて渡せば、嬉し氣に笑うて怖るゝ色もなく、抱れ行くこそ可笑けれ。往來の人々は此體を見て膽を潰し、
▲「アレ〳〵、あの血の付た鎗を持つた人が小兒を浚ッて行くぜ。」
●「オヤ〳〵可憐さうに、あの子を何にするだらうナァ。」
×「おほかた人質にでもするのだらう。」

ふを半分聞きながら、路次口へ出て行く、其背後影を見送りて、内に入りしが焚火まで、消ゆる思に胸先の、癪を押へて居たりしが、何事やらん路次の外に、人聲高く裏々よりも何事か聲かしましく駈出し行くを、耳には聞けど心の屈托、出て見る氣もなかりし所へ、相長屋の内儀の聲にて、

内儀「お民さん〳〵、大變な事が出來たヨ。早く來なヨ、遲いと間に合はねへヨ」ト云はれてお民は何事かと、障子を明る出合がしら、又も駈來る隣の左次兵衛、

左「コウ〳〵お民さん、お前の所の兼さんを、今表を通る大勢の侍が、血の付いた鎗を一ツに擔いで行つて仕まつたぜ。追駈て行て詫つて連れて來なせへ。己が行つて連れて來て遣度が、五六十人の黒裝束が鎗長刀の拔身で行くのだから、怖くつて寄り付れねへ」ト言はれてお民は胸とどろき、周章迷ひて路次板を踏鳴しつゝ駈出し見れば、往來群集の人々、駈けて行くあり歸るあり、種々噂の實正は何と定めて知れねども、遙に引行く一群の人數は夫か雪道を、蹴立てて南へさしかゝるを、見るよりお民は狂氣のごとく、下駄脱捨て素足となり、我子の跡を慕ひゆく。此時鹽谷の義士の面々、主君の仇を討おほせ、最いさましき其勢、今は此世に思ひ置く、事はいさゝか亡後も、名こそ惜けれ途中にて、追人の來る事あらば、備を立ていさぎよく敵を引うけ

服を温めて上るから、まだ起きるのではないよ。ドレ母が先へ起きませう。」
兼「ウヽン此身も起きるンだァ。」
たみ「寒いからマア寢しておいでといふのに。」
兼「イヤ〳〵、今日表の老女さんの所で餅をつくから、早く起きて來なとさう言つたものヲ。」
たみ「オヤ〳〵早い餅のつき樣だノウ。」
兼「此身の所でも早く餅をついておくれヨ」ト言はれて母は胸ギックリ、餅を舂くより持扱ふ、節季の中の憂思、年を越すにも安からぬ、母の心を子は知らで、人並々に何事も出來ると思ふいぢらしさ、奈何に貧しく活業とも、爺御が在さば是ほどに、心細くはあるまじと、目にもつ涙はら〳〵と、膝に落して釜元へ、立て朝げの烟さへ細く燻らす火打箱、しめりがちなるわび住居、いと哀れなる母子の體、斯る中にも兼吉は元氣よく、
兼「此身は老女さん所へ往くヨウ」トはね起きれば、
たみ「アレサ寒いといふのにノウ」ト言ひつゝ寢間着の其上に、着せて合する前後、ほつれし糸の付紐も、廻合せが悪ければ、些に入らぬ行丈も短き不斷着其儘にて、直に表の方へ出るを母は呼とゞめ、「コレサ坊ヤ、路が悪かァないか、氷が張ッてすべるから駈出し被成ナヨ」トい

へ」トいふ聲聞いて母のお民は、せんべいを十五六枚数へて持出し、あつまり來る子どもにやるも、子を思ふ親のこゝろぞかし。

第三十二回

再說お民は其翌日極月中の五日の朝、寢覺も寒き雪の風、身にしみ〴〵と思入る、浮世の外の里もがな、同じ世界にまじはれば、子を育つるにも常並の、准はさすがに捨置れず、待わびる人は沙汰もなく、待たぬ月日の脚早く、近付く春のまうけさへ、四邊近所は賑へど、此身は此子に正月の、晴着も着せる事ならで、今にも強八が歸りなば、昨日の如く借財のありとて無理をいふならんか、無理と思へどその金の半分をこしらへわたさずば、定めて非道を行うて、此子にまでもつらくあたりて、情なき目に合すらん。嗚呼口惜しき事なりと、胸を痛める痛はしさ、まだ歲行ぬ娘氣も子を持しとて親といふ、甲斐なき今の薄命を、かこち涙の一雫、添寢の顏にはらはらと、かゝれば小兒は目をさまして首を上げ、

雛「母樣起き樣ヨウ。」

たみ「アレサ、まだ寒いからネ、もう此〻此床に溫つておいで、即時に母が起きて火を拵へて衣

角も此身が引請て爲て居らァ。今まで骨を折つて居て、今更勝手をされてたまるものか。實はナ明日の晝までに五兩の金が出來ないければ、其金の形に其方を預けるつもりだァ。マァ三年ばかり契情奉公をして吳ろ。ナ、否だと言やァ旅へ引出しても勤をさせるから、左樣思つて覺悟しろ。夫とも明日まで耳を揃へて五兩の金が出來るならば、奉公に遣るのも旦那をとるのも、一月ヤ二月は勘辨もして遣らうはサ。ドレ些出かけて來樣。何ぞ元金を出して吳」ト言ふより早く傍にお民の脫置し綿入を小脇に抱へて出行を、遣らじとすがり歎けども、耳には不入突倒し、背後をも見ずに出行けり。跡にお民は口惜涙、噎入つゝ泣倒れ、正體もなく歎き居る折から、男の兒、

兼「母人さん、先刻の脇差をおくれ。敵討をして遊ぶのだからヨウ、早く出しておくれヨウ。此身が曾我の五郎だとヨウ、表の金樣が左樣いふからヨウ。」

たみ「アイヨ。今出して上るはね。路次の外へ出るとあぶないヨ。空地の所でお遊び。怪我をするといけないヨ。」

兼「怪我を爲るとお屋敷の爺さんが歸つて叱るねへ」トいふ所へ三四人の子どもの聲、

▲●×「兼坊樣ヤ、早くお出でヨウ。モウ芝居をはじめるのだから、脇差を持つてお出でなね

夫此お民のみにはあらず、世間に多き婦女子の身の上、薄命なる其節は、咎なきものを咎のある様に誹られ賤しめられ、わづかの越度を仰々しく、言立られたり、叱られたり、親しく實意の縁者がなければ、血脈の人も他人に劣り、右左にて突放され、歳若くして艶色あれば、其色を賣らせて利徳を取らんと奸謀て、穴へ落入るの強欲非道の者にまつはられ、身を苦しむる女の哀なるが世に多し。されども平日不足なく、親兄弟か親類の力になりてくれるものがありて不自由なき時は、他人の難義も悲も只餘所々々しく聞捨て、不便と察する人は稀なり。男女にかぎらず世の中は情をもつて人を惠み、其身の目下を何所までも愛憐をかけるが第一の慈悲善根と思ひはかりて、他人をやさしくしたまへば、情は他人の爲ならで、頓ては其身の冥利も能く尊き人と言はるべし。

強「何だ、兼の親父が歸らないければ、其身は一生奉公に出ると。ヘン勝手な事ばかり考へて居やアがるぜ。コレ假初にも此強八さまは伯父だぞヨ。殊に其方が爺が死ぬ時に、母子ともお賴み申すと涙を落して言つたから、案じ被成な此身が付いて居るから、母子共に何樣か斯うか世をわたらせるからと請合たらば、其方の親父は手を合して此身を拜んで、何卒是からはお民の親になつて萬事の世話をして吳ろと言つたぢやアないか、其後母人が死去つてから何も

五六兩ばかりのお金になる程持つてお出で、其儘お返しでないから、大方夫が月々の入用になるだらうと思つて居ましたは。」

强「ヤイ、能かげんに無勘定な事を吐せヱ。其時は此身が都合が悪いからナ、借りて持出したけれども、不殘引たくられて仕舞つたのだァ。夫から後は今日まで活業て居たのが、あの時の衣類ぐらゐで滿足るものか、ばか〳〵しい。」

たみ「オヤ、それだつても其様に毎月の入用が掛りも爲ないがネヱ。」

强「ヱヽイ何でも角でも過た事が益に立ものか。其方の衣類がなくァ兼が衣類でも出せ。不殘遣らかしたら五貫ャ三貫は出來るだらう。夫が否ならば昨日隣裏の老女御が然言つた旦那の世話になるが能ャア。左様すれば兼は貰人があるといふから、直に養子に遣つて仕まふサ。その方が幾程樂だか知れやァしねへは。馬鹿々々しい、旅へ立て行つて二年越になるまで便も爲ない人を的にして、月日が過されるものか。」

たみ「ナニ、何年迄も斯うして居様といふ氣ではありませんョ。いよ〳〵便がない様ならば兼童を他所へ預けて私ゃァ一生涯奉公に出てしまひますは」ト淚ぐみたるお民の心、奈何に悔しくありけるか、哀と察したまへかし。

美麗ければ、まだなか〳〵に廿歳ともならざる樣に見ゆれども、今年五歳の小兒もありて、朝夕苦勞に日を送れば、自然と心のしづみ入りて、只その子のみを大切にいたはり育つる不自由も、夫なき身に食客の人に等しき昨日今日、伯父とはいへどもその實は、他人なりける惡者の强八といふが同居して、此程わづかに母子の者を養ふを恩にかけて、

强「コウお民、其方マア何樣する氣だ。雲を握むやうな事を的にして、便々と日を過して居るが、今日を何日だと思ふ。モウ十二月の十四日だぜ。即時に大晦日が來るが餅米の的もなけりやア、歳を越す算段もないぜ。夫とも何ぞ心當があるのか。此身ア明日は先頃借りた六貫の錢と、貸夜具の損料を二貫四百遣らなければならないぜ。其錢が出來ざア質に置く衣類でも渡して置くが能。後に持つて行つて錢にして置かア。」

たみ「オヤ私の方にはモウ着類は些も有りませんものヲ。」

强「コレ、些も心當がなけりやア三月四月のあひだに覺悟を爲ないのだ。七月の廿日の日つからア此身が都合をして喰して置くのだぜ。何所からも附屆がなくつて、安閑と母子が活業て居樣といふは、餘り押が强からうぢやアないか。」

たみ「オヤ〳〵、夫でも八月の十五夜に、お前が入用だとお言ひで、私の夏の衣類と冬物を

き囁きて、師直の首を服紗に包み、庭の雪間へしかける狼燧、音はなけれど中天へ月をおほうて立登れば、兼ての合圖か西南にあたりて打出す寄せ大鼓、雪の夜風にさそはれて聽ゆるはしに忍の者はいとはやく、屋敷の西の用心堀にかけて上げたる刎橋を、内より外へかけ渡し各此所より走り出れば、二人の女を介抱し、同じく續いて出たりしは寺岡平右衛門なりといふ。

如此なる時は、世に書傳へし趣とははるかに相違の事にして、また偏屈者の批判もあらんか。撰者元來この辨あり、夫は本傳滿尾の節に至りて惣論に記すものなり。

この時師直を押へて、其身の手疵を請けながら首を取らせしは、則立林只七の妻にして、兼々義士と内通し、今宵の仕儀におよびしなり。それより後に尼となりて隆泉寺町の住居、甥の法師賢了を便りになしつゝ世を過し、四十餘人の追善を專一と心がけしとなん。猶この尼の外に五人程の女子を高野の奥へ入置し事と、只七の妻もろともに師直をうたせし女の傳は、次々の卷にしるし出せり。且只七の甥賢了にも、夜討の時に臨みて小傳あり。這も又後の卷に著すべし。

爰に一奇事の外傳あり。そも／＼鹽谷家滅亡の際に臨んで、其家中難儀ならざるのもとては一人もあらざる中にしも、別けて哀に悲しみの難儀をせしものありしといふ。所は鎌倉の南の通酒川町とかいふ町の裏家に住ふ女あり。歳は廿歳を三ッ四ッ越しても、島田の潰髷姿、形容の

良雄が
志は深慮
両士豫本
意を遂ぐ

いろは文庫　巻之十六

第三十一回

再說師直は思ひがけなき無法に出合ひ、驚き周章身を振り拂ひ遁れんとするに、附添し侍女二人が左右より押掛りて緣側に組敷きツヽ、彼曲者に差圖をすれば、忍の侍は氷の如き刀を持て師直の咽に突かけ、押へし女の掌中を除るいとまもあらざれば、其儘に師直の首をとりに掛るを刎除んとあせるゆゑ、二人の女は一生懸命の力を手先に入れながら、

▲女「兎ても遁れぬ。御尋常にお首を延べて御最期をなされませ」

●女「サア此儘にお首を早く、私の手をも此儘で差通したが能いはヘナア」

師直「主殺しの女ども、出合々々」トいふ聲も立させじと爭ふ大變、忍の者は是非に及ばず、女の手先もろともに師直を貫きながら、

忍の者「鹽谷の浪人推參して主君の敵を討申す、覺悟なされヨ高野氏」ト言ひつゝ忽ち首をかき切り、呼子の笛を吹鳴らせば、またもや木陰のくらがりより、顯れ出たる黑裝束、互にうなづ

いろは文庫第六編序

佳肴ありといへども食せざればの發文は、味淋と鰹節でこつてりと、美味く穿し故人の秀言。开を假筆の假名文庫、正史に倚て實傳めかせど、素より果敢なき策子にしあれば、那柳樽の惡口に、講釋師見て來たやうな食言を吐きと、それ等の譏も免れねど、我面白の人囂に、後から後と卷を重ねて、譬へば星の晝のみか、夜は輝く燈火に、夜延仕事の筆飛脚、平右衛門もどきに焦燥ものから、急げどまはらぬ口拍子、瀬田の長橋なが〳〵しくとも、婦幼稚童に勸懲の、標の爲の捷徑とも、倣さまくほしとかくまでに、手を廣げたる編數は、實に手の鳴る方角違、作者の麁相と見そなはさば、御免候へたわい〳〵。

四十七士の名も高繩に旭輝く春の旦

爲永春水記

りし銅湯繼の蓋を手にとり、緣側より手水鉢の下へ取落せば、敷いたる石に打當り、はずみによつてチリリンと、銅のひゞくを合圖のごとく、袖垣の陰より走り出で、緣側へひらりと飛びあがる眞黑出立の一人の曲者、忽地刀を拔くより早く師直めがけて打つてかゝれば、師直は驚天し、立上らんとする所を、二人の女中は左右より飛びかゝつて、師直を引倒し押伏せんとすれば、強氣の師直身をひねり、摺りぬけながら、聲を立てんとなしければ、二人の女中は周章つゝ師直の首にしがみつき、一人の女中は師直の咽に兩手をかけながら、首をしつかと〆付けて、

▲女「サア此儘に早くお首を。」

●女「サア〳〵はやくお討ちなされぬか」ト言へども此方の忍の者は、刀を當る透間なければ小聲になりて、

忍の者「まづ其手をはなされよ。然もなければ、其方達まで手疵を請けて怪我の元。」

▲女「手疵も重手も厭ひませぬ」ト言ふ中に、師直は二人の女を握みながら、

高「主人に向つて逆賊めが」トはらひ除けるを放さじと、推重りて倒しつゝ、袖もて師直の口を押へ、聲立てさせじとあらそひけり。

り。是なん立林只七の妻にして、仇討の節には、一大事の祕密の役を勤めし才女なり。谷七郷の町小路何所も物音あらばこそ、木茅も眠ると諺に言ひならはせし丑滿頃、月ははれても降つみし、雪の夜道のあきらかに、光輝ありさま闇よりは、却てものの怖しく、稀にも往來の人影なく、犬さへなかぬぞ淋しけれ。爰に高野師直は寒氣に冷て小水近く、夜更て寢所へ入りしかど、幾度となく雪隱へ、側女中に介抱されて通ひしが、丑の上刻と思ふころ、二人の女中に作はれ、緣側傳ひて廁に行き、雨戸を明させ手を洗ひ、空を見上て彳みながら、

高「老女の化粧にたとへたる冬の月影、物凄じくはあるけれど、此雪中の月の景色はなかなか風雅な詠ではないか。」

▲女「御意の通りでございます。昔からもてはやしまする仲秋の月影も、くもりがちなる浮世の常、今宵の空が秋ならば、一入の景色でございませう。」

●女「夜風が御身に當りはいたしませぬか。」

高「イヽヤ、名月のながめにめでて寒くもない」ト宵の酒氣がまだ不醒や、元來着かさね身にまとふ、寐間着の白無垢さむからぬ、心は驕者の癖なるか、庭の松が枝木々の花、實に月雪の三景を、一時にながむる樂と、暫時緣側に端居の折しも、付添ふ女中が誤つてか、傍にあ

夢の世に夢を見るこそはかなけれありし幻や見えしおもかげ

逢見し人々は、墓所にむかへば其俤もうつる心なれども、又撫唯劍は見ぬ事なれば、夢に見るさへその俤さだかならず。いつしかおとなしく吾妻へ下りなんと思ひはべりしが、甲斐もなし。

見ぬ人を見るぞはかなき苔の下それぞとばかり俤もなし

逢ふことをなに祈りけん千早振神さへ今はうらめしの世や

四十餘人の人々の法名の上に、刄といふ字をするて下に劒と置き給ひしは、何れも刄を拂ひ失給ふゆゑとかや。最やるかたなし。（此文にては伊津女は甥の光風に逢ひしことなしと思はる）

この章は猶長けれども畧して記さず。又義士の諸書に稀なり。又こゝに一奇説あり。此事もろ〳〵の義士傳へ記さず。尤實錄なり。

○延享の年間今よりはおよそ九十年ほどぜんなり隆泉寺町じまへといふ本立山長國寺といふ日蓮宗の寺あり。その地内門の西のかたに寮ありて、賢了といふ僧の住居しが、此僧は立林只七の甥なり。又其所よりほど遠からぬ借家に、六十餘歳の尼の賤しからざるが住居て、折々此賢了の庵へ音信る事あ

撰者春水曰、右の旨趣にて押はかれば、新六の亡骸は圓覺寺へ葬らず、其當座は塔婆も立てずにありしが、住僧も心づかずや、但他の僧の弔ひける故心よからず思ひて捨置きしものか。

一日二日ありて或人の許より、

なげくなよ外へはゆかじ亡魂の空しきからはさもあらばあれ

弔ひ給へる志の淺からず思へども、忌事あれば返しせず。一七日過ぎて圓覺寺へ詣でて、

世とともに曇らで月はうらめしや入る山の端にかげは殘して

三七日は障る事のありて詣でず。四七日、寺にて、

おもひきやその名〳〵を書きわけてひとつ蓮の人を見むとは

御預り在りしみたちの御沙汰などありけるが、新六光風の戒名を刄摸唯劒としるし、人々と同じ所に卒都婆を立たせたまふ事の、難有き事におもひはべりし。彌生十日十七日はさはる事ありて詣でず。廿三日、今日は果の日なれば、知るも知らぬも、貴賤群衆夥し。速くも過ぐる月日かなと、光陰のうつるも最かなしく、過越方をおもへば、夢まぼろしとも辨へがたし。

○風間新六の死骸は中堂氏へ貰ひて弔ひけるが、喜兵衛の妹伊津女といふは、古今稀なる才女なりしと。實にも然ありしと被察て、其伊津女の筆の跡文章もいとめでたければ、こゝに寫し好古の人の慰とせり。

たらちねの親のわかれにかさねて猶悲しかりしは口祿十六年二月の初、亡君の御志を繼し人々、殘なく腹切らせ給ふと聞きし折からは、さらに夢現とも別きがたき中に、實に弓箭とる身のならひなれば、忠孝義の道にて世に名を殘し給ふこそ、武士の本意ならんと思ひ慰めて、

きみがため二心なきものゝふの命を捨てて名を殘すらん

御寺に詣ではべりしに、四十餘人の人々の塔婆の中に、風間氏光風といふ人ばかりは名も見えず。參詣の人々に尋ぬるに、其人は姉のつよくいたはり給うて、外の知識の僧を賴み葬りしゆゑ、此所にはなきと語りしゆゑ、あな淺まし、女心とてさはせずもがな。亡魂の他へはゆかじと思ひて、

こゝよりも外へゆかじな亡たまの其名は見えぬ苔の下水

卒都婆の代と樒を立てて墓前の樣にし、光風と書いて歸りぬ。

○潮田政之丞は播州加茂郡北條村に縁者ありて、同國加古川の本陣、中座與右衛門に頼みの書狀有しが、今も猶其書狀を祕藏するとかや。加古川より北條村へ五里ありとか。

　武士の道とばかりを一筋に思ひ立ちぬる死出のやまみち

○早水藤左衛門は乙川家にありし早水助兵衛の縁者なり。彼助兵衛は後浪人して、熊本古町光明寺へ引取り居られしが、東の沙汰を聞て藤左衛門を尋ね、浪人の使をはかり金子などを贈り好を盡せしとぞ。（光明寺は助兵衛の縁者なりしとぞ）早水藤左衛門がその光明寺へ送りし書中に、

　地水火風空の内より出し身のさとぢへ歸る本の住家に

第三十回

○風間喜兵衛光延は、垣元侯の藩中なりける中堂又助といふ人縁者なりければ、辭世を送りしとぞ。

　草枕むすぶかり寐の夢さめてとこ世にかへる春の曙　　喜兵衛

　やり梅や闇をつきぬくその匂　　重次郎

中田利平次　　十一月廿日欠落

孫右衛門　　極月六日欠落

田中貞四郎　　極月四日夜欠落

平野半平　　是は京都にて欠落いたし候このものは大星氏拂物之代金三十兩盗み取迯申候

右之外約を變じ、行方を隱し、又は不理窟を言出し、連中を退れ候者多く有之候。御一笑可被下候。

十二月十一日　　餘倉川勘平宗利

彌右衛門様

利右衛門様

小三郎様

人々御中

此類の書物は、播州赤穗の城下臺雲山花岳禪寺に什物のごとくなりて藏めあり。予が摸寫出す所とは少しく違ふもあれど、大概は相同じ。只こゝに書拔するに似たれども、又是本文物語の緒なり。後の巻を見て知るべし。

○一筆致啓上候。其後者打絶御左右不承御遠々敷有之候。寒氣甚御座候。貴樣御家内皆々樣彌御堅固被成御暮候哉、承度奉存候。私儀當表へ七月罷越、只今迄無恙罷在候。其御地逗留中者諸事御厚情に預り、不淺忝奉存候。内々存寄之儀一筋に相極り、死茂近々與相覺候。於此世者此書中限りの御禮御暇乞に罷成候故、別而別而御殘多有之候。日頃者箇樣の時に及び候而者、强き事者人にも勝れ、木石之樣にて適勇士ぞと自慢に存候ひしが、不日之命に迫候而は、其御地皆樣御事茂思出し、自早晩者御名殘惜存候。併落涙者ものゝふの常に不似合候得ども、於最期之働者、唐之樊噲、筑紫の八郎殿にも劣り申間敷と兼而覺悟に候間、いさぎよく討死可仕與御推察可被下候。委敷御意得度候得共、死出之旅一筋に急ぐ身には、心も何とやらいそがはしく御座候故、乍早々如此御座候。隨而宿所之事老人之儀に候間、可然樣奉賴候。以上。

今度必死一連書付御目に掛候間、御慰に御覽可被成候。

四十八人別紙に有之

欠落者

中村清右衞門　鈴田重八郎　十月廿九日欠落

○左にしるすものは最期の際におよびて、縁者の方へ遣したる書面を、その儘に寫したる筆意なり。其文短くして心を盡せり。實に大丈夫の所行、此一通にても察すべし。

私儀亡主の繼意趣□介殿え推參仕候。相果候後老母幷弟妻子の儀、何分にも可然樣に皆樣え奉賴候。以上。

午極月日　富森助右衛門正因

藪久兵衛殿

菅治左衛門殿

菅十郎兵衛殿

右の書面は立紙にしるしたるを切繼いで、爰に加へし物と知るべし。

○茅野和助常成は作州東北條郡川邊村の人なり。和助の兄を善助と呼び、和助の弟を加太夫善次郎と言ひしとぞ。妻子をば此兄弟に賴み置きて仇討に向ひしなり。和助の子猪之吉は、仇うちのときは三歳なりしとぞ。成長の後に三栗常庵と號し、津山侯の官醫にて上手の名を得たりと言ひつたふ。

天地の外はあらじな千種だにもと咲く野邊に枯るゝと思へば　茅野和助

じ。大星は這に意なく、いたづらに坐視して偶然たるは愚に似たり。事破れて後千辛萬苦の心を碎いて復讐を計るは、其身の忠義千載に賞せられて、判官の汚名いよ〳〵朽ちざるがごとしと論じたり。

云にも足らぬ論ながら、殘口の辯を好む者は右の評を是なりとするか。南朝に新田楠の名將ありて、庸愚の足利を斷事あたはず、蜀に孔明ありて玄德天下を一統せず。大星の才智忠臣、古今に無類なりとも、由緒正しく仁心深き高貞の家、只一時に亡ぶるといふ大凶變なるを、豈大星氏に難癖つけて是を評すべきや。又其ゆゑをもて師直の汚名後世に傳へ、其說その談、晝夜を差別事なく天下の人口に語りつゞけて休みなき美談なるを、一曲つけて誘る人は、他に異なる才智あり、氣に思はする所爲なるか。爰にしばらく義士の眞跡あるひは書狀の寫を出して、本文の助とせり。

○義士對話に曰、

富森助右衞門は兼て存生のうちに位牌をこしらへて、麻くさの長延寺に置きたるよし。黑塗に金粉をもつて戒名を記し、日付なしとぞ。二月四日は姉の忌日なりとて、

先立し人もありけんけふの日をつひに旅路の思ひ出にして

いろは文庫　巻之十五

第二十九回

昔の實事を書殘されし書は言ふもさらなり、僅の戲れ書、文反古も年ふりたるはなつかしき物ぞかし。然れば忠臣孝子の筆の跡は、拙き手に誤りうつしたりとも尊くゆかしき事なるを、近頃看たる寫し本の中に　蜀山人聞書文庫とか題號せし僞書なりとかおぼゆ　大星が復仇の存念、四十七人を使ふ事手足のごとし。赤城の臣三百餘人の中、進藤小山のごときは、詞は忠臣に似たりといへども、復仇に眞の意なきものなるを知つて其實を告げず、下賤なれども寺岡が忠誠を察して、倶に大事を計るは明智のいたりといふべし。然らば其主君判官の短慮にして、事を不成を知らぬ事はあるまじ。また師直の貪欲を知らざるは不明なり。鎌倉の家老矢居藤江が、魯鈍愘きに依て事に堪へざるも知るべし。是を知らざれば不明なり。苟も其氣質を知らざれば、其身は城を守りて外に出る事能はずとも、かの手足のごとくに使ひたる、原か蘆田のごとき才智の者を密かに鎌倉へ下らしめ、金錢財帛を持せて加古川本藏のごとき方便を行はゞ、高貞誅せられず、家斷絕には到ら

片岡に尋ね逢ひ實意を盡して、ひそかに夜討の時門前まで供をせしが、猶後々までも親切の心がけ、そのほか太郎作が鎌倉へ出府に付て、鹽谷の城下花岳寺より同道するものの奇談等いと多し。必竟太郎作が如き正直なる百姓あるも、判官の仁心且大星の政事よろしきが故なるべし。片岡夫婦の寐物語は用なき愚痴に似たれども、後のはなしの緒なれば、全本となるまでこゝろながく讀せ給ふべし。元助が事は第六編に委しくしるす。

女「イヽエ、證文はいたゞきますが、頓て鎌倉見物ながら下つて、旦那さまをお尋ね申しますから、其時は又残金を才覺してお返し申しあげますと申しました。」

片「兼々實明な男とは言ひながら、餘り正直な事だ。それはさうと、元助が二人になつたのは何様した事だ。とんと合點が不行て。」

女「ホンニマア、氣味の悪い事でございますねへ。」

片「國元から其方の供をして來た元助が紛者かと疑つても、奉公の勤方、道中の骨折、少しも私の了簡なく實意を盡して、長の旅を女子供を大切に送つて來た樣子を思へば、なかく惡く怪しむ理でなし。」

女「サア、夫ゆゑに猶の事心にかゝるではございませぬか。貴君が此地へお下りのお跡を追つて參つたといふ元助も、御不自由の中を心配して、尊い藥の都合まで、苦勞して調へたと被仰お咄の事をはじめとして、些も疑はしいと疵を付ける事のないあの風俗、何樣した事でございますか」ト夫婦は案じ煩ひながら、曉近くなりし頃心勞れて寐入りける。

因に云ふ、義士仇討の後、其子孫は遠き島が根へ流さるゝに及びて、片岡の子供は十二歳と九歳なれば、十五歳まで其村に預けられしとぞ。其以前より里長の太郎作は鎌倉へ下り、

女「イエ、夫はマァ當座の入用にと被仰ました。又當暮には小野寺様か向島さまが お下りなさいますから、其節には鎌倉方の連中へ手當を遣さると申すことでございます」ト言ひつゝ又も金子を三十八兩取出し、「是は家財と不用の品を賣拂ひまして、うけとつた金子でございます。夫から御知行の庄屋へ貸てお置なさつた十兩のお金を、五兩持つて參つて申しますには、御存じがけない殿さまの御大變、俄の御浪人で嘸モウ御當惑でございませう。御恩金の十兩を箇様の時でございますから、早速調へまして殘らずお返し申しあげまする筈でございますが、急に調達いたしかねまするから、先五兩お返し申します。殘金は出精いたしてお返し申樣に致しませうト正直に持つて參つたゆゑ、お前さんにお聞まうさずに取はからひましたら、後日でお叱り被成かと思ひながらも、お國を立退く私等を麁略に思はぬ心から、催促もせぬ金を持つて參つた親切を感心致しましたゆゑ、五兩の金を請取つて、十兩の證文をば太郎作に返して遣りましたヨ」ト金を渡せば片岡は、

片「イヤ、夫は思ひがけない事である。何樣して〱、お家の大變を幸に、不實を働く者が城内にもあるのに、御領分の中でも遠い所で、知らぬ顔をして居ても濟むのに、此方の零落を聽いて半金もはやく返すとは、寔に有がたい志だ。能く證文を返して遣らしやつた」

御膳を召上つて被下まし」トこれより夜食をしたゝめさせながら、道中の樣子を問ひなぐさめ、國元の咄なんどを言出して、過にし頃の物語、城中城下の誰彼が斯る事の有しなどゝ、言毎事に一點程も、胡亂の旨趣あらざれば、何樣氣を付て容形を見ても、久しく馴染の元助に少しも不違、疑ふべき體はいさゝかなかりけり。斯て其夜は主從五人、寢物語に小夜更けるまで、果しもあらず問ひ問はれ、二人の子供は珍しき父の左右に添寐して、夜寒の風も厭はずや心よげに眠りしを、見えねば手にて撫さする、夫の眼病見る妻は、その不自由を察しつゝ、いとゞ胸さへ痛るなるべし。はや元助も勝手の方にて眠り入りたる息づかひ、四邊も靜になりしかば、枕元なる旅荷物より大星の手紙を出して、小聲にこれを讀聞せ、懷中の胴卷を解て金子を取出し片岡の手にわたし、

女「其三十兩ございます方は、大星樣から手當として被遣ました。ほかに私の路用にせいと被仰まして、十兩下さいましたが、儉約をいたしたけれども、子どもの疱瘡の入用と逗留の旅籠のかゝりで、四兩の餘も遣ひましたョ。」

片「オヽ然うであらうとも。何樣して子供だと言うても二人の入用、なか〱容易いことではない。併御家老から三十金とはありがたい事だ。」

はありますけれど、寔に苦勞をいたしました」

片「ホヽウ疱瘡をしたとか。夫はマア一役濟んだ樣なもので安心ではあるけれど、旅の空で二人一度に疱瘡とは、さぞ難儀な事であつたらう。新六の方は歳上だけに毒も多くある筈だのに、六之助の方が重病とは何樣したものか、素人にはわからぬ事だ。ヤレ〳〵なア、お家の大變を考て察ると、命を捨るが家來の役、妻子も倶に死ぬるが常、悔むわけではなけれども、辨のない子供まで、不自由ばかりか此末も、何となりゆく事ぢややら、案じられてならぬはへ。」

女「貴君はまた何樣してお目が惡うなりましたかネヱ。」

片「イヤ何樣したの斯うしたのといふ輕い事ではない。千に一ッも助かりがたい內障の大病、元辰どのさへ療治が出來かねると言はれたけれど、眞珠の最上なのが調つたばつかりで、潰れずに漸々快氣かゝつたのだ」ト互に過し日の事を語合、外に聽きてはなかく〳〵に、耳がましき言の葉とうるさき樣にあるべきを、義士も勇士も親子の恩愛、妻とはいへど義理あれば、子供の養育病中の、辛苦の程を察しの挨拶、彼是慰めなぐさめられ、嬉し淚と憂思、胸なでさするばかりなり。此とき元助は夜食の膳をもち出で、

元「ヤレ〳〵御空腹でございましたらう。サア〳〵、何にも召しあがるものはないけれど、マア

硃砂　人参　茯神

右の三味を濃煎じて是を服せしむるに、氣爽になり、假ものの形は消えて元のひとりとなれりと記してあり。思ふに病によつて形容兩人となるものは、只形容あるのみにて言語ことなし。是肝經の虛に起る邪氣なりといふ。如斯なるときは、元助が二人となりぬるは離魂病の類にあらず。最あやしき事ならずや。然れども兩人の元助が互に咎むる體もなく、今來りし元助は格子町に諸用ありとて何氣なく出て行ば、家内に居たる元助は、勝手元にて夜食の調膳一人世話して働きゐる。片岡夫婦は久々にて問ひつ問はれつ果しなき咄に移りて、元助の怪しき體を忘れしごとく、只子供の事と國元の物がたりに時刻をうつし、

女「過し事ゆゑ今更に言うても詮ない事でございますが、桑名の宿で新六と六之助が疱瘡をいたした時は、モウ何樣せうかとぞんじましたヨ。殊に新六と違つて六之助は、まだ辨がない故に、痛い痒いで下にとては些も寐ず、(このとき新六は十一歳六之助は八歳なり)お醫者さまは三人まで藥を斷つて呉ませず、息を絕した事は幾度か。其度ごとに元助が藥よ水よと夜の目も寐ずに看病して呉るを力に、私も氣をはげまして、神々さまへ斷物をして大願をかけた念が屆いてか、思の外に全快して、顏に疱瘡の跡さへ付かず、マア二人とも此樣に、達者でお前に逢せますは、私の役で

子「お爺さん、お眼が痛うございますかへ。拙子がお脊中を敲いて進まちやうかへ」ト問はれて父は嬉しさと、又悲しさも増鏡、曇りて見えぬ目をこすり、抱寄せて涙ながら、

片「オヽ二人とも温順なつたなア。嘸道中で草臥たらう。マア母人さんと三人で、其處で横になつて休足をするがよい。お佐代も旅の勞で大儀であらう、遠慮なしに足を出して休まつしやれ」ト言ひつゝ二人の子どもの脊中、撫子の花なつかしと、秋の野面を見るにつけ、故郷思ふ恩愛に、只悲しさがまさるゆゑ、親子四人が泣くのみにて、しばらく詞も途切れしが、只そのなかにも元助が二人になりし異變さは、呆るゝまでに不思議なりけり。

第二十八回

古より形容兩體になるを離魂病と名付け、尤多くはあらざる奇病の由をいひ傳ふれども、开は只物の本に書殘してあるのみ、いまだ眼前に見しといふことを聞かず。されば倭國本にもその證跡を正しく著したるを見し事なし。但し奇疾方に曰、人ありて忽ち自ら形容兩人となりて、眞假を別つ事を得ず、言ずまた問へども答ふる事なし。乃ち是離魂病なり。

うぞんじます。嘸マア御不自由で被爲入ましたらうのに、誰人が朝夕の御飯の調膳をいたして進けますか。」

片「イヤ、食事其外の用向は元助が甲斐々々しく働いてくれるから、夫には少しも差支ないて。」

女「オヤ、元助とお呼びなさいますのは、只今供に連て參りましたお馴染の元助と、同じ名の男をお置きなさいましたのでございますか。」

片「イヽヤ、やはり國元でつかつた元助ぢやが」ト少し考へながら、「ホン ニ元助は何といたしたか、元助々々く」ト呼べば、二階より方燈を提げて階子を下る元助が、

元「ハイく、只今燈の支度をいたして居りました」ト言ひながら、附木に火を燈し、方燈に移して持來り、片岡の内儀お佐代を見て、

元「オヤ、お國のお新造さまでございますか。是はくようマアお下りなさいました。もう此方でも旦那さまがお眼の惡いので、寔に御難儀をなさいました。ヤレく嬉しや、是からは私も大きに心強くなりました」ト言ふ中、お佐代が伴ひし子ども二人は、傳五右衛門が右と左の膝の側へ縋付きつゝ、父の顏をつくぐとうち詠め、

さまのお假住居でござります。お小兒さまがた、サア〳〵お父上さまにお逢ひなされませぬか」ト言はれて驚く片岡よりも、表の方にて子供の聲、

子「母公さん、爺公さんのお宅でありますとサ。速くお入りなさいヨウ」トいふ聲と侶供に、片岡が妻と子は門口より走入る。黄昏時の家内の體、まだ方燈をてらさねば不案内なる夫の家、しかとは見えねど不自由と察せられたる住居なり。傳五右衞門は鷄矇眼にて見れども見えぬわが家の內、聞覺えたる元助が聲に變らぬ今の口上、妻子を連れて國許より來りしといふは、合點の不行と思案は爲れど、懷しき妻子の事が心にかゝれば、

片「ナニ、國元から妻や忰が參つたとか。マア〳〵早く足でも洗うて此方へ上るが宜いではないか。此身は眼病ゆゑ夕暮からは埒明かぬ。其所の桶に水もある筈、足を洗つてサア〳〵此所へ。」

女「オヤ〳〵、貴公はお眼がまだそんなにお惡うございますか。最前元辰さまのお噂では、お快方と承りましたがネエ。」

片「イヤ、なる程先達から見ればもう〳〵大丈夫になつたのだ。」

女「オヽさうでございますか」ト手をついて、「さて其後は御機嫌を伺ひませず、寔にお懷し

元「成程左樣でございませうナア。先達お國元でお城引渡しの節も、鴈取峠のお手配から二の廓の備立の評判を、近國までも賞むる噂が大層でございました。何でも鄕右衛門樣の事を軍師の隨一だと申したさうでございます。イヤ夫は左樣と、モウ日が暮ますさうな。秋の日は少しの間も油斷が成ませぬ。ドレ方燈の支度でも致しませう」ト言ひながら勝手の方へ立て行く。抑西へ入る口に海原も、水色黒く物淋しき、浦曲ずまひに汐風も、身にしみ〲と哀れげなり。此片岡は安曾貝なんどと兩三人、多くの人々に先達て早く下りし事なれば、火急の支度に何も彼も、たらぬ儘にて鎌倉に、假住居する不自由サ、獨難儀の其所へ、國に殘せし片岡が下部元助尋ね來て、傳五右衛門の浪宅の力となりて暮させける。斯る所へ門の口、二三人の人音して、

客「ハイ些お賴み申します。片岡傳五右衛門さまのお住居は此方でございますか」ト音信聲の聞えしに、此とき元助は二階にあがり、何やら用を爲てゐるにや一向に聞付けねば、傳五右衛門さぐり出で、

片「ハイ、誰殿でございます。」

客「オヽ旦那樣でございますか、ヤレ〲嬉しや。ヘイ元助めでございます。お國元から御新造さまのお供をいたして參りました」ト言ひながら背後を振向き、「サア御新造樣、此所が旦那

か」

元「エヽ左樣〳〵。あれが正然とお見えなさるやうでは、もう大丈夫でございます。是から鷄朦眼の御療治が肝要でございます。しかしマア有難い事だ。成ほど元辰さまは餘程御巧者でございますなア。」

片「オヽ巧者とも上手とも。是まで國許に居られても療治は勝れてゐるといふ評判であつた。今日は在宿であつたか。」

元「へイ左樣でございます、何か大勢お客がございました。」

片「ハテナ誰が來てゐたか。何卒此身も諸方を出歩行て、世間の樣子も委しく聽たいものだ。」

元「ナニ、やがて御他行も出來ますのサ。」

片「はやく然仕度ものだて。病氣の中にも段〳〵と前後を考へて察ると、由良之助殿、鄉右衞門殿は一對の大將だ。大勢の取締の出來るものは他にはない。武術といひ軍學といひ賴母しい事だ。」

元「へエヽ、原樣の軍學は則御家老樣と御同門でございますか。」

片「さうサ、山鹿甚五左衞門の高弟ぢや。」

眞帆片帆、出船入船絶間なき、眺望にあかぬ上總浦、折から雁の一聲に、古郷いとゞ懐しく、流石に人情捨がたければ、妻子の事をや思ふらん、緣さき近く座をしめて、主の片岡傳五右衞門、春の末より眼の病、大望ある身は心もせかれ、氣を紅絹の裂くれなゐの、色は變らぬ同盟の、約に洩じと全快を、祈る藥師に御夢想の、藥の驗もはかどらず、惱しげなる朝夕に、過越方と行末の、事を案じて居る折しも、勝手元より下部の元助、

元「旦那さま、お藥を漸々と煎じましたから召上りまし。段々日の短くなりますので、大きに遲くなりました。格子町までは餘程ござりますナア」

片「イヤ御苦勞々々。今日は大きに眼の眩のが快方た、もう全快に間もあるまい。永い事で其方も倦々と致したらう。今日はあの向の上總房州の山が見えて、ちら〳〵と船の帆がわかるやうだ。」

元「へヽエ、左樣ならあの遠山や船の帆がお見えなさいますか。ヤレ〳〵夫はマア有難い事でございます。夫ではもう早速にお全快おなりなさいますはへ。そんなら、アレあの向の釣舟の南の方で網を打つてゐる船が分明ますか」

片「オヽなるほど見えるとも見えるとも。ソレ今網を揚げて、何か魚が取れた樣子ではない

いろは文庫　巻之十四

第二十七回

古人の云る事あり、婦人は其身を愛する人の爲に容を粧ひ、士は己を憐む者の爲に死すと。宜なるかな、鹽谷判官高貞は君臣の禮義正しく、殊に慈愛の心厚く實情深き性なりければ、道を守る家臣郎黨君を思はぬはあらざれども、又其性の奸曲は、主たる人は家來を憐み物を賜るがあたりまへ、纔の知行に命を捨ては、勘定に合はぬなど思ふ輩もありしとぞ。然れば鹽谷家の城を退去の時に臨んで、主君の憤死を推量り、殉死をせんと決する者二百六十餘人ありしも、血判同盟の約に背く者は、次第に多くなりゆきて、殘るは僅に四十餘人。是ぞ金鐵の忠臣義士、其列傳は世の中の皆人既に知る所にして、今又謂んもことふりたれど、片岡傳五右衛門孝房の一條は、世に現れざる異傳あり。爰も所は鎌倉に、家居まばらな町つゞき、少しはなれて巳午のかた、身を忍ぶには屈竟と、思ひ月池の說法洲に、四隣は遠き借家住、主從二人の浪人あり。頃しも秋の末つかた、木々の梢は紅葉して、降る日は肌も良寒く、晴る日は空青々と海面遙に

の助になるべき品を彼是と取あつめ、車の數も十餘車、暫時の間に調へて城中へ引込み來るは、人の心のつかざる用意、口にて何とも言出さねど、必死の覺悟勇士のはたらき、此一事にてもいさぎよき心の底はあらはれけり。

×「イヤ、向島氏も命にかゝる樣になつて、日頃の勇氣もござるまい。殊に籠城の討死のと申事はこ餘り無法な評議で亂心も同じ事、鎌倉の御下知を愼んで承り、お家再興が忠義の第一、物さわがしくいたしては、いよ〳〵お憎しみを重ねる道理、向島氏もたしかにその了簡で出仕をせぬのか、若さもなくば亡命をいたされたでござらう」トあざけりながら身勝手を言ふも心の餘りなるべし。是を聞く義心の若者二三人、追取刀で立上り、

●「イザ向島が宅へまゐつて、臆病らしき體もござらば、不忠者の見懲しめに打殺して捨申さう。」

▲「何さま是は尤至極、常に似合ぬ臆病者、傍輩の面穢し斫捨てくれん」ト血氣の面々向島が宅へ走りゆき、「八十右衞門は如何せしぞ」ト言ひつゝ奥へ踏込み見れば、何やら周章て家內中を引ちらし、實に駈落でもせしものかと疑ひながら、居間へ駈入りあちこちと見まはすに、鎧を天井より釣下げ置き、早着の用意をなしてあり。

▲「モシ、此樣に物具を揃へ心構がしてあれば、臆病者とも思はれず。何所へ行きし事なるぞ」ト尋ぬる折しも向島は、濱方の運上に取あつめありし海草のたぐひ、又は田螺の石灰にて圍ひ置きたる兵粮の手當藏、城下を隔てありける所へ走向ひ、車を言付け積上させ、其外籠城

んと、互に見まはす其折しも、彼餓鬼と誹られたる浪人は、欣然として立上り、城門へ近付けば、小野寺は會釋して、

十内「是は〳〵勝右衛門どの、大星氏の所存たがはず、此度の大變を聞れて外事にいたされず、早速の參着は兼々のお心がけ、適れの事にぞんじます。イザ御同道申さう」ト言はれて不破は肩身も廣く、笑ひ誹りし人々を見返りながら城内へ伴はれつゝゆくほどに、はじめ笑ひし人々も、偖は先年試し切にて身を隱せし、播磨第一の荒者不破勝右衛門にてありけるかと、皆異口に噂せり。斯て大星は勝右衛門を兩三日城内へ止めおき、內々の心底定りし後に、金子をあたへ竊に內意をしめし合せ、先達せて鎌倉の地へ下せしとぞ。斯てまた城中には籠城の覺悟をなさんと、家中の人々廣間へ集り彼是評議をする中に、日頃は武勇の心がけ第一なりと賞せられし向島八十右衛門は、如何せしや昨日我家へ歸りしより、少しも影を見せざれば、傍輩の者怪しみて、

●「向島氏は何樣いたしたらうナ。」

▲「最早出仕の筈でござるが何と致した事であらう」ト互に問合ふその中に、斧九太夫の心にひとしき臆病者は悅喜して、

●「ナニ〳〵、常世とは誰の事だ。」

×「コレサ聞分のわりい人だ。鉢の木の文句を知らないか、錆た長刀ちぎれた鎧、適れ餓鬼の大將軍佐野源左衛門ではあるまいか。」

▲「アハヽヽヽ餓鬼の大將軍ならば能が、痩馬にも乘らないから餓鬼の大將軍だらう。」

●「それは宜が、來た人の了簡は何樣だの。」

×「ナニサ惡い了簡ではない。先刻三人來た浪人が奇特だといふ事で、褒美に金と衣類を被下て歸つたから、夫を聞いて、又褒美をせしめるつもりで駈付けたに違ねへ。」

●「なるほどこれはいゝ推量だ。イヨ馬のない常世どの、只今お召でございませう」ト異口にあざけるを耳にもかけず、浪人は門際より少し隔し小高き所に腰うちかけ、姑くひかへ居たりしが、着到順に城内へはいる姿を羨しく見送る心は奈何ありけん、見すぼらしげに在ける所へ、城内から立出る立派の侍小野寺十内、はるかに城下を見下して、

十内「唯今これへ參られし中に、不破勝右衛門どのはござられぬか。元老大星の先刻より待かねられたり。不破氏は參られぬか」ト言へば、着到場の役人も不破勝右衛門殿、不破氏と呼立つる聲城下に響き、人々四方を見渡して、待かねられて呼入れらるゝ勇士は何れに居るやら

ば、家中といへども初の國入、顏見知らねば相互に麁相の事もあらんかと、門番所にては油斷せず、一々人を改めて重役へ順達する故、時刻うつりて控ふれば、城下には町人百姓追々に走せあつまり、御用もあらば承るべし、被仰付下されよト、村長里の長なんど帶刀の許受けたるは美々しく出立ち、武具を携へ勇しげに組々を立てひかへたり。此時いと〳〵貧しげなる衣服を着て、紺糸の鎧のをどし糸の、ほつれちぎれて古びたるを肩に引かけ走來り、入城せんと言込めども、着到帳へなか〳〵に記す氣色もあらばこそ、鼻の先にて會釋、その見苦しきをあざ笑ふ聲も自然と聞えつゝ、又あざけりて囁くも、聞えよがしの誹り言。實にや世間の人心、惡ならずとも惡口を利くは古今の人情なるか。

▲「アハヽヽヽ今着到を願ふ浪人は餘り見苦しい形だナア、何といふ人だか。」

●「さればサ、飢死をするよりかも、城へ入つて兵粮でも澤山喰はうといふ了簡だらう。」

×「イヤ〳〵、籠城して兵粮を喰つて腹を丈夫にして、花々しく討死するといふ のならばまだしもだが、さうではないノサ。」

▲「そして何といふ了簡だらうノウ。」

×「さればサ、あの常世の内心は。」

事なれば、着到の連には記しがたう存じます。大星どのの申付で、先刻から浪人衆の見えられましたも、堅く斷りて入城をいたさせず、悉く歸しましたれば、各方も何分お氣の毒ながら。」

三人「なるほど御尤の事。然しながら拙者ども必死の覺悟で是まで推參、一應の義を大星氏へお屆けなされて下されイ」ト思ひ極めし其面色、なか〳〵立歸る體なければ、是非なく大星へ斯と告ければ、由良之助が差圖として、腹心の侍一人門前に立出で挨拶して、入城の事は堅く斷り、義心のほどを感賞するしるしなりとて、三人の者へ金子と衣類をあたへ、住所を書留め、後日に內意の趣を通じ、申事もあらんが、先々今日は歸らるべしと、理を盡して言聞せければ、岡野治太夫淚を流し、

治「今にはじめぬ元老の御仁心、浪人の便を失ふ事を思召して、此大變の御最中にわれ〳〵の志をお捨下されずとあつて、如斯の賜、仰にしたがひまして拜受はいたしますが、御評議の定り次第、是非とも御內意下さるやうに。」

三人「ひとへに賴み入ります」ト力なげにぞ歸りゆく。此時にまた鎌倉の三屋敷に在りし家中は、浪人して身の落着を兎や角と案じ煩ふその中にも、忠義一途の人々は妻子を所々へ預けおき、鎧物具携へてお國の城こそ死所と、走登りたる忠臣義士、同じ時刻に參着し城門に近付

第二十六回

再説鹽谷家の城中には、譜代恩顧の人々がおもひ〳〵の支度にて、互に心置合ふあれば、兼々同氣の忠臣は誰に遠慮もあらばこそ、弓矢の用意旗差物と、今にも事のあるやうに、騒ぐがあればひそ〳〵と寄合うて囁き談じ、私欲をはたらく不忠もあり。物頭に迯支度するものあれば、陪臣に必死をきはめし豪傑あり。されば重役の面々は、先城門の下知を厳しく言付け、出入の者に油断せず。又城下或は在々に住居する諸家中の面々が走集る着到を記す役人、門外にあつて名前をしらべ、入城帳へ名を付立て居る所へ、追々來る家中の外に、走り集る者もすくなからず。其中にて、兼て覺悟をしたるがごとく、用意して來る者三人あり。其人々には、

岡野治太夫　井關徳兵衛　大岡林太夫

右の三人は鹽谷判官の勘氣をうけて浪人したる者なりしが、武道の心がけ頼母しく、故主の沙汰を聞くよりも、籠城の中に加はらんと、鹽谷の城の門際に來り、姓名を名告てはいらんと、着到帳へことわれば、

帳付「イヤ御入城はまづ暫くおひかへなされイ。御こゝろざしは適れながら、一旦御浪人の

二人「ハヽ」

由良「御大儀ながら、只今より一刻も早く鎌倉に走下り、高野氏の落着を聞とゞけ、直さま取つて返されよ。足下等二人の注進次第、諸士の覺悟を相定めん。今日よりして老分の面々は御殿に詰切り、物頭の衆は役所々々を相守つて、再度の御沙汰を相待れよ。又御家中は一同に武具の用意に油斷あるな。まづ今日は一旦退出いたされイ」ト言ひわたされて一同に、宿所宿所に歸りしが、是より追々の注進に、師直どのは何事なく疵養生の仰を蒙り、判官公には御切腹の翌日すぐに鎌倉の三屋敷を召あげられ、諸家中ちり〴〵ばら〳〵に途方を失ひ浪人と相なりはつる趣を、今は慥に聞くよりも、齒をくひしばる一家中、さては我々が運命の盡るところ、今更未練のおくれをとりて、世上の人の物笑ひ、臆病ものと言はるゝな。潔く討死して屍を當城にさらすとも、忠臣の名を末世に殘し、鹽谷のお家は絶るまで、君君たれば臣もまた道辨へて終を遂げしと言はれて、せめて御恩に報い、御奉公の爲納せん」ト互に心の合うた同士は、鎧物具肩にかけ、詰所々々へ走集れば、城下住居の家中は素より、在々所々に住居の役人鹽濱役所の人人まで、後日は兎もあれ一旦は、勇氣の立し侍氣質、籠城なさんと勢込んで、前後をあらそひ鎗引提げ、鎧を脊負ひ城中へ、我おとらじと走せ入るは、最めざましきことどもなり。

ありければ、上下一同顏色變り、しばらく言葉を出すものなく、呆れておの〳〵茫然たり。忠義一途の若殿原は齒がみをなして進み出で、

●「君はづかしめらるゝ節は臣死すと故人の教は今此とき。」

▲「御主君御切腹とあるからは、われ〳〵必死の覺悟の外別に思案もござりませぬ。」

×「城を枕にいさぎよく討死いたすが拙者どもの心底、元老よろしくお差圖を」ト言ひ出すこそけなげなれ。由良之助は心の中に速くも極むる國家の後日、何とぞ亡君の御こゝろざしを、兎やせん角やと上中下、そのはからひの善惡を工夫の胸をさすりながら、

由良「アヽイヤ、これはしたり若殿原。存じもよらぬおの〳〵の申され分、城を枕に討死とは誰を相手に不法の了簡、かならずはやまる事は御無用。先某が所存には、おの〳〵短慮を愼んで、御舍弟大學さまをもつて御跡目の願が第一、また我君御切腹のうへは師直ぬしも同樣の御沙汰があるか、手疵によつて病死のほどもはかりがたし。原大星御兩所の鎌倉出馬の折からは、未だ兩家の存亡も定りしと申すにもあらぬ趣、此方よりも早打を出し、師直ぬしの樣子を篤と聞糺すが肝要ならん」ト言ふに各もつともと其詞にしたがへば、大星は一座を見わたし、「イヤナニ新井安右衞門、萩原文左衞門。」

●「されば、何でも鎌倉のお上屋敷に大變な事でも發りましたらう、常體ではございますまい。」

×「イエ、私が考は然うではないネ、此度のお役が首尾よく濟んだ、お目出度知らせの注進でございませう。」

△「何卒さうなら宜うございますが、あんまり嚴しい早打で、何樣やら胸がドキ〳〵爲ます。」

⊕「左樣サなア、お役の濟んだ知らせのお使なら、原鄕右衞門さまでなくつても、最些輕いお方でありさうな筈を、重役の鄕右衞門さまがござる程では、少しむづかしうございますネ。」

×「なるほど〳〵、然う聞いて見ると何樣やら案じられます」ト町中うはさとり〴〵の、折からまたも乘來る早駕籠、以前のごとく大勢揃ふ人足が、大星瀨左衞門を守護なして、エイサアエイサアエイサア〳〵ト城門さして走込む。其いきほひのすさまじく、城內城下自から、誰言ふとなく大變あり、おの〳〵用心あられよトいふを人々聞傳へ、あられぬ噓を吐者あれば、今にも軍がはじまる樣に周章人もすくなからず。上を下へと混雜し安き心はなかりけり。此時大星由良之助は第一番に城中へ馬を飛せて走入り、評定の準備をとゝのへ諸士の出仕を待請けて、今到着の原大星を介抱等閑ならざりけるが、追々出仕の諸家中へ主君判官御切腹の樣子を披露

番士「鎌倉の早うちとな。元老方へ申達し、待請あるやうはからひ申さう。御休息あられヨ」ト役所にて介抱させ、直に諸方へ知らせの使を、手分をなしつゝ走らせる所へ、又も走來る早馬、何事やらんと城下の町人家中の人々、一同に胸とゞろかす間もなく、二度目の馬は城門へ乗りつけながら大音あげ、

二番手「かまくらよりの早打として、大星瀬左衛門どの只今是へ到着でござります」ト告ぐる時には、外廓の家中も近きは聞付けて、仔細は知らねど騒ぎ立ち、各御門へ駈出て、案じ顔なるそのところへ、領分の境の早馬引つゞいて宙を飛する早うちは、城下の人も兼てより顔を知りたるお家の重役、原郷右衛門元辰を駕籠に守護して數十人、大地を蹴立る砂煙、エイサア〱、エイサア、エイサア息をはずませ聲も霞むを、只大勢の勢にて、路は急げど乗物をゆらぬは肩におぼえの人足、あしをそろへて城門へ飛ぶが如くに走せて行く。町家へ所用に出たる家中は、平生ならずと心に周章、何れも用事を捨置いて、我も〱と城中へ、走り入るあり駈歩き、その縁つゞきへ知らせに行く、風情も被察てあわたゞし。然れば城下の町人は皆々門口へ走出で、互に顔を見合つゝ、

▲「イヤモシ彌六さん、今の早うちは何事でございませうナア。」

のうへ、此書狀を相わたせ」ト言ひつゝ側へ近く進ませ、新七郎が耳に口、「な、な、得心がまゐつたか。」

新「ハヽ畏りましてございます。」

由良「合點がいたら些も早く、路用の手當も御用の金も某が手より相わたす。かならずともに麁忽あるな」ト支度金として十五兩、主君の御用に二百兩、新七郎へ差遣し、「屹度首尾よく勤められい。」

新「お目がねをかうむりました有難さ、たしかに御恩報じとぞんじて相勤めまするでござりませう」ト愼んで金をうけとり、我家へ歸り旅の用意をとゝのへて、其翌日の朝早く鎌倉へとて走下り、大星の内意の如く掛合しとぞ。偖て由良之助は新七郎に委しく言付つかはしたれば、先安心して日を算へ、最早お役も首尾よく相すみ、君にも御安堵遊ばしつらん。目出度吉左右のあれかしと待まうけたるその所へ、領分の境の役人より先觸として乘り來る早馬、城門際にて聲高く、[illegible]

早使「御注進々々」ト呼はりながら馬より飛下り、「何事かぞんじませねど、只今鎌倉表より早うちの御注進とて、原鄕右衛門どの押付是へ」ト言ふを聞くより番士の頭、

第二十五回

收斂の臣あらんよりは、寧盗臣あれと、古人の金言妙なるかな。俚俗の詞に言ふときは、親方思の主倒し。夫倹約と名を付けて、悋く賤しき心から、一文をしみの百損とは、鹽谷の老職矢居曳右衛門、藤江將右衛門の兩人が、時節も品も辨へず、つねぐ悋嗇了簡から、御馳走役の物入に、主君の御身の大事を思はず、只金銀を大事に心得、萬事悋嗇が先に立ち、後身を君にとらせしは、最憎むべき似而非倹約。そもく鹽谷の滅亡は師直にあらずして、矢居と藤江の兩人が所爲に發りし大變にて、未前を察する大星まで、越度の樣に後の人の、批判をすることそ悔しけれ。偖も大星由良之助は、此度主君の御役義を仰せかうむり給ひしと、國元にて聞くより早く、國詰なる新井新七郎といふ者を呼出し、

由良「さて其許は大儀ながら此度鎌倉へ走下り、一大事の義を相勤められよ。尤いそぎの御用なれば、明朝すぐに當地を發足、一日もはやく鎌倉の御屋敷へ參り、矢居と藤江の兩人に對面

いろは文庫第五編序

何れ見ても咲劣りなし梅の花とは秋光庵の妙句にて、武潞の行列を看ながらの吟なりとかや。こゝに記せしいろは文字四十七士の銘々傳は、拙き筆に成るといへども、いづれおとらぬ忠臣義烈、松の操のいろかへず、雪間の梅のいさぎよく、咲おとりなき花の枝、かざして歸る俤にも、まされる雪の翌朝の退口はづかしからぬ朝日影、たかき譽は鷹名和に、はれて靜けき海の面、千尋の底より猶深き其志の功を感賞あらば、最淺き撰者の硯の海さへも乾くひまなく、追々に續く五番手六番手、その寄太鼓のどん〳〵と、看官の御贔屓あらばありが大部と書房が欣喜、それのみ偏に願ふと云爾。

東都作者　爲永春水誌

再說不破勝右衛門正種は、久しき以前に鹽谷家を浪人したれども、忠義の志は鐵石の如く、先非を悔みて高貞の君恩を報じ奉らんと思ひ居たりし所に、此度の大變、國家滅亡の注進を聞くよりも、定めて大星はじめ國元の諸士一同に、籠城必死の心底なるべしと心せき、前後周章ながら彼娘主從を同道して問屋へかゝり、川越人足の不法を斷り、娘をつゝがなく送り屆ける樣に、嚴しく問屋場の役人に云ひ付け、其身は別れて浪宅へ走り歸り、城中に入りて討死する支度に、及ぶぞ勇々しけれ。

不破勝右衛門が先年試し切の一件にて浪人し、鎌倉へ立退き浪宅せし事は、世に知らざるものなきはなしなればこゝに不說。但忠臣の人々は、不破氏の浪人して後も志の不變事を知つてまじはる事深く、されども國元へたち歸りて居住するは近頃なれば、城中の人々は、久しく別れて踈遠なれば、その心ざしを辨へざる人も多かりしとぞ。

これより不破が城下にいたる旨趣より、ひそかに元老大星の內意をうけて鎌倉へ下る事、また籠早川にて難を救ひ遣したる娘に再會して、仇討の便宜を得る奇談等、すべて此四編に說殘したるは、こと〴〵く五編に出でたり。

待兼ね、川へ走入り駕籠の側、

涙「大星氏か、瀬左衞門どの、不破勝右衞門で候ぞ。お家の大事は如何なる仔細、何卒拙者へ麁忽ながらお聞かせなされて被下ョ」ト言へば大星瀬左衞門は、不破を招きて耳に口、

瀬「ナ、我々はじめ覺悟いたした。貴殿も古主の御恩を思はゞ」

勝「オヽ仰にや及ぶべき。錆びたりとも鎗引提げ、ちぎれたりとも鎧を肩に」

瀬「萬事は後日見參に」ト別れを告げて瀬左衞門も乘物急がせ走せて行く。

介石記に、大星瀬左衞門、原郷右衞門、百七十里の行程を五日の日數にて馳付け、由良之助へ注進したりと記せり。因に云、鎌倉よりの早うち何某、道中にて馬を乘倒すよしを說くものもあれば、營中の喧嘩、判官不首尾の沙汰を聞くとひとしく、說法洲の屋敷へ供先より馳付け、百五十兩の金子を請取り、直に御國元へ乘出し、途中にて馬を乘倒し、夫より乘換乘換走り行く由を說くものもあり。百七十里の遠路を馬に乘つゞけらるゝものならんや、縱令馬をば繼たりとも、人の氣力がつゞくべきか。實は鹽谷家へ常に出入の道中請合何某の方へ注進の人いたりて、火急に言ひ付け、その請合人、直樣問屋場へいたり先觸を出して人足を手當させ、夫より宿次の早駕籠を舁つゞけさせしものと知るべし。

をして、些もはやく路を急いでござれ、最早時刻が遲からう。マア〳〵旅宿へ着くのが第一。」

娘「ハイ、有がたうぞんじます」ト主從ともに浪人の前へ手を支き禮義を演べ、猶姓名を尋ぬる折しも、俄に川の向より人聲高く木精に響き、ワア引〳〵トさわぎ立たる多くの人足、駕籠の四方をとり圍み、駕籠の棒先には綱を付け、肩にかけて引く如く、前へはしれば人足は、汗を流して聲々に、エイサア、えいさア〳〵、宙を飛する早うちの、忽ち川へかき入れながら、水を蹴たてて押渡る。後につゞいてまた一挺、同じく聲をかけあうて、エイサア〳〵、えいさア〳〵ワア引ト聲もろともに河水を瀬ぎるが如く押渡し、此方の岸に上り來る、其乘物をさし覗き、恂り驚く浪人が、思はず駕籠へ聲をかけ、

涙「卒爾ながら早うちは原鄉右衛門どのではござらぬか。」

鄉「コハ珍しや不破氏か。」

涙「心元なし鄉右衛門どの、御家に何か大變が出來せしか、此樣子は。」

鄉「推量あられヨ勝右衛門、百七十里を五日目にて、はやくも當所へ必死の注進。隱しもならぬ主君の大變。委細の事は後よりつゞく瀨左衛門にお聞きあれ」トいふ間もあらせず人足は赤穗をさしてえいさア〳〵、飛ぶが如くに走去れば、彼浪人は心せきてや又來る駕籠の渡るを

んがお供をして居らア。指でもさして見やァがれ、合點するものか」トいふより早く二人の川越を突飛せば、元來仕かけし喧嘩のたくみ、殘りし雲助川越ども又五六人走かゝり、下僕を取巻き大勢にて敲倒し打惱し、娘を捕へかつぎ上げ、河原の西の林をさして連行んとする所へ、來かゝる武士の浪人體、編笠脱捨て忽ちに、雲助どもを引捕へ、片端より取て投除け、娘を救ひて介抱し、下僕をも引起しいたはりながら、

浪「傍若無人の致し方、さぞ當惑でござつたらう。憎い雲助どもが、覺悟ひろげ」と白眼付け刀の柄に手をかくれば、惡人どもは恐れをなし、皆散々に迯ちつたり。娘と下僕は危き災難除れて嬉しく、手をすりながら侍の前に腰を屈めて、

娘「誰人さまか存じませぬが、誠に有がたう存じます」

下男「心はやたけにぞんじても、只一人の私ゆゑ、既に主人の娘御を恥かゝせられ樣といたしました。貴君のお陰で必死の難を除れました下郎が僥倖、有がたう存じます。只今にも主人が參りましたらば、屹度お禮を申上て、お宅までも上りませう。お名前は何と被仰ますかお聞かせ被成て下さいまし」

浪「イヤ〳〵、さしたる事もいたさぬのに、叮嚀の禮は存じも不寄。其樣な事よりか娘御の供

×「さうだか何樣だか、ドッコイ〳〵。」

歩渡なる籠早川も、昨夜の雨に水まして、不案内では中〳〵に、淵瀬分らぬ早瀬の浪、早日も西へ入相に間近き河原をうろ〳〵して、人待顏の娘と下僕、往來の旅人行違に顏見合する花の色、歳は大方十八九、素顏なれども色白く、世に類なき美女なれば、噂とり〴〵行過て、早旅人も途絶えたる時に、一個の川越男が酒の機嫌か、足元もよろ〳〵しながら娘の側、寄るより直樣手を捕へ、

川越「サア娘御さん肩車にお乘被成へ。川が深くなつてあるから、私でなけりやァ渡す者ァ外にやァねへ」ト抱付けば、また一個千鳥足する雲助が、

雲「ヤイ〳〵鹽がま、其娘はナ、先刻此身が口をかけて置いたァ、手方の髭で娘御の羽二重の樣な美麗顏をこすつてたまるものか」ト立かゝれば、又一人が走り出で、

○「コレサ〳〵、手方達は不及戀を仕やァがらァ。籠早川ぢやァ此須磨六に及ぶ好男があるものか。サァ〳〵此身が抱て乳を呑せながら、怖くない樣にそろ〳〵と渡して遣らう」ト三人ともに娘を爭ひ戯れかゝれば、娘は驚き立退んとするを取かこむ無法の仕方に、供の男は憤然となりて中へ飛入り、

下男「ヤイ〳〵、此奴等ァ何をしやァがる、途方もねへ。女ばかりと思やァがるか、此奴さ

より乞求め、後に高野師直の方へさし出しければ、彼家にてもこれを珍重あられしが、常に居間の床の間に置れしを、義士は夜討の退口に其花瓶を見付て、淺黄の紬の服紗に包み、高野氏の首の樣に思はする謀略にて、鎗の穗先に貫き、いさましく圓覺寺へ持行きけるを、彼寺にて、大高子葉は思ひ出して花瓶を改め、かね〴〵見覺え聞き知りたる其角の桂川の花瓶なるよしを寺僧に敎へ置きければ、これを聞き傳へしもの懇望して風雅の家に傳へ、後には鎗疵ある籠花筒を桂川の眞物なりとて、久しく關戸に珍藏あるとかや。

長持人足の唄 ▲「あひがナア引遠けりやナアエ。」

×「ヤツトコどうしん何樣した〳〵。」

▲「サア〳〵休め〳〵。イヤア昨夜の降で大そうに水がましたぜ。」

×「水がましたら酒代も增して貰ひ度ナア。」

▲「アハヽヽ酒代は增めへが、川向から水澤山な婦人が看えるぜ。」

×「ホンニナア、美麗娘子が見えるはへ。日の暮るのに、早く河を渡つて止宿れば能。」

○「サア〳〵モウ一息だ。遣らかせ〳〵。」

▲「須磨のナアエ、すまの浮世の義理ゆゑ、つらやヨウ、獨明石のナアエ、浦みが殘るヨウエ。」

かに風雅の住居なりけん。彼人の筆すさみなりとて、書寫したるを見たりし事あり。

世をあだし野の仇なりと、うき世をあだに見なしては、綾羅錦繡金銀珠玉も、何か心に止るべき。柴門荊棘に閉られては、人のとぶらふべき道もなく、月より外の友もなければ、むかしを語るべき便もなし。

　おもひ出はあらしの山のもみぢ葉を別れし袖の色ぞとも見よ

　わすれじな幾百年をつかへ來て代々にかはらぬ君がなさけを

是すなはち九月の中旬、嵯峨の草庵を立出るとて詠殘せし歌なりとぞ。忠臣義士の功を賞美の餘り、何によらず其節に咄の由緣あるものは、珍重祕藏せざる事なし。されば今も尾張の名古屋關戸にある桂川の花瓶といふは、寶井其角が都に登りし節、桂川を渡る折から、川流の物を拾ふ男の腰に提げたる小器籠の異様なりければ、好事の心深き晋子なりければ、彼籠をその男に酒代をとらせて貰ひうけ、東にもち歸りて花瓶に造用ひ、桂川にて求め得たる籠なれば、その儘に名として桂川と呼び珍重せしが、さすがに俳諧の宗匠、東に名高き晋子其角が風流に思ひ付きて造へしものなれば、はやくも其頃の名物となり、風雅の席の咄し草なりしを、茶道の師匠にて名を知られたる山田宗作が、其角

のごとき身のとりまはし、和歌島氏をたのみて引返し、大敵を不怖、死をいさぎよくせし容形は、師直方の大忠臣にて、四十七騎に百倍の英雄なりと賞すべし。

斯て和歌島伊勢は、小林平八郎の娘を大切に養ひしが、琴浦に實子も出來ざれば殊更に可愛がりて、成長の後此娘に壻をとり、鏡師の家業を傳へて家督としけるが、彼娘は實の父小林氏の討死を兩親より聞傳へ歎きかなしみ、火急の中より我身を助け出して和歌島に預けられたる慈悲のおもむきなんどを考へて、九十餘歳の長壽を保ちし其間、一日もわするゝ事なく、物の本繪双紙などに忠臣藏の夜討の繪があれば、見る度毎に歎き憤怒て、その繪を引破り捨しとぞ。實に小林の娘なりせば、然もありぬべき事ならんか。されば彼小林の娘の腹より生れし子をもつて、また和歌島の家を相續し、血脈たえず。東都浮世繪師瓦家宗理とか稱し古今の名人は、小林の娘の孫に當れりとぞ。其故にや百廿七八年以前は、宗理の實子なるもの、鏡師伊勢の家を繼て能山町といふ所に在りしが、その男子の若死せしゆゑ他家より養子をなせしが、今も家名は繁昌して、何某といふ御鏡師が夫なりとかや。如斯なれば宗理といひし畫工は、小林平八郎の血脈にて、彦にあたれる先生なり。

亦說鹽谷家の浪人は種々の傳說ある中に、小野寺十內の浪人して嵯峨野の奥に在りし日は、い

いふを聞くより兼々の賴みもありしか、然なくとも過にし恩の命の親、夫婦は飛起き戸を明くれば、隈なき月の晝をあざむく明に見れば、平八郎は抱きし娘を家内へ投入れ、「兼て内々おはなし申置いたる主家の大變、承知ながらも最早其義はあるまじきかと、油斷の所へ今夜の夜討、兎ても逃れぬ拙者の命、元來覺悟の事なれば、今更おどろく未練はなけれど、母もござらぬ其娘、我亡後は誰一人養育いたし呉れるものなく、今にも怪我をいたさうかと不便にぞんじて、大事の場を暫しながらも引外し、連れて參りしは最期のお願、何卒拙者が亡後は、不便を加へて下さる樣に、只向賴みまゐらする」トいふより早く引返す、後姿を見送りながら、

伊勢「これはしたり、最早直に。必ずお心にかけられますな。娘御をば二人して蟻にもさゝせる事ではない」トいふを背後に聞きなして、再度屋敷の塀に近付き、かけたる階子をかけ登り又も稻荷の社の屋根より庭の方へと飛下り、御殿をさして走り行き、夜討の人々と戰うて、實にいさましき働は、夜討の段にて委しく說くべし。そも〳〵世の中の人情、義士の方を贔屓にして師直方を憎み嫌ふは、善を好み惡を捨つるの心より發れば尤の事なれども、其中にいさゝか差別あるべし。不仕合にて小林は高野の家來なるゆゑに、義士に勝れる働きして、然も大丈夫なるその行狀、寢耳に不意の夜討をうけて、心周章こともなく、小兒を抱いて闇を走抜け、飛鳥

婦養子に遣し、その家を繼で此次郎は和歌島伊勢と名乘り、養父母の歿後も家業ますく繁昌し、鎌倉の諸侯へ出入して、東に名高き鏡師なりしが、住居は闌城の夏坂町に引うつりて、高野師直の屋敷の門前にぞ在ける。されば極月十四日の夜深更に及びて、義士の面々夜討の節に、高野の家中周章る中に、小林平八郎は只一人、少しも狼狽たる心はなかりしと思はれて、しかも其夜は非番なれば、其身の宅に眠りしが、物音を聞くと等しく目を覺し、其歳五歳になる娘を起して聲を立てるなと言聞かせ、支度を調へ身輕に出立ち、戸を蹴破りて踊出で、彼娘を小脇に抱へ、夜討の人數の透をうかゞひ、稻荷の社の方へいたり、兼て心がけて置きけるか傍にありし階子を稻荷の家根へかけ、早くも家根へかけ登り、忽地階子を片手にて引上げ、塀の外へ投掛て彼娘を抱きし儘に走下りしが、此時いまだ義黨の人々は討入はじめにて、玄關へ押かゝる手はじめなれば、長家の方には目もとゞめずありけるか、又內々加勢の辻堅め、雁番物見もそろはざりけん、小林は何の苦もなく屋敷を忍び出で、町屋なりける和歌島伊勢の軒下に入り、戸をほとくと敲きければ、折能家內も眼を覺してか、

伊勢「誰人でございます。」

小林「オヽ此次郎殿、眼が覺められてか。小林平八郎でござる。はやく此戸をあけられて」ト

いろは文庫　巻之十二

第二十三回

こゝにまた小林平八郎は（この書十のまき十丁よ り二十一までのつゞき）明石屋此次郎の必死を救ひ、また琴浦をも介抱して段々の様子を聞くに、義理よからぬ借財多く、親類縁者の憎しみ強く、彼是身の立ちがたき事かさなりしゆゑ、二人もろともに野中の井へ身を投げて、死なんとせし由を包まず語りければ、小林はこれを不便におもひて、

小林「何さま年の若き了簡にて、身上のさし支ふり世間のそしりなどを恥しく心得、命をも捨てる覺悟もつともらしく聞ゆれども、はなはだもつて愚なり。人の一代の浮沈、定りなきが世の常なり。一旦衰へたりとも再開運の時なからずや。我等は今夜母の病を祈るために、此柏木塚へ參りしも、其方達のいのちを救ふ約束ごとにてもあるならん、此所よりは程近き高野の下屋敷に住居てあれば、先わが家へ參られよ」ト情ある言葉に、此次郎も琴浦も死ぬる心を取り直し、平八郎に伴はれ行きしが、そののち小林が世話にて和歌島伊勢といふ鏡師の名家ハ夫

をも、ぬらす浮世の露けさを、草葉にうけて隱れ家を、鎌倉にもとめつゝ、しのぶ命の置所、
飛龍の三冬に蟄するごとく、時を待てぞ居たりける。

右にしるせし文章は、享保の頃の板行にあらはしてあるを思へば、古き情の文句にて、小野寺が筆の跡などをも見聞して綴りたるものにやと察はる。近頃舌耕者の讀む大星の東下といふものは、太平記の中にある文章を惡くとり直しゝ句續にて、こゝにあらはしたる小野寺の文にははるかにおとれり。

しかば、寐られぬ儘にさし向ひ、越方行末の事ども思ひつゞけてありしかども、倩々とあきらむれば、亦心なやます理もあらざれば、小野寺ははからずも、

今は世にあきはつる身のしるべせよはや入る方の山の端の月

ト何となく古歌を口ずさみければ、力彌も感情に堪ざりけん、

故郷有母秋風涙　旅館無人暮雨魂

と互に遠く古きを探り、今の情に准へてうち吟じけるぞ哀なる。匹馬風にいばえては、驛路暁の鈴の聲、今日も旅路の急がれて、草分衣しをれつゝ、過來し跡をかへり看れば、伊勢尾張三河も越てはるけくも、末は何所と遠江、駿河の國も早過つ、向ふは何と伊豆相模、思へば野暮山暮て、遠くも來つる旅の空、四方の八重霧たち籠て、行客の跡を埋む。都の方は白雲の、たなびく果や箱根山、ふりさけ看ればあまの原、押明方の海の面、沖の小島は浪荒て、たゆたふ舟に身の上も、おもひたゞへし行方かな。松風寒くしぐれきて、暫時馬を止めしに、知己人に逢て都の方へ登ると聞しかば、文など調へ言傳しも、又今更の別となり、竹の下道打過ぎて、酒匂大磯相模川、深き思は身にのみぞ、もつれて解けぬ藤澤や、もろき涙の袖の色、からくれなゐに染なせる、もろこしが原砥並が原、片瀬腰越袂

て生殘り候はゞ定て御引出御仕置にも可被仰付候。勿論人々覺悟の事に御座候。御氣遣被下間敷候。良雪樣樣々去年以來の御物語失念不仕日々存出、此度當然之覺悟に罷成忝奉存候。舊來御心安致され候各樣、御殘多御暇乞がたく如此御座候。死人無口、死後色々之批判とり〴〵可有之と存候。知貞樣へも同前に申度候。恐惶謹言。

十二月十三日　　　大星由良之助良雄

窓光樣

良雪樣

○近士太平記に載せたる東下の文章

小野寺は隱家をひそかに出て、大星力彌とともに東路に下り、再度家に歸るべき、時しなければこれや此、ゆくも限りの相坂の、せきくる涙を袖に止め、しばしはやどす月影の、消ぬ氷と見えながら、さゞ浪よする湖水は、壯士衣單なる、易水の秋を眺め盡し、馴ぬ嵐に袂を任せ、幾夜定めぬ草まくら、衣雁寒き夜に、旅寐の夢も結び不得、篠の葉草に影宿を、秋も末野の夜半の空、小笹が隈につゆふけて、蟲の音もうちしきり、類なく淋しかり

候。岡本次郎左衞門、粕屋勘左衞門、小山源五右衞門、進藤源四郎仕方不及是非、人外之事共に品々箇樣に申事も猥敷候。奥野將監、川村傳兵衞存之外之儀共は只今に至り候而者杢之助惣兵衞源左衞門の了簡がましと存事に候。當地へ罷下り候而中田利平太、中村清左衞門、鈴田重八家來瀨尾立退申候。古今不珍事に候得共、是迄罷下り候處に、右之通驚申候。此度暇遣候兩人之者共、爰元にて晝夜骨を不惜働くれ、過分不便に存事に候。急成事可有之と存、暇遣候。向後相應の思召も御座候はゞ、此ものども儀被添御心を可被下候。將又拙者妻も存寄御座候て、京都か離別仕、緣者へ歸し申候。忰娘儀如何樣に罷可被とも、其通りの事に候。然ながら當地へ罷下り承候得者、二男吉之進事、出家に成、何方へ歟遣候由にて不存寄事に候。已後萬々一無別儀世間に罷在候はゞ、吉之進事一度武名の家を起し候樣に仕度事に候得者、少し者心底に懸申候。此段存間敷事に御座候得共、人性凡夫の拙者に御座候得者はづかしく候。乍去一事の妨に罷成儀に者毛頭無御座候。御氣遣被成間敷候。此度申合候者ども四十八人にて、斯樣に志を合申儀、冷光院殿此上の御外聞と存事に御座候。死後御見分のため口上書一通寫進候。何茂忠士のものどもに御座候間御囘向被成可候。其場に

尙以此狀家來に可遣候得共、若途中滯候而は如何と存差控、死後大津ゟ其許へ
相達候樣に賴進候。以上。

家來兩人暇遣差登せ候間、一筆致啓上候。甚寒に御座候得共、各樣彌御堅固被成御座候半と珍重奉存候。最早御城主を被仰付珍重之御事に御座候。前々之通寺社領等茂被遣候事に候哉、無心許奉存候。

私在京之内者、何角不得心隙候間、以書中茂不得御意御無音罷過候。御聞及被成候、十月初京都無異儀父子共に下着仕候。殊に今日迄一段と兩人とも無病に罷在候。誠佛神之御加護と難有喜悦仕候。在京之内者從公儀拙者へ附人在之、一足茂踏出候儀不罷成と、慥成る筋ゟ聞出品抔岡本粕屋等彼是申候得共、不慥成儀承候故發足相催候處に、道中御關所無滯も、少茂心に懸候儀も之無下着仕候。爲申合鎌倉へ立寄五六日逗留夫ゟ川崎近邊平間村と申所に在宅申、其後東之德町に致借宅、父子其外忠士のもの共十ケ所に借宅仕候。折々高野殿他行を承、心を碎途中心懸候得共、不仕合にて出逢不申候。居屋數へも間者を入、二三度見分申候處無滯依之近々討入可申と奉存候。最早間茂有之間敷候間、其節之趣追而御聞及可被成

勇むや空に鈴鷹の、勢見する鷹の羽の、紋に經緒をば師直も、付けねば今宵羽を伸て、夫と目ざすや葭蘆の、東河原に押出し、備を立て隊伍を調へ、二手にわかれて無緣寺の、南と北へ靜やかに、すゝむ時刻は子の半刻、やがて程なく高野家の、屋敷にこそは近付きぬ。

第二十二回

世俗義黨の事を語り傳へて、衆評さま〴〵なる中にて、奥野將監小山源五右衛門等は大星の密意を受て、萬一仇討の仕損じあらば二の目を討べき内談にて、所爲と約定を破り反きし樣に說もの多し。尤二の備の用心は兼々なきにしもあるまじけれど、奥野小山の人々にはあらざりしなり。其證據は大星氏の認め殘されし書面にてあきらけし。左にうつし出したる狀は、復讐の前日に認められて、死後に故鄉へ送りとゞけられしものなり。殊にその自筆を寫眞にしたれば、聊も疑ふまじきものとすべし。但假名付は筆耕者の付けしものなれば、其意に違ふところもあらんか。亦二三所は文章の遠慮をせし事もあり。夫はわづかに町名と人の名のみ。大概は推量て知るべし。當時此一通をも心にとゞめて讀給はゞ、其時の事を眼前に見るが如く、最感情深き一章ならん。

源吾「コウ〳〵若衆、貴さまァ口癖の樣に、何のその何のそのと幾度もいふが何の事だエ」

下男「エヘヽヽナニこれは冠付の題でございますが、何樣も跡が付兼ねますから、考へながら口癖になりました」

源吾「ハヽア左樣か。これは面白い冠字だ。其初五文字へ斯う付けて遣たら宜しからう」

なんのその岩をも通す桑の弓

下男「ヘイ、これは有難うございます」

久「イヤ、これは御名吟おそれ入ます。コウ權七どん、貴さまァ此旦那のお陰で明日は利潤ぜ。何樣して其句に勝つ句が何所にあるものか。眞に貴さまの仕合だ」ト言ふ中、各支度も調ひ、

長「イヤモシ久兵衛さん、段々とお世話にあづかりました」

久「イエ、誠に何樣いたしまして、左樣ならば御機嫌よう」

長「其許にも行末長く御繁昌いたされい」

久「ヘイ、誰人さまもお達者で」

大ぜい「ずゐぶんともに繁昌なされ。イザ」 トいひつゝ立出る。雪の夜路をものともせず、

久「ヘイ、イエさしたる句でもございませぬが、マア其節の私の僥倖でございました」ト遠慮するを、一座の人々しきりに聞度よしをいへば、「お笑ぐさかも知れませんが、其節の句は、

夜の中に雲井に名をや郭公

トいたしました」ト言ひければ、

大星「イヤ、これはなるほど秀逸々々。エヽ引と、其初五文字を拙者がお貰ひ申して、一句いたさう。大高氏付けられヨ」ト鼻紙を取出し、墨斗の筆を採りつゝも忽ち一句をしるしたり。

夜の中にちからのいきや霜ばしら　大星立梅

空にいきほふ鈴鷹のこゑ　大高子葉

すでに今大盃のかたむきて　小野寺里龍

松のざしきに百たんのあや　吉田春帆

ト思ひがけなき附合も、實に英雄の魂にて、斯る時にも風雅の遊、然も優長なる其風情、眞の大丈夫といひつべし。かくて時刻の至れりと、おの〳〵出立の支度して立かゝりたる其折から、勝手元より座敷へ來り、膳部を片付け、道具を運ぶ働の下男が、口癖ながら獨言に、

下男「なんのその」トいふ事を二三度いふを、大高子葉は聞咎め、

ぬべし。尊き御代の餘光とつゝしみ、古代の質素を思ひやりて奢の事をなし給ふなと、童幼衆に告まゐらすのみ。

むだばなしは先さし置きて、彼長左衞門は義黨の面々とうち連立、久兵衞の方へ入來り、互に睦しく酒食に及びしが、主の久兵衞も其座をとり持して、心よく挨拶などしければ、義士の人々は大に悦び酒くみかはしける。彼久兵衞は大盃を持出して、

久「トキニ、誰人も此盃で一盃づつ召上りませんか。是は私が先達俳諧の景物に取りました大盃で、しかも其時の一番勝の句で取たのでござりますから、お旅立の門出には、緣喜も宜いと存じまして持出ました。サアこれで一盃お初め被成まし」ト言ひつゝ大盃を座の中央に差出せば、各互に顏見合せ、敵討の門出には願うてもなき吉事の辻占、最めでたしと心の中に、喜び勇む義士の面々、一番勝とは忝し、イザ〳〵誰人ぞはじめられよといさましき中に、大星は久兵衞にむかひつゝ、

大星「イヤ、これは御亭主の御心付、我々が旅行をお祝ひ被下一番勝の景物のお盃、寔に何よりも賴母しい御馳走千萬にぞんずるが、兎ても事に一番勝の秀逸を承り度い。何卒その句をお聞せなさる事は出來ますまいか」

享保二年正月の新板近士太平記に此圖あり。饂飩屋久兵衛が家の趣なり。爰にはたごめしと書し方燈は、旅宿と飯を賣り又饂飩蕎麥切を家業とせし事の樣に思はるれど、左にはあらず。此頃はたご飯と書し看板は、當時の丼飯、一膳飯の類にて、今よりは百年以前には、蕎麥饂飩一式の商人の店はなかりしものなり。因に依て云、昔は町々に賣る食物の店、當時の百分一もなしとぞ。饂飩蕎麥を製し賣初しは、寛文四辰年より、町かたにてはたご飯賣家の、半商賣にはじめたるものにて武家方などには滅多に喰ふ者もなかりしとぞ。天保十一庚子年よりは、九十一年以前寛延年間にしるされし、新見正朝入道のむかし〳〵物語、今より七十年以前は、武家方にては、町方にて拵へ賣る蕎麥饂飩の類を調へ喰ふものなし。近年は大身歴々までもけんどんを喰ふト記してあり。けんどんとは當時の常體の蕎麥屋の事なりといふ。しからば蕎麥切の世上に一統して、食類の一家をなせしは九十年來の事にて、いまだ元祿の頃は盛ならずと思はるれ。元祿十五年は今より天保十一年百三十九年になる。但寛文四年には、蕎麥を賣初しより天保十一年迄の月日を算ふれば、百七十六年となりぬ。かゝればそのむかしはわづかに二八の蕎麥さへも自由には食し難し。當時は蕎麥賣家と鰻の蒲燒を賣家の、一町に二三軒宛は有り

兇被成」と言ひながら金子を二三兩取出し、「これをお預申して置くから、御面倒でも肴と酒と蕎麥を二十四五人前拵へて置いてお兇被成」ト久兵衞に金子を渡すゆゑ、否とも言れず、

久「ナニお馴染の事だから手附の金も入りませんが、肴や酒の買出しにお借申して置きませうが、今夜何時頃のお立に成りますか。」

長「左様サ、何でもマアお前の宅へ參るのが亥刻半頃になりませう。然したらばお店の客のお邪魔にもなりますまい。」

久「エヽ、夫ぢやア丁度宜ございます。實は此程は饂飩もひまで賣が惡いから、俳諧の取次を仕たり、冠付や前句をして商の片手間にいたす樣だから、夜なんぞは猶見世も暇でございます」ト言ふを幸に、長左衞門は約束してぞ歸りける。

十四日の晝過比に、常々心易くせし刻み煙草賣の人來りていひけるは、

●「トキニ久兵衞さん、今日はおいとま乞にお寄り申しました。夫にまた些お頼み申度事がございますが、マア蕎麥で一盃呑してお吳被成。」

久「オヤ長左衞門さん、お前さん今日はお侍さまかね。モウ商は止に被成思召かね。」

長「さればサ、御存じの通り元が浪人で、仕付ない商は埒明ませぬテ。それにまた米の相場は高し、中々渡世も成難いに付て、古傍輩の友達と相談して居る最中、旦那の本家の思召が有て、私等の元の同役が一同に、本家のお國へいつて奉公をするつもりサ。」

久「ハア、それはマア何よりかお目出度い事でございます。乍併折角お心易くいたしてから に、お別れ申しますのはお名殘惜うございますね。そして今日直にお國へお立被成のかへ。」

長「イヽエ、今夜夜中に立つて行く積だから、夫でお前の所へお頼がありますのサ。外でもないがね、晝間は氷が解て道が悪いから、夜立にして、道中も大概夜道をするつもりサ。尤同役二十人計揃つて立つのだから、夜中に歩行ても大丈夫な事だがね、諸方に浪人して居る者が私の家内へ集つて、夫から支度をして立たうと言ふが、何樣も手狹で食事を調へる事が出來ないから、お前の家で饂飩でも喰て立せ度から、其お頼に來ましたが、何卒お世話でも然してお

一装束其外に相印を付申すべき事。
一墨斗、筆、紙等銘々に所持すべし。
一裏をさすべきなり。
　右裏を鎖とは、門戸を入て長屋戸口の心得なり。柄一寸の錐を百本餘持参して、長屋長屋の戸口に鎖て、内より出ざる様にすべし。
此外前後の手當手配最嚴重なりしとぞ。
○留森助右衛門の母の書置
　弓矢とる身の道をまもり、一味の數につらなりしこそ、かへす〴〵も嬉しけれ。もしもみづからに心ひかされ、末期におよびて未練のはたらきもせば、父の名までもはづかしめを殘すべし。しからば世にもいひ甲斐なく、口惜きわざなるべし。子を思ふ道に先立命、何かなごりのをしかるべき。此ゆゑに自らは、御身が最期のはたらきいさぎよく爲させんとて、斯は死を急ぎ候なり。頓て心よく本望を達し、名を天下にあげられよ。冥途の旅路にて待りゝ。
留森の母は辻階の近所に住し山口治齋といふ人の家にありて自害したる書置なりとぞ。
こゝに仇討の日の事とかや、高野師直の屋敷近所に住む饂飩屋久兵衛といふものあり。其家へ

一弓鎗の用を斷べし。
是竝關廣間に用意してある弓の弦を切、鎗の穗を切捨る事ぞかし。
一敵方の燈火を消して爐の中へ水をうち入るべし。
是は最初に味方の體を敵に見せず、爐中へ打込むその水には灰が煙と立上り、敵を驚かす方便にて、味方は火打の道具あり。
一淺黄の服沙を一ツづつ各懷中すべき事。
これは臨時に入用あるべし。
一藥鑵に燒酎をいれて持參の事。
是は手疵を蒙りし時の藥ともなり、燒酎火を諸所にしかけて異變を見せ、敵の氣をとる一計なり。
一竹を以て糸を採繰紡錘の如きものを百本ばかりこしらへもつべし。
是は壁に突さして蠟燭をともし、又疊にも突立用ふるものとすべし。
一藥を布の袋に入れて持べし。
無病なりとも用意あるべし。火急の節に臨んで存外の急病發る事あり。

○漲　○激　○淡　○溝　○泥　○淸　○濁

如此水に緣ある詞にて承答互に心せくべからず。

河かと問はゞ其時は、

○岩崛　○古木　○峠　○麓　○坂　○峯　○谷

如此に心得て、山に緣ある詞を用ひ、問も答もすみやかに、かならず同士討有べからず。

撰者春水評して曰、これまで湖上に說く所を聽き、亦寫本の旨趣を看るに、何れに記せし合詞も、山とかければ河と答てと有り。彼淨瑠璃本にいふ如く、天川屋儀兵衛の名を假て、天とかけなば河と答といふ、淨瑠璃作者の滑稽に似て誠しからず。敵にも夜討の辨あるか心はやき者あらば、唯山河の二ツにて合詞となす時は、忽ち是を推量して、山かと問はば河と答て、油斷を討つの働あるべし。豈大星の先見にて、彼を知り己を知る事の用心なからんや。亦一書には、

○山霞　○河竹　の合詞と記せり。

亦大星の下知して曰、

如此にしるしてあり。外題は近士忠義太平記といふ。其撰集委細なる物にはあらねど、今天保十一庚子の年よりは百二十四年以前の板行にて、義黨の落着より纔に十八年ほど過て發行せし冊子なれば、眼前の人に見せしものゆゑ、多く實事を記せるならんか。しかしながら其說も世に流布する書と大同小異のみ。只そが中に岡林杢之助の自害と、片岡源吾の下部鹿助が傳最珍しく聽ゆ。亦堺の町人天野屋利兵衞が、鎗屋孫六に誂へし武具ゆゑに訴人せられし事、諸書にいふ旨趣と相違せり。夫は連々に著して告まうさん。都て此卷に記す所は例の詞書ならず。讀て後に咄しなどしたまふ節の辯舌なれば、其心にて讀たまふべし。

○大星が定めたる手配夜討内試の書面

一相音を違ふべからず、是討入の肝要なり。

是山鹿流の陣太鼓九度三返の打切を合圖とし、追手搦手一同に合圖の笛を吹ならす。

長サ三寸にこしらへ糸をもつて衿につけてこれをもつ

一合詞第一の用心なり、聊も失念すべからず。

是ぞ討入りて戰最中の一大事、古今夜討の祕要なり。

山と問なば其答に、

いろは文庫　巻之十一

第二十一回

森々たる老樹四面をかこみ、颯々たる恵風煩悩の夢を覺し、霧は自ら不斷の香を焚、月常住の燈を挑とは、四十餘人の義士の爲に殘せし墓碑の在所を、哀れとも思ひまた魂を清涼ならしむ心より、づらねし同志の筆すさみ、凡其比の世にありし人は、日毎に噂せぬ間もなく、詩歌連俳の名家の人々、遺憾の詠吟絶ざりしとぞ。亦その傳記を珍重して、本傳拾遺銘々傳數々多き中にして、彫刻にせしもの三四種に及びしが、今は絶版となり、殘れる製本も最稀なり。此頃書林文溪堂にて繪入の一本を閲せしが、其書の奥書には、

享保二年
正月吉日

花洛畫工　吉川半次盛信

菱屋治兵衛板行

今夜の覺悟。お前はわづかに昨日今日苦界を出てまだ間もなく、此様淋しいわび住居、さぞ悲しからう悔しからうと察して、此身がない方がましであらうと了簡を定めて殘す些な金も、當時では餘程丹誠したのだから、必ず笑つてくんなさんな」と言れて最も噎入り、正體もなく泣しづみ、すがり付きてぞ歎きけり。

抑此男女は奈何なる者ぞといふに、男は鎌倉なる本德町にて、明石屋此次郎と呼るゝ町人なり。女子はその素生を委しく知らねど、廓に名高き三浦屋の遊君琴浦と呼ばれし全盛なりしが、本文に說くごとくの旨趣よりは、猶はかなき體となりにけん。頓て此次郎と琴浦は、兩個とも死神にやさそはれしか、住居を出て三崎なる菩提所へ參詣し、彼野中の井戸へ身を投沈めて死なんとはなせしなり。其時柏木塚の小陰より走り出て、兩個の命を助けしは高野家の英雄にて、義士が夜討の折からに、大丈夫の勇戰をなせし小林平八郎といふ豪傑の侍なり。さて此小林が兩個を助命て後、夜討の時に賴になる一奇談と、浮世繪師の老先生葛飾前北齋爲一は、小林氏の子孫にて恥しからぬ實錄あり。夫は十二の卷を讀みて知るべし。

金も何も入りますものか。縦何樣な所へお出のでも、同伴に連れて行つてお呉被成ヨウ」ト片手に男の裾を押へ、片手に封じの書物を取つて口にて封じを破り、手早く開いて讀かゝれば、

男「アレサ、それはマア今よまずとも宜事だアナ。後刻で靜に讀むが能、此身はマア相談する所へ行つて來るからも」トいへどもなかく放さばこそ、柔弱力も女の一念、たちまち遺書を讀下し、噎入りつゝとりすがり、

女「ソレ御覽ナ、私の推量した通り、都合の惡いのを直さうとお思ひで、相場事とやらに懸つて身上を果して、世間へ面目ないばかりが、私に對しても恥しいから死んで仕まはうと覺悟したから、其氣で私は身の片付をして呉ろとお言の遺狀。直に困らせまいとお思ひで、別れる私にこのお金を記念に殘すお前樣の情は、却て恨ざます。何程賤しい勤め果でも、夫婦になつた其中で、お前が死んだら詮方がない、私は他所へ緣付うと思つて、氣樂に身勝手をするものだとお思ひかネエ。」

男「ナニサ、さう不實なお前だと思へば、苦勞をして少しでも後日の事まで遺狀は爲ないはな。又お前の心にも他人の了簡にも、金がなからうが、身上を潰さうが、死んで仕舞うなんぞとは、言甲斐のない男だと思ひもせうが、餘り續く薄命で、此身に自心で愛相が盡て、思限つた

いて一番大利潤を仕樣といふ算段だが、萬一其商の都合に依ては、旅へ立樣になるも知れないから、左樣思つて呉なヨ」ト言ながら懷中より金を五兩ほど出して、外に何やら封じたる書物を添へて並置き、「夫ぢやアノ、はやく歸つて來る心では行くが、萬々一歸りが遲くなつたらば、萬事の用の可調樣に、此書付に書いて置いたから、其時に能々讀んで見な。何れにしても今夜相談する所へ行つて來るから」ト金と書付を渡して立上れば、

女「アレマアお待被成ヨ」トすがり付き、「なんだネエ、出拔に旅へ立つなんぞと悲しい事をお言でないヨ。夫ともに是非遠くへ行なければ濟ない樣な身の上に成たとお言のならば、私も同伴に連れて行つてお呉被成なネエ。」

男「ナニ何樣して女が行れるものかナ。此身でさへ行度ないのだものを」ト言顏從容とうちながめ、涙をはら〱落しながら、

女「モシ、マア下に居てお呉被成ヨ」ト引すゑて、「此程から種々とお前樣の樣子を氣を付て察れば、何でも屹度苦勞な事が重つて、お店の方も都合が惡いから、身を隱すか死んで仕まはうといふ氣にお成のだト思ひますは。萬一の時は明けて讀んで見ろトお言の其書付は、慥に私を振捨る離別のしるしか、書置でありませう。便のない身でお前樣に別れるくらゐならば、お

女「オヤ今日は遲うざましたネエ。」
男「エ然ヨ。用が不調から諸方歩行て遲くなつたアナ。亦今一度行なければならない」ト言ながら家内に入れば、女房は方燈を出して火をともし、雨戸をしめて、
女「モウ今夜は他所へ行のを止に被成ナネへ。何だか今日は胸さわぎがしたり、悲しくなつたりして、先刻から獨で涙を落して泣いて居ましたものヲ。」
男「然か、何故だらうノウ。大略此樣な淋しい所へ來たものだから、氣の鬱情のだらう。不日店の方へでも行けば氣が晴るはナ。」
女「イヽエ、淋しいのも不自由も私やァかまはないが、何だか此節は、お前の顏色が惡いから案じられてならないのに、お前樣は私に隱して心配でお在だから、誠に苦勞で成ませんヨ。」
男「ナニ、何も隱して居は爲ないが、誰人ぞお前に、何とか此身の事を咄しでもしたのかへ。」
女「ナニ誰も何とも言ひは仕ませんがネ、何樣も朝晩氣を付けて察るに、お前樣は多分苦勞があるに違ないと思ひますは。若も然ならばそのやうに、私にも明して聞かせてお吳被成ナ」トいはれて男は胸ギックリ、心の底を知られしかと思へば悲しく、眼に涙うるむを欠伸に紛し、
男「ナニ其樣に案じてくれる事はないはナ。併ながら斯して居ても詰らないから、今度思付

はれねど、外珍しき新世帯に何事も心づかで、夫の留守は只一人、昨日に變る淋しさはいはん方もなく、徒然なれば何となく越方行末の事を案じわびしが、所爲なき儘に四邊を詠め、柱に掛し三味線をとつて調子を合せ、中音に唄ふ一節は松の葉の替唄。上略「日本堤にこがれゆく、道もこゝろもまんまるな、かゞみいらずの衣紋坂、からかさ賣やほとゝぎす、雨のふる身のわが袖も、下谷うへの山かづら、かゝる戀路はおぼつかな、胸にうかめるあだ事を、おもふ間もなく行く水の」ト唄ひかけしが、心の中に不圖うかみたる男の身の上、夫ぞと明して告げねども、我身が廓を出し頃より、家業の損夫不都合の續し事のありもするか、萬事に付て花美なる人が、他見繕飾も捨果て、此所の住居も過し節、噂に聞し別莊ならず。近頃俄に能家をば、他人にゆづりて此家と、かへて慥に假住居、商店も本店も、今は商賣手支て思はしからぬ事のみなるべし。此程日毎に店の方へ行くと言ひつゝ出行ど、懐中金さもしき其體は顏色にさへ見ゆるものを、さすがに此身へ恥しと隱す心は如何ばかり、悔しくもまた本意なしと、胸を痛めて朝夕に氣を惱して在ならんと、苦界に在し粋の身には、案過しも善惡に、馴れて苦勞をするならんか。既に其日も黄昏て、深山の森に歸り行く群烏の聲も何となく、常住よりはいとゞ哀に聞え、心細き事いはん方なし。折から歸る夫の足音、はやくも知りて走り出で、竹の折戸を引あけつゝ、

卒都婆へ、

かひぞなき野中の水の哀れさは消えて跡なき妹が面影

其時植し樒の木は古木となりて今にあり。瘧病を煩ふ者その木の下に行きて立願すれば、忽ち平癒といふ。彼庵の傍の井戸も今にあり。是を野中の井と言傳ふト惣鹿子名所大全に記したり。惣鹿子は元祿十五年三月上木の印本なり 其頃ははや名所となりし野中の井戸、夜も更渡りて月影の、水に映るも物淋しき、井げたによりて手を合せ、涙にむせぶ娘の風情、側に付添ふ若き男も、同じく泪に噎びつゝ、互に手と手を採かはし、既に井中へ飛入んとする折しも、柏木塚の木陰より走出たる一個の武士、忽ち男女の帯背を採つて、後邊の方へ引留めける。

呉竹の根岸とかいふ里に、さゝやかなる家の一構ありけり。生垣には春秋の草花おのがまにまに咲亂れて、風に散る蕾は垣をめぐりて流るゝ音なし川の水に浮び、落花流水心あるが如く自然の風雅を備へ、元は綺麗に造りし庭なるべきが、當時は住人もかはりて茅が軒端の古び、所所へ草生茂り、常に菖蒲の節句の儲にやと疑はる。此頃此宅に住む人は、程近き廓に在て松の位の全盛なりしが、年季の數もわづかになりて、久しく馴染たる人と縁を結び、其人の誠心を盡すはからひにて身儘とせられ、廓を出て直樣此所へ來りしが、兼て聞傳へし男の住家とは思

古人の善惡忠不忠の傳にも、是非の沙汰一概には評すべからず。惡に似たる善あり、不忠の樣なる忠臣あり。亦其人々の幸不幸嗚呼歎ずべし。

夫主君を諫言して爭ふは、戰場の一番鎗を勤むるよりも遙かに勝る忠臣なれども、多くは其功空しくして、君に惡まれ難を蒙りて用ひらるゝ事最稀なり。且宜しからぬ評判を承し主の下に立つ家來は、忠義を盡して命を捨ても、他人是を賞める事なく、主と倶に世間の憎みを請けて謗らるゝは、若箇か口惜しき思なるべし。爰に師直の家老職小林平八郎と聞えし人は、情も深く仁義の侍にて、其忠臣たる心は四十餘人の輩に勝り、亦武勇力量古今に秀たり。大事に臨みて魂騷がず、夜討の人々と戰ひ、死を潔白せられしを聞傳へ、遺憾の餘り聊外傳の奇事をしるして、依怙贔屓あらざる看官の一覽に備ふ。

野末も當時は花柳、ものいふ莟の娘なんどが住ふ街となる所、東に珍しからざれば、昔をいへど夫ぞとは思はぬ人の多かりけり。爰に野中の井と呼しは、谷中三崎の邊にありて、誠に野中の井戸なれば、その儘に名を呼しとかや。往昔柏木といふ遊女のありしが、契りし男に離れて睦敷人なければ、此所に哀なる庵を結びて、三年ばかりを過せしが、了にはかなくなりぬるを、里人の哀れがりて、その傍に埋み、樒の木を植て墳墓の印とし、卒都婆を立てけるが、何者か其

拾はれても直に目印があるから、世間中へ恥を言觸される事ゆゑ、密に今朝尋ねて步行所でござる」

治「エヘヽヽヽ大分の御酒機嫌で、お取落し被成ました事と察ます。」

侍「ハヽヽヽお察しの通り大醉に正體なくなつていたした事、乍併お聞及びもござらう、此身事は。」

治「ヘイ、たしか池田久右衛門さまと當時御名號ます山科の。」

侍「さればサ、其通りの身の上、以前は大星白良之助と申して、千五百石の祿を領して居た事、いかに浪人の後なればとあつて、腰の物を途中へ落すなどと申事を言觸されては先祖へ濟まず、同じ浪人の古傍輩に聞えてもはづかしい義、何分御沙汰なしに賴み入る」ト深く恥て禮を述歸りしが、これを緣として段々心易く出入をし、元來過分の金銀を遣ひ、二文字屋へも多くの德分を付て交情しかば、家内中の者どもが大星を大事に敬ひ、酒食の馳走每度にて、大星氏も其度每に金銀反物を土産に持參し、厚く懇意を盡せし中に、いつしかお輕と馴したしみ、深き中となりて在とも知らで、小山進藤等がお輕を媒せしこそ可笑ことならずや。此一條を抑はかりても、反間苦肉の遠計なか〳〵に容易く察らるゝ所爲にはあらざりけり。

丁「なる程然でございます」と丁稚は鞘を抜きはなし、「オヤ〳〵、眞赤に錆びて竹箆にはとりますぜ。此樣な腰の物を差して歩行お侍が、何處にあるものかァハヽヽヽ。是ぢやァ紙を一枚切ることも出來ないのだ」ト笑ふを聞付け、お輕の爺親治郎左衛門は奥より立出で、

治「コレハシタリ、小僧ヨナゼ鞘を抜いたのだ。お武家樣のお腰のものは魂ぢやといふは。不躾千萬なドレ〳〵麁末にしては濟まぬ。此方へ渡せ。即時に其お侍がお出被成たら何とする。事を」トいふ折からに、娘は目ばやく表を見て駈出し、

かる「モシ〳〵旦那さま、貴君はまた此間の樣にお腰のものをお落し被成はなされませぬか」ト問はれて門に立留るは、立派な姿のお侍、

侍「イヤこれは面目ない事」ト四邊を見まはし、「實に落したに違ないが、他人の噂になつては外聞が惡い。萬一拾つてあらば内々で何卒渡して貰ひたい」ト小聲にいへば、お輕は莞爾、

かる「然樣ならば、マァ此方へお通り被成まし」ト家内へ伴入りければ、治郎左衛門は其由を承知して早速脇差をさし出すゆゑ、お武家は請取りて押戴き、

侍「イヤ、これは〳〵千萬忝い。實は此通り定紋を金象眼にいたしある拵ゆゑ、他人に

察て、由良之助を大切にとりあつかひ、頓てこれを縁として兩親にも得心させ、終にお輕を大星の妾とこそは定めけり。これも宿世の縁なりけん、お輕は金の故に身を任せるといふにはあらで、由良之助の年の其身とはるかに違ひたるを厭はず、その情こまやかに契を籠めて、束の間も放れ難なき風情のみかは、心の誠を盡す事、釋迦も孔子も斯までに、慕はれたらばなかなかに迷ひもすべし愛憐も、深くあらんと他人も噂にしたりける。斯ては小山進藤がお輕を大星に引合せし樣なれども、早其以前に由良之助は此娘と馴染てありしといふ。夫を奈何にと尋ぬるに、彼二文字屋の娘お輕の家の丁稚が、門口を朝早く掃除するとて、脇差の落てありしを拾ひ、

丁「オヤ〳〵脇差を落して行つた人があるさうだ。」

かる「ドレ〳〵お見せ」ト丁稚の拾ひし脇差をとりて侍となかめ、「オヤ、これは毎度此所の表を、酒に醉つてよろ〳〵倒れさうに歩行て通るお侍さんのだヨ。」

丁「ヘヱ何樣してお前さんは其脇差を見覺えてお在被成ますネ。」

かる「アノネ、此脇差は先日も彼お侍樣が、朝早く正體なく醉つて通りながら、爪突て轉び相になつた節落して知らずに行くから、私が拾つて差せて上たから見覺えてゐるヨ。夫とも違ふか知らないがネ、コレお看、鍔の際の此丸くした金物に、二ツ巴の紋が付けてあるものヲ。」

由「アハヽヽヽ何を言ふか當にはならないゼ。」
小山「アレサ實正だョ。疑はしくば先の名前を咄しやせう。イヤ併、然したらば此身達を出抜いて、口入なしに直に出かけるだらう。」
由「イヤ〱其樣賤しい心は出さない。實正の事ならば、禮金を早速に渡すから取持て呉なせへ。實は此頃少し夕霧に倦が來やした。」
小山「其樣ならば其娘の宅をも明しやせう。二條通寺町の二文字屋治郎左衛門といふ者の娘で、年が十八になるが名をお輕と稱やす。寔に何樣も人品の能婀娜な風俗で、其癖温厚實情のある、色白な肌目細かな、眼がすゞやかで鼻筋が正然とした、口元のかはいらしい。」
進藤「コレサ〱、最早大概に賞めて置くがいゝ。餘り賞めて又賞損つちやァ行かないゼ。」
由「ハヽヽヽ小山氏は浪人の活氣に奉公人の口入所をすれば宜ノウ。」
小山「イヤこれは失禮千萬な。」
進藤「トキニ今ツから寺町へ行かうぢやァないか。」
小山「ムヽ然せう〱。サア〱由良さん、出かけなせへ出かけなせへ。」ト互に醉たる興に乘じて、由良之助を伴ひ出て、彼二文字屋の娘お輕を引合せしが、兼て進藤小山が相談置し事と

災によりて跡かたもなくなりゆき、人住まぬ草原と變り、また寛政のはじめつかた、二三軒の遊女屋を再興せしとぞ。然るに彼笹屋の天井の板は奈何にして火難をしのぎ殘したるにや、後年大星の自筆の戲れ書とて見せものに出したり。實に紛なき正筆なりしかば、好事の雅人これを求めて屛風に造りしは、天明年中の事とかや。又云、大星が遊里に遊ぶ隱し名をば、ウキ樣と呼せしとぞ。北窓瑣談にくはしく記されたれば、其細やかなる讀み給へ。實に大星が浮れ遊びの甚しきを婬欲深きと察してや、或時小山源五右衞門、進藤源四郎の二人は、山科の大星が隱れ家にいたり、酒盛遊びて大星も大に酒興に入りし時になりて、

小山「トキニモシ由良さん、夕霧よりも百倍の美女のが近所に在つて、しかも素人娘だが咄相手に被成氣はなしかね。」

進藤「オヽ例の娘か。」

小山「お輕女が事ヨ。何樣も餘程よりか可愛らしい娘だ。」

由「アハヽヽ欺かして笑種にするのか。御免だノ。」

小山「ナニ〳〵、何樣して何樣して嘘を吐くものか。寔に美孃で、殊に些と緣績の人に賴まれて居るからヨ。」

になづみ溺る様に了簡せしは宜なりといふ。味方の者にも然う思はるゝ程ならねば、仇の親族のしかも忠勇名臣の間者を欺くことを得らるべきか。又實に義士の面々もわづかの月日の間ながら、婦女子の爲に樂をなせし者すくなからず。但復仇の際に至つて其恩愛を速に思切つて、死を善道にいさぎよくしたるのみ。浪人の最初より悉く禪宗大悟の出家人の如くならんや。色は色として樂み、忠義の大志は別に命のあるに等しく守りしなるべし。殊に大星が酒色の遊び、放逸なる淫慾を愼しといふは、其忠信の美を贔負する人情より出て、賞譽するに過ぎたるなり。全美女を愛して狂人のごとく、本心さらに他の念はなかりしとぞ。其愛せし婦女の多き中に、別て心に叶ひしは、山城國伏見の里撞木町の遊女屋笹屋淸右衞門が抱の全盛、浮橋と云し美女後に夕霧と名を改めたる遊女に心をうつし、晝夜の境もなく醉倒れ、金銀を費して寛活の酒興大壯なるは、今も猶彼地の口碑に殘る。されど伏見の撞木町も安永の末まで僅に昔の俤を殘し、笹屋といふは殊に大家にて、其頃も夕霧の三味線、大星の文などを祕藏して有りしが、彼家の座敷鴨居の上に大星の好か欄間を細工人に誂へ、山科より伏見までの景色を彫せ透しになしたり。又階子も大星が好にて巾一丈にこしらへさせ、天井の板も奇木を選みて張らせしが、或時醉狂のあまり、天井の板に大文字の落書をしたり。此類の珍しき舊跡多かりしが、其地火

第十九回

千崎彌五郎則休が書殘せしといふ、憤注絶纓自解とか題號したる書に曰、奥野將監は逞義して、其家の祖なりし山城半左衛門といふものの武功を貴ぶ。然れども何故か鐵石心忽ち瓦礫のごとく碎けて、空しく不義に落入ものなり。川村傳兵衛、佐藤伊右衛門、進藤源四郎、小山源五右衛門は倶に忠義を抱く事金石の如しといへども、節に臨んで其意を忘れたる事、雪霜の朝日に向ふと同じ。

右の文をはじめに出し衆士の評をことごとく載たれども、此小本を綴る本意は童蒙の伽なれば、理窟を厭ひてくはしく寫さず。只引用の旨趣を知る人にこそと思ふのみなり。されば後の世にいたりて先哲の詮穿種々あれど、多くは推量の説にして、其頃の風情を深くはかり知る事難かるべし。彼大星の仇に心をゆるさする僞の放蕩淫樂といふ事は、當世になりてこそ諸人も知るなれど、復讐をなさゞる以前は、義士の連中にてさへも謀計とは思はず、實に大星も淫欲色情

いろは文庫第四編序

諸先生流義に依て、字體はいさゝか變れども、心は不違忠臣義士の苦辛を、世世に書殘されて士道の手本となりしより、今は彌々是に習ひ、席から出たる實錄に、諸家の祕書さへ自然顯れて、よき大星の光輝く誠心奇謀、年々歳々聽毎に耳新なる物語、もらす事なくうつし留、文庫に久しくをさめ置しを、其儘筆耕に雇ひ綴れば、夜討の前後入亂れ、はるかに以前の過越方をくり返して記す卷も多く、初心の看官に解しかぬる條下も定めて有ぬべし。能字つゞきを讀ならはせ給へと願ふのみ。

爲永春水誌

梶半左衛門　高久長右衛門　松本新左衛門　近松貞六
岡本次郎左衛門　岡本喜八郎　田中代右衛門　進藤源吾
大石孫四郎　川村太郎左衛門　田中鹿右衛門　垣屋武右衛門
三輪喜兵衛　三輪彌九郎　小山彌六　井口半藏
山羽理左衛門　嶺善左衛門　木村孫右衛門　前野新藏
粕屋五左衛門　高田軍兵衛　小幡彌五右衛門　木村傳左衛門
杉浦順右衛門　井口忠兵衛　生野十左衛門　上田三郎左衛門
平野半平　佐々小左衛門　中野理兵衛　中村清左衛門
鈴田重八　田中貞四郎　矢野半助　月岡治右衛門
毛利小平太　小山田庄左衛門　瀬尾孫左衛門　此瀬尾は大星の家來なり

右の六十七人に又こと〴〵く異說あり。殊に義士の中なりける千崎彌五郎が、此不義の人々を論じ誅したるものあり、次の巻に寫し出せり。看官よろしくこれを讀むべし。

れば、鹽谷の祿をうけたるにはあらざれども、實の父喜兵衛と兄十次郎が義黨なるによつて、大星へ種々と說いて盟の連中に加はりし英雄なり。

岡野九十郎　追盟の人　改めて二代の金右衛門

佐藤長助　同　改めて二代の右衛門七

右の如き義心の人々に引變へて、違盟の者六十七人あり。但この名目の中には不義不忠とも定め難き異說の士十餘人あり。夫は拾遺にして詳しく出すべし。先約束を違へて盟を破りし面々を其儘にしおせば、

奥野將監　高谷儀右衛門　進藤源四郎　川村傳兵衛

小山源五右衛門　粕屋勘左衛門　田中權右衛門　佐藤伊右衛門

長澤六郎左衛門　長澤喜右衛門　多藝太郎左衛門　豐田八太夫

各務八右衛門　里村伴右衛門　陰山宗兵衛　榎戶新助

灰方藤兵衛　上島彌助　渡邊覺兵衛　山上安兵衛

幸田與惣左衛門　仁平鄉右衛門　源邊佐野右衛門　川田八兵衛

久下織右衛門　猪子理兵衛　田中六郎左衛門　酒寄佐兵衛

ば、則亂臣となるゆゑ、兼て功なれば死刑になるを覺悟の仇討、前代にもまた後世にも有がたかるべき人傑なるべし。

何事も皆僞の世の中に死ぬるばかりぞ實なりけると詠ぜし歌の意にも似たるか。死ぬるを心の實と定めて說くにいたれば、命程最惜しき物はなきにやあらん。されば三月鹽谷侯の城中にて城を枕に討死せんと言ひ或は殉死を遂んと決定したる者、又は其後山科の大星が隱家に尋ね至り、泊盟聞へ加はる事なりて盟をなしてその仲せんと言し者凡百餘人なりしが、既に道義を發して、其際に臨み逃去連盟の者六十餘人、是等の人々も發念は君恩の深重きを思ひ其列に入ども、さすが命の惜しければ、恥しと知りながらも、約を違へて逃隱るゝ者ならずや。其不義士の多き中に、過去りし舊き恩を感じ不忘、新に盟の人數に入る勇士は、實に絕世の人傑古今無雙の忠烈といふべし。其人々には、

不破勝右衛門　舊年以前の浪人なり。

風間新六　十四年春二月の浪人なり。

風間新六は風間喜兵衛が次男にて、叔父の里村作右衛門が養子となり、養父とともに浪人す。東に下りて瀧元但州侯の藩中、中堂又助といふ人の許に食客となりて有りけ

小山清兵衛　　實は　小山田庄右衛門

同三津根何某店

杉野九兵衛（後に逢老町にて藥屋となる）　實は　杉野十平次

渡邊七郎次　　實は　嘉津多新左衛門

同　婦辰根逢老町米屋某店

米屋五郎兵衛　　實は　前原伊助

右は表店にて綿類太物類を賣りしとぞ。

小豆屋善兵衛　　實は　千崎彌五郎

始は扇子を賣り、後には穀物、菓子類を賣る。

猶此外に變名せし義黨の人々、主となり家來ともなり、昨日今日住所を轉じ、活業を替へ、姿を變じて艱難辛苦し、敵の内外をしのび窺ふ忠義計略種々あれば、必如斯とのみは思ふべからず。住居も諸所に變りしを、こと〴〵くは記さずと察したまへ。今更いふにあらねども、四十餘人の忠臣義士を、容易く思ふ人々の爲に又々評すべし。後世にも忠義孝道を賞らるゝ人多けれど、忠孝全くして法に背きしといはれ、切腹して公道を立てね

內藤十郎兵衛　實は　安倉貝十郎左衛門

此いろは文庫二編目に記したる奇緣の妾宅を後に玄好町へ引移りしか別宅か未考。

富田源吾　實は　浦松三太夫

下部一人を仕ひしといふ。如斯なれば、安倉貝が店主にて浦松同居といふのみ。安倉貝は妾宅に多日在しなるべし。

南八條保里稻戸町平野屋十左衛門店の裏家に住

吉田庄兵衛 尾竹の涙人と申立　實は　簇岡源五右衛門

脇差屋新兵衛　實は　大鷲文吾

清水宇右衛門　實は　佐藤右衛門七

醫師春庵　實は　貝賀彌左衛門

園城佐谷子町紀伊國屋何某店

右は同居せし如くなりしとぞ。

長江長左衛門　實は　織部安兵衛

水原武右衛門　實は　餘倉川勘平

原　勘　助　　實は　仙馬三郎兵衛

柚　庄　喜　助　　實は　風間喜兵衛

同　新　七　　實は　風間新六

同町五丁目秋田屋權左衛門店

山本長左衛門　　實は　蔦森助右衛門　妻子同居

芝生濱松町檜物屋惣兵衛店

高畠源野右衛門　　實は　簓多五郎右衛門

婦多川風呂江町搗米屋太兵衛店

醫師　西村丹下　　實は　尾久田定右衛門

西　村　清右衛門　　實は　尾久田孫太夫

定右衛門は元近夏勘六の舍弟なりとぞ。復仇の前霜月の初旬、尾久田の妻子を外藤伊織殿の御長家へ呼取置れしといふ。外藤家は鹽谷判官の外戚なり。尤尾久田氏は緣よりし故なりとか。

芝生立好町の住居

在りしとぞ。

新孟子町六丁目庄屋吉右衛門店

神道者　田口一直　實は　葭田忠左衛門

田口左內　實は　葭田澤右衛門

同居

和田元興　實は　原郷右衛門

同町四丁目和泉屋五郎兵衛店

山彥喜兵衛　實は　若村甘助

醫師三橋隆貞　實は　早稻久太夫

郡氏八郎　實は　長島八十右衛門

專谷又助　實は　岡野琴右衛門

專谷小市　實は　早稻孫九郎

日雇小者一人、都合六人同居

同町四丁目庄家七郎右衛門店

中田藤內　實は　風間十次郎

第十八回

爰に義黨の身をやつして復仇の時節を待ち、假住居をせし住所と拵名のあらましを尋ね、後の世までもその辛苦を察しやらるゝ語り種とすれば、古書を正して違はざるものを記す。

鎌倉の町の内にて、徳町三丁目小山屋彌兵衛といふ者の裏にしつらひありし貸座敷に、宿借主となりしは、

垣見左内　實は　大星力彌
垣見五郎兵衛（左内が叔父なりといふ）　實は　大星由良之助
專谷仲庵（醫師なりといふ）　實は　菅寺十内
又四郎　實は　杉の谷半之丞
原田斧右衛門　實は　潮田政之丞
森清助　實は　近夏勘六
三田村次郎吉　實は　三村次郎右衛門

外に大星の若黨二人、近夏が江州の在所より連れて來りし僕一人、都合十人貸座敷に

其身まで面目となる武士の冥加にかなふ悦び涙、小踊りをして立あがり、

伊「逸助、大儀ぢや。休足いたせ」ト奥へ立入る折柄に、内儀も是を聞付けて、倶に悦ぶ玄藏の昨日に變りし忠義の鑑、末代までの家の譽と壽ぐ詞。家内中是まで蔭にて謗りたる下女も呆るゝ侍の、いで鎌倉といふ時は、寔に魂顯はるゝ奥ゆかしさを今ぞ知る。噂も忽ちお屋敷中へ取沙汰をして、追々に芝多の方へ走來り、舍弟御の御忠誠、當秋津嘉家の御名前にも自然なる武士道の手本とならるゝ御働、殿さまにも御滿足に思召さるゝ所爲なりと、賞美をせざる者もなく、果は忠義をしたふの餘り、何ぞ記念を賜りたしといふ人あれば、あやかり度と彼玄藏が脱捨し饅頭笠の古きまで、拜し頂く侍氣質、名殘に持參の古徳利の底に染たる酒まで好んで貰ひ、頭上に塗て禮言ふ人もありしとかや。珍重さるれば伊左衛門も、麁略にならぬと徳利まで、記念の品と紫の帛紗に包む家の重寶。是ぞ仲垣玄藏が徳利の傳記と後の世まで語り傳へし譽なり。

此一條は、予が友人舌耕者なる文車が常に述る所を、縮文に綴りて婦女子の覽に備ふものなり。

く押出しました諸見物、此處の木戸際彼處の辻、往來留に異なりませず、群集の中を漸に押分參る向から、物見のお役太鼓の合圖、前後に心を配られて三段ばかりに備を立てられ、何れも血汐に染衣も適れなりと諸人の噂、手疵のお方重疵のお方も交雜御連中、寔にお勇しい御同勢」

伊「ナニ手負の人もありと言ふか。玄藏の手疵は淺手であつたか」

逸「イエサ、玄藏樣は第三番目のお組の先立、例の御酒の御機嫌とはうつて變つたお出立、兜頭巾を脊後に引掛け、白布疊んで御顱卷、御顏色も麗しく、御裝束は一樣ながら一際勝れて御元氣よく、每度見上た藤柄の御大小に引かへて、光り輝く金拵、血付の鎗を挽込で、四邊を拂ふ御勢、目早く私を御覽じて、逸助なるかと被仰たお聲を聞た其嬉しさ。いまだに胸がダクダクいたして、下郎の肩身が廣い樣にぞんじました。アヽ寔にお目出度事で」

伊「オヽ出かした忝い。ヤレ〳〵夫は賴母しい。シテ手疵も請けない樣子か」

逸「イヽエ、些も怪我は被成ません」ト言つゝ懐中より短冊と呼子の笛をとり出し、「ヘイ是をお遣し被成まして被仰ますには、途中と申し討死と覺悟いたした身上ゆゑ、何にも貴君へお上被成ものが御座いませぬと被仰ました。私には此御巾着に金子のはいつた儘被下まして」

ト跡は淚に咽入る言葉、賤しき身にも忠臣の感に絕たる歎にや。兄伊左衛門は肉身の舍弟の譽、

▲「モシ〳〵、モウお前の賞める旦那はあれ看被成、一町ばかり行過ぎてお仕舞被成た。」

「アハヽヽ夢中になつて居るさうだ」トいはれて氣の付く逸助が、ビックリせしが氣も勇む、仲垣氏の勇しさを、いでや旦那へ注進と、飛ぶがごとくに秋津嘉俠の、お屋敷さして走歸る。此時芝多伊左衛門は、舎弟玄藏の音沙汰を善か悪かと待詫びて、奈何々々と玄關へ出でては奥へ走り入り、表の窓を覗き見つ、また玄關へ立出る、折から息もせはしなく走歸りたる逸助が、玄關へ倒るゝ樣に手を支へ、

逸「旦那さま、さぞお待兼被成ましたで御座りませう」ト言はれて主人芝多は胸をギックリ、四邊を見廻し、

伊「オヽ逸助か、大儀であつた。何樣ぢや玄藏は看えまいナ。」

逸「イヽエ、五六十人の其中に。」

伊「影も似寄の者もないか。」

逸「イエ〳〵それは思しめしが違ひます。」

伊「シテ玄藏も其人數に加はつて居たのか。」

逸「マアお悦び被遊まし。前代未聞の評判ゆゑ、諸方のお武家町家の者も、貴賤老若差別な

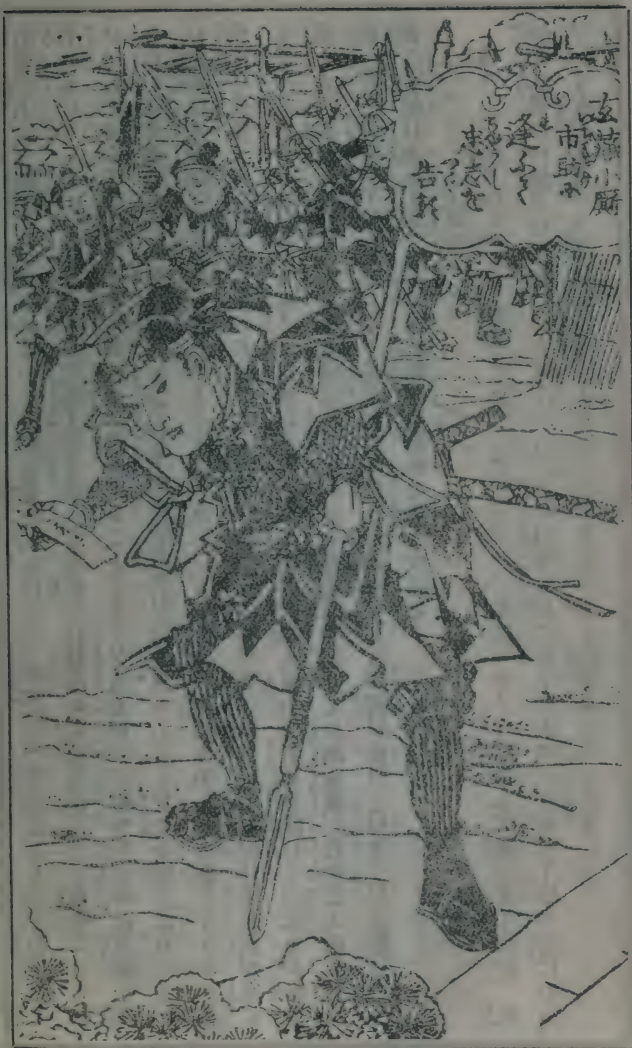
お聞申して來いと被仰付まして御座います」トいふ中に、玄藏は所持せし小笛と短冊を兄伊右衞門への記念とし、逸助へは金子を遣し、
玄「行列におくれるゆゑ心せく。此品を兄上へさし上げてくれ。又申上ぐる口上はナ。」
逸「ヘイ〳〵有難うぞんじます。」
玄「先に申す通りお目に不懸にお別れ申すが殘念に存じますと、さて浪人中種々御厄介を懸けましてはござれども、昨夜師直公のお屋敷へ推參いたして、亡君の御無念を晴らし、敵の首を申受け、四十餘人の同列の面々、其方が看る通り打揃うて、亡君の御菩提所泉岳寺へ罷越し、一同切腹の覺悟に罷在上は、最早今生にて御目に懸る事もあるまじく存じますれば、兄上姉上御揃ひ御機嫌よく、御榮え被成樣にと宜しく申上げてくれい。其方も無事で奉公いたせ。イヤ遙におくれた。これはしたり、イザさらばぞ」ト言捨てて、行過ぎたりける人々に走り付かんと駈出し行く。逸助は主人の悦び思ひやられて、其の身も嬉しく他人の看目も晴がましければ、戰慄するほど悦ばしく、問はずがたりに傍へ向ひて、
逸「モシ誰人も御覽なせへまし、これ此玄藏樣と申すは、私どもの旦那の御舍弟さまで、鹽谷のお屋敷中へ御養子に被爲入たお方さまだが、今度斯うして敵討にお出被成てね。」

玄「イヤ、さして勞れもいたさぬが、昨夜は折角お兄上さんの所へお暇乞に罷出た所、お留守でお目に懸らず、お姉上さんはお癪氣との事ゆゑ、其儘に立歸つて直さま牛島新田へ推參して、只今の退口ぢやが、其方は何ぞ用事でもあつてこれまで參つたのか」

逸「ヘイ〳〵、イヤ外の事ではございません。旦那さまが昨夜遲く御殿をお下りで、夫から貴君のお噂や何かで寔におそく御眠りましたから、今朝ほどは例よりお目覺が遲うなりました。所でお屋敷の窓下が人聲で騷々しくなりまして、貴君方のお噂がございましたから、旦那さまが私に貴君のお在被成のを見申して參れと被仰付で、それゆゑこれまで參じました。此お仲間に貴君がお在被成ますのをお聞き被遊ましたらば、さぞお悅びで御座いませう。ヤレ〳〵私もお目に懸りましたので、寔に有難うぞんじます」

玄「アハヽヽヽ、此玄藏が常に酒興亂醉のみにてありしゆゑ、敵討の連中には加はるまじとの御心配も被御座たらう。其方達も然う存じて居たらうナ」

逸「ヘイ、イエ〳〵何樣いたしまして、何でも只今此お噂を他人の申すのを聞きますと、旦那さまは申上げるに不及、御家内樣不殘、私めも屹度貴君も御連中に被爲入には違ないと存じまして、駈出します節に旦那さまが、貴君には怪我はないか、定めて功名お手柄を被成たらうが、

小厮
市助に
逢ふて
忠志を
告

右の二人は、袖印の白布を以てつゝみたる鎗を引提げたり。其次には、白無垢をもつて包みたる首を鎗の柄に結びて是を荷ふ。尤六丁の丁數にて手代りに持事を定められたり。前後にならぶ人々は壯年なるを選み、中備には老人達を圍ふごとくし、又近夏勘六、餘曾川勘平は重瓶を悩みたれば駕輿に乘りて後に從ふ。其外淺手の者は皆歩行にて、勇々しくも足並を揃へたり。されば逸助は玄藏のこと覺束なくはおもへども、萬に一ツも此列に加はりあるかと近くすゝみ、其同勢の先手より中備まで見わたす所に、仲垣氏の在らざれば、さては西國の諸侯に奉公濟が宴にてありけるか、怪我にも此人々に加はらば、例の酒にて足も亂れ、討死を遂げられたるか量り難しと、又後の備の來るを見れば、此行列の第一番に先へ進みし仲垣玄藏、行年こゝに二十八歳、常の醉狂に引變へて、いとも勇しき其出立、兜頭巾を脱ぎて襟に掛け、白布を以て顱卷とし、鎗を引提げ來りしが、早くも逸助を見留めて聲をかける。

玄「コリヤ〳〵逸助々々〳〵」

逸「ハイ〳〵〳〵。ヤア玄藏さまでございますか。私はモウ〳〵驅出して參じましたが、見物の大勢に押倒されて歩行れませんから、漸々只今お目にかゝります。ヤレ〳〵はや定におめでたう存じます。さぞお草臥被成ましてございませう」ト揉手をしつゝ近付けば、

いろは文庫　卷之九

第十七回

再說芝多の小者逸助は、往來の群集を押分けて行く向より、義士の人々皆一様の出立裝束、四十餘人を三組に備へ行列正しく引上げ來る。其眞先には辻々の物見役、合圖を兼帶して柄の付きたる手太鼓を用意なせし嘉津多眞左衛門、杉の谷半之丞の二人、衆人に先立事半町ばかり、四辻にいたり左右の小路を見わたし、敵の緣者の追手加勢等のありや否やを見屆け、何事もなければ立止りて、彼合圖の太鼓を取直し、家滿賀流の押がかりを打ならす。尤小太鼓なりといへども、表裏の皮陰陽の定め、皮留の鋲の數を正して、天の二十八宿地の三十六禽を象りて三十六鋲二十八鋲、其形を不違裏と表に打たるを、陽氣を含んで嚴重に、ドン引〱〱と九度三返打て後陣に知らすれば、先手、中備、後陣の三隊整々とし歩行をなす。その形相いさゝかも油斷なく、小勢なりといへども容易これを打破る事はなりがたしと推察ける。其備立の一番には、

立林貝七降重　風間十次郎光興

△「ある所か、後の人數の方が餘計にあらアナ」ト戯言のその折から、俄に騒ぐ諸見物、

大ぜい「ソリヤア出たぞ〱。アレ〱一番先へ太鼓を持つた人が來るぜ」

大ぜい「ドレ〱、イヤア實事に來たぞ〱。ワア引ワア〱」ト立騒ぎたる群集の人聲おびたゞしくも聞えけり。

感じて賞める評判に、尾に尾を付ける啌八百。

㊀「オヤ〳〵松さん、お前何所へ行つた。見物ぢやァないのか。」

△「オヽ竹さんか。イヤ惜しい事をしたぜ。昨日此身と同伴に行けばよかつた。」

㊀「何故〳〵。」

△「ナニサ、此身アノ敵討の在つた屋敷の近所に親類があるから、昨夜止宿て居て夜中に敵討を看に起きたアナ。イヤ寔に怖しかつたぜ。敵味方の旗の手が東西南北に入亂れて、鯨波のこゑ天地に震動して、大山の一度に崩るゝがごとく、此時寄手の陣中より、紺糸の鎧に、赤白二段筋の陣羽織を着し、白柄の大長刀を水車のごとく振廻し。」

㊀「コウ〳〵、そりやァ何所の咄だ。」

△「エ、これが新道へ出る南鶯の講釋ヨ。一夜聞きに行かないか、大そうに大入だぜ。」

㊀「アハヽヽヽ其樣な事だらうと思つた。お前は兎角啌を吐くから否だぜ。」

△「ハテナ、實錄よりか空談の方が面白いハナ。しかし是は實事だが、まだ後陣の人數は來なんだか。」

㊀「オヤ、賴兼さまのおやしきへ入つた外にも仲間があるのか。」

走り出で、口の中にて獨言、

伊「ア、引埒の明かぬ逸助めだ。何所まで行きをつたか、早く歸つて舍弟の有無を告げれば能いのに。居るか居らないかは一日見れば知れる事を、何をいたして居るか。エ、引もどかしい。イヤこれは自身に出かけ樣か、それも他人の見る目が憚りぢや。サテ何樣したら宜らうぞ」ト氣をあせりても詮方なく、逸助男が注進を今や遲しと待かけたり。かくて又逸助は主人の言付尤と、駈出したる行先は、人立多き辻小路、おもふ儘には步行れず、心をいらち立込し人を押分け押分けながら、行く向より休足の體を看たりし見物が、

×「モウ先へは行かれないぜ。賴兼樣の辻番から棒突が大勢出て、棒を垣に組んで往來を留めてしまつたア」

●「オヤ銀さんか。此身は儻倖と賴兼樣の御門へ入る所を見たが、誠にモウ勇しい樣だつけ。そして大家の事だから、不時の事でも萬事行屆く樣子だが、何でも强敵に働いたと推察て、不殘血だらけになつて居たぜ」

×「然うか。御門のうちにまだ遲刻も居るのかノウ。早く出て來ればいゝノウ」

●「ナニサ、今に出て來るはな」ト行合ふものが種々の、噂も自然と勇しき、忠臣義士の人々を

てはくれまいが、暇乞に參つた時刻に符合する樣な今朝の風聞、萬に一ッも其中へ舍弟が加はつて居る事ならば、是まで他人に謗られた玄藏の酒癖より、倶々に脊後指をさして笑はれた兄の此身が面目、先祖への孝行此上もない大慶ぢやが、よもや然ういふ心がけはあるまい」

逸「イエ決してないとは申されませぬ。マア私が駈出して參つて看屆けませうか」

伊「さればサ、此身が申付けて見に遣して、玄藏が其仲間には居らぬとあれば、彌々世間の物笑ぢや。其方が只何となく御門を出でて、町へ買ものに參る風體で、他人に知れぬ樣に見て來てくれ。些も早く急いで參れ」

逸「ハイかしこまりましてございます」ト勝手にいたり、小買物の手籠を提げて豆腐屋か八百屋へ走るおもむきにて、秋津嘉侯の常通用の御門を出るより一さんに走りて、群集を押分行く。其跡にても芝多は取つ置つの胸の中、實に弟が西國へ仕官にありつき發足なさば、今更不及事ながら、何卒奉公濟せしといひしは全く僞にて、義士の仲間に加はつて、今引上げたる人々の人數にまじりて居てくれかし。南無春日大明神、當所神明宮の靈驗感得、適れ武運のあれかしと、衣類を改め袴を着け、玄關に立出居間に坐し、又立上り窓を覗き、内儀を呼んで何用か言付けんとして言ひもせず、臺所のかたへ走り行き、とつて返して緣側から庭へ下り立ち、また玄關へ

「オヤ〳〵然うか。すさまじい忠義な手合だナァ。ドレ〳〵早く往つて看様」

▲「はやく往きな。此身も未見て居たかつたけれども、家内に急用があるから歸るのだ」ト行合人の辻話を聞くより、いとゞ芝多が胸に答ふる舍弟の身の上、昨夜來りし暇乞、他家へ奉公濟せしと言ひしは誠か僞か。若や噂の仇討の、浪人仲間に入りあつて、死ぬる覺悟の暇乞に夫とは言はず來りしか、又その仲間には入らざるかと、案じながらも他人の思はく、自ら出でて行かれもせず。奈何なさんと氣を揉みしが、家内に舊來召仕ひし逸助といふ男を呼出し、

伊「コリヤ逸助、唯今往來の騷ぎを承つたか」

逸「ヘイ、この御屋敷の御家中さま方も驅出して、看にお出被成たお方が大勢御座いますが、元玄藏さまの御在被成ました鹽谷さまの御浪人衆が、揃つて殿さまの敵を討ちに、師直さまの屋敷へ行かれたのが、本望を遂げて引とつて來さしつたと申事でございます。それに付きましてサ、昨晩貴君のお留守に、お暇乞にお出被成た玄藏樣も、其お仲間へ加はつてお出被成は爲まいかと存じます」

伊「イヽヤ、他の浪人達は譜代の恩義と、鹽谷家の爲に必死の働をいたしたらうが、舍弟玄藏は知つての通りの醉狂人、年中酒で正體なし。兎ても主君の仇討などと、侍らしい働を爲

がぬ家もあらざれば、積りし雪を踏消して、地響なせし群集の物音。彼芝多伊左衛門は夜を更して、家内中が寐入込んだる今朝の事、最初のほどは知らざりしが、轟きわたる窓の外、俄に目覺めて飛上り、胸ををどらす床の上、近所に火難の發りしか、何事やらんと寐間衣の儘帶をしつかり〆直し、大小探つて腰に帶挾み、窓の戸さらりと押開けば、貴賤を不論雪路を、踏散しつつ驅行く大勢。常業ならずと伊左衛門、家内の者を呼立てて、何の故ぞと尋問折しも、亦窓下にて往來の人聲、

●「オヤ〳〵鐵こう、お前は最早看て來たのか。何の事だか實正が分解たか。」

▲「オヽ金さんか、早く行つて看な。寔に威勢がいゝぜ。何樣なにりゝしからう、今頼兼さまの御館へ入る所だア。」

●「エ、然うか。何が頼兼さまへ入るのだ。」

▲「オヤお前は些も知らないのか。アノソレ鹽谷家の浪人衆がナ、高野師直の屋敷へ夜討に行つて、敵を討つて今洒縄の圓覺寺といふお寺へ引上げるのだとヨ。此身も何だか知らなんだがノ、今委しく其理由を知つた人に出合つて聞いたのだア。早く往つて見な。鎗の先へ首を突貫して、五十人ばかり行列で前後を用心しながら押して行くが、寔に立派だぜ。」

には彼玄藏、同意の人々打連れて、主君の仇と高野家の、屋敷に押入り合言葉、山霞河竹の應對して、烈しく戰ふ最中なるべし。

第十六回

雪の翌朝に清閑に、朝寢過せし其中に、極月も春もゆたかなるは、武家の屋敷の町方とは、風情も違ふ巳の剋前、彼芝多の窓の下、表の方の往來を、多くの人の騷ぐ聲にて、

▲「ヤアイ、今安辻へ行つたイ〱。早く來ねへかアイ引」

●「ヤイ〱、吉ヤ此方先へ行くぜ。其方の樣に足が遲くつちやァ追付いて看る事ァ不出來ぜ。アレ〱向へ行くさうだア。」

▲「オヽイ〱待ちなヨ引。此身が爲知て遣つたのに、先へ驅拔ける事はねへやアナ。」

●「ソリヤ〱また前路の方へ歸るさうだぞ。怪我をするナ、あぶねへ〱。」

大ぜい「ワア引〱。」

數百人の足音、ばた〱〱ドロ〱〱。

大ぜい「ありやりやん〱ヤアイ引ワア引」ト木精に響く數萬の人聲、芝生の里の町々に、騷

儀で困るだらう。何卒つゝがなく行所へ着すれば宜いが。何だか案じられる事だ」トさすがに兄と弟の中、蟲が推察の心にや、越方行末の事までも、思遣りたる目上の慈悲、自然と涙を催すも、一世の別れと明る日は、なるをも思はで休息と、氣を慰めに女房が、すゝめる酒にいささかは、氣鬱を忘るゝ其席にて、下女は先刻玄藏が、穢れし徳利へ酒を入れ、持來りしより手酌にて、呑みつゝ歸りし可笑さを、時の興にと物語れば、伊左衛門は苦笑ひ、

伊「今はじまつた事でもないが、酒にかゝると寔に人間の情はない樣だが、まさかに年中彼通ならば、鹽谷家で奉公も勤まる道理はない筈だけれど、酒興と本心とは少し相違もある樣だテ。又此身が了簡では、見察の有る行狀といへば、弟の放蕩を他見に繕ふ樣ぢやが、先達も酒に醉つて臺所に倒れて、正體なしに眠つて居たが、此身が他所から歸りし眼前、こまつたものと思ひながら、能々看れば大小を前へ引付けて、柄の所へ右手をかけ、自然用心の體に察えたゆゑ、所爲と此身が足音を高くしたれば、忽ちに眼を開いて鐔口四五寸拔きかけしが、此身が顏を看て恥ぢたる顏色、其儘に俯いて又正體もなき風情、されども破落し藤卷柄の刀心に似合はぬ刄の眞精、氷の如きたしなみは、武士の本意を忘れぬ覺悟と察して置いたが違もすまじ。何卒立身させ度いものぢや」ト語る間に時移り、はや丑滿の鐘の音の、こう〳〵とこそ告渡る。此時刻

ぐれど、來りし時結ばる紐を引ちぎり、輪も細紐も放れしかば今更に迷惑し、「イヤこりやア行かない事をした」ト笠を投捨て、古びし手拭頬冠り、出行かんとすれば下女は呼止め、壁にかけたる菅笠を採下し

「アヽモシ、貴君これでも召しておいで被成まし」トさし出せば、

玄「イヤ、これは心付忝い。ドリヤ急いで行かずばなるまい。其方達も無事で春を迎へやれ」ト言捨て驅出す兄の家、これ今生の見をさめと、思へば引るゝ後髮。血縁の兄に對面もなさず、急ぐは約定の夜討の用意、着到の時刻に遲れまじものと、勇む心に愁を拂ひ、積る雪路踏ちらす、跡よりうづむ白雪に、かげも止めず立去りしが、兄なる芝多伊左衛門は、其夜の子半刻に御殿を下り歸りしかば、內儀は出迎へ挨拶し、

女房「アノ、夕暮に玄藏さんが被參ました」ト下女に聞きたる通り伊左衛門に物語れば、

伊「ハテナ、久しく參らぬから何樣いたしたか、又極月にさしかゝつて難澁の由を言ひに來るであらうと存じて居つたのに、押詰つて奉公に有付くとは、マアく僥倖な事ちや。併し時分がらに似合はぬ西國行、合點が行かぬ口上ではある。大略それは供に行くのではあるまい。別段に西國の役目でも言付けられて、當地を出立の事と思はれる。何にいたしても此寒サ、道中も嘸難

やれ」ト徳利を下女にさし出せば、さも否さうに下女は請取り、竈土の際にさし置きたり。玄藏は身繕して、「エヽ引と、お上にお客が在つてはお兄上さんのお下りは遲からうし、お姉上さんも御病氣ではお暇乞も出來まい」ト獨言を言ひながら、下女を側近く招き寄せ、「イヤコレお冬、今此身が言ふ口上を失念せず、たしかにお兄上さんのお歸りのとき申上げてくれ。屹度ぢやぞ」

●「ハイ〳〵、忘れはいたしませんから早く被仰まし」

玄「然らば言聞ける。エヽ引と、お兄上さんへ申上げる口上ハナ」

●「ハイ」

玄「昨年三月浪人いたしてより後段々と御厄介、お世話に相なりまして千萬ありがたうぞんじます。殊には酒癖のよろしからず、餘計に御苦勞も懸けましてございますが、此度漸々時節到來いたして、西國の諸侯へ主取仕つて、國元の供を申付けられまして、明朝出立いたしますゆゑ、お暇乞に罷出ました所、御留守にてお目に懸りませず、殘念に存じます。萬一此後お目に懸る事なく拙者死去いたしましても、御高恩の程は忘れ申しませず」ト言ひつゝ少し愁涙を催せども、お冬はいさゝか氣も付かず。「なほ此後はお兄上さんにもお姉上さんにも、御繁昌被成ます樣にと陰ながらも祈念いたします」ト言終つて立上り、脫捨てたりし菅笠を手にとり上

●「イヽエ、お寒さのお病もなく、今日はお上のお客さまで、先程から御殿に御在遊します。」

玄「ハア引左様か。夫ではまづよしと。エヽ然ならばお姉上さんは」

「アノお癪氣で寐臥お在被成ます」ト奥より出來る下女が言へば、玄蔵は合點ながら、

玄「ムウ引此寒さでは雪あたりの御持病も發るはずだ。何卒早くお快氣お成んなさればよいが。それではお逢ひを願ふも御面倒だらうから、お目に不懸に歸らう」ト言ふも酒ゆゑ舌の根の、廻らぬほどに板の間へ、倒れかゝりて起直り、「エヽ引」ト言ひながら膳棚の方へ指をさし、

「ソヽその茶碗をとつて被下。」

●「ハイお茶を上げますか。」

玄「イヽいゝや、只茶碗を借りて酒の毒味をするのだ」ト胯の下より最穢らはしき古徳利を取出し、徳利の口に結びたる繩にも泥の染みてやあるらん、徳利の尻はふすぼりて捨物にせし器に等し。「ドレ〳〵燗を頼むも面倒だ。冷で一杯やらかさう」ト手酌に引請け續呑、舌打ならし高笑、「アハヽヽヽ此酒はお兄上さんの所へ土産に持つて來たのだが、お留守だからお毒祭を仕過したぜ。イヤ未少しは殘つてある。併し最早奥へは上げられまい。其方達でも呑んでくり

類も度々着せ遣せど、忽ちこれを古着買紙屑買に賣代なし、酒の價となすゆゑに、芝多の内儀下女までもこれを謗りて見かすめけるが、玄藏は物の數とも思はず、酒をだに呑せらるれば例も機嫌の上戸にて、下女はしたにも挨拶よく禮を言ひつゝ、足元もひよろ〳〵ふら〳〵可笑げな風俗が癖なる酒の咎、後には兄の伊左衞門も苦々しくぞ思はれける。然るに極月十三日、今日は朝より雪降出し寒さはげしく、北風は皮膚に石の針をさす如くに覺ゆる厚氷、軒のつらゝに袖冷る、その夕暮の事なりしが、玄藏は例のごとく酒に寒さを防ぎても、防難たる肌薄な、姿に着たる赤合羽、饅頭笠も白菅が煤びて糸のほつれしを、首に頂く主君の恩義、忘れぬ人とはなか〳〵に、見えぬ足元ふりうづむ、雪を蹴立る酒機嫌、秋津嘉侯の御屋敷内、兄の芝多の門の口、よろめき込みたる勝手口、臺所の上り端、腰をドッサリ倒るゝ樣になるを背後へ手をつかへ、舌もまはらぬ獨言。下女は夫ぞと看るよりも、傍輩の女と貌見合せ、一女は奥へ一女は立つて上り口、

●「玄藏さま被爲入まし。今日はさぞお寒うございましたらう。」

玄「オイ〳〵親切に忝い。併し此身は此通り好物の酒で寒氣を何とも思はぬが、お兄上さんは何樣ぢや。雪のおあたりもないか。」

倉の諸侯の御館にも、鹽谷家の使者仲垣玄藏の口上とて評判にせられしほどの辯舌者なり。然れども其使を勤むる役、毎度大醉なれば主家を立出る節のみ正然して、御屋敷を出でて馬上立派に乘行く事わづかに半町ばかり、忽ち行義亂れて馬の上に居睡をしつゝ、手綱もゆるみてしだらなく、馬は足のはこびを亂して、路草を喰はぬがまだしもといふ樣なれば、供に從ひし者は往來の者が笑ふを恥ぢて氣の毒になり、玄藏に向ひ馬上をゆり覺し、怪我あるなといへば、目も開かず只首をうなづくのみ。

玄「いゝサ、何もかも承知して居るは。アヽ引眠度ムニヤ〳〵」ト夢中の如くなれども、先の御屋敷の御門前に近付けば、御門番がその使を看て御玄關へ向ひ、

門「お使者〳〵」ト呼次ぐ聲を聞くよりも、衣紋を繕ひ顔色正しく四邊を拂ふ威氣陽々と、元來立派な上下着、見上るばかりの男風體、玄關へいたつて行儀を調へ、御使者の間にて承答、人人感ずる例の辯舌、四方に使して君命をはづかしめずとは、這人をこそいふなるべし。斯くて浪人せし後も好める酒の止事なく、零落困窮の中にても醉はぬ日はなき放蕩に、寒暑をしのぐ手當もなく、詮方なければ實家の兄の芝多氏へ合力を乞ひもし、乞はずも實の兄伊左衞門は仁義の侍、殊には父の遺言を思ひ忘れず、舍弟を愛し不使を加へて幾度か玄藏の貧窮を救ひ遣し、衣

いろは文庫　卷之八

第十五回

人每に一癖はあるものを我にはゆるせ敷島の道と詠ぜし古歌に引競べいふにはあらねど、義黨の中にも、行狀に似合はぬ酒癖の最々可笑癖ありて、後世の奇談となる人あり。其名を仲垣玄藏といふ。元來は秋津嘉家の藩中に芝多伊左衞門と呼ばるゝ人の舍弟にて、芝多の部家住なれば媒人する者ありて、鹽谷の家中仲垣氏の養子となりて其家を繼ぎて相續し、仲垣玄藏と名號判官に仕へしが、平生酒を好みて醉はざる日は一年の中に一日もなき樣なれば、更に武家奉公の役に立つべき人物ならずと、其正體なきを看者は爪はじきをする人もありしが、鹽谷の君をはじめ重役の人々はこれを咎めず、却て玄藏の能ある事を賞したりとぞ。夫を奈何といふに、彼玄藏が酒に醉うて居眠をするか、倒れて寐入込み、前後を忘れ一向人事を覺えざる時に臨みても、用ある節は忽ち覺めて正しく是を勤め、又辯舌さわやかに決斷はやく、他家へ使者の役などを申付けらるゝ時は、一言を承つていとむづかしき口上をも得心し、十方へ使者の役を勤めて滯なく、鎌

る定めとは、後にぞ思ひ合せける。
榮枯盛衰は人の世の常ながら、鹽谷家の滅亡は其主の放蕩悪行の故にあらず。其臣下の不忠なるより發りし事ならず。ひとへに師直の邪意によつて、兩家を亡す基となりしぞ歎かはしき事にあらずや。

り發りし一條。おのれ師直其儘に置くべきものかと、勇士の一念頓て夜討の一番乘、功名ほまれの眞先がけは、此貝七に有りけるとか。斯くて屋敷を引拂ふ時刻に近き事なれば、心のせけども貝七は法の如くに其役向へ屆けて、母の野邊送りをやうやく假にいとなみしが、多くの家中種々に散行く先の心當も、さしかゝりたる難儀の混雜、上を下へとかへしたる騷ぎの立退、家財雜具の持運びに當惑難澁大方ならず。奈何なさんと評議の中に、織部矢兵衛と聽えし老人、兼て萬事に心得ある老練の士にありければ、昨夜の中に工風して近き邊の船を雇ひ、多く集めて御屋敷の裏手につながせ置くのみか、假にしるせし船幟、諸家中達の目印と書顯したるいろは分、其船々へ家財を積せ海手の岸を漕除させ、何の苦もなく數百人が立退際の手まはしよく、外分繕ふ當座の働き、屋敷を請取る立合の諸御役も感心の賞美の事も少からず。別けて織部の家内には綺麗に片付け、床の間に花を挿け又掛物も拙からざるを飾付け、煎茶の道具を供へ置き、菓子箪笥をならべ、檢使の役の休足せらるゝ樣にはからひ、其外諸事の取まはし拔目のあらざる引渡し、さも奥ゆかしき立退の跡を倩々推量れば、寢覺よからぬ師直の行末安穩なるまじと、今浪人する人々の行狀よりぞ思ひ遣る御役人のありけるが、案に不違船印に付いたるいろはの倭假名、倭魂大丈夫の思ひ極めし四十七、いろはの數の合じるし、夜討の模樣をあらはして、自らな

てけり。其方の事も心にかゝり候へど、細やかには申しおきまゐらせず候。母のこゝろを思ひやり候て、御君上さまの御遺恨をよく／＼わきまへ申上げ、覺悟あるべく候。たとひ他の御方々の存念はいかにとも、御手前一人なりと心をつくし可被申候事、草葉の陰にて見もし聞きもし候はんと申殘しけり。

一　織部矢兵衛殿御内方より借置申候曾我物語三冊、紫のふくさに包み袋戸に入有之候。早々御返し御禮たのみ入けり。小袖一ツ帯一筋はりん女へかたみに遣し度候。（りん女は下女の事なるべし）

其身の本意を達し候までは、ずゐぶん堅固にいとひ申さるべく候。かしく。

母

只七どのへ

撰者春水伏申す、此文の文章雅といふべきものにはあらねど、長文ならで意味ふかく、我子に復仇の異見自然と察せられてゆかしく、また文の末へ借本なしたる曾我物語の事なども、心深く行屆れたる文句と察し給へ。

されば只七は君と親とに俄に離れ、愁傷たとへるものもなく、只茫然として在けるが、亦憤然と氣を勵し、斯る有樣も誰がなす業ぞ、是皆高野師直が、君をはづかしめまゐらせたる御無念よ

の朝寐、殊には宵に萬事の指圖手遲れにならぬ樣と教訓あられし覺悟に變り、斯迄心を落着けて寐入り給ひし氣樂さよと、雨戸を繰明け屛風を開き、「サア母人さん、餘り遲くなりますョ」ト言ひつゝ寐たる所を見れば、こはそも如何、蒲團より枕元の疊へ流れて朱に染たる血汐の色。只七は恂りして、「ヤヽヽオヽこれは母人さん、氣がお狂ひ被成のか。何故マア御自害とは情ない事を被成ました」トいふも泪に聲くもり、抱き起せど死してより時刻も移り過しと思はれ、身中に溫氣の所もなく、咽を襟元まで貫きたる兼て用意の九寸五分、手元も狂はず強健の最期、勇士の母とは言ひながら、最口覺しき臨終も、孝子の身には悲しくて、狼狽まはるも無理ならず。兎てもかなはぬ母の亡骸、介抱の詮もあらざれば、是非なく死後の姿を繕ひ、邊を見れば一封に書置としるせし上書を、見るも哀な母の記念と、手に取り封じをひらきつゝ、泪に翳む目を拭ひ、心周章讀見る文言、

一筆申殘しり〻。さても今日殿さまの御身のうへ思ひもよらぬ御事ゆゑ、途方をうしなひ驚き入り申候。馴れさせたまはぬ冥途の御旅、只御一人にて何ほどか御便りなくあらせられ候はんと、死出の山路のおはこびを御察し申上げ候ては、はや惜しからぬ老の身を、せめては御供にしたがひまゐらせ、御話の御伽ともなりり〻はんとおもひ詰め、斯くこそなり果

人の母親お園といふは、鹽谷判官に乳を上たる乳母なりしが、鎌倉の營中にて判官の御身の大變、御切腹の後、翌日は說法洲の御屋敷を召上げらるゝと定りしその前の日の事とかや、判官の奧方美貌御前の御殿にて、鹽谷の君の御幼年の節の事をさへ語り出し、愁傷いはん方もなく、歎き悲しみ狂氣のごとく、奧方はじめ御側の女中も歎に數をそへ、泪に疊も浮くばかり、悲の聲は隣家に聽えて哀の限を盡せしが、餘りにお園の狂ひまはれば、美貌御前も氣の毒に思召してや、御歎を止められ、其子只七を呼出しお園を介抱被仰付、なだめて其家へ歸されしが、只七は母の風情を氣遣ひ、萬一亂心もなしたるかと案じて、家に伴ひ歸り種々心を慰れば、思ひの外に氣も鎭りてか、例に替らず機嫌よく、其夜は御屋敷に住居し名殘なりとて、母子盃を汲かはし、晝のなげきに引替へて笑貌を催し、只七には翌日立退の用意など細やかに相談し、頓て臥戸に入りけるが、其翌朝は一家中はや起出て家財を片付け、各屋敷を引拂ふ支度も既に調ふ頃まで、お園は例の氣性に似合はず、さもゆるゝと寐入りしか、さらに目覺し樣子もなく、寐間の方の靜なれば、只七は堪へかね、母の臥床に走り入り、

只「サア、モシ母人さん、モウお起き被成ませんか。サア遲くなりました。御家中は大略立退く支度が出來ました」ト枕の側へ近付きて、言へども何の返答なければ驚き呆れ、常に似合はぬ母

に至るを待ちて智伯の敵を討んと謀る。然れども業ならずして顯れ捕へられたり。趙襄子仁心を以て其忠義を感じ、豫讓の罪を許し他國へ除けたりしが、豫讓は猶心を屈せず、身に漆を塗髭を切拂ひ眉毛を拔捨て、癩病人と姿を省し、乞食の體をして晋陽縣といふ所の橋の下に伏隱れ、趙襄子の他所へ出るを伺ひ待しが、亦見顯はされて討事あたはず。其時趙襄子は豫讓に向ひ、汝是程迄に身を苦しめ、智伯の爲に此身を討取忠を盡さんとする事適なれども、其以前汝が古主范子をば智伯が亡せしにあらざるか。其時は主の仇なる智伯を恨まず、却て敵の智伯に從ひ、智伯の爲には幾度も此身を仇敵と付狙ふは、其故あるかと難問へば、豫讓答へていふ、先主范子は我を平士用ひ、智伯は我を國士用ひられたり。夫婦人は己を愛する人の爲に化粧、士は己を知人の爲に志を盡すといへり。此故に我智伯の爲には身命を捨て恩を報はんと思ふとありければ、趙襄子豫讓に衣服を脱ぎて與へ、豫讓はその衣服を劍にて貫き破り、仇を討の思を遂げたりといふ。如斯なれば晋の豫讓の忠義は、主人の賜物の高下を算勘て相場次第の奉公、いはゞ金づくで忠義をするといふものなり。君は君の徳をなしたまはずとも、臣は臣の寔を盡さずはあるべからず。豈日本の大星氏と豫讓の忠義と競べて同じ事とすべきや。大星氏はさておきて、四十餘人の義士殿原の忠義も、豫讓のはるかに上なり。且說義黨の其中に立林貝七と聞えたる

意深き佐藤遠州君は、彼騒動の以前十二日の夜に入り、判官の御許へ見舞として御出遊ばし、判官御大切の御役に氣欝も在るべし、その氣を慰め申したく推參せりと被仰て、御土産の品をもたせられければ、判官にも親友の御實意を悦びたまひて、遠州の君に御酒を進められ、互に御睦しき中なりければ、隔なくかたらひなぐさみ興を催したまひしが、其折を以て遠州君は判官の御側に人なきを窺はれ、彼師直の無禮ありし度毎の樣子を察し在るよし言出でられ、しみ〴〵と御異見に及ばれしが、其一條を御次の間にて聞傳へたる神崎與五郎、さては主君の御大事萬一君の御心に、堪へ難くも思召す事にてあらば、君の手を下したまはぬ其以前に、我師直を打捨て、切死するか腹を切るかなさば、主君の家國にかゝはる難はなかるべきかと、然は思へども容易には計ひ難く控へしとぞ。

第十四回

漢土晋の豫讓は范氏といふ王の臣下なり。爰に智伯といふ人ありて范氏を亡す。此節は豫讓智伯に從ひ仕へしが、其後趙襄子といへる人、智伯を亡して王となる。豫讓はこゝに至つて義心を勵し、名を改めて所爲と咎を蒙り科人となり、厠を不淨掃する賤き役を勤めて、趙襄子が雪隱

ずして大軍を隨へ、曹操の百萬騎に的當せんと決定せり。まして師直の如き小人、右近を慕ひし愚痴の妬、遺恨を深く判官を憎みし事、實に是なるべしと察せらる。

むかしより堪忍の二字を教訓の專一と教へ、短慮を禁むること多く、尤道理至極の論ながら、又歷々の武家の御身には、只堪忍とのみは思召れぬ事もありぬべし。されば近き頃道二と呼ばるゝ心學者を或諸侯の召呼び給ひて、心學を講じさせられしが、其節道二は鹽谷氏の短慮を引きて講じられしかば、其館の主君立上りて、道二翁の面を扇子にて手強く打給ふ。道二は其頃人々の敬ふ心學者なりければ、自然と心に威光もある樣に思ひ居たる事なれば、大名の主君の所爲といへども、痛みと不法を少し心中に憤る氣色ありけり。其節主君は正然となり給ひ、

君「コリヤ道二、其方は長袖同樣の者ゆゑ、諸侯の側近く出る事をも免さるゝは幸と申すものぢや。その賤しい身でさへ、此方が面を打てば心にいかり氣色を損じ、我を無禮なりと思ふではないか。コレ鹽谷判官は由緒正しき大名だは。師直の惡言無禮、其座に切捨てんといたしたは尤の事ではないか」と御叱りの上、道二翁を其儘しりぞけ給ひしとぞ。實にも貴人高位の尊愚善惡を評せん事は、後世賤しき筆者の及ぶべき事にはあらじ。然れば鹽谷判官へ師直の過言失禮は、他人の見聞にも堪へ忍び難き旨趣に察せられたる所爲と推量られたり。既に判官の御懇

もなりますまいのに」

周「イエ、そりやァ然うだが、其娘は當時ぢやァ此國の先君公の夫人に姉の方が成つて居られて、妹は拙者が妻でございます。貴君は御存じもあるまいが、曹操は二女を執心ならば此故を知つて居やせう。それぢやァ拙者を亡して、先代君公討虜將軍の夫人と、私の女房を婬樂ものにせうといふ存心で居ませう。憎い心根の曲者だ。」

孔「エ、其娘達は當時は然うでございますか。それとも知らず不躾千萬なことを申しました。眞平御免被成、眞に麁忽な事を申してお氣の毒な。」

周「ナニ〱、貴君に立腹は仕ませんが、曹操めが餘りな不法を思ひ立ちやァがる。モウ合點ならねへ。此國へ攻めかよつて見やァがれ、來る軍兵を皆殺しにしてくれないければ濟まねへ。孔明軍師も何卒軍義の助言をしてお吳被成」ト是より吳の國の大將品張昭顧雍をはじめとし、降參を進めし者を叱り付け、程普、韓當、黃蓋などといふ英雄を勵まし、軍兵を調へ終に曹操と戰ひしとぞ。

撰者春水曰、夫周瑜は江東六郡八十一州の大都督にて、孔明にも劣らざる軍師なれども、愛念に依つては忽ち憤を發し、妻女の美麗を他人の犯さんと言ふを聽きしより、死を怖れ

銅雀臺に置いて、右と左に抱いて樂度と心がけて居ると實事に聽きやした。其故だから二女を尋ねて、其娘の親に金を遣つて買求めて、曹操にお遣り被成ば、此度の軍は止められますぜ。」

周「ヘン、僞言を吐きなせへ。それア他人の噂にするか知らないが、曹操がよもや其樣な氣でもありますまい。それとも何ぞ證據がありやすか。」

孔「ある所か、既に曹子建といふ者が銅雀臺の賦をこしらへたのを衆人が謠ひやす。」

周「ハア然うかネ。其文章を貴君ごぞんじかへ。」

孔「エヽモウ數囘も聽いたから、暗記で知つて居やす」ト是より孔明は、彼喬女を樂しむ文句を僞言に作つて周瑜に聞せる。其節周瑜は目をいからして、曹操の陣の方を白眼て齒をかみながら溜息を吐き、

周「ウヌ曹操、大膽事を言やァがる。即時に見やァがれ、其方が首を切つて思ひ知らせるぞ、曹賊めが。」

孔「モシ〱、其樣に腹をお立被成ないでも能ぢやァございませんか。昔吳越の軍の時代に、范蠡が美女の西施を越王から吳王の夫差の許へ送らせて、終には夫差を亡した利害と同じ事でございます。然うして見りやァ、喬氏の娘を曹操の妾に此國から出したといつて、其樣に恥に

も甚恐を生じ居れば、奈何なさんと迷ひ苦しむ時、孔明は呉の國の軍勢を以て曹操を破り、玄德の爲になすべしと呉の軍師周瑜を勵ます。其辯舌即座の僞計を演て、銅雀臺の賦をつらねて其心を決定させたり。

孔「イヤモシ、然様ならば斯うすると宜うございますネ。曹操に降參するも否なり、軍をしては味方が小勢で覺束ないと思召すならば、兩義を止めて、曹操を引返して仕舞せる手段がありやす。今度曹操が此國を攻めやうといふ望の極意は、只二人の者が欲しいから發つたのだから、夫を遣ると直に軍を止して、本國へ歸陣には相違ないから、早くその爲要二人を曹操の所へお遣り被成がいゝぢやァ御座いませんか。」

周「二人とは何者の事でございやせうネ。何様も不解事だ。」

孔「ハテネ、まだ少しも御存じなしかへ。近頃曹操は漳河といふ所に銅雀臺といふ樓を造立て、美女をあつめ酒宴を催す樂を仕様といふ了簡ださうサ。其美女にも好みがありやす。私やァ其美女を未知が、當時何でも四百餘州第一番の美女、沈魚落雁閉月羞花と賞めるのは呉の國に居る大喬小喬といふ姉妹の娘だと噂をしやす。其故だから其娘達を取らうといふ存心で、此度攻めるといひやすから、マァ曹操が大望といふは、一ツには帝王になり、二ツには呉の國の二喬女を彼

交り、また情死する類も少からず。されば西鶴といふ戯作者の著したる、男色大鑑と外題し本にもくはしく記したり。爰に鹽谷判官の寵愛深き小性に、比々谷右近といふ古今無類の美男ありて、これを懸相せざる者はなしといふ噂なりしが、彼高師直是に戀慕して、判官へ貰度由を言入れしが、鹽谷の家に由緒の者にて他へ出し難き家來なりと答へられしゆゑ、是非なく其儘に過せし後に、此右近を執事の家に送りしが、尤止事を不得事にて判官も物憂く思はれたれども、時の勢に勝ちがたく右近を他に遣したるなれども、師直は其身を麁略に斷り大家へは容易遣しながら、他家に渡し難き家來の名跡なりと言ひたるを腹立ち、第一には右近の男色を思ひ捨てがたく、殊に右近が師直に出會し時、鹽谷家へ其身を貰度と言入れられたる師直の望を深くも悦び、恩に着る趣、緣なかりしを恨む樣に、情をふくみて會釋せしかば、彌々判官を恨み憎み妬み心の募りて、終に兩家の滅亡の元となりしといへり。此段を人情に綴るときはくだ〱しければ、只其由を大略にしるすのみ。但左に引註する故事に依つて、愛念の怒心には智勇の大將も明察をくらまさるゝものと察したまへ。

昔漢土三國と別れ爭ふ節、呉の國の孫堅と魏の曹操と戰ふ折節、呉の軍師周瑜の心いまだ決定せず。殊に曹操は玄徳を打破り追崩したる勢、八十三萬餘人の大軍と聞く呉の軍兵ど

いろは文庫　卷之七

第十三回

諸說を閲して復仇の初發を探るに、一休の筆の一軸照月の二字古歌の論より、師直深く鹽谷を憎むと言ひ、又判官の奧方美貌御前のいまだ鹽谷判官に緣付きたまはぬ以前に、其才色を愛して子息の嫁となさんと思ひ込み、同性の緣家なれば判官を媒人と賴みし所、かへつて其返事を師直に不爲、其身の內室とせられしを以て遺恨となし、是より判官に恥を與へんとはなせしといふ。決して然にあるまじ。照月の意の評論なんどは、其職の師直なれば判官に劣るべしとも思はれず。美貌御前の御事は元來判官の御內室と定り、御歲十一歲にて判官公の御家へ被爲入しと正傳にあれば、師直これを子息の嫁に貰はれ度言出しとは、武家緣談の法に疎き僻論にて少しも道理に不叶。然らば何故諸侯多き中にして鹽谷氏を師直の憎しぞ。是其頃の風儀男色の遺恨より發るといふ、然もありしならんか。凡其時代は男色の流行て、武家は更なり町家まで男色を好む者多く、娘よりは少年が愛せられて兄弟品と唱びならはし、生死を約定夫婦の如く

巻にて他を詮鑿なすに不及。嗚呼蓮地菴の丹誠いたれるかなと、老實になつて巻端に筆を採る。

爲永ひいきの連部

方壺堂主人玉枝

いろは文庫第三編序

難波津の宇多は手習はじめに教へしとなん。當時は絕えてかきもならはさず、弘法大師のいろはにほへとのうたをもて、幼兒まなびのはじめとはすなりけるを、狂訓亭の主人は、兒女子の物の本をよみならはすはじめにとおもひ起してや、いろはの假名の反古を集めて、爲永文庫の中に有りしを撰み出し、四十七忠臣孝子を列傳し、俚言ながらも伽艸の草紙のうちには、その冠たる教訓美談いと多かり。さればわづかの小册も、數を重ねていく卷か荷うて重き大部となりなん。しかはあれども、面白く綴りし筆意を愛で悅ぶ心となれば、寶の文庫、おもきはいとはじ。寶井の口ずさみに、

我ものと思へば輕し傘の雪

と吟ぜし昔もおもひ合する忠義の志士が、命を輕んじ義を重く、千辛萬苦の銘々傳、諸家の祕錄を寫しとゞめてもらす事なき數十ヶ條、是この文庫をもとめ給はゞ、古今義士傳の總

是より半之丞は養母お艶を別けて敬ひ、實意を盡していたはりしが、お艶はそれを嬉しいとおもふにつけても、戀情のいよ〳〵ます〳〵募りしが、はてはひがみし心より半之丞の心を憎み、まはり遠きことをいひて上手に我を嫌ひしならん、他に深くも契りたる女のあるゆゑ、一生涯女房も持つまじなどとたばかりしに相違なしと、思ふも女の無理ならず、半之丞は多分御殿にのみ宿りて宅へ歸らざりしかば、お艶は不良心より終に半左衛門の歸國にいたりて、いろ〳〵讒言しければ、半左衛門は以の外に立腹して、養子半之丞の不孝を書面になし、訴へんと計りけるを、鹽谷殿にははやくも其沙汰を傳へ聞きて、半之丞の難を哀れみ、ひそかに半之丞へ御納戸金を給り、御殿より亡命をさせて其災を除し被下ける。こゝにおいて半之丞も舊恩を忘れ難く、此度の列に加はらんとは願ひしとぞ。

えん「イヽエ、お前が其氣なら、畜生道へ生ながら、落ちてゆかうとくるしみが、此身ひとつにかゝらうとも、チットもいとはぬ私が心。どうぞかなへておくれなねへ」ト恥も禮義もわすれてしたひ寄るのを押へだて、

半「マア〳〵おまち被成まし。成程あなたと私は心の合つた事ゆゑに、畜生道も因果づくとあきらめて、たがひの念もはらしませうが、義理ある親の半左衞門さま、また第一には殿さまの御ひいき厚き御高恩。お主と養父に恥をかゝせ、また私は母といふお前さまを惡道へ落し申さん大罪人、お主へ不忠親への不孝、いとしほがつて被下ます貴母へ始終なげきをかけ、何執心が屆きませう。死んでも一ツ蓮には居られぬばかりか、八方の罪を此身に引請けて地獄の責を私一人、死んでも貴母の側へはよられぬ縁の親子の名。いよ〳〵あなたが眞實にかはいゝと思召して被下ますなら、何卒此世は辛抱して、未來とやらとは昔からよくいふ事でございますが、それこそ二人の一念で屹度夫婦になられませう。其代りに私は此世で一生女房を持たずに死んで仕まひます。それが貴母へ心中立。左樣思召して被下ましと申上げます半之丞の心の中を、不便だとお察し被成て被下まし」ト言ひつゝお艶の惚々せし顏を、泪の眼にながめて頓て其座をはづしけり。

心の曲りし不義の色情。半之丞は呆れはて、恥しめんと思ひしが、義理ある母に面目を失はせんもいかゞなり、かゝる心のあるゆゑにか、いと氣むづかしき養父の無理、此身の迷惑する節は、何度其座をとり繕ひ、朝夕ともに懇に世話をせられし恩もありと氣をとり直して、お艶の側にどつかと坐して溜息つき、

半「モシ母人さま、貴母はお氣がちがひましたか、と申す所を申しますまい。其うつくしいお姿を誰も噂に賞めそやして、似合はぬ縁を結んで居る、かはいさうだの惜しいのと、他人の目にもとまる貴母、それに年中私はお側に居つて、明暮にやさしいお世話になりますもの、何おろそかにぞんじませう。勿體ないがおまへさんの樣に、やさしい美しい女房をもつてくらしたら、男と生れた甲斐もあると思ふに付て、折節は非道な愚痴も我ながら口へ出されぬ其苦しさ。

えん「エヽ嬉しい。其樣ならお前も此私を」トすがり付かんとする所を半之丞は飛びしさり、貴母と母子でないならばと胸に出る日もいく度か。」

半「サア、何の因果か私も貴母も其氣が合ふといふは、畜生道へ墮落した宿業にてもあらうかと。」

お思ひな」ト縋付いたる姫蔦の、やさしさ風情は看えながら、

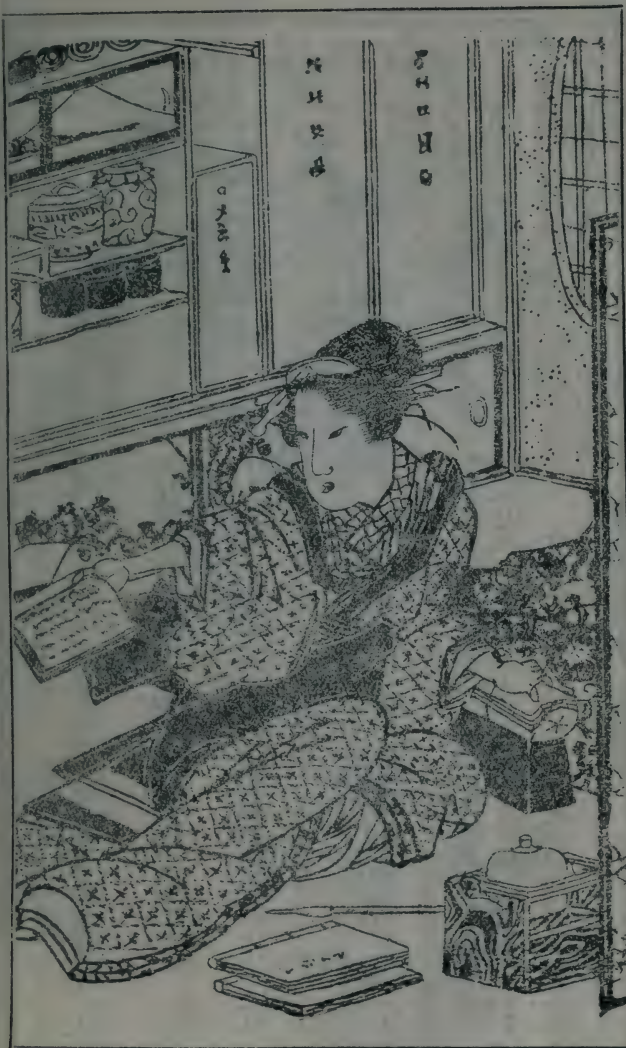
えん「オヤそれぢやァ私の様にわるい女に生れたのが仕合かねへ。それだけれども私やァ娘子どもの歳のいかない時分から左様思つたは、どうぞして他人に思ひつかれる美麗女になりたいものだ、左様すると自分ばつかり氣をもまないで、男の方から思はれてさぞ樂だらうと思ふヨ。」

半「ヘイ、イエ母人さんも隨分人並にすぐれて被爲入から。」

えん「オヤ氣はづかしい何様せうノウ」ト炬燵へ顔を横に押付け、半之丞の顔を見て嬉しさうに莞爾と笑ふ顔の美しさ、歳は三十に近けれども、化粧にばかり身を入れてみがき上げたる若姿、殊に心のある故に、衣類も着改へて帶さへもしやら解にくき居住、膝に紅湯具を白雪の肌にちらめく婀娜な風俗、男の心おのづから善惡もわかぬ事なるべきを、半之丞は見もやらず、

半「ドレ、私は向島氏まで用事がございました。また御城下に調度物がございますから、一寸いつて參じます」ト立つをお艶はうろたへて、炬燵より手をいだし、半之丞の裾をとらへ、

えん「アレマァお待ちョ、憎らしい。他の氣も知らないで其様に迯げずとよいはネ。そして此寒いのに外へ出ずと、チット宅にお在な。諸方の娘や御殿の女中衆が、お前に惚れて氣をもむといふ噂だから、外へ出るのが面白からうけれど、宅にも氣をもむ者があるから、可哀さうだと

杉谷が
塩谷宮部を

ねへ」

半「イエモウ冷えるの寒いのと申す様な事ではございません、しんしんと身にしみます。大方鎌倉なぞは寒さで凌ぎにくうございませう。」

えん「鎌倉はどうでもよいョ。おまへはさぞ寒からうのに、何をしておいでだ」

半「エヽナニ、太平記を借りましたから讀んで居りました」

えん「オヤ私も此間見様と思つて借りたけれども、堅いことばかりの様だから止して、これを借りたョ。おまへもちつとこれをお見なねへ」

半「ハイ下學集でございますか」

えん「アヽ、此中の玉藻前の所を御覧な。寔に面白いョ。私やア玉藻前の半分他人に思はれる様な女になりたいねへ。さぞ嬉しからうと思ふは」

半「イヽエ、しかし周の世を亂したり、天竺をさわがしたり、また日本を魔界に仕様なんぞといふ女があつてはなりません。それでさへはゞかりながら女中といふものは、兎角男の心を亂しますものだから、佛もこれをいましめて、むづかしく申しました事がございます。殊に美しい女は猶のこと罪がふかいと申します」

五十餘歳にて三十路にたらぬ後妻をもち、半之丞は彼養母と同年ぐらゐの事なりしが、年よりも遙に若き容體にて、殊に稀代の美男なり。されば主君のめがねによつて、別段近習役に召出されしが、いかなる前世の宿業にや、迷惑なる事の出來して、止事を得ず亡命をなしたるそのゆゑは、養母お艷といへる者、生質の婬女にて夫半左衛門老人なるを嫌ひ、養子半之丞の美男にしてものやさしきに心をうつして、折々これをそゝのかせども、養子半之丞は其志鐵石のごとく、元來篤實の了簡から母のやさしき言葉をかけるは、隔し中を睦しくくらさんとての慈悲なるべしと思へば、いよ〳〵母親を朝夕大事に孝行せり。さて或時の事なりしが、半左衛門は鎌倉へ主用にて下り、母と半之丞のみ家に在り。時しも冬の半旬にて寒さも例より増りしが、お艷は炬燵にあたり居て、獨り何やら物の本をくりひろげてありけるが、緣側へ出て口そゝぎ、亂れぬ髮を撫でながら衣紋を直し、元の所へ入りながら、

えん「半之丞、ちよつと來ておくれ、半之丞、オヤお出でないかへ」トいふ聲聞付け、次の間より入來り、[illegible]

半「へイ、お呼びなさいましたか」ト膝に手を置きかしこまれば、お艷は莞爾笑顔して、

えん「アヽ何も用はないが、餘り淋しいからお前を呼んだのサ。寔にマア寒い事ではないか

つとながめて泣きいだす、聲も哀をそへまさる、涙の雨の時雨月、いとしめやかに更けわたる、鐘も淋しきもの思ひ、一言いひてはむせかへり、二言いうては幼兒を、なかせじものといたはるも、ねんねころの子もり唄、山をこえて里へとは、夫が旅へ立つといふ、きえんも跡しとかこちつゝ、はては親子が川の字に、ならぶ枕の終とは、後にぞ思ひ知られける。

第十二回

人の心の種々なる、安曾貝夫婦のごとき忠貞のいさをしある、故人今人類なきいまだ終をこゝに不說、後輯に至りていよいよ心烈の感情を盡すべし。同じ忠義の其中に、杉谷半之丞といふ人あり。仇討の折節には行年四十四歳なりしが、此人は鹽谷家を浪人して町家に住事十年の餘なり。されども古主の大變を聞くより、忽ち鎌倉の家財雜具を家主に讓り、主人の國元へ走登り元老大星由良之助に對面して、籠城するとも仇を討つとも、其下知に隨はんと願ひけり。扨此杉谷半之丞政利が斯る忠義の人なるに、何ゆゑ浪人してありしぞと詳しき譯を尋れば、主君の慈仁をかうむりて不首尾にあらでひそやかに、鹽谷家を立退き鎌倉に住居しが、その始を問へば他家の家中の者にして、鹽谷の家中杉谷半左衛門といふ者の方へ養子に來りしが、養父は

別れておくんなさいましな。今のお前の言樣では、田舍へ往くとお言だが、夫は私を振捨てる切端がないから、國へゆくと言つて、一生是限で最かまはない心におなりだがら、手切の心と磯坊の養ひ料のお前の情、捨てる女へ十分の手當をしておくんなさるのだから、恨みる事もないけれど、なまなか根黑のお茶漬屋でお前さんに逢はないと、此悲もあるまいのに、邪見にでもしておくれなら思ひ切らるゝ事もございませうが、おろかな者と思召して朝夕何かをやさしくして、たらはぬ事や片言をいふのを一々をしへられ、はづかしいのと嬉しいが、積り〳〵て此子まで、出來てはどうか放れ樣と、思ふお前を引留める、鎹とやらにもならうかと、氣を丈夫にして居たものを、お前さんにお別れ申してどうして生きて居られませう。とても別れるお氣ならば、私も小兒もおまへの手で殺して置いてお出でなさいョ」といふも泪のくもり聲、まだ年ゆかね女氣に、十郎左衞門の心を知らず、おろかなゆゑに捨てらるゝと、思ふ恨を尤と聞いても、さすが明されぬ大事の本望、今暫時不明別れんと胸を苦しめ、實にもいさぎよき勇士の本心、恩愛に主君の高恩はかへられず。放れともない妻や子を捨て、冥土へ旅立ぞといふもいはれぬ一大事、こらへて居れど繰返す、お住の歎に安曾貝は腸をたつ苦しさに、齒を喰ひしばる男泣。親子の別れと辨へなき、小兒も蟲の知らせやら、乳房をはなして母の顔、ぢ

ることもねへ」
すみ「オヤ、それぢやァ私も小兒も連れて往つておくんなさいましなねへ」
十「どうして其樣な手輕いことが出來るものか。五十里や百里の道ではなし、事によれば生きては歸られない遠い國だものヲ。それよりかお前は小兒と二人で待つて居てくれるがいゝ。萬一間違つて歸るのが遲くなるといつたとて、半年や一年でこまるといふ樣なこともしねへから」ト兼てたくはへ置きたりし金子の外に、大星が手當にわたせし用意金を合せて凡三十兩、別に當座の食料も二タ月三月の分量を幷べ、「サア、これほどわたして置かう。隨分おれが居ないでも、一年位はくらして居られ樣ではないか」トいはれてお住は其金を見向もやらず、夫に抱せし小兒を抱きとり、
すみ「ノウ磯坊ヤ、コレ其樣に寢んねして居ないで、目を覺して親父さんに、よウくおいとまごひをしな。これさ小兒や目を覺しなヨ」トいひながら寢りし小兒の顏の上に、泪の雫はらはら、むせかへりつゝ抱きしめ歎けば、母の聲聞付け、泣出す我子に乳房をふくめ、「モシお前さん、マァ此子が可哀さうぢやァないかねへ。其初から私をば、一生女房に持つてとは思つておくれではなからうけれど、せめて此子がおまへの顏を覺えるまで同居にくらして、夫から離

翌年の四月めでたく安産して、しかも男子なりければ、お住はこれをよろこびて、夫の心も自然血筋の愛に引されて、末の松山浪こさぬ、夫婦の中とならんかと、思ふ安堵に十郎も、しばらく其儘睦しく、其年の十月末まで何事もいはで過せしが、いかになして其期にいたらば我に未練の心も發り、お住も當惑なすには極る。さらば其以前にうす〳〵も別れておもひ切せんと工風して、ある時お住に向つて言ふやう、

十「エ、コウお住、此間からはなして置かうと思つたけれどもノ」

すみ「オヤ何をエ。」

十「ナニ他ぢやァねへが、在所へ往つて來ねへければならねへから、來月は立つて往くがノ」トいはれてびつくり、夫の貌ながめて忽ち泪をうかめ、

すみ「坊ヤ、マアチツト親父さんの所へお出で」トいだきし小兒を十郎にわたし、「アレサ又其樣なことを言出して、私に氣をもませておくんなさいますなヨ」ト紛らかさんと言消すを、安倍は念を入れて、

十「イヤお住、その樣に言消してはいけねへ。實に來月は旅立つから、かならず愚痴に腹を立たないがいゝぜ。火急に言つたらば、びつくりするだらうと思つて話して置くのに、茶にして居

になさらずに居ておくんなさいなねへ」トいはれて思はず十郎も、堪へかねてやはら〳〵と、落つる泪を袖に隱して、

十「ノウお住、おいらが今無言て居たのを、他に心があつて、何ぞ考へてでも居るのかとおもつて左樣いふのだらうが、おいらの心持は決して左樣ではないから、わるく思ひなさんな。ナニおいらだといつても、はやく死度ことはないが、お前に親類や兄弟もないものだから、萬一おいらが居なくなつても、急にこまらねへ樣にしてやりたいと苦勞をする中で、小兒でも出來た日にはさぞおめへがこまるだらうと思つて、考へごともしたのだヨ。まだ種々と話して置きたい事もあるけれど、マア今急に言はずともよし、又後でもわかる事だから、たとひおいらの身に何樣なことがあつても、約束ごとだとあきらめてくんなヨ。」

兼て始終を夫となく、心得させて置かんとする、胸のくるしさはかなさも、忠義にいたむる心にて、迷の道に入りながら、溺れて約にそむかじと、鐵石心のけなげなる。そも〳〵十郎左衛門は今年二十四歳なり。彼小山田の亂れたる風情にくらべて、戀情を捨つるの節を感ずべし。又其心は男子にもまさるお住の才智あれども、貧家に生立少女なれば、命に及ぶの節操はなしかねることとなるべきを、其いさぎよき終の勇氣、四十餘人の義士にまさる。斯くて月日を過す中に、

は退れぬ覺悟。末長からぬ契とも知らで、一向したひたる深き情に引されて、如斯にかたらひしは我一生のあやまりと、後悔詮なきことながら、せめて我亡後々にも再緣なして、不自由にあらぬ樣にはしてとらせんと思ひしものを、我種を産みも出しなば、いかばかり始終お住の身の迷惑ならん。大事をかゝへし身をもつて、他の娘に疵を付け、跡に難儀を殘すこと、實意の情が後々は、不實の所爲となりゆくらん。なま中かくてあらんより、敵討の念願を明して今より離別をなし、思ひ切らせて置くべきかと、大丈夫なる安曾貝も、さすが恩愛の綱にからまれ、千々に心を惱すとも、知らぬお住はいとゞしく悲しさ餘るもの思ひ、貧しき此身の難澁を救うてくれし情はあれど、たらはぬ者を末始終女房にもつて暮さんとは、思はぬ中へ妊身になりしを聞いて當惑するゆゑに、ものさへいはぬ事ならんと、思ひ過して泪の貌を膝におし付け、歎に果しもなかりしが、

すみ「十さん、お前さん私が姙身になつたらうかと申したのが、さぞお否だらうけれども、まだどうだか知れないのだから、其樣に氣になさらずとよいはネ。餘りお前さんが子持になつて外聞がわるいとお思ひならば、もう少し月が重つてから何樣でもしてしまふから、左樣思つて下さいましな。其時になれば私は死んでもかまはないヨ。それだからマア邪魔なことだと氣

十「オヤ妙なことをいふノウ。今の身がいよ〳〵左樣だとは何のことだ」ト聞れて貌を赤らめて、恥しさうにさしうつむく。「なぜ、はなしにくい事があるのかエ。コレサ隱さずに言ひなな。」

すみ「ナアニネ、まだ何だか知れやしませんョ。」

十「なんだか知れねへとは何のことだ。」

すみ「アノウ、先月からネ、經水を看ませんからサ。」

十「エ、妊身になつたのか。そりや大變だノウ」トいはれてお住は氣の毒になり、

すみ「實にそれだから私アどうしやうかと、苦勞になつてなりませんは。元をいへば私の方から無理にお願ひ申して、種々の事をお前さんにお世話をかけて、また斯うして夫婦になるより早く赤兒でも出來たらば、さぞお前さんがお否だらうと思ふと、お氣の毒でなりませんョ。もし左樣に違なくつても、何卒堪忍しておくんなさいましョ」ト男の心をはかりかね、やさしき樣でも何處やらに、堅い行儀の武家育、野暮にはあらぬ十郎をも、惚れた娘の心からは、大事をとつて思ふ程、口にいはれぬかこち草、露置きそへて安曾貝の、膝にもたるゝ恨み貌。お住の心と十郎の所存と違ふものおもひ、今にも時節が來るならば、打死なすか切腹か、二ツに一ツ

いろは文庫　卷之六

第十一回

すみ「十さん、お前さん今日も本庄へお出で被成のかへ。」

十「左樣ヨ、毎日遊んで居ても世間がわりいから、何ぞ商賣でもしねへぢやァ終がをさまらねへ。そしておいらが頓死でもして見ねへな、其日からおめへが困るはナ。そりやァ日がらが立てば又亭主も出來るからいゝが、其當座直にまごつくと格好がわりいから、用心をして置いてやらねへとかはいさうだ。」

すみ「オヤ、なぜ其樣氣にかゝることをお言ひ被成んだヱ。今ッから死ぬの生きるのといふ樣な、心細い事をお言ひでないよ。知つてお出でのとほり私の親身といつては、金澤とやらに伯母さんがあるばかりで、それも久しく便がないから、生きて居るか何だか知れやァしませんヨ。それだから私は今の身がいよ〳〵左樣だと猶心細うございますハ」ト少し眼をうるませて泣聲の樣になる。

ざやかなる生質は、ともし火のかげにも透きとほる、肌は花にも増るべし。
春情の少女、好男の慈仁、此末いかなる說をかなす。義を重じ節を貞すの美談、次の卷
をひらきて知るべしといふ。

れば思へば頼母しく、しがみ付くほど惚々と、なれどもさすが恥しく、眼にはそれぞと知らせても、言ひそゝくれてもつれ髪、亂れし鬢をかき上ぐる、櫛さへ憂をつけかねて、いすかの嘴と喰違ふ、心の願絶え難く、

すみ「アノウ、左樣申しても兎てもお聞き被成ては被下ますまいが、どうぞ後生だと思召してかなへて被下ましなねへ。」

十「かなへてとはそりや何を。」

すみ「アレ此間根黑の茶屋で別れ樣と被仰つたのを、お願ひ申して御同伴に參つた程のお願を。」

十「サア夫だから此樣に、及ばずながらも御相談相手になつて上げたからいゝぢやァないか。」

すみ「それでも此儘おわかれ申すと、お世話になつたお禮も出來ず。お否でもお側に居りまして、私の心のおよぶだけ、命にかけて御恩がへし、どうぞ左樣被成てくださいまし」ト言ひつゝ貌をあからめて、男の方へ脊中を向け、雪より白き衿元を見せてうつむく愛らしさ。居住坐崩す膝の上に、おく手を逆に組みながら、向へそらす細き指、爪紅させしにあらねども、そのあ

すみ「放してころして被下まし、どうも生きては居られません」といふ中刄物をとり納め、
十「氣が違つたかお住さん、いかに年のゆかぬ娘心ぢやといつて、餘りな仕方。思ひがけない途中の難儀を、見かねてさし出た此方へ、かさなる世話もふしぎの因緣、元は鹽谷の御家來と聞いてさすがに捨てられず」
すみ「そんなら貴君も鹽谷さまの御家中で。」
十「此度不慮の大變に、在鎌倉も國元も皆ちり〴〵の口惜しさ、同じ御家を浪人した人と聞いては、時代が過ぎても主君の御名の出ることなり、また一ツには身に引きくらべて合力して上げた私の寸志。」
すみ「アレ勿體ない、どうして其樣なことを存じますものか。私が死なうと存じつめたのは、お前さんが明朝はもう此家には居ないと被仰るから、お別れ申すが悲しいゆゑ」
十「イヤ、そりやァ無理な了簡だ。元來兄弟か夫婦ぢやァあるまいし、ふとした事から此樣に心易くするさへ世間へ對して濟まぬ仕儀、殊におまへは小兒の樣に思つて、唯心細いから私を長く留めたからうが、何とか他が思ふと始終お前の爲にもならず。少しも早く私は立退いて、お前は後の相談を誰ぞに賴んでしなさるがいゝではないか」トいふ貌お住はしみ〴〵と、見

十「これはしたりお住さん、何樣した、あんばいでもわるいのか。又返らぬ事を思ひ出して泣くのかへ。左樣泣いたとてかへらぬわけだ。これからはお前が身を達者にもつて、親達の跡立てて上げるのが第一の孝行だ。其樣に歎いて大病にでもなるといけないから、もう少し氣をとり直して、うき〳〵するがいゝではないか。」

すみ「ハイありがたうぞんじますが、どうで薄命な私でございますから、いつそ死んだがましでございます。」

十「なぜ其樣な氣の短いことをいふのだへ。今までは仕合がわるくとも、これからは何樣いいことが出來て、それこそ玉の輿に乘られるのは女の德、其美しい容儀で、ナニくよ〳〵と思ひ被成ことはねへ。」

すみ「イヽエ、たとひ出世をいたすことが此するゐにあれぱと申して、一旦心に思ひつめたお方に別れたくらゐならば、死ぬより他はございませぬ。ならうことなら貴君のお手にかゝつて死にたうござります」トいひつゝ立つて泣貌を水にて洗ふ下水上、口をそゝぎて元の座へ、來るより早く安會貝の、脇差とつて我とわが、咽を突かんとする手をとらへ、

十「アヽめつさうなことを。何とするのだ。」

聞傳へ、便なきお住が爲に何となく安會貝をとゞめしかば、瓜田の沓李下の冠のたとへをば辨へざるにあらざれど、餘儀なく三四日を此家に過しつゝ、第五日目のことなりけん、明朝は本庄へおもむく由を告げて、猶萬事親切にさしづなしけるが、お住は其夜初夜過ぎて、世間も常より物しづかに、裏家といへど空地の多く、草生茂る窓の元に、一ツ二ツ四ツ飛ぶ螢、亡魂かとも思ひ遣り、世になき兩親昨日今日わかれし祖父のなつかしく、又其身をもつく〴〵と案じ煩ふ此末は、誰にたよりて世をわたらん、何となしてか日をおくらんと、胸をいためて歎きつゝ、心に思ふ其人は、親身もおよばぬ實情の世話をなしてはくれながら、いさゝかも禮を失はず、さし向にて三夜さ程同じ蚊帳に臥しながら、只一言のたはむれもいはぬ男の行儀、恥ぢていひよるよすがもあらず。今宵いはねば明朝ははや、別れて再度逢ふことも、ならぬお方を近所では、歎の中の悦ぢやの、羨しいの、似合ひたる夫婦中のと、嬉しい事をいはれて悲しいはづかしい。くはしい道理を知らぬ人は、緣が出來ても此私が拙いゆゑに、嫌れて出て往かれたといはれたら、世間へ何と言譯が、よしありとてもゆかしいと、思ひ染めたる此お方に、所詮そはれぬことならば、いつそ死んだがましであろと、くりかへしたる心の嘆、あたりをわすれて泣聲を袖にもらして伏沈むを、十郎は抱起し、

隱し申しませう、元私どもは武家の奉公を致しまして、しかも古主は當三月大變のござつた鹽谷家でござりますゆゑ、かねて愚息が存生の節より、孫の代になりましても歸参を願ひたいと申した事も最早叶ひはしませぬが、せめて此娘をば武家の妻になる樣にと心がけて居ります」ト聞いて安曾貝は大に驚き、その名字を尋ぬるに、十年程以前鎌倉說法洲の上屋敷に勤いとまとなりし人ゆゑ、國勝手の十郎左衞門は十四五歳の節なれば、一向に佐右衞門の顔などは知らず、只その名字をば覺え居て、その因縁を感じつゝ、終日過越方の物語をなしてありけるが、此旬は五月雨の頃とはいひながら、今朝よりの大雨いよ〳〵つよく降りしきりて、なか〳〵戸の外へ顔も出されぬ程なれば、是非なくその日も暮れたりしに、又一事の難儀お住のうへに出來たり。それを何ぞといへば、其夜に入つて祖父の佐右衞門、即中風とかいふ病發り、忽ちに臨終けり。こゝにおいて安曾貝十郎左衞門は、お住が歎といひ、賴すくなき老人の死去を見捨てがたく、殊には長家のものまでも安曾貝を目當として何事も相談をかけられ、自然とお住の兄か亭主のごとく衆人に會釋れ、元來仁愛深く他人の思付く生質ゆゑ、野邊の送りの川意はいふにおよばず、すべて長家の人々を賴むに叮嚀なる言葉を盡し、又金銀を惜しむ事なく、働き手傳ふ人々に利德を付けて禮をなしければ、欲にふけるといふにはあらねど、十郎の實意をお住より

腹を養ふとも、明日はいかにと思ひやらるゝ哀さに、十郎はまた金子二兩をとり出して、娘お住にこれをあたへ、

十「さて、もしこれはお前が祖父さんを孝行にするのを見て、不躾ながら私の寸志だから、遠慮なく買物でもあるならば調へて、祖父さんにも安堵させ申しなせへ。そしてマア今まで何樣して活業てお出で被成たかぞんじませぬが、坐して喰へば山もむなしとやら、何ぞ取續く活業がありますのかへ」ト聞かれて二人は面目なく、娘はさすが年もゆかねば、外聞つくろふ所存にあらねば、

すみ「アノウ、お祖父さんは此間まで、往來へ出て飴を賣りましてネ、私は踊のお師匠さん所へ、踊の三味線を彈きに賴まれて參りました」

十「なるほど、それではやう〳〵にお二人の命をつなぐのみのことだに、もう此お孃も青春のことだから、相應の壻さんでも貰ふとか、嫁に遣るか被成たなら、お祖父さんを養ふぐらゐのことは、樂々と出來さうなものだがネ」

老父「さればでござります。左樣いたしたくぞんじましても、此通りの貧家、時節の衣類も着る事のならぬ薄命。また其上に私も孫女も望がございます、と申した所がおよばぬ願、何をお

第十回

抑不動尊の門前なる茶漬見世にて、老人と娘を哀れみし侍は、何人なるぞと尋ぬるに、これも忠義の一人にして、大星の內意を承け、まだ城內を明退きて、間もあらぬその日數に、東の義士に內應の、大事を告げて其後は、此方に止る約束にて下りつゝ、根黑の在の平間村より、今日は織部彌兵衛の方へゆく、安會貝十郎左衛門といふ人なり。斯る人とも知らずして、お住はしきりに戀しくなりて、宿世の緣や深かりけん、安會貝も憎からず思ふ心の發りしが、軈てうち釋け語合ひ、彌陀川町まで歸りし頃は、はや太陽は西に入る夕暮にこそなりにける。こゝにおいて佐右衛門は、再度家主に歸住なしたきことをつげ、其借財を濟して今までの家を請取り、兩隣家へもわけをはなし、昨夜の儘に宅に入る。貧家の住居の手がるさは、いとも氣樂のことならずや。さて安會貝も夜に入つては、織部氏を尋ぬる事もいかゞなりと、止らるゝまゝお住の家に、終に其夜は長家より、貸夜具かりて休みしが、曉方より大雨の、車軸を流すごとくなれば、門口へ出ることもならず、せめて小降になるまでと、祖父と孫女とのもてなしに、心ともなく一日を、こゝのうら家にくらすうち、倩家內の體を看れば、貧困いふべき樣もなく、今日は口

イヤ拙者は是から遠方へ参るもの、御縁もござらばまた重ねて」トいふを聞くより娘はもじ〳〵、男振から心だて、艶しき風情はありながら、途中で始めて逢うたる他人に、三兩といふ大金を、出して救うて惜氣もなく、直に別れて去らんとする、其氣性の大なるを、女心に慕はしく、言寄りたくも端近なる、茶屋にて何と詮方も、なけれど祖父に囁けば、實にと心の付きたる樣子、

老父「アヽモシ〳〵旦那さま、マア少しお待ち被成て被下まし。實は私どもは只今の者どもに責立てられて、詮方なく在所へ引込まうとも存じましたが、貴君のお陰で此難を遁れましては、急に田舍へ參るにもおよびませぬが、貴君はこれから何處までお出で被成ますか」

侍「されば、拙者は内用あつて本庄と申す所まで參るのぢやが、夫を聞かれて何になさるか」

老父「イヽエ、御恩返しのいたし方を娘と相談いたしますも、こゝではならぬ貴君のお急ぎ」

すみ「はなれともない生れた土地、ならうことなら元の所へ」

侍「いか樣それがよささうな。いらぬ世話だが左樣被成。兎角住みなれた所がようござるテ」

老父「浮いたる樣でございますが、もう一度彌陀川町へかへりませう」

すみ「それでは貴君と御同道に」トいそ〳〵したる娘氣の、浮薄にあらで緣の糸、結ぶの神の業なるか、うち連れてこそ立出でけり。

老父「御親切にありがたう存じます。お恥しいことでございますが、只今金子を拝借いたしても、早急には返濟が。」

侍「ア、イヤ、其心配には及び申さぬ。萬事拙者にお任し被成。サア町人ども、何といたす。刀を請けるか金子をうけるか、いづれにしても身に入金、勝手の方を返事いたせ」ト言ひつゝ財布を取出して、小判三枚紙に載せ、「サアこの金子で老人へ皆濟の證文をわたし相濟すか」ト極付けられて、道ならぬ金貸手代と請人榮次、内心氣味わるく跡じさり、以前のけしきに引かへて、金を請取り後日まで、違論これなき證文を、わたしてこそ〳〵逃げかへる。後には此處に休みたる衆人、武家の行狀と仁心あつきを感じ合ひ、噂とり〳〵歸り行く。其時例の侍は老人に打向ひ、

侍「イヤモシ御老人、さぞ御心配でござつたらうが、拙者の寸志が屆きまして、少しは御安堵被成れうか。若い女中を連れられては、猶此上に御用心、急いで此處はお立ちなされ」

老父「寔に不思議なことで御厚恩になりまする。コレお住、よウくお禮を申さぬか」

すみ「アイ、寔にモウ有難うぞんじます」

侍「イエナニ、不躾だとはぞんじたが、さし當つての御難儀を見請けまうしていたしたこと。

榮●「アヽモシ〳〵旦那さま、マアどうぞ御堪忍被成て下さいまし。ワヽ私は麁相でお手打になりましても是非がございませんが、宿には三歳になります老女と、六十になります悴もございます。どうぞ三人にかゝる命と思召して、お慈悲をお願ひ申上げます。」

▲「ヘイ〳〵、此者の申上げます通り、此奴がお手打になれば、家内にも日干になるものが出來ますこと、どうぞ御勘辨を願ひます。」

侍「何さま愚人を手にかけるも恥しい義ぢやから免しても遣らうが、此方の申す事も承知いたすか。」

▲●「ヘイ〳〵、何事も仰は反きませぬ。」

侍「然らば申しきける。近頃さしづがましい事ぢやが、只今承る老人と娘御の難儀、其方ども勘辨いたせ。しかし少々の金子は、我等が老人になりかはつて、其方達へ返してくれう。又金子の高はまけられぬ、是非とも娘を連行くとおいやれば、此方もゆるさぬ其方等が慮外。サアいづれとも返答いたせ、と申すも何樣やら御老人へ失禮らしい。イヤモシ娘御、此場をとり扱つて進ぜても苦うはござらぬかな」トいはれて娘は嬉しくも、又恥しき其風情、すみ「ハイありがたう」と一言が精一杯の返事なり。老人は侍の方を拜しつゝ、

付いた榮さんだぞ、サア〱きり〱とうしやアがれ」ト又立ちかゝりてお住の手をとるを、やらじと爭ひしが、榮次は己が力に餘され、對立一重隔てたる隣席の客の膳を蹴飛し、踏直さんとたぢろく足の穴所をとつて投出し、刀をとつて立上るは、歳齢廿四五歳にて色いと白く、鼻筋通り眼はすゞやかに、唇は紅をさしたる如くなる、威あつて猛くしづかなる出立立派の侍なり。

侍「イヤこゝな慮外者めが。いかに貴賤の差別なき茶屋小家の義にもいたせ、食事の中へ足踏込むとは言語を絶する不屈奴」トいはれて▲●は顔色かはり、侍の前に手を下げて、

▲「寔に申譯もない麁相をいたしました」

●「ツイ欠落者を追手に參つた私どもゆゑ」

侍「イヤこれ、急げば膳部蹴ちらしても大事ないか。長幼順ある教も知らぬ其方共とは申しながら、七十歳にも越えつらふ翁をとらへて、弱身に付けいり娘を奪ふに等しき行狀、公前の御掟を恐れぬ此場のいたしかた。それはともあれ此方に、何意趣あつて膳部を蹴かへし、見物人の立ちかゝるほどの、恥を此身にあたへたのだ。無益の殺生に似たれども、食事を穢され其方の、足でも切らねば卑怯にあたる、サア覺悟せい」ト詰め寄られ、腰を拔して請人榮次、色青ざめて泪聲、

金とはいつても、其約束とは聞きませぬ。金澤の親類まで行けば都合の出來る金ぢや。彼地へ着いたら、飛脚に屆けてお前まで屹度返濟いたします」

▲「アハヽヽ堅い祖父さんの言ふことぢやから間違はあるまいが、覺束ない御相談ぢや。ばか〳〵しい。」

榮●「氣を能くして居てはらちはあかねへ。何でもかでも此孃を預る。サア〳〵立つたり、詮方がねへ。泣いても笑つても用捨はならぬへ。エヽイいけしぶとい奴等だァ」ト言ひつゝお住を引出さんとするを、老父は押へだて、

老父「コレ餘りといへば狼藉な、いかに老衰したといつても、昔は帶刀もいたした佐右衛門ぢや。孫を手込にさすものか」ト力身を言つても老人の、さて口惜しき手足の不自由。踏出す膝のぶる〳〵と、がたつく風情の甲斐なけれ。弱身に付込む惡漢ども、

▲●「コレ祖父どん、左樣言やァ猶のこと了簡がならねへぜ」

榮●「コウ〳〵、いけずるい事をしなさんな。コレサ彌陀川町の宅も、大屋さんの方へ店賃のかたにとられて出かけたのぢやァねへか。其外の雜具もくされ疊と諸共に、押付けてから此旅立、出し拔れてたまるものか。コレ誰だと思つて馬鹿にするのだへ。請人仲間の大天狗と仇名の

らねへ大膽人だ。エヽコレサ、とぼけねへでよく聞きなョ。おめへの心持では、息子の借りた金は知らねへ、娘はおれが孫だから、勝手に連れて立退かうと言ふだらうが、左様はならねへぜ」

▲「イヤ榮次どの、マアしづかにして。娘さへ連れて歸れば勘定はどうでもなること、口かずを利かずとも、娘を此方へ請取つて」

榮●「なるほど夫が早いわけだ」

▲「能く談じて四の五のなしに」

榮●「左様サ。サア祖父さん承知だらうネ。ヘン承知でねへと言つた所が、承知させずにやア置かれねへ。オイお住さん、お前は兼ての代料だア。祖父さんと同意に往く事は出來ねへぜ。金の形だから否應はならねへ。サア〳〵直に」ト立ちかゝれば、

すみ「アレおぢいさん、私を連れて行くといひますが、何樣か仕樣は有りませんか」ト祖父の側へ身を縮めるを、榮次はせゝら笑ひ、

榮●「サア世話をやかせねへで、きり〳〵と往くのだ」トお住の手をとり引立つるを、佐右衞門は突きはらひ、

老父「五兩の代にお住をとは承知いたさぬ。老人だと思つて馬鹿にさつしやるナ。悴の借りた

て孫娘のお住といふがおとなしく、これも少しは眼をすりあかめ、

すみ「祖父さん、私は心細くはないョ。田舍へでも引籠んだらば、他人が何のかのと言つて來ないで、世話がなくつてよからうと思ふから、はやく田舍へ往つて見たいョ。そのかはりに最早今までのお友達や、三味線のお師匠さんなんぞには一生逢れまいねへ」トホロリと落す泪の雫、かすむ眼にさへ祖父は看とめ、

老父「ナニ〳〵田舍といへば言ふものゝ、五十里も百里もある路ぢやアなし、金澤といふ所は衆人が見物に行く名所だから、まんざら淋しい所でもない。又友達の衆に逢ひたくなれば、觀音さまへ月參の人が何程もあるから、其人に付いて來れば、宿屋に一晩か二晩止宿ば逢れるはなし」

口にはいへど心には、生れ古鄕の繁花の地を放れて、邊鄙の里へ行く娘心を察しつゝ、暫時愁に沈む折から、表の方よりづか〳〵と入來る者は、何やらんいかめしげなる二人連。一人は商人、今一人は奉公人の口入ともいふべき出立悪げな男、老父と娘の傍へ來り、

●「オイ佐右衞門さん、いゝ所で出合ひやした」トいはれて老人はぎよつとせし風情、娘もこれはと當惑貌。來りし男はしたり貌に白眼付け、「コレサ祖父さん、イヤおめへも見かけによ

いろは文庫　巻之五

第九回

顯以至功德鳥も得とらず、あら鷹の餌餉々々に日が暮れてと、つけ申してより大地とはなりにし御堂の繁昌は、尊き君の御惠、千代も不動尊體へ貴賤の參詣絶間なく、往來を當に開店たる酒食の家の多き中に、稻毛屋と家號せし見世はとりわけ賑ひしが、晝食時刻のことなれば、參詣人や旅人の此家につどひて、食事を調へ休足なして在るもあり。入來る人に出る客、さまざまなりける其中に、七十歳ばかりの白髮の老父、十七歳ぐらゐの美しき娘とともに食事をしながら、老父は泪を眼に浮め、

老父「ノウお住、何も恐れて迯げかくれするではないが、此祖父が老衰てから兎に角に他人の爲にせこめられて、果は孫女の其方まで、難義苦勞も重らうかと思つて、家内を夜迯も同然、さぞ心細からうが、住所でもかはつたらば、又仕合の能くなる事もあらうから、なじみのない田舍へは否であらうが、時節だと思つて何事も堪忍しや、ヨ」トさも力なき老人の繰言、聞い

松「御役目御苦勞にぞんじます。只今これより御使」
後「ノウ松島、大儀ながら圓覺寺へ乘物急せ、ちつとも早く」
松「おぼつかなくは存じますれど、御意にまかせて大事の御使」
後「由良之助はじめ一同の者へ、よろしくわらはが言傳を。別けて昨日のいとま乞、大事をつつむと知らずして、麁略の仕方萬事詫言」
松「委細かしこまりましてございます」トこたへて直に廣敷口、かき込む乘物陸尺の、看板さへも花立花、ほまれの檢使圓覺寺へ、鋲打乘物早打同然、宙を飛ばして一さんに、西の山より南の、海手をさして急ぎ行く。

偖此つゞきは惣卷の終にいたりてくはしくしるす。是より次の物がたりは安曾貝氏の傳にして、又仇討より以前の段なり。すべて忠臣藏の始より順に綴らず、後前にしるしいだすは、例の狂訓亭が筆癖にて、看官をはやく佳境にさそはん爲なり。その意にて讀みたまはねば紛らはしき條下もあるべし。

御つれ〴〵の御伽役にも相なり候はんと、御なじみの矢藤長助四十餘人の名代にさし上置候。かねて御ぞんじのとほり、幼年より御奥に被召しものゆゑ、過越かたの御物語まうしあげさせ候はゞ、御なぐさみになり、同列の者の働をも折々申上候はんには、忠死のものゝうへをもおぼし出し被下候事と、此者をさし上候。なほ〳〵右衞門七と改名申付候へば、よろしく御こんめい願上候。

大星

松島どの

後室はこれを聞せられ、心ぼそさのするゝ〴〵まで、ちからにせよと長助を、四十餘人の人々の、かたみに殘す心ざし、何にたとへんものもなく、只さめ〴〵と泣きたまへば、御前にありあふ女中達、泣かじとすれど眼に涙、雪ははれてもなほしめる、袖や袂の露雫、哀催す御座敷へ、又お表より案内につれて、由良之助が再度の注進片岡新六（四十九人のほか、今年わづか十二歲なり）

新「御菩提所へ引上げまして、家須義の討手來るかと用意いたして居ましたれど、最早時刻も移りまして、既に鎌倉の御政道、今は手ざしも相ならず、御前さまより首實檢の御檢使願ひ上げまするゝ」ト歲ゆかねども大星が、見立てゝこゝへ注進役、勇士のたねとゆかしけれ。

し、忠誠院刄空淨劍居士と立派に彫刻をさせ、其後山科に一鄕の貴賤男女の隔なく集め、高僧を賴み大法事をつとめ、料理を調へて數百人にふるまひ、其翌日保榮元年三月行年六十三歲、大星の石碑の前にて美事に腹を切つて終りしとぞ。嗚呼大星が一人の忠萬人をはげます。寺西が忠死始終全き人といふべし。

それはさておき、後室は三人の義士を御前にめされ、御料理をくだされて懇にお言葉あり。猶も去年の三月よりこの暮までの辛苦の樣子、四十餘人の身のうへを、一人々々と問ひたまふ、歎の中のたのしみは、拙き筆に述べがたし。かくて寺岡は但馬國豐岡に急の用ありとて、おいとまを願ひ走せ去れば、また長助は由良之助が今朝別に認めし書狀を局の取次にて、後室の御前にさしいだす。

撰者曰、矢藤長助は今年十六歲、まだ角髮の美少年。此程降りし雪よりも白き顏色、艶々と紅をさしたる脣の花の如きはものかはと、まばゆきほどのうつくしさ、黑髮亂れて顏にかゝり、眼の中すゞしくしやんとして、又愛敬あるその姿、りゝしくもいとやさしげに、おのおの恍惚となしたりとぞ。

さて彼文の封じを切らせ、松島これを讀上ぐる。

そも〳〵只今後室の許へ送りし品々は、彼大星が去年以來城明わたしの時よりして、萬事の入用義士への手當、夜討の裝束、後々の取つぎきまではからひし金子をさしひき、九千兩その勘定に厘毛も違はぬことの明細書そへて、御前へさし上げたり。葉仙院はかほよごぜんのほふみやうなり大星の忠義のみかは、前後のことまでくはしく、金銀までいさゝか私の所存をくはへず、世に亡君を後室にかへて、其身を謹しみし注進禮法うや〳〵しく、斯うも心の細やかに屆くものかと感入り、はしたなくこそ仰はなけれど、松島の局にこま〴〵とさゝやきてこそおはします。局ははやくもさしづせしか、寺岡、寺西、矢藤の三人、足を洗はせ衣類を與へ、あらためて奥へ召れける。

撰者いふ、寺西彌太夫は元大星が家來なりしが、忠信なる者なれば上へするきよして百石くだされ、組足輕の小頭を勤めさせしなり。さて彌太夫は當家土佐守の御許にとゞめらるべき由大星の願なりとてさし留められ、二百石賜り三百石に御取立ありしが、三年目にいたりて伊勢參宮をねがひ、上京して山科にいたり庄家村役人に對面し、兼て由良之助が隱居の間、内外ともに寺西が支配して、鎌倉へ下る節も彌太夫が立合にて、留守居一人を置き村役に賴み、その外萬端寺西が請持なれば、此度庄屋に談合して由良之助の宅地面ともに賣拂ひ、唯三間四方の地を殘し、後年年貢の手當をなし、草堂を建てて大星の石碑を造立

第八回

さても寺岡平右衛門は、夜討の次第こまぐ〜と言上すれば、後室より介抱仰付けられて、しばし休息なしける所へ、早刻限も辰の時、表方よりとり次ぎて、これもお庭の切戸より、こゝへ入來る忠義の侍寺西彌太夫、矢藤長助、いづれも血汐の薄手疵、はたらき見えて潔し。兩人ははるかに後室を拜して、庭に平伏なす。その跡よりして足輕六人、中間小者十餘人、

一　小櫃　　三荷

右は錠前を下して油單を掛けたり。

一　帳面入　　と札を張りし筥一荷

一　文箱　　一ツ

一　金九千兩

御縁側に荷ひ入れ、寺西、矢藤にわたし置き、みなく〜出でてさりにける。

撰者曰、かくの如くなれば、夜討の手配り前後の手當、なかく〜四十餘人のこととはおもはれず。次第にしるす討入の風情をよみて察したまへ。

松「オ、おいさましいその注進、ちつとも早く御前様へ」ト見かへる所へ後室は、はや〳〵これを聞給ひて、立出でたまふを見るよりも、局は庭を見やりつゝ、「ノウ平右衛門どの、今の様子をいち〳〵に。」

平「ハ、かしこまりましてございます。さても同盟四十九人、寝食をやすんぜず、身をくるしめたる甲斐ござつて、昨夜時刻も子の半刻、うし島新地の御仕居高野どのの御やしき、おもて裏より二手にわかれ、おの〳〵はかゞる所存もなく、御門を破りおし入つて、用意そろひし御殿を攻めて、高名手がら数へもつきず、深くもかくれし少将の、御首とつて義烈の勇臣、只今花水橋の東、廣小路に屯をはつて休足いたし候」トいふも息あひせはしなく、しばらく此處に息やすめ、さもけなげに思はれける。後室はじめ松島も、歎を催すよろこびの、注進こそはたのもしけれ、美貌御前は松島の局にむかひ口説たて、御ものごしもうるみつゝ、

後「ノウ〳〵松島、何とせう、昨日見えたは由良之助の、生死をきはめしいとまごひ、それともしらず、不忠もの、節義知らずと心の中に、そしりしことの恥しさ。女の心の淺はかさ、よく言わけをしてたも」トむせびいりてぞおはしける。

居かさなり、やがてすくめて錠口へ、知らせにおどろき役人方、押へて一ト間におしこめける。其間に局は封狀をひらきて讀みかけ、びつくり仰天、「ヤヽ、そんなら今夜忠義の人々、高野の屋敷へ討入るとか、それとも知らず餘所々々しく、いとま乞さへ麁略な仕方、それをさとりし部屋方者、油斷のならぬ仇の用心、何はともあれマア御前へ」ト衣類をあらため立ち出る、折から告ぐる鷄の聲。

松「サア皆さん直にお支度被成まして、跡から御前へちつともはやう」トいはれておの〳〵部屋に行き、化粧にかゝるいそがしさ。偖松島は、後室へ、お目覺申上げさする、中に東は紫の、雲さへきえてはるゝ日は、雪のけしきもよきお庭づたひの緣側を、御殿へいそぐ其所へ、表役人聞きすみて、直にお庭の切戶より、こゝへはせ來る御注進、かの大星の下知をうけ、仇討場所よりそのまゝに、よろこび勇む早づかひ。局はこれを屹度見て、

松「そなたはたしか寺岡どの」

平「アヽ、お局さまでございますか、平右衛門めでございます。大星氏より此早打」

松「シテ〳〵首尾よく高野の館へ」

平「さん候〳〵。用心きびしき高野師直、なか〳〵容易討入る事の叶はぬ所を、千辛萬苦」

をお慰みにと、いうてふらしく置いてゆかれた大星どの、今となつては最う外に殿さまの修羅の御無念、後室さまの御残念、師直づらを討つ事は、かなはぬ事か口惜しいト、忠義のたましひ氣も勞れ、彼道の記をかたはらに置いて、うと〳〵轉寐の透を伺ふあやしの曲者、そろり〳〵と部屋の戸を明けて、しづかにしのび足、居寐る局松島の前に在りける封じの狀を目がけて寄るを、松島は見て見ぬふりの空寐入。ひそかに看れば部屋方へ此夏ごろより勤むる女、阿房の樣に噂せし十七八の部屋方者、欲の盜みに來りしならば、衣類か道具に手をかくべきを、大星氏の持參せし狀に心を懸けるとは、どういふ思案か合點ゆかずとうたがふ松島、それぞとも知らでさし出す女の手先、狀を取らんとさし延すを、朱らうの烟管の長きにて、はつしと打てば驚けど、狀をば取つて立ち上る。さてこそ怪しと引戻し、

松「つね〴〵阿房と思ひの外、此封狀を伺ふはたしかに仇の廻し者。そこ動くな」ト立かゝれば、退れぬ所と大膽にも、局をおそれず突退けて、行かんとするを利腕を、とつてかゝれば振りはらひ、封狀口にしつかとくはへ、爭ふ女のはげしさに、取逃さじと松島は

松「松島の部屋へ曲者が入りました。お出合なされ、皆さんへ、お上の御用でございます」トいふ聲聞いて、部屋部屋より表の方へ呼次ぎながら、面々に廊下を走せて松島の部屋へ來りて

おそれながら御機嫌よろしう。」

後「オヽもう歸らるゝか、隨分無事で」ト言葉すげなに後室は奥の間差して入りたまふ。跡には大星しづ〳〵と立ちて此方へ下りつゝ、松島といふ局に向ひ、

由「イヤナニ松島どの、只今御前へさし上げんと存じたなれど、失禮とぞんじ控へましたが、これは拙者が上方より東都へ下る道の記にて、心を盡して名所のよみ歌、古跡々々をくはしく記して、此末長き御つれ〴〵の御なぐさみにも相なる品。しかし明日由良之助が鎌倉出立の後で、ゆる〳〵と御覽にいれて下さる樣、尤當所出立の義は明朝お知らせ申します」ト聞いて松島も心の中、主君の仇を討つものは此人ならんと、主從の思ひたのみし甲斐もなく、東下の旅日記、名所見物氣なぐさみと、亡君の御事は露も思はぬ面憎さと、思へど詮なきことなれば、由良之助が取出せし封じの狀を請取れば、いとまを告げてそこ〳〵に歸る大星、見送る女中、口々誹る其噂、かしましくこそ聞えける。時に其夜もしん〳〵と、お夜詰引番さま〴〵に、はやことすみて長廊下、鐵行燈の光さへ、薄くなりゆく折しもあれ、彼松島は後室の御前を下り、今宵は部屋の女さへ宿へ使の泊りがけ、部屋子は奥へ泊番、いま入替りて只一人、女ながらもお主の無念、なま中心だよりにせし由良之助が來りしゆゑ、後室さまの御立腹、それとも知らでや道の記

つたはなんぞ所存があつてかや。」

由「ハヽ、亡君御繁昌の御代には、何ごとも遠慮の身の上、鎌倉見物も自由にはなりませず、浪々の身と相なりましても、亡君の御恩に仍つて、何不足もござりませねば山科の樂隱居、都の地は不殘遊び盡しまして、また此度御當地の名所を、最早大略見物を仕果てましたゆゑ、今晩用事の埓あけまして、明日は是非出立と申合せまして、同行もございますればお暇乞に罷出でましたが、此後下向はまた一兩年も過さねば出來ませず、それまでの御名殘御機嫌よろしう御繁昌を」ト叮嚀に言上あれば、後室は思案の外相違なしたる大星が、所存にあきれて興覺顏、偖は亡君の御恨をはらし、師直を討取る思案もなく、主君なければ身のまゝに、京鎌倉の見物遊山、浪人したは幸といはぬばかりの今の口上、君御存生の御時に、まさかの用には第一と仰せられしもおめがね違ひ、不忠なものト腹だたしく思召したる御泪、こらへ兼ねてや机にありし、文鎭採つて由良之助に、打付けたまへばおしいたゞき、右手にうけたる手練の風情。

由「お心にかけられましたる馬の鼻向、吃度頂戴いたしまして、冥士の君へ御言傳。」

後「エヽ、何とエ。」

由「アイヤ亡君同然の御賜、ありがたうぞんじます。時刻をいそぎますればはや御いとま、

いろは文庫　巻之四

第七回

爰に鹽谷の御後室美貌御前と聞えしは、判官切腹あられし後、安保山なる御屋敷に隱居あられて、葉仙院と法名付けて、後室のさもうるはしき切髪も、自然なる愁の窓に閉籠りてのみ在せしが、久しぶりにて國家老の大星由良之助參上と申上ぐれば、後室もさもよろこばしき御顏色、

後「オヽなつかしう思ふ由良之助、はやうこちらへ通しやいのう」ト仰にしたがひ、お次より女中の案内に引添ひて、入來る姿のしとやかに、禮義つくらふ上下も、鵜の目返しや鷹の羽の目に立つ人目忍びやかに、それとはいはぬ暇乞、うや〳〵しく手を支へ、暫時泪に噎入る。又後室も過越方を歎せ給ふ御心にも、實に賴母しき大星が、此度京都山科よりはる〴〵下りし心の底は、師直を討ちとつて亡君の靈前へ手向けんとする手段ならんと、世にもうれしくおぼしめして、御盃を賜りて、

後「ノウ由良之助、御國を退去の其後は山科とやらに隱居せしと聞きましたが、今度鎌倉へ下

闖門突入蔑荊卿
炭啞形衰追豫讓
精誠貫日死何悔
四十六人齊伏及

易水風寒壯士情
悲歌涙滴挽田横
義氣拔山生太輕
上天無意佐忠貞

いろは文庫第二編序

忠臣義士の列傳を當世樣の長物がたり、人情本に寫しかへて、兒女子に會得靑史實傳、孝女節婦を是に加へ、いよ〳〵益義黨の爲に光をそふる伊呂波文庫、狂訓亭の反古なれど、例の艶語の中本とは事かはりたる忠勇節義、たま〳〵男女の情態を記せし條下のありといへども、樂んで婬せざる丹心と誠意をあらはして、敎導勸懲卷毎に顯然たり。文は拙しと笑ふとも、俚言は狂訓亭が一家の風調、兒女これに馴れて讀みやすしとす。かならずしも鄙俚の筆意をとがめず、唯忠孝節義の美名、實錄の心を甘じて、以て身をかへりみ給へといふ。

于時天保十己亥春如月吉辰　東都人情本の作者の元祖

金龍山人狂訓亭

爲　水　春　水　誌

ながらひらきみるに、

御厚情の鳥目、酒と玉子の代料に申請候。殘り御受取可被下候。

打割つてそれといはれぬ玉子酒あつき惠の恩にこたへん

と落首をこそはしるせしとぞ。

列。

鎗を持ちたる者二人先に立ち、その次に太鼓を携へ、それより打物半弓十人、其次鎗二筋を合せて首を結び付け、その次に大星由良之助。その後は思ひ〳〵の打物にて二十餘人。その中に勘平は兜頭巾を腰につけ、白綾たゝんで鉢巻し、手おひしさまもいさましく、鎗を杖にてあゆみけり。

毛里家の人々走出でてこれを見物なしければ、勘平は會釋して引きゆくを、見送る伯父は涙のよろこび、折から堺屋喜兵衛も來り、余曾川の門口より、

喜「御新造さん、勘平さまも高野のお屋しきへ仇討の御連中、今御門前引いてござるいさましさ、誠に見物でござります。」

伯母「オヽ喜兵衛どのか、賞めて下され、若年ながら此方の甥が忠義の噂、けなげな事をしましたわいの」といふも涙の伯母がよろこび。

喜「イヤモウ珍しい敵討、ぞく〳〵するほど頼母しいおはたらき。見物がぞろ〳〵付いて往きますが、花は櫻木人は武士、また別段でございますな。」

伯母「イヤほんに、勘平が殘した錢と手紙がある」ト取りいだして喜兵衛に渡せば、いぶかし

勘平は仕官の手便ありとて毎日〳〵出あるき、ある日大雪の降るにもいとはず、いでゆかんとせしかば、伯母は引止め、

伯母「ノウ勘平、いかに奉公をいそぐというたとて、今日はゆかずとよささうな。此大雪に一日ぐらゐ日を延したとて大事もあるまい。」

勘「イエ〳〵さうでござりまゝせん。先がたも私ゆゑに日間を費してくれますものヲ、ナニ雪ぐらゐをいとひませう、是非とも參つて身の片付を。」

伯母「案じる伯母の心もしらず、何が不足で家出をいそぐノ。アレだん〳〵に降りつむ雪、寒さにあたつて煩つたら、どの體で奉公しやる。伯父様が養子に仕やうといはれても、勘定方の下役風情と、不足に思うて返事もせず、義理もわすれて奉公口を、たづねあるくも不遠慮な」ト腹立つ伯母の一言に當惑なしたるその處へ、出入の町人堺屋喜兵衛といふもの入來り、様子を聞いて中にいり、勘平が浪人の心づかひを察し、金百匹を勘平に合力して、酒にても呑み、今日は他へゆくことを休み給へといさめて別れしが、是十二月十二日の事にして、勘平は猶伯母をすかしこしらへ、喜兵衛が與へし金にて、玉子酒を調へかたむけて出でゆきしが、それより十五日まで音信なく、十五日の朝鹽谷浪人仇討の噂專にて、毛里家の門前を引きあげてゆく義士の行

これ東海道金谷の宿、澤の佐七といふもの施主なりとぞ。佐七は鹽谷家恩顧の町人。そもそもかしく坊といふは、文祿十四年の頃江戸に出でたる俳諧の師にて、其角が友なりしが、十五年十二月十六日其角の許へ一紙をおくりて影をかくし、東海道在々に乞食して、終を法臺院の裏門に示せしなり。其角の許へおくりし書は、

生前志を同じうして、死後汚名を百年に傳ふ、亦是同列幾十人。嗟いかにせん薄命の士、唯黄泉の君のみ知らん。

笹の葉の亂れやすしや雪のくれ

戯號 かしく坊

鴫野十三

これ四十餘人のその一人鴫野十次兵衛が舍弟にて、小山進藤奥野等と連判を拔いて影をかくし、萬に一ツも大星が仇を討ちもらす事あらば、二度の討手を心がけし二十餘人の列にてありける。されば光を藏し義を存ず、二君に仕へぬ忠臣をひそかに知つて、法臺院の方丈が藏光院存義居士とはつけられしとぞ。また余曾川勘平宗則といふは、鹽谷家沒落の後毛里美作守の藩中余曾川佐衞門方に同居してありけるが、伯母なる者、勘平をいとほしみ不便をくはへありつるに、

がて其處より別れしが、その翌夜の復仇、十五日の朝御菩提所へ引きゆく義士の後より追つかけ、大鷲文吾に走りつき、一昨日の附句の心をやう〳〵悟り、

其「ア、この其角は俳諧は下手だく〳〵」ト涙をながして、翌またるゞその寶船とは今日の事にてありけるを、不風流と心にそしり、別れしことの恥しけれど後悔しつゝ、圓覺寺までおくりしとぞ。また討入の夜の宵に、蕎麥屋にて冠付の題をとりし男の、何のその何のそのと口ずさみしを文吾は聞きとがめて、子細をたづねこれにをしへて、

何のその岩をも通す桑の弓

と附けさせしが、この時の卷軸にて鎌倉中の評判にてありける。思ふにこの句に、何のその容易仇を討とらんと、心にいはひてよみしならんが、いと〳〵めでたき忠義の士なり。なほこの風流におとらぬ雅にて、忠義の人あれども二の目をはかりて隱忠をつくし、死して其名をしられざる者あり。保榮四年富士寶永山の出來たる十月、駿河の國法臺院の裏門に、菰を着て死したる乞食ありけり。其枕元に矢立疊紙などならべ、辭世に、

富士の雪解けて硯の墨衣かしくは筆のをはりなりけり

法臺院の和尙これをねんごろに葬り弔ひ、今石碑の殘りて、藏光院存儀居士と戒名をしるす。

て候へども拙翁のおよばぬ事のみに候といひつゝ、また筆をとりて、「つきかげをの初五文字は晋子其角が名吟なり」トしるしたり。翁は露を露とよみ、其角は露に月の光のうつるといふ心にて月影をトは直せしなり。げに〳〵江戸座の俳祖大活の氣性、またあるまじき豪傑といふべきか。この一軸蕉翁と其角が反古の掛物とて名高し。まことに俳中の仙人ともいふべき歟。

第六回

時に晋子は湖月堂と酒をくみかはして興じけるが、いかにも世の盛衰を觀念し、文吾が浪々のたつきを哀におもひければ、腰の墨汁の筆とりて、

年の瀨や水のながれも人の身も　　其角

と吟じて子葉にわたしければ、子葉もまた筆をかりて一句を附けたり。

あしたまたるゝ其たから船　　湖月堂

其角はこれを見るよりも甚に不興し、さては此人貧しき姿を恥ぢて、今は斯くの如くなれども、忽ち花咲く春にその開運の時節を得て見せんといふ心かと思へば、不風流なるをさげしみ、や

其角が形と大鷲と、そぐはぬ雅俗寶井に、まさる子葉の文武兩道。ことに忠義の心より、やつすと知らぬ寶晋齋、その貧困をあはれとは思ひながらも、世捨人に等しき其角も詮かたなく、居酒店にぞ入りにける。

因にいふ。其角は元醫を業とす。其名を竹下順哲とよびて蕉門十哲の第一、生涯の秀逸あげてかぞへがたし。そは五元集、焦尾琴をはじめあまたの集あり。或諸侯の御秘藏に反古の一軸といふものありて、晋子其角が名譽とす。それをいかにと尋ぬるに、月と萩とを畫きし表具なり。その畫上に蕉翁を招かれて句をもとめ給ふ。翁この畫上に、

白露をこぼさぬ萩のうねりかな

ト詠ぜしかば、君はこれを賞翫あらせられ、其後其角が參上ありしとき、これを看せ給ふに、其角は忽ち筆とりて、白露をといふはじめの五文字に墨をひき、其かたはらに「月かげを」ト書きそへしゆゑ、御前にありける人々はいふに及ばず、大守もおどろきいからせ給へど、出家に等しき世捨人の事なれば、詮方なく狂人なりとゆるし給ひしが、かさねて蕉翁の參りしとき、其方が門人晋子は實に狂氣の徒なり。師匠の句に筆をいれたる大罪、言語に絶えたる所爲ならずやとありければ、蕉翁これを見て晋子を心に賞めて申すやう、弟子に

殘しておいておくんなせへ。是は他へ出しては濟まねへ繪圖面、實は燒捨てたつもりで、他に見せてはならないのサ。」

三「ヘイ是かネ。こりやアたしか私どもの向屋敷の高野さまの」

平「されば何もかまひはなからうけれど、鹽谷家の浪人衆が、御主の仇と付けねらひ、敵討にでも來やうといふ用心で、屋しきの案内を世間へ知らせまいと、嚴しく口留がしてありやす。」

三「ヘエ丶引 イヤしかし其樣なこともございますまい。あの當座なら少しは其樣な氣の人もありもしましたらうが、最早彼是二ケ年たらず、今に手出しをする人のないのを見ては、命を捨てて古主へ忠義といふ心は、出來にくい事とおもはれます。まして商人私などが、まうかる金でも命づくと聞いては、直にお斷。けして氣づかひはございません。そして此お名前の所を切取つたら、何處の繪圖だか知れはいたしますまい。」

平「さうさね。高野師直といふ所を切りとりやア わけはねへ。外の繪圖より念を入れて、素人にもわかりやすく、庭の泉水稻荷の宮まで漏さずしるした私が自慢、反古にするのも殘念な、壁の腰張にしても、目のなぐさみになりさうぢや。ほしがるおまへに進ぜませうから、わすれ

三「コリヤ是高野師直の」

平「今の屋敷が出來るとき、仲間の頼みで圖いた下繪サ」

三「左樣ならば只今も此通りの建方で」

平「玄關をはじめ奥表御殿は勿論、總長屋造作までも、大略はそれにたがはぬ普請の仕手は、元來私が相弟子サ」

三「さては天よりさづかる賜もの」

平「エ、何がエ」

三「アハヽヽヽ、これは芝居のせりふの眞似サ」ト いひ紛せど此程より、色に事よせ彼おしづに、あらかた聞いて胸の中に、記憶なしたる高野の屋敷。およそに此圖に割符の建方と、思案をなして平兵衛にむかひ、「モシ伯父さん、この繪圖を二三枚、わたくしに下さいませんか」

平「何になさるつもりだか」

三「エ、なに子どもの時分から、繪だの畫圖だのといふものが好でございますから、菱川の畫も餘ほど溜めて持つて居ます」

平「ハア左樣かへ、それなら隨分上げませうから何れでもお持ちなさい。しかしこの繪圖は

月日　　　　　　湖月堂

御返事

子引町の二番目としるせしは、鹽谷判官の御舍弟なる大學どのの御事にて、この弟君の鹽谷家御相續あらばと心待なせしかど、その事なか〱かなはねば、是非なく師直を夜討になさんと決定したりしなり。戲のごとく認めし密書に切狂言としるせしが、後世夜討は切狂言となりしも、大鷲文吾の洒落が末代までも殘り、其風流を賞歡せらるゝも、またこれ忠義の功にて、いといとありがたき事になん。されど身を落し姿を賤しうして敵の樣子を伺ひ、實に貧困のさまなりしは、沾德に蒲團を借りておきける一條にても知るべきのみ。また仇討の前々日十三日の朝の事なりし、文吾は所用ありて本庄へゆきけるが、途中にて煤拂の竹を賣る男に往きあひて、

文「オイ〱竹や〱。」

竹賣「ハイ〱竹をあげやすかネ、一本六文づつだが五文にまけやせう」

文「よし〱、一本いくらでもいゝが不殘賣つて下せへ。そしておれが賣りなれるまで同伴に歩いてもらひてへの。」

竹賣「エ、何エ、そんならおめへさんはまた、この竹を賣つて儲けやうといふのかネ。左樣な

生世々に及候事に御座候。

　山を裂くちからも折れてまつのゆき

尚々春飄竹平も同じ道にて候。絹泉は御存じの如くにて候。御恩借之蒲團申請候て、其儘打捨置申候。一句御引導奉願候。

　十二月十五日　　　　　　　　　　　子　葉

　　沾　德　先　師　へ

右は仇討の節に臨んで認めたるものと見ゆ。實に風流洒落、大丈夫の士といふべし。さて次にいだす一通は、いよ〳〵復仇と心を定むるよしを、同志の許へおくりし密書なりとぞ。かくして見れば鹽谷家の十分一にも名跡たちなば、仇を討つことなく、何卒主家の再興の手段をなさんと、亡極忠の面々は名聞をこのまず、たとひ仇をも報はぬ腰拔武士と、世上の人にそしらるゝとも、君の御舍弟を代に立てて忠を盡さんと願ひしとは、左にあらはせし一書にて推察あるべし。

尊書拜見仕候。京都は相應に役者も揃ひ候由、座元より沙汰有之候。しかれば御當地子引町の二番目もはか〴〵しからず候へば、いよ〳〵切狂言の思召立御相談申度候。いづれにも近日拜顔を期し可申候。以上。

揃はねど、はじめて思ひ起せしものが、この風流を案じ得て、何ぞ雅言をなさゞらん。惜しいかな天爾波のつゞき至らぬのみ。今すこし心を用ひ候へとありしゆゑ、大鷲文吾はうれしげによろこび歸るを聞傳へて、あざけりそしらぬものもなく、いとおろかなる人なりとて、笑のたねとなりけるが、また二十日程過ぎて後、

初音きく耳は別なる武士かな

また十四五日過して後、

武士の鶯きいて立ちにけり

三度にいたりて自然、この秀逸を得たりしかば、大星は手を打つてよろこび、嗚呼感ずべしこの名吟、實に文武の兩道を兼ねたる者とはこの人ならんと賞めたりけるが、はたして後には俳諧者流の達人となり、其頃の寶井晋子なんどと肩をならべ、湖月堂子葉と雅名し、鹽谷家斷絶の後は專ら風流を翫び、一代の雅吟もすくなからず。こゝにその一二をあげて、雅なる文藻を兒女に示す。こは水間沾德といふ俳諧の宗匠へ、仇討の節に送りし手翰なり。

其後は彼是御無音背本意候。何れも樣御健勝に被成御座候哉、年來御懇意に被成候故、一通り相傳へ申候。扨者拙者事所存の筋難默止、今晩存立申候趣御座候。御厚情彼是以て生

いろは文庫　巻之三

第五回

そも大星の君子の智、よく衆人を精育なし、其人々の氣風によりて、これを教ふる中にしも、大鷲文吾と聞えしは、忠直いはん方なけれど、生れついての麁忽もの、心氣せはしき生立なりしが、由良之助は文吾にすゝめて、心氣ををさむる事を學ぶべしとありければ、文吾は天性魯に等しき人なりければ、これを聞きいかなる業を學びなば、心氣をしづむることあらんと、たづねに應じて俳諧を、學ばれよとぞをしへける。されば文吾はその日より、師をもとめてならはんとなしけれども、さすがに初心のはづかしく、他には問はでおのが宅に、つく〴〵案じ居たりしが、折節庭に鶯の初音ゆかしくさへづりけるゆゑ、こゝぞ風流とやらんの發明なるべしと、首を傾けやう〳〵その心をぞつらねける。

鶯の初音をきく耳は別にしておく武士かな

かくしたゝめ、ひそかに大星に見せければ、由良之助はこれを見て大によろこび、文字の數さへ

詮方はない筈を、大まいの金をわざ〳〵とゞけられ、始終おぬしが安堵の手當。これほどまでにして下されりやア、恨みも泣きも出來ねへわけだぜ」

おしづ「サア、其樣に跡々までおぼしめしての御親切。殊に世間の人さんが、知るも知らぬも賞めそやす、おかたが何でわすられう。萬一あはれぬやうになつたら、生きて居ませぬわたしが覺悟」と涙をひざへはら〳〵〳〵。鼻紙で貌をふきながら、「伯父さんどうぞ其時は、先立つ不孝の罪とがを、堪忍して」トむせびいり、涙のはてしはなかりけり。

夜討の以前にそれとなく、高野の屋しきのいとまをとらせ、伯父平兵衞の許へ預けおきけるが、間もなく夜討の評判高く、高野の門前なる三春屋善兵衞といふも、鹽谷浪人の義士にして、手代も殘らず一味の忠臣、かゝるはたらきありけると、岡野の事くはしき噂、聞いて驚くおしづが心。伯父平兵衞はかねてより、さとりて居てもそれぞとは、あかさで姪の心のうち、不便いやます取沙汰を、聞せじとしても聞くおしづ。胸くるしくも悲しさは、世間の人の賞ものに、される男と深き中、飛びたつ程にあこがれても、逢ふに逢れぬのみならで、十に九ツ切腹か、首尾よくとも海隔て、遠き島根の島守と、なりもしたらば最上の、仕合なりときくつらさ。淚かくしてよそながら、長屋の噂辻占も、たゞ義士達の成行を、いかに〳〵と案じるゐる。苦の世界とはいひながら、わづかに十を六ツ七ツ、こえてあどなき娘氣にも、つながる鹽谷の仇討が、身のかなしみとなるぞとは、知らで契りし昨日今日、猶戀しさぞ增りける。伯父平兵衞はおしづにむかひ、

平「コウおしづや、手めへマア毎日々々そんな貌ばかりして居るが、あんばいでも惡くなるといかねへぜ　エヽコウちつと氣をつよくもちねへ。そりや成程くよ〳〵思ふも尤だが、世の中のことといふものは、何もかも約束ごとだと思やれ。まだ〳〵三十郎さんが實義の深い人なればこそ、其身は覺悟の敵討、あとはかまはぬ當座の花と、知らず貌してしまはれても、どうも

ひ、それよりいよ〳〵おしづに親しく契りしが、實に渡せし繪圖面、高野の普請に相違なきことわかりしかば、急ぎこの圖を山科なる大星の許へ遣しければ、由良之助大によろこび、これより東へ下るを急ぎ、夜討のときの手配りは、此圖をもつてなせしとぞ。さはいへ大星の用心深く、此外義士のそれ〴〵より、手便をもとめておくりたる、繪圖に合して參考なし、たしかに間違あらざる所を、見定めて後用ひしなり。斯くて大星は東に下り、諸方の手都合を下知しけるが、或とき岡野三十郎にむかひ、

大「イヤナニ岡野氏、其許は妻女の安堵方便はいかゞいたされましたな。」

三「ヘイ、イエ拙者は御存じの通り未だ妻と申すものは持ちませぬが、何ゆゑ左樣に。」

大「是はしたり、其許このたび師直の案内詳しく告げられしは、誰が手續から手にいれられしぞ。譬ひ同居はいたされずとも、終は夫婦と約束を、誓ひし虛は君の爲、深き罪とはいはれねど、女心におもひ詰めあるべき所を、其人が切腹なすか討死かと、一ッに一ッ命の定め。それとも知らで其期にいたらば、さぞかし周章ならん。人の誠を金づくで、なすべき事ではなけれども、せめて女子の身の落着」ト二十兩の金を渡しければ、岡野も大に歡びてこれをおしづに遣して、來春在所より出るまでも入用のことあらんには、不殘つかひ捨てても苦しからずと與へけるが、

ずに高野といふ所を切りとつて。」
三「ハテ、相違なく切りとります。」
平「其お心ならおしづの縁や、たのみのしるしにお前へおくる聟引出。」
三「エイ。」
平「ハテサ、さうびつくりする事はない。鹽谷の忠義な浪人衆へでも、賣つたら金になりさうな。」
三「ハテ變つた伯父さまの。」
平「アハヽヽ商人を聟にしたら、職人氣がなくなつて、百でも錢にするこゝろ。ツイ串戲を云つたのぢや。何も氣に留めるわけはない。他の見ぬ間に持つてござれ。」
三「ヘエありがたう」トおしいたゞく、其貌ぢつと平兵衛はうち眺め、
平「ヤレ〳〵ハヤおわかいのに御きどくな。しかしおしづは夢にもしらず。」
三「何をおしづが夢にも知らずと。」
平「ハテマア今日は歸らッしやいまし。」
三「左樣ならばまた近日」トいとまごひして立歸る、心の中に三十郎が、半は悦び半はうたが

残しておいておくんなせへ。是は他へ出しては濟まねへ繪圖面、實は燒捨てたつもりで、他に見せてはならないのサ。」

三「ヘイ是かネ。こりやアたしか私どもの向屋敷の高野さまの」

平「されば何もかまひはなからうけれど、縣谷家の浪人衆が、御主の仇と付けねらひ、敵討にでも來やうといふ用心で、屋しきの案內を世間へ知らせまいと、嚴しく口留がしてありやす。」

三「ヘエヽ引イヤしかし其樣なこともございますまい。あの當座なら少しは其樣な氣の人もありもしましたらうが、最早彼是二ヶ年たらず、今に手出しをする人のないのを見ては、命を捨てゝ古主へ忠義といふ心は、出來にくい事とおもはれます。まして商人私などが、まうかる金でも命づくと聞いては、直にお斷。けして氣づかひはございません。そして此お名前の所を切取つたら、何處の繪圖だか知れはいたしますまい。」

平「さうさね。高野師直といふ所を切りとりやア、わけはねへ。外の繪圖より念を入れて、素人にもわかりやすく、庭の泉水稻荷の宮まで漏さずしるした私が自慢、反古にするのも殘念な、壁の腰張にしても、目のなぐさみになりさうぢや。ほしがるおまへに進ぜませうから、わすれ

三「コリヤ是高野師直の。」

平「今の屋敷が出來るとき、仲間の頼みで圖いた下繪サ。」

三「左様ならば只今も此通りの建方で。」

平「玄關をはじめ奥表御殿は勿論、總長屋造作までも、大略はそれにたがはぬ普請の仕手は、元來私が相弟子サ。」

三「さては天よりさづかる賜もの。」

平「エ、何がエ。」

三「アハヽヽヽ、これは芝居のせりふの眞似サ」トいひ紛せど此程より、色に事よせ彼おしづに、あらかた聞いて胸の中に、記憶なしたる高野の屋敷。およそに此圖に割符の建方と、思案をなして平兵衛にむかひ、「モシ伯父さん、この繪圖を二三枚、わたくしに下さいませんか。」

平「何になさるつもりだか。」

三「エ、なに子どもの時分から、繪だの畫圖だのといふものが好でございますから、菱川の畫も餘ほど溜めて持つて居ます。」

平「ハア左様かへ、それなら隨分上げませうから何れでもお持ちなさい。しかしこの繪圖は

り來て、何か入用ありと見え、多くの繪圖をとりいだし、彼是見あはす其所へ、二階よりして下り來る三十郎は平兵衞に向ひ、

三「ヤレ〳〵ツイうと〳〵と寢入りました。おしづは最早いつの間にか」

平「ナニ今しがた歸りながら、おまへはよウく寢てぢやゆゑ、跡で起してくれろと申して、そくさと出て行きました。どうぞあの樣な分別なし、始終愛想がつきませうが、なるたけ氣長に面倒を見て遣つてくださいまし。私が爲には一人の姪。田舍の實親は二人とも、モウ三年前に故人となつて、今では私の娘も同然。マア力にするあれがこと。おまへも此暮は田舍へござつて、來年はあれを女房にして、見世でも出さうといふ兼ての御相談。三春屋が御縁者ならあちらでお世話もなさらうが、普請はわしが助けますぜ」

三「ヘイ、どうぞ萬事をお願ひ申します」

平「コレ御覽じろ、此樣に若へ時から請合つた普請の繪圖が此樣にありやす」

三「ヘエなる程澤山に。ハヽア御屋敷のが多分ござさいますネ」

平「左樣サ、武家方のには町のと違つて、いろ〳〵と註文がむづかしいのがありますて」トいふうち見留める一枚の、繪圖を手に取る三十郎、

伯父「オヽおしづか。サアマアあがりやナ。何ぼ色男の事だと云つて、家内へ入るも待兼て外から聞くもあんまりだはアハヽヽヽ」ト氣輕もの。おしづは莞爾顔赤らめ、
おしづ「アレサ伯父さん、さうではないはね。今日ははやく來ていろ〳〵相談する事があるから、そのつもりで居た所を、ツイおそくなつたから、三さんがモウ來てしまつたらうと思つてサ」
伯父「オヽさうか。だうりで先刻來なすつて、しばらくはなして居なすつたが、手めへが來ねへものだから、亦用をたしてから後に來ませう、おほかたおしづが來るであろ。またして置いてくれろといつて、今しがた出て行つた。そしてお飯のおかずもこしらへてある。サア〳〵奥へ往つてお晝でもたべて、來なさるのを待つて居や。おらア今出入場から呼びに來たゆゑ、ちよつと往つて來るほどに、留守してくれ」トそこ〳〵に、おしづを置いて出でて行く。

第四回

神子山町なるおしづが伯父は、大工平兵衛といふ者にて、近年株を弟子に譲り、今は隱居の我まゝ仕ごと、遊び仕業も他の知る、古き番匠繪圖方にて、間取割方上手の棟梁。出入場より歸

くもなじまねど、輕きものは大略心やすくなりしゆゑ、何とぞ師直の用達にならんと、種々手入をなしけれども、用心厳しき家中の出入、昔よりして用を達す商人たりとも容易入れず。殊に尾林貞八の、出入切手を日々あらため、なか〳〵伺ひがたければ、義士はほとんど當惑なし、實に大星が推量のごとく、敵の用心なほざりならず。はやまつてあやまちするなと互に心を盡しけるが、彼三十郎はいつの間に語らひ寄りけん、高野の家老堀井理右衛門の小兒の守女おしづといふて、十六歳の處女をすかしこしらへて、ひそかに情をぞはこびける。此また守女も年ゆかぬ賤の女に似もやらで、丹誠を守りおとなしく、薄情の戀のこゝろにあらず、三十郎の男ぶり、憎からずとは思へども、はじめはさらに得心なく、するゝ夫婦になる事ならば、今はいかなる辛苦もいとはじ、たとひ一年二年は合はずにくらしてあればとて、互にかはらぬ事をこそ、誓にたてて契りたしと、美目も心も美しき、誠に岡野もよろこびて、氣長く親切をつくしけるゆゑ、今は深くも思ひあふ、なかとはいへどたまさかに、逢ふも人目の關越えて、今日しのび來るやくそくは、神子山町の伯父の家。かねて伯父にもおしづが許より、明して置きし事なれば、遠慮もあらで門口から、

おしづ「伯父さん、まだ三さんは來ませんかへ」

とぞ。さて翌日は酒の醉、さめてのちは人心、會盟同列の義士のおもはく、病に臥居る父の前、さすがに背くもはづかしく、既に志を改めんとするに、お安は兎に角側をはなれず。辨右衞門夫婦もとも〴〵、酒と色とをすゝめしゆゑ、彼三百兩の金はあり、身ををさむる事かたからずと、不義の群にぞいりたりける。同じ色香を翫べど、忠義を胸に情も厚く、實と操の松の花、こゝに哀と聞えしは、おなじ浪士の岡野氏、その歳纔に十六歳にて鹽谷家を浪々なし、いまだ城下にありける中、父の金右衞門は病死して、遺訓を守る三十郎、大星の士をあはれみ、孤獨をめぐむ慈仁を感じ、いよ〳〵極むる忠と孝。さて鎌倉へ先達て、衆よりはやく下りつゝ、敵高野の屋敷の案内、くはしく知るべき其爲に、屋敷の前に住居をまうけ、太物荒物乾物など、諸式を大略調へて、世に調法なる萬見世。主人三春屋善兵衞と、やつす姿の商人は、本名杉谷半之丞、手代は全馬三郎兵衞、岡野三十郎、矢藤右衞門、いづれも忠義の歴々が、名を改へ形容を改めて、武家とは見えぬ立ふるまひ。別けて岡野は年わかく、四十餘人の中にては、第一番の美男ゆゑ、おのづからなる愛敬ありて、買物に來る人々も、これを愛して人なじみ、元來高野の家中と見れば、仕入の直段の元にかまはず、取入る心の大安賣、中間小者へ目をかけて、使に來る度毎に酒をふるまひ酒代を與へ、その心をよろこばせしかど、いまだ重役のものには深

にもお氣のおかれる樣なわけではございませんョ。私はこゝのお宅へ唄女の目見に來て居ますのでございます。爺さんが不仕合で、おかゝさんは煩つてばかり居ますから、何かにつけ不自由がち、いつそお酌にでも出たらよからうと他もすゝめましたゆゑ、親達の爲にもとぞんじて、こゝへ來て居ますのでございますョ」

庄「やれ〳〵さうか、かはいさうな。それではこゝの宅に金でも借りてあるのか」

やす「ハイ、ナニ左樣だけれど、誠にかはいがつてくれますは」トはなしの中にしん〳〵と、寒氣は肌をさすごとく、お安は思はず身をふるはし、「オヽ寒くなつてきた」ト手あぶり火鉢を引きよせる。

庄「ほんに身にしみるほど寒くなつて來るやうだ。おいらは酒の陽勢で溫かだが、おまへはさぞ寒からう。私が端の方へ片寄るから、否でも寒さ凌ぎだ、こゝへ入つて寢なせへな」

やす「ハイありがたう。それでもどうもお氣の毒でございます」

庄「此方こそお氣の毒だが、風でもひかせるとお冬さんの前へなほ濟まねへ。サア〳〵」ト手をとれど、お安は洒落た氣にも似ず、まだ肌しらぬ男の側、はづかしさうにもじ〳〵と、惚恍子に見えて愛らしく、庄左衞門は心もうかれ、終に金鐵の誓をわすれて、情欲をこそとげたり

やす「庄さんモシ、モウおよるのかへ、チットもんであげませう」ト夜着の横より手をさしいれ、さすりにかゝれば、庄左衛門、その手をじつかり引寄せて、

庄「コウお安さん、おまへ達は狐ぢやァねへか。あんまり嬉しくつて氣味のわりいやうだ。」

やす「なぜでございますへ。」

庄「エ、なぜと云つてお前の樣な能娘に、側へ斯うして來られるといふはどうも不測だ。」

やす「お否でございませうが、何かのやくそくごとでもございますか、こゝへお入りなさッた時から、おいとしいやうにぞんじた所で、旦那もおかみさんも粹なしかた。どうか庄さんにお願ひ申して、お世話になればいゝ。左樣すると座敷へ出て、お客の機嫌をとる氣がねもなくッてよからう。どうで病身らしいから、酒を過したり夜をふかしたりしたら、よくもあるまいからと、だん〱の親切。それゆゑ猶のことおしたひ申す氣になりました。どうぞお邪魔でも、せめて今宵一夜御介抱まうしたうございます。おまへさん御酒でおせつなくはございませんか、ドレお胸の所を、しづかにさすつてあげませう。御堪忍なさいましョ、お否でございますか。」

庄「ナニ〱勿體ねへ、否の何のといふ譯はねへが、全體おまへはどういふ身分だへ。」

やす「ほんになれ〱しい仕方だと思召しませうが、こちらのお宅はお前さんのお友達、何

居たるゆゑ、眼のふち櫻色にほんのりとなり、少し居ずまひ崩れ、靑みのある白縮緬のゆもじあらはにして、爪紅をさした細き指にて、琴柱笄の紋の所をちよいと持ち、頭上をかく其風情、庄左衞門は惚々となりて溜息をつく折節、例のお安は上喜撰を煮花にこしらへ、甘露梅へわさびをふりかけた樂燒の菓子鉢を持ちきたり、

やす「庄さんお茶をおあがんなさいまし」トいひつゝ、又お冬にむかひ、「おかみさんモウお床を延べました」

ふゆ「オヤ左樣かへ。それぢやァ私はモウ寐やうや。お安さん、おまへは氣の毒だが此處へ寐て庄さんを介抱してあげておくれな。大そう醉つてお出でだから、一人寐かしてはおかれないし、また今夜は夜具もたらないから、庄さんの脇へ寐かしておもらひな」トいへばお安も惡縁に、つながる前世の宿業なりけん、否にはあらぬ稻舟の、梶とるお冬がとりもちに、嬉しさうなる笑ひ顔に、紅葉の照りもうつくしく、庄左衞門は聞かぬふり、見ぬ振りすれど胸ドキ〳〵。酒色の二ツ一ツ夜着、寐よとの鐘にお冬は座をたち、「アレモウ亥刻だヨ、ドレ下へ往つてはやく寐やう」ト莞爾わらひ、階子を下り行く。跡にはさすがにてれた對向、お安は床の側へより、

いろは文庫　卷之二

第三回

うた「心で留めて歸す夜は、かはいお方の爲にもなろと、泣いて別れてまた御げんもじ、猪牙の蒲團も夜露にぬれて、あとは物憂獨寐するも、こゝが苦界の眞中かいナ」トたがひに浚ふ三味線の、音もさえわたる雪の夜や、彼辨右衛門のもてなしに、前後をわすれし酒のとが、庄左衛門はたゞひとり、二階に止宿て床のうへ、思案にくれたる其處へ、この家の女房お冬とて、戰慄する程うつくしき、年增の仇者ほろゑひ機げん、

ふゆ「庄さん、モウお寐か。」

庄「ハイ、イエまだ寐はいたしません。誠に今晩はいろ〳〵と御厄介になりまして。」

ふゆ「アレサ庄さん、モウ其樣に堅くろしい事はいゝにして、氣樂におしな。そしてネ」トいひながら煙草を吸付けて出し、「お否かへ。」

庄「ヘイこれは」といたゞきて呑みながら、じろ〳〵お冬の姿を見るに、酒の相手になりて

一味徒黨の御とがめの、子孫にまでかゝる道理だ。勘辨しやれ」ト說きつけられ、元來心の亂れた小口、佞辯奸智の得手勝手を、尤らしく聞きなして、亦盃をかさねる時しも、はや入相の鐘の音の、陰々とこそ響きける。かゝる所へかのお安は、一際美々しく化粧をなし、庄左衛門が側に坐し、心をつけてもてなせば、終に鐵石の心もくだけ、酒に本意をうしなひて、いよ〳〵うかれ居たりける。嗚呼かなしいかなや世の人情、暫時の興に魂を奪はれて、穢れたる名を百年の後に流してそしらるゝ。元この災は何よりぞ、たゞお安が色香に起れり。されば壯年の中は血氣いまだ定まらず、是をいましめる事好色にありと、故人の金言尊きかな。

榮「コウ〳〵、その用向も大略承知だが、餘程わりい了簡だぜ」

庄「エ、何が。」

榮「コレ高くはいはねへが、貴公の用といふは一味のものへ。」

庄「エヽ。」

榮「とうだびツくりするか。成程そりやァ主從の中ぢやァ忠義といふやうなものよ、君の心と家來の心とちがつてゐては何にもならねへ。コレよく考へて見な。亡君の高野氏を切つて捨てと思ひこまれたは、天下の爲に極々の忠義、他に難儀をかけさせて、權威をふるふ師直を、うしなはんとせらるゝ始から、家をも身をもお捨なされて、鎌倉どのへ誠義の眞忠、討損じても自から、高野もちかごろ不首尾の噂、これぞ亡君の御本意と申すもの、法にそむいて浪人の仇うちなんぞと徒黨の催し、一味をかたらひ討ちも仕樣が、上へのおそれ亡君へかへつて不忠、それより面々が時節をまつて、何卒浪人の活業にも、利分をかんがへ金銀をたくはへ、それを執權の方方へ手づかひして、亡君の御舍弟さまを再度お召出しに成やうに願ふが、忠義の極意ぢやァあるまいか。御治世をもかへり見ず、物さわがしくしたならば、亡君の御本意にそむくのみか、御本家御一門へまで、おとがめが懸つたら、御先祖へも不忠となるぜ。第一公へはどかりなく、御

榮「浪人だから進めるのだァ。其大小さへ捨てりやァ直に相談が出來るぜ」

庄「それは兎ても不及ねへ事だが、おまへの身のうへは實に羨しい事だネ。不躾ながら何が御活業で此樣に賑かにおくらしなさるか、人も働きのあるとねへでは、大そうな違だねへ。どうすれば斯う立派にしておもしろくして居られるか」

榮「コウ〳〵それがせまい了簡といふものだ。鹽谷の家中で居るときは、首や尻がつかへるけれど、浪人すりやァ天井拔、何處へ遠慮もいらねへから、少し元手をおろして看なせへ、忽ち金が子を産むはな」トはなしの中に女房お富も、湯より歸りて倶々に、さへつ押へつ酒もりに、時刻うつれば庄左衛門、さすが血判同列の誓にもるゝはづかしと、思へば形容を正うして、

庄「イヤ存外の御馳走、千萬の仕合、失禮ながらおいとま申して」

榮「これサ〳〵庄こう、たとひ何の用があるにもしろ、今ツから何處へ往かれるものか」トいひつゝ立つて縁側の障子を明け、「そりや此けしきを御覽じろ、只一面の銀世界、この眞白な家根を見たら、腰を落ちつけてもよからうぢやァねへか」

庄「イヤァ、いつの間にか大雪になりましたネ。しかし今夜は平間村まで」

女房「それぢやァ庄さんお遊びなさいョ。ちよつと湯へ往つてまゐるから。」
庄「へイ〳〵御ゆるり」トいひながら主とともに座敷へいたる。
榮「サア、ヨ　だれぞ火を澤山に持つて來な。そして直に燗をかけて、鍋燒か平でもこしらへな。サア〳〵火鉢の際へ。これはしたり遠慮はいらねへ、サアこゝへ。ヤレ〳〵久しくあはなんだネ。時に嚴重な形で何處へ出かけるつもりだ。」
庄「へイ、チト遠方へよんどころなく」トいふ所へ酒肴出る。「これは〳〵ぞんじがけない御馳走を、誠にこれでは。」
榮「マァ其樣に堅くるしくしねへで、あぐらでもかきなせへ」ト是より盃の數もかさなり、二人も機嫌になりて、
榮「オイ〳〵お安や〳〵」ト呼べばかのむすめ返事をしながら來る。「オイ手めへ庄さんに酌をしてあげろ。」
やす「ハイ、今お吸物をもつてまゐりましてから」ト勝手へ行く。
榮「どうだ、あの女を女房にしてやる氣はねへか。まんざらな山出しでもねへぜ。」
庄「エへヽヽヽ、浪人しちやァ其樣な元氣はございません。」

榮「サア〳〵マア此方へおがんなせへ。ハテサ、なぜそんなに遠慮するだらう。外ぢやァねへおらが宅だァ。サア〳〵何だ草鞋か。胸當脚絆柄袋、まるで飛脚といふ形だの」トいひながら奥の方へ聲をかける、

榮「オイ〳〵其たらひへ銅壺の湯をもつて來な。」

庄「イエ〳〵左樣いたしては居られません。今日はチト急用で、諸方へ廻らねばなりませんから。」

榮「ハテサ野暮な事をいふぜ。此寒いのにマア〳〵久しぶりだ、有合の肴で、ちよいと一口元氣をつけて往きなせへ。御門限を案じる身分でもあるめへ。まだ浪人ぢやァねへか馬鹿々々しい。サア〳〵情をこはくしねへで此方へ來なせへ」ト無理に足を洗はせる。所へ肴初し娘は手拭をもち來り、

娘「アノこれでおふきなさいまし。ドレ私がふいてあげませう。」

庄「イエ〳〵どういたして勿體ない。」

娘「私風情ではおみあしへ障つてもばちがあたりますのかへ」ト莞爾わらふ。此とき庄左衛門は胸ドキ〳〵。女房は庄左衛門をすゝめて座敷へやり、

左衞門と貌見あはせて、

女房「オヤ庄さん」ト呼びかけられて庄左衞門、

庄「オヤ是はお珍しい、まづ其後は。」

女房「アレマアどちらへ」ト云ひながら、格子戸よりおくの方へむかひ、「モシエ〳〵、ちよつと。」

亭主「オイ〳〵何だ。」

女房「アノ小山田の庄さんが見えなさいました」トいふ聲きいて立出る、この家の主も鹽谷の浪人、以前は鎌倉屋しきの金役にて、御家の變を幸に、紛らかしたる多分の金子、それを元手に遊藝の、女を抱へて料理屋の酌取女に通はして、其花代を取るを業となし、また内々金を貸して利分を重くし、今は豐にくらしつゝ、實名玉蟲辨右衞門を、玉村榮次と假名して、この所には隱れしなり。

榮「イヤこりやめづらしい、庄こうどうしたのだ。コレサ、マア此方へ。」

庄「これは〳〵玉蟲氏、一別以來まづ御健勝で。」

女房「アレマアかたツくるしいねへ。」

やさがたに、散らつく雪よりなほ白き、はぎに湯巻の紅縮緬、もゆる思か戀風の、ぞつと素足に駒下駄や、心の手綱庄左衛門、ゆるむも因果悪縁か、放れておなじ路すぢを、三丁ばかり歩みし所に、こゝなる町家の中ごろ、立派といふにはあらねども、また常ならぬ家ありて、三間間ぐちを二間の黑塀、一間の間にくゞりの格子戸、四尺の沓脱二尺の箱段、塀の内なる小庭には、見越の松のふりもよく、はきだし二階に二方緣、手摺に竹の細工あり、二方の障子をたてたれば、内の造作主人の心、その善惡はわからねど、俗眼をもつて見る時は、まづ羨しき住居なり。娘はこゝの格子戸を、明けて宅にぞ入りにける。戀ひ來りし庄左衛門は、手に持ちしものをとられしごとく、茫然としてイめば、折しも二階の糸竹の、音色やさしき合奏、たが妻琴か調子よく、しらべの間に鶯の、なく音にまさる女の物ごし、惚々として聞ゆれば、心亂るゝ庄左衛門、胸に勝手な思案ごと、「ア、世の中といふものは乙なものだ。おなじ世界に同じ人で、節季しらずの琴三味線、おもしろさうに遊んでくらし、美人揃の喜見城。それに引きかへ此方は、月日をかさねた此辛苦、大願成就といふ日になれば、討死するか腹を切るかと、明日明後日に定まる命、夢に譬へた一生も、別してはかない夢だナア」トつぶやく門口格子戸を、あけて内より立出づるは、三十歳ばかりの女房の、色白くして艶容なるが、浴衣を下女に抱へさせ、出合がしらに庄

づにまかせ、跡懇に弔ひけるとぞ。
かゝる忠義の子と生れし庄左衛門が變心はいかなるゆゑぞ、そのことは次の條下を讀み得てしるべし。

第二回

再說小山田庄左衛門は、大星の下知に隨ひ、御菩提所圓覺寺にいたり、それより同意の諸士へ金子を配當し、買物借財の拂又妻子等の扶助になさせんと、三百兩を渡され、これを懷中して大佛臺町といふ所まで往きかゝりしが、雪氣催す嚴寒の、身にしみ〴〵と冷えとほる、寒さ凌ぎの酒機嫌、捨てはてて身はなきものと明日はなる、覺悟の眼にも世の中の、戀は曲者惡業に、落入る時節か行先へ、十七八の島田髷、姿も意氣な處女の出立、庄左衛門は其後より、よく〳〵看れば過し頃、しかも彌生の上旬、媒人ありて妻にせんと、旣に相談整ひて、吉辰選むその中に、御家の大變ちり〴〵と、なりての後は音沙汰も、絕えたる緣の彼女子に、似たとはおろかもしそれかと、足をはやめて先へ拔け、振りかへり見る娘の貌、兼て女房と約束せし、人に變らぬ面ざしにて、また一段の美麗なり。女もふつと眼を見合せ、はづかしさうに貌そむけ、小褄とる手も

しをこそ〴〵囁きて、思はず隣の壁の方を、見かへる時しも壁越に、ぐざと貫く白刃の切先。これはと大勢立ちさわぎ、おどろく中にこの家の小兵衞、重兵衞かたへ駈行きて、見ればこはそも何ごとぞ、彼重兵衞は床のうへに、腹切りかけて切れざりしや、壁にもたれて咽を貫き、その切先が小兵衞の方へ、突きぬけたるにてありけるなり。小兵衞は駈寄り見たれども、さすがは心掛ある老人、病のために弱れども、經穴を突きたることとなれば、苦痛もなさで死したるは、壯年剛氣の勇士にも、さらにおとらぬ最期なり。かたへに殘す書おき有りて、

君之御爲に仇を報じ、死を致 候 事 珍しからず候へども、老惚 候 心より、愚息庄左衞門の儀人ヶ間敷御吹聽申上 候 處、今日に至り畜類にもおとり候 噂、亡君に對し恐入 候 のみか、各へ無面目、せめては片時も死を差 急 候。老病の心外薄命の程、よろしく御見察被下、死後の御厄介何卒賴上 候。

十二月廿日　　　　小山田重兵衞

近隣之御方々樣

かゝる一書を留めしかば、小兵衞をはじめ近所の人々、その心根を不便に思ひ、また庄左衞門が不忠不孝をかたりつたへてにくみつゝ、此事を公朝へ訴へたてまつりて、それ〴〵の御さし

奔。さすが命はをしいもの、重兵衛どのが聞れたら、さぞ無念に思はれやうが、是非ともしれる庄左衛門が臆病、他より聞いたら猶面目をうしなはれやう。其方よろしく老人の氣をなぐさめて進ぜやれと言捨にして、大星さまの跡追かけてお出でなされましたが、若旦那は此方へ御沙汰はござりませぬか」ト聞いて驚く重兵衛忠久、面色赤くまた青く、齒莖をかみしめ拳をにぎり、しばらく言葉もなかりしが、小兵衛も何とあいさつの、ならねば其座の氣の毒さ、これもものさへ言はざりしが、やう〳〵に、

小「イヤ〳〵斯ういふ時にはいろ〳〵な説をいふもの、また宜い御沙汰がござりませう」ト詮方なしの捨言葉、そこ〳〵にこそ歸りゆく。跡に重兵衛溜息を、つく〴〵思ひめぐらすに、我子の變心相違あるまじ。さもなき事なら三方四方で、書留められし連名は、一字もたがはぬ四十七騎、小山田とも庄左衛門ともしるさざるは、欲に心の亂れてより、出奔せしにうたがひなし。とも知らずして仇討の、噂を聞くより自慢して、我からあかせし我子の名氏、いふかひもなき恥しさ。今をも知れぬ老の身も、存命られぬ面目を、死なずば言わけあるまじと、思ひ詰めたる重兵衛が、心のそこぞ哀なり。五助はたらぬ男ゆゑ、いふ事いうて立歸る。隣は例の小間物屋、寄りあつまりし人々の、噂もおなじ敵討、とり〴〵はなす其中に、兼て聞きたる小山田の、はな

来るとむかうから、敵の首を取圍んで、引きあげてござる勇しさ、日本始つて聞及ばぬ忠臣ぢや、義士ぢや、英雄ぢやと往來もとまるくらゐ、いやモウ大そうな評判でござります。」

重「ヤレ〳〵それはマア、其方は行向つて家中の衆を、一々見たとは幸な事ぢや。何れも働の次第もあるか、今にわからぬ伜の樣子。どの樣ななりで御菩提所へ引きあげる風情であつた。手疵でもおうたか、どうであつた。定めて其方は言葉をかけたであらうな」

五「さればの事でござります。御存じの通り、私も臆病ものではござりますが、それと聞くより若旦那も大かた一味と心付きまして、こは〳〵ながら間近く走寄り、庄左衞門さまがござるかと、先手の衆や押のお方、一々見ても若旦那がござらぬゆゑ、どうした事かと不思議にぞんじて、まご〳〵する中ゆき過ぎさつしやる。跡からおくれて只一人、大鷲文吾さまが鎗を杖にしてお出でなさりましたゆゑ、小山田さまはと聞きましたら、いつも下々へやさしい旦那、わしをごらうじて、オヽ重兵衞どのの御家來五助か、旦那の御病氣は少しも快いか。八十歳を越された老人、さぞ難澁してござらう。しかし忠義のお人ぢやから、今度討手に加はらぬを殘念にも思はれやうといはれて行過ぎさツしやるから、亦追ひかけて庄左衞門さまはと聞きましたれば、十二日の日に連中へ割付配る三百兩、圓覺寺へ納める亡君の御遺物、その二品を請けとつて、心變か其儘出

小「エイ、アノ小山田庄左衞門どのとへ。」

重「ハテ仰山な御あいさつ、忰の名前が何といたしました。是には漏れてをるけれど、若討死の沙汰でもござりますかな。」

小「イヤ左樣ではござりませぬが。」

重「イヤ〳〵どうか譯ある御樣子。もしや忰のその噂を、お聞きなされた事もござらば、善惡ともにコレ此親父へ。」

小「イエ何も取留めたことを聞きはしませぬが」トいふ折節に裏口を、そろ〳〵あけて飴賣商人、以前は重兵衞親子のために、使はれたりし仲間五助、

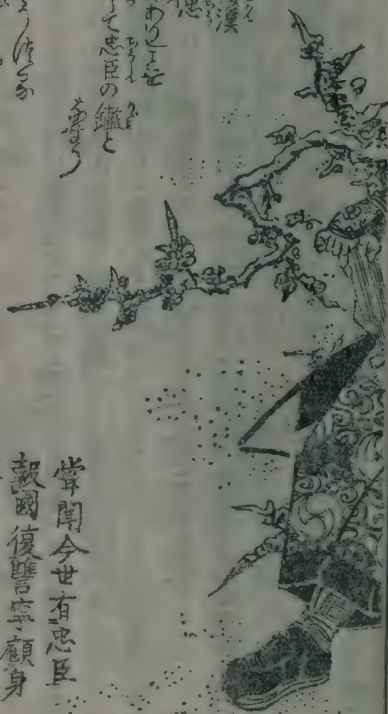
五「旦那さま、今日は御病氣はどうでござりますな。」

重「オヽ五助か、寒いのによく精が出るな。しかし寒さで思ふ樣に渡世も出來まい。イヤそれはさうと此度の一件、世間の噂を聞きやッたか」トいへば五助は生得がたらぬ魯鈍の正直もの、前後遠慮もあらばこそ、

五「エヽ殿さまの仇を討ツしやるとて、四十七人勢揃ひして、高野師直の屋しきへ夜討お手柄の、噂のやうなものではござりませぬ。丁度私が金曾木まで手紙使にたのまれて、歸つて

雖内反同妓女に
溺れ放蕩はなはだしく
妻を離別し親族
に義を絶ち後難を
除く遠き慮ありし倭漢
いまだ聞ざる斯のごとき誠忠
義勇の一豪傑ありしを
累代に美名を輝して忠臣の鑑と
称す

わかみえし清くも
義も屋くまかれ
清ゆくも
ぬなるまし紙しらむ
厚れ 梅の枝

大星良雄

嘗聞今世有忠臣
報國復讐寧顧身
效死唯知同取義舍生
正喜共成仁豈須狗吠
三千客却勝筵歌五百人
伏劍一朝泉下去英雄
誰不涙沾巾

大星由良之助
良雄
忠ハ范蠡袁盎ニ不及
勇ハ伍子胥雲長ニ比せり
智ハ張良孔明ニ恥ぢ
亡君の為ニ殉死ニ決
する七三百余人
盟約ニ背き残者
五十人病ニ死し
義ニ死する士
三人四十余人
良雄が指規ニ従
己心日ニ當て敵
師直の首を取
其位ニ備志を遂
巻中
繡像
漢谷
英泉画

うろたへ眼に手をさし出し、

重「イヤそれはかたじけない。ドレ引合して見ませう」ト三枚ならべて人数をかぞへ、略して記せし働き次第を讀めど、小山田とも、庄左衞門とも記してなければ、もし老眼の看損じかと、眼鏡の曇りをふく袖も、涙のしめりになほ霞む、文字もおぼろとなりにけり。小兵衞も膝をすり寄せて、

小「モシ重兵衞さん、おまへの素性をしりませねば、御子息さんの本名も、まだ〳〵聞きませぬが、一昨日はじめて敵討の噂とともに承れば、御子息さまも同意の忠義と、お明しなされた大事の本望、近所の衆へもはなしまして、蔭ながらおまへのよろこび、さぞかしと賞めもいたせば、御老年の御心細さを、お察し申して種々お噂いたしますが、此連名の何れが御子息さまのお名でござりますな。兎てものことに御實名を。」

重「さればサ、私もコレ是がと、おはなし申すが樂ゆゑ、幾度となく繰りかへして、見れども見えぬ我子の姓名。」

小「ナニ〳〵無い事はござりますまい。何と記してござるやら、若旦那の御本名は。」

重「サア、實名は小山田庄左衞門。」

來りし夜討の次第、義士の姓名記したる、番附買うて膝のうへ、幾度となく繰返し、始終を讀下せど、我子の名前あらざれば、さても不思議と獨言、

重「エヽらちもない、麁相なものを仰山に賣り歩きをる。大星氏も一方の、手當と賴みし庄左衞門、其名なんどを書漏すやうな不詮穿、これが何で緈明細。悴の名目を書きおとすくらゐでは、當にはならぬ反古同然」トつぶやく門の戸おしあけて、入來る隣の小間物屋、これも齡は六十のうへを、こして隱居の合口とて、遠慮もせずに立ちながら、

小「モシ重兵衞さん、おはなしの一件を、最う板行にして賣りに來ました。イヤァ御不自由の御身でも、それをば早速買はッしやいました」

重「オヽ小兵衞さん、お出でなされたか。今これを呼び込んで買ひましたが、紛らはしいやうに思はれますテ」

小「なる程左樣でござりませう。何をいうても一昨日、イヤ前一昨日のことを、今日賣りに來るのぢやから、どうで違つた事ばかりでござりませう。それをばまだ見ませぬが、悴小三郎がお出入するお屋敷から寫して參つたこの書附、しかも二軒のお大名で、お書留になつたのをうつして持つて來ました」トいふを聞くより重兵衞は、我子の名前あらざるを、心にかけたる連名書、

正史實傳いろは文庫 巻之一

東都 爲永春水

第一回 小山田庄左衛門并直助、權兵衛の傳

讀賣商人のこゑ「敵討の次第を御覽じろ〳〵。古今稀なる敵討の次第。是は此度鹽谷家の浪人四十七騎、高野家へ夜討をいたし、主君の敵を討取つたる次第を御覽じろ。上下にては綷明細。」あきんど「これは此たび先々御評判の敵討の次第」ト呼立て歩く商人の、聲を聞くより此處の軒、彼處の家より立出でて、買人はさらに競ひつゝ、我勝にこそ求めける。忠臣義士も幸不幸、適れ人に劣らじと、思ひ詰めたる金鐵の、心も蕩ける色欲の、たよらぞするとなりけらし。爰に小山田庄左衛門の父重兵衛と聞えしは、既に齢も傾きて、八十一歳の老衰と、なりけるのみか病氣ゆゑ、連判狀にはもれたれども、心は變らぬ忠義の魂。我子庄左衛門のけなげにも、賴がひある勇烈の、義心たゆまず會盟の、中と思へば勇しく、其身の病氣もうちわすれ、今賣

正史實傳いろは文庫目錄

いろは文庫序

金樓子曰、有レ人讀レ書把レ巻即睡、因呼二書巻一爲二黄嫺一怡レ神養レ性如二乳媼一也。されば書を讀むを添乳と云。しかれども睡るといふ書に二品あるべし。亦睡人に二情あらん歟。それ書中の美談佳境に浮れて神を遊しめ後に悠々と睡らば、以て添乳の功と爲すべし。予が著す草紙の如きは、其佳談なるもの稀なれば、讀人倦勞されて終に睡る。是は出もせぬ乳をねぶりて、怒泣ながら寐るの類とせんか。今こゝに著す所の伊呂波文庫は、さらに巧拙の論を待たず、世に知られたる忠臣の銘々傳なれば、いまだやうやくいろはを覺えし兒女童幼も、其忠烈を見て俄然と睡を覺さんと思ふのみ。

于時天保申年如月義名再三輝くの日　江戸　爲永春水老人誌

りて其實傳口碑に小說的潤飾を加へたるもの也。筆路最も圓熟、文藻の妙に加ふるに材料の好適を以てし、所謂三面的記述の方面を發揮したるは、其最も特色と見るべきものならん。

本書の覆刻に當りては、一に初刻木版本に基づき、文調を斟酌して概ね七五調の句讀を加へ、且つ振假名の假名遣を正し、送假名を加へ、對話を別行となしたる外、原本の特色と認むべきものには、一切改竄を加へざる事となしたり。

明治四十四年八月

校訂者　塚本哲三

緒言

爲永春水は初め青林堂越前屋長次郎と稱し、書肆を業とせしが、後式亭三馬に師事して文筆を學び、晩年戯作の大家として名を天下に馳するに至りぬ。其著す所いろは文庫、梅暦春告鳥、永代對談話、梅見船等凡そ四十種、何れも當時の好尚に投じ、洛陽の紙價を高からしめしもの也。馬琴が道義教訓を標榜して讀み本を公にしたる時に當り、彼は放縱洒脫の筆を以て別方面の寫實を主とし、所謂人情本の述作に努めたりき。風俗を紊るの故を以てたまたま有司の忌憚に觸れ、遂に天保十三年獄中に變死したりしかども、其よく文學趣味を平民社會に普及し、江戸文學史の半面を飾れる功は沒すべからず。いろは文庫は其自序によれば天保七年中の作にして、十八篇五十四卷百八囘より成り、未だ完了に至らずして擱筆せるもの、材を四十七士の別傳に採

爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

PL
799
T35I7
1911

正史實傳伊呂波文庫

全